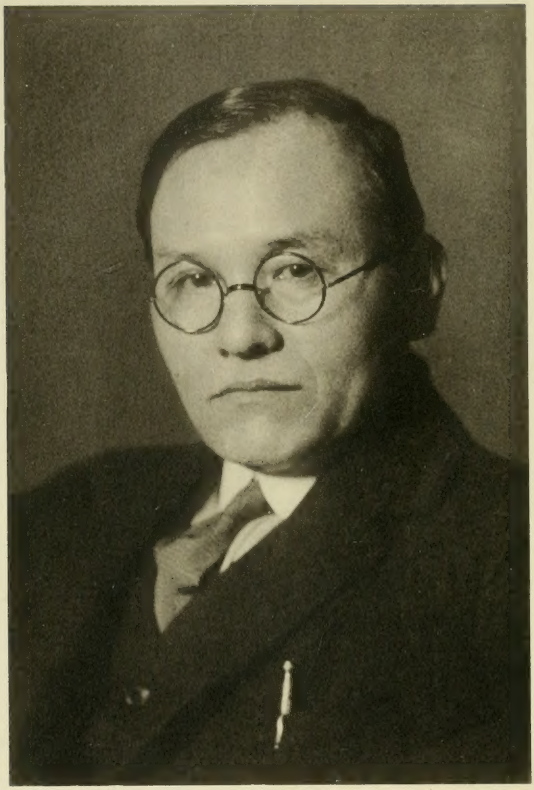
藤村博士功績記念會編

近世文學の研究

至文堂刊行



藤村作博士が昨年五月を以て周甲の壽を迎へられ、停年申合せにより本年東京帝國大學教授の職を退かれるに際して、知友門下相謀つて、博士が多年學界及び教育界の爲に盡された多大の功績を記念し、感謝の微意を表する爲、藤村博士功績記念會を組織した。

本會は、その記念事業の一として論文集を編纂して博士に獻呈する事を企て、橋本進吉、沼澤龍雄、島津久基、西尾實、久松潜一、守隨憲治、池田龜鑑の七氏を委員とし、編纂に關する一切の件を委任した。右編纂委員諸氏は、博士の幾多の功績の中、國文學の研究による日本精神の宣揚と近世國文學の研究とを以て最顯著なるものと思考し、この二つを主題とする論文集を編纂する事とし、諸家に執筆を請うて、ここに二卷千三百頁に餘る論文集の完成を見るにいたつた。

本論文集に執筆せられた諸氏は、博士と親交ある少數の友人を除く

の外、概ね博士の講筵に列して親しく薫陶を受けた人々で、何れも博士が身を以て指導せられた學問とその精神とを繼承し、且つ各自の專門の分野に向つて擴充せられた人々である。本書に寄せられた論文は、廣く國語國文學の諸方面に亘り、或は新說の提唱に於て、或は事實の闡明に於て、或は價値の發見に於て、現在及び將來の學界に寄與する所少くない事を信ずる。聊以て、精博なる學殖と高邁なる識見と寬容なる態度とを以て、後進を誘導啓發せられた博士の功績を記念するに足るものがあらうか。

こゝに謹んで本論文集を博士の座右に捧げる。

昭和十一年十一月

藤村博士功績記念會

例言

一、論文集は主として日本精神に關するものと、主として近世文學に關するものとの二部とする豫定の下に、國語國文學の研究に從事せられる博士の知友門下の方々に、執筆を依頼して、集まつた百七篇の論文を編纂したものである。

一、論文の中、直接に日本精神に關するものと國文學及び國語學一般に關するものと、上古より近古に至る國文學に關するものと合せて五十四篇を一冊として「國文學と日本精神」と名づけ、又近世文學と明治文學とに關するものの合せて五十三篇を一冊として「近世文學の研究」と名づけた。本書はその一冊である。

一、依頼した論文は昨年九月から本年二月にかけて大部分が集まつたので、三四の兩月中に全部の編纂を終へ、五月中に書肆の手に附し、六月から印刷に着手、十月に之を了した。

一、本書の編纂に當つては、紙數及び刊行期日の制限のため、執筆者に於いてすべての知友門下を盡し得なかつた事を遺憾とする。

一、本書の背と扉との文字は藤村博士の舊師前第一高等學校教授菅虎雄氏の揮毫に成るものである。校正には文學士岩淵悦太郎・同杉村俊男・同江湖山恒明の三氏が專ら當られた。又出版については至文堂主佐藤正叟氏の好意による事が多い。茲に謝意を表する。

編纂委員

目次

江戸文學に於ける諧謔性の考察

田中辰二

淡泊・無執着な樂天的氣分の上に若しも「笑」が浮ぶとすれば、それはこだはりの無い「笑」に相違ない。さりとてこだはりの無いことが直に輕快さを意味しない。輕快さを得る爲には明朗性に加へて洗煉された技巧と打てば響く機智を要する。

一體樂天的氣分はわが國民性の一面に古來から潜んでゐるし、「笑」を導き出す外的機緣としての世の平和・生の餘裕も、外國の脅威を感ずることのすくなかつた我日本人の史上の至る所に見出される事實であるから、文學に於ける「笑」も古來あり餘る程の材料を提供して與れる。而してそれ等の本質には甚しき相違が無いにしても、構成し出すまでの氣分には相當の逕庭なしとせぬ。例へば記・紀・風土記あたりの人名・地名の由來を觀る。其處には後世の滑稽文學などに多く見えるこじつけや地口にも似た技巧を見出すけれども、それを傳へた當時の語部なり記錄者は「笑」を堪へて書いたのでは無く、古老からの口碑として眞摯に信じてゐたでもあらう。「笑」と云ふべくんば筆者の意識せざる「笑」であつたと考へられる。上代の「枕詞」の中にも後世のひゞきの笑・同音異義の笑・もぢりの笑にも似た形態があるけれども、仔細に檢討すれば、意義乃至は音を闡明ならしめる形容詞的・聯想的の修辭法で、口から耳へ傳へ強く相手に意識せしめる必要な手段に出でたものが誠に多い事を痛感する。從つて上代の文學にあらはれた言語の可

笑味も無條件で後世のそれと同一視は出來ぬ所も存するけれど、上代にも「笑」の分子の多分に存したことは、「高天原動而、八百萬神共咲」(記)とある岩戸前の天宇受賣命、「溺時之種種之態、不絶仕奉也」(記)の火照命などが演じた姿の可笑味や、士氣を鼓舞された神武天皇の「あゝしやこしや」「楯なめて」の御製の様な誇張又は反對表現の可笑味をはじめ幾多のものを發見するのにさして困難は覺えない。

さうした可笑味の種々相が文學作品に取入れられる傾向は、太平が續き文學が風流の具として弄ばれ出した奈良朝から平安朝を通じて益々著しくなつて來た様に思はれる。そして姿や態度の可笑味は、多くの物語・日記・隨筆類にかなり取込まれ、筋の進行を助ける興味として求め得られるが、文學が次第に情趣化された上層階級の消閑の料とされたり、風流を生命とする生活の糧となるに及んでは、一層智巧的な言語の可笑味が多く見出される。其處には、緣語・掛詞の濫用、同音異義の應用と云つた方面まで如何にも品(ひん)よく取扱はれてゐる。横井也有が「鼻箴」(「鶉衣」參照)に書いた様に、源氏物語中のあの普賢菩薩の乘物のやうな赤鼻の所有者たる常陸宮の姫君末摘花に對しても「末摘花のわる口もあからさまにはよみ出で給はず」と云つた態度をとるのが上層文學らしいひんの善さであつたらう。それだけ辛辣味に乏しい所もあり得る譯であるが、其の代りに弄ぶ技巧は一首の歌の中にも物の名をよみ入れたり、折句にしたり、廻文にすると云つた遊戲的方面を進出させる端も開いた。貴族政治の沒落と共に文化的素養の低い武家政治を現出せんとする頃には、卑怯を忌み敗殘の屍を笑ふ落首の様なものも次第に深刻味をまして來たけれども、一面僧侶・隱遁者乃至は相當の智識階級に文學の命脈が移されると、在來の貴族文化が不風流な姿態に笑ひかけたのと同樣、學問の無い俗衆への嘲笑も次第に增大した。傳統を追ふ方では今までの言語の技巧的な笑を弄ぶことも多かつたが、貴族化から民衆化へ、品(ひん)の善さから露骨さへと轉じ行く部分も無しとは云へなかつた。室町期になつて謠曲の確立と共に

派生的に發達した狂言も、小康にふさはしい閑文學に過ぎないが、演出が能などと共に行はれる關係上、品の善さは失はないにしても、餘程民衆化して來たことは猿樂太夫よりも一段狂言師が低い地位に置かれた事で多少見當はつかう。狂言の可笑味の中心には姿態の滑稽や無學・矛盾・誇張・豫想の裏切等々様々なものがあり、其處に諷刺も見え、嗤笑も皮肉も感ぜられる。

德川期に入つてもこの狂言は能と共に盛に行はれた。行はれるにつれて傳統による可笑味の要素の大部分を含んだ狂言が、德川期の文學に影響を與へなかつたと見ることは出來ない。殊に三百年の太平、淡泊・無執着を愛好した時代にとつて「笑」は日常社交生活の中の力強い要素であつたに相違ない。何となれば狂歌・狂詩・川柳・黄表紙・滑稽本と云つたもののならずとも「笑」は極めて多くの作物に收錄せられてゐるからである。其の技巧的笑の題材・エッセンスは自ら當時の小咄・笑話中に多く覓め得られるであらう。小咄・笑話はもとよりそれ自體高尙な、また勝れた文學なりとは言へない。が、德川時代になつて急に目ざましく進出して來た民衆文學の諧謔性と小咄・笑話とはかなり深い連絡があるのを否定はし得ない。

小咄・笑話の中でのヤマは物語小説とは稍趣を異にして咄の一番終に來るのが普通形式であるが、それが言語の駄洒落で終らうとも仕方で終らうとも、所謂「落ち」又は「下げ」と稱する部分を持つてゐる。丁度室町期の狂言が秀句落ちや「やるまいぞ〳〵」の仕方落ちも持つてゐると同様である。滑稽本を初め民衆的色彩の濃厚な作物に此の「落ち」にも似た「笑」を隨所に挾み、筋の興味を煽つてゐるのも見受けられる。

「笑」を中心とした小咄本として古いものには元和木活字版の「戲言養氣集」二冊、寛永初年頃前後に判行された「きのふはけふの物語」二冊、寛永版「醒睡笑」三冊などを擧げ得るであらう。此の中「養氣集」は「きのふはけふの

物語」などと同様な系統の小咄なども載せてゐるが、後の二書程後世には影響を與へなかつた。「きのふはけふの物語」は相當に歡迎せられてか版も異つたのが現存してゐる。若衆・稚兒を取扱つた男色物の相當淫猥な「笑」をねらつた咄などが含まれてゐる爲に、今日それをのせた「續群書類從」本などは發禁されてゐるが、恁うしたものが該書の一特色であつても、笑話本としては記載せられた輕口・頓作・狂歌咄・落語等々の題材にすくなからぬ興味を覺える。若しもかゝる笑話本の小咄を連絡づけ、それに枝葉を加へたなら、かの「東海道名所記」・「竹齋物語」等の影響も受けたであらうと云はれる一九の「膝栗毛」も其の他の滑稽本もつくり上げられるに違ひない。安樂庵策傳の「醒睡笑」に至つては此の古き笑話本三種中最も親しまれたもので、それだけ影響を與へてゐる所も多い。「醒睡笑」は著者策傳（平林平太夫）が元和九年七十歳の時から書き初めたやうに「序文」にはあるが、現存のものは寛永版が古く萬治までに版も重ねてゐる。彼策傳は落話の名手であつたよしで「瀨貞筆記」には「曾呂利新左衞門と同席の折は新左衞門狂歌を詠んで出すに夫に笑話を述て興じたり。いはゞ狂歌を題にして落し噺を卽席に案じて述し也、曾呂利狂歌咄は策傳の作也」などとあるやうに相當に勝れた伎倆あつてこそ京都所司代板倉重宗にも認められ、重宗の爲に落咄もよんだのであらう。此の「醒睡笑」三冊八卷の內容は

卷一、○謂被謂物之由來　○落書　○ふはとのる　○鈍副子　○無智の僧　○祝過ぎるも異なもの

卷二、○名津希親方　○貴人之行跡　○躮　○吝太郎　○賢立て

卷三、○文字知顏　○不文字　○文之品々　○自墮落　○淸僧

卷四、○聞多批判　○いやな批判　○そでない合點　○唯有

卷五、○姹心　○上戶　○人はそだち

卷六、〇兒(ちご)の噂　〇若道不知(しらず)　〇戀のみち　〇悋氣　〇詮ない秘密　〇推はちがふた　〇うそつき
、卷七、〇思ひの色を外にいふ　〇いひ損(そこ)ねはならぬ　〇似合うたのぞみ　〇廢忘(はいばう)　〇謠(うたひ)
卷八、〇頓作　〇平家　〇かすり　〇秀句　〇茶の湯　〇祝濟多(すゝ)

等の四十一部門に分つて多くの小咄を收錄してゐる。此の部門は必ずしも本質的な分類とは言ひ難いが、其の初期にこれだけ集大成した策傳の功は沒することが出來ない。これ等に刺戟せられてか中川喜雲の「私可多咄」をはじめ樣々のものが萬治以後世に出され、延寶・天和の頃には辻話・輕口咄などをする露の五郎兵衛（露休）——五郎兵衛と露休とを「嬉遊笑覽」には別人にしてあるが、露休は五郎兵衛の戒名であるとの說が正しい樣だ。——などが京都の土地で評判をとれば、大阪では米澤彥八など云ふ男が人々に歡迎された。江戸では長谷川町の塗師職人上りの鹿野武左衛門が中橋廣小路に筵張で辻話をやり、横山町の休慶・中橋の伽羅小左衛門・同四郎齋なども此の方面の評判をとつたことが「近世奇跡考」はじめ、貞享版の「江戸鹿子」や元祿二年版の「江戸圖鑑」にも見えるのであるが、特に此の期を代表する上記の露休・彥八・武左衛門は、辻噺をすると同時に笑話本の著者でもあつて、兩方面から太平の民にかなりな慰安を與へもしたらうし、太平にふさはしい「笑」をいやが上に醱酵もさせて行つたことと思はれる。幕府の既に基礎の固まつた元祿頃のさうした狀態は、一般民衆に此の方面の興味をぐん／＼植ゑつけたのでもあらうか、爾來出版される笑話本は現存するものだけでも頗る多い。

が元祿期の笑話本と後に發生した明和・安永期以後の小咄本とを見ると、同じ「笑」を盛つた出版物ではあるけれども、前期は鈍重な感を與へる美濃紙形・半紙形などであつたのに、後期卽ち江戸文學と密接な交渉を持つに及んで、比較的輕快な小形本が續いて出版されたことは注目に値する。小松百龜の「聞上手」が落噺小形本の初であらうと「假

名世説」にはあるが、山風（木室卯雲）の「稿話鹿子餅」が出版されたのも、それと前後してであつた。此の小形本の流行は黒本・赤本・黄表紙などの小形本と交渉を持つてゐるのは明である。ひとり外形のみでは無い、內容に於ても江戸のこだはりの無い輕快さは遺憾なく發揮されて來て、從前の言語の洒落・ひゞきの遊戲と云つたものから數歩すゝめて來たのを認め得られる。卽ち文學が江戸に漸く隆盛になりかけた明和・安永期以降、從來のあくどい口合や、こじつけた輕口の多かつた傾向に比べて、何處か氣の利いた皮肉や洒落を用ゐ、人間生活の弱點を巧に曝露した點があり、隨分人を喰つたやうな諧謔味の底に、遊戲化した態度ではあるが、近代的感情の橫溢してゐるのを認める。

一體德川時代の前期に、文學に弄ばれた諧謔は樣々あるけれども、言語の遊戲――秀句・口合とか、もぢり・言ひかけ・かすり、など――がその中心であり、更に江戸の諧謔も上方の移入に過ぎない觀があつた。畢竟江戸幕府の創業日淺き當時に於ては、文化の搖籃地であつた京都などに範を採る所も多々あつたらうし、又諸般の方面に京都文化を吸收しようと努めたのも事實であつた。江戸に比べて大阪は京都と近いだけに京の影響は深甚に旣に受けてゐた。さて德川以前の我國文界に於ての諧謔性を見るに、その技巧は一樣では無いけれど、上古以來、同音異義のものを仕立てる秀句が重大な役割を持つてゐることは否定が出來ない。栗本衆の連歌あたりを見ても、或は軍記物語にある落首とか狂言などを見ても、秀句は誠に類例の多いことを發見するであらう。言葉の洒落は殆んど秀句が占めてゐると云つても善い位の有樣であつた。德川期に入つてもこの傾向は著しく見えた、貞門派の俳諧などは滑稽味を言葉の洒落にとらうとしてゐるものがすくなくない。

しをるゝは何かあんずの花の色　　貞徳
冬ごもり蟲けらまでもあなかしこ

これは〳〵とばかり花のよしの山　　貞室
松かげや月は三五夜中納言
咲きやらで雨や面目なしの花　　重頼
一僕とぼく〳〵ありく花見かな　　季吟
から〳〵に身はなりはてゝ何とせみ　　西武
芋も子を生めば三五の月夜かな

これを、以前の

にが〳〵しいつまで嵐ふきのたう　　宗鑑
風寒し破れ障子の神無月
散る花を南無阿彌陀佛といふべ哉　　守武

などと比較したら殆んど差異も認められぬ。而して平民的となつたとは云へ、秀句仕立の王朝以來ザラにある和歌の技巧に比してもひどい隔りは感じないであらう。

室町時代を堺として用語や態度が貴族的から平民的に移つたと云ふ大きな事實だけを肯定すれば、恁うした技巧が京阪に様々用ゐられたとて不可思議は無い。此の言語の洒落が太平の人々には喜ばれ、また素養の高くない當時の民衆が弄べば弄ぶ程、洒落も平俗化したものが擇ばれた事は當時の數多い小咄の「落ち」や狂歌などでも知り得られる。京阪の文化を盛に吸收しようとした初期の江戸でもこの傾向は顯著に見られたが、淡泊を喜ぶ江戸では在來歌や文章の興味の一部分でしか無かつた秀句を短い形に獨立させて所謂地口なるものを發達せしめた。地口は土地即ち江戸の

口合の義であると云ひ（「兎園小說」別集）歌合・句合の判者左右・番の甲乙を定めるのにその優劣なきものを持とするので「持口」にも通ふとし（「同書」）地は下地と同じく上に一重ある意にて地口と云ふやうな說（「嬉遊笑覽」）もある。後には此の地口も「發語の文字が同字なれば冠と申して忌む」（「浮世風呂」四編卷上）「戲作本には語路の能廻つた地口はをかしく無い故用ゐぬ。……わざとこぢ付た地口を書くが戲作本の意とするところ、又行燈の地口は繪地口と申して、あれは繪を表として繪から拵る地口でごつす、これは歩きながら兩側を讀むもの故、字數をすくなくして早く解易くずつと口本でをかしく作るが本意」（「同上」）と云つた傾向もあつたらうが、元來はよく語呂の通るものが選ばれ全體の句を立直すもの、例へば「團子三つに箸かたし」の語呂をとつて「端午節句に太刀飾り」と云ふのもそれだし、一語のみ變形させて「旅は道連云々」を「足袋屋道づれ世は情」など云ふのもそれで廣義の秀句でもあり似口でもある。京阪から移入して江戸で盛になつた地口は遂に賭博の材料にまでされ、冠附、三笠附などと共に地口附などが流行して勝者には懸賞が出た。享保八年頃、地口附が流行を極めたことは「我衣」などにも記す所だが、賭博行爲が善良なる風俗を亂すとの理由から其の筋の禁止と云ふことになつた。江戸では幕府の目も光つてゐたが、此の地口は京阪に逆輸入されて明和・安永頃から上方には頓に隆盛になり地口繪行燈なども出來るに至り後にまたほとぼりのさめた頃江戸にも再び行はれ出して來た。が地口附などの禁止を一轉機として江戸文學にあらはれる諧謔・可笑味は稍趣を異にして來たのを見のがし得ない。勿論それまでに江戸幕府の基礎が出來た事、學者や文人が續々江戸に移住して來た事、江戸の民衆が淡泊な氣風に馴致されて物質的な上方の人々と性格に於て容れ難かつた事、衒學的色彩が一層濃厚になつて來た事等々からも、餘程理智的になり盛に機智を應用して輕快なる洒落を飛ばし、あくどい趣味を排斥したことも與つて力はあつた。さてこそ小咄笑話類にもかなり洗煉された機智のきらめきや、人間生活の內

面に目をそゝいだ誇張化した笑と云つたものが際立つて見えて來たのであつた。而かも世がかの享保の治を過ぎて田沼失政時代となり續いて松平定信の寛政の治で緊張した生活を送らせようとすれば却つて反感を大奥の方から昂め出して來て定信の引退となるなどの目まぐるしい變化を見ては、餘りにも衒學的、理智的になり過ぎた文壇人は輕く、でも辛辣な皮肉にまで「笑」を進めて行かずには居れなかつた。此の期に成つた人事詩たる川柳にも、亦狂詩・狂歌の類にも恁うしたものが多く見出されるし、黄表紙などにも此の種の例は乏しくない。

寛政異學の禁などを出す幕府の肅正政策文武二道奬勵の反映としては山東京傳の「孔子縞于時藍染」がある。學問が行き亙つて通町あたりの金持が仁徳の最上は金銀を施すより他は無いと人に與へようとすると、先方では富貴天にあり、天理に叶はぬ金銀は受けられぬと云ふ。仕方なしに町内の番人に押付けようとすれば「論語にも其の老いたるに及んでは戒むる事得るにありと申せば道に違つた金はお安い御用ぢやが受けられぬ」と云ふ位。道樂息子は罪ほろぼしに大金を背負つて勘當を受けようと思ふと親は「過つて改むるに憚る事なし」ときいて呉れない。「何卒御勘當下さりませ、七生が成らずば二升五合でもよろしう御座ります」と云ふと親は「大學にも人の父としては慈に止ると云ふを知らぬか」と勘當は不承知である。博奕をしてもお互に勝を讓り禮儀を正しくする爲に一枚のめくりにも鳥が啼き眠い思ひをして面白くも何とも無い。金持の施行蕎麥をたべた折助が金を置いて逃げ出すと大勢が追つてその折助を引きずり戻し無慘やな折助は大勢によつてたかつて握り拳で頭を思ひ入れさすつてつき放す。淋しい大恩寺前には追剝がれが出て自分の衣服も大小も他人に押しつけると、押しつけられた奴は「悲しや申し〳〵」と斷ると云つたやうな事が樣々ならべ立てられてゐる。唐來三和の「天下一面鏡梅鉢」を見ても菅公時代に引直してカムフラージュはしてゐるが文武二道の奬勵に對して皮肉を飛ばし、遊女も粹を拔くから疊算かと思ふと手裏劍の稽古で、傾城まで青表

紙を持つて子曰くで見知らせる。「客人の所へ詩を作つて遣はさう、其の子や唐紙を買つて來や」と云つた調子、五風十雨で火の番は五日目に廻れば事足り雨は十日目でなければ降らないから紺屋も言譯に困り下駄傘屋はちと不承知、聖人の世とて麒麟が見世物にまで出され「躰の火焰で烟草を吸ひつけて見せませう」と云つた話まで書き綴られてゐる。

誠にたわいも無い馬鹿げたものではあるが、これ等だけを眺めて見ても、衒學的に機智を應用して、反語・誇張・諷刺・皮肉を悪洒落と共に飛ばしてゐるのに氣付くのである。一二の作家について見ても落語の方で「落話太郎花」・「駿河茄子」の作家寶山人は黄表紙や洒落本をはじめ多くの述作をした山東京傳であり浮世繪の畫師たる北尾政演でもあつた。遊女物の落噺「柳巷訛言」を書いた知久良は黄表紙作家明誠堂喜三二・龜山人、狂詩名では韓長齡・韓天壽、俳名では月成、狂歌名では手柄岡持事秋田藩士平澤平格でもあつた。咄本「梅の笑」・「笑府衿建米」・「お伽草春の壽」を書いた村瓢子は黄表紙・讀本作家曲亭馬琴であり、「鯛の味噌津」・「萬の寶」・「鶯笛」・「春宵一刻」などの咄本を書いた千金子或は新場老漁は狂名四方赤良又は蜀山人であり、咄本「茶の子餅」の作家は狂歌名朱樂菅江で同時に川柳の作家でもあつた。こんな風で滑稽趣味はいろ／＼な民衆文學に相通ずる所が出來、小咄本なども勿論獨創的のもの計りとは云はれないが何百種の多きが出版されると云ふ有様で明るさは一層加つて行つたのであつた。この小咄などは滑稽文學などの要素と思はれるまでに甚しく應用されたのであるが、江戸に此の風潮を助長したものは、當時の文壇人が相當に此の方面に關心を持つてゐた爲でもあり江戸の民衆の嗜好にも應じたからと推測される。猶この小咄を盛ならしめるに役立つたものは四方赤良・朱樂菅江・談洲樓焉馬等の發起で天明六年四月十二日江戸牛島の武藏屋で噺會を開いて以來であらうが、焉馬の如きは「落噺六義」の中に、風・賦・比・興・雅・頌などに無理に分類しようと試みた。もとよ

り此は和歌六義に倣つての衒學臭を見せたに過ぎない。落噺の分類は何れの方からでも出來るであらう。例へば「落ち」又は「下げ」の方からすれば、地口落・心落・頓智落・考落・階子落の五種が數へられ、形の上からすれば一口噺・三題噺・仕方噺・字噺・畫噺のやうな種類も考へられよう。それは兎に角としてかの一九の「膝栗毛」などにも狂言や古き說話の影響のみで無く此の小咄が姿をかへ燒直されて相當に含まれてゐるし、他の輕い平民文學にも諸種の方面に働きかけてゐるのを我々は無視する事は出來ぬ。後期のそれはそれとして明和・安永前後の可笑味について見ると、唯輕快であると云ふに止まらず、どれにもかなりな「穿ち」のあることが認められる。可笑味のある文學では時にこの穿ちが生命とさへ思はれる場合すらある。其處に唯言語遊戲の末に走つた口合・地口式の諧謔・秀句仕立の可笑味では及ばぬ妙味が存するのである。而かもその穿ちは、本當に人生の種々相を嚙みしめたもの程よく知り得る世界であるが、これを輕快裡にちらつかせる爲には洗煉された理智・技巧を要することは無論である。場合によつては強く反對の表現をしたり誇張化した言ひまはしはするけれど、此の種の「笑」で最も貴ばれるのは、わざとらしからぬ技巧の上から盛り上つて來る自然の「笑」であらう。一面衒學的であつた江戶文運醱酵期には此の種の技巧で輕い「笑」の中に作者の「うがち」を充分に窺ふ事が出來る。「うがち」の無い言語の洒落は俗には入り易くとも、其の堂奧に入つたものとは言ひ難い。可笑味・諧謔味と云ふ事と洒落とは必ずしも同一では無いが、江戶時代に用ゐられた洒落なる語が「通」とか「推」又は「粹」に置きかへられる語であることを知るとき、その何れもに含まれてゐるうがちが、洒落・通・推を誇る此の期の文學に手際よく盛られ、自然に誘ひ出される朗らかな「笑」と混じ、かなりに勝れた可笑味・諧謔を見せてゐる事の誠に多いのを感じる次第である。もとより其の間にも今まであり來つたあくどい「笑」は全然影を潜めてゐたので無くて介在はしてゐるが、明和・安永の所謂江戶文學勃興期には如上の「笑」や「うがち」の爲にく

すぐり氣分は追ひやられてゐる形であつた。併し、江戸文學が非常な勢で擡頭し、かの化政期の爛熟時代を生み出す頃は文學も、より大衆的になり趣味の低下も來したのであらうし、明和・安永期の理智的技巧や、凝り性的な「うがち」も屢〻繰返され摸倣される事によつて刺戟を失つて來たからでもあらうか、丁度王朝文學で「源氏物語」が開拓した寫實的で而かも鮮かな心理描寫の手法を充分發揮し得なかつた以後の群小作家が讀者の興味をつなぐ爲に、筆には負けても複雜奇抜な筋で勝つと云つた方面へ走つたのと同じく、江戸後期の「笑」に於ては所謂くすぐりと稱する態とらしい技巧を使つて駄洒落の連發を見せると云つた傾向も生じて來た。おかげで一時關西の方の獨占になるかと見えた地口も元來の江戸に再び戻つて來、化政期以後地口本が數多く出現し、關西のそれの樣な綺地口、地口行燈などが盛につくられた程である。時には語呂合などの興行を見たのも江戸の末期であつた、黄表紙などにも駄洒落は相當あるが、特に末期の滑稽本や狂句・落首などに濫用される煩はしさには遠く及ばない。三馬の浮世風呂前編卷下の將棋さしの話の中に「糞でもくんべい團扇だ」・「逃げたの内の横木瓜」・「きびしゝに牡丹唐草」・「おなまめだん佛」・「香桂前に立たず」・「金角寺の和尚」・「負ける氣づかひなしの木さいかち猿すべり」・「いたゞき女郎衆」・「引つたくれんげの革財布」・「能手があれば大橋もありやす」等小うるさい程地口駄洒落を入れてゐるが、これは今日も相當將棋さしなどにとつては親しい用語である所から推しても當時の民衆では隨分この種の口合は云つてゐたもので、ひとり滑稽本の誇張のみとは思へない。甚しきに至つては文化四年江戸永代橋が深川八幡祭禮の雜沓の爲に墜落して死傷者を澤山出した。さうした悲慘事に對しても洒落のめす口合は遠慮なく吐き出された。算盤計算の地口で

○海流海邊檢死之段

たとへば橋の間數百二十間是を八幡祭禮十九に割れば凡人數七百四十人に知るべし

右割譬　　永代掛さん
見物夢中早急の死　　妻子の皃
橋せんが二せん　　因果のごう
はゝさんかゝさん　　ふく〳〵三十うく
橋落川の死　　武士がはぢ
水死せんさくの期　　死後の無常
人間が一ッしん　　ゆさんがどく（「夢浮橋」附録）

と、如何にも太平樂をならべ世にこだはりの無い惡趣味にも均しい民衆の駄洒落に諧謔性の低下を見せてゐる。此の種の駄洒落は枚擧に遑が無い。更に可笑味を誘はうと段々附から進んだ尻取とか早口遊戲・同音の煩はしい繰返文句、卑近な謎かけ遊びなども社會に行はれて低下した滑稽感に笑を深めて行つたのであつた。限りある紙數に一々例證をあげる餘裕は無いからそれは省略するとして趣味の低下につれて一面に卑猥な描寫などがそれと呼應して一層露骨になつて行つたのが化政期以後に著しいことを感じる、そんなものを渾然とさせて讀者や人々の興味をつないで行かうとする頽廢期の文藝には淡泊な江戸に似合はぬあくどさを生じてしまつたのであつた。

　さりながら諧謔味から江戸の文學を眺める時は、嘗ては上層文學で弄んだ言語遊戲、かなり諧謔としては幼稚なひゞきの洒落(Klangwitz)を一般民衆がうけついで、堅つくるしさから解放はさせたけれども品格を下げて行つた。それを心の笑にまで導いて行つた江戸文學の理智化は、野暮や不粋を極端に痛罵する作者達の性格から一層冴えを見せうがちの鋭さを見せた事を銘記する要があらう。さりながら束の間に、また趣味の低落を來し幼稚な生地の諧謔味へ

復歸した事は徒に新しき官能の刺戟を求めようとする世紀末の喘ぎにも似た氣分からでは無かつたかと思はれる。而かも斯く内外多事になつて來た時に於てすら低級の駄洒落をとばす事を敢てした徳川末期の群小作家を見て、彼等が輿論とは殆んど沒交渉な存在であることを知り、同時にさうした人々によつて持ち越された明治初年の文學も誠にはかないのは當然であつたのを犇々と思はしめられるのである。

江戸文學に現れたる卑近美

守隨憲治

こゝにいふ江戸文學は江戸時代文學の謂ではなくて、上方文學に對する江戸文學、卽ち江戸に發生した文學の義である。知的に對する情的、理性に對する感性、雄勁に對する纖細、さうした對照が上方の文藝と江戸の文藝との間の相違として屹立してゐると思はれる。わが國の文學が、純文學性以外の別種の要素を含んで居る中に、特に近世文學に於いては此の感を深くするものがある。而も其の點の考察を排する時、ともすると江戸文學の多くは文學でないと斷ぜられさへする危險を生ずるのである。そこで、今說かうとするものは、江戸文學にあつては特に重要な要素であると信ぜられる部分の一方面である。卑近美とは、從來說かれてゐる多くの場合の美意識に反して、惡とか醜とか、いはば非美的と見られて來た方面を對象とする美である。從つて從來說かれてゐる所の美學や藝術學に於いては、まづ殆ど顧みられなかつた部分に屬する。江戸文學を愛するものは、その從來行はれた如き意味に於いてのみ、非文學的なりとして、一顧の拂はれる所も無い場合、自ら反駁は感じつゝも、又その有すべき文學美が一般文學論乃至藝術論との間に逕庭の在るを認めつゝも、その發表に惱んだ爲めに、之を控へた事が甚だ多くあつたと思ふ。そこで、先づ爰に卑近美を指摘して、優美や崇高に反する類の文學美のあるべきを考へたいと思ふのである。

卑近美の語を以て總括される美を外的内的に兩分する。前者は形式的であり量的である。色であり響である。後者

は内容的であり質的である。包であり味である。今、その前者を賤美、後者を醜美と呼ぶこととする。

一

賤美とはきたなさの美、いやしさの美、苦さの美などであるが、これらは純粋のきたなさや賤しさに留まるものでなくして、夫々の有つ美的成素が十分に精選されてゐる所に特質があるので、寧ろ露骨な性質を隱して、多い含蓄をもつものである。例へば優美を助成する爲めに認められる醜惡といふ如きものではないのである。

賤美の中の第一に、生美をあげる。生のまゝが有つ美である。但、生のまゝといふのは、普通謂ふ所の有りのまゝとは少しく異るので、有りのまゝから、外包的の非純粋なる要素を除いて始めて現れる部分を、生のまゝといふのである。垢拔けである。江戸前といふ語は元來此の義を中心とする。黄表紙などの生命は爰に發生した筈であつたが、忽ち時代の美的傾向に洗煉せられて優美と交渉したのであつた。かゝる交渉なしに、生が生の藝術美文學美として成長したのは、寧ろその後に屬する。

扨、江戸市井の生活層の中で、文化的中心をなしたものは劇場と遊廓とであつたが、劇場の生んだ戯曲と遊廓の生んだ洒落本人情本とは、共に夫等の生活層の描寫であると共に、夫等の生活の直接持つ美的内容が、又夫々の文學様態の重要な内容でなければならぬと思ふのである。洒落本の流行した初めの頃の江戸の遊廓の重な傾向は吉原と深川と馬道とに三分されるのであつたが、馬道はやがて勢を失つて、吉原對深川の情調といふものが對立するのであつた。即ち深川の情調なるものが、遊廓情調の主なものとなつた。そこで此の深川の情調を構成するものに、今注目する。

此所（深川を指す）の素人らしき、娘風を悦び、又此土地のわつさりとしたる樂を吉原好は知らず　（辰巳之園）

とある様に、「素人」らしさ、「娘」らしさを好むので、「わつさりとしたる」道樂をよしとする。傳統を重んじて格を

尊ぶ吉原の情調とは相反するもののある事が知れよう。更に、婦美車紫野によつて深川風を摘出して見ると

〔深川仲町〕……素人といふたて、甚花車風流を好みしが、今は一向に衣裝髮の風伊達になり、人がらも尤あまりよくなし、しかしさわぎ一事は爰にこす所なし

〔土橋〕……髮の結ふうどこぞ安し

〔上野山下〕……素人めいてぼつとりとうまみあり、髮のふうむすめといふたて、しかし衣裳は綿ふくおゝし、尤人がらは佃に類すべけれど、きやくをよぶゆへ安し

斯の文中に、「安し」とは氣安い義である。人柄の「よくなし」とは、高とうでない義である。かくして風俗と人柄とが背景に呼應する所に、其の地の情調は成立するのであつて、之を土地では伊達と呼んだ。或は粗野とも見紛ふべき、生美なのである。辰巳之園を初め深川新話、辰巳婦言の類、悉く伊達を謳つたのである。

更に、伊達が形式感情乃至感覺感情を主とした場合に、之をいなせと呼ぶのである。よつて此のいなせが深川物洒落本や人情本の本質の一部を構成するのである。

此世界の風土といへるは、長羹羽織の細身指、黒縮首のぱつち尻はしよりといへる、きん／＼姿の青樓風を廢し、或は洒（さらし）の手拭を肩にかけ、花色繻子の帶、貝の口に結び、或は前垂腰にまとふ、丸額の大銀杏、客人か、將船頭か、船頭とも見ゝ、また客人ともみへ、大きに賓主の禮を亂して、二上りの騷唄（辰巳婦言）

これで、サツサ押せ／＼と猪牙を進めたといふ容姿は、地を養ひ地に養はれたのである。晒布の手拭や花色繻子の帶の如き、何の美感もなかるべきものから、其のものとしての、ある調和、ある協調、ある濃度をえて成功したのがいなせ美である。いなせは優美に接せぬ所に通との限界を有つが、どこ迄も情調に留らうとする點に通に類似してゐ

る。而も、當代の文藝が前時代に比して遙かに立體化せらるべきを要求してゐる場合、かゝる情調がその文藝作品の有する大なる成素をなしてゐると思ふ。かゝる情調が、その物として立體化された例は、戯曲に於いてのみ究極の成功を遂げたのであつた。最も洗煉された實例は默阿彌の作品に發見する事ができる。小猿七之助の洲崎堤の場の臺詞を見よ。瀧川と七之助との臺詞はかうである。

瀧川　いえ〳〵一旦斯うと思つたら、假令どんな世渡りでも夫に附くが女房の役、
七之　さう度胸がすわつたら、これから直に隨徳寺、
瀧川　何處の浦へか身を落附け、
七之　おれが女房にするからにやあ、椎茸髱も水髮に、
瀧川　似合はぬながら横櫛に、楊黄の木櫛の附燒双、
七之　矢の字に結んだ天鵞絨も、六寸幅の腹合せ、
瀧川　御殿模樣も搔卷に、
七之　化けてこれから山の神、
瀧川　芝居で見たる惡婆のやうに、
七之　湯屋でも稼ぎやあ夫婦の働き、
瀧川　物見遊山は心のまゝ、
七之　萬吏でもねえ商賣よ、
瀧川　善は急げといふからは、

七之　そんならこれから、

瀧川　少しも早く、

七之　どれ、道行と出かけようか。

これらの臺詞を、「棕櫚伏せの土手、後奥深に洲崎の沖、夜の遠見」といふ舞臺面に應じて、獨特の情調を造り上げたのであつて、この場面こそ本作の生命であると考へられる。水髪に楊黄の横櫛、腹合帶といふのはいなせ美の成素である。

さて一般には、此の種のいきが構想化せられる所に、洒落本から人情本への展開があつたのである。夫等の構想は餘りにも單調であり類型的であつたが、夫程に深川の世界に於ける通性であつたのである。

安くしたとおつせんすりアわつちも申ゐせう。賤しい勤はしゐすけれども、ついぞ初會から手前呼りをされた事アござんせん（深川新話）

とは裏櫓の一妓の聲である。いなせに意的の作用が加はつた一面を張りといふ。張りの叫びである。此の張りが立體化するとき達引に通ずる。達引は旣に十分脚色化に成功してゐると見られる。

深川といふ所は客人のあすびにでへぶあんばいのある所さ、いろ男にかえても金にかえても、子どもどうしのたてひきをおもにする所さ（古契三娼）

と說明されてゐる通りの氣慨氣性が、特殊の文學美を構成させたと云ひうる。この意味に於いて人情本の本質を單に官能生活の描寫であるとして云ひ消すのは不十分であると思ふ。

藤「………アノ此糸が突出しから世話にもなつた縮岸の半兵衞、零落しても突出さず、義理と端手とは二道に、諸分を知つ

たおいらんと氣性を買た此藤兵衞。そふして見ればコウ米八、マア此糸へ義理はいるめへ」。米「よもやと思ふことまでも行屆たおまへさん、心は惚ても女の意地、どふも返事の出來ない義理と、相かはらずだが勘忍して。（春色梅兒譽美）

といふ一見不合理である樣な脚色は、意地によつてのみ解釋せられる。藤兵衞は元來此糸の客であつたが、米八の爲めに相談づくで、米八と仲ある如くに構へてやつた關係である。米八としては恩があり、義があり、情もないではない。情は自づと出づべき傾きさへある。然るに米八としては此糸との義理を感じなくてはならぬ。それが意地である。自身の意欲に對する重壓力なのである。意地は達引の一種であり、又變形であるとも考へられる。一に此の種の文學美に於いてのみ胚胎するのである。戀愛の葛藤とか肉慾の遊戲とか見られる刺戟的要素も大いな性質ではあるが、見樣によつては、張りの美意地の美を綴る爲めの發表手段とも考へられる。人情本に現れた戀愛の諸相が餘りにも類型に墮し、皮相的である點を否定することはできぬが、畢竟は春水等人情本作者の手腕によると解されもしようが、又當代人の戀愛生活の一面を捕へてゐるといふ點も否めぬ事實である。

二

賤美に屬する第二として嬌美をあげる。あだの美いろの美である。生美に比して感覺感情が特に豐富な場合として考へられる。文化層の末期的傾向を帶びた當代であつたから當然ではあるが、その感覺感情は多分に官能的方向をとつてゐたので、いろつぽさ、なまめかしさが漲り渡ることとなる。これが、いろつぽさに留まらないと、單なる淫蕩、單なる濡れに陷るのである。勿論夫等の淫蕩が藝術でありえようとは思へぬ。

洒落本が穿ちの書たるべき自信を有つ爲めに、同時に寫實的描寫を實行した爲めに、時に笑ひ本の域を侵す傾きも示されるが、洒落本の使命は之とは自ら異るものがある。出會に初まり、宵の程に進み、更ての體に及ぶべきを型と

してはゐるが、どこ迄も通としての描寫でなければならぬ。閨中の描寫と雖も、その筋合を解いてゆくのを第一義とする。そこに所謂洒落を見出さんとするのであつた。その意味での洒落には嬌美を宿してはゐなかつた。たゞ描寫の形式として、笑ひ本と極めて隣接するがゆゑに、末期の或作品にはその範圍の埒を越えたものも見うけるのである。かくして洒落本に於いては展開の機を逸した方面の美が、人情本の構想によつて實現しえたと見られる。人情本が前述した樣ないなせ美を有すると共に、嬌美に於いて重要な要素たる部分を示してゐるのである。やはり、主に特殊社會とか之に準ずる社會とかを範圍として、そこに生活する女性を捕へたから、素材たる彼等の肢體動作思考等から滲み出るものは、先づ嬌美であつたのである。

峯「エ、何樣したとへ。
もみ「モウ〳〵、義理も人情もいらなくなつてまゐります。
峯「さればねへ、こまつたものだ。
もみ「何樣いたしたらようござゐませう。
峯「左樣サねへ。ト平氣でゐる。（英對暖語）
もみ「イ、エそれを少しも貴君がわるひと申のではござゐません。只私が心を取直そふとぞんじましても、思ひ出すとなかなかお側をはなれる事も出來ませず、また今になりましては、姊の心がかはひそふでも、あの子の嬉しがる樣に貴君がなさるのは否でござゐますよ。（同）

岑次郎に對する紅楓の哀訴は、初め抑へて來た妹への情と義とを振り捨てても男心をえようとする。而して、其の要求の發表は、ひたすら男心に逆はぬ手段を執らうとする。人情本の筋はやはり型を成してゐるが常に一人の男性を中

心に數人の女性が纏はり、男性の愛情は數人の女性に働きかけるので、女性間には反目抗爭が生じる。而も夫々の女性としては、わが男が他の女性から愛慕さるべき事を認め、寧ろ誇りとしてゐるのである。であるから男性の愛にも不徹底さがあるに拘らず、女性側にはいぢらしさ弱さを失はぬ。爲めに、戀愛その物もかなり感覺的な要素を有つ。この場合、人情本の如き寫實的な筆法が大いに役立つのである。同時に歌川派の挿繪がよく協調を保つ事に氣付く。こゝに嬌美が十分成立して見られる。これが色つぽさである。

人情本を戀愛文學として見るとき、屡〻元祿期の浮世草子と比較せられて、戀愛に本能的な生命的な純粹なものを缺くがゆゑに、人情本を單なる淫猥の書と見なす場合がある。併し、人情本に現はれる女性は、社會道德の重壓と生活樣式の固定等によつて、本能を本能として例示しえない條件下に生れたのであつた爲めに、純粹戀愛の發表形式が曲折したと見るべきである。その條件と本能、卽ち社會と個人との調和が、かの張りや達引を生んだのである。早くは、張りや達引に迄進行すべき複雜な經緯が存しなかつたのであらう。卽ち、强さをもつ戀愛形式は迂曲して發表され、弱さをもつ戀愛形式のみが直接的に示されたと見ねばならぬ。

嬌美は人情本の獨占する所とは限らぬ。眼を轉ずれば先づ合卷が指摘せられる。尤、合卷の全部ではなく、その中の戀愛物である。例へば、田舍源氏の有つ要素の中で重い部分の一面が、人情本に共通してゐると思ふ。而も黃表紙からの發達徑路に立つた爲めに、脚色の固定を免かれ、描寫態度は遙かに自由であり大膽であつた。ゆゑに合卷に於ける戀愛の相は、一見人情本と全く異るかの如き觀を呈してゐる。併し、戀愛物であり當代物である限りに於いては、常に一人の男性を取卷く弱き女性が登場するのである。たゞ戀愛を發生さす條件や狀況の種類が多い爲め、嬌美の類も多少複雜であるとはいへると思ふ。

嬌美の、量でなく質に於いて、一種特異な類が算へられる。それは官能的刺戟を強めた妖ましさの美である。社會文化の末期層の現象として當然求められる變態的樣式であつて、第一に、女性美の中に、男性の女裝といふ手段を執つた類がある。特殊社會として許容されてゐた歌舞伎芝居の生活には、古くから傳存し發達し、他の社會にも實現を強ひたのであつたから、社會現象としての此の種の嬌美は勿論認められねばならぬが、夫等の影響はあるとしても、直接的にはやはり社會文化の現れとして文藝の素材となり脚色となつたと見たい。讀本から合卷に及んでは著しく眼につく。兒雷也豪傑譚の兒雷也は妖術を用ゐる事としてゐるが、妖艷な美女となる。

いと艶妖(あでやか)なる少女の年は二八ばかりなるが、搨箔縫箔したる、六尺袖の表衣に、雜色の下襲して、炷籠たる奇南の香も、えならぬまでに、今の世にはいとめづらかなる、帶の襌(うはも)めきて、幅廣きを、竪ざまに、締なしたる、腰は風に靡く物の如く、姿は獨立る花に似たり。

とは八犬傳の毛野の扮裝である。馬琴は彼をして親の仇を討たんが爲めの化粧であるといはしてゐるが、勸懲主義を翳すにせよ、作者として自ら誘惑に陷つた時勢粧による構想に外ならぬと見られる。此の種の美は、飽くまで女性的として見紛へらるべきを條件とし、同時に女性その物である事を禁じ、男性でなくてはならぬとする。そこに獵奇性が潜む。この點では小說に於いて描寫の完全を期し難く、力めて挿繪によつて補充を計つたのである。挿繪に代つて、之を想像に訴へしめて成功したものとしては戯曲あるのみであつた。誰も知る辨天小僧とかお孃吉三とか、此の類である。五人男の焦點は濱松屋の店先での辨天の名乘りの時であつて、高島田に大振袖の娘が、忽ち「片肌を脫ぎ櫻の花の彫物を見せ、きつと見得」できまる。其の變態的官能美に盡きるのである。純粹な意味の男性美ではなく、男性美を包んだ女性美の蠱惑味なのである。これと反對に男性美に包まれた女性的蠱惑味の場合もある。女性の男裝、或は

男性的振舞である。それらは完全な男性となり了せてはならぬので、必ず女性美が潜み、何處かに窺ひ出ねばならぬことになる。早くからある女伊達の類の外に、二見の仇討とか闘道女自來也とか、殊に書替物には甚だ多い。時に勇を示して强豪を拉ぐが、猶爪外れの尋常さ、肌の香の漂ひに男性ならざる美を宿すのである。所謂若衆の美の如きは、右の兩者の中間に位するものと見るべきであらうか。但、これには早い系統に屬すべき、凛々しさと官能美とを交錯させた類があり、末期に現れて來た女性美を主とする類がある。美少年錄の朱之介は前者を、梅の春の福之助は後者を示す。嬌美は要するに廢頽的な世相の產物であると見ねばならぬが、これらが猥雜に對して一線を劃する所に、何處迄も藝術美としての存在價値を見出すのであつて、而も當代文藝の底を占める大いな潮流の一である事を否みえぬと思ふ。

三

形式的なる賤美に相對して、次に感覺的なる醜美を考へる。醜惡の美である。怖さ、悽さ、むごさ等が爰に屬する。よつて內容的といはんよりは感覺的といふべき類と考へられる。之等を分つて、主觀的な方面としてのすごさの方面と、客觀的な方面としてのむごさの方面とに就いて概觀する。

すごさ卽ち悽慘美の一般的範圍では、自然の悽慘を最高とするであらうが、これらは崇高美に共通するから爰には一切考へぬ事として、醜惡美を產むべき悽さの方面をのみ問題としたい。扨、悽さには怖さの感情と不氣味さの感情とが添はつて、前者が恐怖の美をなし、後者が怪奇の美である。怪奇は恐怖に通ずる場合もあるが、恐怖が常に怪奇と一致するものではない。

一般的の恐怖は先づ普通の怨靈物作品に見られて、これらは早い頃の怪異小說の類からかけて盛時の讀本に及び末

期の黄表紙や合卷並びに戲曲の類に涉つて、重要な要素であつた。これら作品が此の種の美に成功してゐるのは、構想の態度が主として傳奇的に傾くからであつたと思はれる。而も宿命論的人生觀の下には、必ずや人爲的以上の力を認めねばならなかつたので、乃ち怨靈變化といふ類が盛に横行した譯である。讀本や合卷又はお家物の戲曲の如き、一國一城の運命とか一家系の盛衰を扱はうとする樣な規模の下には、當然宿命論的觀察を下さねばならなかつたのである。そこには人間の我慾が繰り展げられて猛惡無殘な相が渦く。規模の大に應じて深刻なる無慈悲が示される。よし小說的假想として紹介されたとしても、その內容は具體的事實として、民衆卽ち讀者の腦裡には印銘せられた事と思ふ。流行の因もそこに在つたと思ふ。

恐怖美は高次的となるにつれて、他の類の美を加へて複雜化し、且夫によつて完成すると思はれる。亡靈の作品としても、親子、兄弟、君臣關係等の恩義による場合等は、その美の效果は極めて稀薄になる。夫が怪奇美を加へて始めて深刻化するのである。それらによる構想と、そこから生れた描寫によつてのみ成功が考へられる。讀本では京傳の作に比較的顯著に示されてゐる。曙草子とか安積沼の類である。怪談雨夜鐘等の類はこの系統をひくものである。

姫はなほ彈きすましける折しも、俄に燈火くらくなり、灯臺のかげに怪しき人かげ現れければ、姫これを見てあなやと叫ぶ。野分の方其聲に驚き、眼をひらきて怪物を見つけ、枕刀を拔いてはたと斬るに、忽ち一團の靑火となりて消失せ、只空などを斬りたらんやうにて刀に力あまり、姫のひきさしたる琴を眞二つにきり割りぬれば、琴柱はツしと飛散りて切れたる糸の先盡く、蛇と化し、鎌首をたてて姫の方に向ひ……ある夜丑三つばかりに……美しき切禿二人、鎧唐櫃をかゝげて出來り、帽額の簾の下におろして蓋をあくると見えしが、裏より數百の蛇うごめき出で、簾の裾をくゞりてはひ入り、櫻姫に飛びつき、首すぢ、手くび、腹などに纏ひつきければ、櫻姫「あなや〳〵」と叫びつゝ、身をもだえてぞ苦みける。（曙草紙）

戯曲方面には此傾向が多分に示されてゐる。四谷怪談とか櫻莊子とかは當年の成功作品である。安積沼の類も戯曲化せられてゐる。これらは演出を豫想し條件づけてゐる所によつて感覺的方面の成功が特に目立つのである。

怪奇美の方は獨自に高次化しうる。ある種の宿命觀的な解釋が數種の怪奇美を重複させうる爲であらうが、從つてそこから生ずる恐怖美に似たものはあるが、夫は單純な恐怖美とは類を異にするものである。吾々は怪奇美をまづ小説中に求める場合に、所謂怪異小説の語を以て統括される類を見出す。初期の讀本が摘出されるので、莠句冊や垣根草等もさる事ながら、やはり第一に指を屈すべきは秋成の作品である。

いかになりつるやと、あるひは異しみ或は恐る〳〵ともし火を挑げてこゝかしこを見廻るに、明けたる戸腋の壁に、腥々しき血灌ぎ流れて地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒の端にものあり。ともし火を捧げて照し見るに、男の髪の髻ばかりかゝりて、外には露ばかりのものもなし。

と綴る吉備津の釜の怪異が、牡丹燈記の飜案たるにせよ、無きにせよ、讀者の肌を粟立たしめるものは確にある。思ふに作者が怪奇を信じたればこそ、そこに讀者をして信ぜしめねば止まぬものがあつたのであらう。秋成より後輩たる京傳にも、前述の通りその讀本や合卷に屢〻怪奇が扱はれてゐるが、描寫は解説的に流れ易く、怪奇美の迫力は淡い。稻妻表紙卷一で佐々良三八郎が慘殺した藤波の心火の爲めに惱まされる場面の如きを擧げるにしても、到底秋成物の比ではない。京傳は當時の讀本作者の中では怪奇を多く取材したのであつたが、それらが感性的に執拗でのみあつて、創作力に訴へるべき信念力が缺けてゐた故であらうかと思へる。夥しい讀本の作の中に、往々に怪奇の見られる馬琴の場合なども同樣である。

さて右の如く、秋成の作品中に怪奇美の尤なるものを發見するとして、例へば雨月の全篇を、此の種の美に成功し

てゐると斷ずべきではないと思ふ。青頭巾の如きは宗教的な嚴肅すらが漂ふ。であるから恐怖美に比して、怪奇美が人間世界の範圍で成功するのは、一に作者の筆力による所と見られる。多くは人環外の化生や動物を活用する。讀本や合卷に現れる多くの場合の怪奇美はそれである。自來也とか白縫譚の成功の因はそこにある。これ等の有つ怪奇美も作者の信念的態度の如何によつて左右せられるのである。唯ゞ構想上に破格と自由とを有する可能性があるから、內容的な迫力が些細であつても、一般の讀者に歡迎された筈である。

四

醜美の第二類として、むごさの美をあげる。殘忍のもつ美である。すごみを主觀的と見るならば、これは客觀的である。すごみは現實を超越した或種の能動性が作用する爲に生じた美であつたが、むごさは現實又は現實的なる狀況に於いて、他の優勢な力に壓迫された場合の、劣勢者の受動性を基調とする。どこ迄も劣勢者の場合でなくてはならぬので、優勢者が壓迫された時は痛快に變ずるのが常である。一般に優者と劣者と相對する場合に、優者が或程度迄の自身の能力を發揮するに止まれば、弱者の存在を危くする事はないのである。その平衡が破れた場合、實際は故意に破壞された場合、弱者が窮地に逐はれて、そこに新たな美を見出すのである。平衡が自然であるならば、これは變態といふべきである。由來、社會學者によつて、社會文化の頽廢期に生ずべき現象として證明されてゐるが、恰も近世末期はこれに相應し、此の種の美を達成したのである。所謂殺し場や責め場が、主としてかゝる美を構成してゐるが、形式としてはかなり古くからの傳統が考へられる。例へば説教節の正本等を考へれば、これらの要素が其の本質をなしてゐたのである。その後の技巧物の多くが亦同樣に考へられる。但、當年の作品が有つ悽慘美は後世から見る時は、極めて迫力に乏しいものであるが、夫は主として、苦悶美の有無に據るのでないかと思ふ。悽慘美は寧ろ客觀

性に立つが、苦悶美は主觀性に據る。かくして高次的なる悽慘美は一面苦悶美を發見せられなくてはならぬので、末期の作品に見られる悽慘美は、初期に流行したものとは全然類を異にすると見られる。

黄表紙合卷讀本戲曲類を通して、文學美として最も多く含まれる要素の一と思はれる。後期黄表紙に敵討物の流行を見出した事なども、構想上の變異を求めた結果とのみ見るべきでなく、語句につれ挿繪につれて一枚毎に緊張しゆく悽慘美が如何に强く迎へられたかを想像しえられるのである。

綠の黑髮をかいつかみ引倒して、額さきを欅にすり付け〳〵しつれば、額の皮やぶれて血をながしぬ。扨、兵藤太にむかひ「此女なぶり殺にして苦痛をうけしめよ」とて突きはなしければ、………「せめて產みおとし申すまで、一命をたすけてたべ、慈悲ぞ情ぞ、やよなう」と云ひつゝ追ひまはされ、身を遁れんとひしめくたび〳〵、衣にとめたる蘭奢のかをり鼻をおそひて、恰も嬋娟たる芙蓉花の風にもまるるに似たりけり。かくて情なくも肩二三寸きりこめば、呀と一聲さけびてうつぶしに倒れ、しばし絶入りけるが頭をあげ「あな苦しや、堪へがたや………」と聲高くよばはれど、草木も眠る丑三ツの頃といひ、いく間を隔てし深殿なれば、誰こたふる者もなく、………無慚や玉琴は手を負ひて、總身は朱に染りながらはひ廻り、……野分の方は答もせず、只うち笑ひてこゝろよげに見やりけるが「今しばらく苦痛をさせよ」と目を以てしらするにぞ、兵藤太その意をさとり、玉琴がえりくび摑みて刀をとりなほし、………

說明句が時に邪魔をするが、苦悶美を加へただけに悽慘美は强調されてゐると思ふ。而も歌川派の寫實的な畫風はよく斯の種の效果を助けてゐるのである。かの勸善懲惡を標榜した馬琴の讀本に於いてすら、作者は努めて悽慘美の達成を計つた。彼は特に辯解的な口吻を吐く場合もあるが、夫程にして迄も悽慘美の描寫に努めた。これは馬琴と雖も抗する事の出來なかつた時の力であつたと思ふ。

かくして讀者はこれらの場面に對して、悽慘美を感ずるのは當然で、そこには一種の優越的な快感もあらうが、同時に重壓を加へられた感じに似た獨特の快感に醉つた事であらうと思ふ。サヂズムの快感は同時にマゾヒズムの快感にも通ずるのである。かうした變態的であるだけに痛切なものがあつたのである。玉琴殺しの條に接する讀者の半ばの精神は玉琴としての感觸であつたと思ふ。戲曲方面では南北が好んで用ゐた手法であつた。江戸兵衛のお松殺しの如き、作者が自身の變態感を戲れたのではないかとさへ思はれる深刻さをもつ。

扨、以上の如きは、極く主な文學美を摘出して通覽して見たに留まるのであるが、これらによつて江戸文學の美的傾向の大勢は認められると思ふ。以上數種の文學美は文學樣態の種類からいへば、必ずしも一種類に一種の美が在るとは限らずして、むしろ數種のものが錯雜した場合に、高次の文學美が認められるやにも判斷される。少くも、ある一種のみしか發見されぬ或種の文學樣態がありとすれば、その文學樣態の有つ文學的價値は往々にして下る樣である。尤、これらは箇々の作品なり作者なりを考へると、特殊な例をも生ずるのであるから、概論としての見解である。要するに、右の程度の文學美に對する觀念すらが、兎角缺如した儘で、江戸文學が取扱はれる事は甚だ遺憾であると思はれるのである。

丹綠本に就いて

宮崎晴美

我が國の文學と繪畫との關係は極めて緊密である。過去の文學作品で挿繪のないものも尠くはないが、その大多數は、その創作の當初から挿繪のある物もあれば、又、後世に於て、その物語を繪卷に依つて傳播させたものもないではない。或る場合に於ては、物語や隨筆それ自體が、讀者に依つてその價値を宣傳されるよりも、寧ろ繪畫の力を俟つて、より廣く世に普及されて居る事もある。かうして我が國の文學は、その創作當初に於て、挿繪に依つて、旣にその興味を深からしめて居るばかりでなしに、その歷史的價値をも繪畫に依つて受けて居ると言つてよい。かの平安朝の著名な文學作品、例へば源氏物語でも、枕草子でも、又は紫式部日記にしても、皆この類である。單に平安朝ばかりでなく、鎌倉室町時代の物語にしても、この例には漏れない。殊に德川時代の文學に於ては、その作品の悉くが挿繪を含んで居ると言つてよからう。かの黃表紙の如き童話文學に至つては、物語よりも、繪畫本位にまで化して居るのである。尤も現代文學の如き、文化の進步發達した時代に於ては、文學作品と繪畫との關係は、稍分離しようとする傾向を帶びては居るが――この傾向は過去に於ても見られたが――是とて、時代の推移に從つて、現代の文學作品に交渉をもつ繪畫が生れないとは限らない。かやうにこの兩者は、過去に於て密接な間柄にあつて、互に提携しつつ我が國文化の發達に資して來たのであつた。

然るに、從來この兩者の關係に於ける研究はどうであつたか。遺憾乍ら、閑却されて居たと言はなければなるまい。從つて、是が參考書も亦稀であつて、稀書複製會の編纂にかゝる版畫禮讃や、水谷不倒氏の古版小說挿畫史の如き、僅に數種に過ぎない。故に、我が國文學も、文學作品それ自體の研究のみではなしに、更にこの方面からも研究され、以てその缺を補ふ餘地があるのではなからうか。私はこの見地に於て、茲に德川初期の文學作品と繪畫との關係を調査して見ようと思ふ。尤も德川初期の文學作品と繪畫との關係と言つても、刊本の挿繪もあれば、寫本に見る挿繪もある。又刊本の挿繪にしても、それに彩色を施したものと、施さないものとの別があり、彩色のない刊本にも、嵯峨本もあるし、大和繪風のものもあれば、浮世繪式のものもある。しかし此處に述べようといふのは、刊本に彩色を施したもの、所謂ゑどり本、卽ち丹綠本に就いてである。

先づ、丹綠本の名稱は何時頃から起つたのか。種彥の用捨箱、淨瑠璃本刊行の初の條に

こゝに摸したる册子三種とも、昔ゑどり本ととなへし物の麁悪なるにて、丹綠靑を筆任せに彩色ともなく點じて、最古雅なり

と見えて居る。こゝに言ふ册子三種は、淨瑠璃本の「八しま」、說經節の「さんせう太夫」、「かるかや」を指して居るので、種彥は是等の淨瑠璃本を見て、初めてゑどり本を知つたのであるが、是で德川時代には、丹綠本と言はないで、ゑどり本と呼んで居たことが知れる。然るに、不倒氏の假名草子（大正八年刊）の解題を見ると、

彼の丹綠本と稱し、丹綠黃などを以て版本の挿繪に筆彩色を施したるは、其方法は奈良繪本を眞似たる無雜作なる試みなりといへども、後年版畫彩色摺の工夫に、何物かの種子を與へたる事は疑ふべからず

とある。ゑどり本を改めて丹綠本と稱へたのは、何時頃から、誰が言ひ初めたのか判らないが、同氏の繪入淨瑠璃史

（大正五年刊）にも、「小形の丹緑本をはじめ」とあつて、丹緑本の三字が見えて居る。又、朝倉無聲の日本小說年表（明治三十九年刊）にはまだ見えないで、新修日本小說年表（大正十五年刊）には、丹緑本と稱した書名が隨處に散見し得られる。其他、大正末期の版畫禮讃にしろ、藤懸博士の浮世繪にしろ、岸田劉生氏の初期肉筆浮世繪にしても、皆是に就いて、多少の記述が載せられて居る。是等を類推して見るに、丹緑本の名稱は、明治ではなくて、大正から行はれて來たものではなからうか。

さて丹緑本とは如何なる本か。既に用捨箱や假名草子の記述に依つて明らかではあるが、德川初期に於ける刊本の挿繪に、筆で二三色を彩つたものを丹緑本と言ふのが通說である。德川初期と言つても、極めて小範圍の、元和寬永期に出た刊本の挿繪本にのみ限るといふ狹義の者と、元祿以前の挿繪本にまで及ぼさうといふ廣義の說とがあるが、此處では、廣義の意味に執つて置く。そして色は、丹と緑との二色か、又は丹と緑と黄との三色が、最も大多數であつて、稀には、是等の外に、紫色を交へたものもないではない。例へば、大阪府立圖書館本の「たいしよくくわん」（舞の本）の如き、又は、平家物語（家藏）がそれであり、更に、帝國圖書館本の「强盜鬼神」の如きは、丹緑黄の三色の外に、紫、水色、胡粉、金泥等の數種を用ひて、その絢爛なこと、頗る奈良繪本に近いものである。併し、是等は特殊の物であり、それに時代も新しく、普通には、丹緑黄の三色である。そしてその黄色は、奈良繪本の金泥が化けたものと言はれて居る。そこに、この丹緑本と奈良繪本との關係を知ることが出來る。又、德川初期に於ける挿繪本でも、筆彩色のないものは、丹緑本と呼ばないし、たとへ彩色があつても、刊本でなくて寫本に彩色を施したものは、この範圍でない。それは多く、奈良繪本の名で呼ばれて居るのであつて、それも短篇小說にのみ限られた名稱である。是に就いては、なほ後に改めて言及しよう。

然らば、如何なる種類の物にかやうな筆彩色を施したか。丹緑本として、現在知られて居る資料を調べて見るに、娯樂を目的とした物語や淨瑠璃本が、その大部分であつて、時には名所記や地圖等の實用書にも及んで居る。併し一般には、物語や淨瑠璃本に限られて居るし、それに夫等の物が、文學としては意義もあり、價値も大きいから、今は是等の物に就いてのみ檢討することにしよう。そこで物語の種類から見て、古物語に於けるもの、お伽草子に於けるもの、舞の本に於けるもの、假名草子に於けるもの、最後に、淨瑠璃本に於けるものといふやうに區別して、次に列擧して見よう。

一、古物語に屬するもの

義　經　記（四種）	大本八册	活字本、寛永八年版、同十二年版、刊行不明のもの
保元物語	大本三册	寛永三年
平治物語（二種）	大本三册	寛永三年版、刊行不明のもの
曾我物語	同十二册	寛永頃
平家物語	同	延寶五年

二、お伽草子に屬するもの

こゝにお伽草子といふのは、享保年間に於ける大阪心齋橋順慶町の書林、澁川淸右衛門が出版した、所謂御伽文庫本二十三册、及び之が類似の室町式童話小説を含む。

四十二の物あらそひ	大本一册	活字本	つきみつの草子	大本一册	活字本
四しやうの歌合	同　二册	同	十二段の草子	同　二册	同

富士の人穴草子	大本一冊	寛永四年
唐絲の草子	同　一冊	刊行不明
文章のさうし	同　一冊	同
いづみしきぶ	同　一冊	同
火おけのさうし	同　一冊	同
若衆物語	同　一冊	同
さるげんじ（二種）	同　二冊	寛永版、萬治元年版
小町さうし	横本一冊	同
天神本地	同　二冊	慶安元年
貴船の本地	同　三冊	刊行不明
くまのの本地	大本三冊	刊行不明（但し寛永版）
七草さうし	同　一冊	同
ふくろう	同　一冊	同
いはやのさうし	同　二冊	同
あさがほのつゆ	同　二冊	同
おたぎのさうし	同　二冊	同
さるげんじ	横本三冊	寛永版
こわたきつね	同　一冊	同
たなばた	同　二冊	明暦元年
新板ぶんしやうのさうし	同二冊	刊行不明

三、舞の本に屬するもの

幸若舞曲三十六番、悉く寛永版であるが、多くは刊行不明。併し、寛永十年前後の刊行であることは、「伊吹」、「もんがく」（共に九年版）「あつもり」、「烏帽子折」（共に十二年版）等に依つて知る事が出來る。又、活字本には「常盤問答」、「つきじま」、「あつもり」、「烏帽子折」等があり、更に烏帽子折には、刊行不明のものもあれば、「たいしよくくわん」には、別に慶安四年版もある。

四、假名草子に屬するもの

德川初期に創作された假名書きの小說で、近世文學の色彩豐かなもの。尤も嚴密な意味に於て、お伽草子との區別は、容易に難かしいであらう。

薄雪物語（二種）　大本二冊　寛永九年版、同十三年版　　七人比丘尼　同　三冊　寛永十二年
吉利支丹物語　同　二冊　同十六年　　強盗鬼神　中本一冊　刊行不明
恨の介　大本二冊　刊行不明　　愛宕地蔵の物語　大本三冊　承應二年

五、浄瑠璃本に屬したもの

不倒氏の古版小説挿畫史に於ける研究を基として分類すると、

たかたち　横本一冊　寛永二年　　いづみがじやう　小本二冊　寛永十三年
八しま　小本二冊　同十六年　　小袖曾我　同　二冊　版行不明（但し十二年頃）
きよしげ　同　二冊　正保二年

右の五種は、舞の本から轉化したもの

かるかや　小本三冊　寛永八年　　三せう太夫　小本二冊　版行不明（但し寛永版）
俊徳丸　小本二冊　正保五年

右の三種は、説經節に屬するもの

はなや　小本二冊　寛永十一年　　安口の判官　小本二冊　寛永十四年
ともなが　同　二冊　同　十四年　　むらまつ　同　一冊　同
一の谷逆落　同　二冊　同　二十年　　いけどり夜討　同　二冊　同　二十年
阿彌陀本地　同　二冊　同　廿一年　　あかし　同　二冊　正保二年
小あつもり　同　二冊　正保二年　　よりまさ　同　二冊　同　三年
はかた　同　二冊　同　四年　　ゆみつぎ　同　二冊　同　五年

かばの御ざうし　小本二册　慶安三年　とうだい記　小本二册　慶安三年
常陸坊海尊　大本二册　寛文二年　鎭西八郎爲朝　大本一册　寛文十年

右のやうに是を年代順に排列して見ると、丹緑本は徳川初期に一時流行した、繪畫史上の一樣式であつて、元和頃をその起源とし、寛永期を全盛として、正保慶安と、時代が降るに從つて、漸次衰退して行つたものと言へる。その最初のものは、元和頃に彩つた活字本で、この種の物は僅に九種、その何れが最も古いかは判らないが、「四十二の物あらそひ」や「四しやうの歌合」等ではなからうか。年代の明らかなものでは、寛永二年版の「たかたち」、同三年版の「保元平治物語」、同四年版の「富士の人穴草子」等である。是等は慶長時代、挿繪本の發生を見ると間もなく、奈良繪本の形式に型つて工夫されたのであつたが、その筆彩色が比較的面倒な割に、その利益が薄かつたのか、一時、寛永期の流行を見たものの、正保慶安を一轉機として衰微の兆を呈して居る。尤も承應明暦以降に於ても、見られないことはないのであつて、明暦萬治以降殆どその跡を絶つたといふ說には首肯し難い。現に、久原文庫本の「常陸坊海尊」や「鎭西八郎爲朝」等は寛文版であり、また家藏の平家物語には、于時延寶五丁巳年正月吉日洛陽二條通書肆堂開板の奥附さへある。是を以て見ると、丹緑本の時期は、上は元和頃から、下は延寶頃まで降るものと言つてよからう。

次に丹緑本の挿繪であるが、大抵は大和繪式の畫風で、それも繪卷物のやうに立派で巧みな筆ではなく、奈良繪本を摸して、人物も小さく、畫も地味であり、一體に、粗畫である。恐らく書物の挿繪といふ點から、名高い人は筆を執らないで、無名の畫家に依つて描かれたものではあらう。而も線には筆力が缺け、彫も荒ぽいので、一見、素人の繪といふやうな粗略な感がある。けれども、この畫工の大まかな筆と、彫師の幼稚な技術とが相俟つて、一種の快感を

與へ、却つて愛らしい所もある。殊にその配色が、僅かに三種類といふところから、その挿繪の簡單さと相應じて、氣持のよい感を懷かせて居る。全く實物實景とは似もつかぬ滑稽な彩色ではあるが、それに時代色も加はつて、今日から見ると、なか〳〵味はひ深いものである。そこが、丹緑本の面白さであり、價値のある點でもある。併しこの筆彩色は、生活程度の低い、時間の觀念の薄い時代にこそ流行したであらうが、その手數が可なり煩雜であつたから、次第にその手間と利得との比が取れなくなつて、一面、無彩色の繪入刊本が多くなり、その系統を、一枚繪に筆彩色した所謂、浮世繪の丹繪に讓らなければならなくなつたのである。その手數の煩雜であつた事は、かの「七人比丘尼」や「愛宕地藏の物語」に、同年の刊行でありながら、丹緑の筆彩色あるものと、無彩色本との二種があることから見ても察せられよう。

さて、更に丹緑本の意義であるが、是を繪畫史の上から見ると、奈良繪本の系統を享けては居るが、刊本に彩色のある最初のものとして、又、後世に於ける色摺版畫の源流をなすものとして、貴重なものと言へる。言ひ換へるなら、奈良繪本との關係に於て、次には印刷文化の上に於て、或は浮世繪版畫との點に於て、それ〴〵密接なものがあり、從つてそこに、丹緑本としての地位や價値が存して居るのである。今、少しくこの點にも觸れて置かう。

奈良繪本といふのは、室町時代の中期から德川初期に及ぶ短篇小說（主にお伽草子）に、朱、緑、胡粉、金銀箔等を用ひた挿繪のある寫本のことで、紙は鳥の子か又は間合（まにあひ）といふやうな類のものに、物語を假名文で書き、所々に彩色繪を加へた大本である。そして極めて美麗な爲に、棚飾本の異稱もあつて、よく床の間の違棚に飾られた。その初めは、看聞御記に奈良法師繪と見えて居るやうに、奈良の法師が描いて、是を奈良から盛んに賣出したので、奈良繪本の名稱が起つたものであらう。それが、世人の需要を得るに從つて、後には京都や大阪からも賣出されるやうにな

つたやうに思ふ。元來奈良は、靑丹よし寧樂の都などと言つて、繪具の名產地、檜繪師、奈良人形、さては奈良團扇の名も古い。かうした藝術味の豐かな地から、奈良繪本が生れたとて、何等の不思議もない。而もその奈良繪本は、繪卷物の代用として、中流以下の社會を相手に發達したので、その畫も自然と粗末であり、彩色も簡單であつた。この粗畫で簡單な彩色の點が、印刷術の未熟な時代の挿繪本の狙ひ處であり、又、丹緑本が摸倣し易い所以もそこにあるのである。そしてその畫風も、共に大和繪に屬して居るので、殆ど奈良繪本そのまゝを印刷に附して、是に筆彩色を施した物が丹緑本と言つてよい。但しその時代に就いては餘程開きがあつて、奈良繪本は室町の中期――內に、年代の判明せる最も古いものは、京都府立圖書館本の「あつもり」(横本二冊、明應八年二月)と、久原文庫本の「しぐれ」(大本一冊、永正十七年卯月)――から桃山時代をその隆盛期とし、德川初期に於ても、依然として製作されて居たのであつた。それが挿繪刊本の發達に伴つて漸次その姿を潛め、丹緑本にその遺風を傳へたものと言へる。

次には我が國の刊本であるが、是は奈良朝の經文をはじめ、春日版、高野版、五山版、慶長の勅版、伏見版、駿河版等の名の下に、多くの佛書や漢詩文が刊行されては居たものの、慶長年間の嵯峨本を見る迄は、挿繪本はまだ無かつたのである。尤もその少し前、慶長十一年三月に、豐臣秀賴の帝鑑圖說が出て居ないではないが、假名書の小說に繪を入れたのは、嵯峨本が最初であると言つてよい。嵯峨本は、和田維四郎氏の嵯峨本考や、川瀨一馬氏の嵯峨本圖考などの名著に依つて、普く世に紹介されたやうに、慶長元和年間の活字本――慶長十三年刊の伊勢物語が最も古い――である。その書目も正しい物が十三部、類似本が六部となつて居るが、その中でも繪入本は、伊勢物語、百人一首、三十六歌仙、二十四孝、及び扇の草紙等の數種に過ぎない。そしてこの嵯峨本が、京都の嵯峨で、角倉や光悅等の手に依つて出版されてからは、次第に挿繪本が刊行されて、寛永期の如き、物語の總てに挿繪を見るやうになつた。

併し嵯峨本には、まだ彩色は見えて居なかつた。それが同じ元和の活字本でも、嵯峨本以外の物語類に、初めて彩色が加はつて、此處に丹緑本の發生を見るに至つたのである。但し我が國に於ける最初の手彩色は、應永二十一年に出版された融通念佛緣起繪二卷と言はれるが、是は繪卷物であり、且つ普通の物語類とは稍その性質を異にして居る點から、やはり刊本小說に於ける最初の彩色は、丹緑本であると言つて置かう。

次に丹緑本を色摺版畫の源流といふ點から見るならば、浮世繪の紅摺繪にその暗示を與へたと言ふべきであらう。尤もそれは間接であつて、直接でないかも知れないが、紅摺繪の紅、緑、黄などの繪具が、丹緑本のそれと一致する點に於て、兩者の間に靈犀相通ずるものがあるのではなからうか。一體、浮世繪版畫は、墨繪から起つて丹繪に及び漆繪や紅繪を經て、延享年間に初めて紅摺繪といふ簡單な色摺が發明され、版畫製作の上に一時期を劃したのであつた。その間、六七十年の長い日月と、印刷術の進歩とに依つて、色摺板を見ることが出來たのである。併し、從來の丹繪にしろ、紅繪にしろ、何れも筆で、丹なり緑などの繪具を、墨摺の版畫に塗つて彩色したものであつて、言はば丹緑本の方法を學んで、その繪具を別々に彩つたと言つてよい。かうして見ると、丹緑本は、單に紅摺繪といふ色版畫の發明に、何かの暗示を與へたと言ふばかりでなく、初期の浮世繪版畫とも密接な關係を持つものであると言ふことが出來よう。そこに又、丹緑本の地位なるものを見出すのである。

併し是を文學史の上から言ふと、前時代の傳統文學であつて、新形式のものではない。その發生が、德川初期にあるので、一見、近世的色彩が相當にあるものと考へられるが、その實さうではない。尤も、近古から近世への過渡的產物と見られないではないが、それ以上に近古的性質を多分に含んで居るのである。その事は前にも述べたやうに、挿繪の上からも、畫風が大和繪式であつて、假名草子や浮世草子のやうに、半兵衛、師宣等の浮世繪風ではないといい

ふ點からも言へるが、その刊本が既に分類に依つて明らかなやうに、假名草子よりもお伽草子に屬するものが大部分であるといふ事から察知し得られよう。又、淨瑠璃本にしても、近古に發生した舞の本系統のものが主なのである。更に是等の刊本の出版地から見ても、淨瑠璃本の二三を除く外、悉く京阪の書肆から出て居ると言へる。近世の文化が、何も江戸のみから發生したとは言はないが、京阪は傳統的文化の地であつて、從つて其處から出版された物には傳統的文化を持續して居ると見做すべきである。尚ほ又、時代から言つても、近古と近世との境界線を明暦前後と見て、丹綠本は寛永期を中心とし、假名草子は寛文期が全盛である。かうした種々の觀點から考察するなら、丹綠本は繪畫史的に意義は深くても、文學史の上に於ては、先進文學の踏襲であつて、新意義の發見に苦しむものと言へるであらう。

「氣の毒」考

佐藤鶴吉

一

一語彙としての形は同じでありながら、その意義と用法とに於て、古今相違してゐる例は固より數多くある。今、思ひつくまゝに擧げて見ると、「あいさつ」・「あざむく」・「いつそ」・「いろどる」・「きさま」・「きつい」・「きやしや」・「せけん」・「せがれ」・「とんだ」・「なるほど」・「ほとんど」・「まきじた」・「よつぽど」など、何れも今日用ひられてゐるが、これらの現代語としての意義と用法とを以て、徳川時代の文獻解釋に臨むと往々にして失敗する。更に他の例につき、又時代の隔りをも更に大にして比較すれば、一層興味ある對照が、いろ〳〵試みられようが、こゝには、やはり今日の一語彙としての「氣の毒」と、近世語としてのそれとを比較して、聊か所見を記して見よう。

大日本國語辭典、言泉、大言海、大辭典などを見れば、「氣の毒」といふ語彙の意義と用法とに就ては、殆ど加ふべきものがないとも思はれる。卽ち、その意義は、第一に「心氣のさはり」・「心の苦痛」・「心に安んぜぬ事」・「心配」などいふ類で、話者自らのことに言ひ、第二は、他人の身の上に關して、その苦痛、困難を思ひやり、不便(ふびん)におもひ、あはれにおもふことをいふと謂ふ解釋に歸する。こゝで大切なことは、第一義が、話者自らの心に就いて言ひ、第二義が、他人の身の上に就いていふと謂ふ點である。尤も、平凡社の大辭典には、大日本國語辭典の說（第一義・第二義

の別を特に立てず）を襲うたものか、以上の二義を一項として合せ說き、第二義としては、「轉じて恥しい事。面目ない。極が悪い。」といふ解を加へ、その用例二つを擧げてゐるのが特に注意される。つまり、この解まで合せれば、皆で三義を認めるわけになる。

辭書の上に於ての解釋としては、今日特に歷史辭典といふものが我が國にない以上、右の解釋で滿足すべきであらうが、尙ほ問題としては、この語の發生に關して何か加ふべきものはないか。又、第一義が何時代に第二義に、更に（平凡社の大辭典の說を加へれば）第三義に轉じて行つたか。又、この語の意義としては、以上の三種の解に止めておいてよいか。又、何故に然かく轉義して行つたか。又、今日まで特にこの語に注意が拂はれなかつたか。又、この語を例として、何か今日のいはゆる意義學上の原理が演繹され、或は歸納されはしないか。といふやうなことが、聊か自分の興味をひいたのである。

二

一體この語の發生或は由來を問題とするに當つては、一方に「氣の藥」といふ語が同時に存在してゐたことを思ふべきであらう。

狂言、笠の下「あはゝ、さても〳〵氣の藥な坊主ぢや、一夜を貸しませう」

この坊主は、同じ曲の本文に「さても〳〵御坊は面白い人ぢや」とも言はれてゐるので、「氣の藥な」が、「面白い、慰みになる」（有朋堂文庫、野村八良氏註）といふ形容語であることは明かである。

昨日は今日の物語上「經を讀まぬは苦しうもないぞ。よき法華しうのしたぢじや、後をゆづらふぞ、ぢやうがこわうて、きのくすりじや」

これは、法師にしようと寺にやつた子の不勉强を、その親が叱つたのに對して、その師の上人が言つた文句で、一寸その意味が問題であるが、その洒落にをかしみを持たせたのであらう。とにかく古い用例の一としてあげておく。

犬子集卷第四秋上「くふよりも氣の藥哉鹿の聲　貞德

同　卷第二春下「吉峯の花や目藥氣の藥　重賴

何れも樂しい、心を慰めることとの形容である。

戲言養氣集上「これらほど氣の藥な、うまひことはおりなひ」

同「自慢せしも、げにことはりと覺えて、氣の藥ぢや、あたまをひよつと上れば、ちやつと引なんどする」

これらも、氣味のよいこと、痛快なこととの形容である。

博多小女郎浪枕上「仕合すれば氣の藥、海老手の人參五箱で三十斤」

新竹齋卷一「貴方は醫師な、實に氣の藥な人かなとて、氣の藥もりの木蔭の一休み、身は樫原心まめの子」

この二つは、文字通りの藥といふ意にもかけた例であるが、やはり心の樂しいことに譬へてゐる。後の噺本に「落語氣の藥」（安永八年刊）があるのも想ひ合される。「氣の毒」は此の如き「氣の藥」に對する言ひ方である。尤もその何れが先に言ひ出されたものか明かでないが、とにかく兩者は互に對語を成しつゝ或期間行はれたと見られ、又、さう見る時に、原義も明かになると思ふ。そして「氣の藥」の方が、普通語としてはいつか亡びて、「氣の毒」の方が今日まで存してゐるといふのは、言語の社會的生命も亦奇しきものであると感ぜざるを得ない。

さて、「氣の毒」といふ語の用例として古いものは、從來多く狂言から採られてゐて、謠曲の舟遊に「きのどくの山つもり來てうき名いとはじ我が思ひ」（言泉所引。但し、この文句は謠曲らしくないが）とあるのは珍しい例である。

今、自分にも新發見はないが、恐らく室町期の發生であらう。そしてその發生當時は、主として前記の第一義の如くに用ひられたと見られる。卽ち、この語の基本的意義は、話者自身の心氣にのみ關するものであつた。

狂言、さつくわ「それで身共がまねをする、さて〳〵氣の毒な事かな」

これは、主人公が、いつまでも何處までも自分の口まねをする冠者に對して、ほと〳〵困りぬいた時に言つてゐる例である。

狂言、柑子俵「親が聞いたら、よいとはいふまい、はてきのどくな事した」

旣に賣約の上、俵に入れてあつた柑子を、親の目を盜んで皆食べてしまつた子供が、獨り言してゐるのである。同じ曲で、この柑子俵を買つて戻るその主は

「この山中で日は暮れ、問ふ人もない。何とも迷惑ぢや、右へ行かうか、左へ行かうか、はて、氣の毒な」

と言つてゐる。この「氣の毒」は、すぐ前にある「迷惑ぢや」と同樣な氣持を表現したものと見られる。

狂言、伊文字「冠者肽でも應でもつがねば通さぬ、道行人はてこれは、氣の毒な事かな」

の如き、何れも自身の心に、當惑・迷惑・困惑を感じた時に發してゐる。但し、狂言の中でも

梟山伏「何と致したやら、唯うつかりとなり、鳥の鳴くやうなことを時々申す。何とも氣の毒な事でござる」

の如きは、固より話者自身の心の困惑を語つてゐるとも見られるが、又、その「うつかり」となつた者に對して同情し、その者の身の上について言つたやうにも思はれないではない。更に、この續きに、同じ事がらに對して、

「それは氣の毒な、不便なことぢや」

と言つてゐる。殊に「氣の毒な」と「不便な」とをかう續けたところを見ると、兩者が全く類語を成してゐるとも思

はれる。或は、かくの如くにして、既にその發生當時から、他人の身の上についても「氣の毒」と言つたのであらうか。たゞ管見に及んだ用例は、この種のものを多く示さないので、やはり、第一義としては、前記の通りであつたと思はれる。固より一語が、その發生當時から多義的であることも意義學上容されないではないが、此の語に就ては、それがまだ問題であり、むしろ、第一義のまゝで、狂言以外にも近世上半期までは用ひられて來てゐるやうである。

中江藤樹の書簡（年月不詳）「御心にすくみ御座候に付て、外物さはり、氣之毒に御思召故、いつとなく志をうばはれ候」（有朋堂文庫、新撰書翰集、七八頁）

伊達安藝書狀（寛文十一年三月）「御老中御前ニテ云々、何ト甲斐被申候哉、志摩呼ビニ被遣候故、延々ニ罷成候、氣の毒千萬ニ候」（大言海所引）

諸分店颪（延寶頃刊？）六「我身などもいかい事文はござんす、置き所がなくて氣の毒でござんす」（江戸時代文藝資料卷四、六十八頁）

一代男（天和二年刊）五「心のまゝ咄のならぬ事、氣の毒なり」

この種の例は尙ほ他に枚擧の遑がないほどで、何れも第一義を以て解されると思ふ。世繼曾我（貞享元年作）の虎少將道行の條には

「戀はくせもの皆人の迷の淵や氣の毒の山より落つる流れの身」（近松全集、二）

とあり、女用訓蒙圖彙（貞享四年成）卷三にも

「色はうき世のきのどくの山りんゑのふちにてあれば」（二枚ウ）

とある。かくの如く洒落ても、やはり我が心氣を惱ますものの義であるから、第一義に屬すると見るべきである。

しかし、貞享元祿の頃から、第二義と見られる例が、第一義の例と交錯して見え出して來たかと思はれる。

冥途の飛脚（正德元年作）上「可愛らしい顏付で氣の毒がらすはどうじやいやい、いつそ殺せと抱付けば」（近松全集、九）

の如きは、猶ほ「我が心を惱まし苦しむ」（右全集頭註）といふ例であるが

三世相（貞享三年作）一「母は繼母に候へば、若しもの事候はゞ、せけんていもきのどくなり」（近松全集、一）

の如きは、全集頭註に「心苦し」とある如く、むしろ第二義に近いと考へられる。更に、松の葉（元祿十六年刊）卷三、「さわぎ」の十二、

笑止

「笑止〳〵が三笑止ござる、一に出ぬ首尾二に舟の雨、土手の夕ぐれ橋場のけぶり、明けの烏のこゑ〴〵も氣の毒」

おなじく

「笑止〳〵が三笑止ござる、一にかす首尾二に遲い首尾、軒の夕暮かぎりのたいこ、ならぬ貰ひの約束も氣のどく」（以上、日本歌謠集成六、近世編三七二頁）

の如きに至ると、「氣の毒」が「笑止」の類語たることを立證する例として興深いのみならず、その語義が第二義に轉じ行く過程を示す例としても見のがすことが出來ない。尤もこゝの「笑止」は未だ必ずしも他人の身の上に同情していふ例とは見られないのである。假名手本忠臣藏で、勘平切腹の場面を導くべく、與市兵衞の死骸をかつぎ込んだ村の衆が、異口同音に言ふ「笑止〳〵」とは、尙ほ意義上の距離があると思ふ。卽ち上の歌謠の中の例は二つとも當時の嫖客の心氣の惱みを言つたと考へられるからである。「笑止」も、謠曲などには、我が身の上について困つたことをいふが（大言海參酌）、この歌詞にもその解釋があたると思はれる。つまりこの「笑止」から逆にまた「氣の毒」の第

一義の生存を想はせられるのは寧ろ案外でもある。しかし、

傾城阿波の鳴門（明和五年作）八「近所の聞えが氣の毒さに、つい口をおさへたが」（有朋堂文庫、四一七頁）

の如き例を見ると、一方に第二義に轉じつゝ、第一義もやはり存續して行つたことを知る。否、大言海によれば、仙臺に於ては今日もなほ第一義に用ひる例がある由である。或は方言をあされば、尚ほ他にもその例が見出されるであらう。それならば、判然と第二義に用ひられ出したのは果して何時頃からであらうか。

寛政壬子（四年）秋九月の序がある、北邊成壽論定の詞葉新雅を見ると、

キノドクナヤウス＝「いとをしげに

と出てゐる。又、寛政十二年刊行の藤井高尙著消息文例には、「氣の毒」の一項を設けて、これを中古語の「こゝろぐるし」・「いとほし」の二語を以て說いてゐる。卽ち、

末摘花ノ卷命婦ノ詞なみ〳〵のたはやすき御ふるまひならねば、心ぐるしきを、末通女ノ卷内大臣ノ詞いとつれ〴〵に思ひてくつし侍れば、心ぐるしう見たまふを、同卷大宮ノ詞あさぎいとからしとおもはれたるが、心ぐるしう侍るなり。これらみた俗言のきのどくに思ふといふにあたれり。

と說き、更に「心ぐるしは、俗語にきにかゝる、あんじられると云意なるもあれど、こゝはひとかたにつきていへり」と割註を加へてゐる。

又いとほし、と云詞も、俗語の氣毒と云にあたれるあり、若菜ノ卷源氏ノ君ノ詞かうやうなる人のしるしあらはさぬ時、はしたなかるべきも、ただなるよりは、いとほしう思ひたまへつゝみてなん（以下、藤袴卷より源氏君の詞によつていとほしの二例をあげてゐるが省く）

と記し、次に又割註して

俗語の氣毒は御きのどくともいへど、此いとほしは、御いとほしとはいはず云々

と說き、更に本文として、

又氣毒と云意にてはあれど、俗語のとはいひざまのことなるあり、そは玉鬘ノ卷に源氏ノ君ノ詞さる山がつの中に年へたれば、いかにいとほしげならん、とあなづりしを、とあるたぐひなり。

と述べてゐる。これに就ては源氏の本文にも更に當つて考へて見る必要があり、又、「心ぐるし」・「いとほし」の語義そのものも實は問題にならぬではないが、こゝでは唯、高尙が「氣の毒」を俗語として取りあげ、これを中古の雅語二つに當てたところに意義を認めればよい。思ふに、「心ぐるし」も「いとほし」も、他の身の上、對象となつた人の事に關していふ言葉である。卽ち、「心ぐるし」・「いとほし」と感ぜしめる原因、事情は、他の身の上にあるのが常である。この二語に「氣の毒」があたるといふのであるから、高尙の解してゐる「氣の毒」は第二義と見られる。詞葉新雅の說も亦同じである。

浪花聞書（文政頃著、寫本、古典全集第四所收）の「づつない」といふ語の註には

術ないか江戶でいふせつない也氣がづつないはきのどく也

とある。これでは、また第一義に逆戾りした解のやうに思はれる。刊年は不詳であるが、大新板萬物言葉附（京四條柳馬場西入町、大和屋甚七板）には、

ひゞくすりがいふている　きう銀をきゝやきのどくな

たこがいふている　若い入ばがきのどくな

前者は下女に同情し、後者は若い人の人齒に同情しての事である。同じ上方言葉でも、浪花聞書の說とは異なり、この方はもう確かに今日普通にいふ「氣の毒」になりきつてゐる。

東海道中 膝栗毛（享和二年初版）九編卷之下「こけへ來て、酒ばかりぢやアはじまらねえ、何ぞ呼ばにやアこゝのうちへ氣の毒ぢやアねへか」

同「オゝせうし、お氣の毒なこといたしたわいな」

前例は北八の言葉、後例は大阪新町遊里の仲居の言葉であるが、後のは殊に「せうし、お氣の毒」と續け、「氣の毒」に「お」を附けてゐるので、第二義たることがはつきりしてゐる。

同 十編卷之上「ハテこないに馳走にあうて、氣の毒やさかい、しよことがない。サア〳〵こち來なされ」

これは、自分の心苦しいことを言つたのだが、その心ぐるしさの原因は他の上にある。これに「お」を附ければ、すぐ他の人の心事を推量形容するにも用ひられる。

河東方言 箱まくら（文政五年刊）上「後悔するにつけても、いよ〳〵ふさぎしことならんと、推量られて氣の毒也」

もはや、此の方の例は擧げるに及ぶまい。今日のわれ〳〵は、この例のやうに、「推量られて氣の毒」といふべき處を、「推量られて」を常に略して用を足してゐるとも考へられる。

三

凡そ言語は、一時に一義を表現するものであるといはれる（我が國の掛詞は別として）。これは即ち、語が異なれば必ずその意義も異なるといふことである。しかし、このことは一面の眞理でしかあり得ない。他面から考へると言語は實に多義的なものである。固より言語の種類にもよるが、われ〳〵の思想・感情そのものが、もと〳〵複雜してを

り、或は混沌たるものであるので、それが或語に結晶する程度も亦いろ〳〵な筈である。殊に感情狀態を表現するに當つて、われ〳〵が適當なる語の選擇に屢〻迷ふことを思へば、此の感情を表現する言語こそ殊に多義的なものであると謂ひ得よう。「氣の毒」は單純な形容詞でないが、品詞的に見れば「氣の毒な」といふ形、或はそれが略されて單に「氣の毒」といふ形になつてゐても、本來の形にすればナリ活の形容詞に屬せしむべきである。そして實際、「困つた」・「弱つた」・「心配だ」・「辛い」・「苦しい」などいふ如き、とにかく、言に抽象すれば「心の苦痛」な狀態を表現し形容する爲に、選ばれた一語彙であることは、既述した通りである。唯一語彙として此の形を成した「氣の毒」が、後からその意義を問題とされる時に、嚴密には決して單純に扱はれないのは、此の語の成立或は性質が然らしめたのであるといふことに注意したい。第一義といひ、第二義といつたが、或は發生當時から既にその何れをも兼ねて用ひられたかも知れない。前に、その用例の少なき理由を以て、人の身の上にいふを第二義としたが、上の如く心理上から此の語の發生を考へれば、未だ必ずしも妥當な解とは謂はれないのである。隨つて、何故に第二義に轉じたかといふことも、結局、その語が、もと多義的である故に、偶〻それを使用した者が、その時の主觀によつて、本來その語の有つ意義の中の一義を選び、他の人も亦その用例に習ふに至つたといふに歸するであらう。故に又この偶然的な事由は、第二義の發生した後でも、第一義の生存を妨げる事由とはならない。かくて第一義と第二義とは並存する。但し文獻に殘つてゐる例から歸納すれば、いはゆる第二義が或時代から特に多いといふのである。その時代を考へる爲に詞葉新雅や消息文例などを擧げたのであるが、それはたゞ寛政頃に於ても既にかく用ひられてゐたといふ事實を示すに過ぎない。恐らく、もつと夙くから今日の意義にも用ひられたと思はれるが、今その跡を辿るべき材料を自分は持たないのである。

さもあれ、徳川時代の文献に見える此の語の意義を、今日、實際どんな風に言ひかへたらよいかといふことになると、第二義や第三義に止らないと思ふ。狂言の用例によれば、「氣の毒」は「迷惑」の類語であつた。それからやゝ後になると、「笑止」の類語であつた。そこで、姑く時代の問題をぬきにして考へると、「氣の毒」は、この「迷惑」と「笑止」と、かなり嚴密な意義に於て類語を成すと謂はれる。意義學上の口吻を借りれば、つまり一概念に對して三種の語彙が存したといふことになる。「迷惑」はとにかく、「笑止」といふ語は、現代の一般語としては既に意義が轉じてゐるので、今日では「氣の毒」の譯語にはなりかねる。然らば「迷惑」の外に如何なる語が選ばるべきか。ナリ活の形容詞としては、「不便(ふびん)な」といふのが、第二義の類語としては最も當つてゐる。若し、用例の一々に就いて考へ、又、譯語としての品詞の如何を問はぬことにすれば、第一義には「困つた」といふのが最もよく通ずると思ふ。その他、「きまりが惡い」といふ第三義にも、「ばつが惡い」・「氣詰りな」などいろ／＼程度の差があるやうで、一概には定めがたい。實際の用例に當り、前後の關係をも見て、その場合に相當するそれ／＼の意義の色合を考へる外はない。

要するに語義の變化といふことには、次の二つの場合があるやうに思ふ。即ち、原始の意義が甲一つであつたものが、乙となり丙となり、次第に轉義して行くものと、原始から甲と乙と丙といふ如く多義的であつたものが、その中の何れか一義が生存し、而もそれが又ある途中から分化して行くものと、この二つである。自分は最初「氣の毒」について、第一の例の變遷を經たものであると思つたが、よく用例に當つて考へて見ると、寧ろ第二の例の變遷を經て來たもののやうである。しかし、「氣の毒」といふ語が、かやうな結論を導く爲に特に好都合な語であるといふわけではない。

藤原惺窩と國文學

池田亀鑑

一

荻生徂徠がその家集に於て「有惺窩氏而後、人々言則稱天語聖」と稱し、中井正純が本朝儒宗傳に於て「嗟大哉歟夫之功、其功爲不在王仁南淵吉備菅公江帥之下」と評したやうに、藤原惺窩は近世儒教史上あまりにも著名な人物であるが、今ここで考へて見ようとするのは、そのやうな儒者としての惺窩ではなく、國文學史若しくは國文學研究史の立場から見た惺窩についてである。更に云へば、國文學に關して惺窩の殘した業績が如何なるものであるか、更にそれ等の業績を通じて、彼の國文學に對して執つた態度が如何なるものであるか、又彼が國文學に於ける中世的思想と近世的思想との中間に在つて、如何なる役割を受けもつてゐるかといふやうな諸問題について考へて見ようとするのである。

先づ惺窩の學問の一般について見るに、彼は偉大なる學者ではあつたが、決して偏狹固陋な儒者ではなかつた。惺窩文集の林永喜の跋に

惺窩先生產海隅日出之國、淑質貞亮、英才卓躒、九流七略、六藝百家、洎我國史家乘、及西域迦維之書、南蠻耶蘇之法、無書之不讀、無義之不通、無理之不窮、博聞强記、無天下抗其衡者也耶。

とあるが、これによれば、惺窩は天性敏鋭にして博覽强記、廣く和漢の學を修めたのみならず、西域迦維の書、南蠻耶蘇の法にも通じてゐたことが察せられる。

國學者としての惺窩は、從來ほとんど問題にされてゐないのであるが、望海毎談に「理學此人にて道立、詩賦を能し、和學に達せり」とあるによつても、彼がひとり程朱の學に通達せるのみならず、和學にも造詣が淺くなかつたことを知るのである。元來惺窩は、藤原定家の後、冷泉家の出であつて、代々國文學に關係の深い家に生れたのである。その歿するや、定家の舊跡たる時雨亭のほとりに葬られたのであるが、その因緣は決して偶然ではないやうに思はれる。菅得菴の挽詩に

藤氏芳聲德亦馨、堪憐五十九年齡、定家卿後斯人在、墳墓卜隣時雨亭。

とあり、木下勝俊の擧白集に

此人のとおつおや京極の黄門は、しきしまのうたにおきては、いづれの人かなみせん。わざしことなるすぢにて、あやしきことの葉もらさじと、かくろへたまふれど、をのづからきりふくろにものすれば、世人めでまどふ。

とあるによつて見ても、惺窩がその祖定家に比せられるほど國文學の才に長じてゐたことが推察される。就中、林羅山が惺窩先生文集に於て行狀を記して

先生幼學、至壯不怠、出入於釋老、閱歷于諸家、兼習日本紀、萬葉集、歷代倭歌詩文等、其間讀聖賢書、而後棄異學醇如也、故精義拆理、殆如破竹、未曾勞其力也。

と云つたのを見れば、惺窩は儒佛老の三教に精しく、かねて國學に通じ、日本書紀や萬葉集や歷代の和歌を研究して、これ等を統一するに聖賢の教を以てしたことが分るのである。

右のやうに、惺窩は博學多識の學者であり、國文學研究史上注意を要する人物であるが、一面に作家的才能をも有し、詩文をよくし、和歌を詠み、書に巧みであつたことは、惺窩文集や惺窩先生倭歌集等によつて明白である。よつてここには再び繰返す必要はないが、しかし彼が連句に長じてゐたことについては、まだあまり知られてゐないやうであるから、一言つけ加へておきたい。彼が林道春に與へた書簡（三井氏藏）に

連句稿一册借進之候、此内等月題聯有之事に候、一覽了畢候はば、龜三郎かたへ可遣之候、彼所望之由候き、聯句舊草九册龜三へ遣之候、可有一覽候也、奈何、かしく。

とあり、又

前囘預音書候、厚情之至候、將亦題聯之事、書櫃中有之義ニ候間、取出、重而可持進之候、且又近來漢和和漢等御稽古之由珍重候、懷紙一覽所望之事に候、就中愚草一卷相達候、長嘯之稿到來候、信澄來訪之刻、可備一覽之由申度候、かしく。

とあるのがその證であつて、これ等によれば、連句の才も尋常でなかつたと察せられるのである。なほこの外、惺窩の學問や藝道には深く大きなものがあつたに相違なからうが、さういふ事情を明示する文献の少いのは遺憾である。

二

右にのべたやうに、惺窩は單なる儒者ではなく、古今東西の學問に對して關心を有し、作家としての才能も持つてゐて、眞に文字通り博學多才の士であつた。今は限られた紙數であるから、その中特に國文學に關する方面をかぎつて考へて見たいと思ふ。

國文學に關して、惺窩が最も深い關心を抱いてゐたものは、前記林羅山の文にもあるやうに、日本書紀と萬葉集とである。この二書に關する研究業績は散佚してゐるし、又その業績を推知するに足る文献も少いので、今完全な研究

内容を明かにすることは出來ないが、斷片的な資料の二三を拾へば次のやうなものがある。

先づ書紀に關しては、惺窩文集所收、慶長十一年の手簡に

復啓舊年日本紀抄三册、中臣祓一小卷稽留、逋慢之罪擢髪有餘、蓋就紀之行、暫時寄藏官之書庫、至今行李泛梗至此、亮恕

とあり、吉田履一郎氏藏の手簡に

一昨日者清談(中略)就中先是所寫之元古日本紀抄蓋援據有賴、事了則即時還納耳、暫時拜借幸甚、餘緒竢面布。

とあるによつて、書紀に對する惺窩の關心の一斑を知ることが出來る。これ等は、ただ彼の研究事實を推定する傍系的資料にすぎないが、高野辰之博士藏の惺窩自筆日本書紀神代卷の如きは、研究業績の內容そのものを示す貴重なる文献として注意されねばならない。この自筆本は、かつて高野博士が「出でよ冷泉家本萬葉集」と題する論文(國語と國文學第九卷第六號所載)に於て紹介されたものであるが、同博士によれば、右の自筆本は、賀古勘左衛門宗隆が惺窩に送つた書翰二十四通の裏面に、惺窩自ら丁寧に書紀の本文を書寫し、朱筆をもつて校正を加へたものである。その底本たる書紀の本文及び朱筆の校正が如何なるものであるか、又それ等を通じて見た書紀に對する惺窩の造詣や識見が如何なるものであるか等については、追つて同博士の詳細な研究が發表される筈になつてゐるから、ここでは言及しない。

次に萬葉集については、山本悌二郎氏藏の手簡に

困知記一萬葉一到來、達座右、萬葉自十四至終卷、附皈使(下略)

とあり、惺窩の關心の一面を物語つてゐるが、更に北村季吟の萬葉拾穗抄に

(前略)今予か所用之本は、此仙覺が本をもて、妙壽院冷泉殿の校正し給へる本とかや、歌の前書、作者の書やう、訓點等、ま

ことに藤斂夫の所爲しるく、學者の益おほく、見やすかるべければ、しばらく用ひ侍し(下略)

とあり、同書二十の冷泉亭人の跋に

(前略)我先惺齋有家傳一本、取數本校正之、祕不出於家、時田玄之懇求之、惺齋不得已許之、玄之太喜、謄寫以傳其家、及曾孫玄恒、與北村季吟者有素好、故使彼得寫之、今拾穗鈔所由起也(下略)

とあるによつて、彼の萬葉研究の内容の一部を知ることが出來る。卽ち惺窩は萬葉集の諸本を得て校正し、訓點を加へてゐたこと、その祕本を吉田玄之(素菴)が借りて寫し、それを曾孫玄恒が北村季吟に貸與し、季吟はその本文を底本として拾穗抄を著したといふ事情が明白である。

前記高野博士の論文によれば、惺窩自筆日本書紀神代卷には、同じく自筆の萬葉集の歌二首が收められてゐる。この二首の歌は、仙覺本とも拾穗抄本とも異る本文を有し、訓に至つては到底比較も出來ない程の相違を示してゐるといふ。そこで我々が非常に興味深く感ずることは、右の二首ははじめから二首だけのものであつたか、それとも別に萬葉集全卷にわたる原本があつて、それから抄出されたものであつたかといふことや、拾穗抄のよつた惺窩の校本に對して如何なる關係をもつてゐるかといふことや、右二首の有する珍らしい本文と訓とは果して何處から來たものであるかといふこと等である。これ等の事情が明かになれば、萬葉研究史上に於ける惺窩の地位が益〻重きを加へるであらうが、現在の資料だけでは、何とも確實な斷言の出來ないのは遺憾である。

惺窩は、上述の如く、萬葉集に對して深い關心をよせ、相當見るべき研究業績をなしとげてゐるのであるが、彼は單に萬葉學者であつたのみならず、同時に萬葉的歌人でもあつたことは注意されねばならない。譚海に

先生の和歌は、萬葉の古風を好て詠ぜられたり。當時萬葉の風を好み詠ずる者多し。惺窩その俑を作たりと云べし。木下長

嘯子など、常に和歌の友にて往來の贈答おほし。

とあるによれば、惺窩は二條冷泉兩家の學風の最も流行した中世末期に於て、しかも彼自身冷泉家に生れた身をもつて、他に卒先して萬葉の古調を讃仰したのである。この事實は、今日の眼から見れば何でもないやうなものの、當時としては實に破天荒の事實である。尤も惺窩先生倭歌集その他に見える彼の歌は、必ずしも萬葉調とのみは云へないけれど、少くともその古調を愛好追慕したことだけは、右の記事によつて疑ふ餘地のない所である。

しからば、何故に彼は萬葉の風格を愛慕したか、それは彼の學問觀――學問に對する信條に起因するもので、きはめて重要な問題であるから、別に項を改めて考へて見たいと思ふ。

次に惺窩が日本書紀及び萬葉集と共に注意したのは土佐日記である。北村季吟は土佐日記抄に於て

京極黄門の御自筆をうつせる本にもとづきつゝ、又妙壽院眞名をくはへ給ひし本侍に、所々かはれる事あるをもしりへにならべしるし侍りて(下略)

と云ひ、妙壽院本奥書として、明應壬子仲秋候、亞槐藤原の署名ある識語を轉載してゐる。これ等によれば、惺窩は、明應元年の秋三條西實隆が將軍家藏貫之自筆の土佐日記を書寫した由の奥書ある所謂亞槐本の系統の本を底本とし、その本文に漢字をあてて、讀む者をして理解し易からしめたことが明かである。この妙壽院本は、現存諸本の形態より推すと、實隆自筆本系統の本文の傍に漢字をあてたもので、はじめから漢字交りに書き流されたものではなささうであるが、とにかく一種の註釋的性質をもつてをり、徳川初中期に亙つて世に行はれること甚だ少からざるものがあつた。寛永の刊本がこの本文によつたものであることは明かであるが、土佐日記註釋の首祖と稱すべき小野山隱士の土佐日記見聞抄も

諸本異アリテ假名ノアヤマリ字ノ多少アリト云ヘトモ北肉山人ノ自筆本ヲ本トシテ諸本ヲアツメ校合之義理相叶ヲ以テ取之者也

と云つて、この書の本文を最も重視してゐる。又水戸光圀の命によつて惺窩文集を編した人見卜幽は、その著土佐日記附註に於て、

註内云惺齋又云惺窩先生者世所謂北肉山人藤斂夫也、或人藏其手筆之本、余借之以爲附註之便。

と云つて、惺窩の説を先づ第一に參考したのをはじめとして、德川中期以後昭和の今日に至るまで、その恩惠と影響を受けない學者はほとんど無いと云つても過言ではない。

しかし妙壽院本に示された惺窩の國文學上の知識は、必ずしも深く廣く且つ確實であるとは云へない。本文の假名に當てた漢字にも、往々にして妥當を缺くものがあり、明かに誤解と見るべきものがある。又全體の態度も啓蒙的で眞に學問的であるとはなし難いけれども、土佐日記研究の創始者として、後世に甚大な影響を與へた點から見れば、研究史上特筆すべき業績の一と云はねばならぬ。

惺窩が、日本書紀、萬葉集、土佐日記等に對して深い關心をよせてゐたことは、彼が上代及び中古の時代と文學とを思慕してゐたためである。何が故に彼がさうしたかの理由については項を改めて考へて見たいが、とにかく上代の文獻に關して、彼が如何に注意を拂つてゐたかは、片々たる書簡——彼の書いた書信の何百分の一か分らないやうな少數の斷片を通じても、容易に推知することが出來る。例へば惺窩先生文集所收の林道春にあてた書簡に、

洞院左府所著名日鈔云者、足下所有三萬軸之牙籤有之否、拙所有之册、賀豐假而不返、今在東武數百里之地、雖於拙無用、長嘯子就拙借之、因及于此、復聞順德天子所述之禁祕鈔、足下有好本、勝能說向長嘯、然否、長嘯就拙借之、拙以一本與焉、

長嘯云、亥豕魯魚難分別、故以足下所有之本、欲校正之、如何(下略)

とあるによれば、彼は名目鈔や禁祕鈔を所持し、前者を賀古宗隆に、後者を木下長嘯に貸與したことが分る。又羅山にあてた書簡(三井氏藏)に

延喜式、敬軒祠堂記、承兌文章、幷以今晨昧爽、持附家僮去、未至華軒乎、不審、如彼儀式、雖未得全册、如使我周旋聖朝範圍之中、非亦足下之嘉惠乎、尙竢會次商確之日、謝辭不展布于此也矣、(下略)

とあるによれば、延喜式に對しても注意してゐたことが知れ、又道春にあてた書簡(三井氏藏)に

(前略)三代實錄返給候、又吳越春秋被寫之由、於我等滿足ニ候(下略)

とあるによれば、三代實錄等にも注意してゐたやうに思はれる。なほ、三井氏藏の文書中に、中臣祓訓解、神風記、和名抄、古今愚見抄、萬首和歌、五代集、勅撰和歌集、東鑑等に關する記事があり、これ等の和書に關する造詣も淺くなかつたことが察せられる。なほ又前記高野博士藏宗隆の書狀によれば、十帖源氏、休聞抄等の如き源氏物語關係書や、東鑑や、假名文字盡や、年代記や、徒然草等の貸借がなされ、彼の國書に對する注意の一斑を物語つてゐる。この中で徒然草は、惺窩の好んで愛讀し研究したものであつて、そのことはなぐさめ草の跋に、

(前略)此つれ〴〵草も天正の比までは名をしる人もまれなりしが、慶長の時分より世にもてあつかふ事となれり。丸は中院入道殿の御相傳うけ侍し上に、妙壽院のさま〴〵深き儀理を聞出させ給ひ、御物がたりありて、丸にも又こゝは何と心得たるぞ、かしこはいかに聞たるぞなどの給ひあはせらるゝにつきて、あなたの見たまひ出されし唐の古事と、丸がおもひより侍し古歌など、よく心のかよひたる事おほく侍し(下略)

とあるによつて知ることが出來る。

惺窩の文集には、林羅山や菅得菴の編したものの外に、水戸光圀が惺窩の子爲景の依賴によつて遺文を校正し、孫爲經の編纂を經て刻せられたものがある。後者には後光明天皇の勅序が賜はられたのであるが、先哲叢談の著者は、この事實を特筆して

夫元寬以降、奎運大興、文儒盛行、其著作布世者汗牛充棟、然未嘗一聞有至尊賜序、如惺窩可謂希世之榮耀矣。

と云つてゐる。この事は、必ずしも國文學者としての惺窩の地位に直接關係のあることではないと云へるかも知れないが、しかし彼が國文學者たる松永貞德、木下長嘯、中院通勝、角倉素庵等多數の友人門弟に圍まれた學者であるを思へば、全然國文學に無關係な記事とも云へまいと思ふ。

以上にのべたのは、惺窩の國文學研究に關する事實の二三についてである。これ等は勿論九牛の一毛にすぎず、この外、どれだけ多くの研究業績が堙滅したか、或はそれ等の業績を推知せしめるに足る文獻が散佚したか、或はその兩者がどこかに傳はりながらも、淺學寡聞な筆者の目にふれないのか、測り知れない。この貧弱なる資料の上から、惺窩の國文學若しくは國文學研究史上の地位を論ずるのは、いささか冒險ではあるが、さりとて今の所何とも致方がないから、假說的な意味の愚見を次にのべようとするのである。

三

惺窩の研究業績を、現存の資料——それもきはめてわづかな資料ではあるが——を通じて見た結果から云へば、大體次のやうな特色が認められるやうに思はれる。卽ち(一)非常に博學ではあつたが、決して雜學ではなかつた。(二)學問のための學問ではなく、修養のための學問であり、その學風には啓蒙的、教育的な傾向があつた。(三)上代文學に對して特に强い思慕と關心とをもつてゐたといふ三點である。

惺窩が非常な博學の人であつたことは、前にのべたやうに惺窩文集の跋文によつても明白であつて、再びここに繰り返す必要はない。彼はたしかに博學であつた。博學であつたが、しかし決して雜學ではなかつた。あらゆる知識は單なる知識に止まるのではなくて、心の糧になるものであつた。彼に於ては、學問の目的は人格の完成に在つた。人間を練る――それが彼の學問の究極の目的であつた。羅山先生文集に、林羅山が教を惺窩に請うた時の問答を記して

先生謂余曰、汝謂何以爲學、若求名思利、非爲己者也、若又以此欲售於世、不若不學之愈也、余聞而銘于心。

と云つてゐるが、この名利のために學ぶべからずといふ信條は、ひとり儒學の場合だけではなく、彼の學問生活のすべてに擴大し得られるものである。同じ書に讀書の本義について

又曰、讀聖賢之經書、以經書證我心、以我心證經書、經書與我心通融可也、故讀書之法莫近於此矣。

と云ひ、更に自己の識見を說いて

又曰、見地堅定而後可讀異端書、不爲其所搖奪、若見地不堅定、則其語易動而我見易搖也。

と云つてゐるのを見ると、惺窩は先づ第一に確乎たる自己自身の批判的精神を、最も尊いものとして強調してゐるやうである。慶長十六年にものした自警の語に

（前略）方今竊葩藻負訓詁之徒、犯名讀書、而假求勢利、萬卷百車、入耳出口、過服喪志、呰々倚言、我能讀書、所謂發家者歟、書以自警、且告玄東生。

とあるが如きは、學問に對する彼の態度と信念とを最も端的に示したものである。彼は煩雜なる訓詁、饒舌なる空論を排し、名利榮達の方便としてなされる學問を斥け、外部的な一切のものに動かされることなく、先づ内部的に不動なものを確立し、それによつてあらゆる外部的なものを公平に批判し得るに役立つやうな學問を重しとしたのであ

る。結局、學問は自己の教養のため、人格の完成のために營まれるべきものであつて、學問のためにせらるべき學問もなく、勿論榮達の手段としてせらるべき學問もないといふのが彼の信念であつたやうに思はれる。

惺窩の學問が博學であつたにかかはらず、支離滅裂な雜學に墮落しなかつたのは、それ等の雜多を醇化し、統一づける內部的なものが强く自律的に動いてゐたからである。一切の學問は、その內部的なものの光に照されて、生きた人格の內質として體系化され、生命づけられた。その內部的な原理とは純粹な儒教的理論であつて、これによつてあらゆる雜多が統一されたのである。徒然草の著者が、儒佛老莊神道その他有職故實に通じた博識の士であつたにかかはらず、一貫した人間道によつて一切の雜多を統一し得てゐるが如く、惺窩に於ても、孤立したる學問、思索と內省を經ずして歸趨をうしなへる知識は無用のものとして排斥された。彼が徒然草を好んで愛讀したのも、兼好の趣味や生活信條などと共通したものをもつてゐたからではなからうかと思はれる。

惺窩は內部的な原理として純粹なる儒教を重んじ、その純粹を冒瀆するやうな一切のものを排斥した。惺窩文集跋に

(前略)夫惟本邦儒術之行世久矣、古來講六經者惟夥、或局詞章訓詁之末技、未通聖賢之眞學、或借異端浮屠之僞教、以同儒學之一揆、名儒行墨者也、先生慨嘆、而發明性理、而四書六經、盡以程朱之意講之、攘斥佛老、而三綱五典、悉以聖賢之道教之、(下略)

とあるによつても明かであるが如く、彼は訓詁の末技に溺れて根本の精神を忘れることを警しめ、佛老をはじめ異端の說は斷乎として之を斥けたのであるが、所謂食はず嫌ひといふやうな無責任な態度は避け、排斥すべき理由を究明した上に於て、非を非としたのである。彼が道春に與へた書簡(三井氏藏)に

(前略)前次所告佛書、非今日急務、姑閣之、異書者先哲所戒、然亦知彼崖略、則不墮其術中、又學者可知者有在乎、如何。

と云つてゐるのによれば、彼は俗評に附和雷同することなく、排斥するにしてもその根據をつきとめ、信念によつて排斥することが出來るやうに、自ら進んで異書を研究したことが分る。

惺窩の學問觀が教養のための學問に在つたことは、その學風をきはめて人間的なものにし、その實績の上に大きな平板や安定や親しみを加へさせた。この點に於て、彼は學者である以上に大いなる教育家であつたと云へよう。橘泰が芝屋隨筆に於て

國朝の諸儒の論は、魯堂先生の御問源流に精しく論置れたり。護園諸子の著述ども、文章議論ともに行届たる事なり。しかれどもいはゆる立派なるといふ氣味あり、惺窩先生、藤樹先生など、少しも立派なる事はなく、只何となく德澤の薫はしき所は、格段の事なりと見ゆ。

と云つてゐるのは、教育家としての惺窩の面目を最もよく批評したものである。知識のための知識、論議のための論議でなく、人のための、修養のための學問と考へられた所に、高い意味の啓蒙性が認められる。慶長十年七月道春にあてた書簡に

(前略)今適有人事之暇、欲加倭訓於馬史、其意在將借足下所藏之本(下略)

とあるによれば、彼は史記に和訓を施して一般のために讀みやすからしめようとしたらしい。有名な千代茂登草は、齡六十にあまれる母のために、儒道の大要を知らせようとして、特に假名文で平易に書き下したものである。所謂土佐日記妙壽院本は、この日記を廣く衆人に容易に理解させるために、本文の假名の傍に漢字をあてた一種の註釋書であるが、我々はこれ等の中に、共通した啓蒙的性質を認めることが出來る。又惺窩先生倭歌集には、君臣之事、父子之事等十ケ條の解が收められてゐるが、これは後陽成上皇の院宣によつて上つたもので、ここにも教育家としての惺

窩の面目が躍如としてゐる。元來啓蒙といふことは決して卑俗といふことではなく、むしろ豐富なそして正確な知識と體驗との單純化である。我々は近世國文學及び國文學研究史上の先覺としての惺窩の學風の中に、この大きな指導性と啓蒙性とを見出し得ることを興味深く感ずるのである。

最後に考へて見たいのは、國文學者としての惺窩が上代文學に關心を抱いてゐた理由についてである。彼が上代及びその時代の文學を思慕したのは、やはり彼の學問觀に出發してゐると思はれる。彼が純粹なる儒道と考へたのは、漢儒を斥けた宋學であり、更に原始儒教である。羅山先生文集に收められた惺窩の語錄に、

先生謂余曰、嗚呼不生於中國、又不生於此邦上世、而生於當世、可謂不遇時也(下略)

とあるのを見れば、彼は上代に生れなかつたことを遺憾としてゐる。これは彼が本朝文粹を評して「氣象溫厚、又今人所無、可愛可敬」と云つたのと同じ精神、卽ち中世的不純とドグマを排斥し、本源に復歸することを希求する精神の顯著なあらはれと見るべきである。ここに我々は、彼が中世的なものに曇らされない上代文學としての日本書紀、萬葉集、土佐日記等を愛好し、かつこれ等を研究するに至つた必然的な理由を見出し得るのである。

ここで特に惺窩のために辯じておきたいことは、前揭の語錄中に「不生於中國云々」とある數語のもつ眞意である。彼がここで「中國」といつてゐるのは、聖賢の道の行はれる國としての中國の意味に相違ない。卽ち現實の支那そのものをさすのではなくて、聖賢の國を假想して、かつて偉大なる聖人を生んだ國を假りに中國とよんだのである。嚴密に云へば、カントの永久平和の觀念のやうに、聖賢の道の行はれる國は現實的には恐らく存在し得ないであらう。彼の云ふ「中國」は觀念の國である。理想としてゑがかれた幻影の世界である。この文句から、現實の支那と日本とを對立せしめ、この數語を解釋して日本を卑下自嘲したのであると速斷する人がもしありとすれば、それは彼の眞意

を誤解すること甚しいと云はねばならぬ。戰亂相つぎ、道義すたれた室町末期の世相を背景として惺窩を考へる時、彼の眞意は自ら了解される筈だと思ふ。ことに惺窩は右の語錄に自ら批評を加へて

惺窩批曰、彼小人亂世之於我也礪也、涅也、他山之石也、皆勵我者也、其動心忍性亦在茲、吁在己不足憂、在他不可欷歔哉。

と云つてゐるが、この一文によつても彼の立場は容易に理解されよう。

惺窩がわが上代及び上代文學を思慕したといふ事實は、近世思想史上に於て看過してはならない問題である。復古精神は、近世思想の重大な一面であるが、普通それは德川中期に於て賀茂眞淵等の主唱する所と云はれてゐる。元來復古精神は、儒佛二教によつて固定せしめられた中世的獨斷論や、根强い傳統や因襲に對する反逆に出發したものである。惺窩の時代は、なほ中世的社會組織と、中世的思想形態とが、世を蔽うた時代である。惺窩は、儒教に基き、可能の限界に於て純粹を求めたのであつて、眞淵等の復古精神とはその動機を根本的に異にしてゐる。けれども、中世的不純を排斥して、至純なる上代を慕ひ、素朴なる古道を重んじた點に於ては、全然同一であつて、この點よりして、彼の復古主義は近世精神の先驅をなすと思はれるのみならず、近世精神はむしろ惺窩の復古主義を是正し變改したものであるとも解せられないではない。

近世中期の文藝復興については、多くの社會的原因があげられるであらうが、かかる思想の成長結實は、一朝一夕になされるものではない。中世思想から、近世思想へと轉移して行く過渡期的な、しかも必然的な存在として、又近世精神の先驅として、惺窩の復古精神は輕視されてはならない。さういふ意味で、國文學的視野から從來全く考慮に置かれなかつた惺窩といふ人物は、近世國文學の大いなる先覺として改めて愼重に考察されるべきであることを主張して、この小稿の筆を擱かうと思ふ。

近世古典観の一面

——室鳩巣にふれて——

島崎乾太郎

一

熊澤蕃山は、切支丹に就いて

或問、吉利支丹の法を斷絶せん事はいかゞ、云、吉利支丹は人心の惑と民の困窮によりて法を廣むるものなり、天下文明の敎ありて、人心惑解け仁政行はれて困窮止ば、弘めよといふ共あたはじ、其證據には唐土は聖賢の國にて、文明なれば、制禁はなけれども弘むる事あたはず、蛇のみちはへびがしるといへる諺のごとく、吉利支丹ならでは吉利支丹は知らずといへり、今の寺請は何の用にも立たず、殊の外なる國々の費也、九州にてさし來るものをとらへに行たる者のいへるは、常人よりは佛寺を信じ、後世願ひと見ゆる者也、よもかれにてはあるまじと所の者共も思ひ、其身も申わけして歸らんといひて出れども、奉行所にゆきては證據ありて陳ずる事あたはずといへり、其上此吉利支丹請にて、不義無道の出家漫り、佛法の實は亡びたるといへり、斷絶の仕置くはしき事は、長々しければ略す、仁政行はるゝ時を待つのみ（大學或問、十五）

と言つてゐるが、蕃山に限らず、荻生徂徠にしても新井白石にしても、その他近世の儒學者の中、切支丹に對する關心を多かれ少かれ拂つたものはあるのであるが（二、併しこのことは、近世後期の司馬江漢などは稍異例となるにしても、一般に近世の儒學者が、切支丹の眼鏡で日本の歴史と社會とを觀たことを意味してはゐない。その代り彼等には

又別な眼鏡があつた。言ふまでもなくそれは儒學の眼鏡である。さうして日本古典文藝は、これら近世儒學者によつても亦考へられてゐるのであつて、近世古典觀の主流をなしてゐる新興國學者の見解と關聯させて、補足的に是を見てゆくならば、そこには近世古典觀の興味ある一面が窺ひ得られる。換言すれば、近世封建社會の知識層としての學者群による典型的な古典觀は、近世の國學者と儒學者との見解を中心としてゐる。

この兩者の中、もと〳〵近世儒學者は、その研究對象を直接に日本古典に置いてはゐないのであつて、その點前に述べたやうに國學者側の古典觀に比較すれば、儒學者側の見解は一應傍流的な存在となるのであるが、更にもう一つこれら儒學者の日本古典觀に關聯して、豫め考慮しておかなければならぬ問題としては、これら儒學者の學的・社會的立場の相違と言ふことがある。近世儒學の學派は、官學朱子學派を初めとして種々に分れてをり、その區分に就いても今日に至るまで諸說を見、近年にも西島醇の「儒林源流」などがあるが、更に柴野栗山の「上近衞公書」(三十輻第四)などでは、因襲的な近世公家の一部にあつては、近世後期に於て猶舊註が墨守されてゐたやうなことも知られるのである。併しこれら近世儒學の各學派を、日本古典に關係させて見る場合には、近世の社會的進展に伴つて展開された儒學上の見解の相違は、必ずしも直ちに移してこれら各儒學者の日本古典觀の上にも、同樣の相違を發生させて許りはゐないのであつて、近世儒學者の古典觀を考察する上からは、別な觀點も考へられ、單に學派の相違のみに常に拘泥する必要はなからうと思はれる。それよりも寧ろ、一般には近世儒學者の學的・社會的立場は、國學者側の立場に比較する時、その間親疎の度合に於て種々の相違はあつたにせよ、猶近世封建社會の政治的支配勢力であつた德川將軍を中心とした武家治者群の社會的立場に依據してをり、それを後景としてゐたことが注意されねばならぬ。從つて近世儒學者の古典觀は、いづれを問はず或る意味では武家的な近世古典觀となるのである。さうしてこの意味からす

れば、近世國學者側の古典觀は、言ふまでもなく被治者群主として町人的なそれになるのであるが、同時に又一面には京都朝廷を中心とした堂上公家の一群の見解を、別途に更に觀點を新にして代辯してゐるやうな形にもなつてゐるのであつて、更にこの國學者と儒學者との近世古典觀は、是を公家と僧侶とを主とした貴族的な中世古典觀に比較するならば、そこにはそれ〴〵發展が見られる。

註一　井野邊茂雄「耶蘇教觀の變遷」（幕末史の研究）

二

上に述べたやうに、近世古典觀の一面としての儒學者側の見解は、一般には近世武家治者群の社會的立場に基本的には通ずるものがあり、更にそれを根柢として、各儒學者の個性、環境、學的・社會的立場の相違により、同じ儒學者側の間にあつても、その對象とした古典とそれに就いての見解の上では、可なり著しい差が現れてゐる。それらの中、こゝでは近世中期の官學派の代表の一人、木下順庵門下の室鳩巣の古典觀に就いて少し許り考へてみようと思ふ。その爲に先づ、近世武家治者群の古典觀の基本的と思はれるものゝ一つを注意してみるに、松平定信は「閑なるあまり」で、東照宮上意として

三州の主たる時は、近國に用心せしぞ。關八州の主たる時は、東海、東山、北陸道の治亂を考しぞ。今又日本の主となりては、諸國の治亂をきかするぞ。仔細は異國亂るゝに、日本治りたりとても油斷するは、東山義政の茶の湯、大内義隆の學問、今川氏眞が歌道ぞ。いまは諸異國も治平なれば、日本の政道までなり。若し異國亂るゝ時には、其時にあたりて、よき武將をえらび、九州におき、異國をおさへさすべし。

と言ふやうな、好文の主としての家康の半面を推察させるやうな見解を掲げてゐるが、是は姑く措くとしても、近世

前期の治者群の有力な一人として、晩年には二代將軍秀忠を輔翼した本多正信の、學文に就いての次の見解は注目される。

唐にても無智なる王は老子の道を信じ、又天理を知らざる儒者を信じて道に迷ひ、又佛法を信じて護摩をたき、經をよみて祈る、みなこれまいすの身すぎのために、しおきたる事也、不可信、佛の心にもちがひたり、但伊勢天照大神をば可信、則天理也道にかなふたる神也、今學文して心の迷をはらさんとおもはゞ、師匠の無欲にして正路なる人を能撰びて、四書五經、通鑑、史記、漢書の內の理斗を先可聞、いま日本に天理を得道したる人なし、師匠のおしへに隨て學文をして、心あしくなりたる、多く見及たり、これは師匠の教樣あしきに依てなり、師匠と大臣とを撰ぶ事、天下の大事也、古今、源氏、伊勢物語の類、高上に云なしたれども、國政の爲とはならず、却て戀のなかだち、あそびのたよりとなりて、徒に心をうごかす類なるべし（本佐錄）

是によれば、儒學を重んじ老佛を排撃し、伊勢神宮への信仰を表明すると共に、古今集・伊勢物語・源氏物語によつて代表される平安時代の古典の類は、國政の見地からはひと先づ否定されてゐるのである。こゝには近世武家治者群の一人による最も政策的な學文觀古典觀の一片を見出し得る。

併し近世封建社會の歷史は永い。從つてその社會的進展につれて、武家治者群の有力者中にも亦、古典に就いて肯定的見解を抱いた者は生じてゐる。一般に近世を通じて好文の主と言はれてゐる者も、家康以後近世後期の「丹鶴叢書」の編者紀州新宮の城主水野忠央の頃に至るまでには、可なりの數に上る。女性にしても、七代將軍家繼の生母月光院などは、「德川實紀」有章院殿御實紀附錄に稱揚されてゐるところである。それらの中殊に前期の德川光圀は、學藝の愛好者としては顯著であるが、更に中期以後に於て自ら直接に古典觀を殘してゐる者として、田安宗武・松平定

信は著明である。さうしてこの定信の「花月草紙」を中心とした肯定的な古典觀などは、本多正信の見解と明らかに對立してさへもゐる。併し猶これら肯定的な古典觀も亦、武家治者群の社會的立場を自ら否定して現れて來てゐる見解ではなく、その限界内で近世封建社會の進展がもたらした特異な見解と見ることが出來るのである。それ故本多正信の「本佐錄」に現れたやうな見解は、簡略ではあるが近世武家治者群の見解としては、基本的なものゝ一つであつて、近世儒學者側の古典觀は、この種の見解を樞軸として、より複雜に展開されてゐると考へられる。それらの中で室鳩巢の古典觀は、この種の武家治者群の見解の近世中期に於ける典型的な代辯であり、或る程度その精細化の一つとなる。

三

「駿臺雜話」によつて鳩巢の主なる古典觀を見れば、是は便宜二大別される。一は古今集・伊勢物語・源氏物語を中心とした古典觀であり、他は徒然草觀である。この他に同書には、八代集時代以後の和歌として太田道灌の慕景集の歌、散文としては源平盛衰記・太平記・神皇正統記等に就いての短見も見られるが、これらに就いては省略し、又こゝでは鳩巢の古今集・伊勢物語・源氏物語を中心とした古典觀を主として考へ、その徒然草觀や又別種の古典に就いての他の儒學者の見解は、後の機會に讓らねばならぬ。

　この鳩巢の古今集・伊勢物語・源氏物語を中心とした古典觀で初めに注意される問題は、古今集を中心として新古今集に及ぶ八代集時代の和歌が一應肯定され、伊勢物語・源氏物語を中心とした平安時代の小說物語が全く否定されてゐることである。この點本多正信の見解に比較すれば、或る程度の精細化が見られるが、先づ鳩巢の古今集を中心として八代集時代の和歌觀に就いて考へてみる。一般に詩と和歌とは、同じく性情を吟詠するものとする考へは、近世

儒學者にほゞ通じた見解であり、詩を作ると共に自ら和歌を詠んだ儒學者も、藤原惺窩以後林述齋の頃に至るまで可なり見られ、歌集の註釋的研究としても五井蘭洲述（加藤景範書寫）の「古今通」（六卷）などは、「定家・顯昭・榮雅・契沖等の註を參考して、近世儒學者の研究としては最も纒つたものであり、その他林羅山の「羅山文集」貝原篤信（益軒）の「和歌紀聞」荻生徂徠の「和歌世詁」等を始め、古典和歌に就いて肯定的な見解の述べられてゐるものは多い。このことは近世儒學者が、詩經から唐詩に及ぶ詩を中心として、又或る場合にはそれ以後の詩にもわたつて、他の支那戲曲小說の類に對するとは全く別途に、深い嗜感を持つてゐたことゝ併せ考へられる。さうしてこの近世儒學者側の古典和歌觀の中、萬葉集を中心として尖銳な復古主義を抱いてゐた太宰春臺や堀景山の見解などは、新興儒學者としての反中世的な地下的色彩を濃厚に現してをり、或は啓蒙的な貝原益軒などは、比較的に古典和歌を上代・中世に拘らず一般的に肯定し、又特殊的には中世和歌に就いても三輪執齋には「執齋先生雜著卷之一」に藤原長親に就いての小見があり、近世後期の菅茶山などにも「筆のすさび」の一節では、漠然とではあるが中世和歌への反省が現れてゐるやうに、その間多少の相違がある。

　これらの間にあつて鳩巢は、前に述べたやうに古今集を中心として八代集時代の和歌を一應肯定してをり、萬葉集までには遡つてゐない。このことは詩經の芣苢の詩に比較して、和歌で朝廷和平群臣閑暇のさまのおもひやられて感深い一首と言つてゐる

　もゝしきの大宮人はいとまあれやさくらかざしてけふもくらしつ

が新古今集の歌であつて、萬葉集卷十の歌でないことによつても知られる。又後世の和歌に就いては

　但此ごろの歌は、あたらしくいひいでて、一ふしをかしくきこゆるはあれど、こと葉の外にけしき覺えて、あはれふかきは

なし。いかでか人の心を感興するの益あるべき。是も晩唐以後の詩のごとく、詞にのみもとめて情に本づくといふ事をしらぬなるべし（駿臺雜話卷五）

と言ひ、この範圍内で鳩巢は、人情を盡すものとしては和歌は詩に及ぶべきものではないが、猶その情に發する點で通ずるものゝあることを認めて、この意味から和歌には感興の益があると言ひ、又吟詠をたすけ性情を養ふ方便ともなると觀てゐるのである。さうして古今集の歌は、多くは一倡三歎するにたへると言ひ、例へば

もゝ千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく
春の夜のやみはあやなし梅のはな色こそ見えね香やはかくるゝ
世の中にさらぬわかれのなくもがな千世もといのる人の子のため
風ふけばおきつしらなみたつた山夜半にや君がひとり行くらん
忘れては夢かとぞおもふおもひきや雪ふみ分けて君を見むとは

等を擧げて短評し、又殊に自らの好んでゐた一首としては、別に源實朝の

武士の矢なみつくろふ籠手の上にあられたばしるなすのしの原

を稱揚してゐる。更に四季の歌としては八代集の中から

久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ
朝日かげにほへる山のさくら花つれなくきえぬ雪かとぞみる
うちしめりあやめぞかをるほとゝぎす鳴くやさつきの雨の夕暮
庭の面はまだかわかぬに夕立の雲さりげなく出る月かな
夕されば門田のいなばおとづれてあしのまろ屋に秋風ぞ吹く

秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月の影のさやけさ
津の國の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風わたるなり
駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

等を擧げて秀歌とし、これらを吟詠すれば襟懷を淸くし塵想をけすと言つてゐるのである。

但し鳩巣はこれらの和歌を、單に藝術的觀點からのみ肯定してゐるのではなく、その根柢には官學派の近世儒學者としての道德的觀點が潜んでをり、從つて同じく古典和歌に就いての肯定的見解であつても、是を國學者側の、町人的な立場を後景として藝術的觀點から肯定してゐるやうな見解、一例として本居宣長の「古今集遠鏡」の見解などと比較すれば、その肯定の仕方には微妙な區別のあることは注意されねばならぬ。例へば鳩巣は古今集の「春の夜のやみはあやなし」の歌を短評して、「此歌を吟ずれば、有德の不レ可レ揜の誠を感ずべし」と言つてゐるが、これなどはその適例となる。それ丈戀の歌に就いての見解などは、避けられてもゐるのであらうが、併しこの限りでは、これら古今集を中心として八代集時代の和歌は、室鳩巣によつても猶肯定に値してゐるのであつて、そこには文藝としての和歌の特殊性も考へられて、この點注意させられる。尙前に引いた在原業平の惟喬親王を訪ひ參らせた時の「忘れては夢かとぞおもふ」の歌に就いては、鳩巣のみならず荻生徂徠も推稱してをり（獨語）、近世後期に於ても石川安貞（香山）の「聖學隨筆」（卷上）などに、同樣の見解がある。

更に鳩巣は古典和歌に關聯して、古今集序の六くさの歌の分類と詩の六義との簡單な比較をも試みてゐるが、是は國學者側からの比較論としての賀茂眞淵の「續萬葉集祕說」香川景樹の「古今和歌集正義」などの見解に、對應してゐることを一言するにとゞめておく。

四

以上のやうに、鳩巣は古今集を中心として八代集時代の和歌に對しては、一應是を肯定する見解を述べてゐるが、これが伊勢物語・源氏物語を中心とした平安時代の小說物語に對しては、全くの否定的見解に變る。一般に詩以外の支那古典文藝に就いての近世儒學者の關心も、林羅山の「怪談全書」以後齋藤拙堂の「拙堂文話」に至る頃迄の間には多少散見され、支那小說の飜譯の上でも近世儒學者中岡島冠山・岡白駒・都賀庭鐘などは著明であるが、猶是を近世儒學者の詩への深い嗜感に比較するならば、はるかに趣を異にしてゐる。さうして小見ではあるが比較的に纒つた論として、井上金峨が「匡正錄」で述べてゐる支那古典小說觀などは、近世儒學者の多くに通ずる見解と考へられるであらう。是などによつても詩以外の支那古典文藝殊に小說が、一應道德的には否定されてゐるのであるが、近世儒學者の和歌以外の日本古典文藝殊に平安時代の小說物語に就いての見解も亦、一般的には否定的であり、唯特殊な場合に、例へば伊勢物語に就いての貝原益軒・五井蘭洲等、源氏物語に就いての熊澤蕃山・安藤爲章・湯淺常山等のやうに、獨自の學的・社會的立場から道德的解釋を施すことによつて、是を肯定してゐる見解を見るのである。この二種の見解の中、否定的見解を抱いてゐた主なる者としては、鳩巣以外に林羅山・山鹿素行・藤井懶齋・井上金峨・山片蟠桃・帆足愚亭等も擧げられると思ふが、これらの間にあつて、鳩巣の見解は最も著しい。

此程我國の物がたり草子をよませて承るに、事實を記し候書、三鏡、榮華物語などの外は、いづれも取るにたらぬものにて候。大かたはあまき佛ばなしにて、あきはて侍れど、それは世の流弊なればいかゞせん。其外、ともすれば好色のさたにて聞くに忍びざる事おほく、中にも伊勢、源氏物がたりなどは、年弱なる男女には、禁じて見すまじき物なり。淫亂を導く媒ともなりぬべし。しかるに、縉紳家に、源氏物語を我國の寶といへるは、いかなる故ともしらず。定めて倭語の妙を得たる

に心醉しての事にやあらむ。いはゆる庶子の春花を採つて、家丞の秋實を忘るゝ也(二)。それに、近世此物語を註釋し講說して、毛詩に淫奔の詩を擧げて勸懲をしめすごとく、人の戒世の敎とするといへるは、俗語にいふ杓子定木なるべし。いかにとなれば、二南は修レ身齊レ家の本なり。雅頌は論レ道求レ德の辭也。國風はもとより里巷の男女各言レ情の詩なれば、正もあり邪もあれども、其邪といふも、媒介によらずして淫奔するといふばかりにて、いづれも后妃を盜み繼母寡嫂に淫するやうの事やある。又伊勢、源氏のごとく、邪淫の事のみを始終いひ盡してやむにはあらず。よりて、正を見てはみづから勸めて邪を見てはみづからこらすぞかし。伊勢、源氏は、いはゞ長恨歌、西廂記などの品にて、其冗長にして醜悪なる物ぞかし。然るに、聖人垂レ教の書に比していふは、誠に氷炭薰蕕をひとしうするなるべし。昔より、我國釋教世に行はれて、佛につかふるより重しとするはなく、荒淫俗をなして、色に耽るより樂しとするはなし。それ故に、當時あらはしぬる物語もこの二端をしるすを高致とするならし。さて自餘の記しおく事も、多くは奇怪妄誕の談ならねば、俳諧鄙陋の說なり。ひとつとして義理にわたる事なし（駿臺雜話卷四）

是によれば鳩巣は、歷史物語である三鏡・榮華物語等を別として、その他の小說物語の類は、詩經との比較にも及んで全く是を否定し去つてゐる。さうしてこの見解を鳩巣の八代集時代の和歌觀と對比するならば、そこには同じ儒學者によつて同一時代の古典に對する、肯定的と否定的との二つの對立する見解が述べられてゐるのであつて、この點は道德と詩歌と散文との關係の問題の上からも興味あるものがある。是に就いて少し考へておかうと思ふが、但しこの問題も、儒學者側の古典觀と國學者側の古典觀とではその成立條件を異にしてゐるから、この兩者の場合を一樣には考へられない。それ故こゝでは儒學者側の見解を主として、この問題の一面を考へてみれば、伊勢物語・源氏物語を中心とした小說物語も、同じく情に發してゐることに於ては、八代集時代の和歌と變りがないのであるが、文藝形態の上から見て一般に小說物語は、是を和歌（殊に短歌）に比較すれば、同じく情に發してゐるとは言つても、そこに

は時代・社會・階級・言語・道德・風習等換言すれば廣い意味での社會的なもの丶影の、射込む餘地が一層多い。從つてそれ丈又古典小說物語の類は、社會的なものを異にしてゐる後世の一部の學者群或は讀者層には、古典和歌の類に比較して、一層疎縁であり理解し難くもある場合が、一つ生じて來る。のみならず時には全く相反撥する。後世の道德或は廣く社會的なものに對して、古典和歌と古典小說物語とでは、文藝形態の上から見て、一つの場合として或る程度かやうな區別が考へられると思はれる。この點散文詩的な作品となれば又、形態上から見て和歌と小說物語との兩要素を含んだ、一種の二重性を持つ場合が生じて來る。是に就いてはこ丶で一例として、鳩巢と荻生徂徠との伊勢物語に就いての見解を比較して考へてみるに、徂徠は伊勢物語に就いて

伊勢物語は、うたの心を說きたる物なり。事のあるなしは、論ずべからず。抄物のやうなる事して、歌の心をとかんは、うたをしらぬ人のすることなり（南留別志）

と言ひ、又太宰春臺が徂徠の言として「獨語」に引いてゐるところによつても、徂徠はむしろ伊勢物語を、その和歌的要素を主として好意的に觀てゐる傾きがあり、鳩巢は又趣を異にして、たとひ既にその和歌觀で見たやうに、古今集に入つてゐる伊勢物語中の歌を幾首か肯定してゐるにしても、猶一般的には伊勢物語を、その小說物語的要素を主として源氏物語と一つに合せて、古今集とは區別して是を否定する方に傾いてをり、徂徠・鳩巢のこの二人の近世儒學者の見解の比較によつてみても、伊勢物語のやうな或る意味で散文詩的な作品には、一種の二重性のあることが考へられるのである。

かやうに考へて來れば、近世中期の官學派の代表の一人、室鳩巢の學的・社會的立場からは、古今集を中心として八代集時代の和歌に對しては、詩への深い嗜感と並んで一應共感が見出されるとしても、伊勢物語・源氏物語を中心

とした平安時代の小説物語の世界は、全く相對立するものである。換言すれば、この鳩巣の立場とこの古典小説物語の世界との社會的なものゝ相違は、絶對的である。こゝに近世儒學者側の平安時代の小説物語觀の中、否定的見解として典型的なものゝ一つである、鳩巣の小説物語觀が生じてゐると見ることが出來る。さうして是は本多正信の見解とも通じてをり、近世封建社會武家治者群を直接的に後景とした古典觀の一つでもある。

終りに源氏物語觀にのみ限つて一言附加へておけば、この鳩巣の見解に對して、儒學者側に於ても、前に述べたやうに別に熊澤蕃山・安藤爲章・湯淺常山等の見解があり、又國學者側では、伊勢貞丈の「安齋隨筆」（卷之七）の見解などは比較的に鳩巣に通ずるものがあるが、本居宣長の見解に至つては言ふまでもなく明らかに是と對立し、この鳩巣と宣長とに於ては、近世源氏物語觀の兩極が見出せる。さうして現代はこの兩極の意味に就いては、再考察の必要に迫られてゐるやうに思はれる。

註一　「庶子の春花を採つて、家丞の秋實を忘るゝ也」と同様の文字は、享保五年十二月幕府に進獻せられた大日本史には附せられてゐたと言はれてゐる論贊にも、「秋實を遺れて春華を攬るを歎ず」（大日本文庫、大日本史列傳贊藪・卷之五・歌人傳贊）とある。駿臺雜話は享保十六年（西暦一七三一）の雜話を書集めて同十七年秋に脱稿されたものである。

上田秋成の靈語通と德川宗武の假名遣說

橋本進吉

上田秋成の著靈語通假字篇は、契沖以來の古典に基づく假名遣に對する反對說として、以前から國語學史上に注目せられてゐるが、これは、契沖の說にも又定家假名遣にも拘はるべからずとする、一種の假名遣否定論であつて、積極的主張に乏しいのに反して、秋成が自說の據る所として同書の卷頭に擧げた或御說は、窮極に於ては假名遣否定論に歸するにしても、我國古代に於ては假名を發音のまゝに用ゐたが、後に音が變じて假名と音との不一致を生じた事を認め、「假字は言語を聞がまゝに書して共假字のまゝに讀むぞ本なる」と主張し、少くとも理論上には表音的假名遣の正當な事を認めてゐるのであつて、この點に於て甚異色ある假名遣論として近來特別の價値を認められるにいたつた（岩橋小彌太氏の靈語通論、木枝增一氏の假名遣研究史など）。然るにその或御說が何人の說であるかについては、從來種々の說があつたがまだ何れも確實なものと見る事は出來なかつた。私はこの問題について聊か明らめ得た所があると信ずるので、左に之を開陳しようと思ふ。

まづ從來の諸說を見るに、岡本保孝の靈語通砭鍼には

呵刈葭にて考ふるに田安中納言殿悠然院なるべし。

とあつて、德川宗武(田安家)であらうとしてゐるが、これは、本居宣長の呵刈葭後篇(天明七年成)に

(宣)田安中納言殿の御問、藤原美樹の答といふ物は、共に他人の僞作にはあらざるか、疑はしき事ども多し。よく〳〵たゞし給へ。

(秋)假字問答は、徃年美樹子に遇し時借シ與へられしを寫藏したるなり。御問の起りは、魚彥が古言梯の發端に美樹のいはれし言を見そなはしての事なりと談ぜられき。さらに他人の僞作にあらず。美樹かたじけなくも御名を犯すべからず。秋成又師名を僞はらず。是は問答ともに淺學の所爲なりとの隱語なるか。直くあらはにこそうけ給はるべけれ。

とあるによつて推測したものであらうが、我々はこの呵刈葭の文によつて、宗武が假名遣に關して意見をもつてゐたらしい事は推察出來るけれども、靈語通の或御說が卽ちそれであると斷定するのは早計である。

保科孝一氏は

一體この靈語通の說わ「或御說」とゆーものお敷衍したものであるが、この御說とわ、何人の說であるか、明に知ることが出來ない。萬葉集見安わ、堯以法印の作であるから、あるいわ堯以一派の說であるかも知れないとゆー人もある。けれども、これわ、堯以法印の說でなくして田安中納言宗武の說であるとゆーことが、岡本保孝の書入本に見えておる。これわいかにも確な說である樣である。(國語學史第四編第二章一九〇頁)

といつて、堯以法印の說であるとの說を擧げながら、やはり宗武の說とする方を正しいとするに傾いてゐられるやうである。しかし、堯以法印云々の說は、萬葉集目安(萬葉集見安ともいふ)に秋成の弟子秦永良が補訂を加へておいたものを永良の歿後秋成が校訂して刊行した萬葉集目安補正(寬政八年成)の初に書した秋成の文に、目安の著者について、堯以法印の作であるといふ說がある事を述べてをり、その後の凡例ともいふべき部分に、靈語通と同樣な假名遣說を述べた中に或御說を引いてゐるが、目安の作者と或御說との間に何かの關係があるやうな口吻も見えないの

を見れば、固より信ずるに足らぬ説であり、宗武説も、保孝の説によつたものであるとすれば、未だ確説とするわけには行かない。(保孝の書入本といふのは何であるか不明であるが、或は前述の靈語通砭鍼であらうかと思はれる。果してさうであれば確説とし難いことは前に述べた通りであり、またそれ以外のものであるとしても、右の文に述べられただけでは、我々は直に之を信ずる事は出來ない)

岩橋小彌太氏は、「靈語通論」(雜誌藝文第十四年第八號所載)に、右のやうな諸説を擧げて、何れも確たる根據がないと斷定した後に、自己の意見として、

私は、同じく證據は無いのではあるが、靈語通の意見が胚胎したのは、秋成が上京後の事だとすれば、これは寧ろ京都に居る卿搢中の誰かだと考へる事が穩なのではあるまいかと思ふ。

と述べてゐられるが、その後發表せられた靈語通餘論（雜誌藝文第二十一年第二號所載）には、秋成が靈語通に見るやうな假名遣説を懷いたのは、必ずしもその上京後の事ではなく、天明六七年頃の本居宣長との論諍に、既に大略同傾向の意見が見えるから、以前からであつたかも知れないとし、五井蘭洲の蘭洲茗話上に

今のいろはと云物は護命弘法二人のつくれる長うたのごときなり。是にて日本の詞みな〳〵つくすといふはおぼつかなし。いかんとなれば先今時云かなづかひといふをしばらく置て、人の口より出る聲にて此長歌をよむにハホヘヒムケフ此七字の聲なし。ワふたつ有。ヲ四つあり。エイ各三つあり。又ケフのふたつを合せたる聲あり。是にてことは皆ありといふべけんや。是よりかなづかひといふ事をはじめて、おくのヲくちのヲなどといふ事をいひ出せり。あまねく人にしみこみていぶかる人なし。口より出る聲と文字に書るとくひちがへり。口にはいろわといひて文字にはとかく類なり。いろわと書は、わかよのわと同じ聲出る也。唇舌牙齒喉のたがひありといはゞ、四十七字字々みなしかり。この數字にかぎるべからず。

とあるのを引用して、これは靈語通の意見に近く、その傾向は大略同じといつていいとし、しかし、靈語通の或御説

が即ち五井蘭洲の說であるといふのではない。さればといつて、この兩書の間に全く關係が無かつたと斷言するものでもなく、或御說が蘭洲の著書でなかつたらうかとの疑問を全く否定するものでもないと說いてゐられる。とにかく、岩橋氏の說も、唯推測にとゞまつて、確證あるものではない。

かくの如く、靈語通の或御說が誰の說であるかについては諸說紛々として歸着する所を知らない觀があるが、私は、疑もなく德川宗武の說であると斷定してよいと思ふのである。それは、玉函叢說の中に、或御說と同樣の說が見えるからである。

玉函叢說は田安中納言宗武が年來近侍のものに筆記させておいた考說の草稿を、その歿後、嗣子治察が集錄させたものであつて、安永六年二月二十二日の序文にその由來が記してある。全部八卷で、別に宗武壯年の頃の著作を集めて附錄としたものがあり（附錄はもと二卷であつたやうであるが、今は或は合せ或は分つて三卷としたものが多い）、又天降言（宗武の歌集）や宗武の年譜等を附卷として加へたものもある。

玉函叢說に收めた說はすべて六十五あつて、大部分は有職故實に關するものであるが、中には萬葉集の訓釋に關するものもあり、假名や音韻や言語に關するものもある。言語に關するものとしては、女房詞を解釋した「草むすび」の如きも、この種の研究として珍しいものであるが、特に我々の注意をひくものは第四卷の初にある假名や音韻に關する五篇の文であつて、その題目は、次の通りである。

五十連言の辨

假字大本

和八以比惠邊遠保の事
伊爲於烏音の事
清濁音の事

試にこれ等の文を靈語通の或御説と比較するに、「五十連言の辨」は靈語通の「御國の五十連音こそ」より「おのづから罪得てんかし」に至る部分にあたり、「假字大本」は「假字は言語を聞がまゝに書して」より「これ御國のやすらかなる風俗也」までに當り、「和八以比惠邊遠保の事」は「和と云にはの假字を書」より「其比より後なる事明らけし」までに當り、「伊爲於烏音の事」は「伊ハ片かなに用ひられて」より「義かなひがたし」までに當り、「清濁音の事」は「言語に清濁あり」以下の文に當るのであつて、單にその説が同一であるばかりでなく、語句までも大概一致し殆ど同文といつてもよい程である。今その例として五十連言の辨の最初の部分と靈語通とを對照して擧げれば次の通りである。

〔玉函叢説〕

五十連言の辨

皇御國の五十連言こそえもいはずあやしきものにはあれ。神の大御代のことしらるゝも此有ばなり。さるはことばをしも延約通はしいふなるも是にもれねば也けり。はた五十連といへど其品は四十四言なるを、以を今二ッ宇をいま一ッ惠をいま二ッ遠を今一ッくはへて五十連言とはなせるなり。一年は十二月なるを一月くはへたるもあるごと、萬づ

〔靈語通〕

御國の五十連音こそえもいはず靈妙なるものなれ。神代の古事を知らるゝも是があれば也。さて語を延約め縱横に通はして云も、是に漏る事なければ也。是を五十音といへど實には四十四音なるを、以を二个宇を一个惠を二个を〻一个づゝ増加へて五十音となせる也。たとへていはゞ、一年は十二月なるを一月加ふる年も有が如く、萬の事綏べ和さ

ゆるび和さてはと丶のはぬにそあらん。いでや一年に一月を添ふなるは月のかたちのかけみち四ッの時の行かふさまは目にしるければおもひよらめ。此以惠二ッ宇遠一ッくはへて五十連言となせるは心のおよぶべきかは。はたいたくいさほしある事は、そを學ぶにもたやすからぬに、是はいさほしはいふべくもあらず大きなれど、學ぶはいと易しや。をさく〳〵皇御神(スメミカミ)のなさせましゝにそあらむ。

では調はざるにこそあらめ。いでや、一年に一月をくはふるは、月の形(カタチ)の盈虧(ミチカケ)にも四時の來去(イキカヒ)にも眼にしるければ、誰しもおもひこそよらめ。此い惠を二个、宇を丶一つくはへて五十音となせるは、心にはかり及ぶべきかは。將(ハタ)いたく勳功(イサヲ)有事は、其(ソレ)を學ぶに容易(タヤス)からぬを、是は其功大きけれど、學ぶにいとやすし。是を制(ツクリ)ませしは、蓋(ケダシ)く皇神(スメガミ)の作(ナシ)ませしにこそあらめ。

これによつて觀れば、玉函叢説の文と靈語通の或御説とは同一人の説である事疑なく、從つて或御説は宗武の説であると認めざるを得ないのである。さうして秋成が特に敬稱を附して御説と呼んだのも、宗武が將軍吉宗の子である事から容易に理解出來るのである。

以上述べた所によつて、靈語通の或御説が宗武の説である事は確實になつたが、次に考ふべきは、宗武の説がいかなる經路によつて秋成に知られるに至つたか、又玉函叢説の文と靈語通所載の文との間に如何なる關係があるかの問題である。

秋成は靈語通に

　此御説の條々は或人のうけたまはり得て暗記(ソランジ)たりしを、事のついでに打聞て侍るが（靈語通二十二丁裏）

と記してゐるが、しかし、秋成が直接に聞いたのでなく、他人から傳聞して記した宗武の説が、前述の如く、宗武の手許に殘つてゐた草稿と語句までも大概一致するといふ事は實際あり得べからざる事である。それ故、我々は岩橋氏

と同じく「これはどうあつても、必ず人から聞いたことではなく、物に書かれたものから引用したものでなければならない」(同氏の靈語通論)と推論せざるを得ない。それでは、どうして秋成がこの宗武の説を見るを得たかといふに、それは、その師藤原美樹からであらうと推測せられる。前に引いた呵刈葭後篇の初に、

假字問答は徃年美樹子に遇し時借ゞ與へられしを寫藏したるなり

と秋成自身が言つてゐる通り、秋成は宗武の問と之に對する美樹の答とを錄した假字問答を美樹から借りて寫してゐるのであるから、その中の宗武の假名遣説を或御説として靈語通に引用したのであらうと思はれる。それを或人から傳聞したやうに記してゐるのも、宗武の説を美樹の手から得た事を指してゐるものと解せられる。(實際は書寫したのを、唯傳聞したやうに言つて居るのは、高貴な人の説である爲、之をあらはに言ふを憚つたのであらう)

かやうにして我々は、靈語通の或御説を、假字問答に於ける宗武の説の引用であらうと推測するのであるが、それでは、その宗武の説と玉函叢説に於ける宗武の説との間の關係如何といふに、玉函叢説では、或御説に相當する部分は、それ〴〵別の題目を有する數個の文にわかれてゐるのであつて、同書の編者は之を別々の文と認めたらしく、最後の「清濁音の事」の條の終に

是は清濁の事を論じ給はんとて、まづそのはじめをいさゝかかゝさしめ給へる御草稿なり

と附記してゐるが、これ等の諸條はすべて假名の用法卽ち假名遣に關するものであつて、清濁音の事の條も、唯の清音濁音の論ではなく、假名遣論の傍證として書かれたものである事は「さるからにいにしへはかなに心をもちひず、以爲惠江遠於はことばもいひわかつやうなく、字音もわかれず、何をもてわかたむや」と結んでゐるのによつても明かである。さうして、これ等の諸條は、その順序も靈語通の或御説と全く同一であつて、各條の題目を除いてそのま

ま併せて一文とすれば、或御說と殆ど同一のものとなり、唯序論ともいふべき最初の一節(「上古假字の法則立たざりし以往は」より「是ぞ御國の直き風俗なりける」まで)と最後の結論と見るべき數行の文(「然則(サルトキ)は假字用(ツカ)ひと云法則は」以下)とを缺くのみである。さすれば、この玉函叢說の文と靈語通の或御說並にその出處なる假字問答中の宗武の論との間に密接なる關係がある事は疑ない。

しかしながら、今述べたやうに、玉函叢說の文は或御說に比して前後に缺けた處があり、その語句にも多少の異同があるから、之を直に假字問答中の宗武の文と同一であるとする事は出來ないけれども、玉函叢說の文を最初の草稿とし、假字問答の文は更に之に手を加へて首尾を整へたものであつたと解すれば、兩者の間に右の如き相違があるのは當然であつて、その間の關係が最も自然に說明出來るのである。

なほ、呵刈葭によれば、秋成は、假字問答に於ける宗武の論に就いて「魚彥が古言梯の發端に美樹のいはれし言を見そなはしての事なりと談ぜられき」と述べてゐるが、この美樹の言といふのは、或人が美樹(宇万伎)に「假字づかひてふもののいとしも上つ代にはあるべきにあらず、文字渡りて後音韻四聲により又は悉曇によりてことわりを定たるなるべし。いつれにも文字のうへのさたなれば、吾國の事とは云ひがたかるべし」と言つたのに對して、美樹が、文字は後に添へたもので、もとはその言をいふままに音韻が口の內でわかれてゐたのであつて、古くは文字を知らぬものまでもいゐえゑをおの言の區別をあやまる事がなかつた。その正しい言をそのまゝうつし傳へた假字であるから、古書によつて正すべきであると論じたのを指すのである(古言梯の初に載せてある)。玉函叢說及び或御說に見える宗武の假名遣說は、いゐえゑをおの區別は昔から無かつたのを、之を意味のある事のやうに考へて假名遣といふ事を言ひ出したのであるとするのであつて、美樹の說とは大に異る所あるものである。それ故、宗武はこの美樹の說を見て

之に對する自己の異見を書いて美樹に示したのであつて、これが即ち呵刈葭に所謂宗武の問であり、之に對する美樹の批評が即ち美樹の答であつたのであらう。この問答書を秋成は美樹から借りて寫して置いたが、その中の宗武の論に基づいて自己の假名遣説を立てたので、靈語通を作つた時、或御説として之を卷初に引用したのであり、さうして、その最初の草稿の宗武の手許に在つたものが、後に玉函叢説に收められたのではあるまいかと考へられる。もつとも玉函叢説のは、古言梯を見てはじめて書いたのではなく、かねてかやうな説を懷いて書いて置いたのであるが、後に古言梯を見て、前の草稿に手を加へ首尾を整へて美樹に書き送つたのかも知れない。

右の考説が大體正しいものとしたならば、靈語通の或御説の根源と推測せられる假字問答の宗武の論は古言梯の出版せられた明和二年頃のものであらうし、玉函叢説のは、その頃又はそれ以前のものであらう。

以上述べ來つた所を要約すれば

一、靈語通の或御説は、玉函叢説の文と大概同一であるから、德川宗武の説である事疑無い。

一、靈語通の或御説は、秋成の言ふ如く、傳聞によるものではなく、何か書かれたものから引用したものと認められる。

一、呵刈葭によれば、秋成は假名に關する宗武と美樹との問答書を美樹から借りて寫して置いた。秋成が靈語通に或御説として引用したのは、この書の中の宗武の説であらう。

一、玉函叢説の文は、宗武が美樹に示した文そのものではないが、その初の草稿本か又はその基となつたものであらう。

一、靈語通の或御說の出處と思はれる假字問答の宗武の說は明和二年頃のものであり、玉函叢說の文は、その頃か又はもつと古いものであらう。

前にも述べた通り、玉函叢說の文は靈語通の或御說とほゞ同文であつて、しかも之に比すれば、前後に缺けた處があり、之に反して靈語通は首尾完備してゐるのであるから、宗武の說を見るには必ずしも玉函叢說を要せぬやうであるが、しかし、兩者は全然同文ではなく、靈語通の方は文が幾分簡約であつて、まま解し難い所や曖昧な所があるに對して、玉函叢說の方は、文がやゝ委しく、同じ事でも違つた表現を用ゐてゐる所があるので、兩者を對照してはじめて眞意を詳にする事が出來るものも少くない。それ故、宗武の假名遣說の研究には、玉函叢說の文も亦棄てる事は出來ないものである。

麻須美能鏡の著者小林文康

西尾　實

一

麻須美能鏡は近世末期に於ける國學論爭書の一で、直毘靈（本居宣長）と、それに對する反駁書末我能比連（市川匡麻呂）と、竝に末我能比連に對する反駁書葛花（本居宣長）とを併せて駁撃した沼田順義の級長戸風に對して試みられた辯駁の書である。沼田順義は醫を業とした漢學者で、眞淵・宣長が古道を中心として日本文化に於ける儒佛兩教の惡影響を排撃するや、まづ道返草（一卷）・國意考辨妄（一卷）を出して眞淵を駁し、更に級長戸風（三卷）を著して、宣長竝に市川匡麻呂を攻撃した。この書の所説の基礎は神儒一致説にあつた爲に、宣長によつて聖人賢人の權威が泥土に委せられたことを憤激してゐた儒者は固より、宣長門の極端な排他説に慊らなかつた國學者の一派もこれを悦び、この著によつて順義の門下に集るものが少くなかつた。隨つて、これに對する宣長門流の辯駁も亦盛で、駿河の新庄道雄の葛根、豐前の原田重枝の伽倍志廼風（一卷）、信濃の小林文康の麻須美能鏡、武藏の菅原定理の花能志賀良美（一卷）、近江の大堀守雄の級長戸風廼辨（三卷）等は何れも級長戸風に對して向けられた駁論書であつた。これに對する沼田順義側の應酬には順義の級長戸追風（二卷）、武藏の靜齋義雄の伽倍志廼風辨妄（二卷）、阿波の伊勢茂美の非葛花があり、更に伽倍志廼風辨妄に對する重枝の神傳伽倍志廼風正言があるといふ如く、その論爭は活潑を極めた

ものであつた。

しかも級長戸風が出た文政十三年は、末我能比連に對する辯駁書葛花が成立した安永九年を去ること既に五十年であつて、五十年後に至つてこの問題が再燃するに至つたには、そこにそれだけの理由・事情が存しなくてはならない。しかし本稿に於ける私の意圖はこの論爭の歴史的社會的意義を考察するにあるのではなくて、その論爭上に一つの重要な位置を占めてゐた廝須美能鏡の著者小林文康について、新しく見出された資料を中心として、その生涯と業績とを明らかにしようとするにある。

二

小林文康については、近年公刊せられてゐる國學に關する諸研究に、廝須美能鏡の著者として、「信濃の小林文康」とか「信州上田の人小林文康」とか記されてゐるに過ぎない。いふまでもなく、これは廝須美能鏡に於ける本居有鄉の序に「信濃國佐佐禮石の小縣郡小林文康主」とあり、鈴木朗の序に「信濃國上田人小林文康主」とあるによつたもので、それ以外には生歿年次さへも明かでなかつた。私も前年、近世末期に於ける國學關係の論爭書を繙いて廝須美能鏡に至り、その著者小林文康がわが鄉國の人であることを始めて知り、鄉土誌類に目を曝した所、意外にも文康に言及したものは一もない有樣であつた。

そこで同地の知友に文康の後裔又は緣者の調査を依賴して置いた所、昭和六年に至り、當時上田市に居住して居られた新井保氏から、同市の醫師小林清吾氏が文康五代の裔であることがわかつた旨を報ぜられた。同夏恰も同地教育會の夏期講習會に出かけることになつてゐた私は、その序を以て上田市在住の小林清吾氏を訪ひ、氏の好意によつて同家保存の稿本その他數十點を展觀する便宜を與へられ、又近郊和(かな)村に文康の生家並に墓所を訪ね、文康時代から

の遺物に接し、又同家に殘つてゐる言傳へを聞き、更にその後新井氏の盡力によつて遺稿の書寫・撮影を得て、その人物事蹟の大要を知ることが出來た。

同家に傳へる所によると、文康は通稱を淸吾といひ、長野縣小縣郡和村栗林の舊家に生れ、父を有賀丈左衞門といつた。父から前數代は有賀を姓としたけれども、もと小林姓であつた爲に、文康に至つて原姓に復した。その祖に勘藏なるものがあつて、慶長十九年に、眞田伊豆守信幸に從つて大坂冬の役に出陣したが、その後は士を以て仕へた者なく、代々栗林に農を業とし、文康の前後數代は庄屋を勤めてゐたといふ。

文康の生歿に關しては確實な資料が保存せられてゐる。卽ち同家藏「文化甲戌孟春　小林雲樹撰」と奥書せられてゐる方位吉凶星列定局に、その各紙面には干支による歲の吉凶星列圖が書かれてあるその欄外に、同家及び親族の人々の生年月日時刻等が記入せられてゐる中に、「文康庚戌年六月產」とあるから、生年は寬政二年(二四五〇)である。又その歿年は過去帳その他によつて、安政四年(二五一七)であることに一致してゐるから、享年は六十八歲であつたことが知られる。文康のよみ方は、遺著阿伎豆能和邪(寫本)の第四章に「文康」とあることによつて明かであり、號が秋津能屋であつたことは同書の序の一つ(無記名)に「秋津能屋の大人」とあることによつて知られる。

文康の敎養については何等傳へる所がない。しかし現存してゐる遺稿類によつて見れば、國學は固より、醫藥・易術に關する方面にも精じかつたらしく、雲樹の號を以てした易術に關する遺稿斷簡が少からず傳へられてゐる。又、床須美能鏡稿本に於ける橘貞秋の序に、彼が國學の外に漢籍・佛典に精しかつたとあることによつても、その基礎的敎養がかなり廣くも深くもあつたらしいことが推定せられる。但、その藏書は、文康の後、丈左衞門の代に蠶種の輸出を試みて失敗し、財產整理を行ふに至つて多く失はれ、記錄類も、明治以後障子・襖等の貼紙に用ゐられたといふ。現

に私が訪れた時も、生家の二階の、御神前の間であつた一室の明障子は、古記録の用紙らしいもので貼られてあつた。

今、文康の生涯を概觀する爲に、小林清吾氏が同家所藏の資料によつて作製せられた略年譜を左に掲げる。

寛政　二年　　　　　六月、長野縣小縣郡和村栗林に生る。
同　十二年（十一歳）　傷寒論筆寫。
享和　三年（十四歳）　兄重吉死去、家督相續、小林と改姓。
文化　五年（十九歳）　柔術免許を深井孫六郎より受く。
同　　八年？（二十三歳）　妻を迎ふ。
同　　十年（二十四歳）　選方明鑑を稿す。十一月、伊勢神宮參拜。
同　十一年（二十五歳）　十二月、長男（賢吾）生る。
同　十二年（二十六歳）　八月、妻死去。
文政　五年（三十三歳）　日光に旅行す。
同　　九年（三十七歳）　後妻を迎ふ。
天保　　年（　　）　公家の一人を置く。
同　　六年（四十六歳）　四月、麻須美能鏡二卷板行。
同　　　年（　　）　古事記速解二卷を稿す。
弘化　　年（　　）　家傳藥調製。
嘉永　四年（六十二歳）　阿伎豆能和邪（五卷）を稿す。
安政　四年（六十八歳）　二月十三日、死去、贈名阿伎豆彦瑞道大人、法名良珠院天仙自照居士。

この年譜に示されてゐる、文政年間に迎へた後妻は、伊勢の山本氏の出で、十二歳まで大神宮に奉仕してゐたといふ。或は、麻須美能鏡の跋に「伊勢の大御神の宮の御里人　山本吉正」とあり、その一本に「山本吉正藏版」とある山本氏の縁故者であつたらうか。この後妻には子がなくて、明治六年九月二十九日に七十三歳で死去してゐる。

又、天保年間に、京都から一人の公家を伴ひ來り、手厚く遇し、食饌は常に神前の間に於て供したといふが、その人の遺したものとして同家に傳へられてゐるものは

玉鉾のわかおほ御國能みちにかしこきをもて號ならんか

臣　義實

玉保このみちの光りのさやけきになほ照增る秋津屋の月

とある扁額に仕立ててある歌と

臣　義實

藻しほやき□とも秋は須磨ばやと思ひ明石の月の夜な〱

とある掛軸に仕立ててある歌だけであるが、その義實なる貴人が如何なる人物であつたかは審かでない。この二首の中、前の歌は文康の號秋津能屋に題したものであらうと思はれるが、後の歌は第二句の初が倭のやうに書かれてゐて或は佗かとも思はれるが、はつきり讀むことが出來ない。何れにしても文字も歌も文康の上に出る人ではないやうであるから、身分の上で尊重したものであることは明かである。（因に現在和村の生家の一室に掲げられてゐる扁額の一つに「すみよしの岸の藤なみわかやとの松の木するに色はまさらし」といふ歌があつて、これは四辻大納言公亨卿のものとして傳へられてゐる。）

尙、文康の事蹟に關して注目せられるのは、著書板行のことを計畫し、自著の上木を試みた遺物の存することであ

り、又直毘講の誓約書や講中の署名ある帳簿が保存せられてゐることであつて、板行事業の遺物としては多數の板木・活字及び刻刀の外に、既に自著阿伎豆能和邪を印刻したものが七十一葉と、類聚國史の刷上若干とがある。尤も類聚國史は自ら印刷したものか、板行事業を企てるに當つて見本として手に入れたものか不明であるが、もし見本として手に入れたものとしても、かく製本しない刷上を多數手に入れるには、その關係者に知人がなくてはならない。類聚國史の飜刻が成つたのは文化十二年、文康二十六歳の頃で、塙保己一が企て、石原正明が校正の任に當つてゐる。そしてその石原正明は、寛政四年二月に宣長に入門し(門人錄)、後塙保己一の門に入つた人であるが、歿したのは文政二年名古屋に於てである。直毘講は當時同地方に行はれた町內永續講(家運永續、子孫長久の計を町內の合力によつて立てた經濟的協力)の一つであつて、年々金五兩宛を積立て、四年間据置き、以後は年々利米一口分十俵宛配分する規約であるが、外に講中禁止之事九箇條を設けて日常の道德的生活を規定し、更に、

一　會席は空腹に不相成迄にして決而美味等不調何にても常に有合之野菜に而相濟せ可申候　當日水風呂を立身を清め　大直毘神　神直毘神等江大御酒大御饌御燈を奉り講中家々之永續を祈可奉候

一　右割渡永續米之內貳俵は其家之神事祭式幷先祖之靈祭之料に可備八俵は其家之老父母を令樂料に可備候父母無之後は其家之非常手當に備私の樂に決而使ひ申間敷候

といふ如き誓約の條項を置いて神道的行事を眼目とした點が特に注目せられる。嘉永四年四月(六十二歳)に講中十六名を得、後更に四名を加へて成立してゐる。その講中は主として小林家の親類緣者で、郡內の和村・豐里村・殿城村・縣村・鹽尻村等の豪家が多いらしい。これは文康晩年の事業の一として、又國學精神が經濟生活を基礎づける原理として導入せられてゐるものとして注目せられる。

三

國學に關する文康の遺著として存する稿本は、麻須美能鏡二卷、阿伎豆能和邪五卷、古事記速解二卷がその主要なものである。このうち後の二種は文康の姉の嫁した同郡鹽尻村佐藤家に家藏せられてゐる。（但古事記速解の初稿本と思はれる古事記傳拾遺卽喩六綴が小林家に保存せられてゐる。）

稿本麻須美能鏡が刊本と異る著しい點は「天保の三年といふとしの十一月の朔日」といふ日附を有する「遠朝廷に仕奉る橘宿彌貞秋」なる人の序が一つ多いことである。橘宿彌貞秋なる人が何人であるかは未だ不明であるが、その序文によれば、文康のことを「我學の兄弟」と呼んで居り、尙その序文に合綴せられてゐる長歌が若し同一人の手に成つたものであるならば、それは兄弟親戚に緣を絕たれて文康の許に一時身を寄せてゐた人である。文康はよくこの人を勞り、なみ〳〵ならぬ懇切を盡したものと見え、それに對する感激が眞に迫つて披瀝せられてゐる。文康が刊本にこの人の序を除いてゐるのは、或はその個人的關係に基く褒辭の爲であるかも知れない。

その他麻須美能鏡の序に關するものとして本居有郷からの書簡と鈴木(朗)大人・橘村大人に宛てた書簡の下稿らしいものが保存せられてゐる。有郷からの來書は

板下御かゝせ被成候節眞字假字はいかやうにも程よくお見はからひ爲御書可下此書きさまは唯筆にまかせて書候のみなれば眞字假字のくばり工合しどけなく候へば御地にてよきやうにおかかせ可下候

天保五年十一月

とあつて、同序に添へて來た書簡であることは明かである。鈴木朗への信書は、

鈴木大人の大前に平文康申奉る

おふけなくも故鈴の屋大人の論ひ玉へる御書の追次せむはいとも／＼可畏わざに侍れどかの沼田の汚き奴が直毘靈と葛花とにいむかひ奉りいともかしこき皇大御神のおほきみちおとしめ奉らむとすなるをいきとほろしく堪へかたく止事えず眞澄のかゝみをなもものしつる

天保五年十月九日

とあつて、𪉩須美能鏡の序文を依頼した文書の控であることが推察せられる。

又、橋村大人に呈した文書の控らしいのは

橋村大人の御前にまをす

來る八月廿日より三十日迄の間に此方より御返書頂戴に人指上候　山本吉正を經て進呈

とある紙片である。橋村大人とは何人であるか、山本吉正は前にもあつたやうに伊勢の人であるから、この人も恐らく同地の人であらう。しかもわざ／＼使者を立てて返書を求めるといふ手紙の內容は何であつたであらうか。鈴木朗への手紙と同一な見出しで一括せられてゐる所からすれば、これも序文の依賴ではなかつたらうか。とにかく當時伊勢山田にある鈴門關係の人で橋村の姓を有するのは橋村主膳正代・橋村彈正正兌・橋村肥後正任・橋村中務正柯の四人で、正兌・正任の二人は何れも權禰宜であり、正柯は御師である。本居春庭門人錄によれば正兌・正任の二人は文化七年、正柯は同九年の入門者であつて、前の二人は本居大平の門人錄にも見えてゐる。このうち比較的著名なのは正兌で、彼は豐受大神宮に仕へた度會神主で、文康が𪉩須美能鏡を出版した翌天保七年に歿してゐる。

かく見來ると、𪉩須美能鏡の刊行に關係ある人々は、何れも伊勢在住者もしくはその關係者であることが略〻推定せられる。卽ち鈴木朗は一時江戶に在つたけれども、晚年は名古屋に在つて、藩の明倫堂敎授に任ぜられて國學を講

じてゐた宣長門下であるし、本居有郷が伊勢松阪に在つたことはいふまでもなく、跋文の山本吉正が伊勢の人で、恐らく山田の住人であつたらうと思はれる上に、「橋村大人」が正代・正兊・正任・正柯の何れかであつたとすれば、同じく山田の住である。——因みに當時に於ける宣長の後は、文政十一年に宣長の實子春庭が死し、天保四年には春庭に代つて領主紀州侯に仕へてゐた養子大平も死し、春庭の後は有郷、大平の後は内遠が繼ぎ、内遠は紀州侯に仕へ、しかも年齒は文康よりも二歳の弟である。——殊に文康が後妻を伊勢の山本氏から迎へたといふことは、それがしかも大神宮の供饌に奉仕した人であるといふことは、彼の伊勢の地に對する交渉がかなり深く長いものであつたらうことを想像せしめる。文康の國學が、江戸に於ける國學でもなく、京都に於けるそれでもなく、やはり伊勢に於けるそれでなければならなかつた所以は、からいふ交渉の上にも看取せられるものがある。

阿彼豆能和邪五卷は活字版と筆寫との合綴せられた縱八寸八分、横六寸二分の大本で、卷一が八十三紙、うち七十一紙が自製活字版、卷二が四十二紙、卷三が六十九紙、卷四が五十三紙、卷五が六十三紙、計三百十紙に書寫された未刊本である。卷頭には次のやうな自序と目次とがある。

阿彼豆能和邪

大長谷若建天皇（オホハツセワカタケノスメラミコト）の大御腕（タヾムキ）を咋（クヒ）たる蜖を蜻蛉取咋たりしふることを思へばいきとしいけるものの數にもあらぬ小虫さへ忝（カシコ）き眞心はあるものを奇しく異しき　産靈大神の産靈の大御靈の幸（サチ）たばりて人と生れていとかしこくも遠都神代の古事をまなびて　皇大神等の大詔のまにまに心を鎭めおのれのみ神隨なる幸を得て止なむはいとゝゝほいなき事にしあれは其幸を得む心志良比（シラヒ）を書あらはして高山の高きは雲の上より短山の短きはあしのやのおのれらが賤の輩男に至るまで國中に普く施らして天の下の大御爲となしなむと忠心（マコヽロ）もて書あらはせるふみになむありければ

於保計那佉賤我心毛蝍咋斯蜻蛉能和邪登於毛保世君等

と數にしもあらえぬまづしをがそのまづしきも厭はずおもひおこせる忠心をあはれともきこしめせ其眞心をいとほしともしろしめせ

小林文康敬愼恐恐記

阿佉豆能和邪　　小林文康大人講本

これによつて見るに、本書は古典の中から得來つた幽事・顯事を以て、現在及び將來の國民の生活原理たらしめよう

とする意向に成つたものである。かく國民文化發達の上に儒佛二教を排して、神隨の道を確立しようとするのは、當時の國學者に共通した精神であつて、廱須美能鏡に於ける級長戸風辯駁の根柢をなす著者の世界觀を知るべき重要な著である。

この寫本一部の外に、別紙になつてゐる序が三つある。一は「阿伎豆能和邪波斯夫美」とある記名のない序、一つは「あき豆のしわざのはしに」とある自序、一つは「あき豆のわざのはしふみ」と題し、「紀州に都かふる　高田與祀右衛門明秀」と署名した序である。

そのうち、自筆と思はれる「あき豆のしわざのはしに」は、序といふよりも例言に近いもので、

さとし書にこと委せんとて頭書多くすれば書長くなる上且其を見ん人其ひける頭書をことくに見されば信なはざる物にしあれは書みんにいとくいとまかゝりて其書見んにあきなん故しろにいとまかゝらん書はかへりて諭書にあしかれば引書は止事を得さるのみ引てことくに省けり

とあり、この書が研究書であるよりも教訓書であり、指導書であることを、よく示してゐる。

古事記速解は藤室保右筆寫本で、既に板下として書かれたものらしく、現存二卷は速須佐之男命の高天原逐放までであるが、その初稿本と思はれる古事記傳拾遺卽喩は神代卷の終までである。宣長の古事記傳が訓釋を主としたものであるに對し、これは道を主として說かうとしたもので、隨つて彼の思想なり主張なりの根據を成すものである。外に大祓速解の著もあつたことが文中に明記せられてゐて、これらが彼の論駁書、指導書の根柢を成した考案であることはいふまでもない。この點に於て彼は近世國學者の立場に立つた一思想家であり一先覺者であつたといはなくてはならない。しかしその國學は恐らく、既に一應古典研究を完成し、古道の自覺に到達した後に、その古道說に立脚して

國民的自覺を高め、やがて國民運動を擡頭せしめるに至つた社會的發展期に於けるそれであつたであらうことも亦肯認せられなくてはならない。

そしてこの期の國學を代表するものは平田篤胤であつて、江戸を中心として全國的にその影響を及ぼしてゐるが、その間に立つて、文康は如何なる立場をとり、如何なる特色を有してゐたか。

四

私は旣にその遺著によつて文康の思想・學統を考へるべき時に到達してゐるのであるが、それには彼の傳記を考へた際に、交渉のある人物として見出された本居有郷・鈴木朖をはじめ、猶、不明に屬してゐる橋村大人・橘朝臣貞秋・高田與祖右衛門明秀等が、或は伊勢山田の人であり、或は紀州藩に仕へてゐる人であるといふ如く、何れも伊勢に關係を有する人々であることが重要な示唆を與へる。（尙彼が神前の間に掲げてゐた「神直毘神大直毘神」の掛軸は從二位荒木田氏朝の書になつてゐる。これも伊勢外宮の祠官であらう。）

文康の古典研究は古事記速解に見る外はない、それは初稿本と思はれる古事記傳拾遺卽喩の題名にも示されてゐるやうに、記傳の所説の遺を補ひ正す方針の下に筆を執つたものらしく、隨つて本文をも、或は古語拾遺によつて補ひ、或は書紀によつて順序を改めてゐるが、そしてその部分は罫線で圍ひ、理由を辭つてゐるが、大體は宣長の神代正語を範としてゐるらしい。文中宣長を「吾師大人」と呼んでゐることによつても知られる如く、その立場は宣長的である。隨つて古典研究の成果ともいふべきその古道説・神道説も、根柢に於ては宣長流であるが、それによつて構成せられてゐる彼の世界觀には獨自なるものがあり、儒佛や異説の批判にも獨得な論鋒の鋭さがある。麻須美能鏡は、天保六年の初版の外に幾種かの版本を存し、しかも奥附に記されてゐる書肆の名が漸次全國各地の主要都市に及んでゐることによつて、かなり廣く讀まれた書であることが推定せられる。又數多い級長戸風に對する駁論のうち、著者自

ら應酬してゐるのは、この麻須美能鏡のみであることによつても、論駁書中代表的なものであつたことが推定せられてよいであらう。

いふまでもなく、當時に於ける漢學者と國學者との論爭の焦點は所謂漢意問題卽ち國民精神の儒教化の可否問題にある。そして漢學者は神儒一致卽ち聖人の道と神の道との一致を說き、國學者は古典研究によつて見出された古道自覺に立つて儒教的神道・佛教的神道を排し、古神道を樹立しようとする。しかも國學の排他精神は、本來的にいへば、日本文化上に於ける佛儒の排擊にあるけれども、現實的熱情はやがて佛儒そのものの價値までも蔑視した如き言動に及ぶ爲に、著しく漢學者の自尊心を傷つけ、漢學者は又日本文化に對する漢學の貢獻を說かうとして、漢學將來以前の日本を蠻夷的生活として難じ、時には非國民的言動をさへ敢てする。かくて一方が日本の古代生活を禽獸の行爲と呼べば、他方は聖人を梟賊と稱するといふ如く、極端な非難言を以て應酬するに至つてゐる。

文康に限らず、一體にこの期の學者相互のかくの如き排他的興奮は到底單なる研究の成果として理解せられるものではない。むしろ來るべき社會的變動の一豫標として始めて理解せられる。宣長の國學は、この社會的情勢に起因する興奮を抑止することによつて學としての完成を見たものであるといへよう。然るに宣長によつて一旦學としての完成を遂げた國學が、やがてその成果である古道の自覺を以て皇政復古の政治的理想となし、國民運動の動因としなくてはならないやうな社會的要請がその基底に切迫して來た。宣長と匡麿との論爭が五十年後に至つて再び取上げられなくてはならなかつた主要原因は、かくの如き歷史的社會的事情に存するであらう。

かくしてこの期の國學の發展を代表するものは、いふまでもなく國學を宗教にした平田篤胤である。文康の國學はその時代からいつても、又その現實的傾向からいつても、篤胤時代のそれである。しかしながら、宣長學との關係に

於ては兩者の間に著しい相違がある。篤胤は自己の主觀的情熱によつて宣長學を解釋し、自己の宗教的情熱を立脚點として宣長の古道を古神道として發展させてゐるのに、文康は宣長的に宣長學を理解し、宣長の古道を古道として發展させてゐる。篤胤の態度は宣長の古典論に對しても批判的であるのに、文康のそれは受容的である。かくて文康はその年齢に於て篤胤よりも十四歳の弟であり、文康が癒須美能鏡・古事記速解・阿伎豆能和邪を著した頃には、既に篤胤學は大成されてゐたけれども、そして古事紀速解の中に、「吾學ひの兄なる平田篤胤主云々」ともいつてゐるけれども、その古道説に於てはあくまで宣長學の素直な受容者であり發展者であつた。

文康の古道思想を比較的體系的に傳へてゐるものは阿伎豆能和邪である。阿伎豆能和邪の所論は古典研究に基づく道德論・宗教論であり、又彼の世界觀であつて、その序に、「おのれのみ神髓なる幸を得て止なむはいといほいなき事にしあれば、其幸を得む心しらびを書あらはして、高山の高きは雲の上より、短山の短きはあしのやのおのれらが賤の輩男に至るまで、國中に普く施らして天の下の大御爲となしなむ」といつてゐる如き、又最後の章に、一家の人心一致すればその家よく諧ひ、一國の人心一致すれば一國よく治まつて、他國がこれを犯すことは出來ない、皇大神の大道は、天下の人心を一致して止まざるの道であるとしてゐる如きに、その現實的な傾向と、その根本動機が國民の生活原理の提示にあることとが認められる。

彼は天地間の諸現象は幽事（カムワザ）・顯事（アラハゴト）によつて根本的に規定せられてゐるとなし、宇宙の生成をはじめとして、日常の諸現象はすべてこの幽事・顯事の協動によつて調和存立すると說く。隨つて天下國家を治める要は治者その人の德にあるが、その德には幽事の德と顯事の德との差別があつて、顯事の德は行爲の德であり、德行の德であるのに對して、幽事の德は運命の德であり、自然の德であるとする。卽ち「其物種を地に蒔は顯事也、其物を生すは幽事也。」といひ、

「孝行を行ふは顯事也、孝行の立は幽事也」といひ、又「病症を候ひて藥を與ふるは顯事也、病の愈るは幽事也」といつた後に、「總て顯事の德は此の幽事の德より出生、顯事の德の立つは幽事の德よりなる也。」と結語してゐる。いふまでもなく、これは書紀の天孫降臨の段の大己貴命に對する神勅に、「汝所治顯露之事宜是我孫治之汝則可以治神事」とあり、命の御答に「天神勅教慇懃如此敢不從命乎吾所治顯露事皇孫當治吾將退治幽事」とあるのによるものであるが、文中の神事・幽事の文字に關して、「神と書けるはカムとよまむをたしかにしらしめむ爲也、幽と書けるはカムは卽まカクリの意なることをたしかにしらしめむとて也」と註してゐる如きに、彼の解釋が示されてゐる。

かくして彼は、この神勅によつて顯事の政治は代々の天皇がしろしめし給ひ、幽事は大國主大神がしろしめし給ふのであるが、旣に高皇產靈大神・神皇產靈大神が天地を創成せられたのは幽事の御業であり、又伊邪那岐大神・伊邪那美大神の二柱に仰せられて、萬物を顯物となさしめられたのは顯事の御業であるとなし、更に現在及び將來に於て、子々孫々の生育してゆくのもこの二事の働きであるとして、幽事・顯事を以て天地に通じ、過去・現在・未來に亙る生成の原理としてゐる。

阿伎豆能和邪に於て注目せられるべき今一つのことは、社會上・個人上の災禍の原因を禍津日神の所爲であるとなし、これを取除く方法としての祓に二種を認め、一を豫見國の穢の殘餘を祓ふ祓とし、一を儒佛二教の渡來に基づく災厄の因たる外國の道を祓ふ祓であるとしてゐることであつて、こゝに祓の一發展が認められる。

かくして彼は「天照大御神の天地の間を諧給へる大御心に一致なし奉る」ことが幽事の德を保ち、顯事の德を立てる大道であるとなし、政治に於ける、人民の負擔の輕減を說き、百姓にも武藝を奬勵し、その上達者を待遇して希望あらしむべきであると論ずると共に、近き親を重んずると同じく先つ祖を厚くすることの肝要を說き、火・木・金物の

使用についての心得を諭すといふ如く、日常生活の指導にまで及んでゐる。

敍上の考察によつて明かなやうに、彼の意念は神髓の道を根幹とした國民生活の樹立に集中してゐる。しかもそれは篤胤のやうに來世的靈魂觀と結合した神祕的信仰であるよりも、現實的世界觀に立脚した生活哲學であるといふに近い。殊に上に敍した彼が晩年の業績の一つである直毘講の如き、近世末期の社會に於ける經濟的實生活の指導であつて、宣長學の一發展形態として注目に値する。しかもその原理は彼の幽事・顯事論に窺はれる所であつて、彼が理論的革命家であるよりも、實踐的指導者であつた風格はその所說と業績のすべてを特質づけてゐる著しい點であるといつてよい。卽ち彼の國學は、江戶のそれのやうに、歌文的でもなく、又京都のそれのやうに、悲憤慷慨的でもなくて、伊勢のそれのやうに、學的であり、實踐的であると共に、同代の篤胤が主觀的・神祕的であつたのとも異つて、古道的・生活的であつた。麻須美能鏡の所論も、この阿伎豆能和邪の世界觀に照すことによつて一層根本的に理解せられるものであることはいふまでもない。

五

私は麻須美能鏡の著者小林文康について、小林家及び佐藤家所藏の資料により、その生涯と業績の一斑を敍說しようとした。しかしそこには、尙彼の遺稿の各部門を關係づけ、國學は固より同代の社會情勢との關聯に於て考察せられなくてはならない幾多の問題を殘してゐる。のみならず、その後間もなく篤胤學を中心とした尊皇思想が著しく南信濃に興起した事實と如何なる關聯を有するかといふ如き點も考察せられなくてはならない。けれども旣に紙數の制限を超えてゐるので、今はこの輪廓的敍說に止める。

終に、この稿を成すに當つて容易ならぬ便宜を與へられた小林淸吾氏と、多大な助力を惜まれなかつた新井保氏に對して深く謝意を表する。

大村光枝に就いて

入江相政

一、光枝の信濃下りとその滯在期間

信濃の人長野美波留が、博學にして和歌を能くし、江戸歌人を評隲して其の心膽を寒からしめた事實は、何人にも知られてゐるであらう。美波留は江戸に出て後、塙保己一の門に入つて研鑽したが、鄉里信濃在住の時代は、大村光枝に師事したものである。故に光枝の和歌及び語學方面を討究する學風は、美波留にも繼承せられてゐた。然るに美波留が廣く世に知られて居るに反し、光枝の名若しくは其の事蹟及び著述は、意外に知られて居ない。これは光枝の爲誠に遺憾である。次に先づ今日までに調査し得た光枝の經歷を掲げて見よう。

光枝は京都の人である。國辭解の序に、「光枝、賤が賤らの末に生れて云々」とあるのを見ると、京都の町人であつたと思はれる。僧良寛——其の父山本以南は光枝の弟子であるが——その良寛の歌集の中には「光枝大人のみまかりたまひぬと聞きて」と題した三首の歌の條に「光枝歌人也、稱羽柴行藏、京都人、住江戸三分坂法安寺側云々」の如き記載がある。其の後大村彥太郞とも稱した由であるが、それ等の稱呼と、其の年次とに關しては、今一々明かにする事が出來ない。江戸に來た理由も年時も亦明かにし難いが、江戸への下向後は、良寛歌集に見える如く、法安寺側に住んだものである。法安寺は今日赤坂區臺町に在る。同寺の過去帖を見るに、光枝の戒名、玄峯院淸譽皎月居士の下

に「俗名光枝、當寺境内ニ住」と記されてゐる。故に法安寺側といふのは、寺の境内の意味であつた。光枝は其處に居住し、歌人として又歌學者として、子弟に教を垂れ、其の名聲も次第に高くなつて行つたものかと思ふ。併し其處に何年位居住したか、如何なる業績を殘したかは明かにし難い。

俗說によれば寛政四年松代藩主眞田幸弘の招聘に應じて松代に行つたと傳へられてゐるが、今それらに關していささか檢討して見よう。

光枝の著、古今六帖傍注の跋文に、彼の弟子小山田高寛が次の如く記してゐる。

　春の花秋の紅葉の匂には、たれも／＼心そむらんものの、わきて吾光枝大人はあはれ知れらん人にて、空せみのうき世を絶えて花もみぢに深く心をうつし、歌枕にとてこゝの皓月山の御寺に訪ひ來ませつる折に、しばし松代にも草枕を定めてよ………と强ひてとゞめつるも寛政の四の年の頃にか………かくて旅路の宿りすめるかりそめの庵を結びて、そこをしも草枕庵とぞ名づけられたりける。さだかにもおぼえねど大かたは三とせ四とせもすみなれ給ひけむ。そこの庵に………人々つどひて歌よみ侍るなり。

又從來全く知られなかつた彼の遺稿の稿本なる鳰の浮巢に收められた信濃路の日記中「きよきが、草枕庵のありしつどひの歌どもを集めける、其の端に添ふる辭」に

　更科や姨捨山の月も見ん、千隅の水は如何に澄むらんなど忍ばるゝものから、ゆくりなう旅よそひして、これの埴科のあたりにはひ渡りつゝ、何がしの大徳の御寺にぞ暫し草枕は結びぬ云々

と見える。「きよき」とは弟子渡邊潔であり、端書を光枝に求めた時のものである。右の「何がしの大徳の御寺」とは、斗海上人の大英寺であるが、光枝の信濃下りの動機は「ゆくりなう旅よそひ」して出立したもので、俗說の如く松代

藩主眞田幸弘の召に應じたものでない事が明かである。全く前記の如く「歌枕にとて」を目的の旅であつた。恐らく斗海上人とは知己であつたと考へられる。大英寺は皓月山と號し、今日も松代表柴町に在る淨土宗の寺院である。なほ弟子の集めた彼の集、卽ち藤原家集にも「皓月山に人々招きて歌よめる序に、梅香袖といへる事を」や「斗海上人大英寺と言ふ御寺に住職し給ふ所は、松代となん言へれば」などの題を以つて詠じた和歌もある。其の他藤原歌集の序によれば、光枝に就いて

我が國に來りし時、神社佛閣或は山川岡野に花鶯螢飛紅落葉の風景を望み見てし、又は弟子の集りたる席にては題を設けて詠じたる………

と記してゐる。これは前に掲げた「歌枕にとて」とある信濃下りの動機と一致する行動と見られる。思ふに眞田幸弘は、松代に於ける光枝の名聲を耳にして後に、親しく其の邸に召したのでは無からうか。眞田幸弘は、蠶桑樹藝を奬勵して、紊亂した藩政の大刷新をなし、兼ねて文藝の造詣も深かつた。殊に俳諧は大島蓼太等に學んで一家をなし、白日庵菊貫と號して居た。その句集を菊貫集と言ふ。又書法を平林淳信に學んで能書でもあつた。然し和歌に關しては多く聞く所が無い。それ等の事情から推察するに、光枝の信濃下りは「歌枕にとて」の理由を動機と考へる事が妥當では無からうかと思ふ。けれども文藝に造詣の深い藩主と、歌學及び詠歌に勝れた歌人と沒交涉ではあり得まい。遂に藩主の耳にも入り、知遇を辱うしたものでは無からうか。藤原歌集の序にも、藩主の招聘の事は見えないが、集中には「國の守眞田の何がしより賜りける題、初冬嵐」として

いづこにか我を送りて信濃なるみさ山あらし寒く吹くらん

の如きものは見えてゐる。

ともあれ皓月山大英寺に逗留し、詠歌の指導をなして居たが、やがて小山田高寛等の如き弟子の發起によつて、別に草枕庵の建築を得て逗留し、和歌、歌學の教授をなしたものらしい。其の間に名聲は松代藩中に及び、遂に藩主にも知遇を得るに至つたかと考へられる。かくて松代に止る事は、一年二年と延びて、結局三四年となり、寛政六七年になつたものと思はれる。藤原歌集中の歌に

信濃國にまかりける頃、今は旅立ちなんと思ふを人々請じ給ひつゝ、なほ一とせふたとせかくてとまりねかし、庵結びて參らせんなど聞え給ふ折しも、

と詞書したり、古今六帖傍注の跋に小山田高寛が「大かたは三とせ四とせもすみなれて、人々集ひて歌よみ侍るなり」とある記載によつて知る事が出來る。國辭解は寛政六年九月松代に成つた由、その奥書に見えて居る。

さて其の間に於ける弟子の中で、最も著名であつた人々は、前記の長野美波留、小山田高寛等を始め、和泉眞國、僧空同等であつた。松代町史には

天明寛政の頃、眞田幸弘の召に應じて、松代に來り藩士に歌學を講じ、爲に萎微振はざりし藩の歌學が勃然として興隆するに至つた

と記して居るが、「天明寛政の頃」とあるのは、寛政四年とすべきであり、「眞田幸弘の召に應じ云々」も前述の如く俗說であり、信ずる事が出來ない。但し光枝が松代に於て重んぜられた事を知るには參照すべき俗說であらう。なほ藤原歌集中には

越路にて去年の秋の頃遠く別れ來し人の、又の年の其の頃身まかりけるをいと悲しくて申し遣しける

と題した二首の存するを見れば、越後方面に旅した後にも亦、信濃——恐らく松代の草枕庵に滯在して居たものと考

へられる。

又前記渡邊潔の集めた歌集の端の文の末には、「文化のはじめの年、秋葉月半ばの頃云々」と見える。それは寛政六七年から約十年ばかり後になる。それは越路へ旅した後にも草枕庵に滯在した事を語るものであらう。

要するに光枝の信濃下りの動機は、略ぼ明瞭になつたが、最初は約三四ヶ年滯在して子弟に和歌及び歌學を授け、途中越後方面の旅行もして草枕庵に歸り、文化九年若しくは十年頃、或はそれ以後迄も滯在してゐたらしい。かの萬葉學者であつた成俊の碑には、本文の始めに「權少僧都成俊碑　藤原光枝記」とあり、末には、「文化九年壬申秋八月云々」と見えると言ひ、萬葉集誤字愚考の末には「文化九年八月成」の文字が見える。これらによつて案ずるに、光枝の江戸に歸つたのは、歿する稍〻以前の事になる。それを明かにすべき資料は管見に入らないが、前後十一二年の松代滯在と考へる事が出來るかと思ふ。

二、光枝の信濃及び越後に於ける足蹟

光枝は松代に滯在中、古蹟名勝等「歌枕にとて」と前に掲げた目的を略ぼ達し、且つ子弟に和歌、歌學を教授した事も既に述べた。其の他、顯著な業績として凡そ次の如きものがある。

年次を明かにしないが、寛政年中松代在なる東條村の天王山麓に、柿本人麿の靈碑を建立して其の由來を記した。藤原歌集に見える柿本社碑の銘がそれである。其の銘の内容を要約すれば凡そ次の如きものである。

和歌は神代から起つて人の世に傳はつた。藤原宮、平城宮時代から特に盛になつた。その中にも柿本人麿が勝れてゐた。

人麿の古を仰ぎ、後の世にも殘れとて大和國葛城下郡、柿本村に在る人麿の墓に生えてゐた青苔を求めて、信濃國埴科郡池

田の宮の傍、卽ち天王山麓に移植した人があつた。其の人の友なる藤原忠興が、上記の事蹟を石に彫りつける銘を光枝に求めた。後世の同じ心なる人はこの事を見聞し、遠く藤原宮の歌聖を忍び、寛政の今の佳き日に報い奉るであらう。石に彫り刻む功はこゝにある。

その末に一首を掲げてゐる。

みすゞ刈る片山陰に移しもて御影高くも仰ぎつるかな

その銘文は特に傑作と許し難いけれども、趣旨は大體盡してゐる。この碑は現存して居る由を聞いた。國辭解、皇國辭解、古今六帖傍注、萬葉集誤字愚考等、光枝の研究と著述は殆どすべて松代に滯在中の所産と見える。彼は活動期を殆ど松代に過し、從つて弟子への感化も多かつたのであつた。長野美波留は博學であつたが、その著述中に、對照假字格の如き國語學方面の著述の存するのも偶然ではないやうに思はれる。

次に越後方面を見よう。これも鳰の浮巣に收載せられて居る越路の紀行以外には資料の傳來せるものを見聞しない。その紀行は享和の初年のものである。この紀行によれば松代から善光寺、柏原を過ぎ、越後直江津に出で、柏崎から出雲崎——卽ち良寛の故郷を經、寺泊を通つて國上(くがみ)村の國上山なる國上寺(こくじやう)まで來た。國上寺畔の五合庵には良寛が住んでゐた。蓋し良寛を以つて光枝の弟子となすのは誤つてゐる。良寛は安永三年二十二歲の時、偶々巡錫して來た備中國玉島の補陀山圓通寺の住職國仙和尚に從つて備中に行つた。後三十餘年を經て、文化六七年頃歸國した。光枝との深い交渉は其の後の事らしい。尤も少年時代に、光枝の名を聞くか或は面會した事が無かつたと斷言する事は出來ない。それは良寛の父山本以南が光枝に就いて和歌の指導を受けてゐた故である。以南は通稱を次郎左衛門と言ひ、後に伊織と改めた。以南は薙髮後の名である。家は代々出雲崎の庄屋であり、皇典や和歌を好んで、俳諧は尾

張の久村曉臺に、和歌は江戸なる大村光枝に師事し、或は一茶とも交つてゐた。以南は慷慨家で皇室の式微を憤り、江戸、京都、大阪、住吉、名古屋等その足迹は非常に廣かつたが、寛政七年桂川に入水して果てた人である。かく京都や江戸に至り、自らも和歌を好んだ故に、早くから光枝と相識りこれに師事したのであらうと思ふ。又良寛の弟由之は以南の後を嗣いで庄屋となり神官ともなつた。又丘良偶乃朋涅と題する辭書を著して出版してゐる。(國語と國文學昭和九年十二月號山岸德平氏の丘良偶乃朋涅と其の著者參照)由之も光枝と交渉があつたかも知れないと思はれる。

ともあれ光枝が國上山に良寛を訪うた事は越路の紀行に次の如く見えてゐる。

　國上山といへるに住める何がしの大德をとぶらひ侍りしに庵に居らざりければ、そこなるとぼそに書きつけける

　　なべて世の光をたえし奧山の雲井の月は如何にすむらん

これによれば既に良寛とは舊知であつたらしい。又或る時は

　くがみ山なる何がしの大德の庵に宿りてさ夜ふけて

　　橡つむ軒ばの峰に月は落ちぬ松の戸さびしいざ枕せん

　つとめてまかり出でんとするにあるじ良寛禪師

　　山かげの杉の板屋に雨も降りこそ
　　さす竹の君が暫しと立ちとまるべく

　とありしすなはち答へける歌

　　忘れめや杉の板屋に一夜見し月
　　久方の塵なきかげの靜けかりしは

と旋頭歌の贈答を殘して居る。

又寺泊に於ては住民が遊女初君の碑を改修する序に、昔の歌を集める計畫をしてゐた。光枝は求められてその歌集の卷首に添へる辭を書いた。初君は順德帝の佐渡へ配流せられ給ふ時

物思ひこし路の浦の白波も立ちかへる習ひありとこそ聞け

と詠んで上聞に入れた女であつた。光枝がその卷首の辭は

こゝにこの越の海づらの寺泊のうまやに有りけん初君ときこえしは、はかなき言の葉をしも雲の上まで聞えまつりしより、かけまくも畏き日知りの大御代の大み選びにも入りぬれば（曩の歌が玉葉集に載せられた事を指す）、今の世までも白波のたちかへる面影はしるくなんありける……こたびこれの貞茂なるもの、殊更に思ひ起して是を新にゑりて古の跡と聞えし方に移し、しるしおけるなりけり……時に享和の初の年、葉月の有明の頃……旅寢の宿りにてしるす　藤原光枝

の如きものである。その文體は右のを以つて他のものをも推すことが出來よう。

寺泊にはなほ五十嵐某の爲に聚感園記を記してゐる。この記は順德帝の配流の際の假り宮の跡が、五十嵐某の後園になつて居る爲に、其の記を依賴されて記したものである。その記の後には「その辭に曰く」として

おぼろげの涙はかけじ畏きやありしみ神のかり宮ぞこれ

の一首を揭げて居る。今日は別に聚感園碑が漢文を以つて建設せられ、光枝の記を知る者は殆ど無い。

なほ光枝は「さよふけて神のいたう鳴りけるを」と題し、「越の國は神無月に鳴る神のはげしき所なりけり」など註して

思ひあるたがたぐひとや鳴る神の空にうきても轟きぬらん

など詠んでゐる。雷の激しい時に偶然あつたのであらう。その他出雲崎なる淨玄寺なにがしに「月を愛づるの辭」と「花を愛づるの辭」とを屛風に記して與へてゐる。

右の如く各所に於て人々と集つて詠じた歌がこの紀行中に可也多く見えてゐる。それらから考へて彌彥神社の神官であり、又その地方の歌人であつた高橋光威（みつたけ）、卽ち桃の翁とも會合して居るであらうと思はれるが、遺憾乍ら資料を搜索する餘裕を得なかつた。

以上述べた如く、越後に於ては、以南の長子良寬と國上山の庵に會し、寺泊・出雲崎、或は彌彥方面に逗留して記辭を作り、又歌を詠じてゐたのである。それが卽ち享和の初年であつた。それから又松代の草枕庵に歸つて前記の如き著述をしたのであらうと思ふ。

かくして松代から江戸に歸つた年月は、全くこれを明かにし難いが、晩年に再び赤坂の法安寺境内に歸り、文化十三年四月十六日六十四歲を一期として歿した。そして長野美波留等によつて墓碑が建てられたのである。其の墓碑は前述の如く現に法安寺に在つて、二つに割れて臺石の上に載せてある。墓碑には「光枝墓」とあり、臺石の正面には次の文がある。

法諱玄峯院淸譽皎月居士大人者藤原姓而皇都之產也旹文化十三年丙子年四月有六日行年六十四歲病而致死於當院焉因埋葬墓
碑營建主門人粂門投阿藤原美波留

又その右側面には

祠堂金三兩光枝門人施主連名右者年囘祥月幷每月忌日等之節爲香花供養料寄附之畢文化十五戊寅年四月十六日僧空同、同順阿、河野彌一郎、小山又四郎、北澤貫三郎、松木源八、加藤勘作、佐藤富彌、山本左太夫、渡邊長左衞門、世話人僧投阿、

とある。

以上は光枝の經歴の大綱である。從來光枝の傳としては、大正九年刊行の雜誌「短册」の創刊號、及びそれに據る大正十年一月廿一日發行の中信時報の記事などがあつた。後又それらによつて、昭和四年五月松代町史が刊行せられた。超えて同五年十一月の稿になる山田孝雄博士の萬葉集誤字愚考の解説が雜誌アララギに發表せられ、右の考が古典全集に收載せられ、昭和六年七月刊行せられた時、その解題に、右アララギ所載の文が轉載せられた。その中に光枝の傳として

大村光枝は京都の人、本姓は藤原氏、初め羽柴行藏と言ひしが、大村彥太郞と稱しぬ。賀茂眞淵の門に入りて國學を學びたり。天明寬政の頃、松代藩主眞田幸弘國學を好み、光枝を聘して其の學を奬勵せしかば藩の歌學これが爲に勃興し、長野美波留等多くの門人を出したるなり（大愚良寬、和泉眞國も亦光枝の門人なり）

の如く記してある。但しこれ又多くは從來の俗說に據られたものらしい。今幸に光枝の著三點を見る機會を得たので本稿を草した次第である。

この外にも光枝の書翰を藏する人が、松代附近に居る由であるけれども、本稿を草する迄には調査を遂げる事が出來なかつた。

三、光枝の著述

光枝の著述で已に世に知られてゐるものは、國辭解、皇國辭解、萬葉集誤字愚考の三點である。

國辭解の光枝自筆本と稱するものを、山岸德平氏は藏して居られる由である。國辭解と皇國辭解とは類似のもので

あるらしいが、皇國辭解は未だ管見に入らない。

飯島忠夫博士藏の國辭解は刊本で、上下を合本して一冊になつてゐる。奥書に

　寛政六年寅の秋長月信濃の國埴科の郡筑摩河のほとりなる旅ねのやどりにてしるしぬ

とあり、信州旅行中に、寛政六年に著したものであることが分る。

上卷には古事記の一節、萬葉集の歌三首、伊勢物語の冒頭等を取上げて語解を施してあるが、それは

　吾己曾座（われにそませ）

「ませ」の「ま」はもとつことにて「みあら」のつづまりよりなれるなるべし「せ」はそへわきまふる言にて「ま」のひとことの心をさだめおさふる言

とある一例によつても分るやうな種類のものである。同書の下卷は五十音を箇條書にしてその一つ一の意味を規定し且例歌等を擧げてある。試みに前掲の例に關聯のあるものを擧げれば

　せ

　ことをしづめおさふる言

　おきもせずねもせで夜をあかしては春のものとてながめくらしつ

　いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

の如きである。更に進んで「かな」「かも」等の助詞を擧げ、「けり」「けむ」等の助動詞も箇條になつてゐる。そして「けり」「ける」「けれ」とその活用形が夫々一箇條となつて居り、その各々に例を擧げてある。

萬葉集誤字愚考については、山田博士が詳説して居られるから(古典全集同書解題)此處には略すことにして、未だ

世に紹介されないもの三點、卽ち

古今六帖傍注　鵜のうき巣　藤原歌集

に就いて述べよう。

古今六帖傍注は、飯島忠夫博士が光枝の自筆本を藏して居られる。同博士の祖父勝休翁から傳承せられたものである。小山田高寛の書いた本書の跋文は前に掲げたが、その跋文は文政十三年卯月初旬に書いたもので、適々光枝の歿する約旬日前に當る。

さてこの書の冒頭に「古今六帖傍注　草稿美兎衣」とあつて、光枝の筆に成る序文が記されてゐる。六帖の著者、時代等については「紀のうしのむすめ(貫之の女)のあつめたるものとかいふ說もあめれど、そはいかが侍らむ。たゞし古今集えらべる時の料にとて何くれのたぐひをかいつめたるものならむ云々」と述べ、この傍注編輯の動機については、

おのれ此比この筑摩川近きわたりなる旅寢のかりそめの庵にありて、つれづれとながめ居るに、此處にも又和歌詠める人ひとりふたりは有りけり。歌の事何くれとうち物語らふ序にこの草紙とう出て、この歌かの歌の心いづらなどの給ふものから

總て旅先の事とて參考とすべき書の持合せもなく、以前契沖の著書を見た事もあるが、それも忘れて了つたので、たゞ僻見を述べて贈つたのだ。とあり、纂の歌を選んだ理由としては、「露の下なる虫の音、霞のうちの鳥の聲をも心にとめて聞けば、いづれは男女の道より深き思ひやはありなむ。此心のみ天地のまにまになれる心にて、其の至りなむきはみ木草露霜の上にも、あはれは通ひなむもの故、此の一つ歌もて、春秋の千々のあはれは知られなむものか」と述べてゐるので明瞭である。

「やまと歌はそのうつろふ方を本つ心として自らなる眞心の極みより出で來つゝ、其心は天地の中に至り至らぬ隈もなければなむめり。かくてぞ君をあふぎ親を尊む心も出で來る。されば和歌行はれて國の御政やはらぎなりなむ。是我が大八洲の國の風俗として神代より傳はり來れる國のならはしなるべし」と說き、「おのが心の淺きを淺きと知らば、古き歌のまめやかなるを見て、其の世の人の心をも忍び、其の世の人の歌の姿を見ては、其の姿のまめやかなるをしのぶべきことになむあらずやも」と述べてゐるのによつて、光枝の歌についての意見を察することが出來、且又行文に何處となく古今の序を摸した點も窺ひ知る事が出來よう。

本文はやはり前述の國辭解等と同種の記述が多く

秋のよの千夜を一夜になずらへて八千代しねばや戀はさめなむ

の註の終に

「らむ」のらは上の餘情を受けてゆるべおく言、「てむ」のてはさとしおふす言、「む」はいづれもむすぶ言にてを侍る

とある。

かくばかり戀つゝあらずは岩木にもならましものを物おもはずして

の註に

かくばかり戀ふるくるしさを思へば中々に人ともあらずして石木にもなりてしがな云々

とある。「あらずは」を「あらずして」としたのは、宣長の「あらむよりは」に一步を進めたものと言ふべきであらう。

鳰の浮巣は、越路の紀行、信濃路の日記を合せてその上につけられた名である。この書は飯島博士の知友の藏書。越路の紀行の序の中に「世の中は鳰の浮巢の浮き乍らありなむものか波のまにまに」とあるによつてつけられた名で

ある。

藤原歌集、飯島勝休藏書の印、飯島博士の藏書。内容は短歌八十餘首、その他吳竹の辭、柿本社碑銘等を集錄してある。

夜時雨

山の端は時雨やすらむ柴の戸の落葉が上の月ぞ曇れる

三月盡の日思ひつゞけける

雲に戀ひ霞に待ちし櫻花匂へばやがて春ぞ暮れ行く

等が優れた作である。

其他に古今集の刊本に光枝が書入をしたものがある。同じく飯島博士の藏書で、國辭解等の解說に引用したやうな類の書入がある。

この稿執筆について、藏書の貸與其他に關し飯島忠夫博士、山岸德平氏の御厚意を謝して筆を擱く。

近世歌人と食物の歌

伊藤正雄

日本人は昔から飲食に對して頗る遠慮がちな國民である。武士は食はねど高楊子と言ふのは、單なる武士だけの事でなく、國民一般の嗜みとされたのである。文學にもそれが現れてゐる。和歌は久しく搢紳の文學として發達したものであるから、古來の歌人達が食物の事をおほびらに詠むのを卑しんだのは當然であつた。和歌から岐れた連歌も同樣である。

尤も記紀、萬葉時代の歌は極めて自由で、神武天皇の大和平定の際の御製をはじめ、食物を詠み込んだ歌は澤山あり、殊に酒の歌は大伴旅人の讃酒歌を筆頭に甚だ多く、純朴な上代人の生活をさながら反映してゐるのであるが、平安朝以後和歌が作者の生活を遊離した雅びわざとなるに及んで、題材も思想も殆どよそゆきのものとなつてしまひ、物を食ふなどゝ言ふあられもないことは、紳士淑女の口の端にのぼるべくもなくなつたのである。

古今集以後の歌集を見ると、若菜摘む、芹摘む、瓜作る、貝拾ふ、魚とる、漁す、鱸釣る、鯛引くなどと言ふ歌は固より少くないけれども、それは採取もしくは栽培の行爲を主に歌つたものであるし、又蕨萠ゆ、鮎走る、氷魚寄るなどと言ふのはその形狀姿態を描したもので、共にそれらの食味が主眼となつてゐるのではない。桃、李、梨などは、何れも花は詠まれてゐるが、實は詠まれず、柿もたま〳〵共紅葉が歌はれるばかりで、實は之亦除外される習は

しだつたらしい。栗の實の歌は幾らかあるが、風に落ちるところなどが趣向になつてゐるので、食物としての性質は稀薄である。纔かに口に入れるものでは、酒と藥の歌が除外例的に存在するけれども、之とて大概は菊の酒とか、仙人の藥とか言つたたぐひであるから、頗る浮世離れがしてゐる。

往昔の歌人が食物を毛嫌ひした態度は、かくも細心に、かくも徹底したものであつた。食ふと言ふ動作を直接に歌ふのは勿論、苟も食慾を聯想させる樣な事は力めて避けた樣に見える。人間の二大本能の中、戀愛の歌は當然以上に重んぜられたのに反し、食慾の方が無慚に壓迫されたのは、誠に奇妙な對照である。昔の歌がいかにも單調で、よそよそしく、滋味に乏しく感ぜられるのは無理もない次第だ。

食物が再び詩歌の世界に堂々と這入り込んで來たのは、俳諧以後のことである。俳諧は純然たる民衆詩として生れたものである。舊來の和歌や連歌の見落してゐた民間卑近の事象を、何でも拾つて詩化するのが俳諧の特權であつた。されば歌人の食はず嫌ひの食べ物も、俳人にはどしどし消化されて、彼等の榮養分となつたのである。芭蕉の句を見ても、

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

鎌倉を生きて出でけん初鰹

身にしみて大根からし秋の風

あら何ともなや昨日は過ぎてふぐと汁

など、有名な句だけでもまだ澤山ある。

ここで歌人の方も食指多少動いたものか、江戸時代の中期以來、歌壇に革新の氣運が生ずるに及んでは、食物に關

する歌がぼつ〳〵現れて來た。併しそれは寧ろ例外と言つてい〻程少いのみならず、内容も大半はつまらぬもので、畢竟歌人の舌は俳人の舌よりも遙かに鈍感であつたと言はなければならぬ。それでも幕末になるに從つて、此種の歌は漸く多きを示し、且注目すべき作品を遺した人もないではない。良寛や曙覽や言道等は、その著しい者である。彼等こそは實に、題材思想共に全く解放された現代短歌の先蹤をなした尊むべき先覺者であつた。斯くて近世諸歌人の食物に關する歌を調べることは、とりも直さず近世に於ける和歌が、中古以來固定した傳統的な詩材と類型的な思想を離れて、どの程度にすなほに現實生活を歌ふに至つたかを測る一の有力な鍵となるわけであり、又そこには作者自身の意識するとせざるとに拘らず、俳諧が和歌に與へた影響と言ふ問題も孕まれて來ると思ふ。

近世歌壇における革新の事業は、歌學歌論の方面は姑く措き、實際の作品の上で其實を擧げ得たのは、言ふ迄もなく賀茂眞淵を以て劈頭に推さねばならぬ。彼は虚飾の多い古今、新古今の後世風の歌を排して、純眞な萬葉乃至記紀の上代風への復歸を實現した最初の人である。然しながら彼の歌は概して言へば、未だ上代の歌の形式的摸倣にとゞまり、その自由な精神を内面的に消化して、現實生活を卒直に歌ふ所までは行けなかつた。彼の門人中所謂萬葉派と稱せらる〻田安宗武、楫取魚彥、加藤美樹、荒木田久老等にしても、ほゞ同樣である。故に彼等の歌集から食物に關する新鮮な歌を拾はうとしても、餘り目ぼしい收獲は得られない。

たゞこれらの人々に於て注目されるのは、酒の歌である。窮屈な儒敎道德に反抗し、人間性の解放を目ざして起つた彼等古學者が、理非を超越した陶然たる酒興に神代ながらの日本人らしい滿悅を感じたのは當然で、酒の歌は萬葉派歌人によつて頓に精彩を發揮して來たと言ふ事が出來る。殊に眞淵の「美酒（うまざけ）の歌」の如きは、古代人の樣な純朴な

氣持が、蒼古奇拔な措辭によつて、面白く歌ひあげられてゐる。

美らに喫ふる哉や　一杯二杯　ゑら／＼に　掌底拍ち擧ぐるかねや　三杯四杯　言直し　心直しもよ　五杯六杯　天足らし國足らすもよ　七杯八杯

又かれの代表作として知られる

鳰鳥の葛飾早稲の新絞り酌みつゝをれば月傾きぬ

と言ふ歌も、酒の歌として古今に卓れたものの一つであらう。其他「賀茂翁家集」には、「擬神樂催馬樂歌」として、催馬樂の「酒飲」に擬した酒の歌や、同じく「紀の國」に擬した薯の歌がある。薯の歌は當時にあつて頗る珍とするに足る。

武藏野や　豐島の畑に　眞豐島の畑に　薯引く翁　はれ　其薯賜れ

（二段）引くしも安ければ　參るこそ安けれ　薯守る神も　はれ　其安御饗

門人の宗武、魚彥、美樹、久老等ともに、酒や酒宴を詠んだ歌があるが、魚彥のを一首擧げて置かう。

他國にありとふ酒の泉もがおもふ友どち舟浮べてむ

明らかに萬葉の旅人の讃酒歌の摸倣である。後の幕末期の萬葉調歌人平賀元義や和田嚴足等も、酒を愛して、多くの作を遺してゐる。酒の歌は決して萬葉派の一手販賣ではないが、その十八番であつたと言へよう。

眞淵門下の歌人には、萬葉派のほかに、加藤千蔭、村田春海等の江戶派と、本居宣長の鈴屋派の二系統がある。前者は主に三代集あたりを庶幾し、後者は最も新古今集を理想とした。兩派の間に歌風の相異、歌論の扞格はあつたけ

れども、共に中古以來の傳統的雅情を堅持する事は同様であつたから、食物の歌で特筆すべきものは見當らない。併しこれらの人にも、酒を詠んだ作は少しづゝある。一體に酒だけは、窮屈な歌の世界でも木戸御免で、近世の大抵の歌人が詠んでゐるのである。

加藤美樹に暫く師事して、後一家を成した上田秋成は、茶人であつただけに、茶を煎る歌があり、又食物ではないが、烟草の歌もある。煎茶の歌は春海にもある。茶は風流なものだから、一般に酒に亞いで比較的多く詠まれてゐる様だ。

畢竟眞淵一派、所謂縣門歌人では、食物の歌に關する限り、やはり萬葉派に比較的特色があつたと見ねばなるまい。のみならず歌風全體としても、其派の歌が最も革新的色彩が鮮明で、將來への發展性を持つてゐた事も、疑ふべからざる事實であつた。

江戸を中心とした眞淵一派に對抗して、やゝ後れて京都の歌壇に革新の聲を擧げたのは、まづ小澤蘆庵のたゞごと派であり、ついで其繼承者たる香川景樹の桂園派であつた。彼等は固陋なる堂上派の因襲を排する一方、縣門の萬葉派が徒らに死語を弄して擬古を事とするを難じ、又江戸派が專ら雅情に固執するのをも斥けて、歌はたゞ自然の感情を、雅俗にかゝはらず、平易の語を以て詠出すべき事を力說した。歌論としては甚だ自由で進歩的である。併し實は蘆庵も景樹も、一方にはやはり古今集を模範と仰ぐ信念が根抵になつてゐた爲に、議論の上にも矛盾が生じ、歌風に於ては更に一層微温的にならざるを得なかつた。蘆庵の

　いにしへは大根(おほね)薑(はじかみ)韮(にら)茄子(なすび)蒜(ひる)乾瓜(ほしうり)も歌にこそ詠め

と言ふのは、歌材の自由を主張した有名な歌であるが、夫子自身韮や薹等を詠んだ歌は、生涯此一首しかないのだから皮肉である。景樹とても同樣で、歌の調べは俗談平話にあると言ふ彼の大膽な意見に似合はず、其作品の用語も歌材も餘りに狹いのには、意外と言ふより外はない。

二人とも食物を詠んだ歌は絶無に近いが、しひて求めれば、蘆庵の

栗も笑み柿も色づきうなゐらが誇らしげなる時も來にけり

などに多少の新味が感ぜられる。栗も柿も古來の重要な食品で、殊に柿は形、色、味ともに頗る美しく、その樹に生つたさまは、いかにも日本の秋を象徴するにふさはしい好畫圖であるにかゝはらず、歌人からは全く閑却されて來たもので、其意味で此蘆庵程度の作も珍重せねばなるまい。蘆庵以後でも、明治以前には柿の歌は不思議な位稀である。俳諧では古くから盛に詠まれて、名句も多い。柿の持味の野趣が俳人には喜ばれ、歌人には疎んぜられたのであらう。かう言ふ所に、歌と俳諧との本質的な趣味の相違がはつきり見られるわけだ。

景樹の歌では、

わが齡昔の數にかへらめやこの煎り豆に花は咲くとも

と言ふのが奇拔である。但これは「桂園一枝」の俳諧歌の部にあるので、作者もことさら滑稽に詠んだものであることが知られる。豆はやはり俳諧の領分で、歌には極少い。況んや煎り豆を詠んだのは恐らく空前であらう。

景樹の門人の熊谷直好や木下幸文になると、一寸變つた題材が見えて來る。直好には、近江蕪、初茄子二つ、鼠節分の豆をはむ　などと言ふのがあり、幸文には、海鼠や河豚の歌がある。作の内容は兎も角として、やや俳諧的な題材に接近して來た事が感ぜられる。

大根(おほね)には白き腕(ただむき)たゝへたり妹が乳房を今や思はむ（近江燕）　直好

ものいはぬ物ならませば問ひてましかくても思ふ事はありやと（海鼠）　幸文

海鼠は既に俳句の方に

尾頭の心もとなき海鼠かな　去來

思ふこといはぬさまなる海鼠かな　蕪村

などゝ言ふ先例があるので、幸文の歌は引つ立たないのみならず、それよりもたるんで見える。一體に歌と俳句とが同じ趣向を覗つた場合、多くは俳句の方に分(ぶ)がある樣に思ふのは、私の依怙贔負であらうか。

酒の歌では、直好の

ひとりしてわが酌む酒に限りなき春の心はこもりけるかな（心靜酌春酒）

が平淡温雅な彼の歌風をよく示してゐると思ふ。幸文の有名な貧窮百首にも、

古の人の飲みけむ糟湯酒われもすゝらむ此夜寒しも

と言ふのがある。貧窮百首は屡〻後の橘曙覽の獨樂吟と對照されるものであるが、獨樂吟がいろ〳〵な食物を縱橫に詠みこなしてゐるに對し、貧窮百首の方は此糟湯酒の歌が一首あるに過ぎない。而もこれは萬葉の貧窮問答の歌がお手本である。比較的生活心境を卒直に歌つたと稱される此百首さへ、曙覽などに比べるとこれ丈の開きがあるのである。

斯くて近世歌壇の二大勢力たる縣居派といひ、桂園派といひ、共に食物の歌には見るべきものが甚だ乏しいのであつて、それだけ現實直寫の態度がまだ不十分であつたと言はざるを得ない。然るに之等中央の諸歌人に比して、歌壇

的勢力は取るに足らなかつたが、眞に生活に徹した歌を數多く遺し得た最初の人は越後の僧良寛であらう。彼は萬葉を愛したけれども、その法格に囚はれず、自在に自己の環境と感想とを詠出した。食物の歌も實に彼を俟つてはじめて豐富なるを見るのである。これは一面には、彼が衣食を他人の喜捨に仰ぐ沙門の身であつた事にも因るのであるが、やはり萬葉の精神が深く彼の心に溶け込んでゐたからであらう。さまざまな食物の歌を通して、融通無碍な而もつゝましやかな清僧の生活が、彷彿として想見されるのである。

飯乞ふと我が來しかども春の野に菫摘みつつ時を經にけり

飯乞ふと里にも出でずなりにけり昨日も今日も雪の降れゝば

出家の彼は固より托鉢が生活の第一の手段であつたので、飯乞ふ歌はこの外にもまだ澤山あるが、其他の歌を少し擧げよう。

梓弓春の山邊に子供らと摘みしかたこを食べばいかゞあらむ

越の海野積の浦の海苔を得ば分けてたまはれ今ならずとも

ちんばそに酒に山葵にたまはるは春は寂しくあらせじとなり

飫きて食べつみさきてたべ割りてたべさて其後は口もはなたず（人より石榴を贈られし時）

わがためにあさりし鮒をいなだきておとしもつけず食しにけるかも

今日も亦海棠の實を食みに來ぬえ隠れたまへ我かへるまで

久方の　雪かき分けて　刺竹の　君が掘りけむ　さ百合根の　さ百合根の　其さ百合根の　あやにうまさよ

貧しいながらも、周圍の人々の敬愛の裡に安らかに生きてゐた滿ち足りた心境がよく出てゐる。殊に石榴の歌や海棠の歌は童心がさながら流露して、奇想天外と言ふべきであらう。この僅かばかりの歌を讀んだだけでも、彼の生活がいかに簡素な自然を基調としてゐたかゞ判る。言ふまでもなくこれらの食物は、何れも從來の歌人に嘗て詠まれなかつたものか、或は古代の歌に現れたまゝ後世永く閑却されて來たもののみである。蘆庵が「古は大根はじかみ云々」と歌つた理想は、蘆庵自身や其後繼者によつては實現されず、無緣の良寬によつて不言實行されたのである。

酒の歌も良寬に多い。

百鳥の木傳ひて鳴く今日しもぞ更にや飮まむ一杯(つき)の酒
大御(み)酒(き)を三つき五つきたべ醉ひぬ醉ひての後は待たでつぎける
陶物(すゑもの)に酒を携へ足曳の山の大根を食(を)しに來しわが

の類である。

要するに良寬の歌は悉く其體驗の所產でないものはない。題材の制限に氣兼ねしながら、作らんが爲に作つた他の歌人の作とは全然其選を異にする。彼こそ近世における生活派の歌人の先驅と稱すべきであらう。

以上は化政度迄の諸歌人であるが、更に天保以降幕末の諸家を見よう。前代から次第に培はれて來た自由革新の氣運は、此時期に入つて顯著となり、個性の明確な現實的な歌人を生むに至つた。近世和歌史上、比較的多彩な作家作品の輩出したのは此時代である。

まづ萬葉調歌人の代表者として平賀元義、和田嚴足、鹿持雅澄の三人を見よう。雅澄は姑く措き、元義と嚴足は共

にその奇僻な或は剛直な性行の爲に世に容れられず、轗軻不遇の生涯を終つた人である。彼等の不平憂悶を癒すものはひとり酒あるのみであつた。元義には、

久方の月に向ひて吾妹子と飮む盃に梅の花散る

杯に散りこもみぢ葉風流（みやび）士が飮む盃に散りこもみぢば

天照皇御神も酒に醉ひて吐き散らすをば許したまひき（門人高階謙滿の宅にて宴飮せし時）

以下酒の歌が極めて多い。神代の故事を引合ひに出して醉態を辯解するなどは、いかにも奇人元義の面目を躍如たらしめるものがある。彼は實際はそれ程酒が強くなかつたのだが、ことさらに豪酒を裝つて、ますらをぶりを發揮したのだと言ふ。

嚴足も其名が泉樽の意に基づくと言ふ程の酒客であつた。

大伴の旅人の君はまさねども月待つ程の友はありけり（獨酌一盃酒）

大伴の旅人の君しましまさばなど鹿子じもの獨り飮むべき

酒飮まむ友どちもがもしく／＼に雪の降る夜は淋しきものを

などのほかに、酒に關する長歌が若干首ある。九州人の彼は、大伴旅人を隔世の心友と慕つてゐたらしい。

此二人と異ひ、篤實な典型的學者であつた雅澄も亦屢々酒を詠じた。

銀も黄金も玉もよしゑやし飮みての後は欲しけくもなし（題酒瓢）

には生涯貧困と戰ひながら、萬葉集古義の完成の爲に、孜々として倦む所を知らなかつた敬すべき學究生活の半面が窺はれる。

かやうに二人とも酒の歌は少くないが、それ以外の食味の歌は幾らもない。元義には

美作や大原山の山つ薯こきだく食ひて吾は肥えにけり

わぎも子は茅花をこゝだ食ひけらし昔見しより肥えましにけり

などと言ふのがあり、又食物そのものを詠んだのではないが、それに因んだものとして

牛飼の子らにくはせと天地の神の盛り置ける麥飯の山（備前國麥飯山を詠める）

天地をつくり固めし皇神のもりておかしゝ飯岡ぞこれ（美作國飯岡を詠める）

などにも、古學者らしい面目が出てゐる。羽生永明氏の研究によると、元義は食物の選擇にむづかしい人で、大の麥飯嫌ひ、魚類は鯛などを擇み、鰯の如き下魚は一切口にせず、蔬菜類を好み、殊に薯蕷汁、玉子酒、鷄卵等精力のつくものを常用したと言ふが、さうした嗜好が作品の上に十分現れて居ないのは物足らない。

雅澄には人から鰻を贈られた時の長歌がある。其反歌を擧げよう。

羸瘦に瘦せし吾が身も給りたる鰻を食めば肥えざらめかも

此歌及び前の元義の「わぎも子」の歌が、共に萬葉にある家持の鰻の歌（卷十六）、茅花の歌（卷八）を、粉本としてゐる事は言ふ迄もあるまい。又雅澄は土佐の柏島の名物鮪の板肉を贈られた時にも、長歌を作つた。板肉の製法と調理法とを詳細に叙して其美味を讃へたもので、四十七句の長きに及んである。

此鮪の歌と好一對をなすのは、安藤野雁の堅魚の歌である。野雁も萬葉の研究家で、性酒を愛して奇行に富んだ薄倖の漂泊歌人として、元義と其風格が似てゐる。彼は短歌の作風から言ふと萬葉派とは言へないが、長歌は固より萬葉調で、種々奇拔な題材を詠んだ中に、初鰹を詠じた七十五句に亙る長篇の作がある。

……あざらけき　うまし此魚　若鰭の　小鯵の初魚　よき人の　よしときこして　善き價　くだしたび　買ひませる　此新
眞魚を　眞魚刀　八段つき分け　初切れは　神にまつり　末へらは　人にも賜び　三栗の　中のうまし身　薄枚に　八枚か
きへぎ　切目よく　作り重ねて　春蒔の　大根の磨根　水蓼の　青葉取りあへ　初垂の　濃水しづかし　うまらに　きこし
もちをせ……

と言つた調子で、長々と鰹の刺身を禮讃したものである。俳句や川柳の簡潔ないきのいゝ初鰹に比べると、歌人の方は流石に悠長極まるものだが、兎に角歌で初鰹を扱つたのは珍しい。尤も鮪も鰹も、言葉としては既に記紀や萬葉の歌に散見するので、雅澄や野雁がこれらの魚を取上げたのも、おのづからさう云ふ古典の聯想が働いてゐたかも知れない。

かくて幕末期の萬葉派の歌は、やはり作者の古典的教養と、古代の單純性を熱愛する氣持とから、萬葉乃至記紀的題材に跼蹐して、複雑多種な近代的味覺に疎遠の憾みを免れなかつたが、それでも眞淵時代に比べると、遙かに現實的になつて來た事が知られるのである。

次に鈴屋派乃至準鈴屋派の歌人として、足代弘訓、加納諸平、古岳幽眞、黑澤翁滿、中島廣足等を眺めると、之も宣長時代よりは多少題材が擴張された事が認められる。諸平に一二の例を求めると、

大方は秋ともしらぬ山がつが笥にもる飯は木の實なりけり　（熊野旅行の際）

あはれこの賤が垣根の若なすび實さへ花さへ紫にして　（茄子のかた）

など言ふのがあり、又「豆腐をさかなにて夜々酒のみて」とか「天王寺蕪と烏芋とをかけるに」等と言ふ變つた題もある。廣足には「詠茶歌」と言ふ長歌がある。茶を詠んだ短歌は幾らもあるが、長歌は少い。

酒の歌はこれらの人々にも中々盛んで、短歌はもとより、弘訓、翁滿、廣足等にはそれ〲長歌もある。今短歌若干首を抄出して置く。

千代の數かさねかはらけ手に取りて藥酒のむ春は來にけり（屠蘇）　弘訓

われ醉ひぬ今はひさごを鼓とも打ちてや月のかげに遊ばむ（八月十五夜和歌の浦にて）　諸平

山里の春の設けの糟湯酒みさかないづら菟芽子莖立（山家春）　幽眞

醉ひみてる心の富の豐けさは黃金も玉も思はざりけり　廣足

京都に住んで桂園派と交渉の深かつた千種有功にも、「倣大伴卿讃酒歌十三首」の作がある。旅人の酒の歌は、後世に影響する所極めて大きかつたわけだ。

有功と共に幕末の京都歌壇の誇りであつた大田垣蓮月尼には、いかにも其人柄と場所柄にふさはしい淸らかな食物の歌が幾首か見られる。

下り立ちて朝菜洗へば加茂川の岸の柳に鶯の啼く

岡崎の月見に來ませ都人かどの畑芋煮てまつらなむ

かばかりの浮世なりけり木枯に落栗拾ひ今日も暮しつ

干柿の軒にやせゆく山里の夜嵐寒くなりにけるかな

の如き諸作を讀むと、菜も芋も栗も柿も、すべてが作者の淸楚な風格に醇化されて、頗る雅致を帶びてゐる。蓮月は京都の自然とぴつたり融合し切つた歌人であつた。

江戸には江戸派の末期を飾る井上文雄があつた。江戸派も此人になると、題材用語がずつと自由になつた。

ほろ〳〵と櫻こぼるゝ田舍道燒米賣る子うす眠りせり

賤の女は晝寢してけり水あまる庭の筒井に熟瓜冷して

落栗を炭櫃に燒きて新絞りのみつゝをれば月も出でにけり

など俳趣の豐かなものが感ぜられる。

近世歌壇における生活派の歌人の双璧として、橘曙覽と大隈言道とを擧げる事は、何人も異存のない所であらう。ひとしく隱逸の歌人と言ふ中にも、曙覽は尊王の念に燃え、稜々たる氣骨に富んだ國士的な風格があり、其歌風も何れかといへば萬葉の古樸味を帶びて、主觀的意志的思想的な一面を持つたものが多いのに對し、言道はあくまで「天保の平民」の境涯に甘んじて寧ろ俳人的な餘裕と諦觀に住した人で、其歌風は客觀的低徊的詠歎的であり、調子は古今風の柔かさ、なだらかさに富んでゐる。併しどこまでも自己の直接體驗を重んじて、一切机上架空の案を立てず、歌人の舊套を捨てゝ自在に廣汎な題材と、新鮮な着想を詠んだのは兩者共軌を一にした。曙覽が藁庵の「大根はじかみ」の歌の精神を理想とし、言道が天保の民何八何兵衞にふさはしい歌を作れと言つたのは、兩者の隨筆歌論に見える所である。これまでの和歌は俳句に比べて題材が狹く、思想も陳腐、觀察も皮相で、單調の弊にたへなかつたが、此二人が現れて、はじめて俳句とほぼ軒輊するだけの新鮮、奇警、複雜味の水準に達したと言へよう。食味の歌を見ても、それは立派に證據立てられる。近世の歌人中、曙覽と言道位さま〴〵な食物を豐富に且大膽に歌つた者はない。良寛と雖も此二人には一籌を輸せざるを得ないのである。

曙覽

夕煙けふはけふのみ立てゝおけ明日の薪は明日取りて來む

今日は今日あらむ限りは飲み暮し明日の憂は明日ぞ憂ひん　言道

この兩首を並べて見ると、彼等の恬淡な生活ぶりの餘りにも著しい偶合に驚かぬ者はあるまい。

曙覽の獨樂吟五十二首は、現實生活を赤裸々に歌つたものとして、彼の代表作たるのみならず、和歌史上劃期的な作品であるが、その五十二首中十三首（煙草を加へると十四首）までが、飲食に關した歌である事は注目に値する。

たのしみは妻子むつましくうち集ひ頭ならべて物をくふ時
たのしみは心にうかぶはかなごと思ひつゞけて烟草すふ時
たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時
たのしみは門賣りありく魚買ひて烹る鐺（なべ）の香を鼻に嗅ぐ時
たのしみはまれに魚煮て子等皆がうましうましといひてくふ時
たのしみは雪ふる夜さり酒の糟あぶりて食ひて火にあたる時
たのしみは炭さしすてゝおきし火の紅くなり來て湯の煮ゆる時
たのしみは晝寢めさむる枕べにこと〳〵と湯の煮えてある時
たのしみは湯わかし〳〵埋火を中にさしおきて人とかたる時
たのしみはとぼしきまゝに人集め酒飲め物を食へといふ時
たのしみは客人得たる折しもあれ瓢に酒のありあへる時
たのしみは木の芽（茶のこと）瀹（にや）して大きなる饅頭を一つ頰張りし時
たのしみは常に好める燒豆腐うまく烹たてゝ食はせける時

たのしみは小豆の飯の冷えたるを茶漬てふ物になしてくふ時

少しも僞らず、飾らず無邪氣なる事かくの如き歌は、實に前古未曾有であつた。正岡子規がこれを評して、

饅頭、燒豆腐を取つてわざ〳〵之を三十一文字に綴る者、曙覽ありて始めて之れあるべし。あら面白の饅頭燒豆腐や。

と言つたのは同感である。曙覽の面目は殆どこの獨樂吟に盡きると言つても過言ではあるまい。

このほか正月十五日に自宅で催した歌會のさまを詠んだ連作十四首も、其中六首までは食事の歌で、

溫めてたゞ一めぐりさする酒あかくなりたる顏つきを見ず

食ふ物は盡くる寒さは強くなる小さき火桶すがり爭ふ

など、其貧寒の狀目睹する如しだ。

酒の歌は御多分に漏れず澤山あるが、就中

とく〳〵と垂り來る酒のなりひさご嬉しき音をさするものかな

は傑作である。古來酒の歌多しと雖も、これ位上戶の實感に訴へるものは滅多にあるまい。

彼には人から珍味を贈られたり、もてなされたりした時の禮の歌が多い。其種類は、鮒、鯉、鵜の肉と梅酒、海苔、獨活、筍、蕎麥、松茸等に及んでゐる。又別の場合として、梅の實、魚、豆腐、及び烟草などを詠んだ歌もある。左に松茸の歌と梅の實の歌とを示さう。

秋の香をひろげたてつる松のかさいたゞきまつる諸手さゝげて　（松平春嶽より松茸を賜はりし時）

雨つゝみ日をへし編戶あけ見れば摽ちて梅あり其實三つ四つ

松茸は萬葉集には例があるが、後世の歌人には顧みられず、專ら俳諧の繩張りとなつて來たものであり、梅も花が

珍重されるにひきかへ、實は纎子扱ひを受けて、殆ど俳人に一任の形であつたもので、近世の歌人でも曙覽以外に之らを詠んだ人は、ほんの數へる程しかない樣だ。海苔や蕎麥等にしても同樣である。

言道の歌は曙覽よりも更に取材の廣い點に於て、抽んでてゐる。彼は其生活態度に於て、又其作風に於て、最も俳人的な歌人であつた。それは歌材の上にもはつきり現れてゐる。食物に緣のあるものを拾つて見ると、酒、飯、餅、茶、湯をはじめ、魚介類では、白魚、蛤、飛魚、太刀魚、鰯、海鼠、鯛、鯉、鮒、植物では獨活、海苔、梅の實、筍、茄子、瓜、唐瓜、桃の實、梨、芋、ぬかご、間引菜、柿、豆、栗の實、椋の實、柘榴、蓼の穗、葱、蕪菁、干菜等の多種類に亙り、其他葛水、蕎麥湯等もあれば、更に米櫃、俎板、箸の歌まであるのは振つてゐる。就中酒の歌は數十首に達して枚擧に遑がない。酒に醉つて川に落ちた時でさへ、

水に身をはめてもこよひ面白き心は何の情なるらむ

と歌つた程の徹底ぶりを示した。彼も亦酒と歌に生き甲斐を感じてゐた人であつた。

なき時はなくて幾日か過すらむある日は酒のあるに過ぎつゝ

たへがたき明日の枕も知りながら飮むに果なき今日の酒盛

醉ひぬるを見ては笑へどたゞ獨り醒めたる人も可笑しからずや

歌人に酒はつきものであるが、言道位あまたの酒の歌を遺した人は、類稀であらう。

酒と共に茶を頗る愛した事は、其多くの作によつて知られる。

木の芽煮る庵の寒さもいちじるく見えまさりたる湯のけぶりかな

他の歌人に比較的少い筍、瓜、栗の實の歌が言道に甚だ多いのも彼の特色である。

なにとかや人ごころして親のもと引き放ち憂き園の竹の子

なにとかや淸きわらはの面に似て手にもとらるゝ畑の白瓜

ちりしける落葉の中の手さぐり(栗)も筐に滿てる秋の山づと

其他食物に關係ある歌若干を擧げよう。

おのがどち向ひ合へるも知らずして口閉ぢ果つる灘の蛤

いづくにか我が身來ぬると思ふらむ市にまろべる灘の蛤

わりて見る度に面白しいつも〳〵並べるさまの同じさや豆

はきだめの塵の下なる芋すらも子は親にこそつきてありけれ

秋の雨の淋しき時は友もなし海苔を火にあてゝ獨りこそ飮め

煮ゆる湯に蕎麥かき立てゝたゞ獨り霰の音を聞く夜のまかな

庵一ついと狹けれどもちいひを世の人なみに並べつるかな（歲の暮）

やがて又底あらはれて味氣なし鼠も食めるよねの白櫃

數知らぬ魚の命を板の上の刀のあとにしるしぬる哉（爼板）

泣くものは大人にならじ泣くものは柿も與へじ梨も與へじ（童謠）

これらの少數の例を見ただけでも、言道の歌が著しく俳諧的題材に滿ち、又作者の物の見方、考へ方、延いては其生活態度が俳人的であつた事が察せられよう。彼がどの程度に俳諧に造詣があつたかは判らないけれども、彼の歌風は

歌と俳諧との接近と言ふ問題に就て、興味あるヒントを與へるものと言へると思ふ。

飜つて言道、曙覽及び良寛の三人を通觀すると、彼等には戀歌と言ふものがない。戀歌を作るのは千年來の牢固たる傳統で、體驗の如何にかゝはらず、義理にも戀歌を作らぬ歌人はなかつたのに、此三人はそれがなく、反對に他の歌人達が忌避した食物の歌を平然と詠んだのは、實に面白い現象である。彼等があくまで體驗に立脚し、現實を尊重した態度は此一事でも明らかであらう。

以上近世の代表的な歌人の食物に關する歌に就て、主に題材の上から極めて概略の觀察を下したに過ぎないが、之によつて見ても、過去に於て和歌の傳統と言ふものが、如何に根強く彼等を支配してゐたかゞ痛感される。元祿の戶田茂睡以來各時代の幾多の歌人によつて、勇敢なる革新的意見が吐かれたに拘らず、彼等の實際の作品は概ね之と作はず、結局議論倒れに終り、眞に言行の一致したのは、幕末までに曙覽、言道等二三の人々に過ぎなかつたのである。其人人さへ食味の歌に關する限りでは、なほ俳人を凌駕したとは言へなかつた。春の田樂、夏の西瓜、秋の秋刀魚、冬の河豚汁など俳諧の珍味で、遂に歌人の口に上らなかつたものは限りがない。

唯いさゝか和歌の爲に辯ずべきは、其形式である。俳句は形が印象的で、例へば「梅若菜鞠子の宿のとろろ汁」と言ふ風に、材料だけ並べて其間を一二のてにをはで繋いだばかりでも句になるが、歌は元來說明的である性質上、食物の場合であればおのづから「食ふ」とか「うまし」とか言ふ樣な露骨な說明語が加はることになり、俳句の樣に言外に含蓄を持たせる事の困難な事情がある。此點が自然と歌人をして食物に近寄らしめない一因となり、又その種の歌に傑作の乏しい一因ともなつてゐるのではあるまいかと思ふ。

景樹研究の新資料「桂園聚葉」紹介

相原弘

帝國圖書館に桂園聚葉と題する筆寫本がある。景樹研究の諸書を檢するに、本書に就いて未だ何等の記載がないやうであるから、玆に紹介する。

本書は香川景樹の歌文集であるが、體裁は半紙判七冊で、毎一冊の紙數は六十數葉、內容は景樹の歌文を四季（夏部を缺く）戀、雜に分類したものである。景樹の歌文を年代順に集大成した尨大な桂園遺稿（明治四十一年刊、上下二冊、菊版各八百數十頁、彌富濱雄氏編）に洩れたものも少くない。例へば

文化元子年正月元日ひれもす雨ふりくらしよろこびいふ人もなしつれづれとながめをりて

思ふ事あはぬ板間のいたづらに又くらすべき年はきにけり

の如きは桂園遺稿に洩れて居る。尤もこの歌はかるかや集（續日本歌學全書第五篇、香川景樹翁全集下卷所收）に載つてゐるが、

文政十三年寅年試筆去年生れし子を見て

老の身もまた立ちかへり翠子のむつきのけふをいはひつるかな

の如きは他書に見えないものである。

おのれいと若かりしむかしある元日のあした爐邊によりて

年こえて今はとたゆむねぶりこそ先づ怠りの始なりけれ

とよみ捨てしを蘆庵翁後に聞きつたへて

たゆみぬと思ふぞやがて行末の身のおこたらぬはじめなるべき

とよみて贈られたりきこの事を此ころ藤田維中ぬし聞出でゝ書い付けくれよといへるにさてかく書つゝるまに〳〵いとはかなくもなつかしき懷舊の情にたへず

老いにけりつひに心のおそ馬は鞭うたれつるかひもなくして

右の中「老いにけり」の歌は桂園遺稿天保七年（下卷二〇頁）に題しらずとのみで記載せられ、桂園一枝拾遺には雜部に寄馬述懷とて收めてあるが、今本書によつて其の詠出の動機が分明になるのであり、「年こえて」「たゆみぬと」の二首の如きは未だ他書に見られぬものである。

天保八戊年歲旦の吟

老いぬともしらずば春も春ならじ何そは年を算へ始めけん

元日の夕暮かたに

あら玉のことしも暮るゝはじめとやがて入相の鐘の聲する

何れも未知の歌であらう。

きのふ難波にとゞまります父君より文おこし給ひけるひらき見れば六十の春を迎へとはし書有りて

はる〴〵と思ひし老の坂もやゝゆく末ちかく越えぞ來にける

と書き給へるをふと涙こぼるゝまであぢきなうかなしう覺え千世もと歎く人の子の爲とのたまひけん昔の人のこゝろ根さへ思ひしり侍りぬ　これより增して哀におもひ奉るべきふしぐ常にいかで多からざらむ　けふのみ子めきたりとかたはらに笑はんとなかく面輝く心地していと忍びに

人の越す老の坂なるつゝらをりなぞ我ために苦しかるらん

景樹の養父景柄は文政四年七十四歳で歿して居るから、逆算すると、この年は文化四年となる。景樹が養家梅月堂を去つたのは文化元年三十七歳の時で、この歌は四十歳の作である。己を生かす爲に敢て養家を去つたものゝ養父に對する親愛の情の深かつたことは、此詞書と歌とによつて明かである。

酒飮みて足ること知らば仙人の遠き齢も何か求めん
酒飮みて足ること知らばよに人の高き位も何かもとめん
酒飮まぬ人の醉こそ悲しけれ醒めはてつべき時のなければ

景樹は生來蒲柳の質であつたに關らず、仲々の酒好で、景樹の生涯は徹頭徹尾歌に終始したのであるが、歌の次に因緣の深かつたのは、――それは病とさうして酒とであつた。

彌生十六日の夜清水の花のもとにて
久方の雲に乘りたる心かな花の上にて遊ぶ今宵は
霞めく霞みはてずば花蔭に見捨てられめや春の夜の月
盛なる花と月とを殘しおきて歸る心は歸るともなし

景樹に花の歌は數多いが、此歌の如き、傑作とは云へぬまでも佳作とは云へよう。

景樹と頼山陽との交友に就いては知る人も多いであらう。そのことは桂園一枝やかるかや集に見ても知られるのであるが、次の詞書及歌は未知のものである。

杏坪先生再び智恩院の花を訪ひ給ひし日甥なる山陽ぬし我岡崎の家に入り來て論なく引立て丶出で行く梅颸の君さへおはし待ち侘び給へるも辱し　例の奥心なく醉ふける程時も彌生の晦日方なりければ並木の櫻二木三木わづかに盛なるさらば心打ちみだれたる夕まぐれ唯ならんや

咲く花も散るを盛と思ふらしけふ心ある人を待ち得て

さて門を出て

白河の流の末は暮れはて丶朧に見ゆる大比叡の山

杏坪は山陽の父春水の弟、卽ち山陽の叔父であり、梅颸は春水の妻、山陽の母で、春水歿（文化十三年二月）後の號である。山陽が母を奉じて廣島から上京したのは數度あるが、此歌は恐らく文政十年の時の作であらう。

このころ思ふ心有りてつかさ位ときぬべう思ひ煩ひて

人うとむ門には市もなさゞりき世をあき物といつ成りにけん
名に溺れ寳に沈む空蟬の世の人なみに我やなりなむ
敷島の道の長手のながければ宿かす里もなくなりにけり
一筋に思ひ立ちてもたらちねの別の道はふまれざりけり

景樹が德大寺家の斡旋によつて從六位下長門介となつたのは享和三年三十六歳の時であり養家梅月堂を去つたのは其翌年であるから、此歌共は恐らく此頃の作であらう。數多い述懷歌の中でも特に感慨深き作である。

三日曉子うみたり

子をもちて今日より親になりにけりをかしきものは世にこそありけれ

四日　玄如いと思ひかけずをとつ年よりいつきしまに庵居すとなり　ことしの春おのれ國に歸れりと聞きてまうで來るとなり

吾宿の花の盛に子はうまれ思ひもかけぬ君は來ませり

景樹の男兒茂松は享和三年六月の出生であるから、此歌共はそれ以前の作でなければならぬ。今桂園遺稿享和二年二月八日の條を見ると、景樹が二條聞名寺なる香川家累代の墓所に詣でた記事がある。傍の小さき墓石を見て始めは何人のとも思ひ出し得なかつたが、やゝあつて四年ばかり前に生後間もなく死んだ我子のであることを思ひ起したといふのである。或は前掲の歌に詠まれた子はこれであるかも知れぬ。若しさうならばこの歌は寛政十年頃、景樹三十一歳頃の作となるのである。而て景樹が香川家に入つたのはこの年であるから、生後間もなく死んだ兒が香川家の墓所に葬られた事實に徴して、先づこの推測は當つてゐるであらう。

景樹が享和三年に男兒茂松をもうけながら間もなくこれも失つたことは人のよく知る所でその時の景樹の悲歎は非常なものである。然るに翌文化元年に女兒を擧げたことが本書によつて知られる。

九月廿六日　家刀自よべよりその氣ありてけふ晝つかたをみなの子生みたりいとやすらなれどさすがに立ち騒ぐめり去年いにし子生れ歸り來つらんとのみ下思ひに待ち居るにをみなにしあればかの子の名殘けふはじめて給ひにたることちするに顏さへ似つかず見ゆ

めづらしみかつは嬉しみ思へども悲しきかたのまさるけふかな

十月二日　六日たりとかいふ日にて人々つどへり　七夜といふ意を人々とともに
生すゑの幸のかぎりを思ふとていまだ名をさへ付けまどひつゝ
などいふうち重明ぬし入來たまひおくりたる家より名をつくるものなりとてとうでゝ給ふを見れば幸と有りけるに打
ち合へりけり

これは迷信に從つて生兒を捨子にしたのを隣家の主人が拾ひ上げて送り屆けたのである。吉利支丹馬天連と罵られ天狗と憎まれ強情我慢の代表的人物の如く考へられた景樹も我子の愛の爲にはかうした迷信にさへ從ふ氣になつたのであらう。兎もあれこの新發見の詞書と歌とによつて、桂園遺稿文化二年二月十九日の條「をさなきが始めての雛祭」はこの女子のであることが知られるのであり、又同年九月二十六日の條「去年のけふ生れ出でたる日なりとてあたりの子さへ來つどひて賑し」の詞書で「冬ごもる山里なれど若草の妻と子の顏笑み榮えたり」もこの子のことであることが知られるのである。さて景樹に女兒孝子があることは桂園一枝・桂園遺稿によつて知られることであるが、玆にある幸子と別人か否かは尙研究の餘地があるけれども、孝子は文政二年に人に嫁して居り、而て幸子が生きて居れば同年には十六歲に達してゐる筈である。而て景樹が妻包子の臨終を記した「またぬ青葉」（文政三年）に見える「十八年むかしの冬なりけらしなき人（註妻包子）ひそかに詣でゝ（註淸水觀音）わが爲にをみな子一人えさせ給へとこひ祈りけん、其月よりはらみそめて生みけるはすなはち今の孝子なりけり」の一文に徵すれば、幸子と孝子と同一人であると斷定してよささうである。

若かりし時岡崎のほとり遠乘りして顏よきをとめを見給ひしが年經て今の家に移られしころ
若草を駒にふませて垣間見し少女も今や老いやしぬらん

この歌は桂園一枝戀部に題しらずとして收めてあり、桂園遺稿には文化三年四月五日の條に「思ひ出づることありて」といふ詞書の下に三四句「垣間見に見しその少女」として載せてある。されば作歌の具體的事情は從來全く不明であり、從つて井上通泰博士の南天莊襍筆中桂園一枝管見にも、この歌を想像の作とされたのは無理からぬことである。さてこの歌が文化三年四月五日景樹三十九歳の作であることは桂園遺稿によつて明かである。又、「今の家」とあるは當然岡崎である。景樹が乘馬を稽古したことは彼自身桂園一枝講義（桂園遺稿下卷所收）に述べてゐるから疑ふ餘地はない。（「何ごとも此の頃にはと思ひつる三十の年のはてぞかなしき」の解參照）二十代の青雲の志に燃ゆる青年歌人が若草の野を馬に乘つて逍遙した光景は思ふだに微笑を禁じ得ないではないか。

女のもとへ

はかなくも見つる三とせの夢よりもさめし今朝こそ悲しかりけれ

物をのみ思ひあまりて我涙つひに雨とぞ降り出でにける

昨日よりけふはしげくもなりぬなり宿の梢の若葉ならねど

何れも戀の歌である。何時如何なる時の作であるかは今の所不明である。

若きよりいとかなしうしてまかりかよひけるあそびの去年の春にか有りけむ安藝の守なる人の妻（め）と成りてのちはことたえてはた心も通はざりけり　さるに今年秋の頃みそかなる所より文おこたり（本ノマヽ）ければゆきて物ごしに語らひぬ　賴み渡りし人も先つ頃はかなくなりに給ひければ今はよるかたなう姉の家に歸り居る程にて侍り　うなひより見馴れ參らせし名殘しも在しまさば心ばかりのよすがともたのみ聞えまつらんにいかで一むきに否み給ふべき　人に仕へたるかぎりも大かた耳はさみ勝ちにゆふべは糸車繰りならしあしたは庭草引きてまめ心露も失ひ侍らざる　道々しきかたに

はすゝみがちに物し給ひて一とせ別れ參らせし際にもさるかたざまのことをのみをこそ教へのたまひ返したれ　さるみ心のまゝに甘へ隱ろひてかをりなき顏ばせをふたゝび見えたいまつるもいと〳〵本意にしもあらぬ物から宿世というものゝかく計ひぬるにこそ侍らめなどいとわりなふくだ〳〵しかりしや　とかくする程多にも成りにければいよ〳〵隱るゝ氣ども賴むべうなりくるを安達が原の黑塚とのゝしる人も多かめればさる騷ぎにことつけて川島の流れ一度は去りぬとも水の心深からむには如何なる世をも廻らひて流れ落ちざらめやはなど事賢う慰め置きつる程尙此方樣のくぜちにてかの家にも居り難き事出で來にければ末の湊を待ち渡るたつきにとてもとの流に古るゝ身を沈めたるはいとはかなき宿世の極みなりけり　それがもとへ今日しも年の暮の黃金一包遣しけるはいさゝか疑はしき心しらひをあなぐりもとめ出でゝこれを限りにかゝづらはぬ下心なりけるも我からに惜しうあぢきなし

ありと見し人の誠もあらはさぬわが僞ぞ悲しかりける
契りける人のまことの僞に馴れなとねがふ戀もするかな
世中の人の心にしたがひて君にそむくぞ悲しかりける

景樹は若い頃祇園に遊んだことがあつた。それは梅月堂時代恐らく寬政十一年三十二歲の頃であつたらう。この綿々たる詞書並に歌が何年の作かは不明であるが、詞書から推して相當の年輩になつてからの作であることは分明である。景樹の子に對する愛情の深さは男子茂松を失つた時の悲痛腸を絞るやうな歌文によつて明かであり、妻に對するそれは「またぬ靑葉」の一文によつて明かである。歌の上では敵の多かつた景樹も、家にあつては優しき父であり夫であるに相異なかつた。然し酒の醉に乘じては藝妓の三味線箱に歌を書き付けたり（文政五年）島原の角屋で、白銀造りの鮑形の盞を歌つたり（而も長歌）太夫達に歌を乞はれて夫々の名によせて十人の女達に歌を書き與へたりする（天保

九年）一面をも有つてゐた。師走といふに藝妓を伴つて「夜一夜日一日酒のみうたうたひたはれ」たこともあつた（文政五年）。かうした一面の消息を傳へるものとして叙上の長々しい詞書と歌とは景樹研究上決して無意味のものではあるまい。多感なる歌人景樹の眞情がこもつてゐるからである。

花の歌・述懷の歌・蘆庵や御杖と贈答した歌など、その他にも從來知られなかつた歌が多く見られるのであるが茲には本の主なものを擧げるに止めた。

さて本書は景樹の筆でもその寫本でもないことは書中の詞書に間々敬語の用ひられてゐることで分るが、然らば本書の筆者は何人であらうか。それは本書卷四の次の一文によつて分明である。

長月中の七日てけいとよければ白河のほとりなる勝軍地藏ををがみ奉りがてらかの山にあそばむとわがうしの覺し立ち給ふにさ國ぬしも阿幻法師もおのれ梁岳もしたがひ侍りて出づ

本書の筆者を梁岳とすることに異論はあるまい。但し今の帝國圖書館藏本が梁岳筆の原本であるか、それの寫本であるかは尙疑を存する。それは數箇所「本ノマヽ」なる傍註があるからである。然しそれとても元々景樹の歌日記の筆寫といふ性質上、尙梁岳直筆であるを保し難いのである。

序ながらこの梁岳法師と景樹との關係を述べると、景樹が始めて梁岳と相知つたのは寛政十二年の頃攝津猪名の里でであつた。後攝津中村で共に二時百首を試み、春海の「筆のさが」の槍玉に上つたこともあつた。伊丹の近く三番に住したこともあり、文化二年の頃には久代の久成寺に住し、文化四年の頃には津の國田簑なる七九庵に居つた、景樹より二十一歲の長上で、景樹は梁岳の爲に還曆の賀を行つたこともある。景樹は梁岳に就いて次の如く記してゐる。

「そもく此大德にはいかなる契有りけん七年の昔猪名の里にてなれまゐらせしよりおのれを腹からの如く睦び給ひ子の如く

慈み給ひておのがひが〳〵しきをもおほに見ゆるし給ひ我立てゝいふ歌の道をば佛のみ教へます道のなみにつらねてぞ燐み給ふ　雅につき俗につきてうち〳〵助けなし給へることとあげて盡し難し云々」（桂園遺稿上卷三〇八頁）

と感謝の意を述べてゐる。さてこの梁岳は何歳まで生存したか不明であるが、今桂園聚葉の歌の中で最も後のものは

諒闇の比の正月一日芝山宮内大輔の君より梅花ふゝみがちなる三枝ばかりによみそへて給ひたる

春もけふ立枝の梅のはつ花を君が挿頭とたをりてぞやる

御かへし

世の中の泪に花もたぐふらんかざせば袖にこぼれけるかな

といふ贈答歌である。この歌は光格上皇崩御の翌年卽ち天保十二年の作であることは明かである。此年は景樹歿前二年で、景樹七十四歳、梁岳九十五歳となる。本書の筆者を梁岳とする限り、梁岳は非常に長命であつたと考へねばならぬ。梁岳の作歌に就いては未だ多く知ることを得ないが、桂園祕稿（昭和五年刊・青山霞村編）中、諸子詠草（一七〇頁）に、

深山落葉

木の葉のみ深く積りて足引の山の奥には道なかりけり

同書都鄙五十番歌結に（三十一番）

かつ〳〵も月の照らさぬものならば夜半の時雨を出て見ましや

と見えてゐる。

以上桂園聚葉の體裁內容を紹介し且つ其の筆者に就いて愚考を記したのである。世に景樹を研究する者は多い。然し其の多くは桂園一枝と新學異見とを以て足れりとしてゐるやうに感じられる。續日本歌學全書所收香川景樹翁集や桂園叢書を見る者は少い。桂園遺稿の大册を見る者は極めて稀である。景樹を研究する者は叙上の諸書と共に茲に紹介した桂園聚葉をも是非一見せられんことを願つて止まない。

幕末萬葉調歌に關する一考察

森　敬　三

近世和歌が一般に技巧的類型的である中にも特に戀愛歌は一層その感を深うするが流石に幕末萬葉調歌人の戀愛歌はさういふものにくらべて正に特異性のある事を示してゐる。

今試みに

初戀

さを鹿の音にこそ立てね初尾花いる野の袖に露ぞこぼるる（大平）

といふやうな技巧的な歌を讀んで、更に元義の

わかくさの妻の子故に河邊川しばしば渡る孀の子故に

妹が家の板戸押開き我が入れば太刀の手上に花散りかかる

を讀むとその間餘程の懸隔を感ずるであらう。

前者の譬喩技巧萬能なるに反し、後者は眞に作者の體驗をその儘具象的に發表せるものであり、作者の情感をありのまゝ發露せしめてゐるところに前者の觀念的なると大いに異るものがある。

蕾めるは既に手折れど開きたるはいまだ手折らず守る人多み

などは一種の譬喩ではあるが、流石に元義の歌らしき露骨さがあつて前述の大平の歌の如き典雅優麗味が見られない代りに或種の迫力が籠つてゐるのを認められる。又元義の

荒小田をかへすぐ＼も妹が文見つつし居れば小夜ぞ明けにける

第一句第二句の序詞が非常によく利いてゐて、第三句以下の作者の實感を強く表現せしめて居る。

埋火は消えはてにけり旅にして身にそひぬ可き妹もあらなくに

これは一面旅愁の歌ともいひ得るのであらうが下の句あたりの大膽な表現法が上の句の哀愁と相應じてよき歌ならしめてゐる。

思ふに右に述べた元義の戀愛歌などは近世和歌中の異色であらうが、道家大門の

我家の犬はな吠えそわくらばに背子のわくこがくべきよらなり

眞木之戸之、遣戸少明、阿者待奴、忍來座禰、波志伎吾背兒

盗人乎、犬者吠止、母二云去、吠去共吉、入旦來座禰

妹賀手乎、卷左宿止、夢谷毛、吾見有世者、物不思牟

妹が目をみぬ目の浦の濱久木久しく妹に逢はぬ比かな

の如き歌は元義の戀愛歌に比して一層語句の萬葉風なるを感じ且つ當時一般の戀愛歌とは大いに趣を異にしてゐる事をしみぐ＼思はしめるが、殊に、

足引の山の山守らずあらば君が小床にねなましものを

などは元義の戀愛歌に比してもさして劣らぬ現實味をもつてゐるやうである。尙鹿持雅澄に至つては

吾妹子し待つとしいはば岩根ふみ百重の山も百夜越えなむ

吾妹子し待つとし聞かば荒熊の住むちふ山も越えがてめやも

の如く全く萬葉風の語句を整へ一種の澁滯をさへ感ぜしめる。

人ごとはしゐや言痛く譏すともそれに障りて逢はざらめやも

は想に於て新奇さを認められるけれども、やはり形式のあまりに萬葉的なる、且つ餘りに物々しきを感ぜずにはゐられない。

つむがりの太刀も得てしがわが戀の戀の奴を切り拂ふがね

といふ嚴足の歌はこれも譬喩乍ら想の面白さを認められるけれども、かゝる概念的な表現法よりも寧ろ

妹が門かへり見すれば赤駒のあがくをとしといたたせり見ゆ

などの寫實風のものの方が優れてゐるやうである。

以上の如く萬葉調歌人の戀愛歌といつても、巧拙多様の觀があるけれども、要するに此の時代の一異色であつた事はいふ迄もない。

次に日常生活に於てまのあたり見聞したものを詠んだ歌に至つては近世期には極めて少い。又よしんばさういふものがあつても譬喩を用ひたりしてゐて生々しい感動を盛つたものは稀である。

春の野のやけ野の雲雀牀をなみ煙のよそにまよひてぞなく

眞淵は江戸の大火で自分の家も燒けたといふ悲慘な事件をかういふ歌で表現しようとしてゐるが、これはひとり眞淵丈ではなく當時一般の傾向であつた。

然るに幕末の萬葉調歌中にはたとへば大倉鷲夫の

見₌早馬使之來₋鷲作歌

大江戸に事しあるらし土煙足搔き蹴立てて早馬下れり

の如く、背景たる時代相に基く生々しい事件を實に印象的、刹那的によくあらはしてゐる。上の句と下の句との對照もあざやかであり、殊に下の句は迫力堂々實に名歌である。又元義も

利兵衞が十握の劍遂に拔きて富子を斬りて二きだとなす

利兵衞がこやせるかばねうじたかれ見る我さへにたぐりすらしも

の如く市井の情事に關聯せる一事件をその儘描寫してゐる。たとひその描寫法が幾分洗煉味を缺くものがあるとしても兎も角かかる實際の事件を歌の材料として採つたところにかういふ歌人の特異性が認められなければならぬ。又曙覽にも

人々醉ひくるへるままに大き石ども力を出して抱きもたげ、川中へうち入れてきようありげにするを見て

醉人の水にうち入るる石つぶてかひなきわざに臂を張る哉

といふ、それこそ一些事乍ら又微苦笑の一事象を詠んだものがある。又細木瑞枝の

おのづから成れる錦の毛衣を着襲へる孔雀見らくともしも

といふ歌もあつて、捉へてゐる題材やその表現法にはそれ〴〵徑庭があるとしても、兎も角かゝる歌はこの時代の和歌としては確かに時代に先んじた歌といふ可く刮目す可きものであつた。

敍景歌では一般近世和歌の中にも相當優れたものがあつた事はいふ迄もないが、幕末萬葉調歌中では、先づ大倉鷲

夫の

　土佐の海や山かも割くと思ふまで鯨突く兒のをたけびの聲

が燦然たる光輝を放つてゐる。同じ鯨の歌でも加納諸平の

　雲かかるわたつみの中にあらしほを雨と降らせて鯨浮かべり

は傑作（拙著「近世名歌選釋」（百十五頁）參照）乍らやはり鷲夫の歌の印象的なるには及ばないやうである。又、

　朝日の豐榮のぼる土佐の海の青海原は見れど飽かぬかも

　長月の月澄みのぼる長月の後の今宵の月澄みのぼる

も格調高く、迫力特に强き歌である。和田嚴足の

　光神なりはためける海の面に鯨の立てし汐煙かも

は壯大といふよりは寧ろ凄絶の觀がある。かかる境地を捉へるといふ事それ自身が既に萬葉の影響であらうが、ともかく秀歌である。

　をどりあがる鯉の廣旗花にふり池の蓮のちらまくをしも

はこれも實によき歌境であり而も誰人も着目しない珍らしい歌境である。加之、第一句に既に躍動の氣分が溢れ實によい歌である。それから元義の歌の中では

　見渡せば天の金山三野の山霧たちかをる雨降らむとす

　まな兒なす兒島の高嶺津島山陽炎たちぬ夜は明けむとす

　かぎろひの夕霧はれて兒島の海藤戸の浦に月澄める見ゆ

などがやはり萬葉にない境地で而も印象的なよい歌である。但しこの三首に就ては既に拙著「平賀元義名歌評釋」の中で詳說したからここには省きたい。

又雅澄に至つては、

土佐の海に撈ぎ出でて見れば大島の羽根の岬に五百重浪よる

月清み玉の浦囘を撈ぎくれば離れ小島に浪のよる見ゆ

逢坂の關の山路を越えくれば清き淸水に月は照りつつ

の如く萬葉に餘り近づきすぎてゐる歌もあるが、

月讀の光を淸みわたつみの手纏の玉の亂れあへる見ゆ

の如く萬葉風乍らも美的な表現法に成功を收めてゐるものもあり、又

妹が家道近づくらしも天の川川端もさやに琴の音きこゆ

この夜らの月おもしろみ出でて來て鹿鳴く山邊に近づきにけり

といふやうなその歌境の躍如として眼前に浮ぶ如き名歌もあり、

古の野中健男が掘り設けし新河水の音のさやけさ

といふやうな獨得の地方色をあらはしたものもある。

要するに彼等の敍景歌は大體に於て近世敍景歌中の一異彩であるものといへよう。

近世の和歌には家庭的な歌といふものが極めて少いが、曙覽の

たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうましうましといひて食ふ時

たのしみは三人の兒どもすく〳〵と大きくなれる姿見る時
たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時

や元義の

妹や子ら谷の巖に腰かけてのどかの山の紅葉をぞ見る

などは家庭的な歌であるから頗る注目に値する。
又これは單に吾が子をのみ題材としたものであるが、

綱つけてひこづれ子供足なへの歩きがてなる車路の坂

といふ元義の歌や、曙覽の

撫るよりうつはめぐみの力いりあつかる父のたならうと知れ

などは當時としては實に珍らしい歌である。尙雅澄の

父に似て餓鬼となりそ大寺の金剛力士の姿とをなれ

も古語踏襲の傾向はあり乍らともかくも曙覽の歌と共に父性愛を感ぜしめる作である。
次に父母を詠んだ歌もまた意外に少くここにも幕末萬葉調歌のみが辛くもさうした新境地を拓いてゐるのであるが、その中にも明かに孝心を詠んだものは極めて少く

上山は山風寒しちちのみのちちの命の足ひゆらむか

の如き元義の歌はその極めて稀なる例の一つであらう。

父の峯雪ふり積みて濱風の寒けく吹けば母をしぞ思ふ

柞葉の母を思へば兒島の海逢崎の磯波たち騒ぐ

の如きも偶々母や父の事を詠んではゐる（拙著「平賀元義短歌傑作選總說」參照）が極めて隔靴搔痒の感があつて他の歌に於ける場合の如き彼の率直端的な表現法を用ひてゐないのは頗る物足らない。流石に曙覽には

這ふ子にて別れまつりし身のうさはおもだに母を知らぬなりけり

といふいひ知れぬ孤兒の悲哀を詠んだ名歌はあるけれどもこの作者にも父や母を詠んだ歌は殆んどない。唯一生兩親の行衞を搜し步いた愚庵には流石に父母を詠んだ歌もあつて

まさきくていませ父母み佛のめぐみの末にあはざらめやも

愛子我めぐり逢へりと父母のその手をとれば夢はさめにき

ちちのみの父に似たりと人がいひし我が眉の毛も白くなりにき

世を棄てし我にはあれど病む時はなほ父母ぞ戀ひしかりける

の如く數奇の運命に泣く作者の悲痛な衷心をよくあらはしてゐる。

次に近世歌人中にも

世をそしり人をののしり我だけく物定めするえせはかせかな

紙をのみつひやすみれば大方は虎の皮きる羊なりけり

の如く皮肉諷刺を詠んだ人があつたのは事實であるが、それは恐らく右の作者井上文雄ひとりのみではあるまいか。

而も文雄の歌は右の如く學者を罵つたものであつて、又

世の中は一人の盲人杖つきて千人の盲人ひきありきけり

といふやうに世の中を嗤つたものがあつてもいまだ政治に迄は及んでゐない。然るに

まのあたり仇をみすてて政府人年賀の酒に今日も醉ひたり
かかる世に國の柱とたのまれて死なば死ぬべき時にあらずや
千代經とも二度となき時を得て空しくすぐす政府人はも
老人よ醜の老人手な出しそ昔は山に捨てらるべきを
仇人のよせまく知らに黨人は牆にせめぎて日をば暮しつ

の如き歌が詠まれてゐるのはそれが唯單に一人の愚庵に依つて詠まれたにすぎないとしてもかかる方面の事に迄歌境をひろげたといふ點が注目される。又それと同時に

此の頃の我が戀力しるし集め功に申さば五位のかがふり
此の頃の我が戀力賜らずばみさとづかさに出でてうたへむ

のやうな歌をも聯想せしめる。

近世の歌が一般に類型的であつた事は前述の通りであるがそれは單に形式丈でなく內容も殆んど同じやうな型に嵌つてゐた。從つて

弓箭おひ君がみ幸のみさきおふわく子うつくし我が壻にせむ　（上田秋成）
天地にあふるばかりの黃金もが世の人皆をあきたらはさむ　（木下幸文）
霞立つ永き春日に子供らと手まりつきつつ今日もくらしつ　（良寛）

などは實に例外中の例外ともいふ可きものであつた。

然るに、彼等よりやゝ後れてあらはれた幕末の萬葉調歌人中には、性格上、又作歌の識見上正に型破りの人々があつたから

櫻木をかたにゐるてふたくみらを打ち殺すべきくぶつつもがな

の如き嚴足の歌や

秋ふくる庵のあまりさびしきに盗人だにも入りて來ななむ

打ちなびく猫の額のさがりばに嫁はこよなくけおされにけり

黄金さへ虱の子ほどうまはらば我は富みたる身なるべきをや

の如く奇想天外より落つる底の歌を詠んだ野雁もあらはれてゐる。

こゝに至つては全く自由研究自由作歌の面目躍如たるものがあり、萬葉を學んで萬葉以外に出で得なかつた前期の歌人達を後に瞠若たらしめるものであらう。

もとより近世の和歌一般の傾向から云へば、風流典雅なる歌が多かつたのであるけれども自ら風流士を以て任じ

みやびをの集へる今日は杯にもみぢ葉散らせまさき山風

さかづきに散り來紅葉みやびをの飲む盃に散りこ紅葉

といふやうに詠んだのは恐らく元義ひとりではあるまいか。

幕末には勤王精神を詠んだ歌が非常に多いが、これは寧ろ當然の現象であらう。

勤王の實戰に參加した人々の歌（拙著「幕末歌壇の研究」參照）は勿論、國學者中にも實に熱烈な勤王の歌を詠んだ

人々がある。併し、單に勤王の精神が強烈であつたといふばかりではなく、作歌に當つてこれを強勁な萬葉風の手法で詠んだ元義の

大君の御稜威かがやく日の本にたはわざするなおぞのから人
えみしらを討平げて勝鬨の聲あげそめむ春は來にけり
えみしらはしらずやありけむ靈ちはふ神と君とのいます此の國

などは實に數多き當時の勤王の歌の中異彩を放つものであらう。雅澄の

あなあはれ鈍や亞米利加神風の恐きことを汝は知らずやも

も前述の「大君の」「えみしらは」などと同じやうな內容形式を備へたものといひうるであらうが、曙覽の

すめらぎの稀の行幸御供する君のさきはひ我もよろこぶ
大君に背ける者は天地にいれざる罪ぞ打ちて粉にせよ

などは概念的一般的な詠法ではなく、勤王に就て個人的に感じた事柄を詠んだものであるところに注目す可きであるが、彼の性格學識殊に勤王精神の熱烈さ等を參照して實に特筆す可き歌境といふ可く、當時他に多く比を見ないものであらう。

それから、當時流行の詠史の歌は今更らいふ迄もないが、鶯夫の

奧津城を仰ぎまつれば我さへに御敵思出で牙嚙みならす
天地も轟くばかり戰ひし武庫の川邊の古おもほゆ

は普通の詠史の歌とは異り一首中から此の作者特有の異常な迫力が溢れてゐるのを認めうるであらう。

國の神を
まつるべき國津御神は大穴牟遲大物主と大國魂の神
皇產靈の神につづきて尊きは伊邪那伎の神伊邪那美の神
天照らす皇大神の天降らして今もましますヨ十鈴の大宮
いはまくもあやに尊き神籬の八柱の神を人の知らなく

の如く神祇の歌を多く詠んだのは元義の特徴ともいひうる程であるが、當時此く神の御歌を詠んだといふ事が既に珍らしいのである。加之、

ここだくの罪はありともなかとみのふとのりとごとのりてはらはむ
わがさとのいふきのやまのやまかぜいいふきはらへよますひとのつみ

の如く神道の所謂けがれ、祓を詠んだといふ事も恐らく元義特有のものではなかつたであらうか。

もとより近世に於ける萬葉調歌人は幕末以前にも多く輩出してゐる。加之良寛の如きは幕末にも之に匹敵す可き人を見ない程の新境地を拓いてゐる。

併し近世に於て幕末期の萬葉調歌人を打つて一丸とし、それ以前の萬葉調歌人群と比較してみる時、歌境の多方面なる點に於て後者は到底前者に及ばない。

思ふに近世和歌はもとより種々の缺陷をもつものであるが、少くともその缺陷を補ふものは幕末萬葉調歌人の詠歌であり、近世和歌中の偉觀として讃嘆される可きものではあるまいか。

維新勤王志士歌研究

小泉苳三

一　はしがき

維新勤王志士歌集に現れる人々が活躍した當時の我國は一大轉換期に遭遇しつつあつたのである。時代はまさに封建社會から近代社會への過渡期であつた。そこには轉換期の混亂と動搖の渦を通して、幕府の政權を維持しようとする舊勢力とこれを覆さうとする新勢力との對立抗爭が見られる。

幕府の政權に反抗して、朝廷を中心に糾合した新勢力の中には、種々の潮流があつた。そして、これらの諸潮流を一貫してゐるものは、梗塞せる現狀を打破しようとする批判的精神であつたのである。

鞏固な封建的身分制によつて榮達、昇進の途を塞がれ「半知」のために窮乏のどん底に呻吟してゐた下級武士の一般的反逆精神については說くまでもないであらう。新勢力の思想的表現である王政復古や尊皇攘夷の觀念といへども決して懷古的ではなかつた。それらは、いづれも現狀打破の批判的精神と結合して現實的感覺にみちみちてゐたのである。

新勢力の體現する批判的精神、現實主義的態度こそ、朽ちゆく封建社會體制を崩壞せしめ新社會の曙を約束したものであつた。而して、この批判的精神と現實主義的態度とは、ひとり、彼等の政治的活動に於て見受けられるばかり

でなく、それはまた、たゞちに、勤王志士の和歌の根幹をなす基調であつたのである。

いま、茲に、かかる基調を中心にしながら、勤王志士の和歌について若干の考察を試ることにする。

勤王志士歌集が編纂された頃は、既に新勢力の勝利が決定的になつてゐた。世人は新社會の黎明に接して、闘の跡を回顧しながら先覺者等の功績を追慕したのである。かうした追慕の情は、代表的な維新勤王志士歌集である土佐の「歎涕和歌集」四卷、京都梓行の「殉難前草」以下五卷、及「近世殉國一人一首傳」四卷、長州の「防長正氣集」四卷等の或は「歎涕」或は「殉難」、「殉國」或は「正氣」の書名にもあらはれてゐるのである。

いま、近代和歌史上この勤王志士歌集とよばれるものをあげるに、文久二年の「精神一注」一卷を嚆矢とし、慶應四年から明治二年にかけて最も多く見うけられ以後漸次少くなつてゆく。而して歌集の概數は[一]三十種、冊數約四十冊、作者約四百八名、歌數短歌約一千六十三首、長歌約十四首、反歌約九首といふ數字が示されるのである。更にこの四百餘名の作者を類別すると、(一)高山彦九郎、蒲生君平等いはゆる寛政の王室家、(二)七卿落の三條實美、澤宣嘉或は岩倉具視等の公卿及徳川齋昭をはじめ薩長土越肥の藩主等、(三)薩長土肥をはじめ各藩の下級武士、各地より集れる脱藩浪士等、(四)國學者神官等のうち直接國事に盡した少數の人々等にわかちうるのである。しかも、そのうち最も多數の作者及作品を殘してゐるのは、(三)の各藩の下級武士等である。これは、彼等が騒然たりし當時の國内不安を解決する當面の擔當者であつたことと相呼應する。

二　作品概觀

茲にいはゆる維新勤王志士歌と稱するのは、前に述べた勤王志士歌集に收錄せられてゐる和歌約一千餘首を中心とする。これらはいづれもその當時に勤王志士の和歌としてひろく傳唱せられたものである。

維新勤王志士のうちには一個人でよく數十首乃至數百首の和歌を殘してゐるものも尠くない。たとへば作林光平の如きである。また國學者歌人等のうちには勤王の思想を歌うた人々も尠くない。たとへば、橘曙覽の如きである。しかしながら、それらはともに加へられてゐないのである。

すなはち、勤王志士歌集を通して、編纂者の態度に無意識的ながら明かに一つの共通した標準が見られるのである。それは、要するに「議論より實を行へ怠け武士」の實を行つたかどうかといふことにあつたのである。いへば、何等かの意味で勤王の實を行うた人々が、その實を行ふに關聯して歌ひあげたものであるかどうかといふ點に限界があつたのである。この限界内に屬するものだけが、その當時に勤王志士の和歌として傳唱せられたのである。勤王志士歌集はさういふ和歌を收錄してゐるのである。故に同じく勤王の志士作林光平の和歌でも、單なる花鳥風月の和歌は收錄されないことになる。また同じく後世からは勤王歌人とよばれてゐながら、野村望東尼の和歌は收錄されてゐるけれども橘曙覽の和歌は收錄されなかつたのである。

勤王志士歌は作者の個々の身分の上下にかかはらずその内容に於て、一様に尊皇憂國の情を主としてゐる。身分制のもとにあつては、同一身分に屬する人々の思考は、つねに特定の教養によつて同等化され、身分特有の形態に於て表現せられる。かくて、下級武士の尊皇憂國の情もその主君と同様の觀念形態を通して表現されるにいたつたのである。

1　あまさかる蝦夷をわか住家としてならふ千島のまもりともかな　（志士小傳）　德川齊昭

2　とふ雁にことゝひてまし深雪ふる蝦夷か千島の浪風の音　（志士小傳）　金子教孝

3　大君の御代の光も天の原はるる今夜の月に見へけり　（維新志士正氣集）　島津久光

4 皇ノ御代ヲムカシニ返サン思フ心ヲ神モタスケヨ（近世殉國一人一首傳）　橋口壯輔
5 玉の緒はよしたえぬとも一すぢに我大君のみことささげん（振氣篇）　松平慶德
6 君カ代ヲ思フ心ノ一スヂニ吾身アリトハ思ハサリケリ（近世殉國一人一首傳）　梅田源次郎
7 君がため千々の思にくらぶればものの數にはならぬこの身を（有節錄）　宍戸眞徵
8 九重の惱む帝をおもほへば手にとる居蘇ものみへさるなり（歎涕和歌集）　吉田寅次郎
9 大君はいかにいますと仰見れは高天原はかすみこめたる（振氣篇）　三條實美
10 天津神國津社ノ御威津モテユメ神垣ノウチナケカシナ（近世殉國一人一首傳）　富田織部

また極めて少數の人々の作を除いて、概して表現技巧が生硬であつて、時に語法語格の誤つてゐるものさへ見うけられる。

11 大君ノ憂御心ヲヤスメズバフタタビ國ニ歸ラザラメヤ（近世殉國一人一首傳）　有村雄輔
12 骨は粉に身は武藏野にさらすともなに眞心の透らさらまし（維新正氣集）　有村治左衞門
13 玉の緒はたゆとも消し君をおきてゐみしうたまき思ひはかりぞ（殉難後草）　朝倉彈正
14 議論より實を行へなまけ武士國の大事をよそに見る馬鹿（殉難遺草）　南八郎

の如きである。けだし、彼等は現實への批判的精神にともなふ感傷を生のまま表現してゐるのである。

勤王志士歌に於ける批判的精神の表現は、1 直接的表現と、2 間接的表現とにわけることができる。

1　直接的表現

維新勤王志士歌は作歌態度として現實への批判性を共通する。彼等はこの現實への批判にもとづく感傷を、いたる

ところに素朴にしかも熱情的に表現してゐる。前述せる國内の梗塞的情勢が彼等をして一層感傷的ならしめたのである。それが、和歌の上に直接に表現される方向をとるとき、和歌の内容としては第一に現實に對する悲憤慷慨の叫びとなつてあらはれる。

15　岩にたに立矢はあるをいかにして我眞心のとふらざるべき（殉難前草）　相見文之助

16　イマハシキヒト屋ノ內ノ物ウサヲ黃泉ノ國マデトモニカタラン（近世殉國一人一首傳）　武市半平太

17　いましめの繩は血汐に染るとも赤きこころはなどかはるべき（維新志士正氣集）　乾十郎

18　世の中の人は何ともいはばいへわがなすことは我のみぞしる（維新志士正氣集）　坂本龍馬

次に見られるのは官能享樂の傾向である。彼等は優れたる才能を持つてゐると同時に物事に激し易く感傷的である。現實の梗塞狀況を打破しようとする彼等の批判的精神は、やがて一切の身分的桎梏を脫して、人間性そのものを解放せんとするのである。人間性の解放は、つねに先づ情意解放官能解放に向ふ。そのうへ、絕えざる權力の彈壓と追求に、生命の危險を感じてゐた彼等は、時に今日の官能を享樂しようとしたのでもあつた。同じ官能享樂といつても、だから、彼等の官能享樂は現實逃避から來てはゐなかつた。そこには虛無觀から來る暗さも見えなければ、また(三)佛敎的無常觀から來る果無さも見出せない。却つて明朗なるものが磅礴してゐるのである。これは勤王志士歌のもつ(四)特徵の一つである。

19　きれてくれろと　やはらかに
　　眞綿で首の　こわ意見
　　八千八聲の　ほととぎす

血を吐くよりも　なほつらい（維新志士正氣集）　高杉晋作

東洋儒學流の先憂の情もまた勤王志士の歌に見る著しい特徴であつた。

20　さきがけてこの世の梅とちりもせばついてあきさく花もあらなむ（維新志士正氣集）三條實美

21　早サケバ早手折ラルル梅ノ花キヨキコロヲ君ニシラセテ（近世殉國一人一首傳）　渡邊內藏

22　梅散りしのちの櫻の初花はわれぞ詠めのさきがけをせん（近世殉國一人一首傳）　安永十郎左衞門

23　おくれなば梅も櫻に劣るらんさきがけてこそ色も香もあれ（維新志士正氣集）　南八郎

2　間接的表現

また、現實への批判性が間接に表現される方向をとる時、和歌の內容としては王政復古、忠君愛國、尊皇攘夷等々の觀念形態となつてあらはれる。近世中期に於ける文藝復古以來の現實的精神と、これに伴つて起つた古代研究の氣運は、さきに述べた如き國內の梗塞せる政情に促されて愈高まり、ここに尊皇思想を呼び覺さしめた。而して、始め古道學者等は尊皇と幕府政治とは一致するものとしてゐたが、いはゆる王室家とよばれる人々は、これを尊皇斥覇にまで押進めていつた。勤王志士歌集の大部分は開卷高山彥九郞、蒲生君平等王室家の歌に始まる。

24　比叡の山見おろすかたぞあはれなる今日九重の數し足らねば（行餘集）　蒲生君平

25　我を人としろしめすかや皇のたまの御聲のかかるうれしさ（殉難遺草）　高山彥九郞

我國の歷史は、ひとたび國內の不安が高まつて來た場合、この不安を解決する標準として「上古」を據りどころとする傾向を持つ。かくて尊皇斥覇から王政復古への運動が展開した。時たまたま國內の不安に際し、王政復古具體的にいへば神武天皇橿原御卽位が、彼等の理想とせられ、據りどころとせられるにいたり、忠君愛國の純情はいよいよ

高らかに歌はれてゆく。

26 クリカネモトフラサラメヤ大丈夫カ國ノタメトテオモヒキル太刀（近世殉國一人一首傳）　有村治左衞門

27 世のためと思へつくせし眞心は天津御神もみそなはすらん（興風集）　蓮田市五郎

28 手筒山峯吹おろす春風にますらたけ雄が髮さか立ぬ（殉難拾遺）　川上清太郎

29 いたづらにけふも暮しつ大王の御楯ささげむときを得ずして（興風後集）　堤　次郎

30 事しあらば我大君の大みため人もかくこそちるへかりける（維新志士正氣集）　佐久良東雄

31 あまつ風吹くや錦の旗の手になびかぬ草はあらしとそ思ふ（殉難後草）　平野國臣

32 わが胸のもゆる思にくらぶれば煙はうすし櫻島山　平野國臣

忠臣楠正成、近くは櫻田の變にたづさはつた人々に對する追慕の情もまた切々として歌はれてゐる。

33 かかる身になりてさこそと思ふかなたくへて見んはかしこかれども（楠公戰死の日に）
（維新志士正氣集）　眞木和泉守

34 みなと川身をすててこそたちばなのかぐはしき名は世にながれけれ（行餘集）　藤田東湖

35 櫻田の雪とけぬれどかぐはしき名は萬世に朽せざりけり（維新志士正氣集）　伴林光平

尊皇斥覇の思想は外國に向つては攘夷の形となつてあらはれる。そのうへキリシタン以來の恐外觀念、海外事情に關する智識の淺薄及び東洋諸國に對する先進資本主義諸國の侵略政策等々が更にこれに拍車を加へたのである。

36 古に吹きかへすへき神風をしらで蛭子ら何さわぐらん（歎涕和歌集）　姉小路公知

37 七たびも生かへりつつゑみしらをはらはむこころ我わすれめや（殉難前草）　吉田松蔭

38　ふきおろせ不二の高根の大御風よもの海路のちりをはらはむ（維新志士正氣集）　清川八郎

39　八幡神皇國アハレトオボシナバ内外ノエミシハラヘタマヘヤ（皇朝近世詩文歌集）　吉田重藏

三　む　す　び

勤王志士歌集の作者のうちの重なるものには、伴林光平の四十一首、平野國臣の三十六首、佐久良東雄の六首、野村望東尼の二十首、藤田東湖の三十八首、安島帶刀の二十六首、關鐵之助の二十四首、金子教孝の十九首、眞木保臣の十五首、三條實美の十三首、吉田松蔭の十二首、久坂通武の七十六首、蓮田市五郎の十一首、其他齋藤監物、佐野竹之助、月照、等々がある。

伴林光平は諸平の門下、いはゆる三平の一人である。篶屋五百首、南山踏雲錄其他の著がある。平野國臣は福岡の人、平野國臣歌集は明治二年に浪華の柏屋から板行せられてゐる。東雄は水戸の士、家集を薔園歌集といひ特に萬葉調の歌をよくした。野村望東尼も亦歌人として知られてゐる。久坂通武、金子教孝、眞木保臣の作もまた眞情の惻々として人をうつものがある。勤王志士歌集の作者は大部分の人々がいはゆる歌人ではなかつた。ただ折に觸れてほとばしり出づる感傷を和歌の形に表現してゐるまでである。從つて、概していへば、勤王志士歌は當時の專門歌人の作に比べて著しく洗煉を缺いてゐた。「歸らざらめや」の反語の意義さへ正しく理解してゐなかつたものもあつたのである。(五) しかしながら彼等の捉はれざる自由な平常語の驅使は、時に却つて專門歌人の作に見ることのできない强い聲調をつくりあげてゐる。このことは、彼等の多くがとつた萬葉調と必然的に關聯してゐるのである。その短歌理論もまた何等の進展を見せてゐなかつた。强ひていへば、彼等は政治に於ける理論をそのまま和歌に借用してゐたのである。從つて、歌論らしいものを彼等に求めることは困難である。

勤王志士歌に於て注意せられるべきはその現實主義的傾向である。和歌の展開のうへにあつては、それは、萬葉調のますらをぶりの形によつて、古今調のもののあはれを止揚する方向をとる。これこそ勤王志士歌の特質でなければならない。

40　天皇に仕へまつれと我を生し我たらちねのたふとかりけり（近世殉國一人一首傳）　佐久良東雄
41　命だに惜からなくに惜むべきものあらめやも皇の爲には（殉難遺草）　同
42　山櫻花もろともに散りはてし常陸男の戀しきろかも（二首・常陸長岡驛にて）（防長正氣集）　久坂通武
43　ゆく川の過ぎにし人の跡とへば丈夫猛男も涙ぐましも　同　同
44　とりはける太刀の光はもののふの常に見れどもいや珍しき（六）　同　同

維新勤王志士歌に於ける現實主義的傾向は、明治前半期の「萬葉調による民間歌人」（七）につづく。丸山作樂、與謝野禮嚴はともに維新に際して國事に奔走した人々であつた。作樂禮嚴の影響をうけたものに天田愚庵、福本日南がある。與謝野鐵幹は禮嚴の子である。正岡子規は愚庵から尠からず影響されてゐると見ることができる。いへば、それは、さらに、明治中期に於ける和歌革新者たる鐵幹子規にまで展開してゐるのである。ここに近代和歌史に於ける維新勤王志士歌の意義が存する。

註一　維新志士歌集。（A）　1「精神一注」一卷（京都、村井政禮、文久二年十月）　2「行餘集」一卷（杵築、物集高見、慶應三年）　3「歎涕和歌集」四卷（土陽、宮地維宣、慶應四年孟春）　4「殉難前草」一卷（京都、城兼文、慶應四年初夏）　5「殉難後草」一卷（京都、城兼文、慶應四年初夏）　6「四英獄窓唱和集」一卷（慶應四年六月）　7「興風集」一卷（長州、久坂通武、明治元年十月）　8「殉難拾遺」一卷（京都、馬場文英、明治二年初春）　9「抄宗寮叢書」二卷（本寮、明治二年正月）　10「振氣篇」三卷（春莊冗史、明治二

年二月）11「殉難遺草」一巻（京都、城兼文、明治二年四月）12「殉難續草」一巻（京都、城兼文、明治二年六月）13「有節錄」一巻（京都、城兼文、明治二年六月）14「興風後集」（一名近世名士遺草）（京都、城兼文、明治二年晩秋）15「近世殉國一人一首傳」四巻（京都、城兼文、明治二年初冬）16「志士小傳」（一名餘材小傳集）一巻（京都、城兼文、明治三年春）17「防長正氣集」（續風雅遺草）四巻（東京、天野御民、明治八年二月）18「今世義魂集」二巻（東京、竹内荘三郎、明治九年）19「皇朝近世詩文歌集」三巻（東京、高橋鎌三郎、明治十年十一月）、20「名門名家集」（防長正氣集第一・二巻合册）一巻（東京、天野御民、明治十二年二月）21「鳴世餘言」一巻（東京、瀬戸愛次郎　明治十四年）22「明治志士心血集」二巻（東京、中安守、明治十七年二月）23「都氣能雄久志」一巻（幻々子、明治十八年）24「志士振氣慷慨詩歌集」一巻（東京、衛冠居士、明治二十九年二月）25「慷慨家詩文歌評釋」一巻（明治三十四年十月）26「維新志士正氣集」一巻（東京、渡邊爲藏、明治四十四年十一月）（B）「瓦解集」（一名關東邪氣集）一巻（萬卷樓、明治九年）（C）「近世暴徒遺草」一巻（東京、鈴木幸、明治九年）（D）1「義烈回天百首」一巻（東京、染崎延房、明治七年九月）2「近世報國百人一首」一巻（東京、轉々堂藍泉、明治八年一月）3「近世正義人名畫像傳」二巻（川邨敬一郎、明治七年八月）4「近世文武名譽百人一首」一巻（東京、谷荘太郎、明治十五年三月）。本研究は主として、（A）を資料としてゐる。（B）は勤王志士歌集に對する江戸幕府側の歌集である。（C）は明治初期に新支配力に反抗せる人々の歌を輯めたもの、（D）はいはゆる教訓物である。（B）は勤王志士歌集と對立關係にあり、（C）と（D）とは勤王志士歌集の展開と見ることができる。

註二　金子教孝、水戸藩士。橋田壯輔、薩摩藩士。宍戸眞徴、長州藩家老。富田織部、三條家世臣。

註三　たとへば萬葉集の大伴旅人の讃酒歌

註四　平安朝以後の和歌

註五　この誤は平田篤胤に始つて廣く志士の間にそのまま用ひられてゐる。

註六　江月齋遺集には第五句いやめづらしも。

註七　拙稿明治新派和歌胎生、（國語と國文學、昭九、九）參看。

維新勤王志士歌研究（小泉）

俳諧と詠物

岡崎義惠

「詠物」は「詠史」「詠懷」などと共に、詩體の一種として、六朝時代から始まり、唐に至つてほぼ其體を定め、以後次第に隆盛に赴いたものである。それは日本にも傳はり、既に懷風藻に「詠月」「詠雪」「詠孤松」の如き作を見る。其後平安朝貴族や中世禪僧などの愛する所となり、德川時代の儒者的詩人の手に移つて、益々その獨自の領域を認められるやうになつた。

從つてこれは和歌・連歌・俳諧の方へも多少の影響を與へずにはすまなかつた。萬葉集に詠物題の歌が多數收錄され、文鏡秘府論や喜撰式（及び喜撰式の竄入と思はれる流布本濱成式）には八階の一として「詠物」があり、それは奧儀抄の「和歌八品」にまで流れ入つてゐる。又古今集眞名序に「文琳巧詠物」の語があり、忠岑十體の序に「詠物諷人之趣同彼漢家詩章之有六義」とあるなどは、特に詠物の一體を認めて居るわけではないが、和歌に物を詠ずるといふ事のあるのを自覺したものである。德川時代に入ると、「詠物四百首」金森得水「咏物六帖」谷景井の如き、「詠物」の語を冠する歌集も現はれるやうになつた。俳諧の方でも、「蕉門一夜口授」に、季の定め難い事を言ひ、「或又一題の物を四季に詠じ、また雜の體にも作るは詠物の體にて各別也」とあるのを見ると、漢詩の詠物の如き作意の存してゐた事が窺はれる。

併しながら支那の詠物詩の直輸入は、和歌・俳諧の世界ではそれ程著しくはないのであつて、特に研究題目とする程の重要性は持つて居ないと思はれる。富士谷御杖が「北邊隨筆」の中で言つて居るやうに、萬葉集の詠物題の歌の如きものでも、支那の詠物の如く、題の物を忠實に詠んで居るとは言はれず、寧ろ題の打ち方だけは詠物詩の方法を學んで居ながら、精神に於いては必ずしもそれを守つて居ないと言つてもよいのである。即ち日本では日本風の詠物を持つて居ると言ふ事が出來る。それは支那の影響によつて促進されたといふ點もあるが、恐らくそれが無かつたとしても、獨自の意志でこれを拓いて行つたに相違ないと思はれるものである。それは歌の題材としての物に對する自覺が進展するに伴つて、自然に發生すべきものである。

和歌でも漢詩でも、本來抒情詩的潮流を中心として發達したものであるから、志とか情とか心とか思とか、とにかく主觀的な感情を樞軸とする精神狀態が、その主要契機として働くものであるに相違ない。併しその心はいかにして起るかと言へば、物に觸れて起るものであり、又その心は物によつて表現の媒介を得るものであるから、早くより物の重要性も亦意識されたのである。萬葉集の「寄物陳思」「屬物發思」の思想、古今集序の「心に思ふ事を見る物聞く物につけていひ出せるなり」の如きは明かにこれを示して居る。この物が單に心の表現の動機や手段として詩歌の中に現はれるみならず、物それ自身の持つ力によつて詩的契機となるといふ考へ方も、これに伴つて起り得る可能性がある。佩文齋詠物詩選序は其淵源をやはり詩經に置き、「邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名」といふ論語の說を引くが、これは物の名を識るといふ智的方面に力點を置くもので、其處に儒教的特色を見る。恰も心の問題が道德的な點で重んぜられるのと並行した現象である。實際に於いては、詩人はかやうに物の名を識るといふ動機から詠物詩を作るのではなく、物の美を歌はんとする意慾からするのであつて、いくら支那でも、かかる儒教的詩論は表面上の體

裁に過ぎない觀がある。歴朝咏物詩選序に「詩能體物、毎以物而興懷、物可引詩、亦因詩而觀態」といひ、「詩也者發於志而實感於物者也、詩感於物、而其體物者、不可以不工、狀物者不可以不切、於是有詠物一體、以窮物之情、盡物之態」といつて居るのが、寧ろ詠物の意義を正しく把握したものに近いと思はれる。日本でも物を詩中に取入れる動機が、智的興味に基く場合もないのではなく、萬葉集の「詠數種物歌」や、古今集の「物名」の如き、又其後永く行はれた「隱題」の如き、又連歌の賦物の如きは、日本的な智的詠物の流である。そして此等が智的遊戯になつてゐる點に支那との相違を見るのである。併し詠物的詩歌の主流は此處にあるのではなく、遙かに文藝的價値の高い境地を進んでゐる。それもやはり本來詠物の持つ客觀的智的特色を含むものではあるが、それは豐かな感覺や情調に浸されたものである。これは詩人の心が智的觀察と官能的享受との鋭敏さを獲得するに從ひ、卽ち近代的な詩の領域に入るに從ひ、自ら發達するもので、其極は餘りに細かな頭腦の働きを示すのみで、詩的精神の根原力たる情意の熱氣を喪失する結果ともなるのであるが、又古代詩歌の手の屆かなかつた世界を開拓する事ともなるのである。これは詩歌のある所、必然に生ずべき現象であるから、日本は支那の影響なくとも、當然獨自の詠物的作品は持つたに相違ない。其所で日本の詠物は支那とは異る特色を現はして居り、それは既に萬葉の詠物からも觀取し得たものであるが、その發展の極致に達したものは俳諧の方面であらうと思ふ。

詩歌に於いて「物」が優位を占めんとする形勢は、支那でも日本でも、二様の相聯關する潮流となつて發展して來て居る。その一つは、主題として一物を認める態度であつて、純粹の詠物はこれであるべき筈である。然るに詩歌の内容に於いて、主題的位置を獲得して居ない「物」でも、これを主題らしく認めて、題詞の位置に据ゑ、それによつて詩歌を分類せんとする態度で、類題の思想は多くかかる領域に進んで居る。

元來抒情詩は始めより詩的對象を考へ、主題を意識して作るものではなく、內部の衝動を直接に言葉に表出する感動詞的性質を有するものであるが、藝術といふものは其內容が對象化されなければ作品とならないものであるから、藝術としての自覺の進むと共に、何が歌はんとする對象物であるかといふ思想を伴ひ、心も亦一の對象として意識に浮ぶやうになる。詠懷とか述懷とか言ふ如き思想は、かやうな詩的對象としての心が自覺された所に起る。此狀態に於いては、心も亦對象化される事によつて客觀的性質を帶び、廣義の「物」と化してゐるのである。藝術はかくて主觀を客觀化し、心を「物」となす力であるとも考へられる。それ故、藝術的自覺の進展と共に、抒情詩と雖も、一切が「物」にならうとする方面へ步み寄るのである。題詠といふものが此道程の中に現はれる。これは始めより詩的對象を決定してかかる製作態度であつて、藝術の物象化の作用を逆に取つて、物象をまづ定めてから、これを心象化せんとするものである。題詠は從つて詩的題材の確定といふ事を伴ひ、類題的意識を誘發する。製作以前に客觀的に題材の整理を完成して、それによつて主觀的な製作活動の機緣を得んとするのである。かくて類題の要求は、詩中に物象化されるものを、總て整理して置かうとする意志に迄進み、必ずしも主題の範圍に跼蹐する事なく、詩中の一題材をも亦題として取扱はんとするに至る。然もそれが主題としての題と混合して、極めて曖昧な狀態を誘發するのである。

今これを支那の詠物詩の範圍でみると、元來詠物は心でなく物を主題とする詩であつた筈であるが、類題的要求と結合するに及び、物の探求は次第に廣汎に亘ると共に、主題的意味が薄れて來る。有名な初唐の大詩人李嶠の詠物百首は日本にも大なる影響を與へたものであるが、これは明かに物を主題とする、格の正しい詠物詩である。然るに淸の康熙帝の佩文齋詠物詩選になると、物として選んだ題は非常に廣くなつて、「從軍」「農」などといふ、寧ろ事に屬する物にも及んでゐるが、それは必ずしも主題でなくてもよく、「月夜述懷」「過姑蘇」などといふ題の詩をも詠物と見

て、「月」「風」の如き類に入れてゐる。無論心に屬する題は分類項目としては立てて居ないが、實は個々の詩の題でも、其内容でも、心に屬する分子が多く、只何か物が詠み入れられて居れば、それによつて詠物と稱して居るかの如き感があるのである。かく、支那の詠物詩なるものは、正しく言へば一物を主題とした作であるが、後には類題的見地から、單に詩中に現はれる一事・一物を見て、これを詠物に準じて取扱ふ場合も出て居るのである。

日本でもこれに類する現象を見る事が出來る。萬葉集の詠物歌は、多くは編纂者の分類的目的によつて題を設けたものらしく、詠物詩選や類題歌集の見地に近く、主題でなくても、詠み入れられた物によつて、假に詠物題らしいものを認めたもののやうである。この流は古今六帖や夫木和歌抄を經て、近世の夥しい類題歌集に及んでゐる。これと共に又平安朝以來發達した題詠があつて、これは歌合や歌會に於いて討議批判される爲に、題の心を尊重するのであつて、明かに主題主義である。和歌ではかくて主題としての物と、類題的素材としての物とに分れて進んでゐるが、兩者の境界線は甚だ曖昧であると言はなければならない。

俳諧にも此傾向が見られる。俳諧の前に連歌に於いて、賦物を始め、山類水邊の別、晝夜の別、其他種々の分類による物の分別が意識され、それは俳諧にも傳はつたが、中でも重大なものは、季の物であつた。季の物は連歌では、始め主題ではなかつたのであるが、和歌の題詠の影響で、發句において主題的意義を持つやうになつたと思はれる。俳諧の發句に入つてそれは致命的な重大性を持つに至つた。そして發句の題なるものは、必ずしも季の題とは限つて居ないが、發句は一方季の物をよみ入れるのが格の正しい方法と考へられた爲に、季の物はいつしか主題であるかの如くにも考へられ、發句とは季の物を主題とする一種の詠物詩であるかの如き觀を呈するに至つたのである。併し無論、前に引いた蕉門一夜口授に言ふ如く、詠物の題は季の物に限らないのであるから、詠物的主題は無季の物でもよ

く、それに季を結べば發句となるのである。けれども發句は一方に必ず季の物を持たなければならないので、十七字の中に季の物と題の物と並立する事は、事實都合がわるく、季の物に統一してしまふ方が結果がよいのである。そこで發句の類題は和歌と違つて、自然に季の題のみの類題の如くになつた。即ち戀の題や雜の題は除外されるか、輕視されるかの狀態となつたのである。そして一面、類題的見地では主題意識が曖昧であるから、此世界では、季の物・主題・一題材といふ三種の異なる物が、同一物であるかの如くにも取扱はれてゐるのである。

其所で、類題發句集などの季といふ物は、これを佩文齋詠物詩選や歷朝咏物詩選の如きものに比較して考へると、詠物詩の題としての物とほぼ同質のもので、其中の季節に關する物のみを取出した樣な狀態である。從つて本來の純粹な詠物詩が持つやうな、主題的な物とは言はれない。發句の季の中で純粹な詠物詩の物と同樣なものは、主題として取扱はれた季の題であつて、この種の作品は季に屬する一物を對象とした讃歌としての意味を持つ。その季の題は歲事に屬する行事でなく、物體的なものである時、一層完全に詠物詩的となるのである。

俳諧は和歌より出でて連歌を通過し、本來の抒情詩的領域から、新たに詠物詩的領域を開拓したものと見る事が出來る。故に俳諧には詠物詩家らしい自覺が窺はれるのである。

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首謀也。非比彼山寺偸衣朝市頂冠笑。只任心感物寫興而已矣。（丈艸、猿蓑跋）

そも〳〵風雅は、なにの爲にするといふ事ぞや、孔子の三百篇は草木鳥獸のいぶかしき物をしらし、倭には三十一字をつらねて、上下の情にいたらしむ、その詩哥にもらしぬる草木鳥獸の名をさして、高下を形容せむものはいまの風雅これなるべし。（葛の松原）

艸木禽獸皆句也、然れども其物其物の情を知人は十に一二か、春澄が此句蕣を見る情いたれり

口惜とあさがほの種を殘しけり　春　澄（鵲尾冠）

毛衣につゝみてぬくし鴨の足　此句は殊に一物の上にて作したると、支考にかたり給ひけるとなん（湖東問答）

發句は月雪花、木々艸々、其外生る物のたぐひ、すべて何にてもあれ、ひとつ〳〵に物いはせたらんに、かくまでも我事をいひをよぼしぬる物かなと深くよろこびなん心詞にあらざれば、まことすくなくや侍らん（鬼貫、ひとりごと）

去來正風の大意を問、翁曰、俳諧はよく萬物に應ずることをむねとすべしとなり（一葉集遺語）

猿蓑跋の說は、尙物を外に置いて、それに對する主觀的感興を表はす事を言ひ、和歌の境地と遠くないが、心が物に依存すると見る點に於いて、物を主要視する事が知られ、葛の松原の說は、詠物詩家の口吻を學んで、知識的目的に重きを置くが、これも俳諧の風雅が、物の描寫、物の價値を表はすものであるといふ點に注目してゐる事が窺はれる。鵲尾冠の說はこれと反對に物に對する人の心を强調してゐるが、その心は物への愛情に外ならないのであるから、その愛に基いて物を描く時、物の眞よりも物の價値に觸れる事となる。湖東問答の例も、一物に對する愛と、それに作ふ親切な觀察とによつて、其物の中に見出した、我事のやうに思はれる或價値を句中に歌ひ出して居る場合を指して居り、ひとりごとの說はそれを譬喩的に說明したものの如くであり、一葉集遺語も亦同樣の意味を含むかと思はれる。物によつて生ずる感興が外からの批評に作ふ興味に終る事なく、その物の内なるものを表はし、内なるものが外なるものと合一して、渾一なる存在の價値を具體化するに至つて、詠物の眞意に觸れる事となる。

併し詠物の特色は、詠懷と違つて作者の主觀的狀態を表現する事にあるのではない。それ故、いかに物と我とが渾融の境に入ると言つても、其本質は物によつて我を表現するのではなく、我によつて物を表現する所に存するのである。從つて作品についてこれを見ると芭蕉の「病雁の夜寒に落ちて旅寢かな」「起きあがる菊ほのかなり水のあと」の

如き作は、これを雁や菊によつて芭蕉の生を象徴したものと見る限り、詠物の作とは言ひ難い。若しこれを飽くまでも雁や菊の句と見、雁や菊によつて普遍的なる生の相——芭蕉個人の生の如きも亦その中に含まれる——を象徴したものと見るならば、此等の句は最高の詠物である。卽ち詠物の持つ象徴的價値は普遍化象徴とか高級象徴とか言はれる段階のものである。戲曲や小說の如き客觀的藝術に現はれるもので、抒情的な情調象徴とはやや傾向を異にするものである。

かかる象徴的段階に達した詠物の句は芭蕉の中にもさう多くは見出されない。「痩せながらわりなき菊の蕾かな」「蜻蛉やとりつきかねし草の上」「ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花」「夏來てもただ一つ葉の一つかな」の如きは、芭蕉らしい濃やかな同感と、芭蕉らしい細々とした生活感情の移入とがあり、それによつて自然の一物を內面から描いてゐると見られるものであり、從つてそれらの物のいぢらしい生の、つつましい讃歌となつてゐるのであるが、これによつて生の普遍性を象徴して居ると見るには、少しく表現の深さと大さとを缺いてゐる。卽ち生の根蔕ともなり環境ともなる大運命力の暗示に乏しい。併しながら以上の諸例はまづ象徴としての物を歌つた詠物句と認め得られる。若し「閑かさや」の蟬、「古池や」の蛙、「荒海や」の天の川の如き物を、大自然の中に叫び、動き、輝く所の象徴的な一物の讃歌であると解するならば、此等も亦高度の詠物であらう。それに反し、閑かさや淋しさや悲しさを感じた作者の心を表現したものと解するならば、其時は詠物的意義を大に喪失するのである。有名な杜甫の「孤雁」の詩でも、それが杜甫の感情の象徴であると見れば詠懷に近づくが、作者を超えて、孤雁を通じて知る客觀的存在の象徴と見れば、其時詠物と言ひ得られる。

芭蕉は製作體驗を常に常住の生活體驗によつて基礎づけた作家であるから、如何に外物を歌つても、卽ちいかに萬

物に應じようとしても、尙いつも自己を歌ひ、自己に卽してゐる。併し時にはかなり明瞭に外物を觀たと思はせる作がある。「さびしさや花のあたりのあすならう」「生きながら一つに氷る海鼠かな」の如きは尙自己の姿が影さしてゐるが、「義朝の心に似たり秋の風」は、芭蕉を離れた「秋の風」の句であり、「白菊の目に立てゝみる塵もなし」「橿の木の花にかまはぬ姿かな」「世の人の見つけぬ花や軒の栗」は、他の特定の人を諷喩するもので、芭蕉自身を歌ふのではない。芭蕉自身は讃美者として立つてゐる。此等は尙多少の象徴的・譬喩的性質を含むが、「明ぼのや白魚白きこと一寸」「秋風の吹けども靑し栗のいが」「眉掃を面影にして紅の花」「白芥子や時雨の花の咲きつらん」「蕣見れば首筋赤き螢哉」の如きは明かに對象としての物を詠んだ句である。無論その或物は感覺的美によつて、或物はフモオル的な特性によつて、異なる角度から觀られて居り、其所に歌ひ手の主觀は現はれてゐるに相違ないが、客觀的な物の存在が作者に示した神秘さを發くものに外ならないのである。

かやうに芭蕉を詠物詩人として考へる事が出來るが、芭蕉には尙和歌の傳統が濃厚に認められ、個性的に見ても抒情詩人としての傾向が著しいので、詠物の側面は比較的微弱である。時代から言つても主情的な興隆期であり、一方漢詩壇における詠物の流行が、それ程著しくなつて居なかつたのである。

然るに蕪村の出た頃になると、時代は漸く智的傾向の多い成熟期に入り、漢詩の方に詠物の風が隆まり、これに關する出版物も多くなつたと思はれる。今手許にあるものだけを取つて見ても、唐李嶠詠物詩（寶曆辛巳序）・梅岡詠物詩（安永五年著）・日本詠物詩（安永六年刊）・歷朝咏物詩選（天明元年刊）・詠物百首（天明三年梓）・詠物茹稾（天明六年刊）・佩文齋詠物詩選（文化五年刊）・同二編（文政十三年刊）・三家詠物詩（文化八年刊）の如きがあり、尙、古今詠物詩選・詠物詩故實・朱之蕃詠物の如きも此頃出たらしい。此中蕪村歿年（天明三）迄に出たものは、蕪村に影響を與

へて居るであらう。蕪村は新興の南畫家として、其畫に漢詩を題する事も多く、題畫と詠物とは密接な關聯があるので、彼が詠物流行の風潮に染まらない筈はない。それは彼に「詠物の詩を口すさむ牡丹哉」の句があるによつても知られるのみならず、事實彼の傑作ともいふべき牡丹の句は、純粋に詠物的なものであつて、此境地では、抒情的に優れてゐても物の美を表現する事の貧寒な芭蕉の作に對して、彼の獨自の位置を主張するに足るものである。

蕪村に於いて、實に日本的詠物は其發展の頂上に達したと言つてもよい。春の夕・春の暮・行く春・梅・若葉・牡丹・時鳥の如き——特に春夏の句には、實に見事な詠物が多い。それは支那の詠物詩に比して決して劣るものでなく、詠物の缺點たる、所謂雕蟲の小技に墜ちず、又捉影的謎語に逸せず、正面から水々しき感覺を以て、一物の姿を現ぜしめ、造化の秘技を讚ふる聲となつてゐる。

今蕪村の句を日本的詠物の代表的なものとして、これを支那の詠物詩と比較して見ると、如何なる相違があるであらうか。無論支那の詠物詩も必ずしも一律なものではなく、例へば杜甫の「孤雁」の如きは、孤雁といふ主題を詩中に明示し、其運命を描くと共に、孤獨の苦惱とでも言ふやうな、或主觀的感慨を寓したものであるが、しかし所謂詠物の體として典型的なものは、詩中に題の物を明示せず、單にその形容を重ねて其物の何であるかを暗示し、其物の特性を種々の角度から曲盡して、結局其物の德を彰はし、惹いては人間の鑑ともするといふやうな方法を取つてゐるのである。然るに和歌以來の題詠は、題の物を作中に明示するのを正しい格とし、發句は又、季の物を句中に詠み入れて季の詞とする事になつて居るのであつて、そして蕪村時代の發句は、この題の物と季の物とが合一して居る所に、一種の日本的詠物の體を出現せしめた事となつて居るのであるから、日本的詠物は、物を作中にあらはに示すといふ點を、第一の特徴とするのである。次に發句は僅かに十七字の短詩であつて、しかも其中に題の物を含むのであ

るから、その物の描寫に費し得る語數は實に僅少な分量しか持つて居ない。支那の詠物詩が、絶句でも律詩でも、其全部を物の描寫に費し得るのとは非常な相違である。以上二つの相違點から、作品の效果の上に如何なる差を生じてゐるかといふと、第一の、題の物の明示といふ點からは、支那詠物詩の謎語的暗示、象徴的手法を離れて、直指的・印象的手法となつて居り、第二の、描寫の單純といふ點からは、無構造的・斷片的世界が、其姿の儘で統一を保つといふ特色を呈して居る。

支那詠物詩の成熟の極致に達したものとして有名な鄭谷の「鷓鴣」を取つて見る。

暖戲烟蕪錦翼齊。品流應得近山鷄。雨昏青草湖邊過。花落黄陵廟裏啼。遊子乍聞征袖濕。佳人纔唱翠眉低。相呼相喚湘江曲一作闊。苦竹叢深春日西。

さすがに「鄭鷓鴣」の名を擅にした名作だけあつて、入神の技によつて、鷓鴣といふ一つの存在が靈氣を帶びながら詩中に動くの感を起さしめるものである。「鷓鴣」の語は用ゐて居ないにも關らず、各句に其姿・其聲・その身動き、その靈を現出せしめて居る。種々の環境の中に置かれ、種々の形象を取りながら、各句の中に現はれる此鳥は、全體として見紛ふべくもない、一個の「鷓鴣」の本質に歸する。最初の一聯では總論的に此鳥の姿態と生活と習性と位相とを提示し、第二聯に於いては特殊の魅力ある風姿風情を捉へて、直ちに第三聯に入り、これによつて人を感動せしめる所の價値に觸れ、人間との共感に及び、最後の一聯になつて此鳥の悲劇的運命ともいふべき「愛」「南を懷ふ心」の深さに至る。かくして嫋々たる餘韻によつて詩的結論を與へるのである。入念精妙な構圖と製作意圖とを掬み取る事の出來る作である。一句一句斷續しつつ、背後を縫ふ鷓鴣の靈によつて統一され、殆ど哲學的な深さのある構想を認めしめるのである。

蕪村の詠物をこれに對比せしめる爲、日本の鷓鴣とも言ふべき「閑古鳥」を取つて見る。閑古鳥も一種靈的な意味のある詩的な鳥で、支那の詩人が鷓鴣を愛し歌ふのと似た所がある。蕪村はこれを不思議な、正體のわからない鳥として、多くの句に歌つてゐる。今鄭鷓鴣に倣つて蕪村の句から八句を選び、律詩に似た編成を試みてみると、次の様なものが出來上る。

山人は人也かんことりは鳥なりけり
なに喰うてゐるかも知らずかんこ鳥
閑古鳥昨日もこゝに來啼きぬる
閑古鳥歟いさゝか白き鳥飛びぬ
かんことり招けども來ず柊には
羽いろも鼠にそめつかんことり
親もなく子もなき聲や閑古鳥
閑古鳥可もなく不可もなくね哉

かうして見ても、鄭鷓鴣の如き統一的構圖を認める事は困難である。無論蕪村は一句一句を、只それだけの世界として歌つたものに過ぎない。どの一句を取つてみても、淋しい、何所に居るか、何所から來たかわからない、何を啼いて居るかわからないやうな此鳥を、十分に表はして居る。芭蕉のやうに「うき我をさびしがらせよ」と、自己を中心にして表現するのでなく、閑古鳥そのものの性に卽してよく此鳥を表現してゐる。一句一句生きて動く。けれども此所には殆ど構成から來る神秘的な魅力は認められない。蕪村の句は鄭谷の句の一つ一つを取出して、それに題の物を

よみ入れ、それだけを獨立させたやうなものである。

總て發句は詠物詩の一句か二句を獨立させたやうなものである。例へば懷風藻の「詠月」の中から「臺上澄流耀、酒中沉去輪」の句を取れば、蕪村の「盃に月を碎くや夜もすがら」になるし、「水下斜陰碎」は「水かれて池のひつみや後の月」に、「樹落秋光新」は「山茶花の木間見せけり後の月」になり得る着想である。無論發句は獨立した詩形としての統一を持つて居り、思想の焦點や感情の曲折に、詩句の斷片と異なるものを具へてゐるから、全體の效果は一篇の詩に類するが、其内容の單純さは詩の一二句に近く、結局、發句は詩の一二句に一篇の詩の如き效果を附與した如きものと見られるのである。かやうに部分が獨立して全體としての力を持つ如き效果の中には、複雜な構造の美や、思想的な諷喩の力は失はれて居るが、極めて單純な印象的・情調的魅力の中に、一擧にして本質的・究竟的なものが攫まれてゐるのである。これは既に詠懷的方向において和歌が漢詩に對して持つ特色であつたが、俳諧はそれを詠物的方向に押詰めて行つたもので、蕪村はその代表者であつたと言ひ得る。これは必ずしも支那詠物詩から脫化した境地とのみ見るべきものでなく、日本人が獨自の藝術的志向に基いて切拓いて行つた世界で、それを支那の詩と比較して見ればかやうな關係が認められるといふ意味もある。そして尙眼を放てば、これは大きな東洋的藝術志向の一分派としての日本的行路を示してゐるものとも考へられるのである。

塵塚誹諧集

笹野堅

江戸古風俳諧の先輩齋藤徳元の業績を見るべきものは、『誹諧初學抄』の俳論と、當時の俳書に散見する俳諧とであるが、なほ自撰の『塵塚誹諧集』は、その俳諧の作法書に對する彼が俳諧の選集で、徳元の俳諧研究に最も重要なものである。

齋藤徳元が專ら俳諧に遊んだのは、慶長五年關ヶ原の役以後のことであらう。彼は齋藤眞五郎長龍の子として美濃岐阜に生れ、通稱を齋宮、齋宮頭、名を龍幸また利起といひ、織田秀信に仕へて二千石を領したが、關ヶ原の戰に石田三成方として敗戰し亡命した。それに就いて、北藤浮生著『滑稽太平記』(八卷、正徳頃成)には、彼が岐阜城を死守することなく、岐阜中納言秀信の先途をも見屆けず、武藤助十郎等と長良川を越えて立退き、普く大臆の名をながしたと記されてゐる。しかし、岐阜城の攻撃は池田輝政と福島正則とによつてなされ、嘗て岐阜城主で其の地理に精しかつた輝政の襲撃をよく力拒した者は齋藤齋宮と武藤助十郎とであつて、遂に輝政が進んで本丸に逼り、これに火を放つた時は城兵の殘る者僅に三十餘人に過ぎなかつたといふから、齋宮等は最後まで踏止つて戰ひ、どうにも戰ふすべなくして其の場を遁れたので、決して臆病といはれる者ではなかつたのである。

かくて齋藤齋宮は入道となつて名を徳元といひ俳諧に隱れた。山崎宗鑑の俳諧に於ける、木下長嘯子の和歌に於け

る、また當時戰國の武士の文學に遊んだのは多く世を脫れるためで、それが近世文學の素地をなしたのであるが、德元の俳諧に於いてもさうした慰みであつた。彼が寛永十八年に著した『誹諧初學抄』一冊が、心の俳諧を述べて巨匠松永貞德の見解を出てゐたこと、俳諧に於ける式目の制定、季寄の編成の最初の一つであつたこと、またそれが江戸に於ける俳書刊行の嚆矢であつたこととは、彼が俳諧に對する熱意を思はせるが、その奥書に、それが君命によつて成つたこと、「式目は終に侍らぬといへは其趣はかりを筆に記し侍るへきよし」にて書き留めた、「田舍にてのわたくしこと」であるといふ、謙辭と考へるよりは其のまゝ肯定すべく、なほ、その俳諧の作法を說くに、俳諧が連歌に到らんとする方便であることを述べてゐること等から考へても、彼が俳諧を生涯の仕事とする意圖があつたとは想はれないやうである。しかし、その俳諧や、この俳諧の作法書によつて江戸古風の先達となり、石田未得、高島玄札、荒木加友、半井卜養と共に江戸五俳哲と稱せられてゐる。

德元の俳諧は、松江重頼撰『狗猧集』(五冊、寛永十年刊)に發句七十七、付合百六、付句三十五、野々口立圃撰『誹諧發句帳』(五冊、寛永十年刊)に發句七十七、重頼撰『毛吹草』(五冊、正保二年刊)に發句五十、安原貞室著『非無漏毛理』(三冊、正保三年刊)に發句三、重頼撰『毛吹草追加』(三冊、正保四年刊)に發句九(但、中卷欠)、北村季吟撰『山之井』(五冊、正保五年刊)に發句六、鷄冠井令德撰『崑山集』(十三冊、慶安二年刊)に發句二十九、川崎友直撰『若狐』(一冊、承應元年刊)に立圃と玄札との三吟、蔭山休安撰『夢見草』(五冊、明曆二年刊)に發句一、重頼撰『懷子』(十冊、萬治三年刊)に發句六十九、付合三十二、椋梨一雪撰『哥林鋸屑集』(六冊、萬治三年刊)に發句二、季吟撰『新續犬筑波集』(十冊、萬治三年序)に發句六、付合七、小島宗賢・鈴村信房撰『繪入源氏袖鏡』(二冊、萬治三年跋)に發句一、正法寺成安撰『埋草』(五冊、寛文三年刊)に發句一、吉田友次撰『阿波手集』(四冊、寛文四年刊)

に發句二、重頼撰『佐夜中山集』(五冊、寛文四年刊)に發句二、付合一、立圃撰『小町踊』(六冊、寛文五年刊)に發句四十一、露柔軒由健撰『都草』(三冊、寛文五年刊)に發句一、寺田重德撰『誹諧獨吟集』(二冊、寛文六年刊)に百韻一卷、西村長愛子撰『遠近集』(六冊、寛文六年刊)に發句一、谷口重以撰『百人一句』(一冊、寛文七年刊)に發句一、謡春庵周可撰『吉野山獨案内』(六冊、寛文十年刊)に發句一、重德撰『誹諧新獨吟集』(二冊、寛文十一年刊)に百韻一卷、一雪撰『晴小袖』(四冊、寛文十二年刊)に付合一、重頼撰『大井川集』(二冊、延寶二年刊)に發句一、松山玖也撰『櫻川』(九冊、延寶二年跋)に發句一、表紙屋庄兵衛版『歳旦發句集』(一冊、延寶二年刊か)に發句六、吉田蘭秀撰『後撰犬筑波集』(四冊、延寶三年刊)に發句四、付合一、井原西鶴編『誹諧師手鑑』(一冊、延寶四年刊)に發句一、神田蝶々子撰『誹諧玉手箱』(四冊、延寶七年刊)に發句二、高野幽山撰『誹枕集』(三冊、延寶八年序)に發句一、田代松意撰『功用群鑑』(二冊、延寶末年刊か)に發句二、室賀轍士撰『花見車』(四冊、元祿十五年刊)に發句一が見えるが、彼が寛永十年江戸に於いて成書した『塵塚誹諧集』は、かの俳論の著書に對して、俳諧の結集として、その俳諧の業績を見るべきものである。

『塵塚誹諧集』は美濃紙を半裁して二つに折つたものを用ゐた、縱六寸九分横四寸八分五厘のもの二冊である。青色の地に白い蓮の模様を畫いた絹の表紙をつけ、銀の切箔を散らした鳥の子紙の見返があり、紫の絹紐で大和綴にしたものであるが、表裝は後に改められたもののやうに思はれる。表紙の左上の隅に朱で「塵塚誹諧集」、「上」或は「下」と記されてゐる。上下共に開卷及び上卷の卷尾に綠色で「子孫永保、雲煙家藏書記、共二卷」とある鹿島清兵衛の家の印記があり、また二冊共に卷尾に丸に「ち十」とある岡野敬胤氏の朱印がある。もと知十氏の秘藏で、今わたくしに歸してゐる。

これは寛永十年十二月德元が江戸にあつて、ある人の命により自筆で發句八百三十一、付合三百七十、付句百四十八、狂歌二十首を、上卷に慶長十六年の句から寛永五年のものまで、下卷に寛永六年のものから寛永九年、十年頃の句まで年代を逐つて書き留めたものである。

上卷の初めに、

誹諧の二字をおもへはことはみなことはにあらすと見えたりしきしまの道の中に片はしはかりはたとり入てもみまほしき物から世にのそみて後は朝にきく事を夕には忘れ夜半のむしろにおもふことあかつきの枕にとまる事なしたゝうつせみのからのみ林のかたはらに殘れるかことししかはあれと年の一も若かりし時こなたかなたにてつかふまつりし數句を心のすさみはかりにかきあつめてちりつかとこれを名付侍るになん

とあり、

若狹國に年へて住ける間誹諧發句幷狂哥

慶長十六壬子年元日

雪や先とけてみつのえねの今年

とある。慶長五年關ケ原から亡命した德元は、まづ長良郡小栗村に隱れ、次いでその在所である加茂郡加治田村に退いたが、里人に顧られなかつたといふ。しかし、その後の消息は明かでないが、この前書によれば、それ以來若狹國に居たのではなからうか。尤もこの「年へて住ける」といふのは、慶長十六年以後若狹國に十四五年住んでゐたのをさすのであらう。彼は帆亭と號してゐるが、與謝の海の天橋立の眺望に因んだものらしく、彼の俳諧も、若狹國に居住するやうになつてから多く作られたやうに思はれる。

甲子の冬越前國のうちつるかといふ所を若狭國のかみ忠高公御加増として拝領ありける次の春

とて一句ある。「若狭國のかみ忠高公」は卽ち京極忠高である。京極家職編『丸龜讃岐京極家譜』（二卷、明治初年成）に、

寛永元甲子年以越前敦賀郡加賜忠高畢

とあり、堀田正敦編『寛政重修諸家譜』（千五百三十五卷、文化九年成）にも、

寛永元年冬越前國敦賀郡にをいて二萬千五百石を加恩あり

とある。また、車持といふ里をも知行したとて九句あるが、これは德元が拝領したもので、かれこれ併せ考ふるに、德元は京極忠高に仕へたやうに思はれる。尤も彼が關ヶ原亡命後若狭に赴いたとすれば、忠高の父京極高次を頼つたものであらう。京極高次は織田信長、信雄と因緣があり、豐臣秀吉に和してゐたが、德川家康に好意をよせて、關ヶ原の凱旋に所領を若狭に轉ぜられ、慶長五年十月小濱城に住した。當時忠高は八歲で父の人質として大坂城に在り、後に江戸に居たが、慶長十四年高次が歿してその跡を襲ひ領地に赴いたのである。ともかく織田の殘黨である德元が忠高に仕へたのは、京極氏が織田の因緣があつたからでもあらう。それに京極氏が德元を用ゐたことも、德元等の敗戰が主君織田秀信の老臣等の諫を用ゐず、石田三成等に與した應戰であり、高次は秀吉の知遇はあつたが、大坂方につかず寧ろ關東方に通じて、遂に大津城に籠城したといふ、兩者の事情からしても推せられるのである。或は内海物右衛門著『生駒記』（三卷、德川時代中期成）に新參者として齋藤德元の名が見え『生駒家士分限帳』に彼が銀四貫目十二人扶持を與へられてゐるのを以て、德元が讃岐高松の城主生駒高俊に仕へたと考へてゐるものもあるが、これだけの記録では彼が生駒侯の手當を受けてゐたとは考へられても、仕官してゐたと考へることは、關ヶ原亡命前後の明かに知られる經歷から推察して信憑されないであらう。

德元は若狹國にあつて、熊川、名多の庄、天橋立、高濱等に行吟し、また一歳、若州を出て紀伊に赴き高野山に登り、奈良に遊んで若狹に歸つた。その間の發句のうちに、

高野の峯によちのほりて君に逢奉れはなみたせきあへすかの昔おとこ小野へ行て忘れては夢かとぞおもふと詠し給ひしおもひにひとしく發露涕泣して

春雨もなみたの露やおくの院

しはらく君につかうまつり侍りける間に

色に香にそむやかうやの法の花

高野山大師や土に梅ほうし

とある。これは高野山の奧院に於けるもので、その前書及び句意からみれば、君といふのは關ケ原の戰に捕へられ、薙髮して高野山に入り間もなく死んだ織田秀信のことであらう。これは弱冠にして信長の遺業を廢し、纔に二十一歳で淋しく世を終つた舊主の墓を展し、涙を流して暫らく墓を守つた時のものと思はれる。

その後、寛永三年に上京して三四年滯在した。

寛永三曆のころ都に上り三四年在京せしうち發句

とあつて、淸水寺、建仁寺、大德寺、妙心寺、北野に詣でた發句や、祇園會、賀茂の祭等の物見遊山の發句があり、また『源氏物語』の卷名や、歌の六義の詞ばかりを發句にしたものがある。その間、

水無月廿日のころ江戶より御上洛とて世中ゆすりてあふき奉るいかめしき御ひかりを拜み奉りて

長月十日のころ二條堀川のみたちへ行幸ありけれは

還幸の又の日幕下御參內あり目出度治まれる天下也相國家康卿より先三代なりけれは

と前書してそれぞれ發句がある。これは寛永三年六月德川秀忠が上洛し、やがて八月將軍家光も上洛して、その九月十日に秀忠、家光が後水尾天皇の行幸を二條城に迎へ奉つた。そして聖駕還幸あつて幕下の參內があつた。すなはち京極忠高は家光の上洛にしたがつて若狹から京都へ出、九月六日に行幸御迎の家光の參內に供奉してゐる。彼は慶長八年二月江戶に行つて秀忠の前で元服し忠高と名乘つた。その室は秀忠の女である。德元が上京したのはこの行に隨つたのであらう。

次いで寛永五年六月末、德元は里村昌琢に誘はれて一緒に有馬の溫泉に遊んでゐる。

寛永五年林鐘の末つかた法橋昌琢公にいさなはれて津國有馬へまかり在湯中のつれ〳〵その年の日發句を書記し侍りけるを琢翁一讀ありて則自筆を以奧書を加へ給りぬ筆の次てに爰にこれを高載侍る

と前書して寛永五年元日から大晦日までの日發句を揭げ、末に「此一冊有馬在湯中令一覽畢一々作意奇特に候事筆の次而記之　法橋昌琢在判」の奧書が寫されてゐる。德元も夙く連歌を修めてゐるが、それは當時連歌の達人里村昌琢に師事したやうである。然るに堀江林鴻著『誹諧京羽二重』(四冊、元祿四年刊)の「道統の圖」及び森川許六著『歷代滑稽傳』(一冊、正德五年刊)に牡丹花肖柏の末とあり、『歷代滑稽傳』には德元、慶友、玄札の付合が揭げられてゐる。これは彼等が當時江戶の俳諧を代表してゐる觀があり、半井慶友が肖柏の孫に當るところから附會されたのであらう。いま知られる德元の連歌は、寛永五年五月十八日及び寛永六年八月十二日興行の百韻、寛永七年正月十日、淺口藩主蒔田廣定興行の「何船」百韻、同年二月二日、脇坂淡路守興行の百韻、同年二月十六日、文珠院興行の「何船」百韻、寛永八年、村田加左衞門興行の「何山」百韻、寛永十年正月、脇坂淡路守興行の「何船」百韻、同年二月廿日、木屋庄九郎興行の「山何」百韻、同年三月十九日、諏訪隼人興行の「何木」百韻、年代不明の佐久間大膳亮等

興行の「何人」百韻等に見えるが、何れも昌琢と一座になつてゐる。かの俳諧の作法書も、彼の連歌の教養から昌琢の式目、里村紹巴著『連歌至寶抄』（一卷、天正十三年成）、宗祇著『吾妻問答』（一卷、文明二年跋）等に據ることが多かつたやうに考へられる。

この有馬在湯中にものした日發句の次に、徳元が松永貞徳を訪れたことが見える。

都三條衣の棚に貞徳とて俳諧にすきものありかれか庵室へ音信侍りけれはしろき物こそくろくなりたれと云前句に百句付たりやつかれにもつかふまつれといひけれはかくなん

とあつて、その付句が『狗猧集』に抄出されてゐる三十五等が、春夏秋冬戀雜にわたつて九十八掲げられてゐる。徳元と貞徳との交渉は、彼を考察するうへに最も注目すべきである。貞徳が文學の巨匠として、また俳諧の代表者としてあらはれてゐたから、貞徳撰『紅梅千句』（一冊、明暦元年刊）の北村季吟の跋に「休甫徳元のともがら卜養望一など遠きさかひをこえて添削をまかせ合點をこひねがへり」とあるを否定すべきではないとしても、それがいつか中島隨流著『誹諧貞徳永代記』（五冊、元祿四年刊）に徳元が江戸から上京して貞徳に入門したとされ、青木十口著『誹諧家譜拾遺集』（一冊、明和八年刊）に「貞門稱スル二五哲一其隨一也」とされ、生川春明著『誹家大系圖』（二冊、天保九年刊）に貞徳門人の部に入れられてゐるやうに、徳元が貞徳の門流として考へられてきてゐるが、それは貞徳の勢力に掩はれたものと見るべきであらう。『誹諧貞徳永代記』に、貞徳は寛永六年十一月五日京都妙滿寺に於いて、始めて百韻俳諧の興行の會席を設けたとあり、それに就いて、林鴻著『誹諧永代記返答』（三冊元祿六年刊）には、彼が二十歳前後で俳諧の宗匠を承つて、寛永六年五十九歳になるまで百韻の會をもしなかつたのではないと反駁してゐる。ともかく徳元の俳諧は、少くも慶長十六年以來のものが存し、この前書の貞徳を訪れた時が徳元が彼に面唔した始めのやうに思は

れ、その前書の書き振りが師禮をとつたとは考へられず、寧ろ同好の者として交渉があつたと見るべきであらう。この時は寛永五年八九月頃で、通說によれば德元は七十歲、貞德は五十八歲であつた。その俳諧が貞門風であり、『誹諧初學抄』のうちの式目が貞德著『あぶらかす』(一册、寛永二十年刊)の式目歌と一致してゐるものがあるが、それは當代の風潮、連歌から出た俳諧の作風や作法が當時に於いては符合することも當然のやうに思はれ、なほ德元は俳論では、貞德の俳言だけの見方から卓れた見解に進んでゐるのである。すなはち貞德以前、業に連歌の行きつまりとともに、荒木田守武、山崎宗鑑等によつて手を染められた俳諧之連歌は相當にひろまつてゐたと想はれるから、彼は連歌の嗜みから俳諧を自得して、既に貞德に會ふ前に相當な技倆をもつてゐたとするのは敢て牽强ではないであらう。貞德門の重賴が大きな抱負をもつて著した『狗猧集』に、それが彼を貞門から除外させた編輯であつたとしても、

春立やにほんめてたき門の松

といふ德元の發句を卷頭第一にすえたことは容易ならぬことで、彼はよほど德元を重んじてゐたやうである。

それから、

同年の霜月於武州江戸人之御所望によりてつかふまつりし千句の發句

と前書し十句の發句があつて上卷を終つてゐる。この「同年」とは寛永五年のことで、その十一月に武州に於いて江戸の人の所望で千句を獨吟してゐるのである。そして下卷の初めに、寛永六年三冬もやゝ末つかた都を立つて江戸へ下るとあれば、寛永五年六月末に京都から有馬に赴き京都に歸り、その年の十一月には江戸に下つてゐたが、江戸からまた京都へ戻り、寛永六年十月末に京都からまた江戸へ下るのである。

下卷は、

抑寛永六暦三冬もやゝ末つかたに都を立てあつまへまかりける道すから馬上のなくさみ草に誹諧狂哥なと獨こちて夕〳〵のかり枕宵過る間の油火にさしむかひ矢立の筆にて記し置侍りしを今みれはよくもあらさりけらし先三條の橋を打渡り賀茂川をはるかになかめやりて

をしかものかはいりうまきはをと哉

とあつて、寛永六年十月末、江戸へ下ることから始められてゐる。德元が如何にして江戸へ下ることになつたか。これはその俳歴のうちにあつて、また注目すべきことである。その江戸に住みついたのは、京極忠高に隨つたもののやうに想はれる。忠高は寛永七年三月四日に室女を喪つてゐるが、その佛事は江戸小石川傳通院で執行してゐるから、當時江戸に居り、また彼は寛永四年六月十二日に江戸で卒してゐるから、晩年多く江戸に在つたらしく、寛永六年十月末、德元が江戸へ下り住みつくやうになつたのは、主君忠高に隨つたもののやうである。尤も德元が江戸にあつては、なほ最負にする者があり、江戸に於ける俳諧の代表者となつたのであらう。寛永五年十一月德元に千句を所望した江戸の人、さうした人が『塵塚誹諧集』を書かせ、また『誹諧初學抄』を著はさせたやうに思はれる。

ともかく德元は寛永六年三冬の末つかた賀茂川の發句を殘して京を立つた。

粟田口を過て日の岡より笠とり山の見えければ

雪はれて笠とり山のあたま哉

それから山科を過ぎて神なし森、追分、逢坂山、鳰の海、栗太の郡綣村、鏡の宿、老蘇の森、高宮といふ所の犬上川、摺針山、醒が井、驚の宿、寢物語といふ里、車返の里、關ケ原で、それぞれ發句や狂歌をよみ、

垂井の宿のあるし所につけたる物なれはとてみやしろのねふかを汁にして出し侍りければ

とて一句あり、それから稲葉山、墨俣、尾張の國に着いて、また熱田の宮、鳴海の宿、三河の知立、高師山、矢矧川、二村山、白須賀の濱、濱松、天龍川、見附の國府、日坂、大井川、駿河の宇都の山、鞠子の柴屋寺、府中、江尻、沖津の清見寺、富士川、吉原の富士山、伊豆の三嶋、箱根の峠、相模の國に着いて、木出留幾の磯、大磯、馬入川、武藏の帷子の里で發句や狂歌をよんでゐる。かくて、

かやうにうちなかめ下るほとに極月下の六日に江戸に付畢

京と江戸と兩みちかくるむさし鐙さすかだちんは乘もうるさし

とあつて、德元が江戸へ着いたのは寛永六年十二月二十六日で、その時に詠んだこの狂歌は、生白堂行風撰『古今夷曲集』(四冊、寛文六年刊)にある彼の狂歌十首のうちにも見える。また行風撰『後撰夷曲集』(六冊、寛文十二年刊)の彼の狂歌三首のうちに、

東道記かくとて

栗田口たゝきよみぬるたはことを藤馬允かみんもはつかし

とある「東道記」は卽ちこの時の道中記であらう。江戸へ出た德元は馬喰町二丁目所持の家に住んだと傳へられ、また『懐子』の序に「淺草の入道」とあるは德元のやうに考へられるから、淺草にも住んだのであらうか。

そして寛永七年元日からの發句並に付合が記され、

いとやことなき御かたよりめされて前句を一出し給ふてけり則席に五十句付て奉り畢

とて「そろはぬ物そよりあひにける」の付句五十を掲げ、

熱海千句之拔書

として、各百韻のうち第三まで及び付合、「第一名所誹諧」に二十二、「第二謡」に二十二、「第三源氏」に二十一、「第四刀之銘」に二十八、「第五藥種」に三十、「第六虫獸」に二十二、「第七草木」に十七、「第八魚鳥」に二十一、「第九鷹詞」に二十九、「第十茶湯」に十六を掲げ、次に、

追加漢和

寒月ハ誰カ氷餅ツ　三江

雪を粉にしてちらす山風　德元

鳴神や石うすをひくをとならん　同

右漢和は折節洛陽建仁寺よりも益長老武江下向ましく〵て不慮に參會則章句を申うけて兩吟に百韻つゝり侍りぬ事多ければ爰には第三までを書記畢

とある。この「熱海千句」、「追加漢和」は東京帝國大學國文學研究室所藏大野洒竹氏舊藏に完本がある。それは、およそ德川時代中期の書寫にかゝるもので、美濃紙を用ゐ、澁表紙をつけた、縱七寸八分橫五寸八分五厘の袋綴一册である。表紙の左上の隅に朱で「德元千句」と題し、開卷に「於伊豆走湯誹諧　德元」とあり、「洒竹文庫」とある長方形の朱印及び白文で「琴海」とある圓形の黑印がある。これは俳諧賦物獨吟千句の全部を掲げ、また「追加　漢和之誹諧」として、三江、德元各々付合四十九を收めてゐる。卷末に、

此誹諧は伊豆國熱海在湯中のつれく〵に異なる興にもやと百韻ことの名をかへ品をかへて此浦のもしほ草によそへてかきあつめ侍りぬおろかなる數句をつゝり侍る事みん人の咲草の種をまく中立なから缺唇のうそも心なくさみとかや此內鷹詞の百韻は前二條殿御述作の鷹百韵の御連哥有さし合等一切たゝし給はす其例に任せてかくのことし其外何れもそれく〵の詞を一

句〳〵にかへ侍んことを宗としてさのみ指合句體にも取合侍らす又追加漢和の狂句は折節洛陽建仁寺より益長老東關下向ましく〳〵て不慮に參會則章句を申請兩吟につらねならへ侍るは知識の金言をけかし侍る事嘲弄をまねくものか

寛永九暦仲冬日至　　齋藤齋頭入道

德元在判

とある。すなはち寛永九年冬、江戸から熱海走湯に赴き、獨吟千句を作り、また京都建仁寺の益長老が下向したるにはからずも參會して、漢和の俳諧をも作つた。『新續犬筑波集』にも、

益長老と兩吟の漢和に

觀ㇾ泡(アハヲ)鷺(ノ)ニ老躬(ヲ)ー

たつる茶の色もいつしかかはりはて　　德元

とある。建仁寺益長老は、永井恭重撰『紫巖譜略』（一卷、文政元年序）、古筆了仲編『龍寶山大德禪寺世譜』（一冊、安政二年刊）に山城紫野大德寺の第二百十二代の紹益、字を堅峰、號を三江とあるがその人らしく思はれる。建仁寺派は關ヶ原の役に西軍に應じて德川幕府に忌まれ大德寺に轉じたものが多かつたが、恐らく紹益も建仁寺から大德寺に轉じたのであらう。彼は京都の人で、大德寺の法燈を嗣ぎ、寛文八年二月十日出世して連歌師里村紹巴及びその一家の墓のある大德寺の塔中正受院に住し、後に丹州に林泉寺を創立した。元祿五年十一月四日七十六歳で寂した。

なほ前島春三氏の所藏に、『塵塚誹諧集』下卷の道中の行吟のうち垂井の宿の發句以下及び熱海で作つた千句から抜いたもの等の見られる本がある。これは德元の自筆らしく思はれるもので、美濃紙を半截したものを二つに折つた、縱七寸八分五厘横五寸六分の横本一冊である。澁表紙がついてゐるが、近く加へたものである。また初めが脱落してゐるらしく、なほ數枚落帳してゐるやうである。およそ『塵塚誹諧集』下卷と一致するものであるが、多少の出入が

ある。巻末に、

年來したしくちなみ侍ける中に去やことなき御方より愚作の誹諧一覧あるへき旨しきりにのたまひけるを斟酌なからいなひかたくてとり〳〵書記し侍りぬ先一年東へ罷下し道中の發句狂哥其より以來の句とも幷付合等色々又十品のはいかい面八句のこれかれとりあつめて此一册となしてつかはし侍るなり外見あらはその嘲弄をまねくものか

とある。「先一年東へ罷下し」とあれば、これは寛永七年に書かれたものである。

なほ『塵塚誹諧集』は、漢和の次に、

筆之次而に此比よみ侍りける狂哥

とて二首あるが、最後のものには、

春日局よりとて南都酒到來に付

の前書がある。此比よんだとは、この本が書かれた寛永十年のことであらう。

徳元は『誹諧獨吟集』に玄札の「何鰹」百韻のうち「付墨四十七之内長四」の點をしたものがあり、大坂平野郷の御朱印船の貿易を營んだ末吉勘四郎こと、貞徳門人道節の往復の書信にも俳諧の點をしたことが見える。道節が枕屛風にはるために短冊十枚に發句及び狂歌の揮毫を頼んだ手紙に對して、徳元はその手紙の包紙に、

一昨日之貴札早々御返事可申入ヲ御使御見候ことく大工つかひに取紛延引申候今居申候家ヲ打こほし余所へ越かへ申候ニ付

一圓不得申候少御見舞ヲモ申此さくも可申談ヲ此分ニ候ハヽしハしはなし申事成ましく候

一七ッなの御發句さりとてハ〳〵出來申候則長ヲかけ申候此御作意ニてハ是非とも誹諧御すき可被成候不双之可爲御作者候

一短册之事貴老能筆ニ付一入斟酌ニ候へ共御所望之間墨ぬり候て進入申候十枚之内はいかいの發句六ッ春三夏一秋一冬一又

狂歌四首書申候御このミの發句とも八今度出來申候犬子集ニ入たるにて候御めつらしからす候間別之ヲ書申枕屛風ニハをし可被下候恐懼謹言かしく

正月十四日　　　　　　　　（押花）より

緘　〆　　　下徳元樣　吟窓下　　　上末道節

と返事を認めてゐる。書中に「今度出來申候犬子集」とあれば、これはその刊行された寛永十年春の書信であらう。また徳元が門下の源氏、江戸町名、謠等の賦物の俳諧に點をした寫本があり、なほ『滑稽太平記』によれば、徳元は江戸で玄札、崩松、元網、祐政等と最もよく交つたとあり、菊岡沾涼編『綾錦』（三冊、享保十七年刊）には門流として岸本調和、德友、元貞、水元、清春が擧げられ、また貴人の俳席に連つてもゐるが、しかし、それは彼にとつて寧ろ趣味としての生活で、點者としての生活ではなかつたと見るべきである。

そして卷末に、

此上下卷愚作誹諧之發句凡八百一十余句同付合八百余句狂歌二十首記事依貴命難辭奉自染禿毫而已

寛永十年　　　　　　　齋藤齋頭入道

十二月日　　　　　　　　徳元（押花）

みつくきのかたみになれとなへて世の人は哥かく我ははちかく

の奥書があつて終つてゐる。

この書の成つた寛永十年の後、寛永十四年六月京極忠高が歿し、同年十二月二十二日に弟高政の男高知が嗣いだ。末吉氏に傳ふる徳元の手簡に、

四月廿四日之貴札此ほと相届令拜見候殊ニ御念入候油煙壹丁被掛御意候おほしめしより過分之至ニ存候何も忝存候其後ハ不通之段内々御床敷存候處ニ預示大悦此事候いつそや四宮數馬所ニてはいかいも被成古筆能御覽し□□申引合候而則霜に今朝それと見知るや馬の跡と申發句仕候キ御失念被成候哉今ほと京都ニ御入之由定而御誹諧のミ之□□存候然ハ和州横□五郎兵衞殿則御たつねニ付御知人ニ罷成候もろ白ひゝせ之樽なと御持參ニ候はいかいすき候由猶々可申談候我々發句きこしめし度候由則此比仕候句少存出候分如此候

若君樣御任官之心ヲ

更衣

名をかへ衣もかゆる官位哉

しかられて口こたへせよ郭公

佐渡へ行人所望ニ

金ほりやたゝとり山の郭公

端午ニ

軒端ふくよもきの矢を射かつミ□

不存申候へ共菖蒲をかつミと申候

五月雨や日をミてほゆる犬のこゑ

うへ渡す田哥ふしたつ早苗哉

子や生て身ハやせ藪のをミ□□

當春之句とも書付申度候へ共及八十才申候ニ付氣根も無之月もとほ〳〵と仕候□まつ〳〵書もらしつ其元にて貞德なと御參

會之由尤候爰元も上下ともニ是のミ之一｜｜一はいかいあそはし候上御下待申候一餘興句可申候はや草臥申候間少ニ申留候

五月十九日

齋藤

德元

（押花）

末吉道節老

とある。これは道節の書狀の返書で、往復二十數日を隔て、「上御下待申候」等とあれば江戶からの書信であらう。また「若君樣御任官之心ヲ」とて更衣の發句があるが、これは高知が十九歳で京極家の跡目を繼いだことを祝つたものであらう。忠高には子がなく高知を養嗣としてゐたが、未だ上へ達せずしてゐるうちに卒したので、末期の嗣子かなひがたく所領をおさめられた。しかし、祖父高次の功績によつて播磨國三郡を領地として賜はり、館野に住むやうになつた。すなはち、忠高の歿後半年にして京極家の後嗣が表向になり、高知は寬永十五年二月二十日將軍家光に謁し、三月領地に赴く暇が出たのである。德元の更衣の句意をこのすが〳〵しいことに附會することが許されるならば、この書簡は卽ち寬永十五年五月十九日のもので、また書中に「及八十才」とあるのも、德元が正保四年八月二十八日八十九歳で歿したとする通說と年序も一致してゐる。この後、寬永十八年に『誹諧初學抄』を刊行してゐるが、それからの消息は明かでない。

德元の俳諧は賦物に重きをおいた遊戲的なものであるが、連歌から出た彼の俳諧が隨所に優婉な秀句を見せてゐるのは當然であらうし、また彼に限らず古風俳諧のよさはさういふところにあるのであらう。『懷子』の序に、

ちかき世に其名よはれたる人はすなはち淺草の入道は狂句の體はえたれともおもかけ多したとへは夢にゆうなる皃を見ていたつらにこゝろをかくるかことし

とあり、『非無漏毛理』等にもその俳風に就いての批評はあるけれども、彼の伎倆はかなり達者であり、單なる言葉

の遊戯だけでは出來ない冴えたものがある。この『塵塚誹諧集』とかの俳論書とは、彼が寛永期、貞門前期の堂々たる作者であり、まさに江戸に於ける俳諧の草分であつたことを首肯せしめるものであらう。

徳元は晩年を若狭に住み、丹後に移り、正保四年八月二十八日八十九歳で歿したといふ。或は正保元年若狭で歿したとも謂はれてゐるが、『歳旦發句集』に彼の名が正保二年、同三年まで見えるから、その歿年は正保三年以後のことである。恐らく彼は、京極高知が播磨の館野に赴任した後もなほ江戸にあつたが、遂に死處を懷舊の地に定めて江戸を去つたのであらう。『滑稽太平記』、『誹家大系圖』は彼が辭世を、

今まではいきたはことを月夜哉

と傳へてゐるが、その初五を「しぬまでは」とした『懷子』に見える津田休甫のものとたゞ類句とすべきであらうか。天橋立の文珠といふ所の臨濟宗妙心寺派の五台山智恩寺に徳元の墓がある。石塔は高さ六尺、自然石の座石に据えられ、その面に、「淸岩院殿前端尹隣山徳元居士」、その左右に「正保□□□□」、「八月念八日」と法名、歿年が刻されてゐる。「正保」の下は四字ほど磨滅してゐるが、「正保四丁亥年」とあつたのであらう。

芭蕉の詩の持つ感情性

荻原蘿月

一

芭蕉は常に、宗因が出なければ、我等の俳諧は今以て貞徳の涎をねぶつただらう(去來抄)、と言つたけれど、寛文時代の芭蕉は、やはり貞徳流の俳諧を學んで居つた。芭蕉の師なる北村季吟の俳諧は、一句輕々として、俳言が强くない(貞徳永代記)とあるが、伊勢久居の城主藤堂任口の知遇を受け、伊賀・伊勢地方に於ては相當勢力があつた。一體貞徳の俳風は、やさしきを體とし、をかしきを用とする(玉くしげ)と言つて、實質は純正連歌の優美・艶麗な風を保存し、言語・表現は通俗・滑稽な趣を旨としたもので、貞門の人々は皆その風を守つて居つた。俳言が强くない季吟も同じく師風の承繼で、寛文時代の芭蕉の句に、その傾向は著しかつた。

伊賀の上野は俳諧の流行した土地であつた。芭蕉の主君藤堂蟬吟は別として、窪田政好・保川一笑などの先輩が、盛に活躍して居つた。是等の人々の傾向は、取成か見立か、或は故事の通俗化で、大體言語の聯想上の興味が主であつた。附句に於ても、前句を說明するやうな傾向があつた。其中に立つた芭蕉の俳諧も、言語の通俗・滑稽の興味が、表現の主なる目的で、相互に類似した表現形式の句も多かつた。例へば

春風にふき出し笑ふ花もがな　　宗房

花は美女霞やのろし笑顔　一笑
霰まじる帷子雪はこもんかな　宗房
霰降る庭や白地の惣鹿子　蟬吟
夏近し其口たばへ花の風　宗房
吹く風の口かためたし花盛　政好

其他政好に源氏の夕顏の故事を引用した句があれば、芭蕉にも夕顏にうかりひよんと言つた句があり、秋來ては朱々さつた山と言へば、染める涙やほととぎ朱と言つたり、一笑が日極樂といふ語を使へば、芭蕉も日正月と言つて、かゝる類似は相互にかなり多くあつた。掛詞や緣語の洒落では、芭蕉の眞の感情を直截に表したとは言へない。それは言語の遊戲であつた。二次的な興味手段であつた。言語が一種の洒落・滑稽を表してゐれば、それで表現の目的が達せられるといふ時代に於て、感情そのものを如實に出すといふ事は、俳諧ではなかつたのである。貞德は幼時から里村紹巴の執筆を勤め、連歌の式にも通じてゐたから、純正連歌の趣味を捨てる譯に行かず、實質的に之を活かしながら、形式上中古以來の狂連歌の趣味を復活させたのであるが、餘にも實情を不眞面目に取扱つてゐた。山崎宗鑑が「にがくしいつまで嵐ふきのたう」と言つた自然觀賞の態度に、眞面目な實情が表れてゐないやうに、貞德の「しほるゝは何かあんずの花の色」も、同じ興味の連續であつた。蕗の薹が苦いといふ事と、嵐が吹いて困るといふ事のかけ合ひ方法と、杏子の花がしほれてゐる事と、思案ある事とのかけ合ひ方法の間に、何の變化があらう。蕗の薹が藪際に青々した芽を出してゐる光景の感動表現よりも、たまく蕗の薹のふきといふ語が、風が吹くといふ外の意味を持つ事に、より多く興味を感ずるやうな態度では、餘りにも自然美を粗末に取扱つて居りはしないか。貞德の俳諧が自

然そのもの丶感動ではなく、自然を借物にして、自分のふざけた感情に樂しむ所は、自然の冒瀆と見なければならない。

當時の芭蕉は季吟や蟬吟の感化を受けて、やはり時代の傾向に洩れず、言語の通俗・滑稽が興味の中心であつた。併しこゝに注意すべきは、芭蕉の主觀的な抒情的な傾向が當時既に表れてゐた事であつた。掛詞・緣語を離れて、自己の感情を——歎きを表して行くといふ傾向は、後の芭蕉の詩の感情の萠芽となつた。

花に明けぬなげきや我が歌袋

夏近し其口たばへ花の風

命なりわづかの笠の下涼み

最後の句は西行の「命なりけり小夜の中山」の故事によつたものではあるが、芭蕉の人生に對する沁み〴〵した感傷はよく表れてゐる。此句は寬文十二年の作で、當時の貞門俳人の句に較べると、よほど變つた傾向のものであると考へる。彼は掛詞・緣語によつて滑稽味を表すといふ境地を脫却してゐる。眞面目に自己を內省し、自然を凝視してゐる。此句に何等の滑稽・通俗といふ意味はない。故人を愛慕する感情と自己の環境との比較である。かういふ境地から芭蕉の主情的な感情性は進展したのである。

二

芭蕉と宗因との會見は詳かでないが、芭蕉が宗因を尊んだ事は諸書に見える。宗因の俳諧は隨流の言つた程、放逸無慚なものではなかつた。唯貞德流の俳諧と違つて、淨瑠璃・小唄・謠曲等から材料を求め、道化・輕口めいた風であつた。芭蕉が江戶へ下つて以來、宗因流の俳諧に感化された事は事實である。延寶四年以降の諸集を見ると、奇拔な

比喩が著しくなり、道化・輕口の駄洒落に墮ちてゐた。

芭蕉が江戸へ下つた當時の江戸俳壇は、貞門の俳人が勢力を占めて居つて、まだ談林の勢力はなかつた。田代松意が寛文の末江戸へ下つたと言はれても、江戸談林の勃興は延寶三年頃からであつた。其頃芭蕉には其角・嵐雪・嵐蘭などの門人が出來たけれど、芭蕉の俳壇的勢力は才麿や幽山などの先覺者によつて、やうやく認められるやうな形であつた。延寶八年芭蕉はしきりに幽玄調の俳諧を鼓吹した。「田舍之句合」に於ける嵐雪の序に、

桃翁栩々齋にゐまして、ために俳諧無盡經を說く。東坡が風情、杜子がしやれ、山谷がけしきより、初て其體幽になだらかなり。云々

或は「常盤屋之句合」の自跋に、

まことに句々たをやかに、作新しく、見るに幽なり。思ふに玄也。是を今の風體といはんか。云々

とあつて、幽玄調の俳諧を現下の新風と考へてゐた。元來幽玄といふ意味は、霧の絶間から秋の山を眺めるやうなもので、見える所はぼんやりとしてゐるが、何となく奥床しく、どれ位後の方がもみぢ渡つて居るだらうかと思はれるやうな、至極デリケートな氣持であるが（無名祕抄）、

德利狂人いたはしや花故にこそ
鳶に乘て春を送るに白雲や
詩人ゆるせ松江の河豚といはんに
（田舍之句合）

あへて此箒木のほろ〳〵と成て只

茶僧月を見るに梅干の影の如くに來り
橙を蜜柑と金柑の笑て曰く

（常盤屋之句合）

といふやうな調子では、思想の斬新・奇抜と表現の拮屈・聱牙といふ以外に、何の妙味もない風調で、心持の幽玄を怪異な作意を凝らした感情に轉化して、貞門・談林の創作境地に一展開を與へたといふに過ぎない。「拙者苗字は風の篠原」とか「あら何ともなやきのふは過ぎてふぐと汁」と言つたやうな、線の太い、放膽的な調も、面白くない事もないが、是等は時代創作の趣味で、芭蕉の心から根ざした句とは思へない。

枯枝に烏のとまりたるや秋のくれ

といふ句を作つて、連衆を驚かしたといふ逸話もあるが、之は芭蕉が侘しいとか寂しいとかいふ感情に趣味を持つて居つたからで、かうした感情は「田舍之句合」にも、「風となりぬ蝸牛の空せ貝」の判詞に、「うつせ貝さびたり。」とあつて、芭蕉の好んだものであるが、

渾沌翠に乘て氣に遊ぶ　　桃青
朝咲しらむ馬鹿々々の山　　楊水

（次韻）

といふやうな句を作つてゐると、寂びといふ意識も十分に自覺されて居なかつたと見るのが至當であらう。正風の根源は「次韻」にあるといふ說もあるが（不猫蛇）、芭蕉の生命は漸次に進展し來つたので、十分な境地の自覺が附いた時が、芭蕉の詩の生命の覺醒で、それは「冬の日」以後と見るのが順序であらう。

三

芭蕉の俳論に寂び、栞り、細みといふ教がある。之は蕉風俳諧の本質で、蕉門の徒の等しく理想とする所であつた。よく引かれる文ではあるが、去來抄に、

去來云、さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。例へば老人の甲冑を帶し、戰場に働き、錦繡をかざり、御宴に侍りても、老の姿あるが如し。賑やかなる句にも、靜かなる句にもあるものなり。例へば

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰、さび色よくあらはれたり。云々

とある。卽ち寂びとは閑寂な句を言ふのではない。句意や材料が賑やかでも、靜かでも、句の情調が寂びてゐなければならない。內に根ざして、外に表れるもので、單なる閑寂趣味とは違ふ。人格の色である。從つて寂びは寂しい境地をねらつても得られるものではない。自然の體得である。具體的に言へば、靜かな、落着いた、ゆとりある、角の取れた感情性が寂びで、大方青年よりも老人とか、世間に苦勞した人などに見る所である。

元來寂びといふ教は連歌にあつた。心敬は「ひえさびたる方を悟り知れ。」（さゝめごと）とか、或は「ふけさびたる方最も尊かるべし。」（心敬僧都庭訓）などと言つて、ひえさぶ、ふけさぶの境地を、連歌修行者の理想とした。心敬の寂びの境地は、彼が連歌論の「ひとへに餘情・幽玄の心姿をむねとして、いひ殘し、ことわりなき所に、幽玄感情は侍るべしとなり。」（さゝめごと）といふ主張に立脚したもので、言ひ殘し、理なき所を尊んだ所以は、物をあらはに示したり、露骨に言つたりする氣持を嫌つたからで、そこに寂びといふ氣持と一脈通ずる點があつた。蓋し寂びとは一面から見ると、言葉少なき態度である。靜かな、奥ゆかしい、物の俤を示すやうな態度である。連歌師と俳諧師

とは其心境に相違があるが、芭蕉の寂びは心敬等の心境を進展せしめたものと言ふべきである。芭蕉が附句に、移り・ひゞき・匂ひを主張した事も、やはり宗祇などの幽玄的な附方に基いてゐるやうに、寂びといふ心持も、連歌の教に胚胎して、特殊の發展を示したものだらうと考へる。

次にしをりであるが、之も去來抄に、

去來曰、しをりは哀なる句にあらず。……しをりは句の姿にあり。云々

十團子も小粒になりぬ秋の風

先師曰、此句しをりあり。

とあるし、又去來の「答許子問難辨」(俳諧問答抄)にも、

去來曰、さびとさびしき句と異なり。しをりといふは、趣向・詞・器の哀憐なるを言ふべからず。しをりと憐なる句は別なり。たゞうちに根ざして、外にあらはるゝものなり。……强てこれをいはゞ、さびは句の色にあり。しをりは句の餘情にあり。云々

とある。是等の說を見ると、去來は一方に句の姿と解し、他方に句の餘情と言つてゐるが、姿も餘情も同一の意味にならうかと考へる。姿とは表現形式である。餘情とは言外の意味とか、含蓄とかを指し、物事をすべて言ひ盡さぬ所謂心敬の言ひ殘し、俤を示すといふ意味にもなる。併し表現の方法によつては、餘情があるやうにも言へるのであるから、表現を注意すれば、內容がしをりある餘情になる事になる。栞りの語義に就いては、此場合導くといふ意味と、撓め傷めるといふ意味とあるが、導くといふ意味から言へば、表現によつて句全體の情趣を一層深かめるべく誘導する義となり、傷むといふ意味から言へば、哀憐の情を深く含ませる事にならう。但し後者の場合は、去來の說の

如く、趣向や言語や材料の哀憐を指すのではなく、句の全體の情趣の哀憐といふ意味にならうかと考へる。とにかく栞りは句の表現に就いて言つたものと思つてよろしい。十團子の句は、許六が二十句ばかり作つて、三日かかつて、やうやく小粒になりぬと考へ付いたものだ（自讃之論上）が、許六の苦心は、如何にせば秋風吹く寂しい宇都ノ山の光景を、深く表現出來るだらうかといふ點にあつたのだらう。小粒になりぬといふ表現は、時間を含んだものである。時間を含んでゐるから、種々な侘しい想像が湧く。そこが餘情的表現で、全體の情趣に深かみを與へる。それを芭蕉が賞めたのである。

去來は寂び、栞りとつゞけて言つてゐる。寂びと栞りとを分離して言はない。前例を見ても、寂びとはかう、栞りとはかうと說明してゐる。此點を考へると、寂びと栞りには、分離すべからざる何等かの意味を暗示させる。寂びも栞りも內に根ざして、外に表れるものであらう。なほ言へば、寂び、栞りも人格的な意味があつて、趣向や言語や材料の閑寂を意味するのではない。物に體用の關係があるやうに、寂びは體、栞りは用となるのではなからうか。寂びは閑寂な個性の情調、栞りはかゝる情調に居る者の、言語・動作といふやうな意味ではなからうか。寂びは閑寂趣味ではない。閑寂といふ情調によつて、統一された人格の色である。かゝる人の自然觀照や詠歎に寂びが含まれてゐるし、栞りも自ら備つてゐる事になるが、栞りの如何によつて、寂びた人格の色が強く出る場合と、弱く出る場合とあるから、そこを統一的な閑寂情調を強く出さんがために、栞りの用意・修行が必要といふ事になるのだ。

最後の細みに就いては、去來抄に、

去來曰、細みはたよりなき句にあらず。……細みは句の心にあり。云々

鳥どもも寢入つてゐるか余吾の湖

先師曰、此句細みありと、評し給ひしとなり。

とある。此語も難解ではあるが、句の心にありと言つたのは、句の思想内容や觀照態度にあるといふ意味だらうか。

許六が初めて芭蕉に逢つた時、芭蕉と問答した事が、許六の自讃之論上に見えてゐる。卽ち

又問ふ、師と晋子と師弟はいづれの所を教へ、習ひ得たりといはむ。答て曰。師の風閑寂を好んで細し。晋子か風伊達を好んでふとし。此細き所師の流なり。爰に符合すといへり。云々

芭蕉の風は細い、其角の風は太いと言ふと、何となく纖細・豪放といふ正反對の意味に聞えて、「細き所師の流なり。」が要領を得ない事になるが、細いといふ概念は、纖細といふ意味ではなく、感覺の鋭さとか句法の緊密などといふ意味であらう。此意味から論ずると、去來の句の心にありといふのは、感覺の鋭い事になるが、路通の鳥共の句は、此例に適切でない。去來抄は全部信じられない集であるから、此句は或は後人の竄入であるかも知れないが、假に芭蕉の賞めた句として考へて見ると、過賞のやうな氣がする。路通が暮れた湖面をジツと眺めて、浮寐鳥もはや寐入つてゐるか、少しも動かないと、つくづく侘しく思つた句であらうが、寐入つてゐるかといふ表現では、感覺が鋭く働いてゐるとは思へない。こんな間が拔けた、月並臭い表現の句を、芭蕉が賞めるのも變である。此句を細みの例句にすると、細みの意味がますます分らなくなるが、それはしばらく措き、風之の「俳諧耳底記」に、其角の句を論ずる條下に、

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店と作りて、ほそみを見せられたり。……秋の雲尾上の杉をはなれたりなど言ひしほそみは、正風の丸ぬけにて、云々

とある。之れならば許六の說とも合ふし、芭蕉の主張もさぞかしと首肯かれる。鹽鯛も秋の雲も、皆鋭い感覺の句で

ある。鹽にした鯛が魚屋の店先に齒を喰ひしばつて、橫つてゐる光景は、いかにも寒むさうで、寒しといふ主觀によく利いてゐる。又澄んだ紺碧の大空を、一片の白雲が悠々と、尾上の杉を離れて行く光景も、晴れ渡つた秋の郊外の明朗さを想はせる。兩句とも細かい弱々した句ではない。むしろ强く、逞しい感じの句である。而かも句法が緊密で、よく物の焦點を捉へてゐる。芭蕉が或所へ客に呼ばれた時、食後蠟燭を早く取つてくれと言つた。それは夜の更けるのが眼に見えて、心が忙しくなるからであるといふ逸話があるが(赤冊子)、いかにも芭蕉の神經の銳さを物語つた語で面白い。神經が銳く、感受性が敏いから、引締つた句も出來るのである。路通のやうな痲ぼけた神經では月並が生れる。銳い感覺でなければいけない。物の焦點を捉へたり、中核を摑むには、神經が細かくふるひ立つてゐなければいけない。詩人の感覺はデリケートであるが、弱くたよりが無いやうでは困る。そこを去來が戒めたのであらう。

芭蕉と擧白集

宇佐美喜三八

一

擧白集は芭蕉の句と交渉ある歌集として勅撰和歌集と同列に數へられ、(一)且つ芭蕉の俳文と多少ながら關係を持つ旨述べられてゐる。(二)私も嘗て芭蕉の作品と擧白集の歌文との關係の一端に就いて論じたことがあるが、今玆に兩者の外面的な關係を更に汎く覓め、擧白集の有する歴史的積極性の一面を聊か明かにしようと考へる。

先づ芭蕉が擧白集若しくは長嘯子なる名稱を直接に用ひた場合を調査すると、長嘯の名が次の三箇所に引用せられてゐるのが、纔に芭蕉の擧白集を繙讀した事實を承認させるに過ぎないやうである。

(一) 貞享三年の初懷紙百韻の前半に加へられた評註を全然芭蕉の作と看做すことは直に許されないかも知れぬが、(三)暫く之を芭蕉の作とする通說に從つておく。その百韻の二裏月の座の文鱗の句「鴫の一聲夕日を月に改めて」に對する評語の中に、

……夕日淋しき鴫の一聲と長嘯のよめるに、西行の、柴の戸に入日の影をあらためて、と讀る月を取合せて一句を仕立たる也。長嘯を本哥に用ゆるにはあらず侍れども、……(下略)

とあつて、長嘯子の歌とは擧白集卷二の「のべみれば尾花が末に打ちなびく夕日もうすしもずの一こゑ」を指してゐる。

この評註の末には芭蕉が乞ひに應じて即興的に加筆したものと附記し、落葉考では貞享三丙寅年正月の日附がある。芭蕉が即興的な言辭に於いて長嘯子の歌を西行の歌と並べ引用したとすれば、豫て長嘯子の歌に親炙してゐた事實、延いては擧白集の歌を愛誦してゐたことが推想されるであらう。縱ひ即興を別にしても評註を芭蕉の作と見る限り、芭蕉が擧白集を誦讀してゐたものと考へなければならぬのである。

（二）　長嘯の墓もめぐるかはち敲　（いつを昔）

は芭蕉が元祿二年十二月落柿舍に遊んで得た句であつて、その事情は去來の鉢扣辭（風俗文選卷一）に誌されてゐる。この句に就いて一甫の「えの木」に見える記事、泊船集に於ける語の相違等は今は問題でない。長嘯子に鉢扣の文及び歌（擧白集卷十）のあることを知らずしては、右の句の意味を眞に理解し難いのに注意を要する。此際芭蕉が擧白集の「はちたゝき」を意中に置いてゐたことは明かであると思ふ。

（三）　元祿四年の嵯峨日記廿二日の條に、

……獨すむほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑をうしなふと。素堂此こと葉を常にあはれむ。……

とある。これは擧白集（卷六）にある（東山）山家記の「……やがて爰を半日とす。客はそのしづかなることをうれば、我はそのしづかなるをうしなふにたれど、おもふどちのかたらひはいかでむなしからん。」に據つてゐる。但し長嘯子の文では半日は庵室の名稱らしい。嵯峨日記に長嘯隱士の言葉が引かれてゐるのは、一見或は素堂からの聞書ではないかといふ懸念を抱かせる餘地があるが、私はやはり芭蕉は直接に山家記に據つてゐると考へる。後述の如く嵯峨日記の中には他にも擧白集との關係を思はせる箇所が存するからでもある。

さて以上三つの場合について、初懐紙評註には疑問があるものの、吾々は芭蕉が擧白集を讀んだ事實を略々認めなければならないであらう。

註一、太田水穂氏「芭蕉と傳統和歌」(岩波講座日本文學)二三頁。
註二、藤井乙男氏「江戸文學叢説」二一一頁・「校註擧白集」解題七頁・「風俗文選通釋」(改造社俳句講座)二一五頁。
註三、樋口功氏「芭蕉研究」一〇四頁・二九一頁・「芭蕉の連句」一八八頁・荻原蘿月氏「芭蕉の全貌」二九九頁等參照。

二

芭蕉の句が何時頃から擧白集の影響を受けてゐるかを主にして見ると、先づ注意せられるのは、

岩躑躅染る泪やほとゝぎす　(寛文七年前―續山井)

である。これは芭蕉の初期の句であるが、既に擧白集巻一の「岩つゝじ春の別れの涙もてたれくれなゐにむかしそめけん」との關係を思はせるのである。續山井の芭蕉の句には古事記・古今集・源氏物語其他の古典の知識に基いた句が見られるのであるから、(四)擧白集に趣向を學んだ句があつても怪しむには及ばない。且つ句選年考に元祿四年の句「麥の穂や涙にそめて啼雲雀」嵯峨日記・「たふとがる涙やそめてちる紅葉」笈日記等の「涙に(や)そめて」に契點を置いて右の擧白集の歌が引かれてゐるのに比し、この「岩躑躅」の句と擧白集の歌とはより緊密な關係にある。故に一應はこの句に擧白集の歌の影響があると看做し得るのであるが、「戀しさの例もいかが岩躑躅染めてなみだは色に見ゆとも」新後拾遺集戀一左大臣の如き先蹤も幾らかあらうと想はれ、擧白集との關係は決定的には是認することが出來ない。次に、

山路來て何やらゆかしすみれ草　(貞享二年―甲子吟行)

は「大津に至る道山路をこえて」の作とあるが、其角は類柑文集巻上に於いて之を新山家に於けるよりも積極的に箱根

山での吟となし、「涼しさを我宿にしてねまる也」（奥の細道）と共に擧白集（巻八）の「はじめてあづまにいきける道の記」の文を據所とする旨述べ、同記の「匡房のぬし、はこね山うすむらさきのつぼすみれとよまれたりしは、二入三入といはんれうなりとばかりしりてはべりしを、すべてこゝもとにあるみなかの色なるはをかし。……」とある所を「是其力草也、深う思ひとるべき事也」と言つてゐる。恐らく其角はこの關係を直接芭蕉から聞いた譯ではないと思ふ。去來抄（同門評）には「山路來て」の句を湖春が「菫は山によまず、芭蕉俳諧に巧なりといへども歌學なきの過なり」と非難したと傳へるから、或はそれを念頭に置いての諷意を持つものではないかとも考へられる。同じ非難に對して芭蕉の句を辯護するに際し、支考も匡房の歌の上句を引いてゐるが（葛の松原）、堀川百首や夫木抄に據つたのではなく、やはり擧白集の右の條を論據としてゐるやうである。然し其角の言説を虚構として斥けるのは早計であらう。

やまざくら瓦ふくもの先ふたつ　（貞享三年說―笈日記）

に到つて吾々は擧白集よりの影響を確實に承認し得る。この句は擧白集（巻六）（東山）山家記の「常に住む所は、かはらふけるものふたつ」に據つたと看られる。「瓦ふくもの」といふ言葉は齋宮の忌詞の「瓦葺」（延喜式巻第五）より思得たやうでもあるが、「ふたつ」なる語を併せ考へると猶ほ擧白集に學んだものと看るのが自然である。右の關係は素丸の說叢大全（巻二）に指摘せられてゐる。但し句選年考の頭書によると、最初下總の脩茂蘭が見出して二代目宗瑞に語り、素丸は宗瑞から聞いて記したものであるといふ。この句の年代を貞享三年とするのは芭蕉發句集の說で、それに由る他に致方がないらしい。貞享三年は先の初懷紙評註のなされた年であつて、評註には疑問があるにせよ、貞享三年頃既に芭蕉が擧白集を繙讀してゐたと考へるのは至當であらう。隨つて略々年代を同じうする甲子吟行の句にも擧白集の影響してゐることが推想せられ、「山路來て」の句に就いて其角の言つた所、同吟行中の「冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす」につ

き句選年考・棃園抄等に於いて示す擧白集の歌との交渉などは、更めて顧慮すべき價値が生ずるのである。さうして

馬をさへながむる雪の朝哉　（貞享元年―甲子吟行）

にも同樣なことを考へなければならぬ。誹諧問答青根か峯の後記にはこの句が鄭綮の云つた「詩思在灞橋風雪中驢子背上」と精神に於いて暗に一般であると述べてゐる。然るにこの故事は擧白集巻六の（西山）山家記に引かれて、「冬・は雪の朝、鄭綮が灞橋のあとをしたひ、こしをれゑひなきのまぎれに、うさぎ馬の昔の望いかならんいはほにもさく花のあけぼの――詩思は驢子のうへにありといへる、まことにしかなり。」とある。今この甲子吟行中の「馬をさへ」の句も、上記の事情を考へて擧白集より學んだ句に數へることが出來さうに思はれてくる。

甲子吟行より前の句は暫く措き、それ以後の芭蕉の句には擧白集の歌文と暗々の關係を持つものがあるべきことは自づと想像せられる。芭蕉の句を解いた代表的な古註釋書のみを繙いても、その時代に相當する句に對して擧白集の歌文を引用した例の幾多見出されることは思ひしにも過ぐる觀があらう。勿論明かに引用のための引用である場合も介在して、悉くはその例示の妥當性を是認することはできないが、古人が既に芭蕉と擧白集との間に係りの存するのを大凡意識してゐた事實を知る便りともなる。上に引いた句以外に、例へば茜堀に「埋火もきゆやなみだの烹る音 元祿元年說・曠野 ・山も庭もうごき入るや夏坐敷 元祿二年雪まろげ ・木の下に汁も鱠も櫻かな 元祿三年說・ひさご」等につき、句選年考に「旅がらす古巣はむめに成にけり 貞享二年說・鳥のみち ・よくみれば薺花さく垣ねかな 貞享三年說・續虛栗 ・わせの香や分入右は有磯海 元祿二年・奥の細道 ・白髮ぬく枕の下やきりぎりす 元祿三年前・江鮭子 ・葛の葉の面見せけり今朝の霜 元祿四年說・如月 ・明月に麓のきりや田のくもり 元祿七年說・有磯海」(五)等に對して擧白集の歌文が引かれてゐるのはその一斑である。それらの多くには未だ考究すべき節があるものの、芭蕉の句に於ける擧白集の影響を充分に考へさせる。さうして古人が擧白集との關係を指摘しなかつた句にも、今吾々が古人程度の

考證をなし得るものはあるべきである。然しこの小稿ではそれらを一々論考してゐる遑がない。
かくして芭蕉は晩年に到るまで折々擧白集に學ぶ所があつたらしい。

芹燒やすそわの田井の初氷　（元祿六年說―其便）

は說叢大全（卷二）に「孟遠が桃の杖に云」として擧白集の文に據つてゐるのを指摘した通り、擧白集（卷六）の（東山）山家記の「からころもすそわの田井にねぜりをつみ……」、同（西山）山家記に「けふは大原野のすそわの田井に根芹をつむことすなる」に基いたものであらう。尤も擧白集の記事は方丈記の「或はつばなをぬき（中略）せりをつむ。或はすそわの田ゐにいたりて、落穗を拾ひて……」に倣つたものと見られ、幸田露伴氏の如く長明の記文に據つたと見る說もあるが、茜堀（卷一）には許六や荗蘭もこの句と擧白集との關係を指摘した旨記してをり、私も芭蕉は擧白集の文に暗示を得たのであると考へたいのである。（六）

「俳諧の益は俗語を正す也」と言つた芭蕉が、一方に於いて雅語漢語をも新しく活かしてゐる事實は今更述べるまでもない。芭蕉の句が暗冥裡に擧白集に學んでゐる所は、固より輕々しく臆測するのは許されないが、右の如く既に寛文七年以前の句にその氣配が感ぜられ、甲子吟行の頃には確かにその俤が閃いてゐるのである。

註四、「芭蕉の全貌」七七頁。
註五、句の年代は勝峯晋風氏「新編芭蕉一代集」に依る。
註六、「續芭蕉俳句研究」六五一頁。

三

次に芭蕉の文に就いて見る。貞享より溯る頃の文は今日では多く見られず、擧白集の影響はやはり甲子吟行時代か

らと考へて間違はないやうである。即ち甲子吟行の一節には明かに擧白集卷六の（西山）山家記に倣つたと見るべき箇所がある。

二上山當麻寺に詣で庭上の松を見るに、およそ千とせも經たるならん、大さ牛を隱すとも云べけん。かれ非情といへども、佛緣にひかれて斧斤の罪をまぬがれたるぞ幸にして尊し。（甲子吟行）

かしこにあやしき櫻あり。根は五またにわかれて、かこみは牛もかくしつべし。かの社櫟ににたる事あり。こゝらのたくみの斧をもれて、いかでかうつゝがなく生ひなりけんいといぶかし。（擧白集）

具體的な類似は兩者が偶然の暗合であると思はせない。何に於いて甲子吟行の中に擧白集との關係を認めることは、右の兩文の交渉を是認させ、また逆に考へると甲子吟行中の句と擧白集との關係に緊密の度を加へる。

次に紙衾ノ記（元祿二年）の冒頭、

古きまくら古きふすまは、貴妃がかたみより傳へて戀といひ哀傷とす。錦床の夜のしとねの上には、鴛鴦をぬひ物にして、ふたつのつばさに後の世をかこつ。彼はその膚にちかく、其にほひ殘りとゞまれらんをや戀の一物とせん、むべなりけらし。……

は擧白集卷十「うなゐ松」の「ふるき枕古きふすまのうつり香もかはらでのころわかれかなしも」に關係あると考へる。後述の如く「うなゐ松」には他にも芭蕉の文との交渉を考へさせる箇所がある。

更に芭蕉翁眞蹟拾遺に見え、今なほ眞蹟の傳はつてゐる「鉢たゝきのうた」の末、

此曉のひとこゑに、ふゆの夜さへもなゝ千どり、いざきかむ、南無阿彌陀ノヽ

が擧白集卷十「はちたゝき」の「はちたたきあかつきがたの一こゑは冬の夜さへもなくほとゝぎす」を其儘追うてゐるこ

とは一見して明かである。この文は「からさけも」の句がついてゐて、元祿三年の作である（新編芭蕉一代集）。翌元祿四年の机ノ銘の「一物三用をたすく」といふ語句は、これ亦學白集「はちたゝき」の「一物三用にたる」に得たものであらう。先述の「長嘯の」の句もあつて「はちたゝき」は芭蕉と縁故が淺くない。

嵯峨日記の廿二日の條は別に芭蕉翁文集（卷上）に「徒然の詞」として載せられ、先に引いた長嘯隱士云々の語が見えるが、その前に、

　喪に居るものは悲しみをあるじとし

と言起して「たのしみを主とし」「愁をあるじとし」「つれ〴〵を主とす」等の語が見えるのは、やはり學白集（卷六）（東山）山家記の「ひとへに靜なるを業とし、安きをことゝして、たゞこのあるじとなりおほせたるをよろこぶ」とあるに暗示を得たのではないかと思はれる。嵯峨日記には長嘯隱士云々の語があり、「岩躑躅」の句の際に云つた「麥の穗や」の句があるのから推して、右の臆測も一應は成立ち、且つ先述の如く長嘯隱士云々が素堂からの聞書ではないことも察せられるのである。

藤井博士は閉關之說（元祿五年）に見える杜五郎の故事を、長嘯子の「うなゐ松」（學白集卷十）より得たものと推測せられてゐる。（七）古人は芭蕉の文に於ける學白集との形式的關係を、句の場合の如く穿鑿しなかつたやうである。風俗文選犬注解には學白集の文が煩はしい程に引用せられてゐるものの、直接に芭蕉の文との交涉を示した場合は見出し難い。語句上の係りはなほ綿密に調査することによつて相當に拾集せられるであらう。

註七、「風俗文選選釋」（前出）二三五頁。

四

幻住庵の文は芭蕉翁眞蹟拾遺の幻住庵記、和漢文操の幻住庵賦、猿蓑の幻住庵記と三様に傳つてゐて、前二者は甚しく類似し猿蓑所收の文はそれらと趣を異にする。これに就き和漢文操卷一には、「始の一通は落柿舍にあり。中の一通は此賦なり。終の一通は猿蓑集に出て世にしれる幻住庵記なり。されば此文に三通の子細は、始のは文章の無用をすぐり、中のは文章の花美をそろへ、終のは文章の花實をとゝのふ。」と述べてゐるが、幻住庵賦には支考の手が入つてゐるらしいといふ。(八) 玆では眞蹟拾遺の記を初稿と考へ、之を猿蓑の記と比べ、擧白集に關した問題を述べようと思ふ。賦は假令支考の手が加つてゐないとしても初稿の記と大同小異であるから、今は除外して考へて差支へないのである。

初稿の記と猿蓑の記との構文上の大いなる相違は書出しにある。故に各々の冒頭を引いてみる。

1、五十年やゝちかきみは、にがもゝの老木となりて、かたつふり家をうしなひ、みのむしの蓑を離て、かの宗鑑がはたごの料とぼしく、能因が頭陀の袋を門〳〵にひろげて、松島しら川につらをこがす、猗うとふ啼そとの濱邊より、ゑぞが千しまをみやらんまでと、しきりにおもひ立侍るを、同行曾良何某といふもの、多病心もとなしなど袖をひかゆるに心よはりて、ことし湖水のほとりにたゞよふ、鳰のうきすのながれとゞまるあしのひともとのかげたのむべき、幻住庵といふかくれがをもとむ。山を國分山といふ。古き御社のたゝせ玉へば六根きようしてをのづからちりなき心地せらる。(眞蹟拾遺)

2、石山の奧、岩間のうしろに山有。國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮たゝせたまふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚忌なる事を、兩部光を和げ、利益の塵を同うしたまふも又貴し。日比は人の詣ざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戶有。よもぎ根笹軒をか

こみ、屋ねもり壁落て、狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍りしを、今は八年斗むかしに成て、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中をさる事十年斗にして、五十年やゝ近き身は、蓑虫のみのを失ひ、蝸牛家を離て、奥羽象潟の暑き日に面をこがし……(猿蓑)

芭蕉が元祿三年に去來雅丈宛送つた書翰は初稿の幻住庵記の推敲について苦心を示すもので、「長明方丈の記を讀に方丈の事いはむとて、新都の蹂動、火事、地震の亂、皆是栖の上をいはむとなり。愚作聊のがるゝ處有といへども……」と述べてゐるから、特に初稿の幻住庵記は方丈記との交渉を考へることも可能である。然し形式の上では、初稿の幻住庵記が猿蓑の記に改竄せられた背後には、擧白集よりの具體的な影響が想はれる。上の書翰にはまた「發端行脚の事を云て、幻住庵のうとき由、難至極。」と言つてゐる。乃ち去來が初稿の記の發端が行脚の敍述に多くを費し、幻住庵の說明が餘りに疎略に過ぎるのを非難したのに對して、芭蕉も亦之を承認したことが知られ、隨つて初稿の記の發端を改めて猿蓑の記の書出しと成つたのを想像することが出來よう。然るに猿蓑の記の書出しは、擧白集(卷六)の(西山)山家記の冒頭、

小鹽山の麓に蘭若あり、勝持寺とかける道風が額あざやかなり。方丈の前に西行うゑたるといひつたふる老木のさくらあり。くち殘れる枝の、さすがに春をわすれぬこゝろばへも、むかしおぼえてなさけふかし。あるじの僧忠海やつがれとよし。遣迎院ときこゆる大とこの弟子なりかし。しりへに勝地をむくふ。……

に倣つて書かれたと考へる。芭蕉が幻住庵の閑居を述べようとして國分山のことに筆を起してゐるのは、長嘯子が小鹽山の山居を記さうとして勝持寺から書き始めたのと軌を一にし、且つ冒頭の文勢も甚だ趣を同じうする。また初稿の記に見えない「あるじの僧何がし」は山家記の「あるじの僧忠海」より思ひ得た如く見え、共に右の引用文に現れ

てゐないが、猿蓑の記にある「春の名殘も遠からず」は山家記の「春のなごりもあはれなり」との關係を思はせるのである。さうしてかゝる兩記の關係は、外在的な事實からも更に確立させられる。

「長嘯の」の句は元祿三年末の作、「長嘯隱士云々」は元祿四年初夏の嵯峨日記の中にあつた。その間の元祿三年作の「はちたゝきのうた」も明かに擧白集に據つてゐることは前述の通りである。元祿三年の末から元祿四年にかけて、芭蕉の念頭には擧白集の歌文の浮ぶことがあつたと見られる。その期間の中に幻住庵記が成つたことを考へなければならぬ。また先述の如く、甲子吟行の當麻寺の條の文が明かに關係を有すると思はれるのも、この(西山)山家記であつて、而もその原據とすべき箇所は右の冒頭の引用文に續く部分である。同じ甲子吟行の「馬をさへ」の句と(西山)山家記との係りに就いても前に述べた。幻住庵の文の成立年代や(西山)山家記と甲子吟行との關係等は、猿蓑の記と擧白集との交渉を考へようとする時には暗示的なものとなつてくるのである。

更に猿蓑の記には、

先たのむ椎の木も有夏木立

の句があるが、これ亦擧白集と關係ある如く看做し得る節がある。卽ち擧白集には(西山)山家記の前に、椎の木に關して述べた後瀨山と題する短文があつて、「のち瀨山のちすむやどもしひがもとなど落ぶれてかずならぬ身ぞ」と歌がある。猿蓑の記と(西山)山家記との關係といふことを考へると、「先たのむ」の句が生れた背後には、既に擧げられてゐる古歌の他に、擧白集の歌文もあるやうに見える。かくして猿蓑の記と擧白集との關係は一入深く考へられるに到るのである。

難擧白集巻下には長嘯子の歌を評して「おほよそ五まきに、記ぞ、辭ぞとて、あまたえらびのせられたる中、あるは

からの文かとおもへば、やまと詞もまじり、あるは、儒書佛經かとみれば、本歌草子の體をうつせり。わが國のはかせどものかける、ふるきかんながきの風情はさらになし。」と言つてゐるが、擧白集の文の様式には俳文の様式と系列的關係にあるものを認め得る。兩者の本質的な關係は稿を別にして論ぜらるべきである。

註八、荻原蘿月氏「芭蕉研究」（改造社日本文學講座）一九六頁・「芭蕉の全貌」六七八頁。

五

支考は風俗文選の序に於いて古來の代表的な物語・草子等を並べたてた末に、「あるひは宗祇の終焉ノ記も、あるひは長嘯の擧白集も、おのれ〳〵が心にあそびて、むかしのすがたをつたへずといふ事なし。」と述べてゐる。長嘯子の擧白集は芭蕉及び蕉門の俳人達から、既に歴史的な意義を持つ古典として待遇せられてゐたのであらう。

嵯峨日記に長嘯隱士の言葉を「常にあはれむ」と記されてゐる素堂は、確に擧白集を見てゐた筈である。然し素堂家集（俳書集覧・第六卷）に就いても特にそれらしい氣配はない。素堂の詠んだ和歌の詞書に若狹長嘯の歌として「世々の人の月はながめしかた見ぞとおもへば〳〵ぬるゝ袖哉」が引かれてゐるが、この歌は結句から考へて、集外三十六歌仙に據つたものと思はれる。また茶入なる文に記されたものと擧白集（卷十）の「宇治の河ぎり」に記されたものとは關係がある如く思はれるが、直接に文學の上の問題ではない。其角が最も多く擧白集に關心を寄せたやうである。茲にはそれを極めて簡略に述べる。「土手の馬」の句（類柑子・其他）には擧白集（卷八）の「はじめてあづまにいきける道の記」の文を詞に引き、（九）「たびらこは」の句（同前）も亦例の（東山）山家記に趣向を借り、猿蓑序の一節は七部集大鏡に、同集の「有明の」の句は撮解に言ふ如く、孰れも擧白集（卷六）の「さが衣」の詞に據つたとも見られる。類柑文集（卷上）の「瓜の一花」「いなつかの灯」と擧白集（卷十）「心叛」「はちたゝき」とは些少ながら關係を持ち、「北の窓」と擧白集（卷六）の「（東山）山家記」「あさぼらけ」とは

密接な間柄にある。また同書（同巻）では芭蕉や冠里の句と擧白集の歌文との關係をも說いてゐる。「鉢たゝきの歌」（五元集拾遺・其他）「艶詞鉢たゝき」（隨齋諧話・其他）が擧白集（巻十）の「はちたゝき」に據つてゐることは一見明かである。其角と擧白集との關係は未だ求め得べく、その關係の廣く且つ深いことは、恐らく芭蕉の場合以上であらう。嵐雪の「文もなく」の句（炭俵）は撤解等に說くやうに擧白集の物名歌に據つたものらしく、支考が葛の松原で「小なぎ(小葱)さいたづま(虎杖)といふ物を……」と述べてゐるのは、やはり（東山）山家記の中の記事を指したものである。擧白集が蕉門の人達に如何程の影響を與へてゐるかは更に調査研究の餘地ある問題である。

長嘯子は近世劈頭に異彩を放つ歌人である。彼の文學的業績は未だ一般に正當に認められてゐるとは言ひ難いが、勿論彼は明かに近世的な意識に立つて歌を詠んだ人ではない。門人はあつても能く彼の歌風を繼いだ者はなく、擧白集が後の歌人に果して如何程の影響を與へたかは覺束ないものである。それに比して芭蕉や其角達は擧白集を自己の文學の中に活かす所があつた。この點よりして擧白集の有する歴史的意義の一面を考ふべきであらう。吾々は古文學より擧白集を經て芭蕉等の俳人達の文學に流れる文學的系列に就いても多くの考察を費さなければならない。然し今は以上の外面的考究を、更に内面的なものに觸れようとする豫備作業として、一先づ稿を終へることにする。

註九、「類柑文集」（上巻）「ちからくさ」の條・俳諧三珍本「五元集」八頁頭註等參照。

芭蕉と杜甫

岩田九郎

一

芭蕉の研究は、江戸時代から今日に到るまで、多くの學者によつて種々なる方面から爲された所であり、殊に最近に於ては、極めて精到な研究が發表せられて、傳記・註釋・鑑賞・批評・書史等の各方面に渉つて、殆ど遺憾なき狀態である。たゞ尙一歩を進めて考察すべきことは、その溯源的研究の方面であると思ふ。換言すれば、芭蕉に影響した總ての要素を索め、それらが彼の個性的心理の上に作用して、遂に彼獨特の藝術的光明を放つに到るまでの過程を明かにすることが、芭蕉研究の新しい方面であらうと思ふ。

芭蕉研究の興味は、その人物と藝術とが深く且廣い所にある。いふまでもなく芭蕉の偉大さは、彼が過去に於ける文學・藝術・宗教等の精神を融合して、新しい獨自の文學を樹立した點に存する。卽ち彼の藝術には、和歌・連歌を始め、繪畫・茶道・能樂・禪學等の影響が少からず認められ、更に漢文學に負ふ所も頗る多いのである。これを人にして考へれば、彼の私淑した西行・宗祇を始め、繪の雪舟、茶の利休、詩の杜甫・李白、思想の老・莊、文章の長明・長嘯子等、直接間接にみな繫りをもつてゐるのであつて、さういふ意味からいへば、過去の我國の藝道の精神が、芭蕉によつて綜合せられ、新しい形をとつて光彩を放つに至つたといふべきである。

しかし、これらの諸要素と芭蕉との交渉を見究めることはさう容易なわざではない。最も尖鋭な洞察力を有つか、または特に明確な證據があるのでなければ、ともすると獨斷に陷り、牽强附會に失する懼れがある。小稿に於ては特にこの點に留意して、芭蕉と杜甫との交渉を、出來るだけ明瞭な資料によつて觀察して見ようと思ふのである。

二

杜甫と芭蕉とは、約九百年を隔てた東西の二大詩人であるが、芭蕉は常に杜甫に私淑して「杜子が方寸に入る」といひ「杜子美が老を思ふ」とのべ、自ら「杜工部集」を頭陀袋に入れて行脚した程であるから、杜甫から受けた影響は頗る多いことゝ想像せられる。從つてその交渉を觀察するに當つても、種々なる方面から爲されなければならぬと思ふが、先づこゝには、芭蕉の作品に就いて直接杜甫の詩から影響を受けたであらうと思はれるものを列擧對照して見たいと思ふ。

一、髭風ヲ吹イテ暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ　（虚栗・天和二年）

憶二老杜一

獨坐

悲レ秋廻二白首一。倚レ杖背二孤城一。江斂洲渚出。天虚風物淸。
滄溟恨二衰謝一。朱紱負二平生一。仰羨黄昏鳥。投レ林羽翮輕。

白帝城最高樓

城尖徑仄旌旆愁。獨立縹緲之飛樓。峽坼雲霾龍虎臥。江淸日抱黿鼉遊。
扶桑西枝對二斷石一。弱水東影隨二長流一。杖レ藜嘆レ世者誰子。泣血迸レ空回二白頭一。

この句は前書によつて、老杜甫の風貌を想望し追慕の情をのべたものであることは明かである。故意に片假名を用ひたり、杜詩の調を摸したりしてゐる所に、詩の感じを出さうとしたものであらう。「風髭を吹いて」といはずに「髭風を吹いて」といふのも俳諧的な表現であるが、原詩に「世を唉ずるは」とあるを「暮秋唉ずるは」と改めた所にも、單なる摸倣でない俳諧化がある。「獨坐」の詩は杜甫が五十三歲の秋、成都城畔の草堂に於ての作である。芭蕉の句は、杖を立て城を背にして感懷に耽る杜甫の姿を想像したものであつて、この句の內容は全く杜詩から出てゐるといはなければならぬ。從つて芭蕉の個性はまだ十分に現れてゐるとはいへない。只そこに多少の俳諧化と新し味を出さうとした努力をみとめることが出來よう。

二、栗とよぶ一書其味四あり。李杜が心酒をなめて寒山が法粥をすゝる。これによりて其の句見るにはるかにして聞くに遠し。（虛栗集跋天和三年）

これは蕉風の先驅ともいふべき「虛栗集」の跋文であつて、李杜は無論、李白杜甫である。文意はつまり、杜甫等の心境を酌んでゐるから、その句が深遠な趣を有するといふのである。杜甫の詩を宗としてゐたことが察せられる。

三、中にも飯顆山は老杜の住める地にして、李白が戲れの句あり。（瓢の銘・貞享元年）

「瓢の銘」は、芭蕉庵にあつた瓢を興じた文章で、山口素堂の贈つた「一瓢重=黛山-。自笑稱=箕山-。莫レ慣=首陽餓-。這中飯顆山」の句によつたのである。芭蕉庵の瓢は、これに米を入れて置いたもので、米が無くなれば弟子達がいつの間にか充たしておいたといふ事であるが、この淸貧の狀を、かの杜甫の浣花草堂に於ける生活に比して、自ら慰めたものと思はれるのである。

四、曙や白魚白きこと一寸　（甲子吟行・貞享三年）

白　小

白小羣分レ命。　天然二寸魚。　細微霑ニ水族一。　風俗當ニ園蔬一。
入レ肆銀花亂。　傾レ筐雪片虛。　生成猶拾レ卵。　盡取義何如。

「白魚白きこと一寸」といふ語は、杜詩の「天然二寸の魚」から出たものと思はれる。杜甫の主意は、白魚の如き天然に二寸ほどの小さい魚もみなそれぞ〳〵に天から生命を分け與へられてゐるのである。そしてそれはみな他のものを利益してゐるのに、これを盡く取つてしまふのはどういふ理由であるかと白魚の取り盡くされるのを憐んだものである。また芭蕉の句は、彼が桑名に旅寢した時、冬の夜明けの寒い水邊に下り立ち、そこに網で捕られた白魚を見て、まだ春にもならず僅か一寸ばかりにしか成長してゐないこの魚の姿を痛ましく感じながらも、その細くして銀糸のやうな美しさに驚異の目を瞠つた時の感じを詠んだものである。それが杜甫の詩を背景として考へる時に、芭蕉の白魚を憐む心もちが一層よく理解せられると思ふ。しかし杜甫の詩はあくまで人間的な感情が强く動いてゐるのに反し、芭蕉の句はその憐憫の情よりも寧ろ冬の朝の水邊の光景が强く印象せられる。そこに杜甫とやゝ異つた芭蕉特有の味がうかゞはれるのである。

五、この麓に根本寺のさきの和尙、今は世をのがれて此處に在しけるといふを聞きて尋ね入りて臥しぬ。頗る人をして深省を發せしむと吟じけむ、暫らく淸淨の心を得るに似たり。（鹿島紀行・貞享四年）

遊ニ龍門奉先寺一

已從ニ招提遊一。　更宿ニ招提境一。　陰壑生ニ虛籟一。　月林散ニ淸影一。
天闕象緯逼。　雲臥衣裳冷。　欲レ覺聞ニ晨鐘一。　令ニ人發ニ深省一。

杜甫の詩は、彼が龍門の奉先寺に宿つた時の情景を叙べたもので、高地に一夜を明かした詩趣が遺憾なく發揮せられてゐる。詩の後半の意は、天の門とも思はれるこの高地には、上から星辰が逼り近づき、雲のかゝつてゐるあたりに臥すと衣裳が冷やかに感ずる。曉、目のさめんとする頃、夜明けの鐘の音を聞くと、人をしてそゞろに深い悟りに入らしめるやうな念を起させるといふのである。芭蕉は佛頂和尚の草庵に宿つて、この詩と同じやうな趣を感じたのであらう。こゝにこの詩の一句を引用したことによつて、當時の芭蕉の心境や草庵の光景などが想像せられるのである。文章の方から見れば、この詩詞によつて清淨な餘韻をのこし、簡素な雅趣を深めてゐると思はれる。

六、素堂亭、十日菊。蓮池の主翁又菊を愛す。きのふは龍山の宴を開き、今日はその酒の餘りをすゝめて狂吟の戯れとなす。なほ思ふ、明年誰かすこやかならんことを。いざよひの何れか今朝にのこる菊　（笈日記・貞享五年）

九日、藍田崔氏莊

老去悲秋强自寛。興來今日盡二君歡一。羞將二短髮一還吹レ帽。笑倩二傍人一爲正レ冠。
藍水遠從二千澗一落。玉山高並兩峰寒。明年此會知二誰健一。醉把二茱萸一仔細看。

詩は杜甫四十七歳の時、九月九日菊の節句に、藍田縣なる崔氏の別莊に於ての作である。芭蕉の文は、その四十五歳の秋、武藏素堂亭の會合に於ける作である。杜甫が詩にいはんとする意は、漸く老齢となつて悲しき秋に逢ひ、心は痛むが强ひてこれを寛げようとし、興が湧いて今日は君の歡待を盡く受け戴いたのであるが、それにしても自分のこの老いた姿が恥しい。今はかうして歡び話してゐるが、明年はこの會に誰が健かで會へるであらうか、思へば心細いことである。長壽のしるしである茱萸を把つてしみ〴〵と見るといふのであるが、芭蕉も亦同じ年頃に於て菊の會に逢つたのであるから、杜甫と同樣な人生の淋しさを沁々と味つたのであらう。その心もちがこの文章によつて想像

することができるのである。こゝにも芭蕉は杜甫の心を自分の胸に感じてゐるのである。

七、淡路島手にとるやうに見えて、須磨明石の海左右に分る。呉楚東南の詠めもかゝる所にや。（芳野紀行・元祿元年）

登二岳陽樓一

昔聞洞庭水。今上岳陽樓。呉楚東南坼。乾坤日夜浮。
親朋無二一字一。老病有二孤舟一。戎馬關山北。憑レ軒涕泗流。

芭蕉は須磨の鐵枴が峯に登つて瀬戸内海を見渡した時、杜甫が岳陽樓に上つて洞庭湖を見た景色を想像したのである。「須磨明石の海左右に分る」といふは、呉と楚が東と南に洞庭の水によつて遥かに限られてゐるのを杜甫の詩によつて想ひ起したのである。こゝにも杜甫の詩によつて文の趣を深くしてゐる事がうかゞはれる。

八、偖も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと笠打敷いて時の移るまで泪を落し侍りぬ。夏草や兵どもが夢のあと。（奥の細道・元祿二年）

春望

國破山河在。城春草木深。感レ時花濺レ涙。恨レ別鳥驚レ心。
烽火連二三月一。家書抵二萬金一。白頭掻更短。渾欲レ不レ勝レ簪。

芭蕉は平泉高館の城址に登つて、其の荒廢した光景の中に古を懐ひ、そゞろに杜甫の「春望」を想起したのである。「春望」は杜甫が四十六歳の春、賊に捕へられて長安に在つた時、國都の荒廢を嘆き家郷の人々を懐うた作である。この詩は杜甫の代表的な絶唱であり、芭蕉の「夏草や」の句はまた彼一代の傑作である。しかも相似た環境に於て作られ、同じ年齢の時の詠であつてみれば、まことに好個の對照をなすものといはなければならぬ。杜甫の詩は非常に主觀的

であるが芭蕉の句はやゝ客觀的な感じがする。前者は具象的であるが後者は象徴的である。前者はいふべき事を盡くいひ敍ぶべき情をみな語り盡してゐるが、後者は殆ど何等の感情を敍べることなく、また思ふ所の一端をも物語つてゐないのである。然しこの二つの作に於て人に示唆する情緒の深くして廣いことは、遙かに後者がすぐれてゐるといはなければならぬ。杜甫の詩は、荒涼たる國都の光景、寂寥なる詩人の感懷をよく描き出して、其の詩美に人を醉はしめるのであるが、人の感情を刺衝するものは主としてその悲慘なる境遇に對する同情心である。然るに芭蕉の句は、單に荒涼たる古戰場の景色を想像させるばかりでなく、深く人間の運命の果無さをしみ〴〵と省察せしめるのである。人間の功名や榮華も總て皆夢である。萬物はみな時の流轉の中にあるのだといふ彼の人生觀の一端が微妙な詩的表現の中に窺はれるのである。芭蕉の句は杜甫から出て、更に杜甫以上の境地に進み入つてゐるといふべきである。

九、島々の數を盡して欹つものは天を指し、ふすものは波に匍匐ふ。或は二重にかさなり三重に疊みて、左にわかれ右に連る。負へるあり抱けるあり、兒孫愛すが如し。(奧の細道・元祿二年)

望岳

西岳崚嶒竦處尊。諸峯羅立似兒孫。安得仙人九節杖。拄到玉女洗頭盆。
車箱入谷無歸路。箭栝通天有一門。稍待秋風涼冷後。高尋白帝問眞源。

杜甫は西岳を望み、其の附近に群る山々を兒孫に譬へたのであり、芭蕉は松島の島々の相重つたさまをそれに譬へたのである。この一節は杜詩の譬喩に學んだものであらう。

一〇、主のいふに違はず高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂り合ひて夜行くが如し。雲端につちふる心地して篠の中踏

みわけ／＼水を渉り岩に蹶いて肌に冷き汗を流して最上の庄に出づ。（奥の細道・元祿二年）

鄭駙馬宅宴ニ洞中一

主家陰洞細ニ煙霧一。留レ客夏簟青琅玕。春酒盃濃琥珀薄。氷漿椀碧瑪瑙寒。
悞疑茅堂過ニ江麓一。已入ニ風磴一霾ニ雲端一。自是秦樓壓ニ鄭谷一。時聞雜佩聲珊々。

雲端に霾るとは、雲の中から風が塵土を吹き落すことをいふので高地の形容であるが、芭蕉はこの語を引用して高山の感じを出さうとしたものである。想ふに杜甫は芭蕉にとつて語彙の資源でもあつたのである。

一一、魂は呉楚東南に走り身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申に峙ち、人家よき程に隔り南薫峯より下し、北風海を浸して涼し。

（幻住庵記・元祿三年）

これまた「登ニ岳陽樓一」を引き、幻住庵から琵琶の湖水を眺望した景色を、洞庭湖の眺望に比したのである。こゝにも彼は杜甫の俤を心に描いてゐるのである。

一二、樂天は五臟の神をやぶり老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも何れか幻の栖ならずやと思ひすてゝ臥しぬ。

（幻住庵記・元祿三年）

この「老杜は瘦せたり」の句は、李白が杜甫に贈る詩に據つたのであつて、杜甫の作に關係はないが、本文は杜甫の境涯に自己の生涯を思ひくらべて、そこに一つの人生觀を確立してゐるのである。かうした思想的の方面にも杜甫は芭蕉に多くの關りをもつてゐるやうに思ふ。

一三、はるかに定家の骨をさぐり、西行の筋を辿り、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るやから、わづかに都鄙かぞへて十の指をふさず。君も則十の指たるべし。　（曲水宛書簡・元祿七年）

曲水は膳所藩士菅沼曲翠である。この書簡によれば、芭蕉は杜甫等の心境をよく理解する人を非常に尊敬してゐる事が認められる。

一四、汝等此の以後とても地をはなるゝ事勿れ。地とは心は杜子美が老を思ひ、さびは西上人の道心を慕ひ、調は業平が高儀をうつし、いつまでも我等世にありと思ひゆめ〳〵他に化せらるゝ事勿れ。（翁反古・元祿七年）

この一節は芭蕉が終焉五日前、惟然等に語つた所と傳へられる。芭蕉がその生を終るまで、いかに杜子美を慕つてゐたかはこの言葉によつても想像せられるのである。

以上は芭蕉の作品の上に表れた杜甫の影響の主なるものを擧げたのであつて、この外にも多少の關りをもつてゐると思はれるものは尙二三にとゞまらないのである。殊にその思想的方面に、或は人格的方面に杜甫の影響を蒙ることは少くなかつたのであるが、それは尙この兩詩人を種々なる方面から觀察對照することによつて、一層明かにせられると思ふのである。

三

杜甫と芭蕉とは、其の經歷・性格・趣味等に於て、また詩人的特質に於て相共通する所が少くなかつた。この兩詩人の生涯を比較することは、頗る興味深いわざであるが、こゝには其の餘地がない。たゞ晩年に於て共に流寓の旅をつづけ、漂泊の中に寂しく一生を終つたといふ事をあげるにとゞめておかう。

次に兩者の性格及び趣味を對照して見るに、固より一致しない點も無いではないが、頗る共通した所を多く見出すことが出來る。杜甫は詩に就いては非常に細心であつて、一詩をなすにも改訂また改訂、滿足に至るまでは其の勞を厭はなかつた。「解悶十二首」の中の第七首に「新詩改め罷みて自ら長吟す。」といふのは最もよくこれを說明してゐ

る。この點は芭蕉も全く同様で、觀方によつては彼は一生推敲に時を費したといつてもいゝ位で、病苦すでに臨終の床に於ても、尙門弟と共に自作の句の推敲に熱中してゐた位である。「句調はずんば舌頭に千轉せよ」(一葉集)といふのは、前述の杜甫の語とよき對照である。

杜甫は純潔なる愛情を有し、妻子を思ふ心も厚く、同族に對する情もふかく、故鄕を思慕することも熱烈であつた。「春望」に「家書萬金に抵る」といふはその一例である。芭蕉もまた母を慕ひ兄を敬するの情が深く、行脚の途次常に故鄕を訪れることを怠らなかつた。「長月の初故鄕に歸りて、北堂の萱草も霜枯れ果て今は跡だになし。何事も變りてはらからの鬢白く眉皺寄りて、只命有りてとのみいひて言葉もなきに兄の守袋ほどきて、母の白髪おがめよ浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりと暫らく泣きて、手にとらば消えん淚ぞあつき秋の霜」(甲子吟行)と記してゐるのを見てもその一斑を知ることが出來よう。

杜甫はまた朋友知己に對して極めて友情が濃やかであつた。彼が轉々と寄食の生活を送り得たのは、その純情に寄せた友人の厚意であつたと考へられる。「奉贈韋左丞」の詩に「常に一飯にも報いんと擬す」といつてゐる外「彭衙行」「贈衞八處士」「留別湖南幕府親友」等その例が多い。芭蕉はことに友情にあつく、一千に垂んとする門人達によつて慈父の如く仰がれたことは、一に彼の慈眼愛腸の餘德といはなければならぬ。寒風に晒されつゝ杜國を伊良湖崎に訪ねたこと、其角の大酒を戒めたこと、師に負いた路通を死の床に於いて尙顧念したことなどその例證は頗る多いのである。中にも「松倉嵐蘭を悼める誄」の如き、一笑の追善に「塚も動け我が泣く聲は秋の風」と詠んだ如きは、よく彼の友情の切なることを語るものである。

杜甫が嗜好として酒をたしなみ、趣味として樹木を愛した事も芭蕉とよく似てゐる。杜甫は草堂の傍に竹松桃など

を植ゑてこれを愛護した。芭蕉は草庵の邊に芭蕉を植ゑて「その破れ易き」を愛した。前者には酒や松竹を詠じた詩が多く、後者には酒や芭蕉をのべた文や句が多い。

其の他、名勝舊蹟に對する懷古的の趣味も兩者に共通であり、また自然の風物に詩趣を感ずることも兩者に於て顯著なる傾向である。また多少意味は異るが、兩詩人とも世間的の生活に對して極めて拙なかつた點も酷似してゐたといふべきであらう。

以上は兩者に共通な點をあげたのであるが、勿論趣味性格に於て、盡く一致するといふわけではなかつた。少しくその異る所を觀察して見るに、杜甫の詩を通じて考へられる著しい彼の傾向はその政治的趣味である。實はこれは彼の理想に立脚してゐるのであるから、趣味といふのは少し不適當かも知れないが、兎に角政治的色彩が頗る濃厚である。これは芭蕉と甚だしく異る點であつて、固より時世も異り環境も違つてゐるから、一樣に論ずることはできないが少くとも芭蕉には政治的の色彩は絕えて認めることができない。

杜甫の公的生活に現れた性格は寧ろ剛直であり、青年時代から再度校試に失敗しても、決して意氣沮喪する風はなかつた。彼が狩獵を好み騎射をよくし、或は出でゝ遠く扶桑を究めようとした如きは、その豪壯の意氣を示すもので、「壯遊」の詩は彼のこの方面の性格を察知することができる。これに反し芭蕉は寧ろ退嬰的であり「やゝ病身人に倦んで世を厭ひし人に似たり」といふやうな態度であつた。

杜甫も芭蕉も晚年は殆ど他人の爲めに衣食を給せられたのであるが、杜甫はさういふ境遇に在つても容易に人に屈することはしなかつた。「早發」に自ら「艱危遠客となる、干謁直性を傷ふ」といつてゐるのはそれだ。況や權門富貴に故なくして援助を求める如き者ではなかつた。「甘林」に「朱門の是なるを矜りてこの白屋非なりと陋とする勿れ」と

いつてゐる。彼が多くの友人を擁しながら、轉々流寓に暇なかつたことも、一面には彼のこの性格が原因してゐたのであらう。勿論芭蕉とても富貴に媚び、權門に阿ることは斷じて爲すを憚つた所であるが、しかし杜甫のやうに險しくぎこちないものではなかつた。謙讓でありまた超越した風格があつた。「もらうて食ひ乞うて食ひ、飢寒わづかに免れて、目出度人の數にも入らん年の暮」といふやうな態度であつて、杜甫とは甚だその趣を異にしてゐる。

兩者の性格の相違を一言にしていふならば、杜甫は豪快であり、剛直であり、積極的であり、情熱的であつたが、芭蕉は溫藉であり、謙讓であり、消極的であり、退嬰的であつた。しかも芭蕉が杜甫に私淑した所以は、これをその性格の共通した方面に求めなくてはならないと思ふ。

四

更に杜甫と芭蕉との詩人的特質に就いて觀察してみるに、これまた甚だしく一致する點と異なる所の存することを知るのである。先づ兩者は共に詩人たる事を以て己の天職と考へてゐた點に於て全く一致してゐる。杜甫が晩年流離の中にあつてます〳〵詩に精進し、一生涯詩と終始したことは、芭蕉が「この一筋につながる」と悟つて、最後の時まで句作を絕たなかつた姿を髣髴せしめるのである。またこの兩詩人とも生活と藝術とが渾一の境地に達してゐたことも著しく相似た所である。杜甫の詩は卽ちその生活の表現であり、芭蕉の俳句は直ちにその生活の斷面である。更に兩者が共に生活に拙き詩人であつて、殆ど一生涯を寄食に送つたことも注目すべき一致であり、また共にその生涯の大部分を漂泊の中に送つて、其の間に於ける感懷を特有な詩形によつて表現した點も一致してをり、晩年に至つて愈〻詩作が多く、且兩人とも同じく孤獨の旅に其の一生を終つた事も奇しき詩人の運命の一致といはなければならぬ。

次に詩人として最も重要な相違は、兩者の人生觀の甚だしく異る點である。杜甫の人生に對する態度は現實的であ

り積極的であつた。その理想とする所は、君を堯舜の如く聖ならしめ、以て民をして風俗を淳樸ならしめその業に安んぜんとするにあつた。一言にしていへば儒教的精神の實現が彼の人生に於ける理想であつた。然るに芭蕉の人生に對する態度は、これと甚だ異つてゐた。芭蕉の現實生活に對する態度は、徹底的な厭世主義でもなく、また積極的な現實主義でもなかつた。いはゞ不即不離の立場にあるものであつて、「もろ〳〵の心柳にまかすべし」といふのがその主張である。しかし一方に芭蕉は杜甫と全く異つた一大理想を抱いてゐたのであつて、それは即ち「造化に從ひ造化に還れ」といふ叫びである。人間が長い間に造りあげた種々なる束縛から離れて、人間本然の姿に立還るべきことを主張し、その爲には自然に從ひこれと調和し同化することが肝要であると説くのであつて、ここに杜甫には殆ど見出すことの出來ない眞摯にして洒脱な生活態度が生れて來たのである。杜甫が國都の荒廢を歎き人民の疾苦を憂へたのもその理想の現れであり、芭蕉が閑寂を好み自然に憧れたのもこの主義の現れであつたのである。前者がより儒教的であり、後者がより老莊的であつたのもその故である。前者の詩が多く人間的であつたのに對して、後者の句が多く自然的であつたのもその故である。

五

以上種々なる方面からこの兩詩人の交渉を觀察して來たのであるが、最後に芭蕉は杜甫から如何なる事を學び得たか、芭蕉の藝術には杜甫のそれが如何なる影響を及ぼしたかを概括してこの小稿を終りたいと思ふ。

一、人生を旅と觀じ流轉と悟つて、生涯を一嚢一笠に托した芭蕉の詩人生活には、杜甫の漂泊生活が一つの暗示を與へてゐると思はれる。

一、芭蕉の作品に存する閑寂幽玄の境地には、杜甫の詩に流れる沈欝悲愁の氣が一味通じてゐるやうである。

一、芭蕉の自然の觀方や感じ方には、杜甫の詩に於けるものに學んで得たものが少くない。

一、芭蕉の作品に背景を與へ、それに陰影あらしめ趣致を深からしめてゐることに、杜甫の詩は多くの寄與をなしてゐると思はれる。

一、芭蕉の作品の詞藻・語彙には、杜甫の作品から得て來たものが少くない。

芭蕉に及ぼした杜甫の影響は、大體以上にあげたやうなものであらうと思ふ。終りに一言附加しておきたい事は、前述の如く芭蕉は杜甫の影響を多く蒙つてゐるとはいへ、決して杜甫の陰にかくれてしまつたのではないといふことである。芭蕉は自己の藝術を完成する一つの礎石として杜甫の詩に學んだのであつて、杜甫を宗としてゐるいづれの作品に於ても、杜甫とは自ら異つた芭蕉の個性が十分に表れてゐるのである。これは恰も天明の蕪村が多くの漢詩人の詩を材料として句を成してゐるが、しかも蕪村自らの個性を失つてゐないのと同樣である。更に考ふべきは芭蕉に於ける他の漢詩人の影響である。芭蕉の總ての作品に就いて、杜甫以外の影響を考へて見るに、白樂天・杜牧・蘇東坡・賈島等の詩に負ふものが相當に多く、また莊子・老子・孔子等の思想の影響を蒙るものもあり、禪學の語に據るものも二三にとゞまらない。然し、漢文學の影響として最も深く廣く彼に及んでゐるものは杜甫であると斷じても、決して過言ではないやうである。

おくのほそ道地跡考

飯野哲二

はしがき

芭蕉のおくのほそ道は云ふまでもなく單なる道中案内記ではなく、すぐれた一個の文學作品であるから、これを鑑賞するのが究極の意義を有つものであるが、併し文學作品と云つても唯頭腦で創作したものではなく、作者芭蕉が實地に行脚したところを基本として物されたものである以上、その本文解釋のみではどうも徹底せぬ憾みがあるやうである。そこで私は近年來その地跡について調査研究を爲して居るのであるが、その方法としては芭蕉の行脚當時即ち元祿かその前後頃の文獻や繪圖を土臺として、それに本文の記事と實地踏査とを參照させて推定を下すを以てその主眼としてゐる。かうしてその歩を進めてみると、從來本文解釋のみでは不明とされてゐたことに對して何等かの手がかりが發見されたり、また誤り解されてゐたことに對しても正しい新解釋が生れてきたりするやうである。併しかうした基礎工作と云つた方面のことは從來殆んど顧みられずにあるので、私の調査研究は云はば更地に鋤を入れる程度のものであつて、そこには幾多の手ぬかりがあることと思ふ。その點については偏に大方の御叱正を乞ふ次第である。尚ほ私の調査研究は奥羽全體に亙つてゐるのであるが、玆には紙數の都合上その一部を披露することにする。

（1） 白川の關

元祿二年三月二十七日同伴曾良を連れて江戸を出發した芭蕉が、途中室の八島、日光、那須の黒羽などに立寄つて須賀川の等躬の家に草鞋を脱いだのは四月二十二日であつた。同家に四五日間滯在中等躬曾良等と三吟の歌仙を卷いてゐる。「風流の初やおくの田植うた」の句はその歌仙の發句であるが、此句は本文によると「白河の關いかにこえつるや」と等躬に問はれて詠んだものであるから、白川の關を越える時の感想をあらはした句であることが知られる。表題の示すやうに本論に於いては本文の鑑賞を取扱ふのが目的でないから、茲には此句についての解釋は省略するが、とにかく古來奧羽の入口として有名な歌枕の一つである白川の關に對しては、流石に芭蕉も多大の關心を持つて越したことが察知し得られるのである。

然らば芭蕉の此句にあらはされて居る白川の關は何れの地點を指して居るのであらうか。此問題については單に本文のみでは不明であるがために從來二說あり、その一は白坂寄居間の新關であるとして居り、他は旗宿の舊關の方であるとして居るのである。そして第一說の根據とする主點は、(イ)芭蕉は白川の關を越す前に旣に新街道(奧羽街道)の蘆野の里に遊行柳を見てゐるのであるから當然寄居の方に向つたと解すべきである。(ロ)芭蕉以外の多くの俳人達の越したのは新關である。例へば宗因の「陸奧鹽竈一見記」(延寶六年)三千風の「行脚文集」(貞享四年)北華の「蝶の遊」(元文三年)白雄の「奧羽紀行」(明和八年)百明の「奧往來」(天明三年)などに見えてゐる白川の關は何れも皆新關の方であると云ふにある。これに對して第二說の根據とするところは、本文中の白川の關の條に平兼盛や能因法師や源賴政やの白川の關を詠んだ和歌を踏んだり、袋草子に出てゐる竹田國行の故事を引用したりしてゐるのであるし、それに芭蕉ともあらう者が歌枕の舊關址を見ずに素通りする筈はないと云ふにある。此問題は先づ常識的の判斷からしても舊關址と解するのが至當であらう。

所で此問題に關する何か文獻はないものだらうか、私はそれを探し求めてみた。すると等躬の「信夫摺」(元祿二年刊行)に「しら河の關こゆるとてふるみちをたどるままに、西か東か先早苗にも風の音」とある。このふるみちは舊街道卽ち關街道を指してゐるのであらうと思はれる。矢張り芭蕉は蘆野から新街道の方でなく舊街道に出たものと見える。此外に何か文獻はなからうかと探し求めたところが、此頃もう一つの文獻が私の眼に觸れた。それは須賀川町の矢部保太郎氏の所持されてゐる「晋門錄」と云ふ寫本である。これは其角の門弟藤井晋流の遺著(未だ世に公にされて居らぬ)であるが、それによると芭蕉の眞蹟として等躬の家にあつたものを晋流が等躬から繼承したものとして記載されてあるもの(それらは「蝶の遊」中に北華が晋流を訪ねて見せてもらつたものとして出てゐるものと符合するから相當に信を措けるものであらう)のなかに「みちのくの名所〳〵心におもひこめて先關屋なつかしきままに不類道に懸りて今の關をも越しぬ頓而いはせの郡にいたりて乍單齋等躬子の芳扉を扣、彼陽關を出て故人に逢なるべし、風流の初やおくの田植うた」とあるのである。これは恐らく「信夫摺」(但し信夫摺にはいまのしら河も越えぬとある)の原稿ではないかと想はれるのであるが、この文獻によつても芭蕉は先づ關屋(舊關址)の跡なつかしきままに古道卽ち關街道に懸りて舊關址を尋ね、それから今の關卽ち新關の方に出てそれから白河の町に至つたのであらうと思はれるのである。そしてその道筋としては蘆野から棚倉街道を東向して簑澤(伊王野と旗宿との間に在る)に出て、それから關街道を北進して旗宿に至つたものであらう。

さて次に舊關址の地點の問題であるが、從來の解釋では何れも皆舊關址の所在を旗宿としてゐるのである。一體白川の舊關址は何處かについては史蹟研究者間の問題になつてゐるやうであるが、結論としては未詳と云ふのが正しいやうである。だから私が茲に問題としてゐる白川の舊關址はおくのほそ道中にあらはれてゐる白川の舊關址について

であることを先づ斷つて置きたい。その舊關址を從來の研究者が上述の如く旗宿とあつさり片附けて置くのは何に因由するかと云ふと、現在旗宿村の南端の小丘の白河神社の境內に松平定信が建てた古關蹟といふ石碑があるが、それから出てゐるらしいのである。併し此碑は寬政十二年に建てたものであるから、勿論芭蕉の行脚當時は無かつたものである。碑面には「徵地形老農之言此其爲遺址較然不疑也」などとあり、定信も相當の學者であるから絕對に否定することも出來ぬが、史蹟研究者中でも具眼の士は舊關址としては旗宿の此白河神社境內の小丘よりも、寧ろ旗宿村の一里北方にある關山(セキサン)の方を採つてゐるやうである。

私は芭蕉が白川の舊關址として往昔を回想して種々感慨に耽り、「風流の」の句に詠んだ處も旗宿の方ではなく、この關山の方ではないかと思ふのである。その主たる理由としては「陸奧衙」卷五の紀行文中の白河の條を擧げたい。「陸奧衙」は云ふまでもなく芭蕉の門弟天野桃隣の撰に成るものであるが、彼の奧羽行脚は元祿九年であつて芭蕉の行脚の七年後である。彼は勿論おくのほそ道も見て居り、のみならず師芭蕉から奧羽行脚の實話も聞かされてゐたことであらう。そしてその序に「既今年三回忌亡師の好む所にまかせ元祿九子三月十七日武江を霞に立て關の白河は文月上旬に越ぬ」とあるやうに、師芭蕉の草鞋の跡を慕つた行脚であるから、おくのほそ道研究には第一の好資料と見らるべきものであらう。その「陸奧衙」の白河の條には「此所山を越白河に出、宗祇戾しへ掛り加島櫻ケ岡なつかし山二形山も順道也是より關山へ登ル、峯に聖觀音聖武帝勅願所成就山滿願寺坊の書道院よりの見渡し白河第一の景地也、奧の花や四月に咲を關の山、此所往昔の關所と也本道二十丁下りて城下へ出、關を越る」とあるのである。桃隣は先づ白河の町に出て、それから關山(白河と旗宿との中間で關街道の東側に位してゐる)に舊關址を尋ね「此所往昔の關所と也」と書き記して居るのである。恐らく元祿當時は關屋などは殘存しては居らなかつたであらうが、關屋は關

山の麓にあつたものと想はれるのである。私は此春旗宿にも關山にも行つて見たのであるが、旗宿の白河神社は伊達政宗が建てたもので以前は現在の前の平地に在つたものださうで、どう見ても關所などの置かれた地形には思はれぬのである。關山附近の方は山もそば立ち地勢も迫つてゐて如何にも舊關址を偲ばしめるに足る風致があるのである。

それからもう一つの理由としては、「風流の初やおくの田植うた」と詠んだのであるから、芭蕉は現に田植をしてゐる場面を見たものと解すべきであらうが、旗宿村の古老の談によると、旗宿邊の田圃は明治以前までは原野であつたさうで、此句にあらはれてゐる場面は恐らく關山下の番澤盆地ではないかと想はれるのである。これは尠しく穿鑿に過ぎるかも知れぬが、此句が全然空想の作とも思はれぬから、さうした吟味も強ち無意味ではなからう。以上の理由からして私は關山を以て芭蕉の尋ねた白川の舊關址と推定したのである。尚ほ上述の「晋門錄」には「今の關をも越しぬ」とあるのであるから、芭蕉は關山から白坂の新關の方にも出たことが知られるのである。

（2）　月の輪のわたし、飯塚

本文に「月の輪のわたしを越て瀬の上と云宿に出づ」とあるが、この月の輪のわたしについては從來分明を缺いてゐて、或は五十邊のわたしの誤りではないかとする說などもあるが、一體普通五十邊のわたしと云へば福島から奧州街道を瀨の上に出る途中の五十邊といふ部落の處を流れてゐる松川（阿武隈川の支流）のわたしの稱であつて、芭蕉が福島から信夫摺の方に廻らずに直接に瀬の上に出たのであるならば、この五十邊のわたしを渡つたとも考へられるのであるが、芭蕉は瀬の上に出る前に信夫摺を尋ねて居るのであるから松川のわたしは通つて居らぬのである。

然らば月の輪のわたしは何れの地點であらうか。私はそれを確むるために此邊の古繪圖を探し求めたのであるが、此頃二つの資料を見る機會を得たのである。それは福島市安齋庄松氏所藏の元祿年間の信達（信夫郡伊達郡）二郡の

繪圖と瀬の上小學校所藏の延享二年の瀬の上及びその附近の繪圖とである。その信達二郡の繪圖によると、福島から信夫摺に至る道筋は現在と大差ないが、唯阿武隈川の川筋は信夫摺のあたりは現在よりももつと山際近く流れて居る。そして信夫摺から瀬の上に出る道筋は、信夫摺の手前から山際と阿武隈川との間を約十町程北向して月の輪山の麓の川東に鎌田分（川西の鎌田村の一部である向鎌田と俗稱する部落）と記されてある處に舟渡しがあるが、それが本文中の月の輪のわたしであつて、それを渡つて瀬の上に至るのである。尤もそれよりも五六丁下流の愛宕神社下にも舟渡しがあつて瀬の上に至るのであるが、芭蕉の渡つたのは月の輪山の麓の舟渡しである。延享二年の繪圖にも同一の處に舟場と記されてあり、しかも此繪圖によると月の輪のわたしを渡つてからの道筋は前河原の南端から青柳神社の南西を通つて瀬の上に至る道筋が精細に描かれてある。

次に瀬の上から飯塚に至る道筋は、後者の繪圖には單に佐場野街道と記されてあるのみであるが、前者の繪圖によると瀬の上から宮代、下飯塚沖仲野村を經て飯塚に至るのである。ところで本文にあるこの飯塚の里といふのは飯坂の誤りであるとは殆んど全部の解釋書に見られるのであるが、古繪圖を見ると何れにも皆明確に飯塚と記されてあるのであつて、本文通りで決して誤りではないのである。その地點は入江野と佐場野との中間に當るのである。芭蕉は飯塚の里佐場野（本文には鯖野とある）に大鳥城址や醫王寺などを尋ねて、それから飯坂（正しくは上飯坂）に出て泊つたのであるが、本文の「その夜飯塚にとまる」の飯塚は飯坂温泉を指したのであつて、恐らく芭蕉は飯坂の邊も飯塚村の範圍内と考へてそのやうに書いたのではないかと想はれるのである。

芭蕉は飯坂の宿で辛い目に逢つて翌朝馬に乘つて桑折に出たのであるが、その道筋は信達二郡の繪圖によると、現在の道筋である湯野、松原、成田などを通るのとは違つてゐて、上飯坂から湯野村を經て上堰の南側に沿うて牛澤村

に出てそれから桑折に至るのであつて、湯野村から鹽野目を經て長倉に至る道筋や、牛澤村から成田村に出る道筋とは明白に違つて描かれてある。芭蕉は馬子の案内で桑折に出たのであるから、先づ上述の道筋を通つたものと解して誤りはなからうと思ふ。

(3)　おくの細道

仙臺から壺碑（註、多賀城碑）に行く本文中に「かの畫圖にまかせてたどり行ばおくの細道の山際に十符の菅有」とあるが、おくのほそ道といふ題號の出所として多くの研究書にこのおくの細道を採つて居るやうである。私も芭蕉が題號の命名の際にこのおくの細道といふ名稱の暗示を受けたと云ふ說に對しては同感であるが、しかるに從來の研究では遺憾にもこのおくの細道といふ地點については十分確實に突き詰めて居らぬやうであるから、次に此問題を取扱つてみようと思ふ。

先づこのおくの細道についての古來の主なる文献を擧げてみると、宗久の「都のつと」（觀應年間、元祿二年より約三百四十年前）には「さてみちの國たがのこふ（註、多賀の國府）にもなりぬ、それよりおくのほそ道といふかたを南ざまにすゑのまつ山へたづねゆきて」とあり、道興の「廻國雜記」（文明十九年、元祿二年より二百二年前）には「奥細道松本もろをか（註、むらをかの誤り、今の利府）あかぬま西行がへりなどいふ所々をうち過ぎて松島に到りぬ」とあり、三千風の「行脚文集」（貞享四年、元祿二年の二年前）の奥州仙臺龜岡八幡宮遠眺ノ詞並二十八景品定の條には「景題二十八、鹽釜本荒鄉木ノ下田子玉田橫野華淵奥ノ細道……」とあり、釣月の「みちのく紀行」（享保二年、元祿二年より二十八年後、宮城圖書館所藏の寫本）の壺碑の條には「この邊りを奥の細道といへるとなん」とあり、洞巖の「奥羽觀蹟聞老志」（享保四年）には「東奥(ヲクノ)細道(ホソミチ)自レ古封内稱ニ東奥(アツマ)通行(カイダウ)一者（中略）於ニ名取一則在ニ笠嶋邊一於ニ宮城一則在ニ

木下西一（註、東街道の名稱仙臺市内に現存す）（中略）或說曰岩切橋北東光寺前道路是也（中略）考二宗久記一則與二今所二通行一者一相同」とあり、北華の「蝶の遊」（元文三年、元祿二年より四十九年後）の附錄には「奥の細道市川村より十符の里へ行道也」とあり、赤水の「東奥紀行」（寳曆十年、元祿二年より七十一年後）には「渡二轟橋一過二奥細道一問二土人十符菅薦處一」とあり、平洲の「松島紀行」（明和八年）には「自レ橋右ヲ曰二奥細道一」とあり、東谿の「國郡全圖」（文政十一年、元祿二年より百三十九年後）の陸奥國の部には岩切村今市の附近に奥細道と記入してある。

上述の文獻によると、おくの細道といふ名稱は芭蕉の通つた元祿二年よりも三百四十年以前即ち南北朝時代に既に存してゐたことが知られるし、また百四十年後の文政頃にも猶ほ存してゐたことが知られるのである。然らばこのおくの細道とは一體何れの處を指してゐるのであらうか。私は先づ上述の文獻に卽してそれを現狀と參照させながら檢討してみたいと思ふ。「都のつと」に「それよりおくの細道といふ方を南ざまに」とあるのは、多賀城（今の市川と云ふ部落）から鹽釜に行く街道の意ではなく、岩切から多賀の國府に着いたので其街道から右折して末の松山に行くと云ふ意であるから、現在の岩切村今市から多賀城村市川に至る街道を指してゐるのである。次に「回國雜記」の作者は岩切から多賀城に行かずに利府を經て松島に至つたのであるから、これは岩切橋（今の今市橋）附近の一部分の地點を指したのである。次に「行脚文集」には唯二十八景の一ヶ所としてあげてあるだけであるが、此附近の特定の一地點を指したことは知られる。次に「みちのく紀行」には多賀城碑の邊りとあるから、多賀城から岩切に至る街道の一部を指したのである。次に「聞老志」の編者は仙臺藩の學者であつただけにその說明も廣義の奥の細道卽ち東街道にまで及んで詳細に亙つてゐるが、東光寺前の道路卽ち岩切橋北側の道を一說としてあげてゐるのは、上述の岩切から多賀城に至る街道と符合するのである。次に「蝶の遊」の作者は多賀城の方から岩切に向つて行つたのであるが、

市川村より十符の里へ行く道なりとあるのであるから、矢張り上述のと同様である。次に「東奥紀行」には轟橋とあるが轟橋は此附近に在る別の橋であつて、これは岩切橋の誤りでそれを渡り奥の細道を過りてとあるから、これも岩切橋の北側の道路を指してゐるのである。次に「松島紀行」には岩切橋より右とあるから市川に至る道を指して居るのである。次に「國郡全圖」の奥細道は今市の附近にあるのであるから、これも岩切橋の附近の一地點を指してゐるのである。卽ち上述の數多の文献にあらはれてゐるおくの細道は、岩切橋の北部の現在入山と稱してゐる村落を通つてゐる街道か、更にそれを延長して多賀城村市川に至るまでの街道か、その何れかに歸するのである。而して前者は後者の一部であるから、おくの細道とは後者の入山邊から市川までの街道と解するのが妥當であらう。

ところで芭蕉の通つた元祿二年頃のこのおくの細道の道筋はどうであつたらうか。それを知る資料としては、仙臺市齋藤報恩會所藏の寛文初年頃の仙臺藩領内繪圖と宮城縣女子專門學校所藏の元祿十二年の仙臺藩領内繪圖とがある。この兩繪圖は元祿二年の前後に作製されたもの(伊達藩勘定方納付のものだから正確である)であるが、この兩繪圖に描かれてある仙臺城下から原町今市を過ぎ岩切橋を渡りて市川に至る街道（當時の鹽釜街道）は全く同一であるから、芭蕉は此街道を通つたものと觀て差支あるまい。この兩繪圖によると岩切卽ち今市から多賀城卽ち市川に至る道路は一筋であつて、現在は市川橋を渡りて二筋に分れて居るが、右方の多賀城碑の前に出る街道は新街道と見えて此等の繪圖には描かれて居らず、左方の市川の部落に至る道路のみ描かれて居る。而してそれは現在の道路と全く同一であるのである。だから本文中のおくの細道は上述の如く現在の七北田川に架せられてある今市橋北側の入山邊から多賀城村市川に至る間の街道と解してよからうと思ふ。或はかうした鄕土的の地名を芭蕉が何故注視したかについては疑問をはさみ得るのであるが、それは芭蕉が上述の文献などを通して知つてゐたものとも解されるし、また加(正

しくは嘉）右衛門から描いてもらつた鹽釜松島への案内圖に、歌枕である十符の菅に至る道としてこのおくの細道が記入されてあつたのではないかとも解されるのである。

此頃私は現場卽ち入山に行つて今市橋附近の故老に訊いてみたところ、自分等の幼時の頃はこの道を奥の細道と云ふのだと云ひ聞かされてゐたとの話であるが、現在は一般にさうは呼び習はしては居らぬやうである。尙序に十符の菅について問ひ正してみたところ、それは「陸奥衛」にあるのと同じく東光寺の西の農家の裏手に今でも十符の池と稱する小さな池があり、伊達藩時代に於いてはそれを管理してゐた赤間家では藩主より五十貫を戴き諸役御免のために家も繁榮してゐたものであるが、明治になつて沒落して仕舞ひ當主久九郎氏の所在さへ不明とのことである。

（4） 最上の庄と封人の家

尿前の關を越した芭蕉は封人の家に三日間よしなき逗留をして、それから究竟の若者を道しるべの人と頼みて、高山森々として一鳥聲きかず木の下闇茂り合ふ險難の道路をば辛き思ひをなして通りて最上の庄に出たのであるが、一體この最上の庄とは何處を指して居るのであらうか。この問題については、現在新庄が最上郡の中心地として普通最上と稱呼されてゐるので、最上の庄は新庄であるといふやうに、そしてまた雪丸げその他に新庄風流亭にてといふ前書にて「御尋ねの我宿せばし破れ蚊帳」を立句とする歌仙と三つ物二つとがあるので、芭蕉は尾花澤の清風を尋ねる前に風流亭に立寄つたのであるから、本文に最上の庄に出づと書いたのであるといふやうに一般に解されてゐるやうであるが、果して此說は正しいかどうか。また此說に對して現在の最上郡を元祿當時の村山郡と解して（菅菰抄に「最上の庄ハ古の最上郡なり今ハ村山郡に屬す」とあり）最上の庄は尾花澤であるといふ說も一部の人々の間には唱へられてゐるやうであるが、この說も果して正しいかどうか。私の觀るところでは、以上の說は何れも實地に卽せず、

單に文字の上のみから解釋してゐるやうに思はれるのである。私は昨夏以來數度に亙つての實地踏査と正保年間及び元祿十三年の新庄藩領內繪圖（新庄町金田甲橋氏所藏）などによつて、別種の新解釋を見出したので、次にそれについて述べてみることにする。

本文に從へば封人の家から最上の庄に出るまでに芭蕉は隨分辛き思ひをなすのであるが、一體封人の家は何處か、またその難所は何れの地點を指してゐるのか、最上の庄の何處であるかを定めるには、それらを先づつきとめてかかるべきであると思ふ。

第一に封人の家の所在について檢討してみる。この封人の家の所在についても從來幾多の說があり、未だ確定して居らぬのであるが、それらの諸說をあげてみるならば、（イ）尿前說（關守遊佐家）、（ロ）中山說（檢斷甚右衛門宅）、（ハ）關澤說（番所境守の家）、（ニ）境田說（庄屋有路家）、（ホ）笹森說（庄屋佐藤家）、（ヘ）向町說（檢斷藏田家）、（ト）鵜杉說（庄屋庄司家）などがある。而して前記の元祿十二年の仙臺藩領內の繪圖や上記の正保年間及び元祿十三年の新庄藩領內の繪圖や正保二年の兩藩國境協定書（笹森の佐藤傳兵衛氏所持）などによると、上述の七說のうちで關澤までが仙臺藩領內に屬し、境田以下は新庄藩領內に屬してゐるのである。だから芭蕉の通つた元祿二年の頃は、關澤と境田とが兩藩の國境と斷定して差支ないと思ふ。ところで本文には「あるじの云是より出羽の國に（註、出羽の國に出づるにはの意）大山を隔て道さだかならざれば道しるべの人を賴て超べきよし申す」とあるのであるから、封人の家の所在が仙臺藩領內に屬してゐることは爭はれぬ事實である。境田說は曾良が日記と稱するものに「五月十五日晴堺田和泉止宿庄屋折右衛門兄也」とあることや、境田の有路家に現在蚤虱の句碑があることや桃隣も此處に泊つたらしいと云ふことなどから起つたのであるが、何れも根據が薄弱である。笹森說や向町說や鵜杉說などは、中山越で日が

暮れたのであるからそこまで往かれる道理はないのである。これらの說は最上の庄を初めから新庄と定めてかかつて、その間の龜割峠の險阻な道をば辛き目をして芭蕉が通つたと云ふ誤れる說を前提としたところから生れてきたのである。次に尿前說の根據は一葉集に蚤虱の句の前書に尿前の山家とあることや、關所附近に現在蚤虱の句碑（明和五年鯨丈築く）のあることや、關所を漸と越した芭蕉はそれから中山宿に向ひ、藥師坂や十三曲りなどの難所を越えようとしたが、道に迷ひ途中から引返して關所の既番の家に泊めて貰つたと云ふ當地方の口碑などから生れたのであるが、しかし本文に「大山(中山越)をのぼつて日暮ければ」とあるのであるから、尿前の關を通り過ぎて中山宿に入つてから舍を求めたと解するのが妥當であつて、尿前說も承認し難いのである。そこで殘るところは中山說と關澤說とであるが、封人の家と云ふのを文字通りに解釋すると、封人は國境を守る人の意即ち境守であるから、當時仙臺藩が國境の番所を置いた關澤と見るのが妥當なのであるが、上述の如く中山越（尿前と中山との間）で日が暮れたのであるから、かうした山中の日暮れ時に當つて、この山間の宿場である中山宿を見過ぐして番所しかない（しかも番所は普通人を泊めず）關澤まで往くと云ふことは、どうしても常識では判斷し得ぬのである。しかも此の日の朝岩出山を出發してから約七里の行程を歩いて可なり疲勞して居るのであるから、たとひ中山から關澤までは半里程とは云へ、また夏の最も永い日（曆數家の硏究によると元祿二年は閏年であるさうだから、五月は六月であつて今の陽曆では七月に當つてゐる）の頃であつたとは云ひ、關澤まで往つたとは考へられぬのである。と云つて、中山宿に泊つたと云ふ確たる資料は今迄に見當らぬのであつて、ただ仙臺市東北學院教授和泉氏の所持される文政五年板のおくの細道本の杉芽（幕末から明治初年にかけての仙臺在住の俳人）の書入に「中山と云へる所なりと云へり今檢斷甚右衛門と云へる者の家なる由、內厩や其邊の莚敷の所に三宿し玉へりとか」とあること位のものであるが、上述の如く前後

の關係から中山（現在の中山驛にあらず、附近の陣ヶ森部落）と觀るのが最も妥當であると思ふのである。

第二に難所の地點についてであるが、それには先づ元祿當時の羽前街道並に尾花澤に出る道はどうなつてゐたかを確めて置く必要がある。そこで私は前記の元祿の仙臺藩領内と新庄藩領内との兩方の繪圖を照合してみたのであるが、それによると次のやうな順路になつてゐる。中山宿から境田村（その間一里）、それから笹森村を經て富澤村（その間一里三十四丁）、それから本城村を經て向町宿（その間三十一丁）、それから下村を經て瀬見村（その間二里二十六丁）、それから舟方村（その間四里二十二丁）、それから新庄（その間二里）に至るのである。即ち大體現在の順路と同様である。尤もこれは表街道であつて、瀬見から龜割峠を越して新庄に至る裏街道（桃隣の通つた道）もあつたのである。次に尾花澤に出るには向町宿で分岐して滿澤村（その間一里）を經てせな坂にかかり、それから岩谷澤村（その間二里）に出て、それから市野野村、高橋村を經て尾花澤（その間二里）に至るのである。ところで最上の庄を新庄と解する説にこの難所の地點をあてはめてみるならば、上述の瀬見から新庄に裏越する龜割峠に當るのである。併し此説の主張者は最初から最上の庄を新庄であると定めてかかつてゐるのであつて、そこで難所が龜割峠になるのである。從つて此説に從へば前述の如く封人の家は向町か鵜形（向町と瀬見との間）かになるのである。また最上の庄を尾花澤と解する説も、同じく最初からさう定めてかかつてゐるので、そこで難所が長刀切峠（元祿の繪圖には上述の如くせな坂とある）になるのである。從つて此説に從へば封人の家は笹森か向町かになるのである。けれども封人の家の所在は上述の如く仙臺藩領内に屬してゐるのであるから、最上の庄を新庄や尾花澤とする説は共に封人の家の所在に對する解釋の誤りから來てゐるのである。

一體おくの細道の地跡研究には、云ふまでもなく古繪圖と古い文献と實地踏査とが必要であるけれども、それらと

共に本文をも微細に觀て行くべきである。この難所の地點を定めるについても矢張り第一には本文に卽くべきである。本文によると、芭蕉は封人の家の所在地から最上の庄まで道案內を賴んだことになるが、先づ常識的に考へてみても、中山宿から十里前後もある新庄や尾花澤まで道案內を賴む筈はないのである。しかもこの間の記事は、道さだかでないこと、盜賊でも出さうなところであること、高山森々たること、篠の中踏み分け水をわたり岩に蹶いて肌につめたき汗を流すと云ふやうな、何れも皆ひどい難所越のみであるのである。ところが實地踏査をしてみると、中山から境田を經て富澤に至るまでは大體道路の近傍は山々のみであつて人家もあまり見られず、小國川の上流に沿うた邊りは本文の篠を踏み分け水を渡り岩に蹶いた所ではないかと想はれる位であつて、富澤のあたりからはぽつ〳〵と小國鄕の平野が展けはじめ、向町に至ると、小國川に沿うて可なり廣い平野が見られるのである。これは現在陸羽東線(小牛田新庄間)の汽車の窓からも十分展望することが出來る。しかして前記の元祿の仙臺藩領內や新庄藩領內の古繪圖にも明かに此間の地點のみには難所と云ふ書入があり、當時交通上の問題の地點たりしことが知られるのである。この間(中山宿から向町宿まで)の道程は四里弱であつて、芭蕉が道案內を賴んだのはこの難所を通り拔ける間であつたと見るべきであらうと思ふ。向町から以後は新庄に出るにしても尾花澤に出るにしても、わざ〳〵究竟の若者を道しるべとする必要はないのである。而して本文に最上の庄とあるが、この庄の意味は白川の條に「右に岩城相馬三春の庄」とあるやうに、その地方位の意味に解釋すべきであつて、元祿當時にあつては向町宿を中心とする小國鄕は新庄藩(卽ち最上藩)領內に屬してゐたので、芭蕉は向町宿に到るや眼前に展開する平野を眺めて、いよ〳〵最上の庄に出たなと感じたのであらう、そして此處で道案內に別れを告げたのであらうと想はれるのである。卽ち以上から推定して私は最上の庄は新庄でも尾花澤でもなく、向町を中心とする小國鄕と解釋すべきであると思ふのである。

其角の言葉

——花實集(柿晋問答)を中心に——

酒井清一

江戸前の俳諧にその豪放濶達な伊達ぶりを發揮して、嵐雪とともに蕉門の高弟として衆望を擔つてゐた其角は、奔放自在、時に人の目を驚かすやうな句を吐いて、元祿時代を時代の粧ひと同じく華やかな俳諧生活に終始した俳人である。俳諧がその時代と生活とを基柢として生れるものであるかぎり、新興精神の元祿町人階級と保守傳統的な武士階級との間に生れたかれの句が、時に絢爛難解であることもあへて怪しむに足らない。かれ其角は芭蕉のやうに旅によつて俳諧生活の擴充をはかつたのでもなく、——勿論かれも旅が句作に多大の影響を與へるものであることは認めてゐる(雜談集)——旅による自然との融合一致に自然のまことのすがたを探り、藝術完成への精進を續けたのでもなかつた。「かの四大種の苦しみのみ恐れて、分別の栖をしむるともそれ幾とせならず」(焦尾琴)といつてゐるのも、悟道の達言といふよりは寧ろかれにあつては「風流の放埓」と考へられる言葉である。其角の旅は名所舊跡への物見遊山に過ぎず、かれはどこまでも市井の俳諧師であつたのである。

また其角は、江戸ッ子氣質をそのままに俳論家でもなかつた。支考や許六や越人など美濃を中心にして蕉門の論客が多いにかかはらず、其角や嵐雪や素堂に俳論らしい俳論のないのも、一面江戸町人のもつた性格からでもあつたのであらう。其角は論客ではなく句作本位の實行家であつた。故に、其角の言葉としてかれの作品の中から俳諧談らし

いものを拾ひ集めても、寔に斷片的なるもの寥々たる有様で、かれの著作と謂はれてゐる雜談集や句兄弟の判詞に僅かにそれらしいものを發見するに過ぎない。其角が京都行脚の砌去來の草庵で互ひに俳談を交はしたといふ花實集（柿晋問答）に載せてゐる言葉も、去來抄には去來の言葉として語られてゐる。事實、句作の實際に徴しても其角と芭蕉には、取材の上に表現の上に相當の距りが感ぜられるのである。然し、其角や嵐雪が蕉門の高弟と目され芭蕉にも信任せられてゐたのは、ただかれらが芭蕉初期の門人であるとの情誼觀念や、かれらの俳壇的地位からばかりではなく、芭蕉とかれらの間に藝術に對する信念、氣情一脈の融合點があつたに他ならない。この小論にあつては花實集（柿晋問答）にあらはれてゐる其角の言葉をそのままかれの言葉として——去來抄との比較研究はしばらく措いて——それを中心に發句並びに附句に對する蕉門一般の態度と、蕉門俳諧の當時における時代性を考察したいと思ふ。

當時の蕉門一般の連句に關する根本的な態度とも見るべきものに、

其角曰、發句は立木のごとく脇句は枝のごとし。第三は地のごとく表は雨のごとし。附合は葉の茂るがごとく風の吹くがごとし。是を俳諧の眞體といふ。（花實集）

といふ言葉がある。便宜上、發句論と附句論とに頒つて考察を進めて行かう。

發句論

「發句は立木のごとし」とは、發句の嚴然たる獨立性を指していふのである。しかもこの獨立といふことはまた完全な姿に於いての獨立をいふ。それを其角は立木といつたのである。發句の獨立性に就いては、すでに俳諧への歴史的展開の母胎たる連歌時代から制約せられてゐる法規であり、俳諧時代に入つても、その俳諧の發句の獨立性が示唆し

て發句のみの獨立となり、現代俳句へと展開してゐる事實をもつてしても容易に識ることが出來るのである。然し、俳諧の發句が單に獨立したものであるとの論は、同じ觀點に立てば、ひとり發句のみにかぎらず連句の各句はおのおの獨立した感情の表象であり、一句としての纒まりを有してゐるのである。故に同じく獨立した句といつても、發句としての獨立性には附句としての獨立性と自ら異つた意味がある。附句の獨立といふことはその一句を抽出した場合にのみいひ得ることであつて、連句として見る場合には、すでに前句との繋がりにおいて、或ひは次句への發展の點において單獨を許されない。これに反して發句の獨立性は絕對的である。發句に特に季題、切字など種々の規約が定められてゐるのも、この絕對的な獨立性に對して設けられた規定に他ならない。其角が發句を立木といひ脇句を枝といつたのも、附合論の上からいつたのであらうが、立木とか枝とかいふ言葉それ自身がもつ語の意味が暗示するごとく、其角も發句と附句の獨立性に就いての差異は當然認識してゐなければならない。

發句は何ものにも束縛されることのない自由の天地に生ひ出でた孤獨崇高な立木である。――(後述のごとく傳統的の束縛は感じてゐるが。)また立木であるが故に生命の躍動もなければならない。また木として完全な姿を備へた立木でもなければならない。かくして其角の俳諧の發句に對する獨立性の問題は解決されたと思ふが、他のかれの發句に關する見解を見よう。

其角は發句の善惡の批判を如何なる點によつてなしたか、換言すれば、理想の發句は如何なる句であつたか、かれは且水の質問に答へて、

ほ句は人の尤感ずるがよし。さもあるべしといふは次なり。さもあるべきやといふは其次也。さはあらじといふは下也。

(花實集)

といつてゐるので識ることが出來るごとく、かれの理想の發句は、他人を感動せしめるものでなければならなかつた。他人を感動せしめるには物象の生命――もののまことが表現せられてゐなければならない。發句が詩であるかぎり、感ぜしめるべきものであつて、理解さるべき性質のものではない。發句を單に理解するのみであればそれは皮相の見解といはざるを得ない。作者の感激をおのが感激として味到しなければ、發句の眞の味は味ひ得ないのである。其角が發句の理想的なるものを「感ぜしめる」點に置いたのも、まことが詠み得てゐられるか否かの點にあつて、これは芭蕉の俳諧の理念としてのまことの藝術論に一致點を見出すものである。

かれが第二段階にあるべき句として擧げた「さもあるべき」句は、いまだ他人を感動せしめ得ない句、對象と我との融合の心的過程の稀薄性を示す句であつて、感ぜしめる句がもつほどの實感味をもつてゐない句境の句である。然しこの句にあつても、物のあるがままの景情が表現せられてをればこそ「さもあらう」と他人を首肯せしめるのであるが、いまだ感情の燃焼の足らない、ありのままではあつてもものの奥底にひそむ本念のまことではなくて、外面的なるものをただ平板に表現したに過ぎないものをいふ。平板な觀念句や寫生句が、すでにただこととして何等の感動をも與へる力もなく、藝術作品としても生命を失つたものであるのは自明のことであり、芭蕉が、「發句は隅々まで言ひ盡くすものにあらず」(去來抄)とか「言ひ畢せて何かある」(去來抄)などいつてゐるのも、もとよりかれの根本信條たる餘情論から生れた言葉ではあるが、言ひ盡くすところに却つて深みのない平板さを作ひ、ただことと堕するのを戒めた言葉とも享けられるのである。さういふ意味における芭蕉のかうした言葉も、其角の「さもあるべし」の句を第二段階に擧げた意味と一脈通ずる點を有つてゐる。

「さもあるべきや」は初から理解をすら與へ得ない句で、「さうでもあらうか」と疑問を抱かすだけ、ひとり合點の境

地から生れた獨我的な觀念句か自己陶醉の句である。句意そのものの難解さによる疑問ではない。「さもあらじ」との句は論ずるまでもない句である。

この感ぜしめる句の內容を一層明瞭に說いたのが次の言葉である。

凡秀逸は其趣向取とむる所もなく、いはば只言と糸一筋なるべし。惡く作せば只言となり又は理窟に落べき也。(花實集)

作意を立てるでもなく、强ひて趣向を求めて句を作つたのでもなく、一見自明の平凡な句のやうで、しかも味はひを深く藏しただことに陷るところを一歩のところで踏みとどまり、一歩踏みはづせば理窟に落ちる句、かうした句こそ秀逸と稱すべきで、その一步の境を決定するものが俳諧の風調であるとしてゐる。かれのいふ風調とは、風情と風姿、すなはち句のもつ風韻である。句に漂うてゐるにほひであり餘情である。芭蕉の古池の句に就いて、蛙が飛び込んだが故に水の音がするといふ理窟の句のやうには聞えるけれども「音といふ字にいか斗か淋しき情なからん」(花實集)と、句の幽玄味を說き、また、

木がらしの一日吹てをりにけり
雨あられとんとめかして降にけり

の句をも「風調高うしておそらく聞人も稀なるべし」と秀逸句と認めてゐる。これは芭蕉が去來の「おととひはあの山越えつ花ざかり」の句を稱讃したのと同じ意味で、あるがままなる自然の相をあるがままに詠まれてゐる點を認めたのである。然し其角もいつてゐるごとく、かうした一見平凡に見える發句は、それだけまた秀逸と認められることは困難で、句を味はふ者が作者と同一の感性に立たなければかうした句のもつ味は見出し得ないのである。趣向から出發して作られた句であれば、容易にその趣向に取り縋つて味はふことが出來るが、對象の生命を摑んでそのまことを

詠んだ句にあつては、平凡に見えれば見える句ほど眞價を見極めることは至難である。「すべてありてい成句にて秀逸なるは妙を得し上手也」(雜談集)とか、「工夫に落ずして響たしかなる句」(花實集)を發句の生命と認めたり、「趣向にかかはる人はすべて發句成がたし」(雜談集)など、巧まないすなほな微妙の境地を詠んだ句を發句の理想の句としてゐるのも、芭蕉が無技巧の技巧を說いたのと同じ範疇に屬する言葉で、折にふれたる事をいひ出したのは「心と心がむかひあへる故」作者の誠が表現せられ、從つて時に新しくも感ぜられればまた不易の功も現はれ他人を感動せしめる句ともなるのであるといつてゐる。この巧まない句、ここに蕉門一般の句作の心法があるのである。不易とか流行とかも言葉や乃至は表現技巧上の問題ではなく、句中に作者の誠が滲透してゐるかゐないかに依存する俳諧新古の問題である。

かかる巧まない句を詠むには如何なる態度をもつて臨むべきか。其角は句作の心得の一つとして「屈情する」ことをいましめてゐる。屈情すれば心は平靜を保つことが出來ず、題意(對象)をそのありのままの姿情において摑み得なくなる。おのが心にもののあるがままを映し心と心を通はしめるには、我の意識を働かせずに、あるがままなるおのが心に、歪まない姿を映して見るべきである。「蕉門は景情ともにその有所を吟ず」(花實集)ともいつてゐる。「有所」とは萬象のあるべき地位、あるがままなる相を指してゐる。芭蕉はこの自然との融合を旅に求めたが、旅にあつては森羅萬象があるべき相においてわれわれの心に迫つて來り、そこに心と心との疏通が出來、自然の景情が生き生きとおのが心眼に映ずるのである。其角が、「風景をしる人思出多し」(雜談集)といつてゐるのも、旅が句作に如何に影響するかといふ意味において解釋されなければならない言葉である。

また其角が、少年、少女、遊女、禪門などの、時に口吟んだ句も眞情の流露があれば、たとへ古來の和歌發句と等

類の句のごときものであつても聞き許されるといつてゐるのも(雜談集)、芭蕉をはじめ蕉門の人々が、田夫、野人でも他門の巧者な發句は詠み得なくても蕉門の發句は吐き得るとしばしば說いてゐるのと同じ態度で、この巧まないすなほさ、俳諧といふ新しい自由の天地からすなほなるが故に見出し得るまことの境地をいつたので、これと全く對蹠的な言葉として考へられるものに嵐雪の、「なまじひに點者で候といはるる心うし」(雜談集)がある。嵐雪の嘆息は、俳諧師として獨立した存在と見られることの窮屈な、苦しい立場を恨んでの言葉である。匹夫野人にすら容易に吐き得た發句でありながら、點者であるが故に、なまじひなる句の許されない立場の苦しさであつた。これは俳諧が新興文藝として自由の天地を開拓して、新時代に雄飛せんとしつつあつたと同時に、また一面なほ和歌——連歌の傳統性に束縛せられてゐた事實を物語るものと見ることが出來る。新興文藝である俳諧が、すでにある概念を形成しつつあつた時代的の惱みでもある。匹夫、野人には傳統的規範はなかつた。かれ等は俳諧の歷史が何ものであるかも辨へなかつたのである。辨へなかつたが故に大膽でもあり得たので新鮮な境地は開拓もせられたが、またかれ等の見て識り得るものは當時すでに獨立してゐた點者の發句であり、またその批判の言葉でもあつた。指導的地位にある者の態度がいかに俳諧そのものの發展と進步とに寄與するか、また概念への墮落を來たすか、嵐雪の嘆息は、俳諧に對する信念の不足から來る不安を喞つたのではなく、全く職業化された點者のもつ不自由さを恨んでの言葉であつた。ここに新興藝術としての俳諧の廣い天地と新人の自由さと大家の矜持に對する惱みとが見られるのである。何ものでも俳諧の取材たりうると芭蕉は敎へてゐるが、傳統的信念の上に立つてゐる以上、やはり或る種の規約は當時の俳諧が享けねばならなかつた重荷でもあつた。

凡發句をこころがけるにその品あるべし。時により興に乘じてめづらしき題の句得たりとも外に鏡とすべき好句なければ、

一句は一句能句にしてそれをさして能句持とはいふべからず。（花實集）

この言葉は何を物語つてゐるか。たとへ發句としての珍らしい題を摑み、その題による句を得たにしても、善惡を批判すべき他によい句がない故、その句自身は新季題の開拓者としての獨自の境地から生れた獨創的なる點はあらうとも、新季題開拓といふ意義以外には、よい句作者とはいひ得ないといふのである。批判の對照物がないといふ傳統的な態度がここに見られる。特にまた其角は、詠むべき題として花、時鳥、月、雪を擧げてゐるのも、かうした題は古來詩歌に詠みふるされたもので、從つて題の概念がすでに一般化してをり、題意に對する誤つた捉へ方はないであらうが、またそれだけに古人以上に傑出した作品を生むことは容易でもない。彼は寧ろ鶯、更衣、立秋、時雨、頭巾、冬籠など四十餘種の題を擧げて、かうした題による能句が眞に俳諧の句持ちといふことが出來るともいつてゐる。これらは雪月花ほどの概念化もなく、また雀蛤、櫻魚、峯入などの全然新しい題でもなく一種の風韻をもつてゐるところに、俳諧の對象たるべきものが存してゐると見たのである。これは發句が單なる滑稽でもなく、また、和歌的花鳥諷詠を狙ふものでもないといふ獨立した俳諧的境地開拓に對する理念としての言葉と見なければならない。

また發句の季題の縱横を論じて、縱の題として詩、歌、連歌、俳諧共通的の題、花、時雨、月、雪、柳、櫻を擧げ、かうした題に對しては、「古詩古歌の本意をとり……文章の力をかり、私の詞なく一句の風流を專一にすべし」（句兄弟）と傳統的季感を重んじ、横の題として萬歲、やぶ入、火燵、餅つき、煤拂、鬼うつ豆などを俳諧の境地のみを表現する題として「洒落にもいかにも我思ふことを自由にとるべし」といつてゐるところに、すでに概念化された季題と俳諧的新季題とに對する態度の相違が認められる。和歌的なるものに對しては、傳統的な意味を充分汲みとつて風流專一に句作をなし、俳諧的な題に對しては自由の天地を開拓すべきことを訓へてゐる。ここにも俳諧の傳統性と自

由性を見ることが出來るが、この自由性がある時、蕉門俳諧は進展して行くのであつて、やがてはこの純俳諧的な季題さへ概念化せられて、俳諧が、發句が月並へと墮落の傾向をたどらなければならなかつたのである。

附句論

「脇句は枝のごとし」とは發句の立木に對する枝である。脇句はその言葉が示してゐるごとく發句あつての脇句である。元來脇句は連歌時代の規約が示すごとく「發句の理り立つるやうに」（無言抄）附けらるべきもので、發句の餘情をあらはすものである。發句が松の木であれば脇句もまた松の枝でなければならない。發句のいはんとしていひ得なかつた點——餘情——を形の上にあらはす、發句の立木に枝を副へるのが脇句の使命である。卽、脇句のもつ意義はどこまでも發句の從的の地位に立つべきものである。蕉門歌仙などの形式的法則を見ても、發句の季が春夏秋冬であるに從つて脇句も同樣に發句と同季であるのは、單に季感的統一を狙つたばかりでなく、發句と脇句との離るべからざる關係を示すものである。この主たる發句と客たる從たる脇句との兩句の醸し出す雰圍氣こそ、やがて一卷の氣分となり句毎の展開を見るのである。其角が脇句を枝のごとしと述べたのも、立木を念頭においての枝であり、主從的地位において論じた言葉であることは言を俟たない。

第三を「地のごとし」とは、地は大地である。大地は萬物をおのが内に藏して生成發展させる素地である。發句脇句の立木や枝をどつしりと享けて、かれらに安定を與へると同時に、この大地から一卷の花實を結ばせる役目を有してゐるのが第三句である。第三が變化のはじめといはれてゐるのもかうした意味からであり、その變化の幾變相を内に藏してゐるのが第三である。その句留めに就いても、或ひはらん、にて、體言留めなど發句の切字論とは以外にと

め字が喧ましく論ぜられるのも、この句に決定的な意を有たせずに句意の動搖性を與へ、第四句への發展を約束する重大な意義を有してゐるがためであり、第四句が事實上變化の第一歩であるなれば、その變化を示唆するものがこの第三句であると見なければならない。故に、この大地であるべき第三が痩地であれば、第四句からの變化は充分望み得ないのである。其角が第三を大地といつた意味もここにある。それは萬象の母胎としての大地である。

「表は雨のごとし」の表とは、歌仙の初の六句、五十韵百韵の初八句の總稱である。連句一卷の態度を序、破、急の三體に分ち、表はその序に相當する。其角も「序破急をとりはづすべからず」(花實集)といつてゐるが、就中表は大切で、連句が變化の妙諦を示すものとはいへ、表はいまだ一卷の序で、穩やかな變化をねらひ、急激な變化をさけるべきである。一卷の表が急激になれば第二第三への展開が切迫して一卷の調子が整はず、連句本來の性質たる氣分的統一にも缺けることになる。靜かに萬象に降りそそぐ雨、この雨の中に見るひつそりとした空氣が、やがて裏から名殘の裏に到る一卷の情緒の素地となる。其角は雨に彩られた萬象の靜謐さに見る種々相をもつて一卷の表の理想としたのである。

「附合は葉の茂るがごとく風の吹くがごとし」とは、附合の形式的方面を論じた言葉である。木に葉が一枚また一枚と繁茂して行くごとく、連句は發句(立木)から脇第三と進み擧句に至るまで連綿と變化の相(茂るといふ)をたどりつつ、しかも發句のもつ氣分(立木といふ)に統一せられて展開して行くものである。附句といふ一枚の葉は同じ氣分(發句といふ立木)に統一せられてゐる獨立した一葉ではあるが、前句との連續においては決して單獨であり得ない。附句相互に離るべからざる關係を有してゐるのである。かくして脈々と浪うつて續けられる連句の附句は、完全な姿にある輪の交錯連鎖である。獨立した意味内容を有つた附句が單獨にあり得ない前句との聯關、ここに連句のも

つ藝術性がある。この連鎖の發展過程を其角は「若る」といふ言葉で象徴し、附句が各句各樣の姿をとつて千變萬化、人生自然の流轉の幾變相を示してゐるすがたを「風にひるがへる」と表現したのである。

其角はまた附句に就いて「句はしり」といふことを論じてゐる。連句が氣分的統一による句の連續である以上、決して難澁な調子は許されない。「句はしり」とは語のもつ調子である。語路である。リズムである。語路はあたかも盤上に玉を轉ばすやうななだらかさでなければならず、しかも一句の姿として優しい風韻をもつたものでなければならない。泥水のどろどろと澁り勝ちに流れるやうな句の調子は、一卷全部の調子の破壞となるもので最も嫌ふところである(花實集)。故に彼はまた、「附句は殊更時の宜しきをうかがひぬべし」(雜談集)といひ、席のしぶりたる時に宜しく附流した時は、たとへ一句の手際は惡くとも一卷としての手柄は作者に歸せらるべきものであるといつてゐるのも(雜談集)、連句が個人のもの——獨吟はあるが——ではなく、他人との協調による文藝であることを考へなければならない。點者や一座の長老の心を推測してあれこれと工夫を運らし、よい句をばかり附けようと思へば、句は澁りやがては一座の氣分を壞すことにもなる。要は、「附いた句」にしてもまた「附けた句」にしても、「前句の情」の延長ではなく、千眼一到の境地をぬけ出で前句に對してひびきたしかに附けるべきことを說いてゐる。この「前句の情を引來るを嫌ふ」附句の論は芭蕉連句の心法であるにほひ、うつり、ひびき、おもかげ、くらひなどと同一の附肌を說いてゐるもので、連句が、前句の情緖の延長ではなく、說くまでもなく餘情の再現を指してゐるのである。

以上其角の言葉は、前述のごとくすべて芭蕉俳諧の根本觀念に一々聯關を有つてをり、かれの俳諧にあらはれてゐるあの絢爛さと難澁な句作態度は見出し得ないのである。花實集に示されたかれの言葉は、どこまでも芭蕉の道を步

いたものの言葉として享受せられるもので、かれもその俳諧に對する信念の上においては芭蕉と全然異つた道を歩いたものであるとは認められない。そこにまた、芭蕉によつて統一せられてゐた元祿蕉門の俳諧に對する、藝術理念の歸一性を識ることも出來るのである。ただ其角の俳諧作品にあらはれたものは、其角そのものの多面性を物語つてゐるものに他ならない。

またかれの言葉からは、元祿蕉門の俳諧が新興文藝として藝術完成へのひたむきな發展の過程をたどりつつあつたと同時に、和歌――連歌の傳統性に束縛せられてゐた俳諧の時代性をも識ることが出來る。さうして歴史的規範から脱し切ることの出來なかつた俳諧の惱みとともに新興文藝として自由の境地を開拓して行つた俳諧の將來性をも合せて汲み取ることが出來るのである。この俳諧の將來性も、やがてそれみづから季題の概念化を招き、概念の固定化が墮落へと陷つていつたことによつて發展性を沮止してしまつたのである。芭蕉の死後俳壇は衰微凋落したといはれてゐるのも、一人芭蕉といふ偉大な指導的立場にあつた藝術家の死が重大なる原因であるとの一般論よりも、寧ろ、かれら俳人がかつて和歌――連歌の題に對して有つてゐた概念化された季感の傳統的觀念を、自由なるべき俳諧的季題に對しても同樣に懷くやうになつたことに依存するといふ、俳諧の墮落に關する原因を暗示する言葉とも見られるのである。が、これは其角の言葉からばかりでなく、廣く蕉門一般の言葉からも暗唆せられる事柄である。

箙と短歌行・長歌行

志田義秀

連句の卷式の種類の多くある中、短歌行及び長歌行は、支考自ら自己の新製であると云つてゐるものである。この二式を樓川（二世）の文政十一年の『俳諧獨稽古』によつて記して見ると、

短歌行（二十四句）	表四句	月なし	
	裏八句	一句目月	七句目花
	名殘ノ表八句	七句目月	
	名殘ノ裏四句	三句目花	
長歌行（四十八句）	表八句	七句目月	
	裏十六句	九句目月	十五句目花
	名殘ノ表十六句	十五句目月	
	名殘ノ裏八句	七句目花	

の如くである。然るに短歌行と同じ句數の二十四句式のものである箙の方は、

箙（二十四句）	表六句	五句目月
	裏六句	五句目花
	名殘ノ表六句	五句目月
	名殘ノ裏六句	五句目花

の如くである。尤も箙の右の如き式は、『獨稽古』より前に、明和九年の『俳諧つるいちご』（之を嵐雪の遺著とする事は疑問と思はれる）に既に見えてゐる。然るに蛇可堂の明和七年の『俳諧小槌大成』に短歌行・長歌行の式があつて、長歌行の方は右に擧げた式と全く同様であるが、短歌行の方は右に擧げた式に略〻同様でありながら裏八句の月・花の定座が「七句〆迄月花す

べし」となつてゐる點が異なる上、短歌行を「ゑびらとも云」として箙との區別を立てゝゐないのである。併しこれは以下考へる所からも『つるいちご』と撞着する事からも當時の一般の式であつたとは考へられないから、こゝでは考慮外に置くことにせねばならぬ。

大體卷式の種類の發展を考へて見ると、その凡ての形式は、百韻系統のものと歌仙系統のものとの二種類に攝し得るやうで、從つて句數から云へば、六句・八句・十二句・十四句が基本になつてゐて、短歌行に見る四句の如きも八句を折半したものと見られ、長歌行に見る十六句の如きも八句を二倍したものと見られるのである。表十句・裏八句のものである十八公には、十句といふ數が見られるけれども、これは表十句・名殘の裏六句の本式百韻の表の十句に新式百韻の名殘の裏の八句を合せれば丁度十八句のものになり、十八公(松)を表象するにお誂向のものになるので、かうした着想から作られたものかと考へられるから、これは百韻系統の方に攝し得る種類のものになる譯である。

概括的には以上の如く見られるとして、考へて見たいのは支考が新製と稱する短歌行・長歌行の成立と箙との關係である。短歌行の句數と同じい二十四句式の箙が一方にあつて、これが若し支考が短歌行を新製したと稱する以前から見られるものであつたら、支考が新製と稱する事が問題になり、新製とはどんな意味のものになるかゞ一考を要することになるのである。私の觀る所では、支考が新製と稱するものどもには、或物から暗示を得たもの或は或物の應用又は變形に過ぎないものが少なくなく、嚴正な意味に於ける新製とは云ひ難いものがあるので、支考の云ふ新製といふ語は頗る多義的な曖昧な言葉遣ひと認められるのである。

支考が享保十二年刊の『和漢文操』（京保八年序であり、猶享保四年の「十論讃」に名が見えるから其の頃から既に編纂されつゝあつたものと考へられる）の凡例に、「此文操に八品の新製あり」と云つてゐる中の其六が短歌行・長歌行で、

和歌ノ家ニモ求韵ノ沙汰アレバ、増テ俳諧ノ聯句ニ似テ韵ヲ求ルニ須便アレバト、換韵ノ法ヲ製スルニ、短歌行ハ四六二十四句ニ分チ、長歌行ハ六八四十八句ニ分ツ。何レモ二折ノ表裏ニシテ、畢竟ハ換韵ノ埒ト知ベシ。

と云ひ、書中に掲げてゐる「求韻短歌行」の序說には、『奥儀抄』の求韵の說を引いて、短歌行・長歌行・歌仙行の求韵の定めを述べてゐるのであるが、併し韵を求める求めないは式の形式そのものに無關係の事なので、式そのものを考へるには顧慮する必要はないのである。支考は猶享保十五年刊の『俳諧古今抄』の「再校東花式」の中に再び是等のものに就いて述べてゐて、その「懐紙に名目の事」の中には、

長短の二行は、故翁滅後の新製にして、

と云ひ、「求韵の俳諧に句數の事」の中には、同じく先づ『奥儀抄』を引くと共に、

今いふ長歌行は、今ノ東花式の新製なるが、（中略）、表は八句にて裏を十六句とし、二折にして四十八句なれば、式目はすべて五十韵にかはらず。月ノ座も例の七句目なれど、花ノ座は但十五句目也。其外は古式にかはる事なし。次に短歌行は、長歌に對する變數なり。表は四句にして裏を八句とし、二の折の表は八句にて其裏は例の四句也。此數も四六廿四にして、先は換韵の用ながら、短からんと思ふ時に、一座の一折ならんより物に始終をとゝなへむが爲也。

と云つてゐるのである。前の『和漢文操』の凡例には、

文操ニ八品ノ新製モ、總テハ祖父翁ノ遺訓ナガラ、

と云つてあつて、今引いた「再校東花式」では「故翁滅後の新製にして」と云つてゐるのであるが、芭蕉の遺訓ならばそれをどうして支考自身の新製と云へるのか。前後言葉を二にして糊塗を敢へてすることは支考毎度の事として姑く差措かねばならぬが、兎に角短歌行・長歌行は、支考自身の云ふ如く『和漢文操』編纂頃に彼れの案出したものには相

違ないのである。

我が國に短歌・長歌があり、支那の歌行に長と短とがあり、杜甫に「短歌行」が見られたりするので、支考が斯る所に目をつけて短歌行・長歌行の目を立て、賦に四六や六八の律格のある所から、四六二十四だの六八四十八だのと云ふ如きことを云ひ出してゐるものと考へられるのであるが、かうした非論理的論理を巧みに弄することは、支考特有の慣用手段である。四六二十四句だの六八四十八句だのといふ事は、一見尤もらしく見えて其の實短長二歌行の數理的說明としては不合理極まるものである。然るに、二歌行の句數にかう理由づけて置いて箙のことには更に云ひ觸れぬのである。箙が支考の二歌行案出以前に存在したことは確實な事實で、管見の限りでは、既に元祿六年刊の北河原休計の『浪花置火燵』に箙が一卷見えてゐる。これより以前に見えるかどうかを知らぬが、兎に角この頃に既に見えるとすれば、箙は支考の二歌行案出よりは可なり早くから存在するものと云へるのである。休計は吟松軒又は鼠丸堂と號し、轍士の『花見車』の津の國の部に選ばれ、『浪花置火燵』の外に『正月事』・『今源氏』・『盃集』などの俳集のあることの知られる人であるが、多田莎平氏の研究によると、攝津の萱野に近い半町（はんでふ）（の小字瀨川）に住し、義士俳人萱野涓泉の緣邊の北河原孫三郞の父であり、休計と親密な關係の見られる水仙堂藤井蘭風は、涓泉の母小滿（こみつ）の實家であると云ふことである。蘭風は『花見車』には選ばれてゐないが、『萱野艸』や『椎柴集』の撰があつて、兩集共に落月庵西吟との濃密な關係が見られ、（『萱野艸』には、「鷲助と落月庵の月を詠、手ならひのむかしを語りて　今こそは萩に立たり筒井筒　蘭風」とあるものも見られる）又『椎柴集』ではその上に休計との親密さも窺はれる。要するに休計と蘭風とは涓泉を通して緣類に當る上、俳諧に於ては共に西吟との密な關係が見られ、兩人共西吟門ではあるまいかと思はれるのであるが、兎に角休計は、『浪花置火燵』の模樣で見ると、浪花談林の一人であつたことは疑ない。そして同集の樣子で見ると、卷頭に、

自隊落はまことの種といひて、置火燵に詞ひ、世の誹律を諷ふ、たのしひかな。酔寝て膳の一句をいへば、受けつ答えつ、時の間に二十四さいたるそめ羽の矢。

の序詞があつて、西吟の「置火燵きみが力や我ヵ力」を發句の西吟・休計兩吟の「簱」があり、次に休計・風慮兩吟の「哥僊のおもて兩吟」二卷（共に置火燵の發句の）があつて、又休計の「打むかひ同じ夢見る火燵哉」を發句の同じく休計・西吟兩吟の「簱」があるので、つまり同集は休計・西吟の簱興行が基本になつてゐるものである事が知られるのである。同集に見える二卷の簱は、簱といふその名及び前掲の序詞でも知られるやうに、二十四句式のものであり、且二卷共五句目の肩に「ウ」と記し、前の卷の十三句目の肩に「ニ」と記してある點から、表四句・裏八句・名殘の表八句・同裏四句の四面二折のものであることが知られ、即ち支考の云ふ短歌行と全然同一卷式のものであることが知られるのである。然るに卷の月・花の座を見ると、前の卷では、

表	三句目（第三）月	裏	七句目花と月と結ふ
名殘の表	七句目月	名殘の裏	三句目花

であり、後の卷では、

表	三句目（第三）月	裏	五句目花 六句目月
名殘の表	七句目月	名殘の裏	三句目花

で、前の卷と比べて異なる所は、初裏の月・花の位置だけである。そして二卷共表記の如く二花三月で、即ち歌仙式のそれと同樣であり、猶月・花の座も歌仙式の定座に準據したものと云へるのである。二卷共に初裏に月と花とがあるから初裏は歌仙式の如く月・花の二つの置かれるものである事が知られるが、その定座の位置は、前の卷では七句

目に花と月とが結ばれてゐるので、七句目が月か花かの定座らしく考へられるだけで、そのどちらであるかは解らないが、後の卷では五句目が花、六句目が月で、卽ち花の方が月よりは先になつてゐて、歌仙式などの月が先で花が後であるのとは逆になつてゐる譯であるが、これは花を引上げ月をこぼしてかうしたものか、或は箙式では歌仙式などとは逆に月を先に花を後にする法式にしたものか、唯これだけでは其のどちらであるのかは決定されないが、後述の集どもに見られる箙に於てその初裏がいづれも花が先で月が後になつてゐることから考へて、箙式では歌仙式などの初裏に於ける月・花の順序とは逆に花を先に月を後にすると云ふ法式としたものである事が確實に知られるのである。そしてその花と月との定座の位置は何句目かといふと、『浪花置火燵』の二卷の箙では、後の卷の初裏では五句目が花になつてゐるからこの位置が花の定座かと考へられ、前の卷の初裏では七句目に花と月とが結ばれてゐて、一方花の座は五句目と考へられるとすれば、この位置が月の定座かと考へられて來ねばならぬが、後述する集どもの箙を見ると、果して五句目花・七句目月になつてゐるので、是等の點から箙式の初裏の花・月の定座は五句目花・七句目月である事が確實に知られるのである。

前に述べた蘭風の『椎柴集』は、刊記その他刊行年時の知られるものがないが、自序によつて老年に於ける撰集であることが知られるから、同じ人の『萱野艸』(寶永五年成)よりは後のものではあるまいかと思はれるが、併し兎に角撰輯年時の解らぬもので、直接には『浪花置火燵』との前後を知るべき由がないけれども、大體の見當として『浪花置火燵』よりは後のものと假定して置くと、この集に、箙とは記してないが「卽興の兩詠」と題する西吟・蘭風兩吟の箙と「兩詠」と題する蘭風・西吟兩吟の箙との二卷が見られるのである。そしてこの二卷の月・花の定座を見ると、前の卷は初表の月が一句だけ引上げられて脇句が月の句になつてゐる點が上述の定座の位置と異なるだけで、そ

の他は二卷通じて上述の如き定座通りになつてゐるのである。即ちこの二卷の如きは籏の月・花の定座を知るに最も都合のいゝ有力な資料と云へる。次に恐らくはこの集よりは前で『浪花置火燵』よりは四年後に當る元祿九年刊の姫路の井上千山の『印南野』に只定・千山兩吟の籏が一卷見えるのである。この頃の千山は來山門か少なくとも來山派であつたことは確かで、即ち休計と同じく浪花談林の系統であつた譯であるが――集そのものもさうした色彩になつてゐる――只定・千山兩吟の籏を見ると、月・花の座は、表は四句目月、裏は五句目花・七句目月、名殘の表は六句目月、同裏は三句目花になつてゐて、即ち上述の式に於ける座の位置からいふと、表の月が一句だけこぼされ、名殘の表の月が一句だけ引上げられたものになつてゐると云へるのである。猶時代は稍々降るが、享保二十年成の石介・瓦郭共撰の『木葉漬』に、享保七年の作で「四六之吟」と標目して掲げる五吟のものは籏であると認められ、この卷の月・花の座を見ると、發句が待宵で月が第三であるべきものが二句引上げられてゐる譯であり、裏は花なしで（六句目に紅葉のあるのが花に代へた趣向のものらしい）月が法式通り七句目にあり、名殘の表も法式通り七句目月、同裏は二句目花で一句だけ引上げられてゐる。斯くの如く可なり活用や破格が見られるが、併し上述した法式以外のものではない。又寛保元年刊の紀逸の『吾妻舞』に六吟の籏が一卷あつて、その月・花の座を見ると、表の月（三日月）が脇句にあつて一句だけ引上げられて居り裏は七句目花でこれは法式通りであるが月がないので、四句目に餅屋が出てゐて餅を以て月に代へた趣向のものかと思はれるが、それにしても一句だけ引上げられてゐる譯であり、名殘の表の七句目は桂男を出して月に代へ、同裏は法式通り三句目花になつてゐる。こんな風にこれも可なり活用されたものにはなつてゐるが、やはり上述した法式以外のものではない。寛保頃までのもので今見當つてゐるものはこれ位であるが、玆に便宜の爲め上來によつて知られた籏の卷式を表記して置くと、

箙（二十四句）
- 表四句　三句目（第三）月　裏八句　五句目花　七句目月
- 名残ノ表八句　七句目月　名残ノ裏四句　三句目花

の如くなるのである。

以上述べた作によつて、箙が浪花談林と深い關係を持ち、特に西吟と格段な關係を持つことが知られよう。併しこれは私に得られた作からの偶然的な結果であるかも知れぬが、さうばかりでもないやうに思はれるのである。從つて『浪花置火燵』の西吟・休計兩吟の箙が箙の創案創始でなかつたとしても、元來西吟の創案に係るものであるかも知れず、少なくとも浪花談林に於て創案されたものではあるまいかと考へられるのである。

箙は二十四句式で、その景物は歌仙式と同じく二花三月で、その二花三月の定座が歌仙式に比べて一箇所逆になるやうな興味ある變改の加へられてゐるものであるが、併し兎に角歌仙式の定座に準據したものとは見られるのである。然るに支考の云ふ短歌行は、二十四句式でありながら二花二月であるので、この點が著しく異なるのである。併しながら、支考が短歌行を發唱しない前に既に箙が儼存したとなると、短歌行の二十四句式が箙の二十四句式と單なる偶合とは見られず箙の踏襲奪胎と見られることは已むを得ぬ所であらう。支考は歌仙式に於て二花二月の新案を立てゝゐるのであるから、それを短歌行にも流用して箙からの踏襲奪胎の跡を糊塗したのであらうとの解釋がつくのであるから、二花二月であることが箙の踏襲奪胎でないことの證明にはならぬのである。斯く短歌行が箙の踏襲奪胎であるとしたら、それを新製と稱することは僭越な事柄で適當には變改と稱すべきものである。それにも拘らず新製と稱してゐるのには、彼が新製と稱しながら又「祖父翁の遺訓」とも稱してゐる處に逃避の箇所が設けられてゐるとも見られるであらう。猶箙は、後の卷式では、最初に掲げたやうに、表六句、裏六句、名殘の表六句、同裏六句といふ

如き等分的四面のものになり且つ花二月のものになつてゐるのであるが、これはいつ頃からかうなつたものか、又どうしてかうなつたものか、それが『つるいちご』に既に見える點からこの頃以前とは知られ、その時期は判然とは知られぬけれども、支考案出の短歌行が愈々流行するやうになつた後それと區別する爲めに變改されるに至つたものには相違なからう。

支考案出の短歌行の作は、前述の『和漢文操』に見える「求韻短歌行」が今日見られるものゝ中製作年代の最も早いものではあるまいかと思はれる。『和漢文操』の刊行された前年の享保十一年冬に成つた（刊行も同年内かと思はれる）支考門の名古屋の以之の撰に係る芭蕉三十三回忌追善集『六の花』に短歌行が一卷あるけれども、これよりも右の「求韻短歌行」の方が早いものではあるまいかと想像される。「求韻短歌行」は支考と支考が獅子庵の三仙と云つてゐる越中石動の壺峰・方堅・乙文の三門人とで卷いた四吟の短歌行で、壺峰の「香久山のこちらにほすや藤のはな」の發句、蓮二（支考）の「鶯もけふ局折すがた」の脇を以て始まるものであるが、この卷に於ける月・花の定座を見ると、裏の三句目月・七句目花、名殘の表の七句目月、同裏の三句目花といふ二花二月で、表に月のないものになつてゐるのである。（表に月がないと云ふ點は、歌仙式その他各種の卷式及び簾式とも甚しく違ふ點である）。次に『六の花』の短歌行は、翁の「初雪や掛かゝりたる橋の上」を立句とする脇起しで、脇がミノ山朴の「日脚に廻る水鳥の友」、以下舞巾・唯人・颪來・以之・東家・馬蘭・巴靜・和木（共に名古屋の支考門流と思はれる）の九吟のものであるが、この卷に於ける月・花の定座は、裏一句目月（夏の月）・七句目花、名殘の表の七句目月、同裏の三句目花といふ二花二月で、表に月のない點は前の「求韻短歌行」と同樣で、異なる所は裏の一句目が月になつてゐる點だけである。次に支考の門人盧元坊里紅が享保十二年に北國旅行をした時の收穫として成つた『桃の首途』に、里紅が行く先々で卷いた短歌

行が三十四卷もあつて、里紅のこの旅行は一面この新しい式の宣傳且直接指導の意味のものであつたと考へられるのであるが、この三十四卷によつて短歌行がどんな模樣のものであるかゞ能く知られるのである。特に里紅の旅行は夏・秋・冬に渉つてゐるから、季節と定座との關係も能く知られるのである。（長歌行は『桃の首途』にも一卷しかなく、この式は實際に於ては多く行はれず、落伍的な關係のものになつてゐる）。卽ち三十四卷の中、夏の卷が十四卷、秋の卷が十六卷、冬の卷が四卷あつて、是等を通觀すると、秋の卷では、

表　三句目（第三）月　裏　七句目花
名殘の表　七句目月　名殘の裏　三句目花

が通有になつて居り、秋以外の卷では、

表　月なし　裏　一句目（裏移）月　七句目花
名殘の表　七句目月　名殘の裏　三句目花

が通有になつてゐて、卽ちいづれも二花二月ではあるが、秋の卷と秋以外の卷とでは面に於ける定座の置き樣が著しく違ふのである。言ひ換へれば、秋以外の季の式では、月・花の定座は最初に掲げた『俳諧獨稽古』等の卷式と全然同一なのであるが、秋の季の式では、表の第三に月の定座を置いて裏には花の定座のみを置くといふ式になつてゐて、卽ち秋の季と秋以外の季とでは月の定座を一箇所違はせるといふ二樣の式のものになつてゐるのである。然るに表の第三を月にする式は元來箙の式に見られるもので、且箙では季によつて式を變へるものではないのを、支考が箙を自己の短歌行として奪胎するに當り之を秋の季の式の方へ主として流用して多少の變改を施すことにしたと見られ、卽ち秋の季の式の方では、箙が第三を月とすることをその儘採用し、裏には細工を施して、箙の裏では花と月とのあ

るのを秋の季の式の裏では月を拔いて花のみとして二花二月になるやうにし、それには簾では七句目月である處へ花を移して七句目花といふことにしたものと考へられるのである。そして秋以外の季の式の方では、簾を殆ど流用しない程の變改を試みて、表に月なしといふ大英斷を施して二花二月になるやうにし、裏では簾が花を先・月を後にする變改の施されたものであつたのを本へ戻して月が先・花が後になるものとし、その位置を定めるのに、表に月なしにした結果、裏の月を出來るだけ上げることにして月を一句目（裏移）に置く事とし、花の方を簾では月の座である七句目に下したものと見られるのである。これが支考が短歌行を簾から奪胎した變改ぶりと云ふべきものである。こゝで振返つて前述の「求韻短歌行」を考へて見ると、この卷は春の季の卷であつたので、秋以外の季の式に屬すべき譯であるが、裏の月が三句目にあつたのでこれが問題にならうかと思ふのである。即ちかうなつてゐるのは、裏の月の定座が當初はかうであつたのか或は當初から一句目(裏移)の所が月の定座とされたのをこの卷では二句こぼしてかうしたのか、そのどちらであるのかゞ問題にならうと思ふのであるが、『六の花』の短歌行が一句目（裏移）が月になつてゐるし、『六の花』や『桃の首途』の頃までに直ぐ改められたと考へることもどうかと思はれるし、月の定座を裏移まで上げることは當初から思ひつきさうな事でもあるので、多分當初から一句目(裏移)が月の定座とされたのがこの卷ではそれを二句こぼしたものに過ぎないものと見られねばなるまい。

『桃の首途』に次で、同じ里紅が享保十五年六年の二年に渉つてなした西國旅行の收穫として成つた『藤の首途』にも、短歌行が九卷見えるのである。斯く卷の數が『桃の首途』に於ける數に比べて餘程減じてゐるのであるが、この時は前の旅行より四五年後で、從つて短歌行の宣傳指導も前程の必要がなくなつてゐたらうと考へられるので、勿論宣傳指導の意味がなかつた譯ではないと思はれるけれども、兎に角卷の數の少ないのは右の如き時代關係による所が

多いのであらうと思はれる。その九卷は、夏四卷、秋三卷、冬二卷であるが、秋の季の卷と秋以外の季の卷とに於て二樣の式の見られることは『桃の首途』に於けると全然同一で、唯これだけの事を云へば足りるのである。

長歌行は、支考は短歌行と併稱してゐるものではあるが、實は失敗の式であつたと云つてよく、事實『和漢文操』にもその實作を見せて居らぬのである。『桃の首途』にも「首途」と題する一卷があるのみで、里紅が旅行先で卷いたものは一卷もなく、『藤の首途』に於ても歸鄕を迎へたものが一卷あるのみで、同樣に旅行先で卷いたものはないのである。「首途」と題する一卷は、里紅の首途に當つて支考及び美濃各地の獅子門が卷いたもので、蓮二（支考）の春の發句、里紅の脇で始まるものであるが、月・花の定座を見ると、最初に掲げた卷式と一致するものになつてゐて、唯裏の月が七句目に引上げられてゐる點が異なるのみである。又『藤の首途』の一卷は、里紅の歸鄕を獅子門の大垣連中が迎へて卷いたもので、秋の發句で始まるものであるが、これの定座を見ると、表の月が第三にあるけれどもこれは秋の卷であるから始め三句中へ引上げられたので問題にはならず、その他は凡て最初に掲げた卷式と全く一致するのである。即ち裏の月も九句目にあるのである。支考は前に引いた『俳諧古今抄』に於て、長歌行について、

式目はすべて五十韵にかはらず。

と云つてゐたのであるが、彼が短歌行・長歌行を案出した享保頃には百韻の裏の月は九句目になつてゐたやうで（これは既に元祿頃からの事と思はれるが）、從つてその半ばのものである五十韻も裏の月は九句目になる譯で、この五十韻の式にかはらぬと云へば長歌行の裏の月は當初から九句目であつた筈で、この點から、『桃の首途』の「首途」の長歌行が裏の月が七句目になつてゐるのは、二句引上げられたものと見られねばならず、『藤の首途』の長歌行が裏の月が九句目になつてゐる方が當初からの定座と認められねばならぬ事になる。この點から支考の短歌行・長歌行案出の

關係を考へると、彼が長歌行の裏及び名殘の表の句數をそれ〴〵十六句といふ句數にしたのは、短歌行のその部分が簾のその部分の句數をその儘踏襲する結果八句になるので、その關係からその八句の倍數を考へて十六句としたといふ形のものである。一應はかう云へるのであるが、支考が十六句といふ數を案じ來つたについては猶これの誘因となつたものではないかと考へられるものがあるので、これについて述べて見ねばならぬのである。

それは朝叟の寶永二年の『浪の手』にある「湯桁」と題する當座の趣向の卷式のものである。この「湯桁」は、「伊豫の湯の湯桁の數は左八つ右は九つ中は十六」といふ歌によつて、左八句、中十六句、右九句の三面の式にしたもので、その月・花の定座の位置を見ると、

左八句　七句目月　　中十六句　十三句目月 十五句目花
右九句　八句目月

の如き一花三月のものになつてゐるのであるが、この作の趣向及び定座を考へて見ると、三面で一花三月のものになつてゐるのは、四面式で二花三月のものである歌仙や四十四などの如き式の名殘の表を下略すると共に名殘の裏を除いた趣向のものであり、又中の面の月が十三句目にあつて十五句目の花と頗る接近したものになつてゐるのは、運びの都合上からしたと云ふ意味のものに相違ないので、定座の關係から考へれば、裏その他中間の面が十四句のものである四十四・七十二候(五十韻も略々同樣と考へ得る)などの裏の月の座が九句目なのであるから、これに依るべきであると考へながらにも都合上四句こぼして十三句目にした意味のものと考へられるのである。「湯桁」と題する卷式は斯く考へられるもので、之を四面式の三面に直して書き改めて見ると、

表八句　七句目月　　裏十六句　九句目月 十五句目花

名殘ノ表十六句　十五句目月

の如くなるべきものである。そして之を支考の案出した長歌行と比べて見ると、表・裏・名殘の表の三面が句數も月・花の定座も全く一致するのである。されば、支考が『浪の手』を豫め見てゐて「湯桁」の卷式を知つてゐたものとしたら、こゝに偶然にも短歌行の句數の倍數の卷式が存在して居り、而もそれは卷式の半ば以上に當るものであることが支考に取つては頗る好都合である譯で、支考が箙から短歌行を脱化すると共に、短歌行の倍數の卷式の長歌行は「湯桁」からの暗示によつたものであり得ないではないのである。支考がいろ〳〵のものを案出する素材の得方やからくりには端睨し難い巧妙なものがあるので、長歌行に於ける斯る關係も十分疑ひ得る所であらうと思はれるのである。

以上の如く考へられる所から云ふと、支考が前に引いた『俳諧古今抄』の文の中に、

短歌行は長歌（長歌行の意）に對する變數なり。

と説明してゐたことは、全く自己の執つた手段を晦ましたもので、短歌行は箙の踏襲奪胎であるべきことは覆ひ難いのであるから、長歌行を俟つまでもないもので、長歌行案定の後にその變數として着案される如き順序のものではなく、寧ろ短歌行が先づ着案されその倍數の式として長歌行が着案されるのが自然の順序で、この長歌行の着案には前述の如く『浪の手』の「湯桁」が素材となつたのではないかと疑はれるのである。然るに支考の説明法はこの順序を全く逆に云つてゐるので、長歌行を最初に着案したと見せかける關係から、長歌行を説明するに、

式目はすべて五十韵にかはらず。

と云つて五十韻からの脱化である如く云つてゐるのであるが、これは定座の關係に共通する點のあるのを利用したま

でのもので、根本となるべき句數に十四句と十六句との如き相異のあることなどを知らず顔に通してゐる說明なのである。而もかうまで云つて强ひて順序を逆に云つてゐる意趣は、長歌行を基本だと揚言して置けば、短歌行が簸からの奪胎であることを糊塗し得るといふ點にあるべき事が見え透くであらう。

さて獅子庵二世の里紅に短歌行の宣傳指導の見られることは不思議はないとして、里紅以外の美濃派の人々の集にも短歌行や長歌行の見られることは云ふまでもない。こゝにその多少を云つて見ると、支考門の越前府中の嵐枝の『文月往來』（享保十二年成か）には、旅窓下の里紅の夏の發句で始まる嵐枝・柳鼓・歸的との四吟の短歌行一卷（これは里紅の『桃の首途』の旅行の時成つたものと考へられる）があり、同じく支考門の出羽鶴ヶ岡の風草の旅行收穫の集『俳諧歌まくら』（享保十三年）には、「歸郷ノ賀」と題する長歌行が一卷あり、支考門の岐阜の童平の『節文集』（享保十八年）には、童平の冬の發句の三吟短歌行が一卷あり、支考門の名古屋の巴靜の東武旅行收穫の集『吾妻掲』（享保十九年）には、春の季の短歌行二卷と「關屋晴嵐」と題する長歌行一卷とのあるが如きが共れである。そして是等のものの月・花の定座を見ると、中には多少融通されてゐるものがないではないが、兎に角凡てが前述した支考案出の式に全く一致するものであることが認められる。猶こゝで注意されることは、右に述べた二卷の長歌行の中その一卷が「歸郷ノ賀」であることである。前に述べた『桃の首途』や『藤の首途』に見られたものも、一は「首途」を賀するもの一は歸郷を賀するものであつたが、こゝに見られる一卷も「歸郷ノ賀」で、この點から考へると、長歌行は短歌行とは違つて滅多に試みられない如き失敗の式といふべきものでありながら、首途或は歸郷の際の賀や恐らくはその他の賀の場合の如きに試みられることの多いものであつたらしく、そしてそれは長歌行の「長」の緣起よさから生じたことではあるまいかと考へられるのである。尤も『吾妻掲』の「關屋晴嵐」と題する長歌行の如き例がないではな

いが、併しこの類のものは長歌行としては寧ろ例外的なものに屬するらしく、この作なども巴靜の發句以下一人一句連吟のものになつてゐて、人數の都合による點もあつたものらしく、この點から例外的なものと見倣し得るやうに思はれるのである。

美濃派の人々の集に短歌行や長歌行の見えることは當然過ぎることであるが、一寸意外に見えるのは既に享保頃から美濃派以外の俳系の人の集にも短歌行の見えることである。併しこれは意外のやうで實は意外ではないので、一體享保頃の俳壇は混亂時代といふべき時で、各俳系の俳人間に雜居的な交渉風交の見られる時期であるから、美濃派以外の俳人中に早速短歌行や長歌行を試みる人のあることは一向意外ではないのである。今時代の早いもので私に見當つてゐる美濃派以外の集が八集あるので、そのいづれもが短歌行が見えるだけであるけれども、猶彼此の集を調べたら長歌行も見當るのであらうと思はれる。八集の中時代の一番早いものは菅沼桃丑の『御選集』(享保十八年)で、これには十吟の四季の短歌行が十卷見えてゐる。十卷は春秋各三卷、夏冬各二卷で、作者は白翁(調和門)等十人、判者が白峯・竹郎・調柯・紀逸・蘭亭・大梅・蓮之・樓川・文倫・今更の十人で各一卷宛の判者となつてゐる。式は支考案出の秋の季の式及び秋以外の季の式と照合すると、可なり融通したものにはなつてゐるが、兎に角支考案出の二樣の式に據つたものである。次に竹郎の『茶話稿』(享保二十年)に春一卷・冬一卷の共に六吟の短歌行が見え、その式は支考案出の秋以外の季の式をその儘守つたものである。竹郎は珪琳(蓮之)七回忌追善集(題號不明)で見ると珪琳門らしく、『茶話稿』も珪琳門を中心としたもので、春の卷の短歌行には珪琳も加つてゐる。次に柳條(麥阿門)の『一筆鴉』(享保二十年)に「葛」と題する卷と「蔦」と題する卷との二卷の短歌行が見え、二卷共に麥阿及びその門である同じ六人六吟のもので、「蔦」の卷の方の二月が共に一句だけづゝ引上げられてゐるだけで二卷は全く支考の式を守つたものである。八集

中の三集はいづれも元文二年のもので、是等の三集は或點に於て互に交渉を持つてゐるものである。元文二年には珪琳・麥阿・黑露・宗瑞などが申合はせたやうに旅に出てゐるので、從つて旅先で邂逅したりなどもしてゐるのであるが、珪琳・麥阿・黑露に關係のある三集の中に短歌行が可なり見られるのである。先づ珪琳の方には珪琳の旅行留守中の集『水ぐるま』があつて、これは珪琳門の六人が留守中の自分等の作を土臺として編んだもので、その留守中の作は歌仙一卷（珪琳の「精出せば氷る間もなし水車」を立句とした）と短歌行六卷とで、是等七卷共に珪琳の著聞の吟を立句とし、短歌行六卷の方は六人がそれ〴〵脇句から獨吟で卷いてゐるものである。その六卷は冬一卷・春二卷・夏一卷・秋二卷になつてゐて、秋の季の卷も秋以外の季の卷も見られるので、支考案出の二樣の式との關係を見るに好都合なのであるが、云ふまでもなく秋の卷と秋以外の卷とに於て二樣の式がその儘使ひ分けられ守られてゐるのである。麥阿關係の方のものは、沼津の石矢の『雨の日數』の中に秋瓜發句・石矢脇の十二吟二折の短歌行一卷があつて、夏の季の卷であるが、定座は勿論例の通りである。黑露には當年の駿河旅行の紀行『有渡日記』が成つてゐて、この中に、黑露が駿府で珪琳と邂逅した時に成つた五吟の夏の短歌行一卷、それとは別に黑露送別の六吟の秋の短歌行一卷、黑露が駿河旅行から江戸へ立寄つて甲府へ歸る時に成つた麥阿・黑露兩吟の冬の短歌行一卷の三卷があるのであるが、この中秋の卷と秋以外の卷とに於て二樣の式の使ひ分けられてゐることは云ふまでもない。次に烏醉の元文五年相模行の收穫の集『冬野あそび』に二折卷き繼ぎの十吟の冬の短歌行一卷が見えるが、これも定座は固より例の通りのものである。同年に宗瑞も信濃行をやつてゐて、その紀行『なゝやどり』が成つて居り、その中に夏の短歌行が三卷見えるのであるが、これも定座は例の通りのものである。以上享保・元文頃のものを擧げて見たのであるが、是等を通觀すると、江戸俳壇及びそれに交渉を持つ俳人に於て、支考の短歌行・長歌行を採用してゐるものは、美濃派と異名同

物の如き密接な關係を持つ伊勢派に止まらず、各派の俳人に渉つてゐるので、これが卷式そのものに對する批判からよりも主としてこの頃に於ける各派の俳人の雜居的な交渉關係から來てゐるものであらうと思はれるのである。

以上支考が新製と稱する短歌行・長歌行の成立と箙との關係及び長歌行と「湯桁」との關係について私見を述べて見たのであるが、材料が猶貧弱を免れぬので誤なきを保し難いけれども、大體の見當だけは間違ないかと思ふので一應述べて見たのである。識者の是正を得れば幸である。

知足の俳歴

山本平一郎

一

亀世撰「雪の旅」跋の杖流菴獨睡「習々軒蝶羽居士行實并贊」（寛保二年正月）に、

父知足齋者。遊於難波宗因之門。雖事於檀林之俳唫。後邂逅於芭蕉翁。革乎正風體哉。

とあるやうに、知足は一時は宗因の談林風にも遊び、後芭蕉の誘導を受けて、正風に歸したのであつた。同じく亀世撰「伊良古の雪」（寶暦三年刊）の半時庵淡々序にも知足を追憶して、

古人、木庵佛之子弟木泒之一居士湛然と云、后又月舟禪師に參得、雅情やみがたく杜預が一癖を欺斗、宗因が活句に遊ぶ。
又中興之誹祖芭蕉翁に夢をやぶり、

燒めしやいらこの雪に崩れけん

といつてゐる。かやうに知足は佛門に歸依して、黄檗山木庵和尚から戒を受け、城州禪定寺月舟禪師に參じて血脈を申し請けた。なほ天和三年剃髪して、寂照といひ、湛然居士ともいつた。

知足は下里氏。曾祖父信種は三子に分て、桑名、鳴海、大垣に住せしめ、信種の第一子種政が鳴海の始祖、種政の第三子久宗を經て、久宗の第三子吉親が知足である。寛永十七年に生れ、幼名金三郎、金右衞門又勘兵衞といひ、寶

永元年四月十三日六十五歳を以て歿した。その子季雄は風和又は蝶羽と號し、寶永年間下鄕と改めた。その弟元雄は藏六岡（又藏六園）鐵叟、兩人とも芭蕉に教を受けた。季雄の九男昌雄が常和又如羽といひ、也有門。同じく季雄の男玄雄は蝶羅と號し、米仲又也有門。元雄の四男寛は學海と號し、大雅堂の門で、詩文俳書をよくした。その他一家累世風雅に遊んだ。この下里家は千代倉といひ、豪農で傍ら釀酒を業としてゐた。

知足は幼少の折から兩親の感化で俳諧に興味をもち、當地方に於ける俳諧の隆盛と共に、次第にその趣味を深めて行つた。寛文年間この地方に貞德の風隆盛に行はれ、中にも清水不存、池田ノ身、吉田友次は尾陽三哲といはれた。知足も友次に就いてゐたやうである。友次撰の「阿波手集」（寛文四年）に、鳴海住の下里氏吉親三句と桑名住吉親二句とが收められてゐる。後者も知足であらうか。元來下里家は前述のやうに、桑名にも分れたのであり、知足も屢々桑名へ行つたのであつた。又友次の遺稿を春流が上梓した「藪香物」（寛文十一年）にも一句入つてゐる。知足は友次の息橫船にも提撕を受けた。

貞風が漸く飽かれて談林の勃興するや、知足を中心とする鳴海衆も新風に趨せ向つた。「尾陽鳴海俳諧呼續集」上卷の序（延寶七年）に、

去年新しく仕立し三ッ物も、ことしはあかつき古めかしく、きのふはけふに替る時の花を窺はんと、三度飛脚に言傳テ、京、大坂、江戸、いせ衆のすき物に粗付はだえをさぐらせ、合點を乞得たり。

と書いてゐるやうに、鳴海衆も斬新な當流の俳諧を慕つて、急激に轉變する流行に遅れじといそしんだ。そしてその百韻を一つづつ、西鶴、保友、高政、幽山、松意、常矩など、東西談林の中心人物に點を乞ひ、評を得た。そして知足は延寶七年七月には大坂で西鶴と、京で高政と、共に俳諧をしたのであつた。

天和元年霜月の自序のある兼頼撰「熱田宮雀」には、西鶴の句や兼頼、西鶴兩吟の歌仙と共に知足は五句見られる。

かやうに鳴海衆は談林當風を仕習はうと努めたが、「きのふはけふに替る時の花」も、もはやあすの花ではなかつた。貞享二年四月四日、芭蕉は知足の親戚に當る熱田の桐葉と叩端と共に知足を訪れて、俳諧一會があつた。こゝに知足をはじめ、鳴海衆は蕉風の啓發を受けることとなつた。

二

知足は、「芭蕉翁を送る」として、

君により知る呼續のちとり哉　（冬のうちわ）

と翁の誘掖を謝してをり、貞享四年霜月廿四日附寂照宛芭蕉の書翰に、

はいかい急に風俗改り候樣に心ひかれ、御耳にさはるべき事のみ御免被成可被下候。され共風俗そろ〳〵改り候はゞ、猶路命しばらくの形見共思召可被下候。

と書いてゐる。こゝに鳴海俳風に對して己が一身を忘れてまでも、指導開發せずには居られなかつた、俳人芭蕉の悲壯な意氣と確固たる抱負とが窺はれる。芭蕉が知足亭に行脚の足をとゞめること四度の多きに及び、知足も又名古屋に逗留してゐた翁を訪れたこともあつた。「千鳥掛」の素堂序（正德二年六月）に、

鳴海のなにがし知足亭に、亡友ばせをの翁やどりけるころ翁おもへらく、此所は名護や、あつたにちかく、桑名、大垣へもまた遠からず。千鳥がけに行通ひて、殘生を送らんと、星崎の千鳥の吟も此折のことになん。

といつてゐるやうに、芭蕉もこの鳴海の、古來名所とされてゐる風光と便利な位置とを愛して、一時は終生の地とも

考へてゐたやうである。同書の蝶羽「笈銘」にも芭蕉を慕つて、

（前略）あが軒端に立寄、笈さしおろし、かうがけの紐打ときて、そこ爰の物語に日を忘れけるが、土丹生の寝覺がちなる夜の、星崎のかたに千鳥の鳴を聞て、ほくしけるを亡父なにがし感に餘り、云々。

と翁の知足亭にくつろいで、吟懷を恣にした樣を語つてをり、學海の企てになる「俳諧次韻」再刻本の紀六林跋にも、

其祖を知足といひて芭蕉翁行脚の杖をより／＼爰に駐られて莫逆の交なりとぞ。翁の笈および書畫のたぐひあまた今もこの家に秘藏し傳ふ。

といつてゐる。この翁の笈については蝶羽が「笈銘」に、翁が熱田の桐葉の許に殘して置いたのを懇望して、桐葉の歿後、それを送られたといふ由來を書いてゐる。翁の知足宛の書翰は六通の多きに及んでゐて、芭蕉と知足との親密さが知られる。その中五通は下郷家に襲藏されてゐるといふ。「合歡のいびき」跋たる蝶羅宛也有の書翰（明和六年十一月）にも、

和歌の三神はいさしらず、祖翁の靈は此家にとゞまりて守り神ともなりたまひぬらむ。

と芭蕉と下郷家との深い關係を書いてゐる。

前述の外に知足と風交のあつた人々には、梅盛門の如泉、宗因門の轍士、芭蕉の友素堂、蕉門にあつては、江戸の其角、名古屋の荷兮、越人、野水、露川、白支、新城の白雪、伊勢の涼菟、美濃の木因、如行、惟然、支考、露通、大阪の舍羅などの廣汎に亙つてゐる。

知足を中心とする鳴海衆を瞥見するに、知足の母永參の弟に當る業言は寺島伊右衛門といひ、本陣職。その分家安信（又は安宣）は嘉右衛門、脇本陣職。自笑は岡島佐助、後出羽守氏雲と改稱し、刀鍛冶、又了照と號した。如風は如

意寺六世の文英和尚、玄翁又恥心ともいつた。重辰は兒玉源右衞門、問屋職。その他近藤近利、大橋盛重、兒玉重直、富田幸秋、中村吉連、寺島安之などがある。これらの鳴海衆は知足と同じく、古風、談林、蕉風と時勢と共に流行したのであつた。

これらの鳴海衆に對して上述のやうに芭蕉は眞摯な態度で誘導してゐるが、しかしその俳諧は餘技的、獨樂的傾向を免れなかつた。知足も荷兮と交際してゐながら、元祿二年荷兮撰の「曠野」にも採錄されてをらない。元祿十一年頃から知足は荷兮、露川などと頻繁な交際をしたのではあつたが、元祿初年までの當地方蕉門全盛期に於ける蕉風開發の中心活動に親しく參加してゐない。芭蕉は貞享三年極月一日附寂照宛の書翰に、

一短尺十三枚其後戸田左門殿ゟ之便リニ七左衞門殿迄賴又ゝ進し候。猶追ゝ力次第ニ賴候而上せ可申候間、老養御樂ミ可被成候。

と短冊に對してではあるが、「老養御樂ミ」とせよといつてゐる。知足の俳諧には曲水宛芭蕉の「三等之文」にある中等の風雅の道筋を思はせるものがあつた。知足は富裕な、有閑的地位にあつて、佛門に歸依し、文藝に遊んだ。彼は楞嚴經や「徒然草」の講義をそれぞれ數回に亙つて聞きに行くだけの素養を心懸けてをり、「伊勢物語」をふんで句作もしてゐる。

鳴海は古來尾張の名所であり、東海の要路に當り、中心勢圏との接觸も豐かで、廣く東西一流大家との風交が頻りであつた。そして俳諧の流行に眞摯な態度を以て順應して行つた。しかし尾張俳人の通性でもあるが、知足も芭蕉との交際が元祿初年から少くなり、その俳風は蕉風の進展に追隨し得なくなつたやうである。殊に芭蕉歿後は、かるみの流行や惟然風に誘はれて、口語調を弄び、平俗低調に流れ、言語の洒落に奔つて、川柳的傾向のものさへある。こ

れは彼が惠まれた境遇と餘技的態度のため、遊戯的文藝觀を脱することができなかつたからでもあらう。

しかしこの鳴海俳諧によつて、古風、談林、蕉風と變遷した俳風や俳壇の一斑を窺ひ、夙に俳諧が甚だ盛で、蕉風開發の地となつた尾張俳諧史の一面を察することができる。こゝに知足を中心とする鳴海俳諧の俳諧史上の意義を見る。この小論に於ては知足の風雅の生涯、特に風交生活を主として紙幅の許すかぎり見ようと思ふ。

三

知足の最も早期の句は八高下鄕文庫の寛文癸卯正月附知足寫本「歳旦帖」に見える。寛文三年の歳旦で

うそ次郎あけてさふらふよ太郎月

みすあけて來るや手飼のとらの春

書初をするや手つかの太郎月

の三句が吉親の名で出てゐる。これらの句は京の貞室、季吟、立圃、江戸の卜養、未得、玄札、名古屋の友次など貞門の大家と並べて書いてゐて、懸詞や緣語を弄ぶのを事とし、單調な形式主義に墮してゐる貞風である。同三年には桑名吉親の三句があるが、やはり知足であらうか。同四年には鳴海下里勘兵衛吉親の名で一句見え、なほ天和三年まで毎年の歳旦が見られる。知足は寛文八年頃から屢〻如意寺などで鳴海衆や熱田衆と俳諧の會をした。

寛文年間から天和年間へかけての知足の俳諧活動は既に略述したが、そこに見た「鳴海俳諧呼續集」は吉親の延寶七年の歳旦「抑是は天下脇也お國の春」を立句とする西鶴合點の百韻を卷頭としてできた。同書に見る西鶴の「當世風のたゞ中、珍重〳〵。」幽山の「感與無比類。」松意の「珍重感心仕。」などの評は、奬勵のための過賞とするも、鳴海衆の、當風に憧れ、その特徴たる、素材、用語の新奇と作意の奇拔とを索めんとした熱意は窺はれる。

延寶八、九年の「尾陽鳴海歳旦三ツ物」が名古屋本町拾丁目板木屋平兵衛から刊行された。

延寶八庚申歳旦

凡おもつて見れば當流の歳旦や神代の歌　下里吉親
板木すなをにして餝る松竹　業言
ふしなしの櫻は花に似せもなし　如風

の類である。この發句にも當時隆盛を誇つた談林に對する謳歌と、流行した字餘りの破調を見る。そして全篇談林調に溢れてゐる。卽ち煩瑣な式目や單調な用語の制限を脫して、眞實の生命と感情を自由に發展させようとした趣がよく現れてゐる。その六月十八日には蘭秀軒橫船へ俳諧一折の批評を求めた。延寶九酉歳旦は

大根の國のもと也民の春　下里知足
六十萬石祝ふほたはら　業言
もめん帆の雪をめくらす東風に　如風

などである。

天和二年八橋山無量寺で

その餉蕎麥切の花とほとびにけり

と「伊勢物語」をもととして吟じた。天和三年十二月二日に前日平產した知足妻が產後が惡く歿した。そして同四日に吉親は自身に剃髮して、寂照といつた。四十四歳のことである。

四

貞享二年四月四日芭蕉は熱田の桐葉や叩端を伴つて知足亭を訪れて、俳諧一會があつた。芭蕉は

杜若われに發句のおもひあり

と「伊勢物語」の「唐衣きつつ馴れにしつましあればはるぐ\来ぬる旅をしぞ思ふ」の歌をもととして、己も杜若に對して俳諧の感懐があると詠んだ。知足は

麥穂なみよるうるほひの末　（千鳥掛）

と脇をつけ、以下桐葉、叩端、業言、自笑、如風、安信、重辰で、未滿の歌仙があつた。

五日の朝に芭蕉は熱田の桐葉亭へ行つたが、江戸へ歸るため再び九日知足亭に一宿し、如意寺で、業言、安信、九右衛門などと歌仙ができた。それは知足が

夏草よ東路まどへ五三日

と別れを惜んだのに對して芭蕉が

笠もてはやす宿の卯の花　（千鳥掛）

と脇をつけたのであつた。十日に芭蕉は江戸に下つた。

この時から、知足、如風をはじめとして鳴海衆はみな芭蕉に歸依し翁を斯道の聖と仰いで蕉風俳諧に精進したのであつた。芭蕉も貞享四年霜月二十四日附知足宛の書翰にあつたやうに、熱心にこの鳴海俳諧の誘披指導に當つた。この時の俳諧がそれ以前の鳴海俳諧に較べて急激な進展を見せてゐる。それは外面的光彩から內面的本質に深化したのであつた。これを見ても芭蕉の感化が大きく、鳴海衆の覺醒が甚しかつたことを知る。

貞享三年閏三月廿三日に、芭蕉の書狀をもつて、宗波、鐵道の兩僧が知足亭に來て泊つた。その書翰は十六日附で、

一通には、

内々頃日者上京可致覺悟ニ御座候へ共何角障事共心にまかせず候而、いまだ在庵罷在候。夏の中ニハ登可申候間、其節立寄可得御意候。

とある。かやうに芭蕉はこの陽春上方へ行脚する豫定であつたが、病氣のためにできなかつた。芭蕉はその文につゞいて知足から頼まれた短冊の延引を詫びてゐる。他の一通には、芭蕉と同庵のこの二僧の上京修業の途次に於ける、二三日の逗留休息を依賴したのであつた。兩僧は廿四、五の兩日は足が痛んで逗留し、廿六日に出立したのであつた。なほ芭蕉から兩僧を長壽寺大休和尚に紹介することを頼まれたのであるが、この時は兩僧の足痛のためか、尋ねなかつたやうであるが、兩僧が五月三日に上方からの歸途、知足亭に泊つた際、同道して長壽寺へ行つた。

十二月一日には「世の塵や松へと積る年の暮」の吟があつたが、同日附知足宛の芭蕉書翰に、知足から送られた二本の宮重大根の禮を述べ、

當夏秋之比上ッ可申覺悟ニ御座候へ共、何角心中障る事共出來延引、浮生餘り自由さに心變樣々難定候。

つゞいて、依賴の短冊を桐葉まで屆けたから、老養の樂しみとせよといひ、終りに桐葉、如風をなつかしんで、その無音を詫びてゐる。

五

貞享四年十一月四日芭蕉が江戸から來て泊つた。この頃の日記は「合歡のいびき」に蝶羅が、下郷家襲藏の「日記」から引用してゐる。但し「日記」に伊右、根古屋加右、出羽左助、七左などとある鳴海衆の名を、業言、安信、出羽守自笑、桐葉などそれぞれと書き換へてゐる。五日業言方で俳諧興行があつて、

京まではまだなかぞらや雪の雲　　芭蕉
　千鳥しばなく此海の月　　業言
小蛤ふめどたまらず袖ひぢて　　知足(千鳥掛)

以下如風、安信、自笑、重辰の七吟歌仙が成つた。六日は如意寺で俳諧があり、

めづらしや落葉のころの翁草　　如風

を立句として歌仙ができた。(「千鳥掛」に表六句、「冬のうちわ」には歌仙一卷)七日には根古屋安信方で又夜までかゝつて歌仙があつた。發句は

星崎の闇を見よとや鳴千鳥　　芭蕉(千鳥掛)

かやうに今日まで三歌仙ができた。芭蕉は八日に一旦熱田へ行つたが、三河伊羅古崎に閑居してゐた杜國を訪ふために、越人を案内にして、九日夜知足亭に來て、十日朝三州へ出掛けた。そして十六日芭蕉と越人は三河から知足亭に歸つて來て泊つた。この時知足は芭蕉をねぎらつて、

燒飯や伊良古の雪にくづれけん　　知足
　砂さむかりし我あしの跡　　芭蕉
松をぬく力に君が子日(ねのひ)して　　越人(千鳥掛)

以下表五句があつた。

置炭や更に旅ともおもはれず　　越人
　雪をもてなす夜すがらの松　　知足

海士の子が鯨を告る貝吹て　芭蕉(千鳥掛)

以下表六句もこの頃の吟であらう。十七日には笠寺奉納俳諧を知足亭で翁と、知足、業言、如風、重辰、安信、自笑の連衆七人でした。

笠寺やもらぬ窟も春の雨　芭蕉桃青
旅寝を起すはなの鐘撞　知足

以下歌仙が成つた。しかしこの發句は春季で、當時の吟としては季が合はない。そして寂照宛の芭蕉書翰にこの句を書き送つてゐる。これはこの四年の春に送つたものであらう。知足は今又親しく翁を迎へたので、脇起の形で奉納歌仙を催したのであらう。十八日は名古屋から荷兮、野水が翁の見舞に來た。そば切を打つて、

幾落葉それほど袖もほころびず　荷兮

と芭蕉の伊良古の旅のうさを勞つたのに對して、

旅寝の霜を見するあかゞり　芭蕉

と答へたそれ以下、

今朝の月替る小荷馱に鞭當て　知足
里の踊に野菊折ける　野水(千鳥掛)

の四句ができた。野水の「夢に見し羽織は綿の入りにけり」(曠野)もこの時の吟であらう。十九日には知足は芭蕉と同道して長壽院へ參詣、廿日にも晝夜に亙つて、自笑方で俳諧があつた。

面白し雪にやならん冬の雨　芭蕉

氷をたゝく田井の大鷺　　自笑

船繋ぐ岸の三股荻かれて　　知足（千鳥掛）

二十一日には芭蕉は熱田の桐葉の所へ赴いた。知足は廿四日末子三郎左衛門を熱田の翁へ遣したので、芭蕉は知足へ手紙を託して、

今日は若御出可成かと御亭主共ニ相待居候處御残多義ニ御座候。先以此度者緩ゞ滯留、さまぐ御懇情御馳走難申盡候。

と禮を述べ、つゞいて前述した、一身を捨てての俳風革新の意氣込を語つてゐる。知足はこの手紙を見て、翌廿五日には自ら翁を見舞つたのであつた。

六

貞享五年七月七日の朝芭蕉は名古屋から今朝知足亭に來て、翌八日から連日鳴海衆と俳諧を興行した。八日は知足亭で、九日は安信方で、十日は問屋重辰方で行はれた。十一日は祭禮で桃青と同道で參拜した。この日芭蕉は

夕顔や秋はいろ〳〵のふくべかな

を吟じた。十二、十三日も知足亭で俳諧があつて、十三日には、

初秋は海やら田やらみどりかな　　はせを

乘行馬の口とむる月　　重辰

藁庇霧ほのくらく茶を酌て　　知足（幽蘭集）

以下如風、安信、自笑で六吟歌仙ができた。（發句の右傍に、「はつ秋や海も青田のひとみどりと後に改。」と註してゐる。）この時知足の弟の新宅を賀して、

よき家や雀よろこぶ背戸の粟　芭蕉
　蒜にみゆる野菊苅萱　知足
投渡す岨の編橋霧こめて　安信（千鳥掛）

以下表六句ができた。「記念題」（元祿元年）に、發句と脇は略〻これと同じで、第三を露川が附けた表三句を載せてゐる。前の連句と同じ時に露川に第三を詠み直させたか、又は別に露川が一座したか明瞭でない。そして十四日に芭蕉は名古屋へ馬で行つた。廿五日に知足の末子三郎左衛門が名古屋へ行つて、芭蕉にも立寄つた。翌八月六日知足は下男三平を熱田の桐葉へ遣したが、既に翁は名古屋へ歸つたといふことであつた。

九月十七日には其角が知足亭を訪ふて、

宵闇や霧のけしきに鳴海かた　其角
　旅路かさなる雁の高聲　知足
闔風の色吹越る山見えて　業言（冬のうちわ）

といふ蕉風の香り高い佳吟があつた。その晩其角は名古屋の荷兮方へ行つた。又十一月四日には其角が江戸へ下つた。

元祿二年九月一日の知足の吟「幾夜ふる梢の秋の霜赤し」は、寫實から更に深まつて、物の本質に觸れようとしてゐる。

七

元祿六年から九年までの歳旦帖は、下郷家藏寫本「初懷紙」に見える。その中に、

新畑や麥見違る春の雨　知足

塔たつ萱のほろ苦い味　　安信

朝霞手たゝき水は奇麗にて　　自笑

のやうな、さらりとして、しかも匂ひ深き作品を見る。

元祿七年五月廿二日に、芭蕉は上京の途次、知足亭に久しぶりに立寄つて、名古屋に向つた。翌廿三日に知足は名古屋に行き、芭蕉を京町備前屋忠三郎方に見舞つたと、「日記」に見える。京町備前屋忠三郎とは誰か、明瞭でないが、大和町備前屋佐次右衞門といつた野水ではなからうか。大和町は今は茶屋町に併合せられたが、京町通りである。たゞ忠三郎といふ名が確かでないが、この時芭蕉が野水の新宅を訪うて、

涼しさを飛驒のたくみが指圖哉　　（陸奥衞）

と賀してゐるので、この備前屋は野水ではないかと思ふ。

その十月十二日芭蕉が大阪で逝つたので、知足は十一月十二日に、芭蕉翁追善のため如風を齋に呼んだ。そして業言方で俳諧一折があつて、知足は

今朝の雪や此頃見たる夜半の夢

と悼んだ。十五日には芭蕉翁追善の發句十句を京へ遣した。

元祿八年の芭蕉翁一回忌には、

けふにあたる時雨悲しや晝眠り
かくも宜ふ霜の下草　　（冬のうちは）

以下獨吟歌仙があつた。又次の追善歌仙があつて、

さうあつたかうあつた物を枯尾花　知足
跡なき霜に虫の細聲　業言（初懐紙）

漸くかるみの流行に乘つて、やゝもすると平板俗調に陷る傾きが窺はれる。

元祿九年三回忌夜會歌仙もあつたが、その發句と脇とは前述の一回忌獨吟歌仙のとはよく似てゐる。

みとせ立時雨つらしや晝眠る　知足
かうもいはれし霜の下草　業言

この元祿九年冬橫船が歿したので、知足は、

その箬とおもへどぬるゝ時雨哉　（小弓俳諧集）

と追悼の句を捧げた。同十年には擧白堂撰「眞木柱」（閏二月）に三句、北枝撰「喪の名殘」上に一句入集してゐる。その十一月九日には名古屋に行き、如行や露川へ見舞つた。翌十一年の歲旦「正月や米の貌見る畑所」を荷兮方へ、「金がかねの子を生世也としの暮」「年德や手廣い神の御內證」の二句を露川方へそれぞれ遣した。川柳にも見まがふ平俗低調である。

同十一年二月廿七日の晝名古屋禪芳寺東推と露川が來て、夜までで二歌仙できた。翌廿八日も明忠院で歌仙があつて、四つ過に東推、露川は歸つた。露川の「その日には覗とゞかぬ木の芽かな」（千鳥掛）もこの時の吟であらう。四月六日は新城の白雪が來て發句「寂しさの麥吹く風や鳴海瀉」と吟じたので、知足は「見よ明やすき七浦の月」と脇をつけた。同四月跋の松星、夾始撰「記念題」に二句入つてゐる。九月五日には荷兮が來て、連日鳴海衆俳諧があつて、八日の晝荷兮は歸つた。十七日の晩には高畑長休寺白支が來て泊り、俳諧があつた。又翌十八日は兩人とも業言

方の日待で行き俳諧があつた。十月三日には名古屋露川方で東推などと、翌四日は如行方で露通と俳諧をした。後の日のものは

腰かけて四方山を聞時雨哉　　知足
十月頃か旅の暇あい　　露通

第三は如行がつけた。以下紙幅も迫つたから、知足の重な風交や動靜を抄出するにとめよう。

その十月七日、路通は知足亭に來て、連日俳諧があり、十一日夜芭蕉翁五年忌の一會があつた。同十二年三月九日伊勢參宮に行き、十一日に支考と團友とへ立寄る。五月十六日には支考、東推が來て、連日俳諧があり、十九日の昼過、支考を熱田へ駕籠で送る。十月十二日芭蕉翁六年忌を催し、二歌仙できた。

元祿十三年正月廿、廿一の兩日には來訪した白支と俳諧があつた。五月廿五日三州から惟然坊が來て、廿七日に名古屋へ行く。十月十二日芭蕉翁七年忌の夜會。同十四年十一月十五日京の轍士が來て、一歌仙興行、十七日轍士と歳旦三物を談合、十八日轍士を宮へ駕籠で送る。同十五年十月一日舍羅逗留、俳諧があり、六日舍羅を知立まで送る。同十六年十月十五日芭蕉翁忌の夜會。十月廿二日團友、露川、如瓶が來て俳諧があり、翌日露川、如瓶は歸り、廿四日團友と同道で、業言の振舞に行き、一歌仙興行。同十七年二月八日惟然逗留、連日俳諧があつて、十二日惟然は名古屋へ行く。二月十四日羽州松ケ崎柳舟下向の途次立寄る。三月三十日寶永と改元。四月七日夜素堂が江戸から來て逗留、連日俳諧があり、十二日素堂は桑名へ向つたので、熱田まで駕籠で送つた。餞別の吟は、

此名残古郷も遠し時鳥　　素堂
一つはなせば明やすき月　　知足」

行先や戀にして居る時鳥　知足

花もないのにはやす浮艸　素堂

かやうに素堂と風雅に遊んでゐた知足は、翌十三日に樂な往生を遂げたのであつた。

尾張は俳諧革新の機運に乘つた芭蕉によつて蕉風發祥の地となつた。しかるに知足を中心とする鳴海俳人達はその蕉風樹立に積極的に參與せず、たゞ蕉風發展の援助をしたに過ぎなかつた。知足は富裕な境遇にあつて家業を怠らず、その餘暇に俳諧を趣味として樂しんだ。知足は彼と風交があつた三河の白雪と、その地方の名家たる境遇、餘技的俳諧觀、俳壇的活動の傾向などに於て、それぞれ近似する傾向が多い。この兩者を較ぶれば白雪の方が、俳諧創作や俳書撰集に於て一段と優れてゐたやうであるが、知足は芭蕉との風交に於て白雪よりも一層深いものがあり、芭蕉直指の門人として相當の勢力を持つてゐた。

かくして知足は俳諧に對して遊戲的文藝觀を脱し得ず、彼の俳諧にはその底に微溫的、消極的の興趣性が漂うてゐた。彼の作品の中にも、芭蕉の誘掖指導によつて「千鳥掛」などに、眞摯に藝術の本質を索める俳風を見る。けれども知足の晩年に至れば惟然や路通に化せられて平板卑俗の低調に流れ、川柳、雜俳と見まがふものも多かつた。

知足をはじめ鳴海衆は古風、談林、蕉風の變遷と共に展開を續け、常に俳壇の中心勢圈との接觸も豐かで、俳風流行の順應に精進し、俳諧の發展に盡力した。特に芭蕉と深い交渉を持つて、その懇篤な啓發を受けた。それゆゑこの知足を中心とする鳴海俳諧は蕉風發展の運動を知るに重要であり、又尾張俳諧の一分野として相當の價値を持つのである。

麥水の俳論

各務虎雄

一

麥水の俳論の基調をなすものは、蕪村その他の天明諸家と同様、芭蕉にかへれといふ思想であつた。蓋し、當時の俳壇の實情が、芭蕉の眞髓に遠ざかつてゐると觀じたがためで、そのことは、

今や蕉門の俳風扶桑に滿ち、其徒其風と稱する家、よし野の花の多きながら、有磯の月のきよくもうつらずや。半は他門の俳風に混じて、耳に留る句なき事久し。頃年日々に出る俳集を見るに、蕉翁の古雅糸すぢの如くも殘りたるは、百にして二三而已。多くは俗作卑風の拙きにあやまたる。（俳諧蒙求序）

とか、

今や蕉門の輩、他の俗俳の卑集に馴れ、耳ぢかき理作に驚いて、我しらず他門に落つる者多し。（俳諧蒙求）

などと、芭蕉の風韻の漸く失はれ、蕉門の輩の徒らに他門に落ちてゆくのを慨いてゐるのによつて明らかであつた、それが、何れの風、何れの作を對象としていふものであるかは的確でない。けれども、其角並びにその一派に卑情俗戲の作の多いことを指摘して、「蕉門亂れて色々に雜俳の起る事、爰に權輿すと言ふ」（俳諧蒙求）所以に觸れ、麥林が「只一句の上の作に遊び、終に貞德の俗風と混じて、蕉翁の句を窺ふ事もなく、世俗の人の耳を悅ばす」（山中

夜話）ことのみを心としたのを難じたのであつた。のみならず、支考に就いても、「理作に勸むる事多く、或は三疋猿・新百韻等の卑作に荷擔して、蕉翁の意味悉く脱け」（俳諧蒙求）たことを非議してゐるのである。かやうな資料による時は、麥水が當時の蕉門の徒の流弊を云爲したのは、概ね其角・麥林・支考等一派の作に關してであつたことが知られる。隨つて、麥水のいはゆる芭蕉復歸は、これら一派の風から擺脱しようとするところから出發してゐるものといはなければならぬ。

然しながら、麥水が最も排撃したのは、就中支考の徒の俳風であつた。俳壇革新に志した動機は、専らこゝに存するといふことができるであらう。換言すれば、その芭蕉復歸の主張は、麥水が支考の調の弊竇を看破したところに縁由するものであつたといへよう。新虚栗集には、麥水が始支考を仰ぎ、後麥林に從つた趣を述べた次に、

> 其後、美濃・伊勢皆卑風の吟多々なるを覺え、蕉翁の意に隔る事遠しとして、諸家の風を尋ね、つとめて東西す。

といふ。また同書に門人八水の誌したところを見ても、「支門・乙尸の卑風を破り、云々。」とある。麥水が支考・麥林を仰いだといふのは、直接その提撕を受けたのではなくして、たゞ支考・麥林の述作を通してのことであつた（山中夜話）のであるが、何れにもせよ、麥水は、當時の俳壇の主勢力の中では、特に美濃・伊勢兩派の風調を排撃したのであつた。さうして、かく支門・乙尸の俳風を排撃するところから、芭蕉の風雅の眞髓に直ちに迫らうとするに至つたものと解せられるのである。

二

麥水の標榜した芭蕉俳諧の眞髓は、虚栗・冬の日時代の風調であつた。そのことは、麥水の述作の隨所に、

> 夫蕉門の俳風は、冬の日・虚栗等の集に其道を求むべきに、捨てゝ見ざる俳家多しと覺えぬ。（俳諧蒙求）

翁の句境を見るには、虚栗・冬の日にあらざれば見得べからず。（山中夜話）

などと反復して述べられてゐて、例證に乏しくない。が、その兩集の中では、特に虛栗に多くを求めたもので、

只貞享正風を聞き給ふ間を以て其志を見るべし。夫が中に、身なし栗集、第一の高意を盡くし、云々。（貞享正風句解傳書）

といつてゐることなどに知るべく、なほ虛栗の名を繼いで新虛栗集を撰し、其角が虛栗に杜子美の貧交行の詩を戲に摸して認めた漢詩の序を更に摸した詩を收め、加ふるに、其角が虛栗の序とした句から脫胎した句を掲げ、殊にその風調が、さながら虛栗に倣つたものであつたのを以てすれば、麥水の本意が虛栗への復歸にあつたことは、十分察せられるであらう。

麥水が、數ある芭蕉の述作乃至芭蕉の關與した撰集の中、特に虛栗などを重要視したのは何故であつたか。少くも、芭蕉の俳風は、元祿期に至つて圓熟大成したと見られるにも拘らず、蕉風としてはなほ初期草創期の撰集に過ぎない虛栗などを標格と定めたのは何故であるか。この問題に關しては、貞享正風句解傳書や蕉門・夜日授の隨所に、例へば、「元祿の卷は行脚の間の吟にして、是稿中の事也。其中佳卷まゝ有りとも、未だ箕簸を用ひられずと覺え」（貞享正風句解傳書）られるものであるからといふやうな所見が遺されてゐる。が、要するに、元祿期の作品には多くの期待をかけようとしなかつたもので、それは、多く行旅の間、未練不熟の俳衆に對しての吟であつて、高骨の門下に對し、しかも箕簸を經た草創期の作とは趣を異にするもので、芭蕉の高情は十分に演べられず、芭蕉の本意は十分に成就しないものであつたからといふのである。

然しながら、これは、客觀的に妥當でなく、著しく主觀的要素の多い所說で、このまゝでは俄かに贊同し得ないものがある。隨つて、この態度を白雄に詰られて（加佐利那志）、「彼（白雄）曰、麥水貞享蕉門を天下に廣めんとすと。

又専ら虛栗集に依ると譏る。是は我兼々の願ひ也。此事他に廣めらる。眞に幸也。世人不審して取つて見れば、必ず虛栗の深理を得、貞享句風の情意を知るにいたる人出來らん。」(山中夜話）とか、「白尾坊は、予を實なし栗集にあそび、貞享蕉門と稱すと譏る。是は予が願の儘なり。此事一人にても告げ足らざるを恨とす。然ればこの譏は予が方人に似たり。」(蕉門一夜口授）とか、顧みて他をいふ以外、眞向から反駁し得なかつたのも、當然のことといはなければならぬ。けれども、虛栗に眞に多くの意義・價値を認めたのは、さうした文學的批評意識に基づく文學的意義・文學的價値の問題ではなくして、俳壇革新の標格としての價値や意義の多少を比較した結果であつた。山中夜話を見れば、元祿期の句風を必ずしも排斥したものでなく、「貞享を根とし、元祿を花とし、理は暫く新俳を導くの術」と考へてゐたことが察せられる。加ふるに、虛栗といへども、全幅的に仰いだものではなかつた。「身なし栗の集は妙處句外にあり。句格に依らずして意味を取つて學」(貞享正風句解傳書）ぶべきことを說いてゐる如く、作品としての絕對的價値よりも、むしろ句外の妙處に多大の意義を發見してゐたのにほかならなかつた。

麥水が虛栗に見出でた句外の妙處が何であるかは、直接に說明されたものがない。けれども、麥水は、

みなし栗集は奇書なり。人をして活達ならしむ。卷中に氣凱高致の吟多し。(蕉門一夜口授)

といふ。もとより、この所言は、いはゆる句外の妙處の意義を闡明したものではない。また所言そのものとしても、抽象的であり、概念的であつて、これだけでは、必ずしも學的に肯定し得るものではないであらう。が、こゝから、いはゆる句外の妙處の意義は、おぼろげにも想察することができるやうに思はれる。よしできないとするも、少くも、麥水の虛栗に傾倒した所以は、明らかであるにちがひない。畢竟するに、麥水は、虛栗が、その意想に於て、いはゆる氣凱高致なるがゆゑにこれを重く見ることになつたのである。

三

さて麥水は、當時の俳風の通弊として、卑俗・理作といふことを指摘した。本稿の始に、芭蕉の風韻の漸く失はれ、蕉門の輩の徒らに他門に陷るのを慨いてゐる一例に引用した文中、「頃年日々に出る俳集を見るに、蕉翁の古雅糸すぢの如くも殘りたるは、百にして二三而已。多くは俗作卑風の拙きにあやまたる。」(俳諧蒙求序)といひ、また「今や蕉門の輩、他の俗俳の卑集に馴れ、耳ぢかき理作に驚いて、我しらず他門に落つる者多し。」(俳諧蒙求)といふ如きはそれである。

麥水のいふ卑俗は、俗談平話を正すことを忘れたところに緣由するものであつた。元來、麥水は、俗談平話を正すといふことを以て、芭蕉の唱道にかゝるものとし、蕉風の眞意もこゝにあると解したのであつた。即ち、

我無名の俳諧は、俗談平話を正さんが爲と有る蕉翁の辭より、向上の一路に遊ぶ道を示す。正風の俳諧也。

といふ。蓋し、土芳の黑冊子に、「俳諧の益は俗語を正す也。」と芭蕉が語つたとある、その教などに基づくものである。しかも、この芭蕉の遺教の旨趣は、許六に從へば、俗語のてにはを調へることであり(篇突)、支考に從へば、言語の誤を正すといふ意味のほかに、言語の誤を正すことによつて情を正すといふ意味をも有するものとされてゐるのである(白馬奧儀解)。芭蕉の言葉が、事實その何れを意味してゐたかは明らかでなく、またこゝでこの問題を檢討しなければならぬほど切實なものもないが、麥水のいふところは、恐らくは、支考の、情を正す意味とする解釋に近いものであつて、亡名後の支考の專ら俗談卑理に陷つたことを非議し、淡々の鄭聲蕩言を難じ、この兩者の弊竇を一括して、「此兩者、皆是俗談を正すの字を忘れたる失のみ。」(蕉門一夜口授)と評してゐるのによつて、この消息は明瞭であらうと思ふ。さうして、その結果は、「俳諧はもと一作の表向きにて、諷諫談笑を以てすと云ひながら、正風の本意

は、諷諫の句に談笑の心なくとも、談笑の句に諷諫のこゝろなくんば有るべからず。」（同上）などと、俳諧を以て諷諫の具と解するほどであつた。俳諧を諷諫の具と解することは、蕉門に於ても、例へば支考の俳諧十論や白馬與儀解など、既に先蹤もあることである。敢へて俳諧と限らず、廣く國文學一般に關して見ても、かくの如き功利的思想は、古來決して珍とすべきものではなかつた。隨つて、麥水がかうした所信を懷いてゐたのも、強ち特異な事例ではないのである。しかも、わが俳諧にさうした意義をもたせ、さうした特性をもたせようとすることの可否は、時處位の遷るにつれて、必ずしも同じ結論を將來するとは限らないのであるが、それにしても、麥水の場合は、いさゝか過ぎるものがあるのではないか。が、それだけに、そこには情趣の卑俗に流れることを如何に強く排擊したかの、自ら測られるものがあるのである。

麥水が、卑俗とともに、同じく當時の俳壇の通弊として指摘したのは、理作といふことであつた。思ふに、理作とは、理知的所作といふ謂であることは勿論であるが、俳壇の通弊としていふものは、いはゆる卑理である、俗理である。これを麥水の所說に聽くと、

理作の句は、比喩によく合はせて、主意の活道を失ふ。（俳諧蒙求）

といふ。これは理作の意義を直接に表明したものではないが、飜していへば、比喩によく合せて主意の活道を失つたものが理作の句といふことになるのであるから、理作とは、內的生命の直接の發現を見ずして、知的聯關作用による比喩的な表現をすることを指すのであらうと思はれる。が、これはなほ麥水の所說の一部に過ぎないのであるから、眞實の趣意のあるところと卽斷するのは危險である。それゆゑ、更に他の所說に質ねると、

首をかたむけ燭を照らして古句の帳をかざし、一時の理作を述べんとす。誠に得がたく入り難し。而して漸に俗舌を言廻し

て同じ友の理心のものを驚かす。（同上）

ともある。かうした所說によれば、麥水のいふところが、必ずしも比喩的表現のみを指してゐるのではなくて、なほ廣く藝術的感興も感銘もなく、生命感の燃焼もなく、たゞ觀念的・思惟的に作爲するものが理作で、畢竟、その內在には、浮世の理窟以外に殆ど見るべきところがなく、單なる俗情に過ぎないものをいふのであるらしいのである。さうして、かゝる理作による句は、「機心を深く巧み、色々に作」（俳諧蒙求）ることを本意とし、濫りに人の耳目を聳動せしめ、僅かに當座の賞美にあづかることを得れば、既に目的の達成される底のものであつたと解せられる。

理作の意義が以上の如きものであつたとすれば、蓋し、かやうな作は、江戸座一派の間に多く見られたのであるから、この場合、麥水が批判の具體的・直接的對象としたのは、主としてこの江戸座關係の作品にあつたのではないかと察せられる。然しながら、このことは、單に江戸座一派の作に就いていはれたとのみも決し難いものがあるやうである。卽ちまた麥水は、美濃派乃至伊勢派に關聯して述べてもゐるのであつて、

當時の此風雅あまり渡り過ぎて、いかなるしら波の海士乙女、小湊の賣女、茶店の內儀なんどいへる輩迄、やゝもすれば、紅粉の花何とやらしてけふの月など、無情なる理作に言ひほこりて櫻木におこし、短册にひらめかす。ちと胸につかゆる心地はすれ。（俳諧蒙求）

とある如きは、正に美濃・伊勢兩派の末流に就いていふものと見るべきである。さうして、この場合の理作は、いはゆる機心を深く巧んだ句とまでいふものではなくて、風雅の眞髓に透徹することなく、俗人の俗情を理窟を以て言葉巧みにいひまはしたものといふほどの意味らしく想像される。何れにするも、麥水のいふ理作乃至理作の句とは、眞の藝術的感激によつて自らに生れ出た作でなく、俗念を藏した知的技巧によつて拵へあげたもので、たとひ藝術的感

激めいたものがあるとするも、それは風雅の本質に迫るものではなく、卑俗な趣向をめぐらして出來上つたものか、またたとひ表現に於て意識的に多くの知的技巧を弄しないとするも、猥雜卑賤な感興を句作の動機とする如きものを稱するのであつたやうである。換言すれば、何れも俗理俗念に出發するもので、その根柢は卑俗を離れぬものであつた。「みなし栗は奇書なり。人をして活達ならしむ。巻中に氣凱高致の吟多し。」(蕉門一夜口授)といつて、活達なる情趣、高致なる氣凱に傾倒した麥水であつた。その麥水にとつて、この理作といふことは、根本的に首肯し難いものであつたことは當然といふべく、隨つて、理作を忌むこと深く、「然れ共、蕉門の句風日々に理作に落つるをいたんで、みだりに我を忘れて故事をならべ、俳説をあげ、其端に翁の意を押して少しく解を施しぬ。」(俳諧蒙求)などといつて、特に俳諧蒙求を編んだほどで、これが排撃のために注いだ熱意は熾烈であつた。たゞこの理作が、俗談平話を正すことを忘れて賤陋に墮したものと異なるのは、一が主として卑俗なる情趣に趨り、一が主として卑俗なる知的興趣によつて構成されるといふ點であつたらうと思はれる。さうして、その兩者ともに、芭蕉の眞意に添ひ難いものであると麥水は見てゐたのである。

以上の如くにして、麥水は、當時の俳壇の流弊として、趣向に於て、情趣に於て、俗理卑言に終始したものの多いことを指摘し、これが風雅の本質に反する所以に觸れてゐるのである。しかも、このことが、麥水の蕉風復歸、更に適切にいへば、虚栗・冬の日、就中虚栗の風調への復歸を唱道するに至る理論的・觀念的根據をなしたのであつた。隨つて、麥水の蕉風復歸運動は、かゝる俳壇の弊竇を矯正することに多くかゝつてゐた。勢、その俳論は、この弊竇離脱の方法論的問題に及ばなければならなかつた。

四

麥水が芭蕉俳諧の骨髓と觀じ、その俳諧の指導原理としたものは、淸意味といふことであるが、これは、

深く淸意味に思ひを置かば、誠に蕉門の付句をも得べし。（俳諧蒙求）

とあつて、專ら附句に關するものであつたらしく解せられる。この淸意味とは、卑俗卑理の世界を超脫した境地を指していふものであらうと思はれ、「只心のひがみたる句を出して懷紙を汚し、衆人の心をも狂はす。かゝる人だも席にのぞむ。況んや蕉門淸意味を胸に持して、或は諷諫、或は厭世、或は慷慨、この本心をうつし出さんに、誰にかは恐るゝところならん。」（蕉門一夜口授）とか、「俳句の法もと人情に出づ。つとめて雅に處すべく、又理の衆人を離るべからず。漫に放蕩を吐き、或は空理をのべ、寶は山に捨て珠は淵に投ぐべしなんどいふを句の本心とすれば、俳句の五七五には背く事有り。取捨此間に立て、一般の淸意味を得べきにこそ。」（俳諧蒙求）などと、極めて間接ながら、これに觸れたと見られる記述もある。が、その淸意味の本質を直接闡明したものは遺されてゐない。たゞ、

おもふに、俳句の作、表に著るゝ者は一時の秀にして、後の光耀なし。淸高の志恒に胸内に伏し、悲歎久しく腹中に溢れてこそ、淸意味の一句を得るとは覺えたれ。（俳諧蒙求）

とあるのは、これも當面の問題の究明には間接的な資料に過ぎないけれども、麥水の所言の中では、比較的淸意味の本體に迫つてゐるらしく思はれるのである。隨つて、これにすがつて淸意味の性質を探つてみると、これは胸中深く藏するもので、俄かに發するものではない。純一無雜、確乎不動の境地であり、意想に於て、趣致に於て、淸朗高逸・純眞雅正の性質を有するものの謂のやうである。が、麥水のこの所言は、淸意味の直接的な闡明を目的とするものでなかつたのであるから、これ以上その實質を明確に窺ふことはできない。

麥水が淸意味を論じたのは、主として句作上の問題としてであつた。さうして、その中心命題は、淸意味の境地に

徹入すべき方途如何といふことであつた。蓋し、句作生活のためには、淸意味の本質を究明するよりも、むしろこれが實際的意義を有するからである。その意味に於て淸意味を按ずると、まづ、

思ひ入りたる作を面にあらはし盡きぬれば、つたなき情還つて淸意味となる。（俳諧蒙求）

とある。思ふに、作爲を加ふることなく、純粹感情を卒直平明に披瀝すべきことをいふものである。卽ち麥水の說く淸意味は、機心を棄て巧心を去つた淸純な境地から詠出でた時に生ずるもので、しかもさうして生じたものならば、必ずしも純粹感情の性質乃至文學的意義如何などを問題にしてはゐなかつたらしく、たゞ詠出の動機の純不純を問題にしたものと見られるのである。換言すれば、純粹感情の素直な發現と表現とが、淸意味に到る途であるといふことになるのであつて、これがまた麥水の信ずる蕉風の眞意に徹入する所以であつたのである。さうして、かやうな指導原理を懷いてゐたところに、麥水の俳論の特徵がある。のみならず、麥水は、叙上の如く精神的・抽象的方面から淸意味に到達すべき途を說くとともに、また實際的方面からこれを述べて、句作に當つて句の姿に捕はれることを排擊してゐる。

句の姿より遷らんとするが爲に、理作に走り、他門に陷る。（俳諧蒙求）

また、

詞の上より心を取るが爲に、智淺く水深し。終に理作の俗卑に落つる成るべし。（同上）

といふ如きがそれである。思ふに、心の卑俗卑理に陷る所以を、趣向を立てる場合の着眼點如何によると解してゐたのであるが、こゝに「句の姿より遷」るとか、「詞の上より心を取る」とかいふのは、もとより附句に關することで、前句の眞實の生命に觸れず、作者の生動する魂に觸れず、外形のみに心を動かされて附句の趣向を立てることを指し

たものと解せられる。元來、清意味は、「深く淸意味に思ひを置かば、誠に蕉門の付句をも得べし。」（俳諧蒙求）といふやうに、專ら附句に就いて說かれたのであるから、句作の實際問題としては、こゝに及ぶのは必然の結果であつたにちがひない。

かくて、麥水のいふ淸意味の體相は、不完全ながら、ほゞ推察することができる。さうして、それが附句に關するものであつたことも、まづ確かであるらしく思はれる。然らば、淸意味といふことは、惹いては淸意味を得るといふことは、正しく發句の場合には當嵌らないにちがひない。けれども、「俳句の法もと人情に出づ。つとめて雅に處すべく、又理の衆人を離るべからず。（中略）取捨此間に立て、一般の淸意味を得べきにこそ。」（俳諧蒙求）などとあつたことを思ひ、且發句も、その表現された折の皮相美にのみ徒らに心を奪はれ、「漫に放蕩を吐き、或は空理をのべ」（同上）ることは、やがてこの附句の案方に相當するものであることを思へば、これは附句のみでなく發句にも通ずべき問題と見るのが至當である。ともあれ、麥水の重んじたのは、形式よりも內容の整備、意想の醇雅といふ點であつたのである。

五

麥水の、右の如く、內容の整備、意想の醇雅を重んじたことが、創作理論として客觀的に妥當であつたか否かは、もとより問題の存するところであるにちがひない。けれども、當時の俳壇の實情に照らしては、かやうな一面觀に過ぎないともいひ得る指導原理を懷いたのも、止むを得なかつたと見なければならぬものがある。といふよりも、復興運動としては、これが却つて適切であつたらうとさへ考へられるほどで、

近年姿の句作風を捨て、專ら情を述る貞享の句に歸す。形を論ぜざるが爲に、てには及び字あまり等に論を加へず。只句意

悲悽にあらざれば氣凱なるを愛す。依つて虚栗集を用ふ。(山中夜話)

といつて、姿よりも情に重きをおいたのも、麥水として恐らく當然の歸結であつた。隨つて、なほ隨所にこの精神を擴充して、「詞よく、時節よく、句作よく、皆調ひても、神を失うて句にならざるもの多し。翁の吟詠句ごとによく魂そなはれり。爰を見付けて味ふべし。」(俳諧蒙求)といひ、「翁の道は意也。形に預らず。」(蕉門一夜口授)といふなど、努めて表現技巧・表現樣式等の問題を輕く扱はうとしてゐるのである。たゞしかし麥水も、かうした情のみに賴ることを、必ずしも是としたのではなかつた。

予が好む所、冬の日集の姿を以て調へ、虚栗集の意氣を用ひて、只俳風の俗理卑言に落入らん事を恐れて也。(山中夜話)

とあるのは、これを證するものといはなければならぬ。

かくて、麥水は、姿よりも情を重んずる指導原理を樹立し、これを根柢として、貞享の芭蕉俳諧を標格として俳壇革新に邁進しようとしたのであつた。「我門の句々、むづかしきは、皆術拙きの故也。しかれども、蕉風正意を得るには、爰にあらずしては入り難しと覺ゆ。されども、やすきより入り、忽ち手づかみにする生知の人有るまじきにはあらず。我は如レ此むづかしきより入つて貞享の源をたづね、やすきにぬけて遊ばんとす。夫かろきにいたる日、いづれの年にか有るべしと思ふ。」(山中夜話)といふほどに、眞の俳諧の理想としては、つひに芭蕉晩年の輕みに卽くべきことを思ひながら、革新の目標としては、完成したものよりも未完成の、殊に草創期の潑剌たる氣凱あるものに依據したのであつた。畢竟、麥水の指導原理は、俳壇の實情に立脚した對症的な指導原理であつて、俳諧文學としての窮極の標的を指示したものではなかつたのである。

廣島の俳人風律

高本千鷹

今より三十餘年も前のことです。廣島で初めて先生のお宅に伺つて、去來抄についてのお話を承つたことがありました。それまで私は俳句について、作法や、解釋の書を濫讀したことはありましたが、批評、鑑賞について、高い所からの教を受けたことは、これが初めてでありました。その後先生のお伴をして、京都に遊び、落柿舍を訪ねて、嵯峨の野路を歩きながら、去來の俳諧生活について、いろ〳〵のお話を伺つて居るうちに、自分が去來と生國を同じくして居ることに氣付き、それから何となく去來をなつかしみ、俳句に興味を覺えるやうになりましたが、さりとて俳文學に足を踏み入れるでもなく、漫然と十年の月日を送つてしまひました。或夏、ふとしたことから廣島の俳人風律の癖物語をよみ、風律が去來の風格を慕つて居たことを知つて、更に風律に親しみをもち、癖物語や、紙魚日記をくり返し讀んで見ましたが、それも又それきりで、朝鮮に渡つてしまひました。歲月は空しく流れて、それから殆ど二十年になります。溫突の夜更けて閑なるあまりには去來抄を繙いて、せめて雜務の煩累から脫れ、先生から賜はつた御指導の第一印象に、愉悅の情を遣ることとしてゐます。此度、記念論文集出版の擧あるについて、學究生活から全く離れた私には、論文らしいものの出來やうもありませぬが、私の第二の故鄕廣島、去來、風律といふ連鎖をたどつてものしたこの拙い稿をその中に收めて頂き、先生に對する抑へ難い思慕の情をのべる一端といたします。

風律の閱歷は一般にはあまり多く知られてゐないやうであります。日本文學大辭典に收められた芭蕉堂所在の野坡

の像には「ほの〳〵と鴉くろむや窓の春」と野坡の句を書いた風律の筆蹟も見られ、又風律は大阪の梅從、筑前の浮風、豐後の馬貞と共に野坡の四弟子と呼ばれたことなどが記されてあり、當時關西の俳人として、野坡流の俳壇にあつては聲望共に高かつたやうに見えてゐますが、俳林小傳に「野坡門人、天明二年壬寅年六十五にて死す」とあるのが本となつたらしく、近頃の出版物（人名辭書、俳諧年表等）には歿年を六十五としてあります。小傳はどうしてこんな誤を傳へたものか廣島教傳寺の翁の墓石に天明元年、行年八十四とあるのを正しとせねばなりませぬ。

風律は通稱木地屋彥兵衞、廣島市鹽屋町に住み、家世々木地物商で富裕な商賈であつたと傳へられてゐます。天明元年四月二十九日八十四歲で歿しましたから、生れは元祿十一年（去來五十六、露川三十八、野坡三十六、支考三十四）であります。風律自記の癖物語によれば少年の頃から、京都の吾仲へ發句を送つて添削を受け、後又吾仲を介して、支考に發句、俳文等の教を請ひ、其後尾張の露川の新式名目傳を豐前の吾竹から受けたといつてゐます。そしてその頃の廣島の俳諧は凉菟、支考などから傳へた人もあつたが、吾竹が來てから、何れも俳諧に道筋のあることを知り自分も亦宇鹿、露川の說であつたが、後野坡に師事したとかいてゐます。露川が西國廻國をしたことを癖物語には、「露川は西國下向の頃大阪より長崎まで誓戒といふことをして門人數多出來て宗匠とす云々」といひ「余若年にして每座か〻さずして指南を受く」といつてゐますが、これは享保の初め頃と思ひますし、又吾竹が廣島に來た時の口授を筆記したものの寫本に享保六年と記したものがありますから風律が露川の說を學んだのは享保初年から六年の間と考へて大差はありますまい。享保六年風律は二十四歲ですから、風律が露川說を學んだ年の頃は、略〻推知することが出來ます。この事を

そのこと（露川說を學んだ事）を吾仲、支考へ申遣はす、其返書に露川付合或は新式等の誤をかきつけて送らる、其比幸に

野坡下向の時にて則野坡にも一覽に及けるなり

と記し又「野坡三度下向なり」とありますが、これは野坡の何囘目の下向の時でありませうか。

かんこ鳥（風律百五十囘忌に方り刊行された風律の句、文集）には

野坡西遊して廣島に杖を留め五日市の秋草庵に風月を弄び殊に小富士の景を眺めて小富士亭と呼ぶ。當時從ひ學ぶもの多かりしが、風律齡弱冠その門にあつて嶄然頭角をあらはし、野坡をわが廣瀨村の別邸に招いて野坡庵を開く、後多賀庵と改めしはこれなり

といふ意の記事がありますから、二十二・三歳の頃は已に俳諧の修業に就いてゐたことは明らかであります。

以上ところ〲に名を引き出しました癖物語（風律晩年の作と思はれますが、所作の年代は明らかでありませぬ）は、その序に

我々に問うて曰く、われに俳諧のくせありゆるすべしや、われわれに答へて曰く、ゆるし申すべし、よつてくせ物語三卷を書てわれにあたふ

とあるやうに、俳諧に關する自己の所見をまとめたもので修の一、論の二、源の三の三卷から成つてゐます。

修の一には修行即俳諧について習得すべき心得、法式等を主とし

初心俳諧の仕やうはまづ發句を數多すべきなり。句數少きときさま〲の習事すれば口解けずして遂に止むに至る。又發句數少くて年を經れば心功者になりて術叶はず。それゆゑ人の難にはやく目移りて、とやかく批判のみに暮れて自分の俳諧心の通りならぬ故、これ又遂に止るなり。まづ發句數多して口を解し、さて稽古すべきなり、修行は術なり、稽古は習事なり。

を始めとして

初心の俳諧に三病あり。曰く理窟、動、てにはの誤これなり。俳諧に新古の別あり、貞德宗因までのは古にして、芭蕉已來のは新なり。新風體に又新古あり。人のいひ古したるは古なり、人の心つかぬ趣向は新なり。發句平句共に趣向と句作りと二つなり。下手は趣向の善悪をしらぬ故よき趣向を案し出ても句作りにからまれて、いりほかになりて聞えず、残念なり。よく聞えて面白き句は皆趣向のよきと知るべし。聞えぬ句に五品あり。一には句作りにからまれて、いりほかになり、趣向と句作りと銘々になりて聞えず。二には趣向に無理ありて聞えず。三には云足らぬ句あり。四には一言先を言ひたる句あり。五にはてにはの誤なり。つよき詞にて句を作らば五七五ともに强かるべし、艶なる詞にて句を作らば五七五ともにみな艶なるべし。其角が「老僧の竹の子をかむ涙かな」は强き句にして、野坡の「ほの〴〵と鴉くろむや窓の春」は艶なる句の例なり。發句は繪に書きて見るべし、姿ある句は繪に書ても面白きなり、姿無き句は繪にかゝれず。正風體は大概四つを備ふ。風情、風姿、曲、節なり。風情とは句意に風雅の情あり。風姿とは姿に風雅の姿あり、むかしの句には姿なきなり。曲とは俳諧なり。節とは季節動かぬなり。

といふやうなことから切字、てには、百韻、付合のことなど凡て五十三條をあげ

論の二にはまぢ俳諧の本意は志を述ぶるなりと喝破して、或書に無常述懷をのぶるが俳諧の本意なりとし、又宗養が飛花、落葉を見ては眞如實相を觀じ、春秋の移るには有爲轉變の理をかなしむといふやうなことを俳諧の本旨の如く述べて居るのは妄説で、殊に六義を六道輪廻に附會するなどは夢にも當らぬ事である。源心僧都が和歌は佛道に叶ふよしを說き、慈鎭和尙がわれにはゆるせ敷島の道と詠んだのは、佛者の立場から、歌、俳諧の道も佛道に合ふと說いたので、歌、俳の本旨を說いたものではない。俳諧を大道といふ人があり、小徑といふ人があるが、大道といふ人は大道と心得て遊び、小徑といふ人は小徑と心得て遊ぶので風雅には大小の別はない。又芭蕉流の俳諧は隱逸の心あり

とか、莊子の意ありとかいふものがあるが、翁は隱遯して庵を結び、或は諸國を歷遊してゐたから隱閑の句をよみ、又好んで莊子を讀んだから、その句に莊子の氣象が出るのである。これが所謂好む所の志を述べるものであつて、莊子の趣意が俳諧の本旨といふべきではない。俳諧の本旨は風雅であつて、風雅は偏執なきものであるから、隱を好む人は隱閑の趣をのべ、市朝に立つ人は市朝の趣を述べる。恰も杜子美は李白が隱逸をなす能はず、大白は子美が沈欝をなす能はざるやうなものである。氣象卑しき人は利の爲にし、名の爲にし、或は俗意を以てし、眞の風雅の意がないから、時にはよき句もあるけれども、その源を知らぬ悲しさには、時々その弊があらはれる。宜しく我をすて俗意を離れて學ぶべきである。頓阿があたらしき心を、やすらかに、こと〱しくなくて、うつくしくつゞくべし云々、俊惠が五尺のあやめに水をふきかけたやうに和歌はよむべし云々といつたが俳諧の正風體もかゝることで、芭蕉が柴門辭に古人のあとを求めず、古人の求めたる所を求めよと書いたやうに、構へて師のまねをすべからず。これがその本意である。といふやうなことを述べ、

源の三には俳諧の本質に關すること十二條をあげてありますが、大要は風雅論と俳諧の源流とであります。曰く。風雅とは世上の理窟をぬきにして、まじりなき人情の詞にあらはれたもので、やさしき詞、をさなき心ともいふべく、貴賤の別なきものである。風雅とは胸中の俗塵を拂ひ、欝結を開くことで、契沖が儒教を習ひ佛典を學ぶも詩歌に携らぬ人は胸中終に塵俗を拂ふを得ずといつたのは卽ちこの心である。

芭蕉以前の俳諧は俳諧を以てその體としたが、芭蕉は風雅を俳諧の體とした。されば當流の俳諧は風雅を大本とし先途とするから、詩歌とその趣は異らぬが、たゞ詩歌は雅言を主とし俳諧は平話を尊ぶのである。又發句は五字かし字で詩や歌の一首の役をつとめるが、それはてにはの働であるから、てにはがよくまはらなければ文字が動かず、稽

古、修行を重ねた隨分功者なものでも、詩やら、歌やら、何やらしれぬものを言ふやうになる、と述べてゐます。

芭蕉の歿後、蕉門の誰彼が諸國に陣を張つて、翁の俳風を祖述し、所謂正風が東西に流布波及した代りに、その幽玄な眞髓は失はれて、平凡卑俗に墜ちた譯で、殊に露川、支考などの形式論が盛に唱へられて、祕事口傳が漸く勢を得るやうになつた頃の俳諧はこぢつけの議論や理窟にしばられて、文學的生命を失はうとして來たのでありませう。當時廣島に於ける俳諧は專ら露川、宇鹿、吾竹などの說であつたといふのに、風律が以上辯物語にのべて居る俳諧說は、これら傳授口傳の形式から、解放されたよほど自由なところがあることを認めねばなりませぬ。

次に俳諧の形式について風律の所說の一端をあげますと、露川が誓戒を以て廣島に傳授したといふ新式名目は、誹諧を滑稽といふ事、誹諧を徘諧といふ事、誹諧式の事、面八句の事、巻四折と分る事、發句の事、脇の事五體、第三の事、留りの事、月の事、花の事、四季、本式表、雜の發句、戀の句、不易流行、當流八體句作、當流八體付方、五ケ付所の事、賦物の事、執筆の事等で、これに吾竹の注がついて居ますが、風律は、

付合の沙汰古風は論せず、變風の後支考七名八體を作る。露川八體五ケ附方を作る。許六付合の論あり。宇鹿十四體を作る。路通三十品みな變風已後なり。路通三十品はまぎらはしきなり。許六さのみ名目も立てず。支考、露川、宇鹿作る所の名目みなあれこれの撰集よりぬき出したり。是句成つて後名目を付けたる物なり。其後其教を聞く人此所は觀相爰にては其人其場と心にもちて句を作るゆゑ付合の勘辯になるなり、初學の手引にしたるなり、付合手に入たる作者は法度、格式思ひ出さざれども句作自由にて面白きは修行の功なり。畢竟付合に名を付ることははつとしたるものをちいさくして案する故案する一術なり、惡しきとは定むべからず。近比江府より出たる書に付合は古來より格式有として支考を難ず、支考は變風の作者なり、なんぞ古來の格式を用ひん。或時野坡子に芭蕉付合の教ありやと尋ねしに、坡子の云けるは門人或時翁に申けるは近

隣の作者はまのあたり教訓を請侍れども、遠國の作者まどひ侍る事あまたあれば、付合の書をあらはし給はり候へとすゝめけるに、翁も實にもと申されて已に書給ふことも有りしに、其後又却つて惑にやなり侍らんと其書やみ侍りしと語り申されしなり。此事有故坡子の云けるは、付合の事まじはりて聞取給へ外にしるしとする事は書き申されずと示されけり。されど野坡付合二十一品あり、

と述べて、格式については、諸家の説に通じながら、これを排斥したのではありませぬが野坡の言ふごとく、一定のものに書き示すことの出來ぬほど自由なものであるといふ考をもつてゐたらしく、

脇の仕様はまづ發句をとくと見て發句の季節、時分、場所の三品を見定め扨其後に脇の物好を案すべきなり。初心此心つかずして物好より先きへ案ずる故發句に乘らずして捨てらるゝなり。わきは平句と違ひ位有る事なり。てには留は習ある事なり。

第三の事、是も脇の季節時分場所を考て扨轉じてするなり。殊にたけ高くする位有事なり。第三不出來なれば其卷も見落さるゝなり。大方發句ほどに心得べし。大樣て留なり。ての字さし合時らん留、もなし留、に留などあり。みな習事あり。文字留もするなり。四句目は輕きを詮とす。其故は發句、脇、第三ありて重きなり。かく重くきたりたるを四句目にて輕く請るなり。

百韻の事、表はかろく仕立つるを習とす。發句、脇も其いにしへ上の句をいひて下の句を付ることが始なり。それより百韻出來たり、外に心なき事なり。發句、脇を陰陽といひ、君臣といふは後世の沙汰なり。第三は發句、脇もとより離れたるもの故、第三にて轉ずるなり、是又外に心なし。四句目は輕なり。起承轉合の詩の教を俳諧に取合せて教るに、起承轉まではよく合たり、四句目五句目もつゞく故、四句目に合の心なし。五句目より八句目まで平句なり。唯表の中は趣向、付心共にやすらかなるなり。滯る事なきを詮とす。百韻は變化を最とす。同じ場に居る事なかれ。擧句のこと輕くて心の殘らぬやう

にするなり。擧句の重きは下手のわざなり。字餘りを嫌ふなり。戀は人情の誠より出るなり。故に代々の撰集の部立とす。
哥仙、百韻とつゞく時は最早なくてかなはぬなり。……逢戀、あはぬ戀、初戀、別戀等前句をとくと見定むべし。

といふやうなことを述べたばかりで、露川の八體の句作、付方や又宇鹿の十四體十六篇などの名目には殆ど觸れて居ませぬ。切字說については

切字は心詞のきるゝ所なり、語絕するなり、切字なくても差別する心あれば心にて切るゝなり、切字いくつありても心きれぬ時は發句にあらず、

といつて、古來より傳へて居る切字の例を出し、この十八字の外にあまたあるものだと切字多くある句、切字面に見えずして切字のある句、餘勢にて切るゝ句、切字なくても切るゝ句、の例を示してゐるところは說明に落ちずして却つて親切な敎へ方だと思はれます。由來切字の說は和歌の式以來、甚だ明白を缺いで居るのを、連歌俳諧に踏襲し、半は神祕的に半は口傳の蔭にかくれて、跡を晦したやうな感がありますが、風律のこの所說も亦明快とはいへませぬけれども、當時多く行はれてゐた天地人三才や陰陽分別の說やらを附會した、玄妙切三名切三段切などに比べると、よほど自由になつて、わかり易くもなつてゐます。

以上俳論の概略を了へて、次にその句作を尋ねて見たいと思ひます。俳諧の本旨は偏執なく心のまゝを述べるにありとか、雅意を好まず平話を尊ぶとかいつた風律のことでありますから、その取材も風體も平淡通俗であることはむしろ當然ともいふべきでありませう。しかして、これは當時一般の風潮で、正風の眞諦が地を掃はんとして、清新なる天明の階調が未だ蘇生せず、殊に輕みを以てあらはれた野坡の流に棹さして居る風律のみに見る現象ではありますまい。私は「こしかけ」と「さゝの葉」とから、次のやうな十首を拔き出します。「こしかけ」より

山寺や箒にかゝる朝かすみ
法體もせずに佛の若葉かな
桃柳宗祇をかごの旦那かな
空にすむものと思うて雲雀哉
暑き日や土をくわへてとぶ烏
虫ぼしやうつゝに見えし我姿
蘭は立菊はねかゝる今朝の秋
玉祭いさかひしことも思はるゝ
山本の里と申して火炬かな
蜻蛉やよふとらまへた柳の葉

「さゝの葉」より

春雨や薪を蝶の草まくら
蝶舞ふやはたち重ねの山おろし
鶯にものもいひたき初音哉
魚賣のはいる穴あり夏木立
松一葉落ちて地に立つ暑さかな
喧嘩するかけむつましや夏の月
涼しさや十一分の鉢の水

雁鳴やぬれ葉しみつく岩の上
行過て川もぬらさぬ時雨かな
袖の下に小坊主つれて雪見かな

其の他

我庭へわけ入る暮や夏木立
つよすきて二王は寒し大根引
雨を見にくる人もあらん須磨の秋
御所柿をかさして里の祭かな

くせ物語の文章は流暢で澁滯なく、微細に亙つて居て贅辯がなく、ひきしまつてゐて窮屈の感じのない所など、圓熟した筆で、文章として獨立の價値を認むべきであると思ひます。風律は自分の文章の修業のことを若年の頃支考に習つたといひ、又「俳諧文章のことまづ漢文を見て、序は序、記は記と書きさまを考ふべし、予若年の頃支考のもとより、文章に趣意なきは躍口説も同然なり、と申越されしなり。これも漢文を見てかく覺悟せり、云々」といつてゐますが、私は風律については、むしろ俳諧よりも文章に取るべき所があるではないかとさへ思ひます。そしてそれは全く讀書より得來つた素養のあらはれではないか。風律を傳する人が「讀書を好み」とか「廣く和漢の書をよみ」とかいつて居るのは、さもあるべきことです。但しそれが爲め文中にあまり故事成句の引用が多過ぎる嫌なきにしもあらずであります。紙魚日記の文を見ていよ〳〵その感を深くいたしますが、これは刊行の本でありますから、玆に引用する煩を省き、次にくせ物語の蕉門諸家を評した文をとります。

芭蕉門人にて廣陵の客となる人、凉菟、去來、支考、露川、惟然、舍羅、孟遠等其外も有べし。其後野坡三度下向なり。これは予運年發句、附合等教を受けたり。又芭蕉所持の新式聞書等傳授したり。凉菟、支考先年廣島逗留なれども幼年の事にてたゞ其門人に聞傳へたり、去來も同然なり。凉菟、去來などは殊の外氣象高き人のよし聞傳へたり。俳諧の體を見るにさもあるべし。凡俗をはなれたる一筋每々感心なり。去來は實學有つて書置けるもの凡ならず。眞の風人なり。其人物のなつかしき旅寢論などあれど、書きおける物多く傳はらず殘念なり。末代師とすべき人なり。支考は許六などの謗あり。近年も支考を目あてにして謗る人數多あり。是其力有る故なり。いよ〳〵手柄なるべし。俳諧分上より一層引上て高く說出せり、此故に無理あり。然れども著述數多ありて、彼門人は此書によりて埓明けて置やうに成たり。一家を建てたるなり。文章も上手なり。然れども落着せぬ所病と見えたり。又物の注作るにも文章鼓舞して書たる故、分明ならぬやうに見えたり。注は物をほどくを目當とすれば、分明ならぬは病なるべし。露川は西國下向の時大阪より長崎まで誓戒といふことをして、門人數多出來て、宗匠とす。其比長崎の宇鹿は上手なり。俳諧力ありて十四體を編みたり。又十六篇など有り、其外門人に敎る所、先西國に並なき人也。許六は文章第一なり。俳諧者ありてよりかゝる文章はなし。俳文建立の人か。自慢を書けるには漢書の東方朔が傳を寫して書けり。風俗文選に人名をあげて評したるは、古今集六歌仙を模してかけり。去來旅寢論を作り篇突を正す、許六誤と見えたり。野坡鶯の發句を難して許六の書面あり。野坡其返書あり。許六の難みな無理なり。其角は天性の上手と見えたり。二十二三より俳諧選者となりて、集多くあらはせり。才器見るべし。芭蕉終焉記は俳諧知らぬ人も泣くなり。晩年の發句卑しきなり。附合もあらめになる。靜柑子などは作意ばかりにて感情なし。只其才器見るべきや。丈草は翁の風骨を得たりと云ふさもあるべし、文章など感にたへたり。風雅の道人なり。

風律が野坡を迎へた野坡庵は明和九年風律七十五歳の時、奥州多賀城の壺の碑にならつた板碑を立てゝ、多賀庵と稱しました。二代六合、三代玄蛙、四代筵史から菊年、由池、小笠を經て當代紫明氏に續いて、廣島に於ける俳諧の宗

匠として重きをなしてゐますが、風律の歿後、中央に名を出したものには、蘭更門の篤老や、俳文に秀でた夏雲などがあり、地方的には路宅、敏彥其他の逸才があつて、俳諧が賑つてゐました。而してその先達となり、中心となつたものは、風律及び多賀庵にあつたことと思ひます。併し私は玆に俳人としての風律を評論する用意もなく、又其要もありませぬ。たゞ思出深い廣島の地に、この人のあることを見出しながら、當時にあつてよほど面白いと思はれる俳論が、更に世に知られず、唯一の書籍物語さへも散佚して殆ど見られなくならうとして居るのを遺憾に思ひ、この小稿によつてせめて俳人としての風律の俤を髣髴たらしめ得れば足りるのであります。先年、東西の斯道の士によつて、その百五十年忌が營まれ、紀念出版たる「かんこ鳥」の刊行を見たことは望外の喜であります。

秋風庵月化

田村専一郎

藤村先生の御郷里から東北に當つて餘り遠からぬ所、卽ち御郷里の驛筑後柳河から、鐵路迂回して約七十五粁の所に豐後の日田がある。そこは水郷柳河と共に水郷日田として知られ、山紫水明、小京都の稱がある。その美しい自然と共に又この地は、德川時代幕府直轄の地で、日田代官の權威は九州諸大名の上に及び、長崎奉行や諸藩の往來が常にあつて、一の政治的中心をなしてゐた。この代官の權力と共に掛屋なるものが發達し、日田は又九州の經濟的中心ともなり、所謂日田金は經濟的に九州諸藩を支配するに至つたのである。かくて日田は山間僻陬の一小邑にも拘らず文化は頗る進んでゐたのである。かうした自然的、社會的環境にはぐくまれて日田の地には古來幾多の有名無名の風騷の士が輩出した。今こゝに素描を試みようと思ふ月化もかうした環境にはぐくまれた一人である。

月化は名は貞高、通稱は平八、廣瀬宗家の第四世で延享四年の生れである。俳號は始は桃潮、中は靜齋、後は月化と稱し又秋風庵と號した。父久兵衞は俳諧を好み俳號を桃之と稱して居り、又月化の弟貞恒は文學を好み小說籌木十五卷を著し、又俳をも嗜んで俳號を長春庵桃秋といつてゐる。俳人月化の出現については先づかうした家庭の雰圍氣を考へて見ねばならない。當時日田には美濃派の流を汲むもの、野坡の流を汲むものなどあつたが、代官揖斐樂水は淡々の風を好みその周圍に同好の人が集つてゐた。月化は志學の頃から俳を好み淡々の風を慕ひ、最初は郷里の先輩

に學んだが間もなく淡々門の舍棹、竿秋の敎を受けた。十八歳の時には同じ流を汲む樂水に仕へることゝなつた。明和三年二十歳の時樂水に從つて江戸に旅し、途中京の竿秋を訪ねてゐる。明和六年始めて用達を命ぜられ廣瀨家のため家運の礎を置いたのである。安永元年樂水の歿後致仕して家業を修めたが、天明元年三十五歳の時家を弟桃秋に讓り堀田村に秋風庵を建てゝ移つた。これから俳を以て事とするに至つた。天明三年から同七年まで甥の淡窓を引取つて愛育した。寛政八年は月化五十歳に當る。この年春には賀宴を張り七月には夫妻同伴で東遊し京攝の地に至る。出發に際し

殘し置くそ訪れよ留守も松に月

の句を殘した。秋風庵發句集二卷の出板されたのもこの年である。文政四年霜降月はじめつかたから病みその翌年の歳旦に

瘦なから花の數かも福壽草

とものした。一月八日以後は病勢が加つて來た。その二十六日に遺言があり二十七日からは昏睡の狀態を來たし晦日正午頃に世を去つたのである。行年七十六歳。歿前數日の

櫻かと見らるゝまてそ春の雪

が絕筆となつた。無心卽淨居士と諡し大超寺に葬つた。この諡號は豪潮のつけたものである。妻さんもその後を追つて同年九月他界した。夫に從つて俳を學び俳號を三千春といつた人である。月化三七日の夜に三千春は

はつかにも乾かぬ袖やはるの雨

とよんでゐる。門人弗水が追善集一卷を編しこの絕筆の句によつて「春野雪」と題して出板した。表紙は竹の綠に胡

粉を滴らして春雪を表してゐる。跋が文政甲申であるから三回忌の文政七年の出板だらう。更に弗水は文政乙酉の桃秋の序、一宵の跋をのせた「續春雪集」一卷を次いで出板してゐる。この弗水は始め春坡と號し高田の人で最も忠實な門人であつた。月化門で最もすぐれてゐた人は葵亭で、彼は又士朗にも教を受けその名も遠く聞えてゐた。文化十三年の一瓢の西歌仙の卷頭の自筆の歌仙には九州では小倉の了國、博多の自由、凡坡、四軒、長崎の幽嘯と共に日田の葵亭が加つてゐる。その他多くの門弟が月化の周圍には集つて豐後から筑後方面にかけて廣くその俳風は行はれてゐた。秋風庵は遺言によつて桃秋が繼ぎ、弗水は靜齋の號を繼いでその二世となつた。かくて月化の俳系は二つに分れて傳へられた。

月化は早くから俳諧に指を染め未だ二十歳に滿ずしてその名は既に世上に傳へられてゐたといはれる。淡窓達兄弟四人の筆になる「月化翁小傳」に、「東遊の時四祖歳二十なり府君も又俳諧を好玉ひて竿秋の家に問玉へり談話の內に竿秋貴境にては桃潮の名を久敷承り候と申すに府君此度召連れて候と仰ければ竿秋驚起ち手を把て座に引き舊相識の如くなりしとぞ」と見えてゐる。秋風庵に俳を事とするに及んではその名は益高く傳へられた。浪花の春思は當時西の國にての俳は伊豫の樗堂と豐後の月化だといふ意味のことをいつたらしい。それに對する月化の消息が文集にのつてゐる。月化の名が高まると共に秋風庵を訪れる行脚の輩は頗る多かつたらしい。一體當時行脚俳人の横行は甚しいものがあつたらしく、「近世諸國名望を占むる者大抵其家富み行脚に糊口するを以こゝの信陵君かしこの春申君喰ひつふし貰ひ倒せし報恩に其人の名を賣り歩く」(其五日)などゝいはれてゐる。身に宿疾あり殊に筆の不自在な月化には書翰の贈答などもものうかつたらしい。終に文化十二年には休俳を發表してゐる。秋風庵と宗家との經濟的關係は知らないが、「物くるゝ友とち打かたらひて此庵の月花の料にはいくはくの田をかよせましと沙汰し終に三たんはかりをそ

寄せ」てくれたので月化は月毎に五斗米のあるじとなつてゐる。元來彼は淡々や蓼太の如き豪奢な生活は好まなかつたらしい。文集所々にうかがはれるやうにつゝましく暮してゐたやうである。月化は自適の身でありながら餘り旅行をしてゐない。大旅行とては二十歳の時の江戸と五十才の時の京攝地方との旅である。中にも京都の風物は餘程氣に入つたと見えて屢その句に現はれてゐる。その外九州内の小旅行は數回あつたやうである。旅の趣を愛し旅をすみかとするといつた所は彼には全く見えないのである。

月化の句集としては先づ寛政八年に出板された「秋風庵月化發句集」がある。弗水の編する所で半紙本上下二冊、法幢の序がある。この序については問題があつたのであるが、要するに淡窓の持つて行つた草稿に南冥、昭陽父子が加筆したのを法幢上人の名で掲げたのであるといはれてゐる。尚大江丸、春坡の序があつて跋は八千坊が書いてゐる。又廣瀬家には月化自筆の「秋風庵發句後編」五冊がある。その卷末自記に、「初老(月化は五十歳の意に用ゐてゐる)までの作は印板して上下の卷有五十一歳よりの句集めて五冊に記す」とある。それから「秋風庵發句抄」がある。之は文化十四年七十一歳の時の自撰句集であるが大正十五年出版されてゐる。その他に「四季發句草稿」や斷簡と思はれる「歳旦試筆」など數種のものが廣瀬家に傳へられてゐる。

帆足萬里は、「月化翁の發句は骨氣雄高實に晋子乃流亞也あけまきの若かりし世は淡々の姿を好み物し給ひしと聞つるに今ははや其人にもまさりぬへけれ」といひ、淡窓は「伯考俳句中年以後頗變風格識者稱其老而益進」といつてゐる。卽ち初期は浪花振であつたのが中年以後俳風に變化を生じたことは前人既に之を說いてゐるのである。併し今日では月化の句は僅かのものを除く外大部分は製作年代不明である。唯刊本秋風庵月化發句集の句が五十歳迄のもの、自筆本秋風庵發句後編の句が五十一歳以後のものと分ち得るに過ぎない。從つてその句を年代順に排列してその俳風

の變遷を跡づけることは不可能である。月化は少年時代早くも俳諧を始めてゐたらしい。彼自ら記す所によると、「志學のころより諸歌をしも好みぬれは」とか、「我等少年の比ある人のもとにて手すさひに五元集を見しよりおかしき弄ひ事と思ひ候か俳道に入るの栞にしてこの流に棹さしたく其時の師家を試み候に淡々の骨氣老成晋子に彷彿たりと世に鳴り候ひしも程なく物故と聞候ゆへその高弟洛の竿秋に因みはたちの年香稻庵を敲き候」といつてゐる。二十歳前後の月化は淡々門の竿秋、舎柊の徒に隨つて浪花振を庶幾してゐたと思はれる。秋風庵發句抄に年代の明記されてゐる初期の句に、

明和丁亥の年東行せし時山陽道の中にして或野中を行に夏日の避へき陰もなかりし

蝮蛇の咽を過る夏野かな（以下二十四句は同年の作であらう）

明和五戊子江都迎春

物見はしめ御大名に明のはる（以下十一句は同年の作だらう）

思ふに月化の少年時代靑年時代は恰も淡々の勢力が關西俳壇を風靡してゐた時である。年少覇氣の時代の彼がそれに引きつけられたのは當然であり、且又彼の仕へた樂水が半時庵流であつたのだから若い頃の月化がこの風に專らであつたことは當然であらう。けれども彼の眞の性格は淡々風とは相反するものが多かつた。月化翁小傳にも、「性質端正にして淸潔を好玉ひ幼より老に至まて一言の妄語なし」とある如く、眞面目でおだやかで極端に走ることのなかつた人のやうに想見される。その肖像を見てもおだやかな相が現はれてゐる。又一方から考へて見ても、彼が世間的名聲を求めないにせよ秋風庵に文臺を立てるに至つてからは地方人の耳に入り易い平明の調を以て弟子に臨むやうになつたであらう。かくて半時庵流を離れた月化は蓼太の風に赴いた。安永元年樂水が歿して彼が致仕する迄は浪華振を

峯じたであらうが、天明元年彼の新築の庵に秋風庵と名づけたのは蓼太が贈つた

あか〳〵と日はつれなくも秋の風

といふ芭蕉の自畫讃によつたものであり、且つこの時蓼太が秋風庵記を撰んでゐることから見ると三十五歳の頃には既に轉向してゐたと思はれる。轉向後の年代の明かな句を新年の句中から拔いて見ると

退隱のはしめの春

恥さるはそれけふよりそ著衣始

四十のとし

兼好に隱すへきとしのはしめかな

知命

隱れ家に杖の年玉もらひけり

五十一歳の試筆に

一萬八千一日の其はしめ哉

延享四年丁卯に生れことし文化四丁卯の暦に還る

ことしより又福藁の上の身そ

迎七十春

粟餅に又二十年夢の春

三十五歳までの月化は或は代官に仕へ或は家業を修めるかたはら俳諧に親んだものであつて純然たる遊俳であつ

た。秋風庵の主となつてからの彼は形の上から見れば業俳である。けれどもそれは純然たる業俳であつたとは思はれない。隱栖について自らは、「いまた四十にたに滿すしてかゝるもの好み企ぬるは年に似けなくてなと世人の評せむを思はさるにはあらねといかにせむおのれ虛弱なるに宿疾さへひとつならす加はりたれは家の事しひて計らはんは壽を損ふへしとくすしもいへり生あるものは死あるのならはし其期の來らむはいかゝはせんさもあらさめるに思慮もて齡を縮んは道にとりても欠たる處有なむと父母の御をしへに世の塵うち拂ひ無事早寐安歩晩食の四味とかや習はめと此いとなみに及へり」といつてゐる。この外に「浪華の春思に答ふ消息」の中に述べてゐるやうに月花の外用なき身となつて俳を弄び度いといふ考へもあつたであらうが、それはどこまでも第二義的な附隨的な條件であつたと思はれる。卽ち月花の隱栖は係累を脫して俳道に一路精進しようとしたためでもなく、又專ら勢力を扶植して鎭西に覇を稱へんとしたためでもなかつたのである。もと〳〵俳諧は月化に取つては彼の所謂「つれ〴〵のかたらひ人」であつたらしく、それが閑居の閑なると共に彼の生活の多くの部分を占めるに至つたと見るべきであらう。從つて彼には芭蕉のやうに造化を友とし俳道に殉ぜんとする熱意はなかつた。又當時の多くの業俳の徒の如く權謀術數を弄して名を成し勢を張らんとする野心もなかつた。それかといつて又也有、大江丸の如く業餘の淸閑を以て俳を樂むのとも趣を異にしてゐた。月化の態度は謂はゞ遊俳的業俳である。否むしろ業俳的遊俳といつた方が一層適切であらう。これらの諸の事情はいろ〳〵の形を取つて彼の句の上に現はれて來てゐる。月化の句を通讀して先づ感じることはその句作の上に看取される安易さである。實景なり記憶なりが餘りに安易に十七字化されてゐるのである。

息災な人の糞見る春野哉

恐らく眼前屬目の實景ではあらうがそれが醇化を經ず詩化されないで十七字化された結果は唯徒らに醜なる非詩の十

七字となつてゐる。類似の題材を取扱つたものでも例へば芭蕉の馬の尿などは全く異つた效果を見せてゐる。

畑打の夫婦の中に入日かな

かうした景も山村ではよく見得る所のものであらうが彼の安易なる取扱はかく詩味に缺け餘情に缺けた句となしてゐる。かうした句作の態度であつた月化の句には、想像又は空想から得たと思はれるものは少く、實景と思はれるものが多い。古典的なものなどを除くと多くは眼前の事象又は記憶から得た句と思はれるのである。日田附近の牧歌的な風物や長閑な行事などがおだやかなすなほな作者の主觀を通して詠嘆されてゐるものが多いことは興味ある所である。かうした安易なる寫生と共に微溫的で低調に流れてゐる點が目立つ。

月にむら雲面白そふに不如歸

晝は寢て居るかもしらぬ水鷄かな

月化は文政に死んでゐるが既に天保時代の平談俗語の調が著しく見える。それはむしろ彼の望んだ境地で自ら「俳諧を信せん人はたとひ和漢の書を能〻學すとも俗談平話の野人の身になして青二才の初心の輩におなしふしてふるまひをせすして只一向にはいかいすへし」と云つてゐる。

寢よとすれはならぬそ梅に月の出る

蚊嫌ひや晝を千代もと枕に手

月並的な概念的な理窟や言語の遊戲も多く見える。

戸を敲く鳥さへ有るに時鳥

三日月の鎌入れ初るすゝき哉

理窟と共に道德的な句が目立つ。

梅折るや跡はかまはぬ草履取

小人の朝寢笑はん蓮の花

これは蓼太の影響があるかも知れないが元來月化は眞面目な人で事物を觀察するに道德的な見方をする癖があつたものと思はれる。月化は眞面目な人で幼より老に至るまで一言の妄語なしといはれてゐる程であつて、從つて彼の句中に猥雜な句を見出すことの出來ないのはいふまでもない。然るに自然を人化して詠む場合に感覺的な比喩が屢用ゐられてゐる。月化の用ゐた感覺的比喩は一面そこに道德的な意味がこめられたものであり、又一方ではさうした表現を風雅だと考へたものと解釋される。又見方を變へると謹嚴なる作者例へば馬琴などの場合と同じとも考へられるのである。

さく薊白いは鬼の女房かや

おそれすも露は添寢の薊かな

此くらさ妻見違へな蜀魂

佐保姬を相手かましき紅葉哉

冬木立あまりかまはぬ姿かな

月化の句ですぐれてゐると思はれるのはたくらますすら／＼と詠み出した中に單純ではあるが溫雅な情景の見えるものである。

垣根なる鷄に二月の朝日哉

若葉して遠山我に親しめり
大寺の庭冷やりと蝸牛
見上れは瞼に重し梅雨の雲

又彼の句には優美なものが多い。

降らぬ間を煙る日美し春の雪
しかの子や宿貸す萩も尺はかり
拾はせに禿やりつるあられかな

雄大なもの、力強いものは彼の句には少い。僅かに次のやうな數句を見出すに過ぎない。

大竹や千本風の蕭る音
白雨や筑波に走る富士の雲
瀧壺や波寒月の脚を打

月化の句には蕪村風のものが見える。

里下りの命婦訪けりはるの月
桃咲や受領の留主の崩れ塀
門の雪膝行の車しつか也

これらは月化の學問から來た古典趣味の句であつて、その點蕪村のそれと甚だ似てゐるのである。蕪村が離俗の法として讀書を說いたことはこゝに述べる迄もないが、月化も勸俳學文の中に於いて特に讀書の必要を力說してゐる。そ

の結果共に古典趣味の句を作るに至つたのであるが、二人の風雅觀には大きい距りがあつた。そのため時に偶然風調までも同じうする句がないではないが多くは甚しく趣を異にしてゐる。例へば次の月化の句は源氏、徒然草によつた古典趣味の句ではあるが蕪村には似てゐない。

漸寒き夜さりは湯桁算へてん

兼好に隱すへき年のはしめかな

又月化には一茶に類する句も見えてゐる。

羽ぬけ鳥青葉の風の冷たいか

干す網にきのふの蛭の命かな

おそろしき夢や見にけん夜の蟬

起て聞く也つとめよや虫の聲

寢入らすに居るそ時雨よやよしくれ

子はないかあしろにひたす老か脛

月化のかうした同情は主として道德的方面或は風流觀から來てゐると思はれる。そしてその背後には滿ち足りた裕かな平和な生活といつも微笑を湛へてゐる作者の顏とが想像されるのである。その現れは一見一茶と同じに見えてもその實全く對蹠的な境地から來てゐるのである。

月化の俳文は「秋風莽文集」乾坤二冊にほゞ年代順に並べられた四十三篇が收められてゐる。これは文政五年春月化病中に出板の計畫があり、桃秋、玉來、弗水が撰んだが出板が延び〳〵になつてゐたのを桃秋が天保十一年九月、

秋風菴藏板で出板したものである。昭陽、萬里、蒼虬の序、淡窓、一宵、玉來の跋である。初版は表紙が白地に藍で藤花とおぼしき文様三個づゝを刷つたものであるが、再板は表紙が暗綠色で題簽の字體がちがひ卷末に奧附がない。廣瀨家には月化自筆の「文集草稿」三冊がある。これは種々の文章の草稿である。同じく自筆の「文章草稿」三冊があるが之は刊本文集の自筆稿本と思はれるものであつて、前の「文集草稿」と製本の時に表紙が入替つたものかと考へられる。この「文章草稿」の文章中十八篇は刊本文集に取られてゐない。又桃秋筆の「月化文章」二冊が傳つてゐるが之は刊本文集の原本である。その他天明六年の「豐東行」と題する紀行一冊がある。

月化の俳文は體は雅文にして味は淡々として白湯の如くである。そして之を飾るに和漢の故事を以てし詩歌を以てしてゐる。蓋し月化は好學の士であつて月化翁小傳にも、「歌書俳書なとは極めて博く見玉ひしよし唐土の文は一日も師に就て學玉ひし事はなかりしかとも我と讀得て尤も史類を好玉ひ左國史漢よりして稗官小說に至るまて有にまかせて讀玉へり隱居の後は一日も手に卷を捨玉ふ事なし記憶も又人に勝れ玉へり」といつてゐる。その多讀博覽は至る所に古典引用となつて現はれてゐる。但しそのため華麗濃厚の趣はなしてゐない。謂はゞ淡雅ともいふべきである。そこには滑稽諧謔は餘り見られない。時にあつても上品なもので口を開いて笑ふといつたやうなものはない。又洒脫輕妙な趣も見えないし奇を弄し怪をもてあそんだ所もない。或は又自然に對して銳い觀察や忠實な寫生もなく、世態人情の機微を穿つやうな犀利な表現も見えない。唯眞面目なことを眞面目に書いてゐる。そしてそこには至る所道德的敎訓的な言廻しが殊に際立つて見えてゐるのである。月化は溫和で平靜で常識的であつただけに、自然なり人生なりに對する異常なる熱情には缺けてゐた。その常識的微溫的な彼の思想が彼が好んで用ゐた和歌詞に盛られて、こゝに俳文とはいひ乍ら極めて俳文らしからぬ古典的無飛躍の月化の俳文となつたのである。

月化より年長ではあるがほゞ時を同じうして俳文に名を得た也有が尾張に出てゐる。也有も晩年は致仕して前津なる半掃庵に隱栖してゐる。宗家は財に惠まれて居りながら質素であつた點はどちらも同じで、也有が炒豆と豆腐汁で俳友を集へたのに對し月化は大根で客をもてなし

草庵對客

大根の無鹽に驕れ冬こもり

といつてゐる。也有は半掃庵に富士を望む窓を平常は閉して置いて時々之を開けて見たといふが月化は

富士見せるわか北窓は塞くまし

といつてゐる。時々開けて見るのと、いつも開けて置くのと、これだけの相違が二人の俳文の上にあるやうに思はれる。

一茶雜記

田島福重

私は嘗て「國語と國文學」第二十號（大正十四年十二月號）に「『焚くほどは……』といふ句に就いて」なる一文を寄せて、相馬御風氏が彼の良寛和尙の晩年の心境を示す代表的な句として隨處に推稱される

焚くほどは風がもて來る落葉かな

の句と小異のある

焚くほどは風がくれたる落葉かな

といふ句が一茶「七番日記」文化十二年十月の條にあるが是はどう考へたらよからうかといふ事に就いてほんの思附をのべた際に、

「焚くほどは……」の句が「七番日記」に發見された以上、其が一茶の詠んだ句であることは明瞭であると、御風氏もいはれるが、然し、其を疑へば疑へる理由がまだ殘つてゐる。何故なら一茶は自分の日記や句稿などに他人の句を無造作に記入したりしてゐる形跡があるからだ。無頓着で、飄逸と見える一茶の性質の半面に其と全く反對になか〳〵執拗な處もあり、極めて綿密、細心周到な處もある事は「七番日記」の日日の晴雨とか、訪問とか、來訪、文通、買物など迄一々綿密に記入したあの書き振りにも察せられるが、其の一茶が無造作に自分の句と他人の詠んだ句とを混同してゐる所が面白い。例へば

「三韓人」といふやうな書物を開いて見る。是は文化十一年冬、一茶が江戸を去つて郷里の信濃へ引退する際、記念に既に故人になつたのやまだ生きてゐる多くの俳友の句を集めた物で一茶の編であるが、其中に其等の人々の句として載つてゐる物で又「七番日記」に何の斷りもなく一茶自身の句として出てゐる物も多い。

年よりの目にさへ櫻〳〵かな　　松井

是は「七番日記」の文化七年三月に一茶自身の句として出てゐるし、

狗の供して來たるさくら哉　　信喜

是も同じく文化七年三月に、

狗の供して參るさくら哉

と少し形を變へて矢張り一茶自身の句として載つて居り、更に

雪とけて町一ぱいの子ども哉　　柯尺

の如きは文化十一年正月に一茶の句として出てゐる上に、其三月に、

雪とけて町一ぱいの雀哉　　子其

と僅かばかり形を變へた他人の句も出てゐる程である。是等の事を思ふと、一茶及び一茶の門人などの間には、他人の句を鳥渡改作して自分の作とするといふやうな無造作な遣方があつたらしい。すると「焚くほどは……」の如きも實際は矢張り良寛和尙の最初詠んだ物であるのを、一茶が自分の句と混同して仕舞つたのではあるまいかといふ想像推察も出來る。兎に角一茶及び一茶の門人などの間には他人の句を自分の句と混同したり、他人の句を鳥渡改作して自分の句としたりするやうな輕い氣持があつたらしく思はれる。

と大體こんな風に一茶の作句の態度の一端にも言及したのであつたが、それから滿一年經て大正十五年十二月の「國

文學」(「槻の木」改題）に載つた故山口剛氏の「一茶瑣言」に因り、彼の「おらが春」の挿綸なども實は「艶道通鑑」等から影寫したもので、一茶はさういふ方面でも彼を是に、是を彼に利用してゐる事實を敎へられ、其が彼の作句の態度にも通ずる傾向である事を思うて、一茶は自身の舊作は勿論、他人の句迄其儘或ひは鳥渡改作して利用したりする癖があつたのではあるまいかとする、一茶の作句の態度に就いて私の從來懷藏してゐた見解に一段と確實性を加へるやうになつたのであつた。

唯私には一茶といふ人は才氣があつて意識して器用にさういふ手妻に似た事をしたりする人でもあつたらうが、亦愚直といふやうな一面をもち、どこか疎漏な點もあり、感違ひで他人の句を自分の句と信じ込んで仕舞つたりする人間でもあつたのではあるまいかといふ考へが强かつた。この點も後で山口氏の「西鶴、成美、一茶」の中の「一茶の六藏の俳句」に「あの執拗な一茶の性癖は、たとへば牛が飼餌を反芻するやうに、過去の記憶をくり返しくりかへして、更に追想から來る悲喜の情をつき合はせ、つき混ぜて、かつて體驗した實際の感情を二倍にし、三倍にすることが、極めて自由であつたかと思はれる。その事は意識的にも、無意識的にも、半意識的にもなされたやうである。いひかへれば或る場合には他を欺瞞し、或る場合にはみづからを欺瞞し、或る場合には自他のいづれかを欺瞞してゐることを忘れて、堅い信念の下にさうあつたとのみ思ひ込む事もあつたらしい。……うそ吐きの一茶と正直の一茶とその縺れ合ひが一茶を考へる場合の最も困難であつて、また最も面白いところであらう。」とあるのを讀んで啓發される處が多かつた。

一茶が本當に他人の句を自分の句と信じて了つたらしい例は私の目に觸れた物丈でも可也に多い。「文政版一茶發

句集」の

かま獅子が腮ではらひぬ門の松

は勝峯晋風氏の研究に由ると建部巣兆の句集「そばかり」といふのに在り、誤つて混ぜるにやといはれる。然し、一茶のこの句集の其部分は魚淵及び二休の校であるから、或ひはこの二人の誤りとも見られよう。が、「七番日記」が一茶の自筆である以上、前出の

年よりの目にさへ櫻〳〵哉

等は一茶の感違ひと考へなければならないだらう。同様の例はまだ〳〵澤山あるに違ひない。私の氣づいた丈を此際追加すると、「七番日記」の文化七年十月の

吉原のうしろ見よとやちる木の葉

は矢張り「三韓人」に岩松の句として載つて居る物であり、又文化七年四月の

何をして腹をへらさん更衣

は「迹祭」(文化十三年魚淵輯、一茶閲)に芦角の句として、文化十三年六月の

あら暑しあつし何して暮すべき

は「杖の竹」(文化十三年松宇撰)に完芳の句として出てゐるのである。是等は特に必要があつて他人の句を意識して融通したとは考へ得ぬから、矢張りどこまでも他人の句を備忘の爲めに帳面などに書込んで置く中に自分の句と混同して仕舞ひ、後にはすつかり自分の句と信じ込んで仕舞つたものだらうと思ふ。

それから、一茶の日記を讀んでゆくと、一茶自身の舊作が其儘或ひは改作されて復出て來るのに出會ふ事が屢であるが、然し「七番日記」などは必ずしも是々の句は今月の新作であると斷つてゐる譯でもないから如何樣にも解釋出來よう。がその卷頭と卷末の句

目出度さもちう位也おらが春

ともかくもあなた任せのとしの暮

に因り明かに文政二年の一年間の作を日次順に集錄した物のやうに粧つてある「おらが春」にどこまで意識的に他人を欺瞞しようとしたかは問題であるが、兎に角結果からは一茶の手妻とも見られるものが少からず發見される事は嚢に志田義秀先生が「國語と國文學」第九卷第八號（昭和七年八月）の「考へさせられる『おらが春』」で其概略を述べられ、又最近「物語日本文學」の「一茶一代物語」の附錄「おらが春俳句他書比考集」で其詳細を報告された通りである。實は私も、以前昭和三年頃出た川島つゆ氏の「一茶の種々相」を最初卒讀した際、該書に「おらが春」の句は僅々數句を除いて悉皆文政二年の作である、この事は「八番日記」の句との對照に因つて直ちに了解される事だといふ意味の言があつたのに不審を發し、そんな事はないだらう、少くも三四十句位は「七番日記」で見覺えのある句だと直感しながら「おらが春」の句を一一「七番日記」及び「八番日記」の句と對照して見た經驗がある。「比考集」には一茶の句以外の物に就いて迄詳密な考證があるが、一茶の句丈に就いて見ると猶若干遺漏があるやうである。卽ち、

今の世も鳥はほけ經鳴キにけり

「七番日記」文化十二年二月に「雀程でも法華經を鳴にけり」といふ同巢の句がある。

京島原

入口のあいそになびく柳かな

「七番日記」文化十四年九月に「銚子」といふ前書で「入口や先愛嬌にこぼれ梅」といふのがある。

としよりと見るや鳴ク蚊の耳のそば

「七番日記」文化十三年四月に「としよりと見てや大聲に時鳥」といふのがある。

ゆうぜんとして山を見る蛙哉

「七番日記」文化十年正月に このまゝ出てゐる。

寢並んで遠夕立の評議哉

「七番日記」文化十二年六月に「寢並んで夕立雲の目利哉」とある。

狗に爰へ來よとや蟬の聲

「七番日記」文化十年正月に「狗に爰迄來いと蛙哉」とある。

蚤の迹かぞへながらに添乳哉

「七番日記」文化十五年四月にこのまゝ出てゐる。

子をかくす藪の廻りや鳴く雲雀

「七番日記」文化十二年二月に「子を捨し藪を放れぬ雲雀哉」とある。

秋風に歩て迯る螢かな

「七番日記」文化十年八月にこのまゝ出てゐる。

乳呑子の風よけに立つかゝし哉

「七番日記」文化十三年八月に「風よけの足に立たるかゝし哉」とある。

下戸菴が疵也こんな菊の花

「七番日記」文化十四年九月に「下戸菴が疵ぞ白菊赤い菊」とある。

木がらしやから呼びされし按摩坊

「七番日記」文化十三年十月に「寒月やむだ呼されし座頭坊」、又同十四年十一月に「夜あんまやむだ呼されて降る時雨」とある等が共である。

それはそれとして猶「考へさせられる『おらが春』」に一個處御示教を仰ぎたく思ふ點がある。それは「おらが春」の終尾に近い

廿七日晴

坊守り朝とく起キて飯を焚キける折から、東隣の園右衞門といふ者の餅搗なれば、例之通り來たるべし。冷エてはあしかりなん、ほかく湯けぶりの立ッうち賞翫せよといふからに、今やくと待チにまちて、飯は氷のごとく冷へて、餅はつひに來ずなりぬ。

我門へ來さうにしたり配餅　　一茶

是句は「七番日記」文化十年閏十一月の部に、又「成美評一茶句稿」の、校訂者荻原井泉水氏に文化十一年のものと推定された部に、初五「我宿に」として出てゐるのであるが、志田先生は「七番日記」文化十年閏十一月の上欄の記事「廿七日晴長沼呂に入」と是句との關係を云々されて「いづれにしても、一茶が呂芳の寺へ行つたのは文化十年閏

で文政二年十二月などではなく、又『坊守り朝とく起て云々』と云ふと一茶が朝飯さへ食はずに行つたことになつて一寸をかしなことになるのであり、それに原句の『我宿に』が果して寺を云つたものであつたかも疑問に思はれるのである。要するにこれには一茶の手妻があるのではないかの疑が濃厚である。」と云はれる。が、是は偶然「七番日記」の其條に長沼の呂芳の寺に行つた記事がある爲め、「坊守り」を呂芳の妻と感違ひされたのではないだらうかと思ふ。こゝは矢張り「八番日記」の文政二年十二月上欄の「廿七日晴東隣園右衛門ヨリ餅不配」とある記事に據るべきで、此處では唯舊作を融通してゐるといふのみで、是文章の出來た場合の事は極めて明瞭のやうに思ふ。是の「坊守り」が一茶自身の妻を指す事は

御安清被成候哉奉賀候。されば殘り候一男子十二月二十一日歿候へば、御咄しの坊守ほしく候。參りて御賴み申上度候へ共、御地は青蠅さはぎの風聞おそろしさに延引仕候かしく。（下略）

といふ、後妻雪女の媒酌を極めて遠慮がちに越後關川の淨善寺住職指月上人に依賴した、いかにも一茶らしさのあらはれてゐる點で興味もあり、從つて有名でもある、あの手紙の文言などからも疑問を挿む餘地はないやうに思はれるが如何であらうか切に御示教を仰ぎたく思ふ。

種々の點から見て隨筆集「おらが春」を一茶の作中の傑作とする事には何人も異存はないだらうと思ふ。是作に就き私自身變つた考へもないのであるが、唯其中の句を「七番日記」「八番日記」の句と對照して行つた際、頭に殘つたほんの些細な事を二三此處に擧げて見ようと思ふ。

まづ年代が接近してゐる丈に「おらが春」に最も多く融通されてゐるのは「七番日記」文化十五年の句であるが、

其中

名代にわか水浴る烏かな　（但しこの原作が）
苗代は菴のかざりに靑みけり
さらし布霞の足しに鋒へけり
松島の小隅は暮シて鳴く雲雀
通りぬけせよと垣から柳かな
餅腹をこなしがてらのつぎ穗哉

とこんなに夥しい春の句が實は其年の冬十一月に詠まれてゐるといふ事が奇異な事として頭に殘つた。念の爲め「七番日記」の其部を見直すと其處には春の句がずらりと並んでゐて冬の句は却つて極く少いのである。一體一茶はずつと後になつて季節外れの時などにも舊作を思ひ出して色々と推敲して見たり、又追憶作といふか、過去の記憶から新作もしたりする癖が有つたが、さういふ場合の句には「春」とか「夏」とか頭書するのが普通だつた樣である。「七番日記」を見ても文化十三年あたりから後にさういふ頭書のある句が目立つて多くなつてゐる。ところがこの文化十五年十一月の條にはさういふ頭書が全然なく、たゞ澤山春の句が書き列ねてある丈である。思ふに井泉水氏も「『おらが春』の一茶」で「一茶の生活が長い半生を通して漸く平靜を得て來た時が文化末年から文政初年にかけての時である」と述べてをられるやうに、この頃一茶は物質生活にも一通りの安定を得、又鍾愛殊に措かなかつたさと女のやうな愛兒をも惠まれてゐたので、其愛兒の發育を樂しみ乍ら、初春を待つ愉しい心で一ぱいだつたのではあるまいか。雪深い奥信濃の庵の中で愛兒を相手に靜かに春を待ちつゝある一茶。それを思ふと翌月に彼の

二つ子にいふ

這へ笑へ二つになるぞけさからは

といふ年内の歳旦吟のある事も成程と首肯されるし、幾十年目かに初めてめぐつて來た一茶の「おらが春」も實は既にこの邊にうごき初めてゐたのだとそんな事も想像されるのである。

露の世は露の世ながらさりながら

掌中の珠と鍾愛措かなかつたさと女の夭死を悼む文中に出てゐる有名な句である。ところが是も是より先文化十四年五月作の

露の世は得心ながらさりながら

の改作融通である事は既に諸家の指摘してをられる通りである。實際吾々は是句などに一茶の舊作を融通利用する癖を擴大して見せられるやうな氣がする。でいま是句に就いて氣附いた點を少し述べて見たい。まづ「露の世」といふ、この觀念臭い語の用例を「七番日記」に求めると

露の世の露の中にて喧嘩哉

露の世の露のなでしこ小なでしこ

露の世の露の小脇の鵜かひ達

露の世を押合へし合萩の花

などとある。一茶は是の常套語を使つて文化十四年五月に

露の世は得心ながらさりながら

といふ千太郎?の悼句を作つたのであらうが、五月に露で季が合はないので(秋)と頭書して置いたものであらう。其が、今度はさと女の死亡は六月廿一日の出來事であり、まもなく秋に入つたのであるから是で季もよく合ふ譯である。そこで一茶は、心の中に以前多くの場合「露の世の露」とつゞけたあの諧調の流暢さを回想して「露の世は露の世ながら」と改めて其儘利用し、而も季まで合ふのでうまく融通したと會心の微笑を洩したのではあるまいか。こんな詮索をすると、是句の價値は大いに減殺される。然し山口氏もいはれる如く一茶の中にはうそ吐きの一茶と正直の一茶と縺れ合つてゐるのである。是句などにも作の動機は兎も角も一茶は矢張り正直に涙を見せてゐるのだらう。實際

樂しみ極りて愁ひ起るはうき世のならひなれど……

とあの文章からつゞけ吟誦すると、氣分のつながりもあり、愛兒を悼む切々の情があらはれてゐて、眞に人間一茶の慟哭を聞く感がある。「おらが春」の、俳文につゞく句には舊作の融通された物が多いが、是句に限らず孰れも文章からつゞけて讀むと不思議に氣分のつながりがあり、極めて自然に吾々の耳に流れ込むのを覺える。是は矢張りその舊作に一茶が感情を又新たにしてゐる證據で畢竟一茶の特有の性格の中にある、正直さ、純眞さが然らしめてゐるのだらうと思ふのである。

さと女に對する親の愛をのべた文と句との次ぎに「より〳〵思ひ寄せたる小兒をも、遊び連にもと爰に集メぬ」といふ前書があつて

柳からもゝんぐあゝあと出る子哉

蓬莱になんむ〳〵といふ子哉
年問へば片手出す子や更衣
たのもしやてんつるてんの初袷
名月を取ッてくれろとなく子哉
子寶がきやら〳〵笑ふ榾火哉
あこが餅〳〵とて並べけり
妹が子の脊負ふた形りや配餅
餅花の木陰にてうちあはゝ哉
涼風の吹く木へ縛る我が子哉
わんぱくや縛られながらよぶ螢

と、子供を主題にした句が澤山並べてあるのは「おらが春」の一異彩であるが、是等も其中の一二を除けば皆舊作であり、又、其製作の年代から見て是等が必ずしも一茶自身の子供を詠んだのではないことが明瞭である。而して其製作年代から見ると大體文化十年のものと文化十三年のものとが多いが、是には何か特別の理由があるのであらうか。

「おらが春」にはないが、

千太郎に申す
初袷にくまれ盛りに早くなれ

といふ句があるのも「七番日記」の矢張り文化十三年の條である。序に一茶自身其生歿等に就いて何も語つてゐない

この千太郎を一茶の二男で文化十四年五月生れ夭死とする説は何か基く處があるのであらうか。是「千太郎に申す」といふ句の出てゐるのはどこまでも文化十三年六月である。最近勝峰晋風氏の「一茶名句評釋」で千太郎を仙六の子とする說のある事を知つたが、種々の理由を擧げて其說に左袒されながら同氏が猶文化十四年五月出生說に從つて居られるのは、一茶自筆の「七番日記」に於て、この十三年六月の句は墨つきなどで後からの加筆とでも推定されるのであらうか。若し舊說が一茶傳の權威束松露香氏の「俳諧寺一茶」に根據を置くものであり、且つ該書の資料又はそれの取扱に何らかの誤があつてこの定說が生じてゐるのだとするならば、同書中の一茶奥羽行脚の年代の推定等と共に最早修正されなければならないのではないだらうか。一茶傳記中、奥羽行脚の事實の有無及び有りとせば其年代とこの千太郎のことなど、何よりも早くはつきりさせたく思ふのである。

こゝで元に戻つて

　焚くほどは風がくれたる落葉哉

の句、一茶のかうした作句態度から判斷してやはり良寛和尚の句の改作らしく思はれる。唯この句にどれ程の心情がこめられたものか遽に判斷する事は困難で、畢竟その頃の文章なり句なりを博く熟讀翫味した上で大體の事が判斷されるのであらう。それには井泉水氏などが既にさうしてをられるやうに、歲旦、歲晩の文なり句なりには比較的率直に感懷が洩らされてゐるものが多いから、さういふものを一番の手懸りとすべきであらう。この意味で「おらが春」なども共にぎやかな道具立にも興味があるが、其價値の大半は、こゝだけは新規に書き下された事疑ひなしと思はれる卷頭と卷末のあの有名な文と句とに在りといつてもいゝのではないかと思ふ。

懸想文のある觀察

――うす雪物語を出て――

折口信夫

去年から今年へかけては、どう言ふ緣か、「新薄雪物語」が、二度まで芝居に上演せられて居る。名高い狂言だけれど、「操り」は別として、實は其ほど、屢上演せられて來た訣ではない。假りに興行年表を作つて見ても、わりあひ稀にしか、舞臺にはかゝつて居ないのである。この二月以來、慶應義塾の若い人たちと、共同研究の課題として、草紙・淨瑠璃・脚本及び芝居としての「新薄雪物語」をとり扱うて見た。さうして其結果は、まだ連續中の事とて、何處まで進んで行くか、目分量も立たぬが、私は、私だけの目安を作つて見た。これを今度行はれる賀の祝ひの催しにまじつて、藤村先生に獻じたいと考へた。

芝居臺本としての「新薄雪」は幾種類あるか、今の處ちよつと、推斷は出來ない。舊い臺本を其まゝ使つたのもあらうし、勿論小部分の改竄に役者々々の爲勝手によつて、上演の都度必ず加へられてゐるに違ひない。さうした小違は全然問題とせない事にしても、尙想像出來るのは、上方の根本がそつくり、江戸に流用せられてゐる訣のない事である。「淸水觀音堂」を「新淸水」とする事によつて起る他の場面に及す地理錯誤などは、ほんの僅かの手違ひにしか過ぎない。歌舞伎芝居においては、寧ろさうした矛盾が將來する撞著と、擾亂との把捉すべからざる氣分に、ある評價

を繋けなければならぬと謂つた點すらあることは、言ふも更な事である。

如何に狂言らしいうそと考へても、又實際淨瑠璃の上で、幸崎の奥方の口を假りて辯護してゐるにしても、あの薄雪姫が謀叛の張本だと考へる事其自體が、滑稽に過ぎて作者の生活の淺さが悲しい。だがそこに、あゝした赤い姫を重要視せねばならなかつた傳襲の、何かゞあるのである。大體、淸水見そめの場で、左衞門への風流三昧を、而も三度まで繰り返してゐると謂ふ事が、薄雪物語としての眼目であつた。此如何にも、歌や判じ物ばかり作つて居る煩しい手順も、實は、芝居や淨瑠璃に先だつてあつた定本に對する義理だてと謂ふべきものに過ぎない。さうしないことには、「薄雪」らしさが、消えて了ふからである。淨瑠璃では、姫の文藻に富んでゐると謂つたことは、其から後には何のつながりもない事になつてゐる。

實は此一つ前に、「うす雪物語」との間に、「新薄雪物語」と言ふ同じ名の草紙があつて、此が亦隨分世に行はれてゐた。此五冊本の表題は、「賢女鑑新薄雪物語」となつて居る。淨瑠璃正本は、名題を以て正直に據る所を明らかにしてゐるもの、卽、「うす雪」から直に來たものでない事を見せたのである。此本は、內容から言ふと、八文字舍の歌舞妓淨瑠璃の飜案書卽正本草紙とも言ふべき系統に屬して、而も其古風な一つ、と言ふに過ぎないだらう。此本で考へられるのは、「賢女鑑」なる名義である。亡夫に義理立てゝ、三年に亙るまで男の心を受け入れずにゐた。而も全く「物のあはれ」を知らぬではなく、情と義理とを立てぬいた——美くしい捌き——わけを知る女だと言ふことを意味するのであつた。三年の後、初めて「谷陰の春の薄雪」うちとけて逢ひ初めたと謂ふ女として書かれてゐる。だが其だけで、「賢女」なる名題が說明しきれたとは思はれない。其捌きをよく心得たといふ事の第一の點は、理のつんだ美しい文を書き男の言ひなりにうかと乘らぬ才女、といふ點にあるものと思はれる。時代を接した賢女物語・名女物語、又

「貞女物語」などが亦、此流れと思はれるし、又聯想してよければ、「賢女手習鑑」なる正本も、「賢女手習井新暦」を參照して見れば、實方の愛人が、假名文の名筆といふ事になつてゐたのではあるまいか。

かうした型が、家庭教育の標目とする所の賢女と、武家の間で考へたのは、今少し前の時代の事であつた。文學は常に前代の固定を承け繼ぐものだから、尤然るべき事と思ふ。おほざつぱに言つて、武家前期――江戸時代前から、江戸初期へ持ち越した殼を、古典的な理想型として、替つた爲立てゞ作り活して來たのである。だから賢女の標準の更まつた時代に、尙且前代の賢女型を賢女として、飜案者獨り推奬してゐる形と言ふべきである。だから、勿論前代の賢女で、近代の烈婦を意味するのではなかつたのだ。

其前がとりも直さず、世に謂ふ「うす雪物語」である。『父はさいさき和泉殿と申し、君の御名は薄雪。御年十七になり給ふ、と語りければ、男かへして「御宿はいづく」と問ふ。「一條殿の御内」と申しける』とある外は、種姓知れぬ女主人公である。勿論をとこせぬ女とは書いてない。正本草子「新薄雪」の方では、死別三年を守り遂げ、その後園部――此では衞門――に相なじむ事になつて居るのは、飜案者が、さう解釋したので、自分の都合で引き直したと言ふよりは、「うす雪」の書き方自體に解釋がつかなかつたからであらう。「うす雪」では、その男は現に、生きて居るやうでもあり、死んだときめてかゝれば又、さうの様にもとれて、表面甚茫漠としてゐる。「一條殿みうち」と言ふのは、父が、一條殿下の殿人と言ふ風に解せられて居る様だが、其なら「父は云々」との答へや、「御宿はいづく」の問ひなどが、心理的でない。くどい問ひ方と言ふ外はない。寧、薄雪自身のありかを問うたに對する答へとして、一條殿の内人なる事を答へてゐるものと見るのが正當であり、又さうであつてこそ、「薄雪」の男の本體の、模糊とし

てゐる理由も知れるのである。卽、女は、公家女房であつたのだ。當時の人が、公家と御所とを一つにして考へて居たところから出た、所謂内裡上﨟として書かれてゐるものと見るのが、ほんたうの讀み方らしく思ふ。雲の上に仕へる女性なればこそ、歌もよみ、「やまと詞」――雅詞・隱語を意味する――も、自由に使ひこなした訣であらう。それでこそ、淸水の舞臺における衣裝の空想的な形容なども、合點のいく訣である。「なびくなよ。わがしめし野の女郞花云々」と言ふ歌に前行して、「わがぬしさまのこの一首よみおき給へば、如何で空しく候はむや」とある。

その上わがぬしさまとは、互にふりわけ髮の頃よりも、一つ處にて馴れ參らせて候……わがぬしさまと我が身も「われならで、下紐とくな」「二人して結びし紐を」。この如くかね言候まゝ……

此らの文は、必しも所謂「わがぬし」の故人であることを妥當とはしない。而も啓蒙時代の擬古文として、用語が適確でなく、雅語の氣分にひきずられて行つてゐることが考へられねばならぬ。「わがぬしさま」の狎れ〳〵しいなまめかしい言ひ方も、男の高位でないことを見せたものと言はれぬ。謂はゞ、出たとこ勝負のやうな文章なのである。ふり分け髮云々の如きは、唯「つゝ井筒」の引き歌などを匂はしたかつたからに過ぎない。

○まことなるかな。けんしん二君に仕へず、貞女兩夫にまみえずと申し候。……

○その後、大臣(百合若)御歸朝ありて、三年の後に、(にひ?)枕、ひとへに女のかゞみなるものを、曇り候うては、わがぬしさまに、ふたゝびおもてを見せ申さむことなりがたく……

とあるので見れば、「わがぬし」は生きてゐる事を示したのである。兩夫は、前夫を言ふのでもない。女の鑑なるものをまでは、「百合若北方」を例に引いたまでゞある。女の返し第一文の

わが身かみの木にて、おんたゝりも如何。おそろしや〳〵。

とあるのが、大體男の種姓・女の身分を暗示してゐる筈である。つまり極めて高位の人に仕へるものなればこそ、かうした言ひ方をしたのだ。最初に可なりはつきりと出してゐながら、後ほど、觀照の行き屆かない作者の常として、文につられて形を流して了つたのである。萬葉あたりなら、唯ぬしある女と言ふだけにも、「神の木」云々と使へる筈だが、後世はかうした語は、もつと重壓を持つて使はれるのである。身分高く殆、生殺與奪の權をも持つてゐる人なる感じを出したものと見ても無理ではない。

男の第二文、横山殿の御臺所に、叡山の稚兒の忍んだ物語を書きおこしたのも、其とは身分の違ひこそあれ、薄雪の、貴人に仕へる女性であつた事の比喩にして居るのである。薄雪の死後、

むざんや。この君。こぞの五月のころは、淸水詣でのをりふし、見そめしより賤(シヅ)が心をつくし舟

とある「賤が心」は、單に筆拍子に乘つたものでもあるまい。女の地位に對して男の階級の低かつたことを、作者が心に持つてゐたからの語と見るのが正しいだらう。

內裡上臈の樣な位置は、主(ヌシ)定まつたやうで、又極めて自由なものであつた。だから、閨部を通はしたことは、唯の夫ある女の密通ではなく、昔からの物語の世界には、あるべかゝりの題目、となつて居た女房の戀なのである。日本における「ゑるてる」の物語が、極めて辿々しいものであつた事は、考へれば寂しいことである。唯、此笑ひたくなる悲劇物語が、世間考へる如く、最初の消息小說であつたか如何かは、極めて疑問である。

此書物の體裁から見て、第一に考へられることは、恐らく最初から、かうした消息小說が計畫せられたものでなからう、と言ふことである。我々が最初に考へてよいことは、「うす雪物語」以前に若干の消息小說があつたらうと言ふ事である。うす雪以前にも、若干の「うす雪」其他の物語があつたであらうと言ふことである。此には、まづ王朝からの

長い複雜な文學の諸相を思浮べる必要がある。時代の隔り過ぎてゐることを顧慮するのは、却てよい考へ方ではない。なぜなら、武家前中期を通じては、やはり王朝の物語が、最近に書かれたものゝ様に、教養ある人々には讀まれ、講ぜられして居た。その次第に書き直され、書き崩された物語、主として中篇物語――實は近代的には短篇――が、與へられたのは、地方の教化洩れた人々の爲にであつた。御伽草紙系統の文學に入る所の戀物語は、かうして生さうした擧句、これがまあ、源氏物語を前に持つ文學か、と思はれるほどの、末流の小文學ばかりとなつた。源氏ととり組むことの出來ぬ人々が、もつと小さな住吉・落窪更に以下の物を、作りくづし、立て直して、自ら安易な物語の多くを成立させる事になつたのである。「うす雪」なども、もつと多くの物語が殘存してゐるのだつたら、成立の自然な徑路を示す事になるのだらうと思ふ。さうして此は同時に、この懸想文をつらねた物語に止る事でなかつた筈である。而も、此過程はそんなに長い物でなく、王朝の或物語とその崩れた物語とから、纔かの距離をおいたゞけで、飛躍して此物語の類に到つたもの、と見るのが正しいであらう。宗教的な內容を持つたものだけは、民間の說話をとり入れて、ある進歩の兆しを見せ、追つては、支那小說の飜案のとり込み口を開いて居た。が、戀物語においては、さうではなかつた。常に古風に則つて、空想的な表現をする外はなかつた。たとへば戀物語の飛躍して變型を作つたのは、寺家の兒物語の類である。此種のものに、最著しく其が見られる。どれもこれも同じ趣きで見初め、同じ徑路を蹈んで、悲劇的結末に到つてゐる。よくも類型を守つたもの、と思はれる程である。其がまた更に一つの失戀小說の型として、普通の戀物語の上に戾つて來たのが、江戸初期の假名草紙の戀である。男女の間にも、やはり兒物語に馴された「あはれ」が要求せられてゐる。小說愛好者が其を欲し、作者亦、あり來りの安易な感傷に筆を馳つたのである。「薄雪」がさうだし、「葛の恕之介」がさうだし、「是樂物語」がやつぱりさうだし、類型は幾らでもあるが、元々さうし

た筋立ては、異性間の戀愛では、當然幸福に轉向する宿命を持つ筈でゐる。其で尙其傾向を守る者は、「へるまん・どろてあ」でなければ「ろめお・じゆりえつと」へ行き、其よりもつと、急に踵を旋して、貢女の戀に奔つた訣である。

「うす雪物語」などは、實は我々少し、文學的に考へ扱ひすぎてゐるのではないかと思ふ。此には、今一つの見方があつてよい筈だ。この系統の草紙類が、何時までたつても、忘却しなかつたのは、文範としての意圖である。錦木・小夜衣・當流雲のかけ橋・薄雲物語の類、一方多少の加減をすれば、實用の懸想文にも出來ることである。此點「萬文反古」の如く情熱によつて、自ら文學にまで飛躍した作品とは違ふ。おなじ事は、「八文字舍」の氣質本が、却て元の匂ひを止めてゐるに關らず、先行した同じ西鶴の浮世草紙が、殆、案内記的な滓を燃燒してゐるのと、共通の眞實を示してゐる。區々の事よりも、かうした點で、西鶴の第一義的文學者であつた事が思はれるのである。

私どもは、かうした小説の想像圖を設計してゐる。雜多な階級の女に與へる文例を網羅するよりも、まづ口切りから逢初め・後朝と謂つた邊から初めて、男女間のとり交せの色々な場合の文の型を集めたのが、次第に一對づゝの文と文との間に切實な脈絡を思ひつく樣になつたのだらう。而も其は元々、堂上方の間に行はれた女房に關した懸想文の形をとつたものが多かつたのであらう。大抵は、創作であらうが、其文中に含んでゐる歌は勿論、實地の利用を思うて集めた懸想文は、わりあひ來歷の正しいものであらうといふことだ。卽、文はまだしも、新作でよいが、歌は古歌を尊ぶといふ習慣を、早く作つて居たのである。だから懸想文には内容から見ても、自然堂上の人々の戀の歷史を、纒綿させてゐる訣である。外見は、公家堂上から出た一つの子女教育の一つの方法として扱はれたのだ。その點、普通の「をそくつ繪」がさうであつたのと、全く傾向を等しくしてゐる訣だ。

懸想文は、女用文である。女に與へる文體だから男のも自ら、女文の形を採る。こゝに、文章發想法の一つの考へ處がある。が同時に、男から寄せられた消息に答へるのは、女として最重大な爲事であつた。王朝の女流の心を盡した事で、賢い女房の貴女に侍つた理由でもあつた。之を手習ひ、之によつて男女關係を見事にとり捌き、而も男を牽引して行くに足る表現力を養ふ事が肝文であつた。卽、賢女たる所以である。此が、王朝以後長く、公主――御守殿に至る――以下の女性に仕へた後見の女房の、與へた教育の全部であつたと言つてもよい。だから、江戸以前頗早く、さうした事の爲の教科書なる手本が幾種類もあつて、江戸の印刷時代を待ち受けてゐた觀があるのだ。江戸に入つて急に面目を改めたと見るべきは、女用文が、男の爲のものとなつた點である。女を說き伏せる爲に習ふ、といふ事になつて來た。江戸初期の隱者――藝術家――が、上流の家庭に跳梁して、風儀を紊したと謂はれてゐるのも、この戀の諸分を傳授した爲である。これが家女を對象とするのでなく、段々形態を成しはじめた「里の」をんなを相手にする樣になつてから、問題が大きくなつた訣である。

手本は卷物を原則としてゐたのであらうが、次第に句双紙同樣の形式を採るやうになつた事は、御伽草紙の上にもあつた事である。

手習はれるものと、讀まれるものとの間に、溝を据ゑて考へる事は、我々の時代の事で、昔はさうではなかつた。寧手習ひも、讀みものも、又場合によつては、謠ひ物も、一つの目的から出てゐた。だから手習ひの手本が、自然讀み物としての用途にも叶ふ樣になつた。さうして其が、人の心牽く方に趣くのは、當りまへの事である。「橫」の草紙が讀本に近づく過程として、假名草紙として印刷せられる樣になつた。懸想文集の場合は、どこまで行つても、當事者は單に、二人である。單に二人づゝの組み合せの間にとり交される文である。極めて懸け離れた內容を持つたの

でない限りは、別の組々互に聯絡のつき易いこと、此程容易なものはない筈だ。思ふに、其に對してかけた序文と謂つた形のものが、次第に全體を統一する事になつたのであらう。評判記にも、此事實を見た。もつと端的には、一代女その他の書き出しからでも推せられる。又譬へば、詞花懸露集――堀川院艶書合と同本――の藏人頭と三位卿の姫君との上に繋けて言つたのが、自然後に聯絡あり相に見える所を見ても知れる。一代男の類の好色本が、はじめは一人格で總括した樣に書いて置きながら、後は直に四分五裂、統一も聯絡もなくて而も、不思議とも思はれなかつたのは、江戸文學における常識となつてゐる所である。其よりももつと單純な、戀の抑からとり交す手紙の排列、はじめに事の起りを記して置けば、後は自ら納得のゆく事である。

「うす雪」の後段、兒物語の結末のやうな部分は、寧新しく加つた脚色と見てよからう。別に手紙の間には、さうした結末を豫想させるやうな事は用意しなくてもよい。唯、幸福な終局の後に、更につけ足して、當時の傾向である發心物語・懺悔物語の形におちついたと見るのが、ほんたうであらう。さうなくては、江戸初期までの讀書鑑識からは、何となく不自然感が殘つたのだらう。つまりかうして、時代的な小説精神に觸れて行つてゐる訣なのだ。別の言ひ方からすれば、末段は古い姿に返り、書き出しは新しい脚色を持つたのだ。かう考へると、私の説明した薄雪の公家女房である事が愈しつくりとして思はれて來る。

だが、我々の懸想文についての考へは、此だけで溯りきつた事にはならないのである。

「詞花懸露集」即、堀川院艶書合は、言ふまでもなく、昔の物の名をとり、實を構へて行つたものである。其下の卷の初めに、原書「堀川院艶書合」を収めてゐる。上中二卷が、增補と言へば增補だし、名を借りた義理立てに、本文

を附載したと言ふ風にも言へる。此に似た體裁をとつたのは、春を描く本には常に見られる事實である。内容は、町家の男女の斷篇的な痴戲を寫してゐても、後づけには、歌合・戀歌集の類が出て居り、又卷頭には堂上姿をつけるのが、その古い物の型になつてゐた。

原書「艶書合」は、普通の歌合と多少違つた樣式で傳つてゐるが、繪合・蟲合・根合、多くの「物合」類を考へ併せると、「歌合」には違ひないのである。唯、「物合」の類は、文學としてよりも、裝飾的な意味を深く持つてゐたものなることが察せられる。其だけにまたさうした形式の――判詞や勝負などに重きを置かぬ、歌はあつても、歌合と謂ひきれぬ謂はゞ唯「あはせ」とでも謂ふべきものが育つて來たのである。此系統で、著しく目につくものは、「ものあらそひ」であつた。「四十二の物諍(モノアラソヒ)」又は「十番のものあらそひ」などが、其例である。

私は、「うす雪物語」の樣なものを、ほんのぽつゝり海中に湧出した浮島の如くは考へないのである。譬へば、一つだけ離れて立つてゐる樣に見えても、下には海底に續く隱れ瀨がある筈である。ある物からある物へと明らかな連絡を持つて、此小説が現れたのでなくても、其は問題ではない。當然一方にひよつこりと――謂つた狀態で――でも「うす雪物語」の出現するに到つた因緣の說明が出來れば滿足なのである。人の行動や思考は、明らかな意識の上に起つて來たものよりも、何時となしに觸れた記憶の殘像の、複合の衝動によつて出來ることが多いのである。さうした形を組み立てゝ見るだけに終つても、寧私の爲事は、張り合ひを感じる。私の涉獵の狹さ、恥づらくは「十番のものあらそひ」と一つ型の物を見て居ない。だが、其が特殊な感じを持たせれば持たせるだけ、必他に幾つかの類型の存在が思はれる。飛び離れた特殊が、存立の價値を占め得る理由がないからである。「うす雪」なども、おなじ理由で、私の心は類型の探究に進むのである。

引例は初めからしないつもりであつたが、納得の速かな事を望んで、一部を援く。

一番　左

しなにもよらじ。見る目も言はじ。心づかひゆゑありて、きやしやにやさしく、何となくほれ〴〵として、月雪花紅葉のをり〳〵、あはれなるゆふべ、かなしきあしたの心にも、情あることのはをみづくきの跡に待ち見む時は、我も心づかひせられて、返りごとは如何など思ひて恥しかるべき人ぞ、おもしろからむ。

右

折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えぬべき玉篠の霰は、心おかれて頼しからず。たゞ情の方深くして、松山の浪越えざらむ人の、見る目あく事なくうつくしくして、春の曙の霞のひまの樺櫻を見る心地せむ人に、千年萬代と契らばや。

判云。左の月雪、右の霞曙、とり〴〵にて、いづれと定め難けれども、霞のうちの樺櫻の色おくれむこそ、花のなごりにやとねんなき心地して。

十番ながら、皆源氏物語の氣分の中に動いて、源氏自體の用語をひらめかして居る。歌でも、詩でもないところに變化がある。而も、その開口の文句も亦、其艷詞と大同小異である。だが、ある宮仕へ所に居る女房たちが思ひ〳〵に、男とのなかからひのかうありたいと言ふ空想を述べ合つた果が、「このざしきにおきて、ことばを交して、慰まばや」と言つて、筆に書き記したのを、左右に分つて勝負を定めたとある。其を、すき心ある男がぬすみ聞きした、と言つた形である。卽、その長い「開口」の外に、短い跋の樣なものがつけ添へてある。

「艷書合」に對して、此は謂はゞ「艷詞合」とでもいふべきもの。卽寧、「懸想文合」である。唯、かうした女がよい。かうした間柄がろまんちつくで好もしいと言つた左の提言に對して、右は反駁してゐるのである。此が、其客觀態度から一轉

て、當事者同士の問答になる事は、「艶書合」が戀人同士の氣持になつて作つて居るのから見ても、今一歩の問題である。一方歌合の方では、艶書合だけでは物足らず、更に閨怨の歌を鬪はす「妬歌合」と言ふ類まで出てゐる。戀ひ初めから、戀の成るまでに止らず、其なからひの崩壞を思はせる悲戀までも、進んで來たものである。

歌合せが、文學遊戲として早くから、架空な想像や、虚構に走る傾向を持つて居た事は、右の事實からも考へることが出來る。風雅から出發して、實生活に關係ない境地を詠じた作物を、互に合せて喜ぶ。虚僞の上に立つて、納得づくで誇張を鬪技する。此はある暴露興味の上に立つ、後代のすゐ—推—通など言ふものに通じる所ある一つの文人氣質である。かうした好みが文壇に行はれかけると底止する所の知れぬ程、文學は空想化して行くのである。だから、新古今時代などは、此立ち場からも觀察しなければ、あのろまんちつくな態度と文學的過ぎた作物とは、理會が出來ないのである。王朝末に於いて、歌合が作り物としての一面を生じて來、其が武家代に入るに從つて、甚しくなつて行く。唯の歌合と、滑稽讀み物——又は見る物——としての歌合とが、兩立して來た。後者は、段々俗化すると共に、所謂後の浮世風になつて、一面繪詞と提携して來た事から、寫實的な一角を開いて來た。つまり、虚僞と實生活との兼ね合ひにおいて、近代の俳諧に觸れて來る譯だ。

多くの「職人歌合」が、其著しいものである。此職人歌の發生については、今述べてゐる暇はない。唯此歌合が、繪詞の一種である點において、他のある種の歌合の起因を窺はせる點がある。十二類歌合・調度歌合・鳥歌合・蟲歌合などが、從來我々の想像してゐたよりも、もつと簡單に說明がつく事になる。繪樣としてのおもしろさは、百鬼夜行繪卷や、鳥獸人物戲畫などを基礎として居る訣だ。唯一點、さうした異類が、どうして歌を詠じるものと考へられたかと

言ふことだけは、此事を原因として說く事は出來ぬ。却て結果として、繪をとほして歌合の形を採つたもの、と見るべきである。唯今の處では、かう考へる。馬名合とか、鷹歌合とか謂つた愛物を主題としたものは、此が繪卷となり、又百首歌ともなつて、形を留めてゐるが、異物歌合は勿論、異物小說の出て來る本流のやうに思はれてならぬ。此から見ると、職人歌の一つの源に、貴族家庭における亦一愛物なる隨身及び馬を描いた「隨身庭騎圖」などゝ、旨を一つにする所もあるのであらう。

人間の中、最凡下に見られてゐた、土地なき民なる職人を、歌詠みに爲立てた滑稽は、何處まで行つても、その矛盾感が解消せられないで殘つた。歌詠まぬ者に、歌詠んだ形を裝はせる、擬裝（ポウズ）だと言ふことを、人は知つて見てゐるのである。そこに文學鑑賞の餘裕が開け、笑ひが生じる。職人が繪詞の上で歌を詠むのだから、今一飛びに、繪詞の上の動物だつて、妖怪だつて歌を詠ませるに適しない事はない。寧、詠みさうもないものが詠む事によつて、興味は增すことになるのである。人事に關した歌は、昔から宿命的に狂歌式な色彩を持つて來るやうになつて居た。

古く、曾丹集においても、散木弃哥集においても、さうした傾向が著しく見えるのである。職人歌が、狂歌としての時代を劃してゐるやうに、又動物を凡下の人間竝みに扱つた鳥蟲歌においても、二重に狂歌としての味ひを持つて來た訣である。

歌合には、開口の文句がわりに古くから重要性を持つて居た。此は連歌の卷の序文などゝは、遙かに進んでゐる。天德女房歌合・賀陽院水閣歌合などにも、既に見えて居るが、後世益々開口の詞を練つたやうである。其と今一つ、歌合が單なる歌合でなく、讀み物として興味多い小說的な趣向を持つた物が多くなつて行く程、開口の文句に、其を左右する力が出て來るのである。又其だけ、此點に力を入れて趣向が凝されて來る。言ひ換へれば、歌合が繪詞を作

ふと共に、繪詞の第一段に最力がこめられる事である。

歌合が空想的であればあるほど、開口は、小說化の傾向を強くする。職人歌合においては、東北院職人歌合が型をなした、とも見られないでもない——鶴岡放生歌合・曼珠院歌合等——が、何處かの祭會に來合せた職人の詠んだやうに開口は趣向せられた樣である。尤、祭會の砌に歌合を行ふ事は、事實としても屢あつた。唯職人の場合、さうした此等の人々の集り易い機會である事が、開口の筋立てとして最好都合だつた事になるのだらう。七十一番歌合の樣な進んだものになれば、さうした約束を必しも守ることを要せなかつたのである。又異類物の歌合になると、もつと脚色を持つて來なければ、誰の心にも不自然が感ぜられる。言語なく精靈ない生類・器物の類が、歌合を試みるに到る筋道を面白く書くことに、開口の目的が進んで來る。だから、歌合の開口が、廣い意味において、我が小說史にしかけた役廻りは、なか〳〵考へると、大きなものなのである。江戸の浮世草紙の起りが、決して單獨に評判記の開口のみから生れたのではなかつた事が訣る。而も跋に當る部分は、此等の趣向の結著をつけることになるのだから、亦一つの筋を以て、書き納められる。殊に「十二類歌合」の場合の如きは、全く鴉鷺物語・魚鳥平家の前驅をなしてゐるもの、と見てさし支へがない。

違つた意味において、「鳥歌合」なども、鴉鷺物語以後江戸の赤本・黑本に接續する異類合戰の俤を、既に持つてゐるのである。歌合から合戰物の精神の出て來るのは、興味のある問題だ。其と同時に、お伽草紙に見えた異類戀物語で、小動物が戀歌を詠むのなども、歌合繪詞を先に立てゝこそ、はじめて考へ得ることではないかと思ふ。

狂歌の發生及び展開の徑路は、一朝一夕に說ける問題ではない。だが歌合が、其大きな搖（エブ）り籠（コ）であつたことだけは疑はれぬ。

かう見て來ると、おぼろげ乍ら、「うす雪」のやうな懸想文小說の成立及び、其についてゐる發端の筋立ての發生に、目鼻のついて來る樣な氣がする。

「歌合」の衆議判の左右念人の詞と言ふものは、歌合の形の上に更に、今一つ「詞合」と言ふ形が重る訣で、其は、「ものあらそひ」から、更に詞やりとりの樣式を生み出す道筋を仄めかしてゐる。但、後世存するものは、唯當座の論義の要點だけを書いたものらしくて、稀にわりあひに、親切に書いたものゝあるのは、多くは「自歌合」を、さう言ふ形に僞立てたものらしく思はれる。當座の氣分に支配せられて鬪爭的になることもあるが、概して紳士的なものゝ多いのが、衆議判の「念人」たちの詞である。此態度が、「歌合」を離れて、文學表現の一樣式として採用せられるやうになれば、卽前に言つた「詞合」である。「十番のものあらそひ」などの、出自はかうして自然に說明が出來る。此が、對話意識を濃厚に持てば持つほど、候文體に近づく訣で、我々の考へる近代の「懸想文」を合せた形は、直に導かれて來るものと謂へる。

譬へば往來文で見ても、古い物程「候」を挿入する事が少く、又寺家のは、わりに新しいものでも、「候」の少い古風を守つてゐる事が見られる。「候」のむやみに多くなつて來たのは、一つの流行と見るべきもので、やはり「女文」の影響である。たとひ男の名であつても、女房の宣旨書きの手順を經たものは、同時同人の意志を發表するものにしても、男のものとは違つてゐた。其著しい點が「さぶらふ」を語尾に交へることであつたらう。其が次第に男の本書の上にまで及んで、「候」字を隨所に挿むことになり、而も時を逐うて、段々數を增すことになつたのである。

思ふに、生きた語としての「さぶらふ」が、接尾語風に用ゐられ出したのは、其元來の用法との差異や、其流用の語氣の感じなどから推して、可なり輕佻な、卑俗なものを思はせてゐたに違ひない。其流行語式の吸引力が、一擧に、

何時か極めて自由に用ゐられる對話語となり、一方亦同じさふらふの持つ古風な堅い感覺を解消して、之あるが爲に、文語としてのしかつめらしさを感じさせない様になつたらしい。つまり會話語として活き〳〵と用ゐられたのが、其馴れ〳〵しい口氣をそのまゝ移す文章としての消息文に、入りこんで來たと思つてよからう。卽途は二つ、一つは宣旨奉書としての、「御座り奉る」式の堅い感じを表す側において、又一つは、次第に其感じを碎いて平常の語で話す様な心持ちから。男文に入るに從つて「候」が一つの文語の體を固定させるやうになつて來たのは、自然な事である。だが、其とて、往來文における「候」と、懸想文の「候」とでは、剛柔の相違があつて、何時までも、とつてつけたやうな感じのあつた往來の候に對して、此は文中に融けこんで、一つの柔靡な氣分を作るものとなつて居た。

私が候文體を語るのは、長歌體から共に移つて行つた懸想文の徑路を考へたかつたのであつた。

懸想文は、早くから戀歌と竝行して居た。私の謂ふ戀歌は、長歌樣式を採るもので、短歌なのは、艶書と言ひたい。艶書は、「艶書歌」の義で、艶書なる懸想文に含まれてゐる歌なるが故の略稱であつた。元來戀歌は、筋を異にして發達した。さうして、懸想文に先立つて行はれた。殊にその長歌樣式をとるものは、極めて古典的な感じを含んで居るもの、と見られる様になつてゐる。古今集・拾遺集の長歌で見ても、其に纏綿してゐるものは、戀愛氣分である。如何に、戀愛の意志表示用に、用ゐられ慣れて來たかゞ察せられる。而も、其が正式な樣式であること、及び必しも懸想用にばかり用ゐられてゐるのでないところに、前代を顧みさせるものがある。萬葉には、さうした傾きは見え乍ら、却て挽歌の方に、平安朝の懸想長歌に續く氣分が含まれてゐる。其は、愁訴し哀願すると謂つた表現を持つ。挽歌以外に此傾向の著しく見えるのは、萬葉集では、壽詞(ヨゴト)系統に屬する賀詞・伏奏の類の誓約の意義あるものだ。其に濃厚

に出てゐる。だから、續日本後紀の興福寺大法師等の賀歌（嘉祥二年三月）を見ても、其來る所が知れるであらう。寺家の文學は、常に古典的であつたが故に、古式の奏壽が用ゐられたのである。世間では旣に、其用途は擴まつて、近代樣の方面が展けて居たと思はれる。卽戀歌なる長歌としての道である。作り物語には、其があまりに古典的であるが故に、現れて來ないのが普通だが、實際には、上流において贈答の一形式として、これが用ゐられた事は考へられる。

我々は、戀歌と願文との間に、緊密な繋りを考へて居る。戀愛・哀訴と儀禮では、不思議な對照を作る訣だが、古代信仰を引いた魂ごひの精神を共有するものであつて見れば、さうでない方が、却て不思議な位のものだ。かうして元一つのこひの精神から分化したもの――結局訣り易く言へば、戀の願文とも言ふべきが、戀歌だつたのである。私の今まで持つて來た推測では、此を戀人の前で口誦するのが、文使ひの重要な爲事ではなかつたか、と言ふのである。多少、誇張を交へて言へば、長歌形式は、平安朝においては、「うつたへ歌」としての用途においてのみ傳つた、と言ふ事も出來ようと思はれるのである。其が懸想文と歩みより、寧懸想文を作りあげて行つたもの、と考へられる。後世の懸想文が、美文脈を辿り、殊に著しく律文的である事は、長歌を根柢として成立した爲に過ぎない。

懸想文集の多くが、其文體において、何れも長歌もどきの文章で、動もすれば、七五調になる傾きの多い理由も、これで訣るのである。

上流社會の成婚の儀禮としては、久しく消息使・後朝使の遣される風が傳承せられた。此は必、文書を以て意志を傳達する方法を採らなかつた時代から、續いてゐたことであらう。婿とりには、必まづ男の方から消息使が出て、嫁の家に行く。これには返り事のないのが古風であつたが、早く王朝にすら、此風は破れてゐる。一體婿が訪れ、歸つての翌朝、後朝使が出る。これに對して、はじめて應へがあるのである。此等の文學が、短歌になつたのも、さのみ

古い事ではあるまい。やはり長歌を以てするものであつたと思はれる。其で、大貴族の間には、事實、長歌が久しく行はれてゐた。大貴族の生活を對象としながら、源氏物語に長歌のとりやりの見えないのは、其が近代生活に目標を置いた小說であつたからであらう し、又さまで忠實に、公家の舊生活を寫す必要を認めなかつた爲でもあらう。だが眞實如法に書くとなれば、さうした手續きが現れて來る訣なのだ。結婚の申し納れが、まづ正式に長歌ではじまつた。其形式が延長せられて、成婚後にも、又長上者に對しても、時としては、之を用ゐられる事になつたのだ。だから長歌は、實際生活上のものとしては、固定は固定のまゝで、やはり生きてゐたのだ。必しも萬葉きりで、死滅した訣でなく、文學として以外に、古今以後にも存續した理由があつたのである。さうして其が更に後世、長歌が滅亡しても、その音脚に準據した文章として、散文の上に生きて居た。王朝の物語の文體は、散文調と律語調との、ある調和の上になり立つてゐるので、物語それ〳〵によつて、その程度の相違はある。が、其基礎には、長歌の拍子の働きかけてゐた事は否まれない。但、不思議なのは、時代が降つて、物語が末流になるほど、七五調に近づいて來る。此は一つは、唱導文學の臺本としての立ち場から來るのだらうが、そこに尙、隱れた長歌との關聯があると思はれる。單に、低級な調子から快感を得ようとした、とばかりは說けないのである。

圓融院の果てのおほん年……雨いたう降る日……簑蟲のやうなる童の、おほきなる木の白きに堅文をつけて、「これたてまつらむ」と言ひければ、「何處よりぞ。」……。つとめて手洗ひて、その卷數とこひて、ふしをがみてあけたれば、胡桃色と言ふしきしの厚肥えたるを、怪しと見て、あけもてゆけば、老い法師のいみじげなるが手にて、「此をだにかたみと思ふに、都には、葉がへやしつる。椎柴の袖」と書きたり。あさましくねたかりけるわざかな。……仁和寺の僧正のにや……

それは、一條院のあそばした御戲れに過ぎなかつた。だが、此から聯想せられることは、寺家の消息が凡、卷數（クワンズ）とおなじ形式を以て、なされたことである。在家の尺牘も、寺からの堅文の影響を受けてゐるのではないかと思ふ。寧、その形式の方面よりも、內容において、特にさう考へられるのである。

まづ形の方から言へば、古く、萬葉集二、「吉野より、蘿生ひたる松が柯（エ）を折り取りて遣されたる時、額田王奉入（マツリイ）れたる歌一首。『みよしぬの靈（タマ）松が枝は、憐（ハ）しきかも。君が御言（ミコト）を傳（モ）ちて通はく』」などが、まづ一等古いこの方面の歌であらう。君が御言を持ちて通ふのだから、松が枝に歌或は、文詞が結びつけてあつた趣きに解することが出來る。單に、松柯を贈られたと言ふことでは釋けない。同じやうに說けるものに、藤原廣嗣の『この花の一よの內に、百くさの言（コト）ぞこもれる。おほろかにすな』。娘子の和せた『……は、……傳（モ）ちかねて、折られけらずや』がある。此も、私は艷書が櫻の枝につけてあつたものと見て來た。だがまだ、其頃までは、さうした風はなかつたものと見る方がよい、と今では考へてゐる。目に見えぬ言語精靈が枝に乘つて來るので、其を傳達―もつ―する役は、其々の靈木である。使人は唯、機械的に搬ぶだけであつた。神靈が神木に寓るのを、神人が動座させ申すのと、理において變りはない。おほやけ・貴人の使の、携へて驛路を馳驅した標は、梓の類の靈木で出來た杖又は棒―ほこ―であつた。單に、使のしるしだけのやうに見られるが、元は此木に貴いみ言が乘つて來た。さうして、目的地において、使人の口を假りて、宣り降されるものと信じて居たのである。額田王へ來た松柯も、廣嗣の愛人の許に達した櫻の枝も、皆其には、言語傳達の重い負擔があつたのである。その人の許に達すると同時に、使自身、託せられた語を宣る形になる訣なのである。其が次の形として、直に文書が、木草の枝に結ばれるやうになつたのだと解するのは、早計であらう。神及び貴人に物を贈る時、凡下の手を以てするのでないことを表する手段として、木草の枝又は、端的に造り花の枝に結んだ。言

ふまでもなく此は、神・精靈に、食物・布帛・器物等を饗ける爲の形式が、元なのであつた。

こゝに又、願文・諷誦文の類を、植物の枝につけた理由があるのである。さうして其結果と謂つた形で、逆に外へ出される卷數も亦、物の枝につけられるのが、原則のやうになつて行つた。此風が廣まつて、消息文が、種々の枝・竹などに括られるやうになつた徑路は察せられる。が、歌合の一類「物合」の中、殊にくり返された前栽合せ・根合せの如きは、消息往來の形よりも前の姿で、寧、願文など、性質を同じくするもの、と思はれる。歌を献る際、其をつけた物の枝に寄せて歌ふ風が變じて、歌に叶ふやうに、其々の枝を配合したものゝやうに、感ぜられて來たのである。

內容において特に、卷數の影響の下に、書簡文が發達したことは今後、注意してよいと思ふ。鎌倉時代以後、日本の漢文は、變化に向つて飛躍した。が、其潮流によつて、尺牘文の傾向が、新しい方へ轉換したのではなかつた。なぜなら、其以前既に、往來の體は出來て、其が更に、自由な形に崩壞しはじめて居たのだ。明衡往來以下貴嶺問答・十二月往來・尺素往來・釋氏往來・庭訓往來の類を、次第に眺めて來ると、年代を逐うて、ほゞ文中に「候」を加へて來る痕が、明らかに見えて來る。寺及び在家の政所と謂つた事務管掌所から出る文書の體が、時代を經て非常な變化を重ねて來た。

こゝには、姑らく古代に溯る。難波高津宮の時、山城筒城宮の后宮へ、丸邇口子ノ臣を遣はされた時の歌、

みもろの其高きなるおほ猪子がはら　おほゐこがはらにある　きもむかふ　心をだにか、相思はずあらむ』

つぎねふ　山背女の小鍬持ち　うちし大根　根白の　白たゞむき　枕かずけばこそ、知らずとも言はめ』

かれこゝに、口子ノ臣此御歌をまをす時、いたく雨ふりき。こゝにその雨を避かず、前つ殿戸に參伏せば、違へて後つ戸に出で給ひ、後つ戸に參伏せば、違へて前つ戸に出で給ひき……こゝに口子臣また其妹、又ぬりのみ三人議りて、天皇に奏さ

しむらく…………

消息の如何にして達せられ、又返り事のどうして出されるか、と言ふ事が、かくの如く、すべてが逆に行はれてゐる場合において、却て明らかに察することが出來る。御製を諳誦した事、それを耳に承るまいとなされた樣子から、上聞に達せずば退出しまいとした姿、又貴人に代つて、侍臣たちが、代作の返事を與へた事もわかるのである。又、もつと適切な例を擧げると、安閑天皇・春日皇后の御歌である。殊に御製の方は、大國主・沼河媛をつまどひした時の長歌によく似てゐる。思ふに、かう言ふ儀禮には必、先代の舊事が用ゐられたに違ひない。かくの如くにして高志國に妻どひはせられた、と言ふので、其先例として詞章が復誦せられた訣である。前代詞章を、兇詞同樣に唱へることによつて、其詞の威力に與らうとするのである。謂はゞ、婚禮に先立つ祝言とも謂へるが、一方にはもつと力強く、消息使の唱へる詞としての、活きた用途を持つて居たのである。事始風に考へれば、此故事によつたといふ信仰を以て、消息使の發向する風習が續いたもの、と言ふことも出來よう。が其よりも、ある時代から常に彼舊事を反復したことは、逆に書使の役を生み出すやうになつたのである。

大國主等の歌は、單に孤立して古に存在した詞章ではなかつた。世を經て續々として類型がくり返された。長歌使用の一面が、大きに開けて來たのである。さうして祝詞系統の壽詞(ヨゴト)的な領域が、長歌の上にも現れたと見られる。萬葉の長歌に、祝詞・誄詞・壽詞の代用の樣に見えるものが、多く出てゐるのも、其結果であらう。

平安朝の長歌が、單にかつたるい文學遊戲だけに用ゐられたのでないことは、既に述べた。だが同時に、よごと・懸想文として慣用せられた文體につき纏つた匂ひを利用して、文學を作ることはあるべき事である。而も何かの意味

において、哀願・愁訴と謂つた氣分や、目的を示してゐることも事實だ。

古今で言へば、「よみ人知らず」の長歌は、懸想文であり、伊勢のは、同じ系統の哀傷歌である。貫之・忠岑のは、復奏であるだけに、壽詞としての氣持ちが深い。躬恒の作は、文學作品と見るべきだが、述懷以上に出てはない。拾遺で見ると、よみ人知らずの懸想文、東三條太政大臣のは、圓融天皇に奏した謂はゞ哀願である。源順のは、大中臣能宣の同情に訴へたもので、「返し」がある。千載集では、俊頼のが、「百首歌奉つた時の述懷」とあるとほり、述懷に何處か愁訴を含んだものである。百首歌を召された光榮を歌ふより歎いてゐるのは、堀川のでもさうだ。崇德院の御製は、人臣の作とは違つた風には見えるが、辯疏らしいものを含んでゐられる。蜻蛉日記の三首は、姤歌とも言ふべき「閨怨」、其に對する答へ、今一つは、單なる述懷であるが、多武峰少將の妹なる西宮の北の方へ、紙屋紙に書き直して、竪文にしてけづり木―けづり掛け―の枝につけて送つたよしが見える。

此等の人の外にも、好忠・小大君・朝光などにも、長歌がある。全體を通じて見た限りでは、多少とも、文學作品として見るに堪へるものは、好忠のものゝ一部だけであると言ふ外はない。其も完全なものはなく、夏・秋・冬の九十首づゝの序ともいふべきものである。さすれば、春歌の序又、百首和歌の序も、長歌に近い散文で、艷詞の一種類であり、前に述べたさうした文章の分化して來た道を、示すものと言ふ事が出來よう。併し唯、長歌が散文律に近づいて來ることによつて、さうした文體が出來るとばかり言つては、不自然である。かうした文章以前既に、女房日記から發生した文章があり、其から分化した歌の序―卽歌物語―と謂つたものがあるのだから、其等をどうしても、考へに入れない訣にはいかぬ。

つまり、長歌の音律が、內的に變化する推進力を失つた時代において、自然に一種の散文律が生れて來たとは言へ

ない。寧、その爲、外的の導力によつて動され易くなつてゐた。其が開口文と謂つた風の物に用ゐられる事になつて、歌の序の散文律をとりこむ樣になつた、と見るべきであらう。或は逆に、歌の序が長くなるに從つて、長歌の形に影響せられて行つたと見られぬ事もない。が、右に擧げた幾つかの「目錄の長歌」「百首歌」などに附けた述懷樣の作から見れば、自ら順序は、明らかに知ることが出來る。曾丹集について見よう。

あらたまの　としのひかずを　かぞふとて　すがのねの　ながしとおもふ　はるのひすがら　まなこ(?)をば　かすむやまべに　きはめつくし　こゝろをば、すぐすつきひに　たぐへつゝ　かぜにかたよる　あをやぎの　いとまのひまも　なきまでに　とりのなくねをきけば、おれもあはれと　よそにきゝ　はなのゑめるを見れば、たれもをかしと　見るらめど、ひとはかしこき　かほをつくり、われははかなきことをのこしおきて、はなのちるはるのあした、このはのおつる　あきのゆふべ、つきのあきらけき　なつのよ、かぜのさびしき　ふゆのあかつきまで、をこなれど、親のつけてし名にしおほゞ、なほよしたゞとひとも見るかに

○

與謝の浦に　老いの波かずかぞへつるあまのしわざと　人も見よとぞ

夏は、「梅津川春の暮れにしあしたより」以下四十一句及び、短歌一首、秋は、「すゞみせし夏の暮れにし夕より」以下廿六句、短歌一首、冬は、「かむな月時雨ふり來るみ山より」以下廿三句、短歌一首となつてゐる中、秋冬は、處々七五の句の脱落と見える場處がある。而も其處には句がなくとも、意味は完全に續くことになつてゐる。「やゝ肌寒くなるまでに、——年月をば思ひの外に過しやり」「心のうちに——なげきつゝ、よを長月の末までに——耳に聞き、口に見ること記しおかば」「行く水の絶えぬことばを流れての秋のかたみとも見よ」「長き夜な夜な思ひ集め、——くれ竹

の暮れ行く冬のありさまを心のうちに――しのぶることの苦しさに」と言ふ風に見ると、――線の部に詞はなくとも通じる様である。寧、何を踏みはづして散文律になつてゐるのだと見るべきかも知れぬ。

尙一つ、此は簡單に、律文式な處だけを畫しておく。

> あらたまのとしのみそらにあまるまで、春は散りかふ花を惜しみかね、秋は落つる木の葉に心をたぐへ……荒れたるやどのひまを分け、過ぎ行くつきをかぞへつゝ、明けては暮るゝひさかたのつきひをのみもすぐすかな。あはれ、たつきありせば、もゝしきのおほみやづかへつとむとて　すめらぎのみかきにおも馴れて、あしたゆふべになぐさめましと、こゝろのことになげくまに　あしたにはまどにさへづるとりのこゑにおどろき……よもぎのかどにとぢられて、出でつかふることもなきわが身ひとつはうけれども……みづのあわよりもこと(け?)に、はるのゆめにもことならず。きのふ見したからのたまも、今日はあさぢはらとつゆしげくて……そらゆくくものはてなく見しも聞きしもなくなりゆけば、ながれてつきぬみづくきのあとにしるして、かずならぬこゝろひとつをなぐさめむとも、ちのかずをよみつゞけ、……しきしまの三輪のやしろのふもとなるすぎ〴〵しくも　なりにけれど、まつ木の千とせ經るも、つひには枯れ失せぬるをや。あさがほのかたときにしも枯れうせぬれど、ひらくるほどをさかえとするをや。……と思ひなせば、なにはなるあしきもよきもおなじこと。すくも　すかぬも、ことならず。名をよしたゞとつけてけれど、いづこぞ、我が身、人とひとしきとてや

この點についての考へは、別にわれひと共に、協同しての研究に俟たねば、早急には解決出來さうもない。

往來類に注意をする旁、我々が是非忘れてはならないのは、武家時代殊に、室町以降の漢文學者のした文戲である。文學史の上では、五山文學に對する認識が、以前からは深められて來てゐる。が、其上更に、五山衆その他禪林

の高僧が、俗世間を如何に觀察し、又如何に興趣を寄せてゐたか、といふ事を見ることから、寧、大きな收穫が豫期出來さうに思ふ。たとへば、三益永因の艶詞―三益艶詞―などは、極めて自由なものであり、必しも私の考へる和樣の艶詞とは、ぴつたり一致するものではない。が、艶詞の中には、かうしたものも現れた事は、知ることが出來る。殊に其兒物語に分化して行く傾向を含んだもの、と見られる點において、殘存尠いものゝ一つとして、注意すべきである。丁丑九月・戊寅王正など言ふ年月のあるのは、同人の「三益稿」に永正十五年夏の詩のあるのなどから見ても、永正頃の口占みを集めたもの、と言ふことは知れる。

「うす雪」のやうに小說ではなく、又必しも一つ〳〵、應酬の文を載せてゐる訣ではないが、往來・艶詞・懸想文の關係を見る上には重要な一つである。此から「うす雪」の初刊寛永九年までは、凡百十幾年の隔りがある。勿論「うす雪」の方は、隱者の作物としても、兒物語・懺悔物の末流である所から見て、さのみ古く溯るべきものでないにしても、刊行の日づけと脫稿の年月とは一致しないと考へる方が、實は、正しいだらう。此間の種々交錯した原因を、思ひ見る必要がある。

平安朝の長歌が、述懷を立てまへにして、四季の景物を餘興にし乍ら、くどき立て〳〵して行くところは、どうしても、比較的新しい艶詞と、相照應して考へて行かねばならぬものが示されてゐる。さうして更に、その間の繋ぎとして、屛風繪及び屛風歌、四季繪詞の類の發達を見ねばならない。これが年中行事繪卷――原本には、曾て飛鳥井雅經の詞があつたと言ふ――の系統のもの、竝びに四季の壺前栽の變化などを主題とした物語繪・日記繪、其から長明の四季物語の出來る徑路などを思はせられる。

其と共に、年中行事歌合の時代に到るまでに、幾多の同種のものがあつたことも考へねばならぬ。

懸想文・艶書に關する先人の研究が乏しいので、少し、私の考へを纏めようとしてゐる間に、其が外廓ばかりを説き立てゝ、一向内陣へ這入つて行かないで了つたのは、心苦しいことである。

こんな隨筆のやうな書き物でも、ある一つの態度を表明することが出來たとすれば、望外の幸福である。同時に亦、はかない「うす雪物語」「新薄雪物語」すら、此だけ、又は此幾層倍かの用意を以て當られねばならないのだと言ふことをも併せ示し得たことになればと思ふ。だが、私のこの文章は、粗笨であつて、必しもこのもくろみを完成したと、氣を負うて申すことは出來ないのです。

難波鉦用語考

吉田澄夫

元祿享保期を中心に榮えた浮世草子の文學的先蹤の一種として、遊里書のあつたことは周く知られてゐることである。遊里書は一言にしていへば遊里の案內記であり、また遊女の評判記であるが、德川初期以降、京大阪江戶の遊里の繁昌するに從ひ、多數の遊里書が出版せられるに至つた。その中にあつて大阪新町の遊里について述べた難波鉦は形式の新奇なる點と內容の精細なる點とにおいて、文學的にみて類書の中で最も勝れたものであり、西鶴の浮世草子への近接の度の一層濃やかなる表現を有するものであることは爭ふことの出來ない事實である。

難波鉦はかやうな特色を有する作物であるために、古くより近世文學に關心を有する人々の注目をひいたところであるが、德川期に本書の存在を知り考說を殘した人として柳亭種彥と大田南畝とが擧げられる。種彥は好色本目錄の中に本書について述べ、南畝は種彥に比して至つて簡單であるが假名世說の中にやはり本書について述べ且つその例文を示してゐる。また本書の改題書である諸分店㕝は江戶時代文藝資料第四の中に收められて、その解說は詩仙洞主石川氏が物して居られ、また最近では日本文學大辭典に不倒翁の解說がみえてゐる。小篇は本書の用語を檢することを主眼とするものではあるが、先づ順序として本書がいかなる形式內容を有する作物であるかについて、管見に入つた事項を附加して略說する。

難波鉦の內容は大阪新町の遊里に關する記述であるが、直接に遊里遊女の評判記ではなく、遊女の口を藉りて色道の諸分を記したものである。半紙本六冊より成り、第一冊の卷頭に假名文の序と漢文の序とを載せ、目錄に次いで松之部一に九話、松之部二に十六話、梅之部三に十七話、梅之部四に二十話、梅之部五に十四話、梅之部六に二十四話、總括して百章の短話を收めてある。第六冊の最後に短い漢文の跋を添へてある。從來屢々問題となつたのは本書の刊行年代であるが、本書のどこにも刊行年代を明記してないのでそれを決定することは難しい。たゞ一種の推定だけはなし得るので、それは假名文の序の終りに延寶八申三月日、水月庵迷色居士の署名があり、またそれに次ぐ漢文の序の終りに延寶八季春日、一生軒不埒の署名があるのに基く。然しこれは序の年代であつて刊行の年代ではない。序の年代と刊行の年代とが一致しないことはあり得ることで、序の年代をもつて直ちに刊行の年代となすことは出來ないが、本書の場合は延寶八年頃をもつて刊行の年代としてよいのではあるまいか。實際に本書の原本を檢してもかやうに考へて何等矛盾の感ぜられる節はない。半紙本としての體裁、版下文字の書體、殊に一冊に一面づゝある挿畫の畫風をみても、當時の類書のそれと酷似してゐて一見して延寶頃の書であることが感ぜられる。尙また內容の上よりみてもその推定を助ける事項が一二ある。それは鐵眼と夕霧とに關する記事である。松之部一の大番の章に「皆も知らしやんす如く、餘り悅もせぬなんばのてつげんに大分の金を入て、寺を立て供養の何の彼のと言はんす、それよりは日に見へた女郞の喜ぶ樣にさしやんせ、鐵眼程に物もいらいで、忝ながります、いかに功德で有ふと思ひます」とあり、また梅之部六の雲井月の章に「今世間にとうとがるなんばの鐵眼は、そのかみ西本願寺の水じや程に」とある記事である。鐵眼は當時の黃檗の名僧で、寬文十年大阪難波の藥師寺を重修して瑞龍寺を興した。また夙に藏經翻刻の大願を抱き、諸侯以下一般庶民よりも廣く淨財を募つて、延寶六年遂にその業を了へた。本書に鐵眼のために淨財を寄せ

ると記したのはこの事を指すのであつて、これは本書の刊行年代と矛盾しないのである。

また梅之部三の二九公の章に「人にはいはしやまするな、死なしやりました夕霧様の物語さしやんした」同じ卷の蚊遣火の章に「これも夕霧様の咄でござんす」梅之部四の五行の章に「是は此さき夕ぎり様の敎へさしやんした、古い事でござんす」とある。これ等の記事によつて當時夕霧が著名であつたこと、また夕霧が旣に死去してゐたことが判る。夕霧が京島原の扇屋四郎兵衞に伴はれて大阪に下つたのは寛文十二年のことであるが、その後新町に全盛を謳はれ延寶六年正月六日に病をもつて死去したことは澪標などの書に傳へられてゐる。それでその事實に照合してみれば、この記事もまた本書の延寶八年頃刊行の推定說を助けるものといつてよい。

難波鉦は本文六部、各部は九話乃至二十四話より成り、全部で百話であるが、その內容は遊里生活の格式の說明であつて、先づ客が樣々の問を發して、それに對して遊女が答へることになつてゐる。各章に各々初冠、容蟬、位取、閨容燒、瀧水、十五夜などの小題を附し、その下に各々高橋、妻崎、今川、高島、正山、歌仙などの太夫の名を記してあるのはかやうな本書の形式に因むものである。從つて各太夫とその話の內容とは何等必然的關係がある譯ではない。かやうに特に太夫の名を記して一種の遊女名寄たらしめようとしたものと思はれる。最初の松之部一の初冠の冒頭に開口とみるべき一節がある。大臣である若者が父親の留守に外出の口實を設けて遊里に出かけることを記したのであるが、この一節が會話體の文章より成つてゐる。しかしてその會話が能狂言の用語に似てゐることは甚だ注目に値する。能狂言は當時の一般社會に極めて親しいものであつたことはいふまでもなく、狂言記は萬治三年、寛文五年と相次いで刊行されてゐる。かやうな點よりみて難波鉦の會話體の文章は狂言記のそれに學ぶところがあつたのではあるまいかといふ推定が下される。これは開口のみならず、全體の文章についてもいへることである。かやうな譯で

その文章は純粹の會話をそのまゝ再現したものであるとはみられないが、然も當時の口語を多分に取入れたものであることは疑がなく、殊に當時の遊里の女性の言語の特色を捉へてゐるやうに思はれる。その中には遊里獨特の通語などもあり、また遊里に行はれるとともに一般語としても行はれるに至つた語もある。近世の女性語史の上よりみれば後者がむしろ重要なものであらうが、今それ等の中より三四の語を取つて少しく考へてみる。

難波鉦に記された遊里詞の最も著しいものはゴザンスである。全部で百名近い太夫の談話があるが、そのすべてが指定の意味を示す語としてゴザンスを使用してゐる。延寶頃の新町の遊里には必ず實際に使用せられた語であらうと思はれる。また新町のみならず京においても行はれた消息は近松の淨曲によつて知ることが出來る。

○古流な事をサラリと止め、奧方の女中の中の通り者、其外洛中に娘子供の色好きが、御座んすことばの酒のこなし、上覽に入れん爲め、召し寄せて置き候（雪女五枚羽子板・上）

その活用はサ行變格に準ずる。これはゴザンスがゴザリマスの發音變化によつて生じた語であるから、助動詞マスの活用に準じてはたらくためである。

○伽羅ならではござんせぬ、いつともゑならぬかわいらしいかほりではござんせぬかいの（梅、四、閇窓燒）○されからべが物いふたことはござんせぬ（梅、五、身をしる雨）○くぜつといふ物は、水などのすることではござんせぬ（梅、六、亂碁）○方樣にましたる殿達がまたとござんしよか（松、二、一時雨）○尤もあせあぶらの金でもござんしよ、日本國がみな油のかねでござんしよ（梅、六、萬事如是）

○初めてござんした殿達のは、供の衆に尋ねますわいの（梅、四、馴子）○今迄知りませいで不審にござんした（梅、四、遊男）○無理な殿達がござんして、誓文を立てました（梅、四、手枕）

○其うち一年の月日の立は、鐵砲より早うござんす（松、二、一時雨）○今は町人より、侍さん用のことよく知つてござんす（梅、三、衣更）○我身なども、いかい事文はござんす、置き所がなくて氣の毒でござんす（梅、六、手鑑）、○如何樣の事でも互にかくし、いはぬものでござんすれば、心やすい物でござんすよ（松、三、初髻）○わが身とても同じことでござんすれども、入らざる事でござんす（梅、五、蜑小舟）○せんどの人をちと又連れてござんせ（梅、四、伽咄）

ここに注意すべきはゴザンスはゴザリマスより直接に出たものではなく、その中間にゴザリンスといふ語のあつたことである。これは發音變化の順序よりみてもその段階を經過すべきものである。發音變化の順序としてはゴザリマスよりゴザリンスが出、ゴザリンスよりゴザンスが出たことは明らかであるが、その生滅が時間的に相次いで起つた譯でなく、ゴザリマスもゴザリンスもゴザンスも同時に存在したのである。

○旦那さんで御座りんすか、內方に居さんす半七殿にちよつと逢ひたう御座りんす、親方ぎよつとして、はていかうりんすりんすと言ふ女子ぢや、和女は半七が女房か、ハアつがもない私は大阪者、半七が叔母で御座りんすアレ未だりんすぢや（長町女腹切・上）

近松の文章は京石垣町井筒屋の遊女お花が半七に會ふために、大阪の叔母と僞つて半七の奉公先を訪れた條であるが、堅氣の叔母と僞つても遊里の女であることはゴザリンスで知れるのである。かやうな點よりみて京にはゴザリンスも行はれてゐたことが想像せられる。難波鉦にはゴザンスのみでゴザリンスはない。但しゴザンスの外に同じく指定の意味を示す語としてゴザリマス、ゴザルも使用せられてゐる。

○しかしながら重ねてのお首尾の爲でござります（梅、五、殘花）○殊に戀の道を、さやうにあらけなふはせぬ事でござりま

す（梅、六、身の代）

○格子のくもの巣を數へて居るでござろ（松、一、二字論）○まだ初心なを月といふさうにござる（松、一、二字論）

倘ゴザンスは時代が下つて寶曆頃にも大阪の遊里で行はれたやうである。

○それはみな前世からの、やくそく事、過去ノ業因でござんす（聖遊廓）○あのやうにあくびして、まぎらかしてござんすわいな（同）

かやうにゴザンス詞は京阪の遊里詞として行はれた語であるが、江戸の遊里にも早くより輸入せられたらしく、吉原詞としてはゴザンスよりオザンス、ザンスの如き發音變化を生じたのである。明和の遊子方言によつてそのことはうかゞはれる。

○ばからしうおざんす、人の座敷でおざんす（遊子方言）○せんどおまへの醉なんした所でおざんす（同）○わたしがとめ申さずと、ようおざんす（同）

ゴザンス詞はかやうに東西の遊里詞として行はれ遂に一般語ともなつたものであるが、大阪の遊里では後に新しくオマスの如き語が使用せられるやうになつたためにゴザンスは衰へた。江戸の遊里ではゴザンス及びその系統の語は盛に行はれ、遂に江戸人は男女ともにゴザンスを使用するやうになつたのである。今日では多少衰へたやうではあるが、倘ヨウゴザンスその他一種の慣用語として使用せられてゐるものが多い。

難波鉦の用語として注意せられるのは敬讓助動詞とみるべきシヤンス、ンス、サシヤンス、サンスの諸語である。その源についてはシヤンス、ンスはセラレマスより、サシヤンス、サンスはサセラレマスより出たものとみるべきで、前者は動詞の四段、ナ行變格、ラ行變格につき、後者はその他のものにつくのである。

○よふ寄らしやんした（梅、四、香車）○如何にもわが身にあわしやんすとき許り（梅、五、残花）○俄にいなかへ久々の逗留で下らしやんすといふて（梅、五、誰袖）○來世で思ふ様にあふことがなると知らしやんしたか（梅、五、身をしる雨）

○又わる口いわんす、たしなましやりませ（梅、四、香車）○皆々梵天國の下地じやと思はんせ（梅、六、亂碁）

○其様なことで腹を立てさしやんした物でござんしよ（松、二、火廻）○さあいふてみさしやんせ（梅、五、打替）○是は此さき夕ぎり様の教へさしやんした古い事でござんす（梅、四、五行）

○何處に居さんす、よふござんした（松、一、初冠）○北はまの殿達の教さんした（松、二、回文）

この類の語は近世の女性語として最も著しいものであるが、その發生は遊里詞にあつたのではあるまいか。寛文の浮世物語に遊里詞として擧げてゐるものもこの類の語であるのをみると、その出來するところの久しいものであることが判るのである。

○わざくれ浮世は夢よ、白骨いつかは榮耀をなしたる、これこそ命なれ、その盃これへさゝんせよといへば、筍のごとくなる御手にてさし出し給ひて、ひとつのまんしといはれたるは（浮世物語、巻一）

シヤンス、ンスはセラレマスより出、サシヤンス、サンスはサセラレマスより出たものではあるが、その中間に更に一種の段階があつた。卽ちセラレマスとシヤンスとの間にシヤリマスがあり、サセラレマスとサシヤンスとの間にサシヤリマスがあつた。これ等の語も難波鉦にみえてゐるので、シヤリマス、シヤンス、ンスとサシヤリマス、サシヤンス、サンスとが雜然と使用せられてゐる。その意味は各々ほゞ同様であるが、發音變化の度合と丁寧感の度合とが正比例してゐるので、シヤリマス、サシヤリマスにおいて丁寧感が最も多く、ンス、サンスにおいて最も少いとみ

るべきである。

○むかしから人のいふことでござる、まだ知らしやりませぬか（梅、五、釋語）○必ずおぼしめし止まらしやりませ（梅、五、浮萍）

○よもやかきはさしやりますまい（梅、四、野槌）

尙サンスとシヤンスとは發音の類似のために混用せられたやうでその用例も存する。

○誰になりとあわさんせや（梅、四、張落）○皆々丹波越のこしらへじやと思はさんせ（梅、六、亂碁）

かやうにゴザリマスはゴザンスとなり、またセラレマス、サセラレマスはシヤンス、サシヤンスとなつて、助動詞マスの發音變化が行はれたが、一方マスはその本來の形のまゝでも使用せられてゐる。

○わが身煩ひの中は、久しう御目にかゝりませなんだ（松、二、籠拔）○其しなぐ〳〵は、言葉では言ひ盡されませぬことじや（梅、六、飛鳥川）○つまらぬと思召しましよば、如何樣に成とも（梅、三、類火）

○田舍などには太夫といふはないことと聞きました（梅、三、二九公）○つぼねとは、女のおる所をおつぼねといひまして、へやと同じことでござんす（梅、三、蚊遣火）

○大もの日をするを手柄にします（松、一、大番）○髮結振は、人々の顏なり、身ぶりに隨ひます（梅、六、道芝）

○此事はふつ〳〵おぼしめしきりませ（梅、六、誰身上）

尙難波鉦の用語として注意すべきものを擧げると、その一はナサル、スルの丁寧語としてアソバスまたはアソバシマスのみえてゐることである。この語は東西の遊里で後世まで行はれたことは寶曆の聖遊廓、明和の遊子方言の用例によつて判る。アソバセ詞の行はれたのは公家、武家の家庭のみではないので、今日の女性語としてのアソバセ詞の

基礎は徳川期において廣くまた深く築かれてゐたのである。

○まづあれへ御かへりあそばしませ（梅、五、瀧水）○けふもまづゆる〳〵とさけなともまいり、御歸り遊ばせ（梅、六、金精矢）○今日は何と遊ばしました（梅、四、意氣落）○御堪忍なされて、互に談合づくで遊ばしませ（梅、六、身の代）○けふはマアおそろひなされて、よふおこし遊ばしました（聖遊廓）○やう御出遊しました、先御上り遊しませ（遊子方言）○お歸りにおより遊せ（同）○なるほど〳〵旦那ちと、お休遊せ（同）

四段活用の動詞の連用形に現はれる音便は古くより行はれたが、尙原形のまゝでも行はれた。今日も九州、中國などの西の地方の一部にはカイタ、ヨンダ、ハシツタといはずに、カキタ、ヨミタ、ハシリタといふところがある。難波鉦の用語にはウ音便は多くあるが、促音便であるべきものが皆原形のまゝになつてゐる。これは遊里のもののみならず他のものも使用してゐる點よりみて當時一般に行はれたものとみるべきである。

○其時は見しらずとも見しりたやうに（松、二、稚立）○殊の外心も變りた（松、二、火廻）○ちと合點の行きた水などの（梅、四、野槌）○あらたまりた事をいわんす（梅、四、張落）○それでも髮を切りたは誠じや（梅、四、意氣落）○ならばしてやりたがよふござんす（梅、六、熊谷笠）○聲が濁りた、風引きやつたか（梅、六、儒醫）

上方語の特色の一である理由を示す助詞サカイも使用せられてゐる。但し皆サカイデであつてサカイではない。またサカイニといふのもみえない。これは當時の大阪方言を反映してゐるものと思はれる。その他理由を示す助詞としてはニヨツテ、ユヱニがあり、また單獨にデといふのもある。サカイデ、ニヨツテ、ユヱニ、デが混用せられたのである。

○餘り立派過て賴まし過た殿達じやさかいで（松、二、回文）○それは近づきじやさかいで物語りした（松、二、火廻）○

みやざき殿にあひましたさかひで（梅、六、無類）○こんどはいやといやるさかいで（同）○親のひとり子じやさかいで（同）○だんな樣がたの手に入事があるさかいで（梅、六、雲井月）○それは物の入ことじやによつて（松、一、大番）○一座の歌皆に成ります物じや故に（松、二、稚立）○知れぬ事間はんすで、氣が詰りますわいの（松、二、初髻）○互ひにいつわりながらも、眞實らしうするで（梅、五、戀詞）

誓詞としてはシンゾ、それを重ねたシンゾ〱、ニツポンシンゾ、ビヤクライ、ビヤクライカツタイが使用せられてゐる。遊里は社交の世界であり戀愛の世界であつたのであるから、自然にかやうな誓詞を口にしまた筆にする機會は多かつたことゝ想像せられるのである。

○方樣さしあふて、神ぞむしやうにわいた（梅、四、伽咄）○神ぞ恐ろしや恐ろしや、ちとたしなましやりませ（梅、六、誰身上）○しんぞ〱そなたを先度見てから、何卒會いたいと思ふたれども、儘ならでうち過た（松、一、後連）○神ぞ神ぞ會はぬ先が增であつた物（松、二、埋火）○日本神ぞ傾國程冷いものはござんせぬ（松、二、籠拔）○びやくらい眞實ではござんせぬ、あやまりましたわいの（梅、四、意氣落）○我身はびやくらい何とも氣がつきませぬ故（梅、四、下紐）○此上からは、びやくらいおれがてにもろふてあふ（梅、五、瀧水）○最早かた樣のやうな殿達は、白癩かつたいいやでござんす（松、一、後連）○びやくらいかつたい聽かぬ氣でござんす（梅、六、身の代）

誓詞はかやうに遊里において多く使用せられたが尙遊里のみならず、一般にも樣々の場合に使用せられたやうである。耶蘇會士ロドリゲースの大文典にも誓詞の一節を設け、慶長頃に行はれた誓詞について說いてゐるが、その中に天道 (Tentǒ)、愛宕 (Atago)、八幡 (Fachiman)、白山 (Facusan)、愛宕白山 (Atago facusan)、その他白癩黑癩にならうず (Biacurai, cocuraini narǒzu)、火に燒かれうず (Fini yacareôzu)、一人もつた子に後れうず (Fitori motta

coni vocureôzu) の如き誓詞の例が多く示されてゐるのである。（大文典一九八丁裏より一九九丁表參照）

また慶安の片言に誓詞に關する記事があつて、それをみても當時一般に誓詞が行はれ殊に遊里に多く使用せられた狀を察することが出來る。著者貞室は誓詞を輕々しく使用すべきでないことを說いてゐるが、それは片言が愛兒に雅正なる言語を敎へる庭訓の書であつた點よりみて眞に無理ならぬことと思はれる。

使役の助動詞ス、サスは連用形において、セ、サセとなるべきものであることはいふまでもないが、本書ではそれがシ、サシとなつてゐる。これは當時の上方訛を示すものと思はれる。

○座敷で無理に酒を強て飲まします（松、二、夢契）○むゑんの名を云ひ、その人を呼び出しあわします（松、二、稚立）

○この男の風情よのつねすさまじき樣子とて、くつわがあわしませなんだ（梅、六、夕煙）

○よのつれ衆には敎へさします（松、二、稚立）○今宵は寢さして下されませ（梅、三、花見）

また會話の際に輕度の限定を示す語としてマデといふ助詞が屢〻使用せられてゐる。この語は狂言記などの會話に盛に使用せられてゐる點よりみて、室町期以降廣く行はれた語であるらしい。その意味には輕く對者を揶揄し、または自己を自嘲するやうな陰影が附隨してゐるやうである。

○眞實でござりますか、その時の顏が見たいまで（松、一、初冠）○けふは何の日じやまで（同）○我等が迷ふまなこからは、見へぬじやまで（梅、四、野槌）○金のない大じんじやまで（梅、四、遊男）○何時もの癖じや、何がいそがしいまで（梅、四、香車）○しつかい唐人の寢言じやまで、ひとつもゑつうじませぬ（梅、五、釋語）

ソレ、またはソコにソンジヤウを冠した語が屢々使用せられてゐる。このソンジヤウソレ、ソンジヤウソコは中世以降の文献に時々みえる語で、人または場所についてあからさまにそれと指さずにいふ場合に使用するものであつ

た。

○そんぜうそれ様へは、心なげに頼まれもせず（松、二、冋文）　○そんじやうそれ様の御こし候ぞやと、むゑんの名を云ひ（松、二、稚立）

○そんじやうそこの誰様とは、さい〳〵御出あひなされ、御はなしの由、（松、二、埋火）　○そんじやうそこの誰様、こゝの誰様とは、最早久しい馴染で御ざんしたけれど（松、二、火廻）

最後に難波鉦の太夫達が自己及び對者を指示するのにいかなる語を使用したかをみるに、自己を示す語としてはワガミといふ語が最も多くみえてゐるのである。その他ワタクシ、ワタシ、オレも見えてゐる。これ等の語は當時皆實際に行はれたものと想像せられる。オレは公家、武家の家庭でも行はれた語で、當時にあつては必ずしも卑稱ではなかつたのである。

○我が身も知らぬことでござんす（梅、三、花兄）　○如何にも我身も左樣に思ひます（梅、四、生死海）　○無理な事いわんす、實からわが身は知りませぬ（梅、四、遊男）

○わたくしも無理にならぬことをします（梅、五、瀧水）　○いなしやんせ、最早わたしもいにます、さらばや（梅、五、殘花）

○おれも誠に知りませぬわいの（梅、三、花兄）　○おれが命限りに遊す事でござんせぬ（梅、五、瀧水）　○おれがつらはくわすこと成ますまい（同）

また對者を示す語としてはカタサマ、コナタサマ、コナサマ、ソナタサマ、ソナタ、オマヘサマが行はれたやうである。カタサマの如きは遊里詞として特殊なものとみるべきである。その他のものは一般にも行はれたもので特に遊里詞とすべきものではない。

○方様のやうな詰らぬ男でも、枯木も山の飾りとやらん（梅、三、類火）○方様の樣な殿達は餘り嬉しうござんせぬ（同）○是は近頃迷惑、なにとして方様をつもりましよ（同）○天竺へあがりやるとまゝよ、かまわぬ氣で、かたさまにあいましたらば（梅、五、誰袖）

○それはこなた樣、なさけを知らしやりませぬといふ物でござんす（同）○こなた樣を人のよろしういわんことで悲しうござんす（梅、六、誰身上）

○さやうの挨拶は、尤も人ごとに、こな樣に限らずいはんするなれど（松、二、一時雨）○こな樣は人が知らぬかと思はしやるか（梅、三、類火）

○そなた樣は面白いことゝいはんす（梅、三、小町跳）○それならば我身そなたへいひ分がござんす（梅、六、身の代）

○おまへ樣の事頼ましやるとおしやります（梅、五、瀧水）

以上難波鉦の用語によつて延寶頃の大坂の遊里の言語の一面に觸れたのであるが、これ等の若干の語例によつても、當時遊里に特殊の言語の發達してゐたことが推察せられる。一體男女兩性によつて言語に相違のあることは國語の最も顯著なる特色であるが、近世の女性語に限つてみても、女房詞の社會的浸潤、遊里詞の發達の如き注意すべき現象があつた。女房詞は中古以降公家の家庭に發達したものであるが、武家が勢力を得て公家と文化的交渉を生ずるやうになると自然に武家の家庭に入り、近世以降は一般社會にも行はれるに至つた。遊里詞は女房詞とは發達の過程を異にするものではあるが、兩者がともに特殊の女性語である點については同様である。

かやうな女性語が何故に發達したのであらうか。それは女性は一般に感情的であり、優美を愛する心理が强くはたらくに基くと思はれる。女性語の主要な特色が敬讓語丁寧語にあるのはそのためではあるまいか。近世の遊里詞は先

づ京島原に發生し、やがて大阪新町をはじめ上方の遊里に行はれ、一方早く江戸に輸入せられて、吉原詞の發達をみるに至つた。遊里詞は上方に發生したものではあつたが、その完成は江戸でなされたとみるべきである。かやうに年代的には二世紀以上に亙り、地理的には京大阪江戸に係る遊里詞の特色をみても、やはり敬譲語丁寧語にあつたので、けだし遊里は歡樂と社交の世界であり、その中心となつたのは遊女であつたために、かやうな特殊語の發達を促すに至つたものと思はれる。難波鉦の用語によつて延寶頃の遊里詞をみてもそのことはうかゞはれるのである。

西鶴に於ける神佛

——主として文藝上の意義——

瀧田貞治

まへがき

この小論に於て、私は、主題の如き考察を試みるが、これに關する資料の列擧を怠らなかつたのは、本論の基礎を示すと同時に、今後の研究の手引と、この方面に關心を持たれる方々の便宜に資せんとする爲めに外ならない。豫め記して御諒察を乞ふ。

西鶴が、神佛に對して、如何なる態度を持してゐたかの考究は、彼の道德觀・社會觀・人生觀將又文藝觀を知ると同様重要にして且つ興味ある問題であり、西鶴の人間研究は、これらを併せてはじめてその實を擧げうるといへよう。當然この問題は、西鶴の神佛に對して取つた文藝上の態度と、精神上のそれの二つに就いて考へねばならない。然しこゝでは、彼の精神生活に於ける神佛はこれを附加的の問題とし、主としてその文藝上に於ける神佛の意義を闡明し度いと思ふ。從つてこの考察は、一部彼の文藝觀とも相觸れない譯には行かない。

今この問題を考へる手段として、西鶴が、己れの作品中に拉し來つた神佛關係の語句を拾つて見た。それらは多種多様であるが、大體次ぎの四類に概括出來る。

第一類　自誓强調の語句に現はれた神佛

第二類　天罰天惠を與ふるものとしての神佛
第三類　浮薄な浮世人情と對照させた場合の神佛
第四類　揶揄的に取扱つた場合の神佛

即ちこれである。これらに就いて逐次所見を述べて見よう。

第一類の自誓とは神明への誓ひであり、一身の潔白を聲明する場合等に用ひられ、この神かけての信念は、同時に、いゝ、斷じてなど物を強調する爲めにも併用さるゝに至つたのは當然であらう。この類に入るものは左の如く細別する事が出來る。

(イ)神(しん)
1. 神以て
2. 神ぞ
3. 神ぞ〳〵
4. 日本の神ぞ

(ロ)八幡(はちまん)
1. 八幡
2. 正八幡
3. 弓矢八幡
4. 祇薗八幡

(ハ)其の他
1. 天照太神
2. 氏神稻荷
3. 神かけて
4. 諸佛も證據

次ぎにこれらの用例を示し、その類語の所在を、煩を厭はず揭げる。

神以て　「神以てそれがし他言せしにはあらず」(武家義理物語四ノ三)、この類語、「武家義理物語」四ノ二、「武道傳來記」一ノ三等。

神ぞ　「神ぞいたづらにはあらず」(好色盛衰記五ノ三)、この類語、「男色大鑑」七ノ三、「置土産」一ノ一及び四ノ三等。

神ぞ〳〵　「迷惑さに中には神ぞ〳〵御座なく候」(文反古二ノ二)、この類語、「好色盛衰記」一ノ三、「置土産」二ノ二等。

日本の神ぞ　「今申あげし詞日本の神ぞ僞りなし」(男色大鑑二ノ二)、この類語、「好色一代男」七ノ一、「武道傳來記」七ノ三等。

八幡　「此上は八幡のがさじ」(武道傳來記三ノ一)、この類語、「武道傳來記」八ノ二等。

正八幡　「正八幡も照覽あれ」(武道傳來記一ノ一)、この類語「武道傳來記」一ノ一等。

弓矢八幡　「弓矢八幡運命盡きたり」（武道傳來記六ノ三）、この類語、「武家義理物語」三ノ五及び六ノ二、「武道傳來記」三ノ三、「二代男」六ノ四、「二代男」六ノ二、「懐硯」二ノ三、「二十不孝」五ノ三、「置土産」五ノ二、等。

祇園八幡　「祇園八幡自慢はせぬが」（二代男四ノ二）

天照太神　「天照太神を何ノ\せいもん我女良屋にあらず」（織留四ノ三）

氏神稲荷　「氏神稲荷大明神も照覽あれ」（胸算用二ノ四）

神かけて　「袖の時雨は神かけて是ばかり僞りなし」（一代男五ノ一）

諸佛も證據　「法師色かはつて諸佛も證據是に僞りなし」（男色大鑑七ノ四）

大體以上に盡きるが、こゝでは、誓ひの手續きや形式、例へば、「日本の諸神を書込」「氏神稲荷さまをせいもんに入て」等の敍述には一切ふれてゐない。

そもノ\、自誓そのものは、その性質上、咄嗟且つ短敍的のものであるから、これらの表現に特に西鶴の力を必要とせず、慣用語句が多く、自然西鶴の對神佛態度を窺ふ資料となるものは尠ない。たゞ僅かに注意すべき二三は、(ロ)の3、中に、「弓矢八幡深川の助六が子に極め」（置土産五ノ二）、「男ざかりに力落しては口惜、弓矢八幡摩利支天南無不動明王身が燃て女はいやと云切て」（二十不孝五ノ三）があり、前者は深川八幡と深川の助六を連ね、後者は誇張による滑稽感をねらつたもの、又(ハ)の3、神かけては、定家の「僞りのなき世なりけり神無月」を踏まへたもの、共に、急迫強調の語句の中に迄割込んだ、西鶴の談林的技巧が見られる。

扨て彼の神佛に對する精神的態度は、苟も神佛に誓はうとするそこに見出す事一見可能の如く思はれるが、然し誓ひは、こゝでは態度ではなくして寧ろ本能に近いものに過ぎない事を注意しなければならない。

第二類は、一般に持たれてゐた常識的且つ根本的宗教觀に依るもので、この思想は直ちに因果觀を構成し、天罰天惠冥加等の語によつて表現されてゐる。

この用語の類別及び用例と類語所在を先づ示さう。

（イ）天罰
- 1、罰
  - a、天罰
  - b、神罰
  - c、觀音の罰
- 2、咎（とがめ／とが）
  - a、天の咎
  - b、神の咎
  - c、佛神の咎
- 3、たゝり
  - 氏神のたゝり
- 4、むくひ
- 5、天命のがれず
- 6、冥加恐ろし
- 7、見限る

（ロ）天惠
- 1、めぐみ
  - a、天のめぐみ
  - b、諸神のめぐみ
  - c、佛神のめぐみ
- 2、あはれみ
  - a、天も憐み
  - b、諸神も憐み
- 3、與へ
  - 天の與へ
- 4、天道人を殺さず
- 5、加護
  - 佛神の加護
- 6、見捨てず
- 7、佛神のひかへ
- 8、神慮に叶ふ

天罰　「天罰たちまち身にあたりぬ」（一代男四ノ一）、この類語、「武道傳來記」六ノ三、「二十不孝」一ノ二、「新可笑記」一ノ五。

神罰　「忽神罰の顯はれ」（武道傳來記六ノ二）、この類語、「織留」五ノ四。

觀音の罰　「是に少しの僞りあらば　初瀨の觀音樣の罰のあたらん」（武道傳來記五ノ一）、この類語、「一代女」六ノ三

天の咎　「無道に人を切天のとがめも有るべし」（男色大鑑三ノ五）、この類語、「二代男」三ノ一、「新可笑記」四ノ一、「文反古」一ノ

二、「男色大鑑」二ノ二、「永代藏」三ノ二、「一代女」一ノ四。

神の咎　「神のとがめもなかりき」（武家義理物語一ノ四）

佛神の咎　「元來まことならねば佛神是をうけ給はずかへつて其身をとがめ給ふ」（武道傳來記一ノ二）

たゝり　「氏神のたゝり」（俗つれづれ五ノ二）

むくひ　「世に神有むくひあり隱してもしるべし」（五人女二ノ四）

天命のがれず　「我〳〵惡心おこりてよしなきかたらひ是天命のかれず」（五人女三ノ三）、この類語、「男色大鑑」四ノ二、「武道傳來記」四ノ一、四ノ二、「武家義理物語」一ノ一、三ノ四、六ノ一、「二十不孝」一ノ二、二ノ四、四ノ三、「織留」一ノ一、「五人女」三ノ四、四ノ四。

冥加恐ろし　「思へば町人の女房の分として冥加恐ろしき事ぞかし」（胸算用一ノ一）

見限られ　「我また流れの道有程は立つくして諸佛にも見限られ」（一代女六ノ二）、この類語、「五人女」四ノ五。

天のめぐみ　「亭主正直なるを天のめぐみ給へる」（織留二ノ五）

諸神のめぐみ　「一心に諸神を祈しに此めぐみにや」（武家義理物語三ノ四）、この類語、「武家義理物語」四ノ二。

佛神のめぐみ　「わづかの油賣より質（もとで）仕出して次第に家榮へ是と申も佛神の御めぐみ成と信心ふかく」（織留二ノ二）

天も憐み　「一生の安樂する事もうき世帶の時男によくつかへて堪忍をせし身の上天是をあはれみ給ふ」（織留一ノ二）、この類語「永代藏」三ノ四。

諸神も憐み　「產湯湧して待時（中略）諸神も憐み給ひ（中略）初音つよく男子を設け」（武道傳來記二ノ一）

天の與へ　「是は自然と天の與へる所なり」（好色盛衰記一ノ四）「小判一かたまり是はしたり〳〵天のあたへとうれしく」（胸算用三ノ三）

天道人を殺さず（懷硯二ノ四）、この類語、「胸算用」二ノ三、「文反古」四ノ二、「新可笑記」二ノ六、「世はなげくまじ又引あぐる

神も有て」（胸算用五ノ三）

加護「まこと佛神の加護にや」（新可笑記二ノ三）

見捨てず「神も見捨たまはず弓矢の家ながくすたらず」（懷硯一ノ三）、この類語、「諸國咄」五ノ七。

佛神のひかへ「佛神のひかへにして二たびよみがへりのあるまじき事にもあらず」（新可笑記二ノ六）この類語、「織留」三ノ三。

神慮に叶ふ「心にまことあれば自然と神慮に叶ひぬ」（織留三ノ二）、「天理にかなふ」（永代藏六ノ二）、「天も道理をてらさせ」（新可笑記二ノ三）

是等より歸納さるゝところは、天道は人を殺さず、善行は如何なる場合も必ず佛神によつて顯現され善果を享くるに對し、惡業は、儼たる佛神の御ひかへによつて天罰を遁るゝ譯には行かない、といふにある。

この因果思想は、思想として何等新奇のものではなく、それらを表出した語句も、截然と善因善果惡因惡果に二斷されて餘す所なき觀念である爲め、西鶴も語句として修正を施す術なく、第一類同樣多く慣用語句を使用した。にも不拘、この語句に集中さるゝ說話に於て、天の理法を說く筆の極めて鋭く、因果の恐ろしさをひし〳〵と感じさせるに至つては、この思想が、佛教東漸以來特に我が國民の精神生活に深く喰込み、日常生活の基調をなしてゐたが、西鶴も、これらの環境に養はれ、長ずるに及んでは、彼をしていよ〳〵この思想に追込んだであらう所のあの家庭悲劇、妻女早逝一女盲目等の事に想到せざるを得ない。我々は、「本朝二十不孝」に漲る因果に於て彼の驚怖の眼を發見し、その教訓性に於て、彼は不用意にもその最も愼み深い一面を露出してしまつてゐるのを見るのである。卽ち私が、西鶴の神佛に對する信念は、本類の因果觀に於て、最も率直に、最も自然にあらはれてゐると思ふ所以である。たゞ彼は、道德家でも、況や宗教家でもなく、飽くまで藝術家としての節操堅持を忘れなかつたから、その作品は、毫も功利的に墮する事はなかつたのである。

猶こゝに一言したい。西鶴はしばく〵「天下の町人」と豪語した。然も第二類の語句中に、「町人の分としては天のとがめもおそろし」(三代男 三ノ二)、「世には身をしらぬ者もの有天のとがめも町人の分としてよい程あり」(文反古 二ノ三)「思へば町人の女房の分として冥加恐ろしき事ぞかし」(胸算用 一ノ二)などがある。

「天下の町人」といふ叫びは、決して彼の虚勢ではなかつた。然も、自らを卑下する事に馴らされてゐた庶民階級の因襲思想は、馳け出しの新興階級の限度を超えた行動に對して、町人の分際としてといふ顰蹙的な考へ方を持つやうになつてゐた。西鶴も亦、因果思想に對してと同様、社會民衆の通有性的道義觀を有してゐた事を物語るもので、ここに溫顏の町人西鶴が彷彿としてゐるのを覺える。

以上第一第二類は、概して慣用語句であるが、若し、西鶴の神佛關係用語を、慣用語句と然らざるものに二別するとすれば、その慣用語句の雜の部として、女陰を祕佛といふ戲稱、「あの男いきた如來樣」といふ如き比喩法、貧乏神・めくら神・御三寸大明神といふ如き假神、正直の頭に神宿る等の諺及びその轉用、これらに現はるゝ神佛關係語句も多く、いふべき事もなくはないが、本論では一先づ省略する事にした。

第三類は、金錢萬能欲の世の中に於ける庶民の對神佛思念及び行動、これらに對して神佛は如何なる態度を示したか、その神佛の立場心境を、西鶴が想像して見た語句を對象とした。

先づ本類の理解に便する爲め、それらの語句を語る前に、當時の世相の一端を、西鶴自身の言葉によつて示して置かう。

「欲の世の中」(永代藏 四ノ一)とは、西鶴もしばく〵用ひた語であるが、「水間寺の觀音に貴賤男女參詣ける皆信心にはあらず欲の道づれ」(永代藏 一ノ一)といひ、「貧より分別かはりて世はみな富貴の神佛を祭る事人のならはせなり」(永代藏 四ノ一)「舟荷を

積て住吉大明神に祈誓を懸んより金銀置かけてかるた大明神を祈るか近道」(二十不孝三ノ二)から、「後世を忘れて現世を祈り」(二十不孝二ノ三)「後世はともあれ現世を祈りていつの世には埋みし無間の鐘の存所を尋ねて」(永代藏三ノ四)といふ現實主義、「銀壹枚づつ上らるゝ事いかに神の信心なればとていはれざる事也」(胸算用一ノ三)「年德の神は御座らいでもくるしうない事四匁が四分にてもゑびは沙汰のない事」(同上)「佛の事にても爰が胸算用で御座る」(胸算用五ノ三)といふ如き、信仰にまで算用づくの理性を持つ時勢、新調奉納の戸帳のかげには、信仰とは似ても似つかぬ、拂下げた古戸帳で茶入れを作り一儲けせんとの魂膽がある恐ろしい世の中であつた。

かゝる虚僞の信仰の對象となつた神佛に對して、西鶴は、「此僞りの心からは住吉へ參詣し給ふとも神は見通し内陣からまことなき俳諧師がまいつたと御顏をふらせ給ひて請たまふまじ」(織留三ノ二)といふ(イ)神は見通し、(ロ)嘲笑、(ハ)請入れず、の三段の構へを以つて神佛の立場を推斷した。

(イ)神は見通し。これは「五人女」二ノ三にもある句であるが、「往生ずくめにすれど神は見通しもつたいなき事」(武道傳來記一ノ二)、「岩清水に詣て責て毎日つく空言を神ぞしるらん」(一代男八ノ一)も同じ思想である。

(ロ)嘲笑　「せち賢こき人心豐かなる福の神是を笑ひ給ふべし」(永代藏四ノ三)「袖も絶えず太子堂迄參詣ながら信心に拜する人はまれ也、女は大かた立ながらかへる佛もおかしかるべし」(二代男五ノ五)「過にし祭にも參詣の輩一萬八千十六人いつれにても大欲に身の上をいのらざるはなし聞ておかしけれども」(五人女一ノ四)等この例である。

(ハ)請入れず　「我身の事(人妻姦通)すへ／＼しれぬやうにと祈ける其身の横しまあたご樣も何として助け給ふべし」(五人女三ノ五)「元來まことならねば佛神是をうけ給はず」(武道傳來記一ノ二)、又「惣じて世間の人身のかなしき時いたつて無理なる願ひ此明神がまゝにもならぬなり」(五人女一ノ四)は、困つた時の神賴みの我儘を神が突つ放した體である。

これらによれば、第三類は、物欲と利己に喘ぐ人情の機微と世相を穿つたもので、西鶴の人生社會認識の深度を示すものとして意義がある。彼はこの醜惡な現實を暴露する爲めに假りに神明の御名にかくれた。これ取りも直さず神明を借りてなした彼の浮世批判であつて、神佛は、彼の浮世批判の具とされた譯である。と同時に、西鶴の所謂三段の構へ方は、卽ち彼の神佛に對する敬虔な信念のあらはれでもあり、神佛を欺く輩に對して、勿體なし！などの歎聲を放つ所に、彼のなまの感情を見得るのである。尤も今述べた彼の浮世批判も、ひたすら峻烈にのみ走る事を避け、常に豐かな滑稽諧謔味を以つて主題を僞裝し、そこに何等の窮屈さも感じさせなかつた事は、注意すべき彼の文學的特質といへる。

第四類は、神佛を揶揄的に取扱つた場合である。西鶴は、實にしば〳〵、天上悟脱の神佛を引下げて、浮世凡俗の情を配して見た。つまり彼等とは最も緣遠かるべき筈の色欲及び金錢その他の俗情を拉して神佛に對立せしめ、誇張し、揶揄し、皮肉り、或は罵言に及び、又世諺お釋迦さまさへを移して己が所爲を妥當化し、其處に、神聖を踏み付けた輕い復讐的快感と、佛神に一泡吹かせた滑稽感をにじませたもの卽ちこれである。

今これらの實例を左に列擧して見よう。（○印　色戀　□印　金錢　△印　雜）

○三人入の水風呂所〱にならべどうもいはれぬ裸身釋迦になりとも見せてみたし（二代男 六ノ四）

○男色女色のへだてはなき物とあさましく取みだして移氣（中略）おもへばいやのならぬおとしあな釋迦も片あし踏込たまふべし（五人女 五ノ四）

○是（七十餘歲の奧横目）を京女の目利にのぼさるゝは猫に石佛そばに置てから何の氣遣もなし若ければ釋迦にも預けられぬ道具ぞかし（一代女 一ノ三）

○藏王權現も片足あげてましますは美女なき里を住うくよき所を見立て飛給はん御けしき（俗つれ〴〵四ノ四）

○孔子も椀久もどこから生れたとおもやるぞ釋迦如來は脇の下から誕生ましますとや、今の衆生そんな事など合點はせず（好色盛衰記五ノ五）

○おもへばつら〳〵道心もおもしろからず後の世は見ぬ事鬼もちかづきにならず佛にもあはぬ昔がまし（一代男二ノ六）

○すへ〳〵は何にならふともかまはしやるな、こちや是がすきにて身に替ての脇心、文珠樣は衆道ばかりの御合點、女道は皆てしろしめさるまじ（五人女三ノ四）

清盛一度戀のわつらひ
○腎情をかすつてしまふ水藥師
かきくとかるゝ京童部に

——大矢數二——

□人の知らぬ物釋迦の私銀（好色盛衰記三ノ一）

□釋迦も錢ほど光らせ給ふ（胸算用五ノ二）

□其身（船頭）になりてもぬしをたづねてかへさるゝは前代ためしなき心ざしなり釋迦も女良もよもやかへすまじ（二代男三ノ二）

△思はずしらずは釋迦もこきたまふべし（一代男五ノ七）（女郎放屁の條）

△同じ佛體ながら爰の山住迷惑なる事に候（文反古五ノ四）　註　世間僧が庵室を外に遊びまはつてゐるその留守の佛體を想像しての言

△鐘鐃鉢を打鳴し本堂客殿轟かし佛も動き出させ給ひ（男色大鑑四ノ五）

載許場を慈悲の心に思ひやる
△釋迦一代はとうてもすくるに
あら働菜摘水くみ薪割

——大矢數一——

七尺さつて師匠に合力
△難行の釋迦の便は棒にあり
饂飩蕎きり空々寂々　——大矢數二——

藥も御さらすしゝのあは雪
△釋迦すでに人にすぐれて肥られて
嵯峨の駕籠かきましやとるらん　——大句數上——

青膏藥や觀音の慈悲
△ちりけもと今此婆婆に腫上り
ぶたれた拍子に蘇りする　——大矢數三——

眞夜中道に迷ふて道もなし
△文殊の慈悲で小便したい
是は又智惠があまつて腫病　——大矢數四——

以上の例の示す著しい特徴は、他の三類と異つて、俳諧文學にも多くの例證を見出しうる事、神がその對象となつてゐない事、佛關係では釋迦を好んで揶揄の材料とした事等である。これらに就いて管見を述べる。

彼の俳諧に例證の多い事は、取りも直さず彼の俳諧革新運動のある一部を如實に物語るものである。彼の談林文學は、自由を基調とし滑稽諧謔を標榜した俳諧であつた。彼等は古流貞門の束縛を一蹴し、貞門輩の持つて以つて金科玉條としたものを敝履の如く捨去つた。古典の通俗滑稽化、尊嚴性の平民化、舊慣の打破があらゆる方面に具現した。

談林はしば／＼

釋迦如來あげやで見しか夢さめて
よめぬ文字かく箱崎の浦　　——物種集上——

あはれいかにやせこけ給ふ釋迦の獄
婆婆八千度雪隱へ行　　——破邪顯正返答　惟中——

といふ如き爆彈的冒瀆的表現を以つて貞門の度膽を抜いたのに對し、貞門は、

かゝる傍若無人の大外道（中略）よくきけ、釋尊婆婆八千度の御出世は、一切衆生を佛果に至らしめん御方便、大慈大悲の誓願、報じても報じかたき大恩教主なるを、あごたのあきたるまゝに痢病をやましめ奉り、八千度まで尿壺（クソツボ）へ落し奉る逆罪達多（ダツタ）が五逆にもすぐれ大惡無道のきりしたん半天連耶蘇の所爲ならずや　　——俳諧猿黐——

と大見得を切つても、その筋違ひの批言は、明かに己れの不明と狼狽を示すに過ぎなかつた。以つて、談林の文學上の所信及び主義が、舊文學に對して、如何に進取奔放であつたかを知るであらう。

談林がその主義の遂行に當つて、最も樂々と抉剔のメスを振ひ得た世界の一つは、牢固たる因襲を持つた宗教界であつたらう。神佛を揶揄的に取扱つた例證の俳諧にも多い所以であり、各類中第四類が西鶴の文學中最も重要な地位を占むるものとして注意しなければならない。

揶揄の對象となつたものが佛關係のみであつたといふ事に就いては、當時の佛教界を一瞥する事によつて釋然とする。僧侶の墮落については既に早く「東海道名所記」等にも見え、その他の諸書に散見してゐるが、今は西鶴の記述二三を以つてそれに代へよう。

○極樂は爰じやと浮世坊主のすゝめ風與一夜聞込それより亂れ佛樣は人に物いはぬがありがたひと不斷の揚麩山の芋干鱈鹽鰆にかはりて（二代男七ノ五）、○諸佛祖師の命日をよげ一月に六齊づゝ是より外はと誓文のうへ魚鳥も喰女ぐるひも其夜にかぎりて三條の鯉屋などにてあそび常は出家の身持なる時は佛も合點にてゆるし給ひ（一代女二ノ三）、○天から降たる佛さまも有がたからず（男色大鑑八ノ五）、○佛にもあはぬ昔がまし（一代男二ノ六）

○茶屋に寢て別れをいそく佛樣　　江　雲

諸行無常のかねことの末　　西　鶴　　――虎溪の橋――

これらは取りも直さず目に餘つた僧侶社會の腐敗と無權威を活寫したものである。談林の驍將烱眼の西鶴が、俳諧革新に際して、文藝技巧の具にこの好題材を逸する筈はなかつた。釋迦が取上げられたのは、單に佛教界を代表し、最も俗耳に熟した名故に外ならない。卽ち第四類は、滑稽文學實現の一技巧として神佛を揶揄的に取扱つたもので、いはゞ全く彼の文藝主義のあらはれであるが、これは決して偶發的の事ではなく、如上の僧界の墮落が然らしめたものであり、その滑稽文學の裏面には、西鶴の痛烈な現行佛教批判の潜んでゐる事を見失つてはならない。然して、彼が神佛に對する精神上のものは、本類には、これを忖度すべき資料が、寧ろ乏しいと見るべきである。

以上は、西鶴の作中に見ゆる神佛關係語句の大概である。第一第二類は慣用語句が多く、第二類に、西鶴の神佛に對する心情を揣す事が出來るが、西鶴色は第三第四類にこれを見る事が出來る。然して第三類に社會批判第四類に宗教批判が行はれ、特に第四類は、彼の文藝を考へる上に重視しなければならない。これらを以つて見れば、西鶴の作中に現はれた神佛は、何れも浮世批判の具に用ひられ、文藝主義の材に供せられたといへよう。換言すれば、神佛は全く、彼の談林文學に於ては、方便の地位にある。彼の神佛は、文藝上の神佛であつて、彼の精神上の神佛は、現はる

る所が尠ない。この點本論に取扱つた神佛は、彼の信念或は信仰としての神佛を考へる上の一資料たるに過ぎない。
然らば西鶴は、その精神生活に於て、神佛を如何に考へてゐたであらうか。これを決する事は今後の問題である。がその二三に就いては既に各類の解説中に所見を述べて來た。各類に擧げた諸例の語句を、更らに、西鶴の詠嘆感想批判として述べられた語句と、作中人物の吐いた語句とに類別する事によつて、その本心を探ぐる道も一法である。然しこれにもまして、彼の語句を超越した種々の場合を愼重に考慮しなければならない。「一代女」の最後の頓悟が、單に彼の小説構成上の一技巧にしか過ぎなかつたであらうか。「一代男」の結末「大往生は女色の臺」を、彼の精神とは全く無縁な、思ひ付きとばかり解釋し去つてもよいか。「二十不孝」にあらはれた因果觀をどう見るべきか。奇異雜談物その他に見らるゝ超自然物に就いての彼の態度はどうであつたか。これらを綜合的に檢討してはじめてその內心の聲を聞く事が出來る。
彼はその文藝行動に於て、宗教上の冒瀆的行爲を敢てした。然しそれは、既に解說した如く、彼の文藝主義の犧牲にした底のものであつて、それを精神生活と結び付ける事は到底出來うべくもない。彼の文學運動は、破壞的でなくはなかつた。然し決して宗教に對して叛逆的ではなかつたのである。たゞ常に、かゝるものに對して、批判的理性を失はなかつたに過ぎない。
彼の文學は、種々の意圖のためにカモフラージュされてゐる。その皮相のみを見るものは、彼を地獄に墮し、大逆罪に問ふのである。あの多元的に見ゆる文學から、最も深部にひそむ一元的のものを掘り出すに非ざれば、彼の精神生活は、永久に誤り傳へられるであらう。「天下の町人」といひ乍ら、「町人の分として」といつた此の矛盾に就いて彼の心底を叩き割らなければならない。彼の宗教的感懷についても同樣である。

文學革命家西鶴は、その名にふさはしい無宗教ではなかつた。紅毛流(オランダ)と異端視されこれを自稱した彼は、吉利支丹の信奉者でもなかつた。その死歿にあたつて、大阪誓願寺の過去帳の人物となつた西鶴は、神道でなかつた事も確言出來る。これらが西鶴の宗教に就いて斷言出來るすべてゞある。そして、西鶴は、腰巾着の如く付き纒つた帮間と見られ、背信の行爲ありしと難ずる者あるに不拘、恐らく神に對して畏れ、佛に向つて素直に合掌出來た溫顏の一町人であつたであらう。これ筆者が、從來あらゆる角度より見、到達した一推斷である。

西鶴諸國咄論稿

近藤忠義

一

我國の封建社會史に於ける、地方分權制の廢棄と中央集權制の樹立とは、そのやうなものへの社會的要求を一身に擔うて之を遂行したところの、信長・秀吉・家康によつて成しとげられたのであつたが、かゝる社會的地盤の轉移は、おのづから時代の人々の生存の形式を、生活のあり方を、從つてその物の考へ方を、新たにせずには置かない。一定の「自由」の思想が近世初期社會に瀰漫した所以のものも、このやうな點にその根據を置いてゐたものであつたといふ事は、既に多くの機會に述べて來たところである。かくの如くして、知識・感情の解放、新しい生活の設計、知識的探求、等々が一應近世町人生活の標識となつたのであるが、文學・藝術の領域に於て示された啓蒙的傾向は、言ふまでもなく、このやうな社會的要求のおのづからなる發露であつた。

思想的要求としての知的探求は、實用的・日常生活的要求としてのそれと結びつくことによつて、地誌や名所記や評判記や、諸種の百科事彙的な解說書（重寶記・訓蒙圖彙の類）の極めて夥しい刊行を生んだのであるが、純文學の領野に在つても、諸國の珍談奇譚の蒐集・紹介といふ形を採つて、新文學の爲の苗床が形成せしめられた。このやうな假名草子の時代を承けて生れ出でた「好色一代男」が、いはゆる諸國咄的構成を採つたといふことは、まことに自然な

徑路でなければならなかつた。

社會的意欲としての此の知的探求は、それが文學に働きかけるに際して、その取材の上で先づ地域的に、文學生產地(卽ち文化中心地)以外の「諸國」にまで、その眼が注がれるに至ることは自然である。しかもこのことは、諸國間の交通の急速な解放と發達といふ、一つの新しい現實によつて、一層力強く刺戟される。更に又第二には、從來の孤立した文化中心地に於ける、因襲的な・固定した・周知の生活諸相ではなくして、その都市に於けると地方に於けるとを問はず、何かしら目新しいもの・從來見なかつた新しい生活が求められるが——さうして現實には、もはや、新しい生活・近世町人の獨自の生活が駸々としてその歩みを運んで居たのであるが——、しかし一般的に言つて、それら生活上の新現象はまだ、新時代的眼孔を通して、いはば文明批評的に把握され處理されることを得なかつたが故に、ただ單なる目新しい事實・事件として取り上げられるより他には途が無かつたのである。從つて、時代の新現象としての生活諸相と、單なる珍談奇譚とが、同時に取り上げられることとなるのであり、しかもなほ、後者の場合に於てさへ、知的探求といふ時代的欲求に添ひ得たのであつて、かかる珍・奇談への作家の眼が現實的であればある程、一層その效果を擧げ得たのである。

「諸國咄」的作品の成立の根據——作家の眼が「諸國」にまで擴大せられ、しかもその題材が「咄」すなはち珍談・奇譚のたぐひであつたことの根據——は、右のやうにして理解することが出來る。

なほ、「西鶴諸國咄」が、全篇の構成上、直接には、「宇治拾遺物語」の構成に示唆されたものである(山口剛氏「西鶴名作集」解說參照)といふ事實も、おもふに「宇治拾遺」をはじめとして爾餘の中世說話諸文學は、同時代の王朝的貴族的傳統文學の把持する末期的浪漫主義に、その非現實的傾向に、消極的に對立するところの、否定的現實主義

を採つて立ち現はれて居つたのであるが、上述のごとく西鶴の時代に、その文學が一つの現實主義を採り、技術上、諸國咄的構想を取り上げるべき條件を孕んで來て居たがために、「宇治拾遺」のごとき作品から何らかの遺産を承け繼ぐことを得たのである、といふ點を理解することによつて、正しく把握することが出來るのであり、またさうしなければ、文學作品に於ける「影響」の問題を、單に偶然な・任意な現象として、表面的にしか理解出來ないこととなるのである。

二

さてこの小稿では、「西鶴諸國咄」に於て、就中その超現實的な諸說話が、近世現實主義に對するどのやうな結びつきを以て立ち現はれて居るか、といふ點を考へてみることによつて、この短篇集の特質を理解すると共に、元祿に至るまでの近世初期文學が抱いて居た現實主義の實質を明らめるための、一つのよすがとしようと思ふのである。

「西鶴諸國咄」（貞享二年刊）五卷三十五話中には、後に「武家義理物語」・「武道傳來記」などの所謂武家物に至つて整理・集成せらるべき諸說話（例へば、一ノ三・三ノ七・四ノ二）や、「本朝櫻陰比事」などの裁判物に纏められるべき說話（一ノ一・二ノ五・三ノ一・五ノ四）や、町人の日常經濟生活面に取材する所謂町人物に發展すべき說話（五ノ七・二ノ七前半・五ノ五前半）や、並びに、それらの要素を部分的に包含するか若しくはそれらからは獨立した諸種の「奇談」を有するのであるが、以上を總括して、之を一應常識的にその題材の上から見ると、現實的なものと超現實的なものとに分類することが出來るのであつて、本稿では主としてその後者を問題にすることによつて、西鶴に於ける諸國咄的說話の特質を考へて見たい。この場合、超現實的說話の特質が明らめられれば、自然現實的な說話の特質も亦之に準じて明瞭になつて來る筈だからである。

「西鶴諸國咄」三十五話のうち、超現實的題材を扱うて居るものは、およそ二十一話を數へることが出來るのである

が、今そのやうな題材に對する作者の取り扱ひ方を考へて見ると、大體つぎの四つに分たれる。

一　奇・怪談を、奇・怪談それ自身として取り上げて居るもの

二　奇・怪談の超現實性を、現實的に暴露して居るもの

三　説話構成上、奇・怪談の部分とは別個に、現實的な説話の部分を添へて居るもの

四　その他、何らかの方法によつて、奇・怪談を現實化して居るもの

第一類の純奇・怪談としては、「殘物（のこるもの）とて金の鍋」（二ノ四）・「夢路の風車」（二ノ五）・「面影の燒殘り」（三ノ二）・「命に替る鼻の先」（四ノ三）・「鯉のちらし紋」（四ノ七）・「身を捨（すて）て油壺」（五ノ六）など九話ほどを擧げることが出來るが、これらの多くは、當時の地誌等に載せられて居る傳説や支那の志怪をその原據として持つて居り、それらの忠實な紹介小説化・飜案にとどまつて居る。例へば、「殘物とて金の鍋」は「續齊諧記」の「鵞籠記」（酉陽雜俎にも引く）そのままの日本化であり、「鯉のちらし紋」や「身を捨て油壺」は、河内の内助ケ淵や、姥ケ火や、網島大長寺鯉塚などの傳説に據つて居り、その他筆者にとつて出所未詳のものもあるが、その殆どすべてが、巷間によく傳へられる怪異談の單なる紹介といふ形をとるものである。從つて表面上は作者のそれら怪異に對する批判を少しも見出し得ない。しかし乍ら、一應無批判に投げ出されたそれらの怪異は、謂はゞ名所記が傳説を紹介するやうな態度を以て述べられて居るのであつたから、決して末期の怪談のごとく讀者に恐怖感や神祕感や中世的宗教感を與へるやうな性質のものではなかつた。（偶々「水筋の拔道」の如き、若狹井の傳説を背景として因果應報の佛教思想を結論とした説話も存するが、それも近

世初期の社會にとつて、積極的な進歩的な働きかけを爲し得る悪因悪果の思想であつたから、この怪談が少くとも末期的な性格を作り出すことから救はれて居るのである。）しかしそれにしても、怪談は結局怪談であつて決して現實的なるものではありえない。「自然の道理」を力説し怪異を否定する西鶴（五人女・卷の二參照）が、これら第一類の怪異譚をどのやうに解釋し如何に扱うたか。前表第三類では現實的な說話と結びつける事によつて、究局に於て超現實的なるものを否定したが、この場合彼は、まづ第一には消極的に、說話の原據に能ふ限り忠實な紹介乃至飜譯の態度を取ることによつて（この際作者がそれを意識し計畫的に行つたか否かは少しも問ふ所ではない、と言ふ點を理解すべきである。事實はしかし無意識にさうなつたのであらう）、更に第二には、例へば「命に替る鼻の先」の天狗を、極めて人慣れた、いたづら好きの小猿か何かのやうに描いて居るなど、怪異譚を出來る限り卑俗化・現實化することによつて、一應怪異を怪異として扱ひつつ、しかもその怪異性を薄めて居るのである。更に第三には、例へば序文に所謂「世にないものはなし」といふ思想（後にも述べるやうに、それはこの短篇集全體に對する結論でもあるのだが）によつて、これら超現實的怪異をも、第二類以下の場合と同列に置かうとする氣構へを示すことに於て、これらの怪異性の、現實（當時の典型的町人にとつての現實）に對する矛盾を弱め抹殺するのである。尙、この點については、第二類以下を考へて行くに從つて一層明かになる筈である。又、この第一類に屬する諸話が、比較的無味な紹介的敍述に終つて居るといふ技術上の問題も、以上で自ら說明がついたのである。なほ又、近世初期の名所記のたぐひが、當該社會の知的欲求に應じたものであることは既に述べたが、從つてこの類の怪異譚が矢張り同樣の意義を持ちえたことは述べる迄もない。

第二類は、說話の超現實性を現實的に暴露するものであつて、例へば、「傘の御託宣」（一ノ四）では、美しい娘を

人身御供に要求する好色な神（傘が神體である）に、自らすゝんで我身を提供した後家が「宮所に夜もすがら待に、何の情もなしとて、腹立して御殿にかけ入、彼傘をにぎり、おもへばからだたをし奴と引やぶり捨つる」といふ話で、「形は昔の眞似」（四ノ一）の木偶の怪が實は狸の業であつたと言ふのと同様の結尾である。「傘の御託宣」の場合、怪異の否定の方法は、なほ神の世俗的な人間的な取扱ひによつても強められて居るが、周知の如く、これは西鶴の屢々用ゐて居る所謂俳諧的手法であつて、爾他の各類にもすべて共通する。

第三類は、奇怪談の部分とは別個に現實的な説話を添へるもので、例へば、「見せぬ所は女大工」（一ノ二）では、女大工が御所方の奥局に傭はれて怪異の正體を發見する話であるが、例の賴光・土蜘蛛の傳説と同型の怪談が形式上この話の中心をなして居るのであるけれども、その前置きの部分には、早く彼の俳諧に現はれ後の町人物に至つては其の主題にまで發展するところの、新しい經濟生活が産み出した新しい世相（ここでは諸職の分野の擴大の問題）への謂はゞ文明批評的口吻さへ見られるのである。同様に「神鳴の病中」（二ノ七）では遺産相續にからまる爭ひが、「執心の息筋」（五ノ五）では經濟生活面から取り上げられた繼母子の問題が添へられてをり、「十二人の俄坊主」（二ノ二）では是亦西鶴の屢々關心を寄せる一つの「修練觀」を基礎とする熟練者の妙技が描かれて居る。卽ち不可能事も修練によつては可能に轉じ得ると言ふ思想、個人の力を全く否定する中世的考へ方と鋭く對立する所の、新興町人獨自の自由思想をその根柢に置く個人の力の積極的な肯定。このやうなものに出發するのが西鶴の修練觀であり、「諸國咄」中には「力なしの大佛」（四ノ六）や「不思議の足音」（一ノ五）などでは説話の主題とさへなつてをり、「諸國咄」以外にも夥しく現はれて居るものである。

西鶴は、冒頭に述べた如き事情に促されて、一應怪・奇譚を題材とはしたけれども、現實主義者としての彼の世界

觀が怪奇を單に怪奇として取り上げるに堪へざらしめた結果、自ら(おのづか)説話に右のやうな構成を取らせるに至つたのである。この事は、第二類の諸話に屢々結果して居るやうな、構成上の不統一性といふ技術上の缺陷をも齎(もたら)したのである。少くとも此の場合、右の缺陷を、西鶴の個人的な自然的な能力や性癖に歸し去ることは明かに誤りでなければならぬ。

第四類に屬する超現實的説話は、上に分類した以外の何らかの方法によつて、奇・怪談を現實化して居るものであつて、その現實化の方法は、例へば「雲中の腕押」(一ノ六)・「神鳴の病中」(前出)・「行末の寶舟」(三ノ五)・「姿の飛乘物」(二ノ一)・「紫女」(三ノ四)・「夢に京より戻る」(四ノ五)等、全體もしくは要所々々を、俳諧化・現代化する方法である。就中「雲中の腕押」は見事に全體を俳諧化してをり、説話の骨子は常陸坊海尊が今尚箱根山中に隱棲し神通力をあらはすといふ奇怪な筋であるが、「義經記」巻八・「衣川合戰の事」の記述以來傳播せられた海尊生存説に倚據しつつ、義經・靜以下著名な家臣どもを、完膚なき迄に俳諧化し去るのである。かくしてこの話の怪奇性は殆ど抹殺されて居る。その他この類に屬する上掲の各話では、龍宮が鬼女が雷神が妖精が盡く現代化・浮世化せられる。

更に又、説話をして事實譚らしい姿態(ポーズ)を取らしめることによつて、おのづから怪異性を弱めて居る場合も見出される。例へば、慶安二年の春(「傘の御託宣」)・寛永二年冬のはじめ(「姿の飛のり物」)などと時日を明記することによつて、或はまた、各怪異の行はれた地名國名を指定すること(これは又「諸國咄」成立の事情がさうさせるのであり、諸國の話を欲するのは、原則として事實譚を欲するのであることは冒頭に述べた所によつて自明である)によつて、如何にも作りごとではないといふ印象を讀者に與へようとねらふのである。現實に存在した事實である、といふ點が强調せられる場合、その怪異は、近世的現實主義者であるところの當時の典型的町人にとつては、怪異が怪異の名に價する本來の神

祕的な性格が抹消せられ、事實上怪異感は消失する。怪異を、その中に浸つてではなしに、外から冷酷に眺めることが可能となる。超現實的なるものの現實化が、このやうにして行はれるのである。

三

「諸國咄」卷三の六話「八疊敷の蓮の葉」は次のやうな話である。蛇が大蛇となつて昇天したのを見つけた里人が、さても／＼大きなる事やと騒ぐのを、道心者が「おの／＼廣き世界を見ぬ故なり」と嘲笑つて、筑前にあるさし荷ひの大蕪菜・雲州松江川に居る横幅一尺二寸の鮒・江州長柄山の九間ある山の芋、その他國々の巨大な產物（この邊りは序文と重複する）を列擧し、遠國を見ねば合點のゆかぬ物であるとさとした後、むかし嵯峨の策彦和尚が入唐して歸朝し、信長に謁して、靈鷲山の御池の蓮の葉が二間四方程の大きさがあり其の上に晝寢する人もあると話したところが彼の嘲笑を買つたので、和尚は「信長公天下をおしり遊ばす程の御心入には小さきこと」と歎じたと一同に訓へる、といふ話である。

この小話は「西鶴諸國咄」全篇の總收であり結論である。彼が隨所で洩らして居る言葉は、「世間は廣し」であり「世に無いものはなし」である。新しい新時代的生活の諸相をその作品に取り上げるに際して、その都度彼はかう感歎するのである。これこそ、すでに屢〻述べて來たところの、近世初期に於ける社會的欲求としての知的探求の嗜欲が、その實踐にあたつて當然洩らすべき僞りなき嘆聲でなければならない。「世間は廣し」・「世に無いものは無し」、この新興町人一般のかかげる新鮮な標語は、彼等の探求の意欲を一層促進する。しかし乍ら、既に觸れて來たやうに、彼等の現實觀は未だ充分には整理されて居らず、リアリストとしてのその眼は尙完全には拭はれて居なかつたから、諸〻の現象に直面して、そのいづれが己たち自身に屬する新しい現實であり、又いづれが己たちに背を向ける古い假象であるかを明確には看破し取捨することが出來なかつた。彼等の旺んな知的探求は、かくして、彼等にとつての容しい

假象に向つてさへもその腕を伸ばさうとするのである。「諸國咄」に於ける超現實的要素が、尙若干現實主義的に整理し改裝され得ずして遺されて居る事實は、このやうにして理解される。

しかし、兎に角にも彼等は、その本質に於ては、言ふ迄もなくリアリストであつたから、そのやむにやまれぬ知的探求の對象として一應目ざされた反町人的要素――超現實の怪異に對しては、特定のリアリストとしてそれを受け入れ得る程度の合理化が必要であつた。西鶴はこゝに於て「世間は廣し」・「世に無いものは無し」といふ例の標語を轉用したのである。

「このやうな事實は現實には存在し得ぬ」と言ふ代りに、西鶴が如何に數々の、全くそれとは反對の姿態(ポーズ)を取つて見せたかを、我々は甚だ興味深く眺めるのである。

大盡に就いて

小柴値一

一

近世資本主義の齎した現象の一つに大盡がある。德川封建制度の治下に於いて、又儒教思想によつて久しく馴致せられてゐた時代に於いて、根本的に相容れぬ狀態を以つて、而も足下から鳥の立つやうに町人階級が勃興し、所謂元祿文化が形成せられたといふことは、吾が國の經濟史の上から見ても、社會史の上から見ても、或は思想史、文學史の上に於いても、興味ある問題である。卽ち近世商業都市の急激なる發展は、封建制度內に於ける財政々策の矛盾と相反して、明かに町人階級の凱歌であり、殊に武士階級の重壓の下に置かれた町人並に一般民衆にとつては、階級觀念の上に於いても一大變革を與へたものと思はれる。「一切の人間、目あり鼻あり、手足も變らず生れ付きて、貴人高人よろづの藝者は格別、常の町人金銀有德ゆゑ世上に名を知らるゝ事、是を思へば若き時よりかせぎて、分限の其名を世に殘さぬは口惜し。俗姓筋目にもかまはず、只金銀が町人の氏系圖になるぞかし。たとへば大織冠の系あるにしてから、町屋住ひの身は貧なれば、猿廻しの身には劣りなり。とかく大福を願ひ、長者となる事肝要なり」（永代藏・六、智惠をはかる八十八の升掻）と西鶴をして言はしめてゐる。西鶴は元祿新興文學の闘將たるは敢へて言ふまでもない。然し闘將であり、急先鋒ではあるが、階級意識に對しては刺戟的でなく、可なり穩健な作者である。分を守るとい

ふことは彼の作品にも見えて居り、教訓的な口吻も屢〻散見する所である。然るにその西鶴をして、「大織冠の系あるにしてから、町屋住ひの身は貧なれば猿廻しの身には劣りなり」と言はしめたことは、最早時代がステーチヤースによつての權威が認められなくなつたことを示すものである。少くとも町人階級としての新興勢力が、一つの目標をば獲得することが出來たのである。又、町人としての理想をも意識することが出來たのである。卽ちブルジョアとしての理想の實現であつた。一度經濟組織が變革せられるや、虐げられて來た町人階級にとつては、經濟方面に於いては、最上層たる武士階級に十分に勝ち得るといふ自信がついた。それは多年鬱積してゐた反抗からでもあつた。故にこの意識の下には、町人階級の上下を問はず醜い迄に金錢に狂奔したのである。況んや教養の低い町人等にとつては時にはマンモニズムの思想に支配せられることも、當時としては已むを得ない事であらう、「大黑講を結び、當地手前よろしき者共集り、諸國の大名衆への御用銀の貸入の內談を、酒宴遊興よりは增したる世の慰みと思ひ定めて、寄合座敷も色近き所を去つて、生玉下寺町の客庵を借りて、每月身體詮議にくれて、命の入日傾く老體ども、後世の事は忘れて、只利銀の重り、富貴になる事を樂しみける」（胸算用・二、銀一匁の講中）の如く、大名貸しといふ點にも一つの優越を味ひ、後世を忘れても富貴になることに狂奔したのである。然しかうした事實は武士階級にとつては決して喜ばしい事でもなかつた。理想主義に生き、物質主義を排擊する武士道精神にも悖り、一方御用儒者の唱道する儒教精神にも反するものである。從つて當時の儒者等もこの風潮には眉をひそめて擯斥したのである。否、浮世草紙の作者等すら道義的な口吻を漏し、好色萬金丹は、「命よりも銀を大事なものと思ふもおろかの世や」といひ、西鶴にしても教訓めいた態度をとつてゐるが、滔々たる時世に對しては、西鶴も忠實に、「昔は大名の御前方にもあそばさぬ事、思へば町人の女房の分として、冥加恐しき事ぞかし」（胸算用・一、問屋の寬濶女）と描寫せざるを得なくなつてゐるのであ

る。武士階級が、或は道學者が如何に時世を慷慨しても、この近世資本主義が武家封建制度に對して一大脅威であつたことは爭ふべからざる事實であつた。

勿論表面化した鬪爭は許さるべくもない。殊に封建制度の儼然たる時代に於いては、武士の體面上からも町人の跋扈は許し難いことである。然し彈壓の下に置かれた町人の燃えるが如き烈々たる復讐心は何等かの形で報復手段を講ずる筈である。殊に教養の低い者の復讐は慘虐でもあり、又露骨なものでもある。元祿町人がブルジョアとして、經濟界に勝利を博したことによつて、形式的に於いても、精神的に於いても凱歌をあげ得たのである。けれども町人の滿足はそれだけでは、未だ本能的な滿足は充されなかつたであらう。それには經濟界の活躍は、元祿の諸文化を發達せしめ、演劇界も遊里も史上空前の發展をなしたからである。彼等の本能生活は、金錢の威力によつて、これらの諸種の機關を征服し、享樂することに存した。これらの享樂機關は全く町人階級のために存在するが如く新興ブルジョアの前に叩頭して歡迎したのである。豐富なる財力によつて、天下の名妓を侍らし、幇間末社に取り卷かれ、贅を盡して廓の情趣に浸るが如きは、武士階級に於いては到底夢想だにし得なかつたことである。天下の町人なればこそこの無上の快をも樂しみ、ひそかに武士階級をも瞠若たらしめ、又、僞らぬ人間性の本能の理想をも實現し得られたのである。かうした人間性の選手として第一線に立つたものは、實に大盡の存在であらねばならぬ。

二

色道大鏡には、「大臣。傾城買の上客をさしていふ」とある。苟くも傾城買の上客と稱せられる以上、ここに豐富なる資力と大盡としての教養とが絶對必要となつて來る。紋日紋日の負擔と雖も僅少の額ではない。正月買にしても、「さて正月をする時の様子はと聞けば、太夫様への遣ひ金、先づ十五兩、外に小袖一重、禿に小袖代金子三兩、遣手

に銀二枚、是は年の暮にとらせ、春は小判一兩とらすなり。轡へ金子十兩、内へ同じく五兩、勤日大晦日より十五日まで、十七日八日廿日廿五日廿八日まで正月買の役なり。右は六拾目小判になほし、六十一兩一歩にて諸事仕舞はるゝといふ」(二代男・二、男かと思へば知れぬ人様)程の出費がかさむのである。勿論大盡たるものは、是等の經費位は問題とする筈もなければ、むしろ見榮としても喜んで負擔する所である。「承應三年の春の末に、江戸より鈴八といふ男、此の里に來て名乘り懸けてのお敵、物の見事に九月のはじめ頃までに、八百五十兩遣ひけると也。右千兩京都の遊山金と書付け置きしに、歸りに品川泊りの夜、壹兩二分あまりしを、餘の事に遣ふもつたいなしとて、人留め女にくれて立ちけると也」(二代男・七、勤の身は狼の切賣よりは)の遊興費も惜しげなく投げてゐるのである。長崎の鹿といふ大盡は、千三百兩を投じて吉野を伏見に根引したことも、二代男に書かれてゐる。又、紀文大盡が揚屋町泉屋半四郎の宅に於いて、追儺の豆蒔の際に、桝に小粒金を入れ、遊女幇間等に拾はしめた事も傳説的に有名な話であるが、少くとも大盡たる一つの資格には、金錢にこだはることなく、湯水の如く蕩盡し、そこに快を味へねばならなかつたのである。そしてそれは如何にも元祿の町人らしい豪宕奔放なる性格が躍如としてゐるのである。然し一方には大盡は帥と稱せられ、譯知りと言はれねばならないのである。卽ち大盡には大盡としての教養が存するのである。遊里を人間本能の對象として遊興しつゝある內、いつしか洗煉せられたる遊興となり、遊里は一種の社交機關となり、大盡自體も遊里の情趣に浸るを樂しむこととなつて來た。而もかくあればある程、大盡にも教養が必要となつて來なければならぬ。

然し流石に元祿の時代は諸文化が發達してゐた。從つて富豪の子弟も夫々の藝道の修錬をしてゐたのである。「手は平野仲庵に筆道をゆるされ、茶の湯は金森宗和の流れを汲み、詩文は深草の元政に學び、連誹は西山宗因の門下と

なり、能は小畠の扇を請け、皷は生田與右門の手筋、朝に伊藤源吉に道を聞き、夕べに飛鳥井殿の御鞠の色を見、碁は玄齋の碁會にまじはり、夜は八橋檢校に彈きならひ、一節切は宗三に弟子となりて息つかひ、淨瑠璃は宇治嘉太夫節、踊は大和屋の甚兵衞に立ちならび、女郎狂ひは島原の太夫高橋にもまれ、野郞遊びは鈴木平八をこなし、噪ぎは兩色里の太鼓に本透になされ、人間のする程の事、其の道の名人に尋ね覺え、何をしたればとて人の中には住むべきものを」(永代藏・二、才覺を笠に着る大黑)といふ風に、元祿人としての教養を怠つてゐなかつたのである。故に大盡は單に金力によつてのみ遊里での王者ではなく、一方には教養の點に於いても、又、感情生活の上に於いても、最も洗煉せられたる人物であり、模範的なる好紳士でもあり、最も理想化された人物でもあつたのである。

大盡がかく迄豪放に、又、かくまで廓の譯知りであり、粹であることは、一方に於いて太夫の教養とも密接な關係があつた。「都をば花なき里になしにけり、吉野は死手の山にうつして」と悲しまれた如く、その吉野は單に一遊女としての教養ではなく、家庭に於いても立派な婦人であつた。「私は三筋町に住みし吉野と申す遊女、かゝるお座敷に出るは、勿體なく候へ共、今日御隙を下され、里へ歸る御名殘に、昔を今に一ふしを歌へば、消え入る斗、琴彈き歌をよみ、茶はしほらしくたてなし、花を活け替へ、土圭を仕懸なほし、娘子達の髮を撫でつけ、碁のお相手になり、笙を吹き、無常咄し、內證事よろづ人さまの氣をとるぞかし」(一代男・五、後は樣つけて呼ぶ)を見ても、「京の女郎に江戶の張を持たせ、大坂の揚屋であはば、此の上何かあるべし。爰に吉原の名物吉田といへる口說の上手あり、風儀は一文字屋の金太夫に見ますべし。手は野風程書いて、然も歌道に志深し。或時飛入といへる俳諧師、涼しさや夕よし田が座敷つきと有るに、螢飛入我が床のうちと卽座の脇、是にかぎらず每度聞きふれし事ぞかし、一ふし歌うて引いて自然と此の勤にそなはりし女なり。萬かしこき事思ひの外なり」(一代男・六、匂ひはかづけ物)を見ても、遊

女の教養程度が知られるのである。兎も角、容貌を第一として、而も手蹟、歌道、俳諧、活花、茶の湯をはじめ、人情に厚く、大様にして細かでなく、而も機微にふれ、あらゆる點で女性の好模範であらねばならぬ。大盡が當時の男性の理想化されたものであれば、太夫は當時の女性を代表するものでなければならぬ。「太夫は爪も人に切らせ、髮結ふまでも二人かゝり、眉作りも人まかせに、寢屋の蚊屋に入るまで、引舟禿にあげさせ、腰をかゞめる事も六七人も前後を守護し奉る」(二代男・七、勤の身狼の切責よりは)の如く、女王として廓内に君臨してゐたのである。されば ここに大盡と太夫といふ好コンビを以つて廓の情趣が醸し出されたのであつた。

三

諺にも、「粹は身を食ふ」といふ。「しかし必竟此の道の極意は只金銀なり。必ず粹になつて色道においてはよく鍛錬したる男、えては揚屋の門を夜も編笠着て通るやうなが多きなり。然ればいづれもあんまり粹になる事をよい事ぢやと思召すな。粹に成ると金が皆になるとが一時ぢやと大笑ひいたせば」(色三味線・江戸之卷、五)にもあるが如く、限りある財寶を限りなく散ずるのであるから、やがて來るべきものは大盡の沒落でなくてはならぬ。否大盡として豪奢な生活をなしたものは必ずかくある運命に置かれるのである。近松や西鶴や、或は八文字屋本は多くの大盡を題材として戯曲或は小説を描いてゐるが、大盡として最後を全うする者は極めて稀である。「冬編笠も垢ばかり、紙衣の火打膝の皿、風吹き凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとすれど古の、花は嵐の頤に、今日の寒さを食ひしばる、食み出し鍔もかみさびて、鐺詰りし師走の果、胡散らしく吉田屋の內を」覗くものは、一人藤屋伊左衞門のみのなれの果てではなかつたらう。世の多くの大盡の末路は一樣にみすぼらしいものであつた。まだしも伊左衞門は勘當の身であり、許されれば藤屋の當主である。一代男の世之助も、後に二萬五千貫目の遺產が舞込んだこそ終りを全うし得たのである。かう

した稀な條件以外は、大盡の沒落することは旣定の事實と云つても差支へはない。西鶴は、「今此の身になりて思ひあたり、諸藝のかはりに身を過ぐる種を敎へ置かれぬ親達をうらみける」（永代藏・二、才覺を笠に着る大黑）と云つてゐる。事實大盡と稱せられる者の多くは、經濟界の變動によつて一躍成金になつたものか、或はそれらの富豪の子弟たちであつた。一攫千金の機會は二度三度とあるものではない。又、お乳母日傘で育つた富豪の子弟は勿論商業の道には明るくなかつた。從つて元祿人の大氣にまかせて蕩盡した財產を再び本の富豪に返すことは到底爲し得ない事である。かくして多くの大盡は結局沒落零落の運命を辿るより他はなかつた。

人間的に見て最も華かなものであつた。人生極致の享樂であり、又理想でもあつた。武家階級等の到底爲し得ない快樂を恣にして、而も滅びて行く元祿兒、それも彼等にとつては一つの本懷であつたかも知れぬ。

四

沒落後の大盡は何處へ行つたか。元祿時代を中心にして幾多の心中悲劇があつた。近松の心中曲を見ても多くは金錢に詰つての心中であつた。金によつて零落した大盡は果して心中の過程を辿つたであらうか。然しこれを近松の心中曲に見ても、一人として廓の情趣を滿喫した大盡は居ない。殆ど養子か手代の身分の者であり、心中の女性も太夫などと稱せられる位の者はゐない。そして大盡の遊蕩費に比べると比較にならぬ少額の金錢にて心中の悲劇にまで陷つてゐるのである。又、心中曲に見えるあの切實な戀愛も大盡達の遊興の中から見出されないのである。かうして考へる時、所詮元祿時代は黃金萬能の時代であつた。大盡は金によつて一切を解決して來たのである。又、粹の名によつて一切を通つて來たのである。そこには金錢の苦しみも、戀愛の悲しみもなかつた。心中することなしに通つて來た大盡の徑路は結局滿足なものであり、幸福なものであらう。そして今やうらぶれて借屋住ひともなり、或者は藝は身

を助ける鼓謡の指南者となり、或者は金魚の餌の棒振蟲を商うて僅に生計を立ててゐる者すらあるのである。今の身に思ひ比べれば感慨無量のものもあらう。然しわれらが想像してゐる程に、零落した大盡はその身を果敢無んでゐないのである。むしろかく零落しても未だ當時の夢が覺めない如く、零落それ自體も彼等にとつて享樂の世界であり、情趣の世界であつたとも見られる。零落の後も猶、越後町京屋五十本の內と書きつけた破れ傘や太夫からの手紙の貼りまぜ屛風を手放さずにゐる者(置土產・一、僞もいひすごし)、「此の浦に引く網の、磯藻まじりの小鰯、一籠僅か五六文を値切りて、今日は祝ふ八朔なりと手づから鱠にして、腹ふくるゝを樂しむ」者(置土產・二、愛宕颪の袖さむし)、「おのが里住ひも成り難く、一家ちりぐ〳〵に立ちわかれ、在鄕の道筋は忘れず。玉造の末なる中道といふ橋の詰にて、少しの餅屋をせしが、見世にかけたるのふれんの紋に、梅鉢を付けしは、越前が定紋、さてもしやらくさし」(置土產・二、うきは餅屋つらきは碓ふみ)、「今見れば麴町の六丁目の横町にあはれなる借棚して、鯉のさし身をつくりて盛り賣にまはりぬ。因果は皿のふちと人の笑ふもかまはず、色里の文どもを庖丁の包み紙にして見せけるも、此の身にも贅をやめざる親仁」(置土產・三、子が親の勘當逆川をおよぐ)等を見ても、昔の夢を追憶しつゝ、淡い喜びに浸つてゐる。

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきやと咏嘆したくなるであらう。零落しても彼等は昔の夢に生きてゐるのである。又、生きてくるのである。そこには、昔の大盡としての誇りを失ひたくない。威嚴を落したくない。そして矜恃を保ちて行きたいと、複雜な心理の下に、常に境遇との矛盾を感じて一種のヂレンマに陷つてゐたのである。西鶴の置土產には、かうした零落した大盡の心理を心にくい迄に描いてゐるのである。昔の色友達に訪ねられ、酒を振舞ふにも錢もなく、大釜一つを古金屋に賣つて錢に替へねばならぬ身が、招かれるまゝに、「物のいらぬ事なれば、男つくりすまして、夜前着物皺のばして、糀染の平帶、長柄の一つざし、角を倒さぬ大鶴屋が扇、見た所は今も大臣なり。今日一日のやと

ひ草履取に奥縞の風呂敷かたげさせしが、此の内へ其の名染込の暖簾たゝみ入れ、人目には替着る物と見るらんと我心のはづかしく」(置土産・一、大釜のぬきのこし)や金魚の餌の賣上げ金二十五文、而も妻子等が夕食の支度として待つ金ながら、昔の色友達に一盃の茶碗酒を振舞ひ、猶自分の家に招き、茶を沸す薪木もなく、釣佛棚を菜刀にて打割りて饗應するまで見榮を考へてゐた。あまりの氣の毒さに、「三人ながら呼きて、持ち合せたる少金を取りあつめて一歩三十八、こまがね七十目ばかり立ちさまに、天目に入れて、是とは斷りなしに出せしが、亭主もおくりて出でしが、さらば〳〵と夕暮深き道を急ぎしに、又、跡より彼金銀を持ちて追つかけ、是はどうした仕方、神ぞ〳〵筋なき金を貰ふべき仔細なしと、人のことわりも聞かず投げ捨て立ち歸りぬ」(置土産・二、人には棒振むし同前におもはれ)を讀む時、笑へぬ喜劇であり、むしろ悲劇の世界である。零落しても猶大盡の氣位を保たうとする所に、文學として無限の興趣が湧いて來る。

五

大盡と種々なる意味で比較せられるものに通人がある。時代的に見れば大盡より遙におくれ、地理的に見る時は大盡が主として京阪の遊里を中心としたるに對して、通人は江戸の遊里に活躍してゐる。文學的に見ては一は浮世草紙であり、一は洒落本である。又、文化的方面より論ずれば上方趣味に對する江戸趣味ともなる。通人の發生も同じく江戸時代の經濟組織に基づくものである。が、その內容に於いては大盡の發生と可なり距りのあるものであり、又、同じく龐大なる財力によつて遊蕩生活を營んだ點に於いて相通ずるものがある。一は粹と呼ばれ、一は通と稱せられた點を思ふと、その趣味生活に似て非なるものを考へ得るのである。かくして時代が生んだ遊蕩兒、大盡と通人とを比較する時、自ら兩時代の好尙、趣味觀、或は、社會情勢をも察知し得られるのである。

兎も角、通人が主として淺草藏前の札差であつたといふ所にポイントが置かれる。それは田沼時代の武士階級の墮弱なる風潮は益〻武士階級を窮乏に陷れてしまつた。抑〻札差は享保九年に大岡忠相町奉行たりし時に始まり、旗本家人の俸祿たる稟米の請取り方、賣買等を請負うたのであるが、窮乏の武士等は自然是等の札差に金融を願はねばならなかつた。武陽隱士の「世事見聞錄」に、「御切米取の分、御藏宿といふものに大借出來、是又何れも分限高の內、三歩一か、又半高も、其餘も、元利の辻に引取らるゝ譯になる樣になれば、右の藏宿へ追從し、手代共に媚諂ひ、又は虛僞り、又は詫言などして、年中右の町人より借りて計り過行樣になり、表向は高の名目ありて、內證はみな右の如く取失ひ、町人の蔭を離れては、一日も過行事のならざる始末に及ぶなり。是等も、右の藏宿といふもの有て、其時々の辨用宜しき姿なれども、大は一時の幸にて、其日より利に利を重ね積る故、後には身上を過半奪るゝの大害とはなれり」と當時の武士生活を敍べてゐる。かの元祿時代の新興町人には、少くとも武士階級に先んじようとする氣魄があつた。從つて大盡の行爲には奔放豪宕なものが存してゐた。然し化政度の町人階級、殊に金貸、札差等は、武士への金融に於いて既に蔑視したのである。最早問題にして居なかつたのである。一攫千金の新事業によつた豪商ではなくして、武士對手の高利貸としての富豪であつた。然らば當時の通人と稱せられる者の遊蕩生活も思半に過ぐるものがある筈である。

通人は文字の示すが如く廓の事情にも通じ、世間の事情にも明らかであり、人情の機微にも通じ、或は擧止行動に於いても嫌味なく、所謂卯の毛で突いた隙もない人間を云ふのである。從つて洗煉せられた澁い好み、爽かな言語、餘らず足らずといふ、矢張當時の理想的型（タイプ）の紳士であり、模範的な放蕩兒であり、そして大盡の如く、廓の情趣にも浸つたのである。通人連の風俗に就いては當時の洒落本や隨筆などにも記されて居るが、文金風の髷、或は本多風、

唐棧の織物、扨ては長羽織、羽織の紐に至るまで何れも不健全な思想のあらはれとも見られる。かくして時代そのものは不健全なものであり、而も通人連の流行がそれに拍車をかけたのである。

通人連の遊里に於ける態度も徒らに通、うがちを振り蒔いてゐる。遊女との話題を見ても、單なる日常の雜事であり、當時の流行に關するものであり、その昔の大盡の俤を偲ぶに由がない。そして遊戲的な戀愛から手練手管の應酬である。そこには眞實性といふものを認めることは出來ない。而も遊興は可なり功利的であつた。「もちろん女郎買の道は、ふんだん金を蒔繪にして、下卑なく大まかに遊ぶものとの夢想なれども、こりやア云はずともしれしッ事、女郎の氣取り次第で金のあんまり入らぬ様に、內幕で馴染ことも出來やす。コリヤアかの通の仕事サ」（多名於路志）を見ても、豪放な遊び方でなくして、手練手管の術策を弄し、その事自體が通として見られたのである。十八大通等は勿論豐富なる金力を以てしたであらうが、要するに通人として殊更なる技巧も弄したと思はれる。

而も通人連には、殊に札差等には既に武士階級すら蔑視する態度より、階級觀念としても他をも輕視する態度が存してゐた。思ふ存分饅頭を喰べて死にたいといふ吉原土手の道心坊の冗談口に、饅頭を與へて一刀の下に袈裟切りにした大口屋治兵衞曉翁等がその代表とも見られる。彼等自身はブルジョアとして飽くなき非道を敢へてしたのである。

かくして大盡と似て非なる通人を見るとき、われらはむしろ大盡に多くの親しみが感じられる。勿論通人それ自身を敢へて非なるものとするでなく、大盡それ自體を是なるものとするのでなく、その片鱗を以て云爲するの愚を繰返へすのではないが、又、通人あるが故に洒落本を無價値とするの論ではないが、大盡の一生、殊にその零落までの人生を見る時、そこにはより文學的なものが存するのである。西鶴が文學の一對象として大盡を描いたのも首肯せられるのである。

「雨月物語」青頭巾の題材に就いて

山崎麓

一

近來新進氣鋭の青年學徒の手に依り、江戸文學の眞摯精緻な研究が續々發表せられつつあるは、誠に喜ぶ可き現象と言はねばならない。特に從來手の觸れられなかつた讀本の題材に關する研究が續けられて居る事は、江戸文學研究の範圍が更に擴大せらるるものとして喜ぶ可き現象である。

しかし讀本の題材を、支那の小說雜纂にのみ求むるのは稍危險でもあり、眼界の狹小なる感があるやうに思はれる。勿論都賀庭鐘、伊丹椿園、山東京傳、曲亭馬琴の如く意識して支那の作品を涉獵し、題材を求め、或は飜案した人々の著作は、その出典を直接支那の書籍に求め、之と對照して差支ないが、他の作家に至つては、漢文を充分咀嚼するだけの素養があつたか疑しい許りでなく、かかる學究的態度で創作したかも疑はしい、彼等は同時代の作品の構想を其まま踏襲し、或は更に飜案し、その飜案の技巧、換骨奪胎の妙を誇る態度をすら持したのであるから、他の題材を其まま襲用するに何等忌憚を感じなかつた。戲作の名に隱れて、「高が戲作にそんな野暮な事は言ふな」といふ風も示して居たらしいのである。

であるから讀本の構想を檢討するに當つては、遠く支那、或は日本古典に依りその典據を求むると共に、手近い同

時代の作品を平面的に調査する必要が存するのである。私は嘗て滑稽本に於て式亭三馬が山東京傳の作品を奈何に多く踏襲して居るかを比較發表した事があつたが、讀本に於ても又合卷本に於ても之がなされねば充分なる研究とは稱し得ない事を斷言するものである。

今日發表せられつつある讀本の研究には、此點に就いて遺憾が多いやうに感ぜられるのは、私ばかりの僻見であらうか。但し之を實行せんとするには多大の讀書力、讀書時間を要する事勿論であらう。

私は茲に一つ具體的の例證をあげて見たい。泉鏡花氏の代表作の一「高野聖」はその構想に於て唐「搜神記」中に出て居る板橋店三娘子說話と類似して居る事は、少しく支那雜纂を研究して居る者には容易く推測し得る所である。しかし同氏が果して該書に據つて「高野聖」を作られたかと考へると、直に然りと肯定し得ないものが存する。

それは同氏の漢學の素養に就いて疑問を懷く故ではさらさら無い、同氏の創作態度から左樣推測し度くなるのである。同氏の天稟とも見る可き空想幻想の豐富さ、怪奇趣味の流れから、あの奔放的な作品が作られたと見る方が、當つて居るやうに考へられるからである。特に看過し得ぬものは、同氏の作品に橫溢せる草雙紙趣味である。氏の姻戚に奧女中を勤めた女性があり、同氏に草雙紙の智識と趣味とを多量に供給せし事實、同氏の理想的人物が「白縫譚」の女主人公若菜姬であつた事實などが、最適切に此傾向を實證して居ると言へるであらう。

氏の作品に現はれた怪奇思想、例へば、「星女郎」に於ける蟇の妖、「雌蝶」に現はるる蝶の神祕、「尼が紅」「錦帶記」「湖のほとり」等に現はるる妖蛇、「草迷宮」に現はるる怪猿、妖鳥、「三尺角」に於ける樟樹精靈の如き、之を支那雜纂より直接影響せるものと見るは當らない。鎌倉室町の雜纂、御伽草子に消化せられ、更に江戶時代の怪奇小說、讀本草雙紙に溶解せられ、渾然たる國民傳說、或は草雙紙化せるものが、明治時代に至り泉鏡花氏に依り、更に藝術化せら

れたものと見る可きであらう、私は之を草雙紙趣味の明治化と呼び度いのである。

偖、前述の板橋店三娘子の說話であるが、之と「高野聖」との構想の類似は前に說いたけれど、骨子が似て居るだけで、細末な點は全く比較し得ない。三娘子の方は祕藏の木人木牛を出し之に蕎麥の種を與へ、僅の時間に蕎麥粉を製り更に燒餠となし、之を旅人に與へる、食べた旅人は一瞬にして驢馬に化す、三娘子は之を市に賣つて生活するのである。「高野聖」中の妖女は色を以て旅人を馬に化するのであるが、奈何なる方術を用ひるかは說明してないのである。

此三娘子說話は怪奇であるだけ興味を惹いたと見え、江戶時代の作品に採られたものが、數種存する。小枝繁作「繪本催馬樂奇談」(文化七年)に鷲塚八平太が下僕團介と共に有馬溫泉に赴く途中、道に迷ひ山神の家に宿る、山神は一個の木偶と木牛を出し米を作らしめ、やがて餠として供する、團介之を食ひ馬と化すとしてある。明に三娘子說話其儘である。

次に曲亭馬琴作「殺生石後日怪談」(文政六年—天保三年)では多くの山賊が旅人を捉へては、藥を飮ませ、更に入浴せしめる、すると旅人は馬に化すると云ふ筋になつて居る。之は例の理窟つぽい馬琴の頭で、人が馬に化するには入浴せしむる方が容易であると考へたのらしい、「高野聖」の主人公たる高僧も水浴せしめられる際、危く女主人公の誘惑にかからんとするのであるから、その構想から比較すれば、此作品が最「高野聖」に似て居る點があるとも言ひ得るであらう。

次に闘亭傳笑作「河內國姥火譚」(文政十二年)がある。之は純然たる草雙紙である。丹波國大江山に仙娘子と云へる妖女住み、麥の餠を作り旅人を馬に化し、市に持ち行きては賣つたと云ふ筋。「高野聖」の背景が飛驒山中である事、妖婦である點は、此作品が最もよく似て居るやうである。

要するに「高野聖」が直接板橋店三娘子話説を取材せしものか奈何か、(之は直接作者に質問すればわかる事であるが)は別問題として、明治時代の彼作品と成るまでに、江戸時代に於て前述の如き作品で日本化せられつつあり、國民傳説化されつつあると云ふ事が出來るし、作者は直接支那の作品に據らなくとも、同形式の說話を取扱ひ得るものだと斷じ得ようと思ふ。特に泉鏡花氏の少年時代の教養から考察すれば、「搜神記」から直接取つたものでなく、前揭の如き讀本草雙紙の記憶から自ら流れ出た構想だと見るが、最眞に近く又最自然らしくも考へられるのである。(「殺生石後日怪談」は讀本と草雙紙とを折衷せし如き本の體裁に出來て居る)

以上述べた事は、作品の題材構想を精密に檢討せんとするには、直ぐ古典に飛ぶ前に、同時代の作品を先づ弘く平面的に涉獵した方が宜い、それが今日に於ては忽諸に附せられては居なからうかと言ひ度いのである。

二

上田秋成作「雨月物語」の題材に就いては多くの人の手に依つて可なり精密に研究せられ、支那雜纂より來りしものの如きは遺漏無き所に達して居るやうである。しかし該作品中の最高峰とも稱す可き青頭巾に就いて、その題材の研究は滿足す可き程度に達して居ないやうに思はれるから、夫に關する私の淺薄な考察を玆に述べさせて貰はうと思ふ。

青頭巾の題材は支那より來たものでは無いやうに考へられる。私も「說郛」「五朝小說」「漢魏叢書」、「龍威祕書」等に輯集せられて居る支那の雜纂短篇を可なり調べて見たけれども、類似の說話を發見し得なかつた。現在では、「宇治拾遺」中の「三河入道の話」「世尊寺に死人を掘出す話」等、「怪談とのゐ袋」(明和五年)中の「禪座を以て怪を伏す奧州の禪僧」「魔佛を以て一如とす悟道の聖人」等に據つたのであらうと云ふのが定說の如くなつて居るらしい。(「雨

月物語」の芳賀博士の解説、「雨月物語評釋」「日本文學大辭典」雨月物語の項等々）

作者上田秋成は國學者であるから、勿論「宇治拾遺」は讀んで居たであらうが、上掲の二説話は直接作品に影響があつたか疑はしい、單にやや似寄つた説話が日本に存在した證左になると云ふ位の所かと思はれる。

之に反し「怪談とのゐ袋」の方は可なり作者の創作欲に刺戟を與へたものらしく思はれる、その構想の形式が全く青頭巾に類似して居るのである。

しかし青頭巾に類型の説話は他にも存する、私は玆に未だ誰も問題にしなかつた一書を提出したい。それは「曾呂利物語」（一名曾呂利ばなし）である。同書は刊年不明であるが、行文の粗朴と挿繪の稚拙から見て、浮世草紙時代を下るまいと考へて居る。尠くとも雨月物語の發表せられた安永五年よりは古い書と推定して居る。同書は曾呂利新左衞門の咄を近習の士が書き留めて置いたものと序に見えて居る、之は假託らしく信じ難いが、一種の怪奇短篇小説集であり、書中の説話には可なり民間に傳播せしものも存する。例へば、「色好みなる男見ぬ戀に手を執る事」は、聲美しき女と契り夜明けて瞽女（ごぜ）であつたのに驚き逃げ、遂に祟り殺さるる説話であるが、之は三遊亭圓朝の人情咄にも用ひられ現今でも怪談の一形式として實演せられつつあるものである。

偖同書第四卷にある「萬のもの年を經ては必ず化くる事」同じく第三卷「山居の事」の二篇は之を合併すれば、全く青頭巾一篇が成立するのである、前者は少しく長いから梗概を記すと次の通りである。

伊豫國出石に山寺があつた、里を隔つる事三里、二位何某が本願により、草創のはじめから世話して居た。何時頃からか化物が出て住職も度々代るが皆行方不明になつてしまふのだつた。

或時關東から足利の僧と云ふのが來り、住職になり度いと願つた、二位何某は化物の出る由を語り忠告したが、僧は聽かずそ

の古寺に行つた。夜半になり果して多くの化物現はれ、僧を食はんと語り合うた。

僧は化物共の名を聞き　古器物の精の化生なるを悟り、筋金入の棒で悉く打ち殺した、果して其通りの怪物であつた。

偖翌朝二位何某は寺を訪問し、僧の高德勇氣に敬服し、僧を中興開山として今に至るまで佛法繁昌の靈地となつた。云々

「山居の事」の方は比較的短いから原文のまま引用して置かう、行文の粗朴さも併せて見られたい。

世を憂きものに思ひすましたる僧ありけり。都東山鳥邊野に柴の庵を結びて年月を送りける。彼の僧の俗たりし時の友達訪ひ來りけるが、年久しく隔てしかば、いとねんごろに物語りし侍りし程に、秋の夜いたく更けて、色々の獸の近く音するもいと物凄くして、かかる所に唯一人如何耐へ忍びけるぞと思ふところに、何處とも知らず、今宵そんじようそれこそ客しくなりぬ、日頃契約のごとく、御出で候はば、とりおき給はり候へと云ふ。主云ふやう、今夜はさり難き約束御入り候間、參るまじき由云ふ程に、彼の何某、何とて左樣には宣ふぞ、ことに日頃の契約の上は、急ぎ行き給へと云ふ。さらば參らんとて出でぬ。

彼の何某は常々にも、心に剛ある者とは云ひながら、唯一人殘りければ凄(すさ)まじくこそ思ひけれ。漸う寅の刻ばかりになりぬと思ふ頃、何處ともなく光りて內に入りぬ。何某刀の柄を碎けよと握りゐたるが、魂は何處にか拔けつらん、夢ともなく門をまぼりゐたれば、繪に書ける鬼の形したる者一人、內へ押入りて主の閨に行きて、少時(しばし)食ふ音しけるが、稍ありて彼の者、又光の中に何處ともなく失せぬ。其時少し人心地出で來て、さるにても主の部屋の內不思議に思ひ、垣の隙より覗きければ、人の死骸山の如く積めり、それを食ふなるべし、いとど怖ろしくぞ思ひける。

夜明けて主歸り、さても不思議の命助かり、かくの如くの事に遇ひつるはいかが、と語りければ　いつも左樣の事は有る事に候と、さらぬ體にもてなしゐ侍る。よく是れを案ずるに、いつの程にか人を食ひ習ひ、その罪果して一つの鬼となれり。夜來つる鬼の形なる者は、坊主なるべし、云々

可なり簡略で文意の充分屆かぬ點もあるやうであるが、大體何を說かんとせしかは、明瞭であらう。偖此兩說話を組立て、あの墮落僧が少年を愛した筋を附加すれば、そのまま靑頭巾になるであらうと思ふ。

但し前に述べた通り同書は、刊年不明なので「雨月物語」より以後に刊行せられた證據が現はれれば、私の以上の如き推測は全く破れてしまふ事は勿論である。然し同書が「雨月物語」より以前の刊行であつたにせよ、上田秋成が果して讀んだかどうか、當人に聞いて見なければわかる筈はないし、勿論それより構想を採つたかどうかは、當人が何かに書留めて置いて吳れない限り、單に推測に過ぎない、此事は「怪談とのゐ袋」の場合にも言へる事である。

けれども上田秋成は國學者ではあつたが、「世間妾形氣」「諸道聽耳世間猿」の如き浮世草子なども綴つて居るだけ、同時代の小說も比較的多く讀んで居る一人であらうと考へられるし、「雨月物語」の如き怪奇小說に筆を染めたのも、同時代の同種の書に興味と同情とをもつて對して居たであらう事は間違ひなからう、隨つて多く讀んで居たと推定するのは誤つて居まい。同時に本書も安永五年以前に刊行せられたのなら、秋成の目に觸れたであらうと推測するのは、決して不自然でないであらう。國學者でありながら、同時代の小說を輕蔑無視した連中とは、少し違つて居る彼であつたのだ。

三

其他、單に形式の類似から、同種のものを集めれば、「狗張子」(元祿五年)中の次の說話をあげる事が出來る。

卷五にある「蛸虫(けむし)祟りを爲す」話がそれである、西國の侍柳岡甚五郞の子、孫四郞は美少年の名高く山城の里に隱れ住む折、元興寺の僧宥快深く之を見初め、文通したが親が許さず隔てられてしまつた、宥快深く恨み斷食して物凄い形相となり、妄執は永久に解けまいと呟いて七日にして死んでしまつた、その亡靈孫四郞にまとひて離れず、數多

の毛虫となつて家を襲ひ、孫四郎も遂に死んだと云ふ筋である。男色の執着、僧對少人の悲戀など似通ふと言へば似通ふと言へるであらう。

青頭巾の劈頭、快庵禪師が下野富田の里の夕暮に一歩足を入れると共に、村人等が山の鬼こそ來りたれと罵り騒ぐ一條は、先づ奈何なる情景が展開するかと疑問を起させ、讀者を惹きつける巧妙なる手法である事は何人も知る所であらう。

之に似通ふ構想が、前述の「曾呂利物語」にも存するのである。それは卷二にある「行の達したる僧には、必ずしるしある事」の一節である。一所不住の僧、武藏野をさまよつて一少人に誘はれ、或宮殿に宿つた、夜が明けると人數多集り、「ここに不思議なる坊主有り、何者なればかやうの奧まで忍び入りけるぞ、ただ事にあらず、いかさま變化の物なるべし、蟇目にて射よ」と騒いだ。仔細を聞いて、此宮殿の若君の亡靈が、貴き僧に追善を賴み込みたさに誘ひ入れたのであらうとわかつたと云ふのである。

しかしこんな同想同趣の點を拾ひ出せば限りも無からうし、やがては牽强附會に墮してしまふであらうから、此位で止めて置く。

唯、茲に紹介した「曾呂利物語」には可なり青頭巾と相似の點が多く、上田秋成が果して之を採つたか、踏襲したかは別問題としても、青頭巾と相似通ふ說話が、可なり國民傳說として普遍して居た事は認めねばなるまい。最初に說いた、三娘子說話が「高野聖」に直接影響したか否かは別問題として、「高野聖」が明治時代に現はるるまでには、江戸時代で前述の如き普遍作用が行はれし事を吾々が認識しなければならぬと同樣、靑頭巾が現はるるまでには、こんな普遍作用があつた、同じ形式の說話が、いろんな表現に依つて國民間に傳はりつつあつた事は認識す可きであら

うと思ふのである。

四

冒頭中中に現はれる證道歌の一節たる「江月照松風吹、永夜清宵何所爲」の二句は可なり主要な役をつとめて居る語句である。我執の幽鬼はこのために心機一轉し、此句に執して人肉を喰ふ事を忘れ、更に禪師の一喝に遭うて煙霧の如く五大に歸してしまつたのである。

所が永い間、國文學者間には此句の出所が不明であつた。古い註釋書を見ると、冷齋夜話の「景德初、西土有異僧到都下、閱永嘉證道歌」の句を引用しながら、永嘉證道歌が奈何なる意味なのか、全くわからなかつたと見え、單に證道の歌の語義を解釋するに留めてある。「江月照松風吹」の句に至つては、漫然空海の作と記したきり、その出典も明記してなければ、そんな說を揭げた文献をも紹介してない。邪推すると、「佛法僧」中に空海の詩が引用されて居るから、之も大方空海だらうと漫然書いたものとしかとれない。最初の註釋書だからその苦心努力はお察しするが、編者の良心問題が起り相な氣がする。むしろ出所未詳と書いて置いた方がどの位宜いかわからぬであらう。

私も此語句の出所を知らぬ一人であつたが、大正十一年、禪僧出身の一知人に證道歌の出所を教示せられて歡喜し、續いてその書を手にする事を得て雀躍したものである、しかしそれだけの事であるから、發表する機關も機會もなくうち過ぎてしまつた。唯二三の知人には嬉しさの餘り知らせた。藤村博士にもその際御報告したのを記憶して居る。

其後佐藤仁之助氏の「雨月物語」(大正十四年再版本)に證道歌が唐永嘉旨覺の著と云ふ事が說明してあり、爾來「江月照松風吹」の句もその中にある事が判明するやうになつた、最近の註釋書には皆此事を明記するに至つたから、今更屋上屋を架する必要もないが、私も此事を單獨で研究した事があるのだから、一應話さして貰ふ事にしよう。

證道歌は正しくは「永嘉眞覺大師證道歌」と云つて居る。眞覺は諱を玄覺とも云ひ、永嘉の人なので永嘉と冠するのである、先天二年十月十七日寂と註に記してある、先天二年は卽開元元年で、唐玄宗時代、我が國の和銅六年に當る、元明帝の御世で勿論僧空海などは產れて居ない。

此眞覺の作と傳へられる證道歌であるが、禪宗では初學者が入門に際し讀誦するもので、その方面では最普遍的で、少し語弊はあるが通俗的大衆的なものであると云ふ事だ。曹洞宗では現今でも、葬式、追善などに導師が彼の「江月照松風吹、永夜淸宵何所爲」を大喝して引導を渡すとの事である。

であるから禪宗の僧侶達が「雨月物語」の此一節を讀んだら、「ははあ、證道歌をとつたな」と破顏一笑、何でもなく過す事であらう、之が出所不明で江戶文學者が苦心してるなどとは夢にも思はなかつたであらう。現に私の藏本などども「冠註四部錄」と云ふのであつて、「三祖鑑智禪師信心銘」「廓庵和尙十牛圖頌」「坐禪儀」の三部と併せ揭載してあり、皆禪學初步の者に便なる書を輯集してあるのである。京都の特志家に依り刊行せられた「塗毒鼓」(大正九年)が、「無門關」「碧巖集」「葛藤集」「無想心地戒」「臨濟錄」等十篇を輯錄して非常な便益を與へて居るのと、同一種類と言ふ事が出來よう。之を以ても證道歌は可なり該宗派の者にとつてはありふれた書であつた事が推量される。江戶文學者中に禪宗に近づく人が尠く、又禪宗の人々は此一書が「雨月物語」で主要な役割を勤めて居る事に心づかなかつた爲、意外にも永く出所不明になつたのであらう。

念のため彼語句の一節を拔萃して置かう。

(上略)一超直入如來地、但得本不愁末、如淨瑠璃含寶月、既能解此如意珠、自利自他終不竭、江月照松風吹、永夜淸宵何所爲、佛性戒珠心地印、霧露雲霞體上衣、降龍鉢解虎錫、兩鈷金環鳴歷歷、不是標形虛事持。(下略)

前に述べた如く此「證道歌」は曹洞宗に最重用されて居るのである。流石に作者秋成は此點によく注意して居たらしい、青頭巾の末尾は次の如くなつて居る。

かくて里人集まりて、寺內を淸め修理を催し、禪師を推し尊みて、殊に住ましめけるより、故の密宗を更め曹洞の靈場を啓き給ふ。今尙御寺はたふとく榮えてありけるとなり。

曹洞の二字は漫然と用ひてあるのではない、「證道歌」「江月照松風吹」の句と、ぴたりと照應して居るのである。諸種の註釋書は果してその點まで留意してあるか、どうか、一々調べても見ないが、調べたら一興であらう。

五

元來高僧說話には、一つの典型が存する。それは、高僧が（此際必しも高僧でなくとも、佛德の高大を表現し得る僧ならよい）山路に迷ひ、一つ家或は山寺などに泊り込む、其處で幽靈、怪物、變化などに遭ひ、或は佛德で解脫せしめ、或は退治し、或は災難を免れると云ふ形式のものである。

試に今二三の例證をあげて見ると、「玉帚木」（元祿九年）卷五の「迷悟問答」、「金銀ねぢぶくさ」（寶永元年）卷二の「靈鬼人を食らふ」、「太平百物語」（享保十七年）卷一の「愚全坊化物の難を遁れし事」同じく卷一「經文の功力にて化物の難遁れし事」、「新著聞集」（寬延二年）第五崇行篇の「靈合山閑唱阿闍梨」等で其他よく調べたら限りないであらう。

青頭巾も勿論此形式に屬するものであり、構想のみから云へば、「怪談とのゐ袋」をまたずとも之等の說話の中から相似の點を多々發見し得るのである。「高野聖」亦此形式に屬する事は言を俟たぬ。

同型の說話を漫然取扱へば、單に人名なり地名なりが異なるだけで、事件の內容に些少の變化があつても作者の手柄にならぬであらう。同種の說話でも作者の靈腕に依つて精彩を放ち、內容に玉石の區別が截然として生ずるのは當

然であらう。青頭巾と高野聖は實に此種說話を取扱つた作品の双璧であり、共に異なつた價値を有して居る。高野聖は玆で論評する要がないから略するが、何故青頭巾に藝術的價値が多いかに就いて一言したい。

それはあの作が日本には珍しい變態性、深酷なる同性相愛症、屍姦症、節片淫亂症、食人症、を如實に意識的に描寫した點にある。然かも惻々たる實在感が讀者に迫つて來る作者の筆力の精妙な點にある。憂世をも環境をも忘れた幽鬼の執着に、一脈作者の同情が流れて居り、やはり我執の强かつた作者の先天的な異常さ、自らなる傾倒がこの幽鬼をより以上に怪奇に表現せしめて居るやうに思はれる點にある。

「雨月物語」が日本怪奇小說中の第一位にある事は誰も疑はぬであらう、而して私は全篇中青頭巾を第一に推したいのである。他の諸篇は他人の筆で摸し得るかも知れぬが、本篇だけは遂に嶄然群を拔いて居ると考へて居るのである。

人間の醜惡な一面をかくの如く赤裸々に描いて、しかも作者の至高な神格の閃きが讀者を動かす點は、遂に題材の醜惡を超越せしめて居るのである。然かも意識的に變態者を取扱つて、手法に可なりの近代的嶄新さを見せ、日本文壇に新境地を開拓した點など、もつと別な方面から硏究尊重さる可き作家だと思ふのである。

春雨物語の製作年代について

重友毅

春雨物語は一般に秋成晩年の作品と推定せられて居るが、それ以上詳細については何等知られる所がない。今この問題を取り上げて、そこに一つの推測を試みようとする場合、しかし我々の前に與へられて居るものは、僅かに遺された五篇の短篇のみでしかない。その製作年代に關して、有力な資料の出現が、近き將來に於て期待出來ないとすれば、勢ひ許された一つの方法は、これらの作品の本文自身について、考察の歩を進めて行くことより外にはない。しかしこの場合にも、それが一つの纒つた短篇集を形づくるすべてではなく、少くとも五篇の、既に湮滅に歸してしまつたらしい他の作品の存在が知られて居ることは、我々の勇氣を事前に沮喪せしめる。恐らくそこに結論として抽き出されるものは、著しく不安定なものであることを免れないであらう。だがその完本の發見といふことが、容易に望み難いとするならば、そこに多分の躊躇が感ぜられるにせよ、遺されただけの作品の本文を中心として、一應の推測説を樹てて置くことも、また我々に負はされた一つの義務であらう。

しかし同様の立場による一つの推測は、既に佐藤春夫氏によつて提出せられて居る。先づ最初にその全文を引用して置かう。

筆の序に「目一つの神」の製作年代に關する一つの臆測を逞しくしてみよう。「目一つの神」は彼が自らそれに擬したげな筆

つきの一篇であつたが、或は隻眼の明を失つたのを自ら憫み嘲つて己をかく呼んだものではなからうか。然らば心理的に見て一眼の失明からさう年を經てからではあるまいから彼が左明を失つたと云はれる寛政二年彼が五十七歳の頃の作ではあるまいか。偶、「楢の杣」のうちに「足曳の病に繋がれて天にます神の目一つさへ云々」の語のあるのを見てこの語が「目一つの神」と關係ありさうに思へたので、「楢の杣」の執筆年代を見てみたが、「寛政庚申の夏の初め云々」とある。寛政庚申は十二年に當り、秋成六十七歳である。もつと考へを確めて、せめてこの一篇だけでも明になると、春雨物語の製作年代を推定する上の參考にもならうか。(春雨物語の製作年代の一臆測、早稻田文學、昭和九年十月)

もとより所說としては、試論の範圍を出ないものであり、またその關係する所も「目一つの神」一篇の製作年代に止まるのであるが、しかしそこには一概に斥け難いものがある。確かにそれはこの問題に思ひを潛める者の、最初に疑問符を附ける點であり、また容易に眞相を吐かうとしないこの物語のもつ、唯一つの弱點であり、急所であると言へるであらう。そしてそれは佐藤氏の鋭敏な觸手によつて最初に探り當てられたのであるが、その稍〻慌しく提出された試論は、もう少し順序を踏んで述べられることが必要であらう。

春雨の本文を通じて、その製作年代を推考しようとする場合、最も都合のよいことは、それが露骨と言つていゝ程、作者自身を打ち出して居ることである。少くともそこに示された論議は、たとへそれが作中に現れる史上の人物の口を通じてなされて居ようとも、多く作者自身の見解を吐露したものであることを我々は知つて居る。例へば「海賊」の主人公が、前土佐守紀貫之の歸京の途を襲うて、續萬葉集の題號その他について面罵を加へる條の論議は、これを「楢の杣」、「史論」(「秋成遺文」による。年代不明)等々に見出すことが出來るのであり、また彼が歸京後の貫之の邸に投げ入れた文の中に見える菅相公の論は、「秋成遺文」に收められた同じ題目の文章と辭句の上に些少の相違を

示すのみである。また「目一つの神」の神が、老曾の森の松が根枕に旅寢した若き男に向つて說き示す意見は、「文反古」(文化五年刊行)に收められた、難波の竹齋に與ふる書簡の中に見られ、また「膽大小心錄」(文化五年成立)にも同樣の見解が示されて居るのである。尙この外の人物の言葉についても同じことが言へるのであつて、それらは何れも、作者の代辯者としての役割を多分に負はされて居るのである。

しかしその中でも、「海賊」と「目一つの神」とは、特にさうした傾向が著しいのであり、啻に言說の上のみでなく、人物の態度行狀の上にまで、作者自身の俤を寫さうとした氣配が感ぜられるのである。海賊について言へば、彼は文屋の秋津の成れの果てであつた。彼が海賊にまで轉落したことについては後に改めて言ふとして、我々の知る限りでは、彼は酒の上で醉泣する缺陷こそあつたが、公的生活の上では相當の成績も擧げ、またそれに適はしい聲譽をもつた人物であつた。たゞ晩年事に坐して貶せられ、謫所に歿するの悲境にこそ陷つたが、しかし秋成の言ふ如く、「文讀むこと博かりしかど、放蕩亂行にして、遂に追ひはらはれ」たといふ事實については、何等知らされる所がないのであり、そしてそこに作者自身の生活の影の色濃く宿されて居ることが感ぜられるのである。といふわけは、我我は「放蕩亂行」の言葉の中に、普通に意味せられる如く、酒色に沈湎するといふのとは別のものを認めるからである。我々は寧ろそこに、晩年の彼が屢〻みづからをさう呼んだ「狂蕩」の語の意味すると同じものが含ませられて居ることを感ずるのである。彼が老年に至り、その青年時代を回顧した手記の中に、現在の境涯に思ひを及ぼして、

故鄕を去り、六親を離れ、產業なきものは狂蕩の子と云ふ、智略にて家をおこすも道にあらずと、聖人は教へ給へりきとぞ。智略なき性に心いらんよりは、狂蕩と呼ばれておのがまゝならんとて、かくて老い朽つるまではありけり。

と言つた言葉に現された氣持は、その生涯の終まで、彼に附き纏うたもののやうである。彼は寧ろこの語に我が意

を得たものを見出し、この名の下に自由の境地に遊ぶことを自家の生活信條とし、そこに彼一流の安心立命を得ようとしたものゝ如く考へられるのである。そしてこの生活態度は、多少の遲疑を押し退ければ、そのまゝ海賊の生活の中に生かされるものである。しかも五年の間、土佐の國を窺ひながら、貫之がよく國を守るを知つて、終にその在任の間、これを襲ふことをしなかつた「幼き心」の持主であるこの海賊の所行が、秋津の「放蕩亂行」のつゞきであることを思ふならば、その「放蕩亂行」が「狂蕩」の意味する所と略ゞ相似たものを含めて使用せられたとすることも、必ずしも牽强の言とのみは言へないであらう。言はゞ海賊は、著しく道義的に潔癖であり、そしてまた老來その荒仕事に堪へ得ない秋成が、物語の世界に於てのみなし得る轉身であつたのである。かうして我々はそこに描かれた秋津に、また海賊に、秋成自身の性格行狀の色濃き投影を見るのである。

「海賊」の一篇に於て、主人公と作者との親近性を眺めて來た我々が、「目一つの神」の主人公に對してもまた同樣の疑ひを以て近づいて行くことは自然であらう。もとよりこの場合、それは遠く人間の境涯を離れた神の姿を以て登場する。しかしそれは端嚴の相を具へた崇め尊ぶべき神ではなく、寧ろ醜怪の形をもつた忌み憚るべき神であつた。それだけに我々は、そこに却つて人間臭いものを感じ、言はゞ作者の親愛に充ちた惡戲を嗅ぎつけるのである。そして作者が「恐ろし」といひ、「すさまじ」といふ語を濫用することに警戒する。しかし結局神の正體は暴露せられないでは居ない。神が遙々東國より歌の道學ばんと、笈を負うて都へ上つて來た若者に向ひ、その思はざるの甚しきを諫めて、堂上歌學を罵倒するを聞くに及んで、我々はそこに假面を取つた秋成その人を見ないわけには行かないのである。かうして豫想の適中に滿足した我々は、さきの神の姿態の中に作者自身の戲畫化されたものゝあることを、一層はつきりと感じながら、再びそこに立ち返つて仔細にこれを點檢する。——

頭髮面におひ亂れて、目一つかゞやき、口は耳の根まで切れたるに、鼻は有りや無し、云々

しかしこの、ともすれば作者の警拔な思ひつきと見過されさうな記述の中に、作者その人の戲畫化を認めて、その祕密を探らうとする場合、何よりも問題となるのは、「目一つかゞやき」の一語であらう。それはともかくも、かゝる異類の神々の中にあつても、尙且この神を特徵づけるものであるに相違ない。作者もまたこの神を呼ぶに「目一つの神」なる語を以てし、特にこれを一篇の題名として取り上げたことは、このことを裏書するものであらう。それならば作者は、何故にこの神を特徵づけるに「目一つ」なる點を持つて來たかといふことが、次いで起る疑問でなくてはならない。そしてこの疑問に答へる差當つての方法は、作者自身の生涯に、「目一つ」の不自由を忍ばなければならない期間がありはしなかつたか何うかを調査することであらう。しかしこの調査は極めて容易である。秋成が寬政二年の頃より左眼の明を失つて、起居の不自由に艱んだことは、既に明らかに知られて居る。さうとすれば、この二つのものを結びつけて、作者が一眼の失明をみづから憫み嘲つて、それをこゝに戲畫化して示したものとし、從つてこの一篇の製作年代を略〻寬政二年に置かうとする佐藤氏の假說も、こゝに一應は承認せられていゝであらう。ばかりでなく、その思ひつきは確かに秀拔なものであつたと言ふことも出來るであらう。

しかしそれならば、佐藤氏の所說は、この推測說の許される範圍内に於て、充分なものであつたかと言ふに、必ずしもさうとは思へない。先づ氏は作者が「目一つの神」に自己の戲畫を描いたことを言ひながら、これを心理的に見て、一眼の失明からさう年を經てからのものではあるまいとせられたが、果してさうであらうか。普通に人は自己の肉體的缺陷に對しては驚くべく敏感である。殊に視覺や聽覺の障碍は、それが後天的のものである場合、その苦痛は激甚である。その苦痛に打ち克ち、その不自由に慣れて、再び心の平靜を取り戻すまでには、相當の日子を要する筈

である。況んや彼の如く、既に幼年時より、病毒のために、兩手の指は長短不揃ひの不具同然の形を持ちつゞけ、執筆の度にその不自由を喞つて居たであらう上に、新たに隻眼の明を失ふといふ不幸を加へたことは、既に世故の寒酸を嘗め盡したであらう老年の心境を以てしても、尙且その苦痛には尋常を超えるものがあつたに違ひない。だとすれば、この心中の苦悶と焦躁とを押し靜め、しかも或る程度までみづからの不幸を客觀化し、これを憫み嘲つて、自己の戲畫像を描かうとする心境に到達するまでには、そこに相當の期間を豫定しなければならないであらう。しかも彼の眼疾は中々に癒え難く、殆どその晩年を通じて、彼を薄明の世界に繫ぎ止めたものであることを思へば、この一篇の製作年代を以て、逸早くも彼が左明を失つた寬政二年に結びつけることは、稍〻早計に失するものではあるまいか。我々はそれよりも、こゝを一つの限界として、それは少くともこれ以前に溯ることはないといふことを想定するに止め、その製作年代はこれを更に後に引き下げた方が、寧ろ穩當の見解であらうと考へる。

かうして我々は改めて次の問題を取り上げなければならない。我々はさきに文屋の秋津が、海賊にまで成り下つたことについては、姑く言葉を控へて置いた。しかしそれが史上の事實に基くものでなく、全く作者の創作に出づるものであることは、改めて斷るまでもないであらう。しかしそれならば、作者は何故に秋津を海賊にしなければならなかつたか。それに對する答へは、一に先行文學の影響が彼をそこに導いたと言ふより外はない。そしてその場合、第一に思ひ起されるのは、英草紙の「豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話」である。兼秋は宣旨を奉じて伊豫國に使し、歸路讃岐國屛風が浦に船を泊めて、折からの月明を賞して琴の祕曲を彈ずる折しも、思ひがけなく横尾時陰と名告る樵夫の來訪を受ける。しかも彼は、その外見のみすぼらしさにも似ず、音樂について豐富な知識の所有者であつた。彼が琴・和琴・箏・琵琶の諸樂器の來歷についての論議は、流石にこの道に堪能の兼秋をも壓倒する。そしてこの卑

しい樵夫に過ぎない時陰が、宣旨の使たる兼秋の前をも憚からず、その博識を恃んで、傲然と船中に相對座する一場の光景は、やがて前土佐守歸京の船に追ひつき、これに飛び移つて、鋭利の論法に貫之を面罵する秋津の、人も無げなる姿態を描き出す上に、有力な示唆を與へるものではなかつたか。共に一方的の論議が、說話の中心をなすものであるだけに、「海賊」の前半は、英草紙の右の說話の前半に負ふ所の頗る多かつたことが思はれるのである。

かうして兼秋・時陰の邂逅は、貫之・秋津の出會を生んだと思はれるが、偶〻兼秋・時陰兩人の身分の著しい懸隔は、それが說話に一層の效果を添へるものであつただけに、おのづから貫之・秋津兩人の位置にまで持ち來され、こゝに秋津は卑しい樵夫であつた時陰と相似た境遇に追ひ落される運命に置かれたのであると考へられる。

かくしてやうやくこの一篇の構想に、土佐日記の關與が生じて來る。しかしそれは秋津の身分定めをかゝりとして、こゝに始めて關係を持つて來たのではない。貫之が作者の言はんとする論議の聞き役として選ばれた時、旣にそれは一つの素材として豫定せられて居たと考へられる。更に場面が、英草紙の說話に倣つて、船中と定められた際に、それは一層重要な資料として取り上げられて居たと思はれる。古典をたよりとしてこれに縋る以上、海上に浮ぶ貫之の姿はこゝより外には求められないからである。しかし何よりも秋津の身分定めを契機として、それは最早動かし難い第一資料としての地位を獲得する。

歸京の途上にある貫之が、常に海賊來襲の聲に脅かされつゞけたことは周知のことである。彼はその恐怖のために髮の毛も白く變じ、「七十八十は海にあるものなりけり」とまで言つて居る。我々はこれらの記事を追うて、千年の昔に立ち返つて、彼と不安を共にする。しかし我々の心の一面にひそむ無責任な見物人根性は、單なる興味のために、彼の不安の實現することによつて、そこに波瀾と葛藤の生ずるを期待することはないであらうか。さうした我々は船

が和泉の灘に至り、やうやく過ぎ去つた不安に安堵の胸を撫でおろす彼の姿を外に、寧ろ輕い失望をさへ感ずることはないであらうか。さうだとすれば、後代の作家がさうした興味の誘惑を受けて、一たびこの題材を拾ひ上げる時、そこに海賊の出現を導き出すことも、(そして皮肉にも、それを彼が安堵の胸を撫でおろした和泉國に於てすることも)、極めて有り得ることでなければならない。しかも今の場合、兼秋の船を驚かした時陰の代りに、何人かそれに對應する人物が要求せられたとするならば、海賊こそは最も誂文に嵌つた登場人物でなければならない。そしてその上に、時陰の博識が求められたとするならば、秋津が海賊への轉落は、最早動かすことの出來ないものであつたと言はなければならないであらう。――秋津が海賊への轉落が、かういふ徑路をとつたとするならば、史上に遺された彼の經歷が如何にこれと隔りのあるものであらうとも、そこに加へられた史實の大膽な抹殺も、今や餘儀ないものとして承認せられなければならないであらう。

かうして土佐日記が、この一篇の構想に重要な示唆を與へたことが認められるならば、このことからして、この一篇の製作年代推定の手懸りが求められはしないであらうか。我々は最初に土佐日記が作者の手に取り上げられ、そしてそれが彼の作家的感興を刺戟したであらう時期を推定しなければならない。しかしこのことはもとより至難の業である。假りに彼の生涯を通じての丹念な日記の類が書き遺されて居たとしても、我々はそこに幾度となく、土佐日記讀了の文字を見出すであらう。しかも彼がそこから創作的感興を得來つたのは、何時の度のことであつたかについては、依然として作者が祕中の消息として何等記される所がないであらう。しかしながら我々はそこに一つの限定を設けることが許されはしないだらうか。普通に考へられる所では、作家が、一つの創作的感興に驅られる時、それが作品の形を取るまでには、さまで多くの期間を置くものではない。少くともそれが作品にまで持ち來されない限り、その創

作的意慾は差當つて微弱なものでしかない。そして少くともこの場合、我々はそこまで探り求めてこれを問題として取り上げる必要を認めないのである。我々は既にその成立刊行年代の略〻明らかにされた三つの作品――諸道聽耳世間猿・世間妾形氣・雨月物語――の存在を、秋成の壯年時代に見ることが出來る。そして若しも作者がそれらの成立以前に、この創作的感興に捉へられて居たとするならば、それは必ずしも一つの纒つた作品の形を取らなくても、少くともその片鱗をそこにあらはして居なければならない。然るにそれらの一應の調査の結果は、それが最も適當の機會を與へるものであつたにも拘らず、殆どさうした痕跡の一片をも見出すことは出來ないのである。とすれば我々はこからして、少くとも雨月脫稿の年、明和五年以前に溯つて、土佐日記が彼によつて幾度繙かれて居ようとも、そしてこの創作的意圖が早くそこに得られて居ようとも、それはこの場合姑く除外して考へて差支ないであらう。そしてこの創作的感興が、假りに極めて早い時期に得られたとして、それが彼の中にあつて幾度か熱せられ、また冷されて、終にその燃燒點にまで持ち來された時期を、明和五年以後に探らうとする時、我々はその手懸りを、原據が作者によつて最も深く親しまれ、また最もよくこなされたと考へられる時期に求めることが許されるであらう。さうする時、我々は彼が寛政二年、土佐日記解序を書いて居ることを知るのである。それは彼が先師加藤宇萬伎の遺著に聊か筆を加へた機會に、その本文の傳來について、また成立の由來について、一二の私見を加へたものであるが、そこに我々はこの日記に對する彼の充分の關心を認めるのである。そして我々はこの精讀を機會に、彼の創作的感興の再燃があつたとし、從つて「海賊」一篇の成立も、こゝから餘り多くの年代を隔てない時期にあつたと考へることは出來ないであらうか。

我々はさきに「目一つの神」の製作年代について、それが少くとも寛政二年以後に書かれたものであらうことを推

定した。そしてこれらの作品が、春雨物語なる名の下に一括されて、一つの短篇集を形作るべく豫定せられたものであるとするならば、それが相互に餘り多くの時期を置かないで書かれたことを想定して差支ないであらう。さうとすれば、「海賊」もまた寛政二年以後に成つたであらうとする今の推定との偶然の一致は、その蓋然性を一層高めるものと見ていゝであらう。

しかしながら我々は更に次の事實を發見する。卽ち彼は右の序の成立より十一年を隔てた享和元年、先師が二十五年忌を記念する意味で、「暗きまながひを見はたけつゝ」も、その土佐日記解をみづから書き寫して居るのである。我我はこの新たなる事實を迎へて、改めてさきの言葉をこゝへ持つて來ることも出來る。とすれば、「海賊」の成立年代も當然この年代まで引き下げられて來なければならない。そして同時に、その同伴者として、「目一つの神」の製作年代をこゝまで引き下げて來ることも、必ずしも許されないことではない。

しかしそれを敢てする前に、我々は最初に立ち返つて、物語の序文について考へて見る必要がある。春雨物語の序文は、雨月物語のそれが衒氣に滿ちたものであつたのに比して、枯淡の味を見せて居る。漢文と和文との文體の相違が旣にそれを示して居る。そしてそこにいふ「物語ざまのまねびは初事なり」の一句もまた、恐らく雨月の往時を回想してその初心と匠氣とを靜かに反省したものと考へられるが、同時にそれはかゝる物語めいたものに筆を執ることに、旣に或る辯明を用意しないでは居れなかつた作者の年齢を語るものでもあらう。若しさうだとすれば、それだけで全體がかなりの高齢に達してから書き始められたといふことが言へるであらう。

更にそれにつゞく「されど己が世の山賤めきたるには何をか語りいでん」の語は、直接には上の句につゞく辯明の辭と考へられるが、しかしこの辯明の辭と見られるものゝ中に、彼が當時の境遇を不用意に告白して居ることが看取

出來ないであらうか。「山賤めきたる」の一語は、やがて當時の彼が晩年窮迫の時代にあつたことを暗示するものではないだらうか。そしてそれはまた、彼がみづから「鴨塘乞丐翁」と號した時期と結びつけて考へることが出來ないであらうか。彼がこの號を用ひたのは、その妻に先立たれ、その後彼のために薪水の勞を取つた貞光尼も逝き、養女は病勝ちの上に彼と性格が合はず、眼疾は未だに一進一退の狀況にあり、流石に身邊の不自由に堪へかねて、已むなく門人荷田信美の邸内に移つた頃のことであつた。そして彼がこのさゝやかな移轉は、寛政十一年のことであつた。この老來失意落魄の境遇は、彼をしてみづから乞丐翁と呼ばしむるに適はしいものであつた。「己が世の山賤めきたるには何をか語り出でん」の語をこゝに結びつけて見る時、この「物語ざまのまねび」も、當時の彼が佗しい心境を慰めるせめてものすさびではなかつたであらうか。

彼はまたつゞけて言つて居る。「昔此頃の事どもも、人に欺かれしを、我また僞と知らで、人を欺く。よしやよし、寓言語り續けて、書とおし藏かする人もあればとて、物言ひ續くれば、猶春雨は降る降る」。——この語氣の中には、寂しい諦めの中にもなほ去りやらぬ憤懣の情が含められて居ると見られる。そして我々はその憤懣の情が、一般的なものよりも、寧ろ或る特定の人に向けられて居ることを感ずるのである。即ち我々はそこに彼が多年の論爭の相手であつた本居宣長の姿を看て取るのである。この兩人が共に相容れない立場にあつたことについては、こゝに改めて言ふ必要はないであらう。たゞ我々は秋成のあれ程の侮蔑と憎しみとにも拘らず、宣長の名聲はいやが上にも揚り、終に享和元年の四月には、彼が本據たる京に上つて講筵を開くに至つたことを注意すれば足りる。落魄の日の秋成にとつて、それは如何に寂しくもまた憤りに堪へぬことであつたであらう。しかし我々は必ずしもさきの言葉を、この秋成にとつて餘りにも痛ましい事實に結びつけて考へなくてもよい。このことがなくても、宣長に對する秋成の不滿

は、さきの言葉の形をとつてあらはれる可能性は充分にあると思はれるから。しかし若しもこの點に關係をつけて見るならば、やがてこのことからして春雨の製作年代は、更に享和元年以後に引き下げられるであらう。

春雨物語の製作年代に關し、その本文自身を中心としての試論は一先づこゝで終る。そして我々の推定し得たことは、それは少くとも寛政二年以前に溯ることはない。否、その年代は寛政十一年まで引き下げることが出來る。更に見方によつては、享和元年にまで移動させて見ることも必ずしも不可能ではないといふことであつた。こゝまで來て我々は、最初に佐藤氏によつて指摘された「楢の杣」なる一文を、再び問題として取り上げる。佐藤氏が問題とされたのは、その中に見える「目一つの神」と關聯をもつと考へられる一句であつた。もとよりそれも看過することを許されぬであらう。しかし我々の一層注意を要することは、そこに示された見解の中に、春雨の諸作品に言ふ所と極めて近いものが、しかも或る程度纒めて示されて居ることである。我々は「楢の杣」と春雨との何れが先に成立したかを知らない。しかし彼が萬葉研究の結論ともいふべきこの一文と、それと離れて自由にその感懷を遣つたであらう春雨との間に、相通ずるものゝ多きを認めて、そこに兩者がさまで多くの年代を隔てない期間に、相前後して書かれたものであることを推論することが出來るであらう。とすれば、この一文の書かれた寛政十二年は、春雨の製作年代推定の上に、また一つの新しい材料を提供するものでなければならない。そしてそれは、さきに本文を中心として推定して來た年代との間に矛盾を來すものではない。

かくして我々は最後に言ふことが出來るであらう。春雨物語は「楢の杣」の書かれた寛政十二年を中心として、寛政十一年から享和元年に至る前後三年の間に、少くともそれを隔たること餘り遠からざる時期に製作されたものであらう。そしてこの結論は、この物語が「藤簍冊子」(享和二年序成る。文化三年刊行)に收められた「月の前」「劍の舞」、

及び秋成遺文に收められた「ますらを物語」（文化三年成立）の諸篇と、內容文章の上に頗る相似通ふものゝある所から、それらと略〻同年代に成つたであらうとする我々の豫測にも、また或る落著きを與へるものである。

春雨物語は秋成の作品の中でも極めて重要の地位を與へらるべきものである。しかもそれは今日必ずしも正當な評價を加へられて居るとは思へない。しかしそれに先立つて、その製作年代について、一應の推定の試みられることが必要である。右の所說も、それに對する一つの試みには過ぎないが、しかしその推論の根據は、なほ極めて薄弱なものであることを免れない。これはもつと確實な論據に立つて考究せらるべきであるが、今は一つの試論としてこれを提出することによつて、他日の遺忘に備へると共に、改めて今後の是正と發明とに資したいと思ふ。

「敵討連理橋」の素材を繞つて

鈴木敏也

一

安永十年丑初春と刊記した中本型の讀本に、「敵討連理橋」と云ふ一冊物（全五十五丁綴）がある。作者は容揚黛とあるので、福内鬼外門下の淨瑠璃作者が筆のすさびである事がわかる。而して版元は東都書林本材木町二丁目西宮新六板と奥附に見える。

作者の自序に

一花開けて四方の作者机に毫の花を咲せ初春の新物涌が如く百家の書林肆をひらく。何ぞ面白い趣向はない歟と案じて見れば讀本に淨瑠璃立を少し加へ敵討連理橋と名づけ侍りぬ。

とある。この淨瑠璃式の讀本として周知のものは、文化十年柳亭種彦の「勢田橋龍女本地」三冊で、「日本小說年表」には朝倉・山崎兩氏共に、本書は讀本と丸本とを折衷せんと試みた新案淨瑠璃讀本とも稱すべきものと誌しておられる。嚆矢であるとは明記してないが、何となく最初の試みであつたかの如き印象を與へる文言である。然るに容揚黛の「連理橋」は既にそれより三十三年以前の安永十年（卽ち天明元年。改元は四月二日）の正月に發兌されてゐるから、執筆は當然その前年にあらう。これ以前に於ける同じ樣式の作風の有無に關しては、十分踏査してゐないから、

大きい口は利けないけれど、たとへ新案淨瑠璃式讀本は容揚黛に創まるとは斷言できないまでも、夙にこの新樣式に留意した點は、その功績として認めてやつても不當ではないと思ふ。

安永天明の交と云へば讀本界では上方作家の活躍期であつた。斯界の翹楚近路行者を初め上田秋成・伊丹椿園等の筆になる支那稗史系の怪異小說が中心を成し、續いて建部綾足の章回體小說が萠芽を見せた頃であつた。淨瑠璃作者たる容揚黛が熟達した方面の筆致をもつて讀本界の新彩たる章回體に所緣しつゝ、別に一派を成す異色あるものを思念した事は、極めて自然に理解し得るのである。

二

「連理橋」の素材は白井權八の說話である。これには當時の淨瑠璃歌舞伎の反照があるが、まづこの作品の筋を辿つて見る。

第一、「權八お房馴染の事」。冒頭の章は播州瀧野の家中白井權八は鎌倉在勤の暇を得て待乳山の聖天に參詣した。其處の茶店で一人の美女に逢ひ、互に心を動かしたが、腰元の口からその娘は鎌倉瀧野家に仕ふる山田右內の嫡子榮三郎へ嫁ぐものである事を知つた。右內の弟白井次郎右衞門は權八の父で、榮三郎とは從兄弟なのである。

第二、「榮三郎お房婚禮の事」。婣宴の後、父と共に席に連つた權八は、右內から嫁女としてのお房を改めて紹介され、いたく彼女を驚かす。

第三、「權八右內を討つて立退く事」。その夜、深更に及び、權八はお房を唆かして、共に庭の松が枝から塀を越えて逃れ出る。その時、見咎められて、放つた手裏劍が、右內の胸元を刺す。

第四、「榮三・次郎右衞門屋敷を立退く事」。右內橫死の事、家中にかくれなく、事件は明るみにさらされ、榮三郎は親の仇と

女敵との二重の敵討に發足する。次郎右衞門は犯人たるわが子の召捕を命ぜられて、同じく鎌倉を去らねばならなかつた。

第五、「次郎右衞門榮三旅行の事」。思ひ〳〵の惱みを抱く叔父甥の二人が、街道筋の戸塚の臺で出會した。次郎右衞門はおのが苦衷と今の心境とを具さに榮三郎に打明け、且いろ〳〵の示教を垂れ、敵討の本懷を遂げて山田の家を興すやうにと激勵し、血緣としての挨拶はこれ限りとて別れて行く。

第六、「淺草寺にて權八難儀に合ふ事」。灌佛會の淺草寺境内で、花川戸の幡隨院長兵衞後家お時が茶店の女房と話してゐる。一方お房を伴れた權八が地廻りの不良の徒に取圍まれ、刀を拔かねばならぬはめとなる。それと見たお時は中に割つて入り、見知り越しの不良を抑制して權八を救ひ、伴つて家に歸る。

第七、「榮三郎小紫を賴み、敵の行衞を尋ぬる事」。かねて馴染の尾張屋の遊女小紫は榮三郎と喋し合せ、敵らしい客を透見させる。その客は次郎右衞門であつた。樣子でそれと感じた次郎右は述懷に事寄せて權八の居所を悟れよがしに口走る。

第八、「長兵衞が後家深切の事」。權八を我家に隱まひ、お房を目黑の里に住む弟次郎作に託したお時は、折から娘に三味線の稽古をさせてゐる。ところへ次郎右衞門が訪ねて來る。長兵衞は江戸へ出る前、井戸長次郎と云つて次郎右の家來であつたが、誤つて人を斬つた、それを次郎右に庇護され落ち延びた恩義がある。お時はこの舊主人から悴權八の不行跡を聞き、且榮三郎に討たれるやうにとの置手紙を預かつた。そこで、それとなく此家から權八を立退せようと思案の末、戻つて來た權八に、色模樣よろしく濡れかゝり、惘れた彼を尻目に、自害せんとの素振をする。その際、懷から落ちた一通の文を、權八は拾ひとつて事情ありと見、讀み下せば、父の恩愛と共にお時の本心とが、それによつて判然する。先程から表に忍ぶ榮三郎は、家の樣子を窺ひ知り、これも一筆を紙片に書き殘して去る。それには叔父への義理とこの家の女主の眞心とに感じて一旦立歸るけれど、また改めて勝負したいとあつた。

第九、「次郎作夫婦忠節の事」。大鳥村の百姓次郎作の妻はお房をいたはり慰めてゐると、野良仕事から歸つた夫が、權八の手

紙だと云つてお房に渡す。それは彼の遺書であつた。お房は次郎作夫婦の無筆を利用して、體よく欺き、一間に入り、普門品讀誦の後、自害した。それを見つけた夫婦が狽て惑つてゐるところへ　榮三郎が來る。權八の遺書には、日暮頃、目黑の冷光寺連理橋の下で切腹するから、首は榮三郎に渡して欲しい、お前は尼になつて後世を弔つてくれとあつた。これによつてお房が一足先に殉じた事がわかつた。こゝに於て榮三郎は、事件の過程をつく〴〵と熟考した末、一思案したものゝ如く、お房の首を提げて冷光寺に走つた。

第十、「敵討の事」。榮三郎が寺に驅けつけた時は、權八が屠腹した際で、傷口を布で捲いて立合ひ、覺悟のもとに首を渡す。榮三郎は二人の首級を携へて鎌倉に歸參した。その後、次郎作によつて二人の佛事が營まれ入谷の里の片ほとりに比翼塚として名を殘した。

三

こゝで水谷不倒氏の「古版小說挿繪史」(一七七一八)を繙いて見る。

敵討連理橋　三　容揚黛作

安永十年

作者容揚黛は下谷長者町の醫師松田某と云ふ。併し詳しい事は判らない。容揚黛は「加賀見山故郷錦繪」の作者である。尤も此書には挿繪はなく口繪が唯一枚あるだけだ。筆者は誰であるか知れないが、之は作者の自畫作ではなく、勝川派の繪師の描いたものであらう。內容は白井權八小紫の話で、その經緯が、安永七年刊田螺金魚の「當世虎之卷」に似た所がある。形も中本、讀本で通つてゐるが、むしろ大蒟蒻に近いものである。この作の如きは讀本とは云へ洒落本の影響を受けてゐる所が多く、この中形の讀本は文化初年まで行はれた。

これで全文である。

右の記述に就て聊かながら不審がある。三冊本と見えるが、所藏本は一丁表裏各九行の四十五枚の一冊物で、全篇十回のうち、どこと云つて丁切れのいゝ所はなく、回の改まつてゐるところは、皆紙面の中途である。尤も章回に拘らず分冊した他の例もあるから三冊物があるのかも知れない。繪は五丁六丁の間に挿入された表裏の一葉である。これは丁附のない點から見て、綴直しの際にかうなつたのかも分らない。

內容が白井權八小紫の話とだけで、その經緯を記したものとの說明には、猶多少の解說があつて欲しいと思ふ。權八が主人公たる事は勿論であるが、權八に配せられた女性はお房であり、小紫の相手は榮三郎である。こゝは權八小紫の情話成立と別途の說話形態として、最も留意すべき點であり、殊にそれが普遍的に流布してゐる點からも、前述の說明では、この作品の筋も權八小紫情話らしく聞える危險性がある。

次に構想が「當世虎之卷」に似てゐるとて洒落本系統と見てゐられるが、そのまゝ享入れるのには、こゝにも幾分の質疑が潛むやうに考へる。「虎之卷」が洒落本から人情本を示唆する特殊な史的位置を占める作であるのは周知の事である。而してその筋は名妓瀨川の半生を素材としたものである。――夫の病を助けるために身賣したが、夫の歿後、その俤ざしの似た通人五郷と深間となり懷胎した。五郷の蟄居中、桐山大盡に落籍されたが、その意に從はず、大盡の家僕軍次に欺かれて五郷を訪ねんとし、中途非業に死し、その亡魂が五郷の假住にあらはれ嬰兒を託して去る。――この說話のうち、「連理橋」と似てゐる點は、相思の男女が親の許を逃れて、元の家來筋の男の家に賴ると云ふ冒頭に當る一齣だけで、それも微かな類似にすぎない。花川戶の長兵衞後家の任俠と、瀨川の身代金を持逃げする甚八の奸詐とは比較にならないものである。たとへ

「武藏野をわきて流るゝすみだ川、誰が庵崎や待乳山、花に涼に月に雪、四季の眺めも日の本の……」（虎の卷）

「待乳山夕越え暮れて庵崎と、辨基法師の言の葉も思ひつゞけてそこ爰と、詠め入りたる茶屋の床几……（連理橘）

この二つの筆初めの文章に、同じ地名を出したとしても、それは何等深い交渉を語るものではない。

四

そこでもし作品の關聯に就て云爲するならば、むしろ淨瑠璃の

安永八年七月七日　江戸豐竹東治（肥前座）上演

驪山比翼塚　源平藤橘　海一沫　吉田鬼眼　達田辨二　合作

を擧ぐべきであらう。

播州龍野城主の家老木庄典膳は子が無いので同藩の白井助市を養子としたが、その後、女子をもうけ八重梅と名づけた。殿の奥方は八重梅を助市の弟權八に媒した。典膳は頗る民心を得てゐたが、實は澁川玄蕃と謀つて主家横領を企てゝゐる。この玄蕃はかねぐ八重梅に思を寄せてゐた。權八は典膳等の陰謀を知り、主家のため又兄のために典膳を討ち取り、お家の寶刀千壽丸を奪つて立退いた。そこで助市は養父の仇討に發足しなければならない破目に陷り、八重梅は自害する。逃亡した權八は川崎で幡隨長兵衞と知つたが、鈴森で非人を斬り、その振舞を認められて長兵衞と義兄弟の盟約をなし、江戸に赴いてその家に匿まはれる。こゝに淺草藏前の米屋明石屋の養子榮三郎は、吉原三浦屋の小紫と二世を契る仲であつた。榮三郎の許嫁お關に心のある番頭甚九郎は姦策によつて榮三郎を養家から追放せしめたが、長兵衞のために助けられる。而してお關の貞節は遂に榮三郎を動かし改悛の末、婚姻にまで導く。一方、犬垣頭平太なるものが小紫を落籍せんとする。この事を長兵衞が榮三郎のために氣にかけてゐると知つた權八は、かの千壽丸の劍を質入して金を作る。しかも、土手で甚九郎を殺し、その所持金をも贋金と知らないで奪つた。そこで權八は長兵衞の宅から身を退いて自首せんとし、一策を案じ、女房お時に懸想したと見せかける。長兵衞は却

つて親女房と縁を切り權八を庇つて自首せんとする。この爭ひの中にお時は身賣を決意して寶刀の質うけせんとする。とゞ長兵衞は權八を落してやる。こゝにまた目黑大島村に閑居する山田右內は榮三郎の實父であるが、國許で權八の父に大恩をうけた事があつた。一日、右內の家へ虛無僧姿の男が宿を求めた。折柄、廓を拔け出た小紫が榮三郎と共にこの家を尋ねて來る。右內はこの二人が兄妹であると語つて、二人を自害させようとする。それは權八の身代りにしたいためである。ところへ龍野からの早飛脚で、權八にお咎めなしとの報があつた。虛無僧は助市の假の姿でこの報を聞いて共々に喜ぶ。しかし天下の法と廓の掟とを立てるために、權八と小紫とを表向には亡き者として、生きながらの比翼塚が建立されたのである。

五

この筋書に據つて、「連理橋」を顧ると、かなりに深い因緣の糸が絡みついてゐる事がわかる。「時代」に關して、當代を鎌倉期に持込むのは近世戲曲小說の常套的手法であるが、場所柄を播州龍野藩を瀧野とし更に鎌倉詰の瀧野家に振り換へたのは如何にも見え透いて苦しい。それよりも、構想の同型と人名の類似とは、暗合とのみでは濟まされない程度に深い交錯がある。

「比翼塚」が御家騷動を契機として構成せられてゐるのに對して、「連理橋」は敵討を主想としてゐる。この核心の相違はあるけれど、視點によつては廬山の峯巒にすぎない。わけて人物の素性・配置また行動には一作の關聯に動かすべからざるものがある。例へば近世思想の一表現たる「恩義」の精神は「比翼塚」の右內、「連理橋」の長兵衞後家が共に把持するところで、同じく權八の父から享けた舊恩への報謝として寫されてゐる。又、本心を僞装(カモフラージュ)するために、欺瞞的愛欲を表明せんとして、所謂濡れかゝる所作も、「比翼塚」ではお關が助九郞に對するものと、權八がお時に對するものとの二條があり、「連理橋」ではお時が權八に對するものとして採擇してゐる。これなぞは、他にも同巧のも

の多く、お關の場合の如き、淨瑠璃「小いな半兵衞廓色上」(明和五年)で、半兵衞の許嫁お三木が番頭(同名權八)に對するものと餘りにも接近してゐる。

ともかく「比翼塚」と「連理橋」との交渉が緊密な事は否定すべからざるもの丶如く、容揚黛は明らかに源平藤橘等淨瑠璃仲間の作品を踏まへて、これを物語化したのである。しかも作者自身が淨瑠璃畑と云ふ地位と、粉本の文學形態とが二重の因緣を結んで、こ丶に淨瑠璃式讀本の姿相をとるに至つたものと思はれるのである。こ丶で連理橋の出來榮を批判すべきであらうが、此稿の覘所はそれにないので省略に委ね、作柄の主眼たる淨瑠璃式詞章の雛形として次の一節を引用するに留める。

涼しさは大河筋の夕氣色、數をつくせし樓舟(やかた)、吉野高尾に藝競べ、川も錦の一對に、咲揃ふ辻の花川戶、幡隨院長兵衞後家お時、摘髮ながらくつきりと惜まる丶身の行義強(づよ)、前垂掛ヶてはしり元、娘おみつは年もまだ年弱(よわ)十ヲ小しやく盛り、三味線取つて稽古の淺(さら)い、まだ上(う)は聲の猫の妻、かぢる鼠の撥當り、コレおみつ、今の所、最(も)ふ一ッ遍彈直して見や、今の節は違ふたやうな、ナニヲか丶樣ンの違やしませぬ、かん所が違ふたゆへ、いつものやうに聞ヨへぬのぢやと、返す詞に、わしとした事が、三味線知らぬゆへ、彈ぞこないを知らなんだと、親子咄しの中戶口、物申(ものもう)、賴もの案內に、ハイと戶口へれつきとした深編笠の侍が小腰かゞめて、イヤ何女中、我等は當所不案內の者チトお尋ね申たいは……(第八)

六

「連理橋」と云ふ標題から直ちに聯想されるものに猗富本節の「うき連理橋」がある。普通「虫賣」の名で呼ばれるものである。天明元年七月江戶市村座の盆狂言「室町殿榮華舞臺」の大切淨瑠璃として上演され、三津五郎の權八、菊之丞の蟲賣、羽左衞門の燈籠賣で、白井權八の隱家へ、七夕祭の日に蟲賣燈籠賣の二女が訪れると云ふ趣向であ

る。板本は七行・十四丁（七枚）から成り、富本豊前太夫直傳とあり、神田鍛冶町いが屋勘右衛版である。この橋が俳優の家紋あてこみの文辭である事は云ふまでもないが、容揚黛の小説との時間的距離が近いだけ、兩者の關聯を思惟させるのである。

七

終りに一言附け加へたい。

權八の事實として記錄されたもの丶中、「甲子夜話」（八十九卷）によれば

世俗に傳ふ白井權八とて美少年の手利者あり、人を害し且濃紫と云ふ遊女春戀の狀、又權八刑せられし後、その妓貞節のこと、都下普ねく知らざるはなし。所謂豐後謠等の謠辭に妄作せしより起れり。亦町奉行所記錄の文を見て始て其實を知る。又世の妄說流布せしをも見つべし。

延寶七未年十一月三日　　平井權八

此もの儀、武州大宮原において小刀賣を切殺、金銀奪取、其上追剝之、本人並宿次之證文たばかり取、剩手鎖を外し缺落致候段重々不屆至極に付、於品川礫申付之

とある。「兎園小說」（卷一）「一話一言」（卷二十六）にも殆んど同文の奉行所寫しが載せてある。即ち全くの不良青年らしい彼の風貌がこれによつて察せられる。松浦靜山侯は上記「甲子夜話」の前書きのやうに小紫との情話を妄說とし、創作的話柄らしい口吻を洩らしてゐられる。

しかし坊間に於ける口承說話の通有性で、「作爲のあとはあるけれど、やはり面白い話」の一として、これも眺めたい。民衆の間に生育した魅惑的好話柄たるを憚らないのである。さればこそ、「遊歷雜記」や「北里見聞集」の編者た

ち、即ち文化期の雜筆家は、目黒普化寺にある比翼塚の荒廢を傳へると共に、好奇癖に驅られて捜訪したり、また權八や小紫の實錄らしい記錄に紙面を賑はせたりして、巷說の眞實性を是認する心構へを示してゐる。權八劇への長兵衞登場が時代錯誤である事はあまりにも有名であるけれど、傳說の普遍化は、幾多の作家等の手にかゝり、「小紫權八」は堂々と相擁して、情痴の世界に悲戀の哀歌を奏しつゝ、近世文藝の領域を濶歩してゐる。その間に在つて天明前後の「連理橋」系統の作品だけが――(「比翼塚」の人物八重梅は權八が此世の思出に刑場で美音に口誦した時花唄「八重梅」(「松の葉」卷二、所載) の擬人化であり、「連理橋」も亦目黒の里を離れ得ず、また「契情吾妻鑑」(天明八年、櫻田治助) が傾城八重梅・花紫を點出して、巷說への所緣に繫がれながら)――小紫の配置に關してのみ、斷然巷說への反逆を企てゝゐる事は、權八說話展開上に、一種の示唆を與ふるものではあるまいか。

朋誠堂喜三二

岡部美二二

近世物之本江戸作者部類に

文武二道万石通（三册物蔦屋板）、古今未曾有の大流行にて、早春より袋入にして市中を賣あるきたり（天明八年正月新板也）畫は喜多川歌麿の筆なりき、赤本の作ありてより以來、かばかり行はれし者は、前代未聞の事也

と記されて居る、黄表紙作者の、第一人者喜三二は、古來明誠堂喜三二、朋誠堂喜三二と、書物に依て、其の號を異にして居る、此の小論文は、その異同を明にするのを、目的としたものである。

大日本人名辭書は

有名の狂歌師なり、享保二十年三月二十一日に生る、名は常富、通稱を平澤平格と云ふ、佐竹侯の留守居役なり、狂歌に初名を淺黄裏成と云ひ、後に手柄岡持と改む、俳諧に月成といひ、戯作に喜三二といひ、狂詩に韓長齢と稱す。又明誠堂、龜山人、道蛇樓、鹿阿記、虎耳嶋、天壽亭等の號あり、狂文狂歌は、一家の體をなして、頗る人の意表に出づ、安永天明の頃戯作の双紙を著はせし中に「文武二道万石篩」といへるは、此種の双紙始りし以來未曾有の喝采を得たり、寛政年間藩主の命ありて、戯作を廢し、喜三二淺黄裏成の號を、門人芍藥亭長根に讓り、老後仕を辭し剃髪して、平荷翁と稱す、文化十年五月二十日年七十九にて、歿す、深川淨心寺塔中一乘院に葬る。（戯曲小說通誌、古今狂歌人物誌）

と記して居る。今此の明誠堂と記した系統の書物を擧ぐれば、戲曲小說通志（双木園主人編）を始めとして、近代小說史（藤岡作太郎）、近世國文學史（佐々政一）、國文學史總說（藤村作）、日本文學辭典（三浦圭三）、近代日本文學大系黃表紙集（笹川種郞解題）、有朋堂文庫黃表紙十種（武笠三解題）等、非常な數にのぼるのである。特に秋田の鄕土研究者、山方泰治氏の「秋田人物傳」にも

平澤平格は久保田藩士にして、常に江戶邸に勤番せり、俳諧には月成と號し、戲作には喜三二の號を用ひ、狂歌には、初め淺黃裏成といひしが、後に手柄岡持と改め、狂詩には韓長齡と稱す。又明誠堂龜山人、道蛇樓、鹿阿記、虎耳蝙、天壽亭の別號あり。文化十年五月二十日江戶に歿す。年七十九、其著書二十有餘種あり、文辭敏妙談笑の裡に筆を走らせ、千言萬語立所に成る。安永天明の頃、戲作の双紙を著はせり、中に「文武二道万石篩」といへるは、此種の双紙始りし以來未曾有の喝采を博せり、寬政年間藩主の命ありて戲作を廢し、喜三二、淺黃裏成の號を門人芍藥亭長根に讓り、老後仕を辭し剃髮して、平荷翁と稱せり、墓は深川淨心寺塔中一乘院にあり。其子大奇、岡持家集一名我おもしろ上下二卷を刻す、蜀山人の序あり、世に行はれて時人を驚したりといふ

と記されて居る。

飜て、朋誠堂の方面をみるのに「秋田の士と人」（安藤和風）に

啻に秋田に於けるのみならず、中央の大家として名を殘せるは、江戶定府の手柄岡持卽ち平澤平角である。彼の狂歌狂文は既に獨特にして、蜀山人もこれを激賞し、その歌集の「我面白」は世に行はれ、又檀林なれども俳句を能くし、殊に黃表紙は喜三二の名を以て、京傳、馬琴、一九、三馬等の先驅をなして居る。その他「後は昔物語」「痴狸十帖」等の隨筆もある。彼の事は「俳諧研究」中に詳述せるを以てこれを略す。文化十年五月二十日七十九歲を以て歿し、深川淨心寺中、一乘院に

葬られた。彼の遺墨は可なり縣內に殘つて居るが、富永眺兎氏所藏にて、圓窓に燈下讀書の像あり、屋端に樹木を見せ、その上に彼の賛せる文と歌が面白ければ左に紹介す。

獨り燈下の下に文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むるわざなる。

此人の斯く書置きし文も亦今は見ぬ世の友とこそなれ。

拙くも斯くよみ置きし我も亦後は見ぬ世の友とやいふらん。

斯くよみし我を見ぬ世の友となる人も見ぬ世の友とやなるらん。

彼の諱は常富、字は知足、別に愛洲と號し、通稱平格、平角、致仕後平荷と稱した。別に朋誠堂と號した(明誠堂と誤らる)戲作には喜三二、狂歌には手柄岡持、俳號は雨後庵月成、狂文に樂貧王、狂詩に韓長齢、その他天壽、兎耳窟、齡山人、芍藥亭等の號があつた。手柄岡持の狂歌號に對し、青柳有美は、岡本新內に絡み、例の牽強附會の說を逞しうしたが、狂歌の權威者野崎左文氏曰く、當時江戸で舟に乘らず、態々釣り仕度せず、一寸浴衣掛けにて、手に岡持を提げて、岡釣りすることが釣り仲間の誇りとして流行した。岡持も釣りを好みしゆゑ、この岡釣りより出でたるものであらうと。彼の子爲八は秋田に仕し、太奇と號する俳人にて、自分にその歌仙を所藏して居る。

と記し、「俳諧研究」には

雨後庵月成、彼は詩をも文をも歌をも、句をも狂化し、卽ち俳諧に於ては純然たる檀林調にして、蕉風をも否定した。曰く、

今の俳諧のつらね、俳諧の發句など云へるものも、俳諧歌の趣にはあらずかし、芭蕉以前の俳諧と云ふものは、狂歌の片歌と申すべくや、

と云はれた。彼の俳諧は雨夜庵山本龜成を師とし、別に句集を有する趣きなれども、未だこれを見たことはない、然も其跋文に於て

芝芳老人の言ひし、諸藝學ぶのしるしあり。俳諧のみ、其しるしあること遠しと、宜なるかな　云々

と云ひ、この意に由りしか、又は他の事情ありしか、晩年俳諧を廢せし時

流行に後れ、俳諧を止める時

鶯に口を閉ぢたる雀かな。

と云つた。世に俳句に志すもの多く、而してこれと始終するもの曉星の如きは、亦これと歎を同じうせざるを得ない。

見ざる……

心此處に在らざれば土手の土筆哉

貧に題する二句

……目に青葉山郭公さて錢はなし

哭師雨夜庵

踰(ふ)むまじといふ影もなし高燈籠

杭(くひ)一本直(あたひ)南鐐銀世界

の類である。多才和詩も試みたが、例に依つて狂化して居る。

柿山伏狂言畫讃

之を書畫に賴めば柿山伏、之を地口に言へば柿廿干し、其形鳶に似て鳶にあらず、さあらば鷺か大藏流なるべし。

と記して居る。此の朋誠堂の系統に屬する著書は、黃表紙廿五種(山口剛解題)、近世文藝志(笹川種郞)、日本文學大辭典等である。

更に安永天明頃の著書の狀態に就て見るのに「吉原豐年遊」には **朋誠** と記されて居り、「艷本兎の音色」の序

には **朋誠** と記されて居る。

又喜三二自身の著書に就て見るのに、天明七年板行北尾重政畫の「鶴山人家妖（いへのばけもの）」の中に

　喜三二は、化物の趣向にさま〲工夫をこらし、心で心と相談しながら、とろ〱寐入る。喜三二が心の友に、鶴山人を始め狂歌連の手柄岡持、細見の序をかくほうせい堂など集り合ひ、化物の相談する。

　「はやりの怪亂しよくなどで、案じはあるまいか」

　「しよせん眞の化物をかいてはあやまる」

　「くわいさい、からと云ふ、案じも口もとの所だ」

　「岡持が朋誠堂か、喜三二が鶴山人かと聞くもきまぐれ」

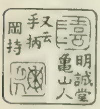
　「そこが何かありさうなものさ」

と云ふ條がある。從て朋誠堂を正しいと信ずべきである。

然るに、文化十五年板行の「萬紫千紅」（蜀山人）中に

　胸中に萬卷の書なく、眼中に天下の奇山水なければ、未だ必しも文をよくせず、たとひよくすとも女わらべのことばなり、とはもろこし元朝の吳立夫がことばなりけり。明誠堂平澤天壽平格子、薙髮して平荷翁とよぶ、胸中に万卷の稗史小說をたくはへ、眼中に天下の人情世態を盡し、上はやんごとなき王侯大人より、下はあやしの倡優隷卒にいたるまで、こと〲くみて詳かに諳じたれば、心におもふ所筆にのらずといふ事なく、筆の動く所心のごとくならずといふことなし、云々

と云ふ平荷集序があり。享和二年板行、三馬畫作の「又焼直鉢冠姫　稗史億說年代記（くさぞうしこじつけ）」には、戲作者名寄の所に



と記されて居る。かく親交の有た、蜀山人や、三馬の著書に、明誠堂とある事が、大日本人名辭書等

を誤らしめたものと云ふべく「萬紫千紅」や「稗史億説年代記」が何故にかゝる誤りを敢てしたかを、考察するに、板したの朋の文字が不正確で有つた爲に、板したを彫師に廻した際に、彫師が明と誤て彫刻したものと解釋すべく、著者が訂正しなかつた理由は、何れも蔦重等の、出版書肆の矢の催促に依るもので、初春の出版等の商策から出たものが多い爲に、再刻すべき機を失する事も多かるべく、且又喜三二と云ふ號が、氣散じをもぢつたものであるが如く、所謂戯作者氣質から「ほう明誠堂とはこれまた、乙なこつて」と云ふくらゐで、敢て意に介さなかつたによるものと見るべきである。

序に「日本文學辭典」は、明誠堂喜三二と讀ませて居るけれども、前述の如く、氣散じを捩つた號である事は、其の印に「龜山人」と云ふ印を用ひてゐる事や、文化十四年板行蜀山人の、「千紅萬紫」の「千秋井の記」の中に

> 千秋井のほりぬき井戸より、水と金砂の出でし事は、平澤氏のきさんじに書きちらされしより、平澤のひらたくあやまり入りて、外に掘るべき穴も見えず。云々

と記されてゐる所からも明かで、當然喜三二はキサンジと讀むべきである。尤も當時江戸の通語としては、更にキサアジと訛てゐたであらう事は云ふ迄も無いのである。

明誠堂と、朋誠堂との疑問に就ては、既に「増補青本年表」に大久保葩雪氏が

> 喜三二の明誠堂と號するは、人の知る所なれど、稀に朋誠堂と記せる書あるを見たり、明と朋と字畫相似たるによりて、謬れるにや、先輩の說もあれば、此書には明誠堂とせり

と記されて居るのである。其の先輩の說は知る由も無いけれども、却て明は朋の謬りと云ふべきである。

喜三二の生活に就いては、信頼すべき文献の見るべきものが無いけれども、享和三年板行の随筆「後者昔物語」に依て、其の生活の一端を推知する事が出來る。喜三二は其の自序に

南野高才、古をこのむのあまり、近世の俗事といへども、今世にのこることのまれなる品はうがちて、其世々のおもむきを察し、からかみ表紙のきんぴら本のたぐひ、古き戯場の番附、青樓の細見などをさへに、あつめてたのしみ給へり。ある日何人のあつめ置けるにや、寳暦中の戯場の櫓下てふ畫を、かず〳〵あつめたりしをめづらしとて見せ給へり。其中には我見たりし狂言、あるは聞及びたるも、また見ておもひ出たるもあり、おぼえぬもあれど、その役者は我しれるものどもにて侍れば、めづらしとはおもはねども、わかがへりたるこゝろに愛で、あるはとしのつもれるにはおどろき侍り。我このごろのやうにおぼゆることも、四そぢにみたぬ人々には、古き世とも見たまふらんと思ふにつけて、我七つ八つになれりけるとしよりこなた、寳暦のころまでの事、耳の底に殘り、或はそら覺えにおぼえたりしたはれごとの、忘れたるはわすれたるまゝに、かいつけて、南野高才子のわらひにそなへ侍る。

享和三年癸亥九月盡、平澤常富六十九歳於虎耳窟たはむれに誌

と記してある。南野高才子とは、立花侯家臣西原市助の戯號である。今年代順に參考となるべき記事を掲ぐれば

一、我幼年より亂舞を好て、考ふるに能役者といふ人の藝も、戯場の役者の如く、昔は上手にて今は下手なりといへば、夫にもなれども、一體拍子の合ひ方等委敷微細になりて、云はゞ利口に成たるといふやう也。昔と違ひ素人には上手多く成たると見えたり。是を考るにむかしは、素人には惜みて委敷意味は傳へざりと見えたり。前に云如く、今の人はこらへ情薄く成りて、素人にもよき事を傳ふるよりして、素人にも功者多し。云々。

一、我父の友に小久保萍也といふ老人あり。是も乙卯の生にて、我に六十とし上にて十歳より十三の年まで、此老人の咄を聞たることあれども、今おもしろしと思ふほどの咄も覺え侍らず、土佐節を好みて常にかたりき、定家といふ淨瑠璃など、よほど聞覺えき、親土佐は上手なりなどいひしは、元祖にてもや有けむ、云々。

一、此の隱居は、我父にも年十上にて、今の傾城の髮は油を澤山に付て堅めたる髮也と、親が云ければ、以前左樣の事はなき事也、云々。

一、はやりうたといふものを聞て、おぼえそめたるは「さァいたさくらァに、なァぜこョまァつゥなぐとョいな引、こョまがいさめ引ば、はァながァちィる、ちら〳〵するわいな引、」是なり其後だん〳〵覺えたるはやり歌多し、咲た櫻は、元文の末なるべし、云々。（元文は喜三二四五歳の時なり）

一、我が初て芝居見たるは、六歳か七歳ばかりならんか、市村座に海老藏がじやごぜ赤右衞門と云面打（めんうち）の狂言なり。おのれがかほを、さま〳〵の面にして見するなりけり。其時の團十郞は（幼名升五郞といふ實は三升や助十郞が子にて、今團十郞といひき、父と共に上方に登り、歸てのち歿す）鎌田又八にて、赤き面にて出たり。宇左衞門は（羽左衞門と書しは後なり）吉田の少將、海老藏粟津の六郞、坂東彥三郞は山田の三郞なり。中島三甫右衞門寂まくの善右衞門といふ人買なり。松本幸四郞（木場の海老藏なり、此時病氣にて、松本四郞三といふもの代りをつとむ）六十六部が敵討の狂言なり。後の羽左衞門は滿藏とて、猫の所作をしたりといふ。何もろくに覺え侍らず、東の棧敷なりしが、後に六十六部が此のうしろを通り、此前の花道を通るといふ事を聞て、氣味わるくなりて早く歸りき。

一、我十二の時かとおもふ、市村座にて淀やの狂言を見たり。若太夫龜藏淀屋、辰五郞、淀や古庵、中島三甫右衞門（天幸が親重笠也）あねはの平次、中村助五郞（今魚樂が父也）梅幸女形の時にて、刀屋半七の若衆形をせり。云々。

一、今も騷ぎといふ唄は、江戸にも上方にもありて、忠臣藏の七段目の幕明きの類あれども、親などがいひし土佐節頃のさ

わぎといふ物は、今の趣とは異る也。奴の騒ぎ、鼠のさわぎ、何のさわぎ／＼と云ふ事有、我も鼠の騒といふを、十二三の頃、父に習て覺えたり、鼠のさわぎといふは

「嬉し／＼、側いこ／＼、しんぞ／＼／＼、けんぼ／＼／＼、さすは盃君様へ、戀け戀慕きやしやふる花、よい／＼、側にそつと寐よか／＼替らぬ思はば、いざまゐろかのうきにうきたつ、ひよんきり瓢簞、戀風がぱつとふいて來て、あなたへはからころり、こなたへはからころり、からころ／＼からころり、つときそいのうかれ姿のおもしろや、年の始に春駒を祝ふた、お厄落しに厄拂、節分豆蒔年男、やんさこんさ、てんかおてんか、屏風の棧敷大分込んだと、南無奇妙長久、始めて置て、頼朝のお前でひよつと罷出いた、法樂法樂の舞じや程に、いざ舞ふよ、拍子を揃へて、獅子亂曲を舞ふよ、をどるまいと思へどきよひよん、をどるまいとは思へどきよひよん、伊達な姿を三河の澤のお澤の騒ぎに、三界をはしり／＼／＼／＼の八橋に、八つ拍子を揃へて、きよひよん、もすそ小つまの／＼、まつぴら／＼／＼、ひらり／＼、ひらりしやらりと、うき世うかれめ」

一、我十五六の頃、生島又藏といふ中役者有、後大井川又藏と改め、また万屋又藏と改む。名を立盡して苗字を再三改たるもをかし。親高麗屋もたび／＼改めたるものなり、寛延の頃は瀬川金吾とてよき若衆形也、云々。

一、むさしや權三は、初めは麥飯計を焚て喰はせたりと云ふ。我十五六の頃なり。麥計庵といふ計を、斗の字と心得て、ばくけいあんとは云はず、ばくとあんと唱へたるもをかし。其後年を追て繁榮し、今の姿になりても、ぶら挑灯の抱澤潟の脇に、麥計の字を書たり。其後是もやめてむさしや權三にて通りぬ。今も秋葉より來る老人は、ばくと／＼といへり、權三が家内のものは却てしらぬなるべし。

一、眞崎稲荷はやり出て、田樂茶やの出來たるは、我二十二三歳（寶暦六七）の頃なるべし。鳳岡先生の會日に、其はなしを初て聞けり。江戸町の名主は先生の門人にて、其男が別て甲子屋と申茶やの、田樂はよしと申也など、先生に語りしを聞

けり。其後大に繁榮し、靑樓の婦人をいざなひて遊ぶ人も多かりき。向ふ島の秋葉は、今信仰薄くなりて淋しけれど、茶やの賑ひは替らず。眞崎は神威とともに茶屋もおとろへたり。眞崎は手前の角、若竹や（後袖すりや）又甲子や、川口屋、玉や、いねや、仙石や、きりや（道を隔て）八田屋など、いづれも繁昌なりき。

一、京都の人はうはべ和らかにて、心ひすかしなと、さみす人多し、江戸ものの心持には、さ思ふべき道理もあれども、又江戸もの丶及ばぬことも多し。おもふに物の流行、江戸は足早く、京都は足遲し。十年跡に京に登りて見たるに、帶の幅のせまき笄の長き等、江戸にてむかし流行せし事、其まゝにて有やうに思へり、云々。

此の條には、京都の人情風俗を始め、丸山の貸座敷の諷講の事等を記載してゐる。喜三二の、京都へ上つたのは、寛政六年二月五十九歲の時で、君命に依るものである事は、佐竹侯の記錄に明な所である。

今喜三二の公生活に關する記事を、主君秋田藩主佐竹侯の記錄中から摘出すれば

一、寛政元年四月十日、幕府の老中松平定信、江戸留守居平澤平角（常富）を招きて書を與ふ、其の略に曰ふ。

「領内銅山の儀難澁の上、安永二巳の年饑荒に付、金一萬兩貸渡年賦返納中、安永七戌の年、居城燒失に付、五箇年延期寅年より上納すべき處、卯年凶作に付銅山人夫扶助の爲め、又五ヶ年延期の上、又百八十貫貸渡し、一ヶ年千兩づゝの返納に對し、卯辰の兩年指延の處、辰年に至り又八百三十貫目前借願出に付、出銅無滯の爲め貸渡せるに、約束通返納無之、巳の年の如きは二十萬斤より囘送無之に付、御用銅差支を生ずる如き事ありては相成難きに付、猶又四百貫目前貸致し未年も六百五十貫目貸渡せる處　又々難澁の儀申立あり、每年拜借前貸等有之も、約定通出銅無之、御手當被成下候詮も無之に付　此度銅山見分として、柑本久藏指遣候間數內、吹所は勿論、普請場所、吹立銅共差支なく見分請候樣、懸り役人へ申付らるべき事」

（平澤平角等の奔走に依て　寛政四年七月阿仁銅山改革費として、幕府より一萬五千兩借り受けに成功した）

一、寛政四年二月、幕府より、江戸川、神田川の浚渫及び火除地土手築造方普請手傳を命ぜらる。
直に左の吏員をして、其の事を管掌せしむ。

家老	岡本但馬(元亮)
勘定奉行	大森彌生(昌俊)
留守居	平澤平角(常富)
物頭	黑木權右衞門(家正)
副役	那珂長左衞門(通博)
用人	藤井監物(俊德)
財用奉行	小野崎作兵衞(通貫)
留守居	大繩新藏(久紀)
財用奉行	大田原平右衞門(祐之)

(工費　一萬一千六百兩　六月竣功)

一、寛政六年二月、江戸留守居平澤平角(常富)を京都に遣はし、女御入内を奉賀せしめ、禁裏へ御太刀一腰、御馬代黃金二十兩、女御へ白銀十枚を獻ぜしむ。

一、享和二年正月、幕府より復た大川筋及び本所筋の川浚渫の命あり、依りて左の有司に命じて其の事を處理せしむ。

總奉行	大越十郎兵衞(範國)
副奉行	田代新右衞門(綱紀)
元締	棚谷兵右衞門(行等)

同　大縄新藏（久紀）
同　根岸靫負（秀美）
留守居　平澤平角（常富）
同　平澤爲八（常芳）
助役　安田敬藏（重禮）
元締副役　奥山衞士（勝昌）
同　高橋十之允（政美）

（經費三萬三千百五十兩餘九月竣功）

一、文化二年十一月八日、江戸留守居、平澤平角（常富）致仕す。多年の功を賞して、秩二十石を加增す。

致仕の後は、重荷がをりたと云ふので、號を平荷翁と改め、文筆を友として、人每に其の長命を誇て居た。蜀山人の「萬紫千紅」に

手柄岡持追悼

長いきを手がらにしたる岡持も
　いつか木魚となりにけるかな

とある。

○朋誠堂喜三二　著書目錄

當世風俗通	安永二年	一卷	龍都四國の噂	安永二年	三卷
親敵討腹鼓（オヤノカタキウテヤ）	安永六年	二卷	鼻峯高慢男	安永六年	一卷

桃太郎後日咄	同	一巻
珍献立曾我	同	二巻
懐胎用心壽春袋	同	三巻
娼妃地理記	同	一巻
案内千本通人藏	安永八年	一巻
粟津原吉原旭縁起那須俤	同	三巻
鐘入七人化粧	安永九年	三巻合袋入
（漉返柳黒髪　と改題　安永十年）		
息子妙薬一粒万金談	天明元年	二巻
染直鳶色曾我	天明二年	三巻
春狂言御信著恒例形間違曾我	同	三巻
昔時通神當時通人三太郎天上廻	天明三年	二巻
太平記万八講釋	天明四年	三巻
爺山柴刈婆川洗濯鬼嫗大通語	天明五年	三巻
向島佐々木久助	同	一、袋入
新建立忠臣藏天道大福帳	天明七年	三巻
文武二道万石通	天明八年	三、袋入
南陀羅法師柿種	安永六年	一巻
女嫌變豆男	同	一巻
新版桃太郎	同	袋入
蛭子大黒壮年過	安永七年	一巻
廓花扇觀世水	安永八年	三巻（合本）
（運開扇子花　と改題　天明元年）		
古朽木	安永九年	五巻
大通人好記	同	四巻
見徳一炊夢	天明元年	三巻
夫れは小倉山是れは鎌倉山景清百人一首	天明二年	二巻
大通天王野暮親王誤鯫大和功	天明三年	三巻
長生見度記	同	三巻
鮹入道佃仲	天明五年	一、袋入
氣散治夢物語	同	三、袋入
上州七小町	天明六年	一、袋入
龜山人家妖	天明七年	三巻
引歌諺解六玉川流榮	天明八年	一巻

羽勘三寶圖會　寛政三年　一巻
狂歌東海道　享和二年　一巻
よにめでたきためし拙き歌よみし物語　文化元年？　一巻
桃太郎繪詞　文化四年　一巻
岡持家集　我おもしろ　文政二年　二巻
五十五日記（イツイヒキ）　寛政六年　一巻
後はむかし物語　享和三年　一巻
弘長百首題詠　文化三年　一巻
平荷隨筆　文化六年　一巻
おらく物語　？　？

僞書

名月全盛　吉原饅頭
大通間違曾我
氣の藥
人間萬事　万八傳
右通儔而　空多雁取帳（ウツシカリガントリチヤウ）
滸都洒美撰
錦妓諸雅
新風俗志

佐竹侯の、江戸に於ける屋敷は

一、居屋敷　下谷七軒町　一萬二千百八十八坪
一、中屋敷　神田佐久間町　五千五百十六坪
一、下屋敷　淺草　六千百三十七坪
一、抱屋敷　深川海邊　三千九百五十三坪
一、同　豐島郡新堀　一萬七千坪
一、同　足立郡梅田　五千二百三十二坪

芝全交論

小池藤五郎

「日本文學大辭典」の草雙紙方面の執筆を恩師から命ぜられた事は、私をして先づ黄表紙研究に向はしめた。若しこの事が無かつたならば、恐らくは、もつと古い時代の作品の研究に向つてゐたであらう。黄表紙作者中の鬼才芝全交を論ずる事は、私にとつては意義深いものである。

芝全交（山本藤十郎、司馬全交、司馬交、芝全交坊、司馬亭）の名は近世文學と共に永遠に傳はるであらう。併しながら、彼の名が喧傳されるに反し、彼に就いて知られてゐる處は少い。麻布區櫻田町日通山妙善寺は其の菩提寺である。過去帳を披見すると、

（一）	得本院實通	山本藤七	安永六丁酉年五月三日歿
（二）	澤本院妙森	山本藤十良	寛政元已酉年六月八日歿
（三）	全交院舞山日翁	山本藤十良	寛政五癸丑年五月廿七日歿

の記事がある。（一）は全交の養父山本藤七、（二）は「妻」或は「養母」の文字の脱落かと思はれ、藤七の娘か妻であらう。（三）は全交自身である。全交の實父の吉川氏は富裕な商人であつたらしく、全交に趣味として大藏流の狂言を

習はせ、それが縁で水戸藩に狂言をもつて仕へる山本藤七の養子になり、其の娘と婚して家業を紹いだものらしい。長唄其の他の遊藝を始めとし、多藝多能の天才であつて、幼少より通人はだしと鳴瀧音人に言はれた程で、時代精神の擬人化とも言ふべき人物であつた。藝術家としての彼の一面は舞臺に立つ狂言師、他面は十三年間の黄表紙作者である。其の本職の狂言師としての技倆は彼を永遠ならしめず、短い作者生活が、彼の名を不朽ならしめてゐる。辯舌にすぐれ、茶・香・琴などに深く、廣い趣味を有し、洒脱淡泊な性格と鋭い感受性を持ち、太平を享樂する逸民として、交友が多く、讀者が多く、人々からは愛されてゐた。さりながら彼は内氣な謙遜家で、其の筆致の纖細なるが如く身體も纖弱であつたらしい。天明の末年頃から因洞山三顛椿の會下に參禪し、「直讀見臺萩」(寛政三年刊、黄表紙 振假名は出來得る限り原本の儘とする。以下同様)には其の陰翳を見せたが、程なく彼も歿した。寛延三年六月十九日の誕生、行年四十四歳。全交の子は山本善次郎、子孫は今日では不明である。全交は芝の西の久保神谷町に住んだ。彼の肖像は「全交法師常々艸」(寛政六年刊、黄表紙)と「馬鹿夢文盲圖會」(天明五年刊、黄表紙)とに見える。前者は眞面目な容貌、後者は哄笑してゐる様、「稿本戯作者考」の國貞筆の肖像は後者に據るものである。

歿後には「全交法師常々艸」・「百人一首戯講釋」(共に寛政六年刊、黄表紙)・「素後壯雪信」(寛政十年刊、黄表紙)の三作品が、全交作として出版されてゐる。前の二書は、書肆の依頼で京傳が作り、全交作の銘を打つて出した物らしく、「素後壯雪信」には全交の特徴は見えず、拙劣な僞作である。「全交法師常々艸」には「全交都鑑　三冊」の廣告をのせ、「江戸作者部類」には仙鶴堂より「全交禪學の噺」(一名、全交通鑑)を出版した由を記す。もし事實とすれば、歿後に讀者の愛惜心を狙つた物で、遽に全交作と斷ずる事は出來ない。滑稽本に「合羽大佛略縁起」(寛政五年刊)があるが言ふに足らず、全交作と確定

し得る四十部の黄表紙こそ、作者としての彼の全貌を指示するものである。第一流の作者としては寡作であると雖も、彼の創作態度は眞劍であつた。地本問屋の請ふに任せて多作し、マンネリズムの弊にも恬然たる黄表紙作者中に於て、彼こそは一種の峻嚴さをもつて創作し、類作に就いて强い潔癖を持ち續けた。讀者に阿ねず好きに終始し、其の長所を發揮すれば足り、困難な種類の作品の創作に向はなかつた。他人をも自己をも揶揄冒瀆するが、自然の心安さからで下品さが無く、親しみが籠つてゐる。「古事記」・「太平記」・「徒然草」・「古今集」・「淨瑠璃本」・「脚本」・四書の類・佛典・「十四經絡發揮和解」等の醫書などに題材を得てゐ、多くは耳學問や一瞥の程度で、天性の要領の良さ、當意卽妙の天才が素晴らしい働となつて作品を捏上げ、大きな茶の可笑味を湧かせる。衒學的氣分の尠い彼は、其の作品を指標とする時は、修養を過小視する危險が無いではないが、「王子の角文字」(寛政二年刊、黄表紙)などに現れた漢文摸擬の手腕に徵しても、其の修養は作品に現れてゐる以上に餘り大きくなかつたと推論し得るであらう。當時の戲作者中には彼以上の修養の者は尠くはなかつた。但し其の才の方面では、馬琴・京傳の如きも時に一籌を輸するであらう。

大藏流の狂言師であつた事から、「江戸作者部類」に從つた學者は、彼の作品に狂言或は狂言記の色彩が多しとし、狂言方であつた事が黄表紙作者としての强味の如くに見もするが、吾人には其の點は殆ど認められず、寧ろ彼の才氣と江戸つ子としての體驗が、彼を偉大ならしむる最大原因であつたと信ずる。謠曲に據る處は僅少であるが、試みに拾へば、「大悲千祿本」(天明五年刊、黄表紙)の「忠度」・「田村」、「浮世操九面十面」(寛政四年刊、黄表紙)の「高砂」、「武者工者狂話」(天明三年刊、黄表紙)の「隅田川」、「通一聲女暫」(天明元年刊、黄表紙)の「羅生門」、「大違寶船」(天明元年刊、黄表紙)及び「交古世むかし噺」(天明二年刊、黄表紙)・「京鹿子娘鮓汁」(寛政三年刊、黄表紙)の「道成寺」などに、微香とも言ふべき程の僅かの關係が認められるのみである。否々道成寺物が歌舞伎の各種の道成寺に據るが如く、實際は謠曲に據る處は一入稀薄となるであらう。從つて狂言師といふ職業を作者全交の

有力なる基礎とする說には從ふ事は出來ない。

全交の環境は悠々乎たるもの、戲作によつて社會的に名をなす事を、同時代の他の作者の如くにあせる必要はなく、從つて自己宣傳が尠く、恬淡無慾、眞に藝術に遊ぶ態度である。歌舞伎や遊里を好み、通人として其れ等の方面に友が多かつたらしい。

全交が豫想した讀者は、多くは當時の青年壯年である。時に「大違寶船」(安永九年刊、黃表紙)の如く、子供向の點を標榜もするが、描かれた世界は高い程度のナンセンスであつて、子供の生活とは乖離する。詮ずる處、庶民教育の準教材としての職能が、通人相手の最高級の作者にもかゝる標榜をなさしめたに外ならず、又、天明末より寬政に入つての「芝全交智惠程」(天明七年刊、黃表紙)・「鼻下長物語」(寬政四年刊、黃表紙)・「白髭大明神御渡申」(寬政五年刊、黃表紙)の如き子供向の物も、實は寬政の改革の影響を受けた黃表紙の新傾向に追隨を餘儀なくせしめられた結果に外ならず、全く彼の本質的の物ではない。青壯年の男女、通人達が彼の豫想された讀者であればこそ、「時花兮鶸茶曾我」(安永九年刊、黃表紙)・「通一聲女暫」・「當世大通佛買帳」(天明元年刊、黃表紙)・「通人いろはたんか」(天明三年刊、黃表紙)・「茶羅毛通人」(天明三年刊、黃表紙)・「馬鹿夢文盲圖會」・「本能見世物」(寬政二年刊、黃表紙)・「玉子の角文字」・「十四傾城腹之內」(寬政五年刊、黃表紙)を始めとして、洒落本的色彩の濃厚な作品が多く、これこそ讀者に對する彼自身の認識の結果である。桃太郎說話の如き「親動性桃太郎」(天明四年刊、黃表紙)に於ては、童話の世界から逸脫してゐる。さりながら此の洒落本的色彩は、「馬鹿夢文盲圖會」の邊にて行詰りを感じたらしく、これ以後は作品に異樣な變化を趣向し、讀者の感興を新にする。

歌舞伎による案じは全交の一特徵であつて、前期中期に此の傾向は著しい。曾我に據る「時花兮鶸茶曾我」・「煙競

蕎麥屋眞木」(天明元年刊、黄表紙)・「年寄冷水曾我」(寛政五年刊、黄表紙)、「菅原傳授手習鏡」による「菅原傳授仕習鏡」(天明元年刊、黄表紙)、女暫に據る「通一聲女暫」、「伽羅先代萩」による「直讀見臺萩」、道成寺の趣向の「京鹿子娘鮫汁」・「交古世むかし噺」・「本能見世物」、無間の鐘の案じの「金涌物壬歳」(天明二年刊、黄表紙)・「閻羅三茶替」(天明四年刊、黄表紙)・「當世大通佛買帳」、葛の葉狐に據る「引返狸之信田妻」(寛政元年刊、黄表紙)、「太平記」の世界の「本能見世物」等から、芝居の道具による「茶歌舞伎茶目傘」(天明七年刊、黄表紙)・「俵藤太振出百藥」(寛政二年刊、黄表紙)等より、脚本めいた記述、劇中の人物の點綴などが隨所に見え、「尻採御用神」(寛政五年刊、黄表紙)の如きは芝居見物に取材する。流行の壬生狂言を「浮世操九面十面」に、輕業を「本能見世物」・「風雷神天狗落種」(天明二年刊、黄表紙)中に取入れる。時には流行の食物等に據つて趣向もするが多くはない。

多くの素材を取込めるだけ取入れ、プロットの混亂を來すが如き狀態となし、說話の進行につれて漸次に統一を與へる方法と、始より重心を一點に置き、それを描いて行く方法との二種の鮮かな手法が、全交の黄表紙を纒める方法である。勿論折衷した中間的の方法をも用ひるが、前手法に據るは前期の作品「鬼袋豐物語」・「大違寶船」・「通一聲女暫」・「交古世むかし噺」・「大悲千祿本」・「通言武者揃」(天明六年刊、黄表紙)・「十四傾城腹之內」などで、後者に屬するは寛政期の作品に多いやうである。全交の特色は寧ろ前者で、傑作として世の喝采を博した作品の多くは前者に屬する物である。この紛亂より整備へ、雜多粗雜さより手際の光る統一への移行は、作者の手前味噌であり、下手趣味の一露出であり、彼の作品が賑かに感じられるのは、かゝる手法から來る處が多い。この手法には屢〻支離滅裂の懼があつて、彼の作品中には其の危險も多少認められるが、概して纒まり、優秀である事は、彼の手腕の非凡さを語るものである。曲亭馬琴は「鼠子婚禮塵劫記」(寛政五年刊、黄表紙)に見る如く、此の手法を摸倣し多くは失敗してゐる。馬琴は常に強引の附會の手を用ひ、彼の黄表紙の無味の大原因となつてゐるが、全交には強い附會は尠く、大體に輕く自然に纒め上げる。

黄表紙の世界に於ては屢々擬人化の手法を用ひる。特に概念を同音異義に捻つて具象化する事は誰人も行ふ處であるが、全交には此處に一特徴があつた。「馬鹿夢文盲圖會」の如き「尻拭御用神」の如き、さては「大悲千祿本」の如き、いづれも此の手法に據り、唐突・矛盾・背馳などから大きなナンセンスを導き、具象化された概念を心憎い程に鮮明にする。

實在の人物を拉し來り、或は事實を揶揄し諷刺する事も多少認められるが、春町・喜三二・京傳・琴好・三和・三馬・一九等が行つた對爲政者、事件の當事者へ向けた直接的諷刺は極めて僅少である。「鸛（こう）の者雄（もののを）」（天明三年刊、黄表紙）が江戸贔屓の心から、上方者の代表者として大阪の鴻池を拉し來り、鸛鳥（こうのとり）に掛けて其の失敗を皮肉るなどが、やゝ直接的の諷刺であつて、實際的の事物を赤裸々に俎上に登せず、全交には充分に奇警諧謔の天地が打開し得たからである。蠱惑感とも言ふべき小味の刺戟は處々に見え、蝨の刺すが如き痒味を讀者に起させる。

鬼子母神・白髭大明神・碑文谷仁王尊・笠森稻荷・王子稻荷・千手觀音其の他多くの神佛を取入れ、揶揄し驅使し、時に冒瀆もする。これは對象の世界・題材・作者の態度などより來る黄表紙作者の常であつて、神佛をも其の趣味集團の一員とする親昵感からである。妖怪狐狸は大人を相手とする關係上取入れられる事が少い。寛政に入つての教訓的陰翳は、市場通笑に範を求めたらしく、公儀の御法度の嚴守と火の用心の二者を掲げるが、間延びした鈍い通笑の教訓とは別の趣を持つてゐる。お日出度の分子、商店の廣告等も作中に見え、更に「親之敵現歟夢也（おやのかたきうつゝかゆめか）」（寛政元年刊、黄表紙）に於ては、後年に南杣笑楚滿人などが打開する筈の眞面目な敵討物が、人生如實の相を逆に寫す事により、茶の世界に於て蠢動してゐる。こゝには又讀本風の色彩が現れるなど、寡作ながらも全交の作品中には、將來黄表紙が産み出すべき分子を、未敷蓮華の裡に相當に包んでゐる。彼が新轉向の曙光を浴びたまゝで歿した事は、展開し來る新事態に大して自信が無かつた身としては、寧ろ幸福であつたと言へよう。

換骨奪胎は黃表紙創作の一方法で、原作を生かす處に誇が見られた。「本能見世物」は市場通笑の「本能見世物」（安永九年刊、黃表紙）に據り、「京鹿子娘鮓汁」は南陀伽紫蘭の「空音本調子」（安永九年刊、黃表紙）に、又、「當世大通佛買帳」と「聖遊郭」（寶曆七年刊、洒落本）、「親之敵現鰍夢也」と「親敵討腹鞁」（安永六年刊、喜三二作、黃表紙）等……其の他一小部分を他の作品より得てゐる物は枚擧し得ない。作者からすれば喜三二の影響がやゝ大きく、春町・通笑・京傳等も多少關與し、芝居好であつて櫻田治助の脚本や演劇などに影響せられもした。紫蘭の「空音本調子」の鰻の案じを鮓に改め、のろ〳〵した大味の作品も一度全交の手に觸れるや、ピチ〳〵とする小味の趣向となり、鮮かな一新の感じと聯想の妥當さが盛られ、原作品を遙に凌駕し新價値を作り上げてゐる。洵に全交は洪鐘の臍とも言ふべき一點を捕へ、人の意表に出づる奇警な趣向により、潑剌たる茶の旨味、胸のすく辛味、纖細さを出す處、獨歩の手腕を有してゐた。「大悲千祿本」と「馬鹿夢文盲圖會」の手の案じ、「拜壽仁王參」（寬政元年刊、黃表紙）が「悴褒醫」（鳥居淸經畫、安永元年刊、黑本）邊を流行の碑文谷の仁王尊に落す處、「和唐珍解」（唐來三和作、天明五年刊、洒落本）と大學の摸擬本とを併せて「玉子の角文字」を案じ、「十四經絡發揮和解」の挿繪から「十四傾城腹之內」の趣向を導くなど、全く前人未踏とも言ふべき奇警な天地に、平凡の素材を架して踏入る處、黃表紙作者として隨一の手腕である。

全交の作品に觸れる時、故意に衒つた樣な佶屈聱牙さが無いではなく、作品の全體から見れば僅少ではあるが、先づ驚かされるは其の序文の文體であらう。

如何是祖師、西來意、遠磨大通は九年無言の、其猛勢佛法の大道を悟らしむ。作麼生壬生の狂言、此奴も黙而人を度すや。是以狂言別傳、風流文盲、以心傳心、何所參此所參、隣の婆阿さん茶を參、己等が息子は伊勢參、御手が鳴なら銚子と

悟れと爾云（直讀見臺萩、假名遣等すべて原本の儘、以下同樣）

隨所に省略法を用ひ、附會・語呂を自在に使用し、雜多な語句を取込んで聯想を豐にし、奔放の文をもつて簡潔に意を盡し、才氣の躍動を認める。馬琴もこの狂文を眞似て「曲亭增補萬八傳」（寛政八年刊、黄表紙）に序し、其の他にも摸倣者がある。「十四傾城腹之內」の序文は、奔放の極自ら七五のリズムを作り、

……手のある奴に足を付け、各算用算談有。手の三年は年一ぱい、足の算用三里の灸、手管にはめたる大妙傾……。

の如く才氣が文に先立ち、筆が才氣に辛うじて追隨する感があり、奔放自在、得意の一體である。本文には序文の樣な特色はないが、無駄が無く、かなりに洗煉され、輕妙さを持つてゐる。さりながら張りきつた創作慾は、有り餘る趣向に苦しみ、處女作より「大違寶船」・「吉原傳授仕習鏡」あたりまでは、本文が多きに過ぎ、「煙競壽麥屋眞木」に於て將に極まらんとする。併し作者として境地が深まるにつれ、漸く文章も短くなり、傑作「大悲千祿本」の如きは五丁物一冊の短篇で、手のあらゆる場合を描き、聯想を利用して多くの事物を彷彿させ、語呂などには特に餘裕のある筆意を見せ、暗示的の筆を巧妙な詞の裡に藏するなど、全く珠玉の迸る趣がある。淨瑠璃の摸擬とも言ふべき物、道行を眞似た文章なども挿入される。これは序文と本文との中間の文體で、時に七五の快調を有する物もある。

全交の文體の強味として特筆すべきは、實演に據る微細な描寫、細かな注意を以てする寫實である。「風雷神天狗落種」の雷の子の泣聲を「ごよ〳〵」と記し、「年寄之冷水曾我」の六百何歲の老人の大薩摩を、

さゆほぢよに、しよがの五よふちよきむねは………

などと記す類は作品中に多く見る處である。これは單なる出まかせの記事ではなく、彼自身が口のまはらぬ子供となり、或は齒の拔けた老人となりきつた態度からである。或は彼の職業的の訓練、それは文字を其の形で見ず、聲で聞

き人の姿態動作で表現する行き方が、斯くあらしめたものかも知れない。語呂を自在に驅使し、いづれの作品中にも多く挿入し、輕快洒脱、犀利にも滑脱にもそれ〴〵に用ひられ、大體に於て優秀である。彼の文章はこの語呂の才能によつて、如何に輕快化され、黄表紙の文體として適合せしめられてゐるかも知れない。

事物の起原的の説明、所謂「いはれ」の記述が頻出する。「時花兮鸚茶曾我」の「齒の根五郎」、「鬼袋興物語」の「鬼に金棒のはじまり」等を其の始とし、「冷水灰毛猫」(天明元年刊、黄表紙)の「目黑餅花のいはれ」、「通一聲女暫」の「野暮をうつをさと言ふ事」などより、「風雷神天狗落種」の「達者をおまめと言ふいはれ」・「鐘大鼓のいはれ」・「たいこもちの謂れ」・「風來人の謂れ」、「十四傾城腹之內」の「ひい〳〵の謂れ」に至る迄、全く枚擧し得ざる程である。全交前期の作品に多く、後期に及ぶにつれて減少する傾向を示し、天明二三年頃に最も繁く、「風雷神天狗落種」の如きは其の煩に堪へない。さりながらこれは黄表紙一般の傾向で、山東京傳なども「天慶和句文」(天明四年刊、黄表紙)あたりにこの手法を頻りに用ひてゐる事から、あながちに全交をのみ咎むべきではない。

洒落本を創作しなかつたが、彼は遊里通であつたらしい。遊里方面の描寫、其の方面の人物の詞の寫實など、中々手に入つたもので、秀逸な點が多く認められる。何故に彼は洒落本を書かなかつたか。吾人はこの點に疑惑を感ずるものである。庶民も武士も當時の誰人もが、何等のひけ目をも感ずる事なしに遊里を語り得た。內氣の息子や粗暴な武士の子弟などは、成人教育の意味で此處へ通ひもした。當時の遊里は實に紳士の交際場であつた。黄表紙に洒落本的の分子を挿入する事は、一面には華麗な交際場裡の描寫であり、他面には遊里愛・戀愛の描寫である。全交の作品は交際場裡としての遊里に取材した處が多く、暗示的な口吻を以てする部分もある。これは又彼の作品の一特徴となつてゐる。庶民教育の準教材としての特別な職能に從つて、子供向に作られた作品さへも、男女問題を取入れる事が

普通であつた當時に於て、通人を相手としてゐる全交の作品が、上述の點で特色のある事も亦當然である。「大悲千祿本」が聯想の核心を撫でる巧妙さは、かゝる手法の完成を示してゐる。蓋しこの手法は度を越しやすく、「風雷神天狗落種」・「通言武者揃」・「引返狸忍田妻」などには、やゝ其の弊が現れるが如くである。かゝる描寫の裡に女性觀の片鱗が現れてもゐるが、いづれも零細の物で、無智と言ひ饒舌と稱し、亭主の噂などをさせるだけで、平凡至極、何等纏つたものではない。

語呂・地口其の他の洒落に妙を得た全交が、案外な事には狂歌には見るに足る作がない。天明元年頃の作品「大違寶船」・「當世大通佛買帳」・「煙競蕎麥屋眞木」等に載せてあるものの、

つぶるともよもや見えじなかなめ醫者年增の鼻の有らん限りは（當世大通佛買帳）

ゆきの粉をふるだにあらんざるのそば如何に喰へとて人の言ふらん（煙競蕎麥屋眞木）

大黑のつちは金だすつちでなしおごる頭をくらはさるつち（金涌物壬歲）

の如き本歌取めいた作り替は言ふに足らず、

の僅に二首だけが彼の自作らしく、其の他の殆ど總ては本歌取めいた狂歌である。「染相性男女占衿」（寛政五年刊、黄表紙）には十五首の狂歌を載せるが、同音異義語の使用に終始し、本格的の狂歌ではなく、作者としてあれ程の秀拔さは、狂歌には全く見られず、狂歌集中にも彼の作は殆ど見當らない。狂歌大流行の當時に於て此の狀態である事は、作者としては確に偏倚してゐる。和歌の引用は僅で自詠と思はれる物はなく、俳句・川柳の自作も殆ど見當らない。但し請はれる時には俳句・狂歌をものしたらしく、「蜀山人判取帳」には全交の筆蹟が二ケ所見え、

いち川や成田の家の生武道

の二句が記されてある。前者は市川升藏の葡萄の圖の讃である。いづれも眞似事に過ぎず、「全交法師常々艸」には和歌二首・狂歌一首・川柳二句が見えるが、該作品が僞作である事故論ずるに足らない。

漢文を取入れる事は、それが茶味、ナンセンスを目的としない限り、所謂衒學的となり、チンプンカンの横啣となつて好ましからざるものである。特に情緒的の全交の文には甚だそぐはないものとなる事は、彼自身にも意識されたらしく、横啣の程度は可能であつたらうが、衒學的の弊はなく、茶の目的で「玉子の角文字」の如くに利用するのみである。この滑稽的の取扱ひも、彼の他の手法や文章に比較する時は見劣りがせられる。

大人を相手に創作した關係上、江戸市民の日常生活の樣が作品中に躍々としてゐる。又、よし其の作品が子供向でないにせよ、子供に關する彼の觀察をも作品に盛り上げてゐる。それは童謠であり、子供向の地口や唄や小田原の外郎賣の詞の如きものである。

こもり來い山椒食はしよ、御堂の脇で水飲ましよ。（拜壽仁王參）

痿びて落ちたは誰にやろ、かにやろ、いとしいもんのにやりまんしよ。（大悲千祿本）

の如きは其の一例である。更に玩具などは「拜壽仁王參」には蜆踊の玩具を出し、「トツチンカツタリ」と遊戲の樣を描くなど、茶の滋味を子供の遊の裏に湛へて大人に味はしめる。

作品の書出しの語なども、天明の中頃までは多くは「爰に」であり、稀に「お子樣方の」・「信州苅萱山」・「扨も」等を混じ、「大悲千祿本」の「千手觀音とも言ふべき」の冒頭の一句には頭を垂れしむる力がある。後期には「扨も」が多く用ひられ、同時にやゝ自由になつて來た感がする。

心に謙讓の美德を持つてゐた彼は、其の署名も控へ目であつて、特に前期の作品に於て然りである。「親動性桃太郎」に及んで署名はやゝ大となり、「大悲千祿本」が洛陽の紙價を高めた爲に、或は書肆より要求されたものか「茶歌舞妓茶目傘」に於て普通並の署名となり、寛政元年頃の署名の文字が最大である。斯うした點にも、其の創作が全く道樂としての創作であつて、名聞利慾を求めるものではない點、自己の好み且つ長じた一方面にのみ進んで滿足してゐた事、其の個性等が現れてゐる。彼こそは太平の逸民として、江戸つ子として、この地に成長した茶の文學の創作のみに生れて來たと言ふべきであらう。

全交の作品の挿繪を畫いた繪師は左表の如くである（確實は畫工の署名がある物、未確實は署名は無いが、其の畫工の筆と認められる作品である）。

畫工名	確實	未確實	計
北尾重政	三	一二	一五
北尾政演	四	三	七
歌川豐國	六		六
北尾政美	四	一	五
鳥居清長	三	一	四
式上亭柳郊	三		三

柳郊を除いては、いづれも當時の第一流の風俗畫家である。重政の挿繪の傑作は「時花兮鶸茶曾我」である。大まかな繪組に適當に女性を配し、芝居繪を混じ、地と詞とによく調和し、清新の印象を與へる。彼の筆の「闇羅三茶替」

は美の理想に傾いて現實を無視する傾向もあるが、「鼻下長物語」の丸味のある穩かな繪組など、誠に黄表紙の悠々たる世界を具體化した作である。政演は大まかな穩かな畫風を以てし、地や詞と挿繪とを渾然たらしめる技倆に於て獨特の腕を持つてゐた。「大悲千祿本」の優秀さ、「芝全交智惠程」の茶の感觸なども洵に優れ、全交の傑作は多くはこの二畫工との協力の結果である。清長筆の「冷水灰毛猫」はやゝ劣るが、「茶羅毛通人」の姿態・描線・繪組など、其の華麗さは驚くべきであつて、流石に美人畫の巨擘たる名を恥しめない。

全交の作品の繪と文章との調和は、よしや彼の畫技の優秀な事が傳つてゐず、吾人の見た彼の肉筆畫が決して優秀な物ではなかつたにせよ、創作に當つて下繪が相當に畫かれた事を想像するに難くない。それに更に彼の克明さが加はり、道樂仕事としての細かな註文により、繪師をして作者の欲する儘の挿繪を畫かしめたであらう。單に繪師それのみの力では、到底かゝる傑作を作り得るものではない。

黄表紙の挿繪を概觀すると、大體に十五丁物は十八圖、十丁物は十二圖で、吾人はこれを標準畫面數と呼ぶ。作者の多くはこれに據り、通笑などは一律的に此の挿繪數である。全交は獨特の畫面數を以てし、「大悲千祿本」は五丁物で九圖、「武者工者狂話」は十五丁物で廿四圖となつてゐる。かゝる挿繪數は繪師の方からは寧ろ苦痛であるが、全交はこの困難を克服して、繪と文とが渾然たる傑作を殘してゐる。

全交の作品の批評は「菊壽草」に六種、「岡目八目」に二種、「江戸土産」に二種見える。又、式亭三馬の「黄表紙名作二十三部」中には六部が選ばれてゐる。「菊壽草」に於て「煙競蕎麥屋眞木」は「立役之部」の六枚目 **上上吉**、「大蓮寶船」は「寶惡之部」の **大上上吉**、芝の先生の作で繪は重政だから物言はずに卷頭に据ゑたと言ふ意味が記さ

れてある。其の他の四作品も上位であり「岡目八目」の「金涌物千歳」は立役の二枚目 **上上吉**、「風雷神天狗落種」は「道外形之部」の巻頭 **上上吉** であつて、其の價値は充分に認められてゐる。黄表紙第一の傑作とも言ふべき「大悲千祿本」は、版木の磨滅する迄摺出され、世に歡迎された。「わすれのこり」(四壁庵茂蔦著)には下谷上野町の紺屋が黄表紙好で、

大師の千六本といふ黄表紙一册を、金一歩に買ひとりたりと。

と記し、「大通世界」(春陽堂、明治廿四年刊)には嘉永の頃或藏書家は、關宿の商人がこの書を珍藏するを知り、強ひて懇望したが金錢には換へ難しと拒絶され、一個の緒〆玉と交換したと記す。此の書により後に再版されたが、それすらも全く稀覯本となつてゐる。初版本は勿論の事、再版本もあまりに人々に愛讀され、讀み破られた結果であらう。

全交歿し、讀者の愛惜の心は非常に大であつた。諸僞作はこの際刊行された。芝山人虛呂利は「芝全交腹内」(寛政六年刊、黄表紙)を作つて追善とし、三馬は「芝全交夢寓書」(寛政九年刊、黄表紙)を創作して追慕の心を述べ、又、「該如來萬八緣起」(享和三年刊、黄表紙)をも作つてゐる。彼は全交に私淑し二代目全交を名乘らんとしたが、故人の高名を穢すを恐れて、改名を見合せた事になつてゐる。これは表面的で、恐らくは全交の子孫や門人との間に襲名の件が圓滿に運ばなかつた爲であらう。芝甘交・芝晉交(深交)・芝光交等は全交の門人、晉米齋米粒は二代目全交を名乘つた。三馬・一九・築地善好其の他全交の感化を受けた作者は多い。

洵にその天才を一方面に餘蘊なく發揮した全交は、二千五百種に餘る尨大な黄表紙中に大傑作を殘し、永遠に光輝を發つてゐる。

洒落本の發生と支那の遊里文學の影響

麻生磯次

一

洒落本の發生に就いては、諸方面から考察される。一方では浮世草紙、殊に八文字屋本の三味線物などの影響が認められ、更に遡つて假名草紙の系統に屬する遊女評判記や野郎評判記類の流をも追うてゐる。京の島原本などの感化をうけて、江戸では特に吉原を主題にした評判記細見の發達を見たのであるが、初期の洒落本の中には、謂はば細見記の變形に過ぎない作も見出される。又書式の上から言つて、洒落本が卜書の形式を用ひ、說明の文を細字で二行に割つてゐる點などは、歌舞伎臺本などの形式に據つたものであらうとも言はれてゐる。かやうにその據つて來る所は一にとゞまらないのであるが、又一面に於ては支那文學によつて影響された點もありはしないかと思ふ。かやうな推定が下される理由は、

(一) 初期の洒落本作家が漢學の素養のある通人であつたらしく想像されることである。山岡俊明や澤田東江なども漢學の敎養があり、獻笑閣主人が若し都賀庭鐘などと同類であつたとすれば、多く舶來の書を藏した毘齋文庫にも親炙してゐた筈である。かやうに東西ともに漢學の素養のある人々によつて、洒落本が開拓されたことは注意すべき點であらう。

（一）洒落本の多くはその內容と甚だ不相應な薄茶色の粗末な表紙を用ひてゐる。それは恐らく唐本の小說雜纂類の小冊子の摸倣に他ならなかつたのであつて、洒落本作家の支那書籍に對する趣味の現れと見ることが出來るのである。

（二）洒落本の書名には支那の書籍の名をもぢつたものが甚だ多い。又その序跋は好んで漢文體に書かれて居り、列仙傳（寶曆十三刊 先賢卜子夏）の如きはその序のあとに、「康熙十八年癸未冬十月壬午　七十二叟可亭董寧薰沐拜序　南京　沈無有謹書」とある。本文中にも異素六帖（寶曆七刊 澤田東江）や聖遊廓（寶曆七刊 作者未詳）などには支那の經典詩文の句が旺んに引用され、色戀の意にもぢられてゐる。孰れも支那趣味の露骨な現れに他ならない。

かやうに考へて來ると、初期洒落本と支那文學との間には、かなり密接な關係があるやうに思はれる。異素六帖の假名の序文の一節に、

> 本邦の色を通曉したるものはおほく、異邦の色を轉飜したる書は鮮し（中略）、こいねかわくは黠聖ありて、和漢の情相おなしき數〳〵をあらはさは野暮をして活物た羅しめんしもの歟

とあるが、この意を敷衍すると、好色を主題にした浮世草紙は既に行詰りの狀態にあるので、異邦の小說に範を求めて、新生面を開拓する心要があるといふ意味にも取れるのである。事實在來の作家は因襲的な觀察や描寫に囚れて、既に行詰つた文壇に生氣を與へる力を失つてゐた。そこで漢學の素養のある通人達が謂はばその局面打破を試みた。これ等の人達は小說家を以て自ら任ずる必要もなく、所謂文人墨客の餘技として、自由な立場から筆を執ることが出來た筈である。從つて初期の洒落本は在來の小說の型に囚れずに、觀察が新しく、着眼が奇拔であり、描寫が生き生きとしてゐた。末期の浮世草紙には見られぬやうな無邪氣な暢達な笑が其間に感ぜられるのである。かやうな新鮮味

は支那文學などによつて與へられたものであらう。尠くとも支那の遊里關係の諸作品は洒落本の發生を促す一つの原動力をなしたものと考へられる。以下內容的に兩者の交涉を述べて見よう。

二

支那に於て遊里を主題にした作品は、古く既に唐代に、北里志（唐孫棨、說郛卷第七十八）・敎坊記（唐崔令欽、同）・南部烟花記（唐馮贄、同卷六十六）等があり、宋元時代の作としては、麗情集（宋張君房、說郛卷七十八）・汴都平康記（宋張邦基・同卷第六十八）・青樓集（元黃雪蓑・同卷第七十八）等の作があり、明代以後には、燕都妓品（氷華梅史・說郛續第四十四）・蓮臺仙會品（金壇曹大章・同）・廣陵女士殿最（萍鄉花史・同）・秦淮士女表（金壇曹大章・同）・曲中志（天都潘之恆・同）・曲豔品（同・）等の作が見られる。

此等の遊里文學の內容を總括すると、大體次の二つの事項に要約される。

（一）遊里の概括的描寫　北里志は先づ遊里の樓舍・庭園・植樹の有樣を述べ、更に妓館の個別的な說明に及び嫖客の風儀遊興などに就いて述べてゐる。秦淮士女表は秦淮遊里の盛衰を說き、之を「欲界之仙都而塵寰之樂境」として讚美して居り汴都平康記は小篇ではあるが、宋の政和年間に於ける汴都平康里の繁昌記になつてゐる。南部烟花記は直接遊里のさまを述べた作ではないが、調度類に就いての說明が見られるのである。

（二）妓女の品評　敎坊記は主として坊中諸女の技藝を述べた作であり、青樓集は青樓歌舞妓の艷史であつて、妓女の容姿・技藝等を品評してゐる。燕都妓品・蓮臺仙會品は孰れも花に擬して妓女の品評を試み、秦淮士女表は遊女の概括的說明について、士女品目の項下に妓名を列擧し、簡潔にして適切な評を下してゐる。其他曲中志・曲豔品等いづれも妓女の品評を試みたものである。

此等の作品はいづれも短篇ではあるが、遊里を對象にした作で、殊に北里志と秦淮士女表はその叙述の樣式が、先

づ遊里の概括的說明にはじまり、次に局部的事項に移つてゐるといふ點や、遊里の繁榮を述べ、之を讃美したあとで、妓女の品評を試みるといふ順序になつてゐる點など、遊里文學の典型的な形を既に示してゐるのである。

支那では此等の作品に引續いて、板橋雜記（三山余懷澹心）・續板橋雜記（珠泉居士・乾隆庚戌序）・雪鴻小記（珠泉居士）・吳門畫舫錄（西溪山人・嘉慶丙寅序）・吳門畫舫續錄（箇中生・嘉慶壬申序）・秦淮畫舫錄（捧花生・嘉慶二十二年序）・畫舫餘談（捧花生）・白門新柳記（懶雲山人・同治壬申序）・十洲春語（二石生・道光辛丑序）・竹西花事小錄（芬利宅行者・戊辰冬序）・海陬冶游錄（淞江玉魫生・光緒己卯序）・花國劇談（同）（以上讀史叢鈔所收）等の作が現れてゐる。板橋雜記の序に「予聞閩之大抵北里志平康記之流南部烟花宛然在目」とあるが、此等の作はいづれも、唐宋の遊里作品の流を汲むものであつた。板橋雜記に就いては後で詳述するが、續板橋雜記は雅遊・麗品・軼事の三編に分れ、雅遊編では先づ遊里の繁榮の有樣を述べ、更に局部的な描寫に移り、又妓樓の優劣・地形の概觀・遊興の樣子・遊女の風俗等を述べて居り、麗品編は遊女の評傳であり、軼事編では遊里の細部に亙つて說明を補足し、舟遊の狀況や市井の方言に迄及んでゐる。吳門畫舫錄・同續錄は名妓の評傳が中心になつてゐるが、序文發端等は繁昌記の體裁を取つて居るし、續錄の記事編では醉興のことが述べられてゐる。其他の諸作も略ゝ同樣な體裁で、遊里の繁榮の有樣や酒樓の變遷や酒宴の樣や舟遊や料理の事などを專ら述べてゐるのである。海陬冶游錄は大部な作で、三卷に別れ尙附錄を添へて、滬城の妓樓の樣子を詳細に描いてゐる。概括的敍述より漸次細部に移り、院中の風習行事のこと、妓家の食品服裝のこと、青樓の組織品等のこと、劇場のことなどから船妓の上にも及んでゐる。妓女の品評のあることはいふまでもない。

かやうに唐宋時代の北里志・平康記の流は、支那に於ても幾多の摸倣作を出して發展を續けたのであるが、その影響は我國にも及び、享保寶曆頃の漢學者を刺戟し、終に漢文體の遊里小說の發生を促したものと考へられるのである。

三

兩巴巵言（享保十三刊・學鉦先生）・瓢金窟（延享四刊・烏有山人假托作カ）などの本文及び月花餘情（寶暦六刊カ・獻笑閣主人）の江南妓邑記、陽臺遺編（寶暦六刊カ・獻笑閣主人）の題言などを見ると、先づ概括的に遊里を説明し、その繁榮のさまや風景描寫や遊里の組織や妓女の品等姿態等を述べてゐるのであつて、その叙述の樣式・態度・文の調子などに於て、唐宋以來の遊里文學に相通ずるものが見られるのである。蒹葭堂文庫などを背景にしたと想像される上方の作家などは、恐らくこれ等の支那の作品にも接し、自ら刺戟を受けたものであらう。

殊に百花評林（延享四刊・採花亭主人）の如きは燕都妓品や蓮臺仙會品などを直接粉本としたものであらう。燕都妓品は妓女の品評を試みた作ではあるが、その樣式に特色を示してゐる。卽ち妓女の名を先づ掲げ、次に杜甫・王維・王昌齡などの著名な詩句を擧げ、これが評を加へ、最後にその妓女の風貌來歷などを述べるといふ體裁を取つてゐる。一例を示せば、

一名狀元郝筠　字林宗東院人

韋應物詩能使萬家春意閑評云不知秋思在誰家世說王司州在謝公坐詠入不言兮出不辭乘回風兮載雲旗語人云當爾時覺一坐無人執此坐美少年合席奉酒仍合席飲

方德甫云筠大有丰姿豔驚人目新都王伯約娶歸沈郎云奪我燕支山使我婦女無顏色

二名榜眼陳桂　字雅卿本司人

杜甫詩五陵佳氣無時無評云五陵之氣如此　世說荀中郎在京口登北固望海云雖未睹三山便自使人有凌雲意若秦漢之君必當褰裳濡足執此坐有風調者巨觥

方德甫云桂貌瘦身長眉目淸揚而面色稍黑手爪自好其擅一時名當有逸情耳余答云此生定有烈士風余曾爲江郎作傳

蓮臺仙會品は諸姫を花に擬へて品評せる作である。例へば、

　女狀元蔣蘭玉小字雙雙名淑芳行四

　　當杏花

　女榜眼齊愛春小字愛兒名淑芳行五

　　當桃花

此他紫薇花・蓮花・海棠・梅花・芍藥・繡毬・桂花・芙蓉・葵花・菊花・蕙草・芝草などの草木が擬せられてゐる。廣陵女士殿最もやはり牡丹・芍藥・蘭等の諸花に就いて、花史及び殿最の批評を述べたものである。かやうに妓女の品評に際し、之を詩歌に托し、又花に擬するといふ行き方は後の作品にも屢々踏襲され、十洲春語はその様式を學んで一層詳細であり、新しい作では海陬冶遊錄の附錄卷下及び海上群芳譜（莫釐峯顧曲詞人評花・光緒十序）なども同様である。

百花評林も亦同様な行き方をしてゐる。巻頭の言に、

　此篇擧二平康里之諸花一以評二其風度意氣一古人以二美女一比レ花者多故以二百花一命レ題云

とあるが、遊里の妓女を花に擬へて、之を一篇の趣向にしたやうな作は、我が先行作に之を見ることが出來ない。百花評林が若しも何等かの粉本を覓めたとすれば、蓮臺仙會品などは最も適當なものであつた筈である。唯仙會品では妓名を一々列擧してゐるに對して、これは天職を梅に、婐娼（ひきふね）を藤花に、香兒（かぶろ）を瞿麥に、素人（はくじん）を牡丹に比するといふやうに類別的になつて居り、又擬せられた花も、梅花・芙蓉の如く共通なものもあるが、櫻・女郎花・萩のやうに我が趣味に應ずる花卉が選ばれてゐる點に相違が見られる。

花になぞらへた品評は、先づ漢文體で記され、ついで和歌を添へて大意を述べ、次に批評を附してゐる。その批評

は作者探花亭主人のみではなく、種々の人物によつて試みられてゐるのである。かやうな批評の形式は燕都妓品に於て既に見られたことであり、唯漢詩の代りに和歌を以てしてゐるのである。異素六帖はこの系統をふめる作であつて、評語として唐詩選と百人一首とを併立させてゐるのである。

四

支那近世に於ける遊里文學の代表作は板橋雜記であると考へられる。この書の叙述の樣式内容等を見ると、初期洒落本の粉本として、寔に適當なものであつた。兩者の比較をして見よう。

(一) 卷上雅游篇及び軼事篇の發端では、先づ遊里の概括的な說明が見られ、金陵の地の繁榮のさま、宗室王孫の豪華なる風俗、酒宴のはなやかな樣子、遊客の往來、樓舍の有樣などを述べ、秦淮士女表の口吻を藉りて、「慾界之仙都昇平之樂園」として讃美してゐるのである。

金陵爲帝王建都之地公侯戚畹甲第連雲宗室王孫翩翩裘馬以及烏衣子弟湖海賓游靡不挾彈吹簫經過趙李每開筵宴則傳呼樂籍羅綺芬芳行酒糾觴留髠送客酒闌棋罷墮珥遺簪眞慾界之仙都昇平之樂國也舊院人稱曲中前門對武定橋後門在鈔庫街妓家鱗次比屋而居屋宇精潔花木蕭疎迥非塵境（板橋雜記卷上）

かやうに遊里の繁榮を先づ概括的に述べるのは、初期の洒落本でも同樣である。兩巴卮言は吉原の繁榮、往來の客の樣を述べて、

往來之客或乘ニ駕籠一或傾ニ編笠一或被ニ羽織於頭一或翳ニ手拭於顏一有下以ニ丸頭一引レ耳者上有下以ニ便面一當レ鼻者上風流異レ體氣象不レ齊雖ニ公子王孫之貴陶朱猗頓之富一皆徒步獨行間有ニ從者一亦不レ過ニ一兩奴輩一耳

とあるのであつて、嫖客の風體は彼我異なるものはあるが、諸種の人物の廓中に入り、混雜するさまを述べた點で共

通なものが見られる。月花餘情の江南妓邑記及び陽臺遺編の題言の卷頭、閑居放言（明和五刊玩世道人）の北里歌の卷頭など、總て同樣な敍述の樣式を以てしてゐる。

浪速之陽有₌妓邑₋（割註略）妓邑之間人文而不ㇾ野博又玄也財產豐積樓閣宪麗無ㇾ朝無ㇾ夕紅靴窄々聒ㇾ耳曳₌紈綺₋珥₌金翠₋光麗與₌豔逸₋霞蒸雲蔚揚₌映千秋₋（陽臺遺編）

北里（註省略以下同斷）從ㇾ移₌負郭村₋至ㇾ今尙稱新葦原四面隔ㇾ溝崇墉繞柳巷花街列₌娼門₋行人冶容極佳麗左顧右眄連₌香袂₋比屋縱橫如棊交飛甍迢遞似₌邸第₋（閑居放言）

板橋雜記の文を剽竊したといふのではないが、敍述の樣式、行文の調子風格に於て共通し、語句の類似が見られ、曳₌紈綺₋珥₌金翠₋といふやうに、支那風俗がその儘寫されてゐる點などに於て、彼此一脈相通ずるものが感ぜられるのである。

（二）　板橋雜記は第二段として、遊興の實際的描寫に移り、假母・了鬟などが客を出迎へ、酒宴の場に及ぶ樣子を述べてゐる。

到門則銅環半啓珠箔低垂升階則猧兒吠客鸚哥喚茶登堂則假母肅迎分賓抗禮進軒則了鬟畢數捧豔而出坐久則水陸備至絲肉競陳定情則目挑心招綢繆宛轉紈袴少年繡腸才子無不魂迷色陣氣盡雄風矣

これを兩巴巵言に就いて見るに、

乃背₌角町₋西入₌揚屋町₋辻立繁道中盛禿手₌玉章₋而東西僕肩₌葛籠₋而後先茶屋之婆下ㇾ箔揚屋之者捲ㇾ管（中略）切簿之椀薄端之盞吸而飲縮乎飲一盃一盃又一盃與ㇾ婆對酌紙花開簾影閃々紅靴窄々振袖之長也小裙之高也甘哉々々智哉々々頃之新造今之全盛連ㇾ袂反ㇾ裳隨ㇾ遣並ㇾ禿一段勝百媚生彌奇哉之音南北同ㇾ響御坐乎之詞左右注ㇾ目嗚呼夫薄雲之情不ㇾ薄濃紫之色最濃（中略）三夕之約既納千壽

之契不レ容

於レ是大人亦噬ニ立太鼓一引ニ運御沓一起而向ニ揚屋一進而入ニ奥間一上臈來格下嫁近侍拍レ手則全家稱レ諾回レ頭則一座請レ命抔盤頻進燈燭高張（中略）鴛衾之情于以合鱸鱠之味不可忘

板橋雜記では、客が妓家の門口に來り案内を乞ふことから、假母が出で迎へて叮重にもてなし、奥に通ると丫鬟が遊女を作つて座に直り、酒宴をすまして閨房に入るまでのことが描かれてゐる。兩巴巵言のこの一節は日本化されてはゐるが、やはり登樓の顚末を述べたもので、大體同樣な行き方をしてゐるのである。

（三）　板橋雜記には妓家特有の呼稱の解説が見られる。

妓家僕婢稱之曰娘外人呼之曰小娘假母稱之曰娘兒有客稱客曰姐夫客稱假母曰外婆

かやうな説明は初期の洒落本でも、屢〻試みられてゐる。

「買レ妓者曰レ客」「老婆曰ニ遣手一」「客呼レ妓曰レ敵妓呼レ客曰ニ方樣一」「妓自稱曰ニ女﨟一」（史林殘花爨文志）

「其間有レ妓通稱ニ白人一於ニ妓之中一又有ニ新造者年增者皓齒者若諸者一」「從レ妓奴輩曰ニ廻漢一」「酒樓之婢稱ニ中居一」「中居未レ染レ齒者稱ニ小女郎一」（月花餘情）

（四）　板橋雜記では、曲中の風俗、遊女の衣裳や化粧のことなどの説明が見られ、又遊女の品等を分けて上中下三段とし、場末の遊里に迄筆を及し、白人の樣子などをも寫してゐる。更に梳櫳のこと、落籍のこと、假母の強慾のことなども説明してゐる。

南曲衣裳粧束四方取以爲式大約以淡雅樸素爲上不以鮮華綺麗爲工也初破瓜者謂之梳櫳已成人者謂之上頭衣衫皆爲之措辦巧樣新裁出於假母以其餘物自取用之（上卷）

李十爲首沙顧次之鄭頓崔馬又其次也　（同）

珠市在内橋旁曲巷逶迤屋宇湫隘然其中有麗人惜限於地不敢與舊院頡頏以餘所見王月諸姬幷著迷香神雞之勝又何羨紅紅學學之名乎恐遂湮沒無聞使媚骨芳魂與草木同腐　（中卷）

洒落本にも妓女の風俗を描けるは少くない。瓢金窟に例を取れば、

若夫語二其妖態一則皆絶世之尤物婥兮妍兮髮梳二黑縭子亂一嬈鬟露重指二髮際一曲レ鬢乃反鬘扁々鈎鈎二一枝影一搔頭之照也于レ雲而見二天日一花鈿之美也求レ月而耀二夜錦一

遊女の階級に關する説明は洒落本に屢ゝ見られることであつて、瓢金窟・百花評林・月花餘情等いづれも松ノ位・梅ノ位・鹿戀等に就いて品評を下してゐる。百花評林では比丘尼・總嫁等下等の遊女に迄及んでゐるのである。梳櫳・上頭のことも説明されてゐる。

妓年高者曰二年增一妓富二春秋一者曰二新造一（史林殘花藝文志）

妓始薦レ寢曰二水上一輟耕錄所謂上頭之類也　（同）

南枝花始開二上頭一則呼二新郎君一命二雅名一　（瓢金窟）

（五）　板橋雜記には廓の風物描寫並びに地理的な叙述が見られる。

長板橋在院墻外數十步曠遠芊綿水烟凝碧迴光鷲峰西寺夾之中山東花園亙其前秦淮朱雀桁遶其後洵可娛目賞心漱滌塵襟每當夜涼人定風情月朗名士傾城簪花約鬢攜手閒行憑欄徙倚忽遇彼姝笑言宴宴此吹洞簫彼度妙曲萬籟皆寂遊魚出聽洵太平盛事也（上卷）

之を洒落本に就いて見るに、

我登二待乳山一而有下小二天下一之志上飄々乎御レ風縱二一葦之所レ如武藏下總之間有二大河一昔男之墮レ涙也秋水渺々焉接レ雲大虚茫

茫而墮レ地（史林殘花序）

日本隄　國門之外曰ニ之日本隄ー長路漫々水田漠々縮ニ隋帝之隄于此ー乎士農工商貴賤貧富皆出ニ於其路ー傾ニ編笠ー被ニ羽織ー鼻吟ニ小歌ー手拕ニ細杖ー（史林殘花 地理志）

（六）　板橋雜記卷中麗品編は作者の交遊せる妓女の品評を試みたものであり、妓女の列傳に終始してゐる。洒落本では兩巴巵言・瓢金窟・煙華漫筆（寳暦年間 張葛居辰）等に源氏名の說明が見られる。尤もこれは妓名が類聚的に列擧されてゐるに過ぎず、評傳の體をなしてゐない。唯史林殘花（享保十五刊カ 遊戲堂主人カ）の卷末には遊女關井の傳を揭げて稍詳細なるものがある。又板橋雜記には遊里讃美の詩が、隨所に見られるが、洒落本でも、陽臺遺編の江南花樹歌、閑居放言の北里歌の如きはそれである。

五

以上支那の遊里文學と初期の洒落本との比較を試みて、稍冗漫に失した嫌ひがあるが、兩者を熟讀翫味することによつて、その間に不可分の關係のあることを察知し、初期の洒落本が此等の支那文學の示唆に待つ點が少くなかつた點を明かにしたい爲であつた。實際兩者いづれも遊里を對象にせる作品であつて、叙述の態度や描寫の目的が全く一致して居り、筆致文勢に於て往往摸倣の跡を留め、折々類似の語句も用ひられてゐるのである。青樓・樓臺・章臺・陽臺・瑤臺・北里・敎坊・花月・煙花・妓院・柳巷・花街・紅燈綠酒・粹客・紅裙・鴇母・纒頭等の支那の遊里文學にありふれた言葉は、初期の洒落本の中に取込まれ、やがて一般の耳目に熟して行つたのである。

中期以後の洒落本と支那文學の關係に就いては、別に述べるつもりであるが、板橋雜記などが後の洒落本作家にも珍重されたことは、洞房妓談 繁千話（京傳 寛政二刊）などを見てもわかる。この作には支那の俗語が多く使用されて居り、地の文に

も漢文調が折々挿入されてゐる。一例を示すと、

空琴は盛粧艷服光彩動〻人の風俗巧樣新裁皆隨時變易見者謂是時世粧べし

板橋雜記について見ると、

已成人者謂之上頭衣衫皆客爲之措辦巧樣新裁出於假母以其餘特自取用之故假母雖年高亦盛粧艷服光彩動人衫之短長袖之大小隨時變易見者謂是時世粧也　（雅游）

とあつて、之に據つたことが明瞭である。

かやうに洒落本と支那の遊里文學との間に一脈相通ずるものがあるとすれば、漢學に素養のある當時の通人達が板橋雜記などに誘導されて、遊里文學に手を染め、既に沈滯した文壇に一生面を拓き、洒落本の端緒を開くに至つたと考へることは、强ち不當な說でもないやうに思ふのである。

洒落本に現れたる方言の考察

東條操

一

通人、息子、半可通などと共に洒落本に登場する人物に國侍と田舍者がある。國侍は新五左とも武左とも淺黄裏とも嘲けられ、その風體を辰巳の園には「花色小袖に淺葱うらをつけ、洗ひはげたる黄むくの下着、黑紗綾の帶に、郡內縞の袷羽織に甲斐絹の裏をつけ、袖頭巾をひら／＼とかむり、尻をぢん／＼ばしよりにして、生木綿の足袋に藁草履をはき、大小を閂ざしにさして萠黄羅紗の柄袋をかけ」と寫され、所詮、女には緣の拙ない人種で洒落本での役柄はいつも道化役であつた、半可通がきいた風で嫌はれゝば之は野暮つたいので振られる。文選臥坐に現れる藤馬竹右衞門と云ふ男はその典型的なものである、(之は其實、田舍侍でなく、江戶者で女郎や若い衆を一ぱいくはしたのだとなつてゐる、それ丈に、田舍侍を大寫しにしたと見る事が出來よう）まづ、座敷へ通つて女郎が來ると「コリヤァハァ初めにお目にかゝりました」と挨拶し、酒が出れば盃臺を自身で女郎の前に直して「コリヤァハァいたゞくのでえすが、おりよぐわいだむし」と云ふ、やがて「御めんなさろ袴をとりますぞや」と斷つて、その袴をよくのして霧をふき膝の下へ敷かうと云ふ人物である。新五左の廓馴れぬ滑稽は半可通の通がるのとよい對照で洒落本には可笑の材料としてよく使はれた。特に安永年中の洒落本に多い、山手馬鹿人の世說新語茶は勿論宋の世說新語のもぢりではある

が、この新五左を書名としたものである。この新五左が訛澤山の方言を使ふので滑稽の度が愈倍加される。洒落本には新五左を緣として方言が描寫されてゐる。

田舎者は新五左ほどに多くは洒落本に現れない、吉原物には特に少い。甲驛新話や甲驛夜の錦のやうな宿場物などになると田舎客が現れる。その外には田舎の宿場を寫したものに當然、田舎の女郎と客との會話が寫される、輕井茶話道中粹語錄などはそのよい例である。この田舎の洒落本がその鄕土の文人によつて作られる場合には方言の描寫も一入眞にせまるわけである、尾崎久彌氏はかゝる鄕土の作家の手になるものを鄕土本と云つて別に一類を立てた。なほ洒落本の中に數へられながら、遊里の寫生を主としない田舎芝居の如き一類がある、田舎芝居の作者が自序に「洒落本にあらずして野夫本なり」と述べてゐるやうに之は洒落本から滑稽本に轉向せんとした最初の作として注意されてゐるが、滑稽本の前身とも見るべきこの田舎物に方言が澤山使用されてゐる。

この小篇では最初に新五左の方言を檢討し、次に田舎物の方言の性質を明らめたいと思ふ。所謂鄕土本の方言については問題が頗る多岐にわたるためにこの小篇では言及しない事とする。

二

新五左を扱つた洒落本は少くない、之は當時田舎侍が廓内に出入して嘲笑の的となつた事實の反映したものであらう。前揭の世說新語茶（セッシンゴザ）（安永年中）の外に文選臥坐（モンゼンゴザ）（寛政二年）や寸南破良意（スナハライ）（安永四年）などは新五左の爲に一篇中に一章を特立してゐるが眞女意題（シンノイダイ）（天明元年）の如きは陸野奥右衛門と云ふ國侍が一篇の主人公となつてゐる。その外、添景人物として使はれてゐる類は極めて多く辰巳之園（タツミノソノ）（明和七年）の新五左衛門、喜夜來大根（キヨクダイコ）（安永年中）の國侍など枚擧に遑のないほどである。此等の新五左が實際には如何なる言葉を使つたか、その實相は明らかにし難いが以下、洒落本に現れたところを見よう。

南閨雜話（ナンケイザツワ）安永二年に現れる大盡は國元より上つた重役人とあるが、言葉には殆ど田舍訛はない。尤も新五左と云ふ稱呼もこの本には見えてゐない。北遊穴知鳥（アナチドリ）安永六年には石部金太夫、形井武左衞門、苔野新五左衞門の三人の國侍が登場するが何れも折目正しい武家言葉で國訛はない、（この穴知鳥には田舍客も出て來るが之は田舍訛を澤山使つてゐる）驛者（エキシャ）三友（サンユウ）安永八年にも武左衞門と新五左衞門とが現はれるが、作者は「以之外の廣衢で御座る」とか「累年降霜の節はかやうで御座る」とか堅苦しい漢語を態と使はせて居り國訛かと思はれるものは發語の「モノ」と云ふ一語に過ぎない。勿論、一口に國侍と云つても地方によつても違ひ重役と輕輩とでも言葉に相違があつたらうと思はれる。新五左の稱呼はあまり重役を勤める者には云はないらしい。新五左の地方については之を明記したものは極めて少い、あれば仙臺藩かと思はれるものがある。婦美車紫野（フミグルマムラサキガノ）安永三年の野甫田野呂右衞門といふ侍については「物言の鼻にかゝる鹽梅はどのやうな本阿彌に見せても奥諸侯の國詰の武ざ」と書いてあるが、言葉遣は「はゞてな、口はみぢかいこんたァ」「みどんも今日はひばんだァから、ぶんら／＼と出申たがァ」と云ふ程度である。思ふに國侍の言葉はこの位の訛に留まつたものではなからうか、どの藩でも侍の言葉は町人百姓と比べると著しく方言的特色の少かつたものである。然るに世說新語茶に現れる傳五右衞門と云ふ侍の言葉は町人百姓の方言と大差がない、同書について若干の例をあげて見よう。

「姉さん　ちぐと　上るべいかの

「御身さまの御假名はなんといひ申す

「こちらのおむすじやうはあんとだの

「うらが國さあじやァ　がら取違へても　過料のヲ　つん出すものを

「早くおざんねへか　徒然だもさ
「そんだら　つゐでくれなさろ
「そしてあんちう事だ
「あつちらにやアはア　眞木だア事の炭俵だア事のとつて

これらの特色は同じ作者の道中粋語錄中の方言と一致するものが多い、道中粋語錄に現れるのは輕井澤の遊女の苅藻と浮草と田毎の三人と田毎の客の彌五左衞門の方言が主なるものとなつてゐる、この中で苅藻は信州の諏訪在の出と記してあるが、方言に於ては他の三人と違ふ點は無い。

苅「これぞといつて語るべゑ事もおざんねへものさ
浮「それにハア……笑われべへとおもつて口さアきかれねへ
苅「窓たアあんのこんだかおもやア　さまのこんだもし
浮「あによをいふにもでかく違へ申すよ
苅「さぞいやだんべへと思つて遠慮のヲします
浮「わしも飲みましねへ
彌「是さく\　こつちよウ　向きなざろ
田「アゼはア　そんだら追分の松屋サいかつしやりました

この抄出を前の世說新語茶の抄出と對照すると極めて方言的特色に一致點の多い事がわかる、作者山手馬鹿人には兩者を區別して書く意識は無かつたのではないのかと思はれる。たゞ道中粋語錄では「ましねへ」の形があるのに新語

茶には之が見えない、粋語錄の他の例をあげると

浮「どうか知りましねへ
刈「江戸サいつて行衞が知れましねへ
刈「すべへやうも御座りましねへ
田「さつきの文さアあぜ見せさつしやりましねへ
刈「あにも落しやアさつしやりましねへか

となほ、五例を數へる、新語茶に見えないのは稍敬意を含むこの言葉を必要としなかつたためで、その方言にこの形が行はれて居ないと特に意識したのではあるまい。それよりも注意すべき事は助詞の「もさ」と「もし」との相違である。新語茶では僅か一例だが「徒然だもさ」とあるのに、粋語錄では多數の「もし」が見える、數例をあげると

浮「是アはア好だもし……十七八も食へば澤山だもし
浮「お隣は誰だアもし
浮「その摺木がどうしたもし
浮「はてなもし
刈「あんでも甘酒のヲ見るやうな名だつけもし
刈「心がすまねへもし
田「呼にやるべへと思つた所イ來さつたもし

「もさ」は一例もない。之は粋語錄ばかりでなく洒落本では「もし」か「むし」が多く、「もさ」の例は殆どない（眞似

山氣登里(ヤマキドリ)安永九年に「ここで一ぺい呑べい中サ」などと云ふ例があるが、此書でも「よかんべいだ中シ」のやうに「中シ」の方の例が多い）

「もし」の例の見える洒落本の數例をあげるなら眞似山氣登里の外に呼子鳥(ヨブコドリ)安永八年田舍芝居天明七年、田舍談義寛政二年など所謂田舍物に多い。

それに對して純洒落本系のものには「むし」の多い事に氣がつく。例へば明和の辰巳の園の

「いやはやとつぴやうしもねエこんだアむし

「今度も輕井澤で遊んだら峠まで送つてなむし　（新五左衞門）

を初めとし、甲驛夜の錦(カフエキヤノニシキ)享和二年の如き後出のものにも

「新さんハアいくべいむし

「向座敷の客仁が其りくつでゑらもめたアむし　たしかお侍むし　（田舍者八）

特に文選臥座の僞侍は盛に「むし」を連發するので、禿(カムロ)が

「わつちやア　又びつくりしんしたよ　いつそむし／＼とお云ひなんすから、げぢ／＼でも出んしたかと思ひしたョ」

と云つてゐる。世説新語茶の「もさ」は特例と云つてよい、恐らく六方言葉などの影響かと思はれるもので當代に多く行はれた方言とは思はれない。上記の如く洒落本では「むし」又は「もし」が普通であるが潮來婦志(イタコブシ)文政十二には次の如き注意すべき例がある。

男「モウひどり藝者をおよびなされますど猶ようござりますハシ

女「さうしでアノ松(まつ)さまの連の衆ハシ……

前のは茶屋の男、後のは女郎の言葉である。三馬は文化三年に潮來に遊び歸來この洒落本を草した、附言に「風土の方言、……杜撰甚しきを耻て廣く世に布く事を許さず」と記してゐるが、彼は凡例に

言語は大概江戸に異らず五音の調子によりて清音を濁音にいふもの、まゝ多し、

清音を濁音に通用するは「サシスセソ」「カキクケコ」「タチツテト」の三音なり……、

常の「ミ」（ニゴリ）にては通例の濁音にまぎらはしければおの／＼「ミ」かくのごとき白圏を點じて「が」と「が」との二濁を分り

と云ふほどに、よく方言に注意をした男だけに類型的な「むし」又は「もし」を使用しなかつたのであらう。彼の書いたものは他のものに比して資料的價値を高く評價してよい。

山手馬鹿人の「世説新語茶」の國侍や、「道中粹語錄」の田舍者に現れた方言的要素は大體、上に述べた通りであるが、之は同時に多くの洒落本に寫された方言的要素と一致するもので、筆者は之を當時の戲作者の方言常識と考へたい。この方言常識が如何に類型的なものであるかについては後段で述べる。

次に洒落本中で最も方言描寫に意を用ひたと思はれる眞女意題の方言を檢討して見よう。この書は安永十年卽ち天明元年刊の森羅萬象の作で芝神明臺の岡場所を寫した隨分思ひ切つたものである。自序の次に陸野奧右衛門國詞としているは別にして五十六の方言をあげ「此の外に方言多けれども此の書にあづからざる事はもらし侍る」と記してある。作者は元來、江戸者であるが「取つても附かぬ仙臺訛り」と云ふ程にでたらめなものではない。起稿は安永四年物類稱呼出版以後であるが、その影響は見えない。主人公の國侍、陸野奧右衛門の言葉に現れる方言的特色を次にあげて見ると、

「ツンダラ同志にまかるべし」

「ナニハお國の釋迦堂さ見るやうにおかなくさかるぢや
「然らばいし達や知り人いし
「ちつこい箱は何ンでごいす
「小人島のおかはだんべいとおもつた
「おれが錢も遣るべいチヤいくらもし
「寢ろなら寢るべし
「コリァかな山の霜ふりつむぎです
「おいの河原といふ所の煙草でえす
「コリャちくとこちさよりなさい
「どうやら粉藥い見るやうだ
「そだに腹を立てやるな

この抄出を世說新語茶と比べると、かなりの相違のある事が分る。例へば「粉藥い見るやうだ」は一般の洒落本なれば「粉藥のオ」とありさうなところであるが、語尾が「イ」列音の時に「イ」の延音としたのは正しい。本書の他の例をあげると

「お杯い戴くも他生の緣もし
「から飯いモウ四五杯しめづけて
「おやしきイよつぽらありく事もし

「いしも心なしイ語りやれ

本書に見える「です」と「でえす」については、外に「です」の例は少いが「でえす」は數例ある、例へば

「風が吹いて來ると空中へ上るでえす

「お役目や足輕でえす

「でえす」が仙臺言葉にあつたかと思はれる事は方言達用抄に「なんでいす」と云ふ類例があり、之は恐らく「なんでえす」と發音されたかと思はれる。洒落本で「です」の方言を採入れたのは外に喜夜來大根に一例がある。

「大せえもんです

「ごいす」は今日にも殘つて居り、本書には

「南鐐一片高うごいす

など、なほ二三の例がある。

助詞の「もし」については「いし」の混用が注意される。尤もこの兩者の間に使用上の區別はないらしい。

「輕い事もし

「やつこい事いし

大里源右衛門の序のある仙臺方言に「サテナムシ」「サテナモシ」「サテナイシ」の例が並べてあるのを見れば「いし」が仙臺方言にあつた事は推測される。

「べい」についても「べいチヤ」「べし」の用例の見えることは、他の洒落本にあまり見ぬところである。眞女意題の仙臺言葉は上記の如く洒落本の方言としては異色のあるもので仙臺方言の資料として價値のあるものである。國詞

としてあげた單語も特色のあるものである。中に「主」を「いし」とし「江戸にてぬし、きさまなど云ふに同じ」とある、之も「にし」「にしら」と混じて使はれたもの、と思はれるが、仙臺方言の文献の上にはまだ所見がない、事實、仙臺言葉とすれば面白い資料である。「いきび」については濱荻に「尻の事、鄙人の詞」とある。與右衛門は足輕にしても果してこんな詞を使つたらうか。「提灯」を「ひぶくろ」と云ふ事は笑話などにも見える言葉であり、本文中に「物の名も所によりてかはるなり、お江戸のちよぢん國のひぶくろ」とあるが果してこんな方言が行はれて居たらうか。二三の研究を要すべきものはあるが國詞の大部分は仙臺言葉として信じてよいやうである

田舎者が遊客として登場する場合には前にも述べた通り、場所を新宿などにとつた穴知鳥や甲驛夜の錦の類と、場所を輕井澤や潮來の如き田舎にとつた道中粹語錄や潮來婦誌の類とある、此等の田舎客の方言は、殆ど新五左の方言と大差がない。一般に洒落本の方言は極めて類型的なもので現實の方言とは距離のある事を否めない。此等の中で眞女意題と潮來婦誌とは異色のあるもので方言資料としての價値のあるものである。潮來婦誌の方言については他の論文に譲つて省く。

三

田舎物の方言描寫もその多くは類型的で殆ど章を改める必要は無いと云つてよい、ここに田舎物と云ふのは遊里關係以外の洒落本で田舎者を中心人物とするものであり後の滑稽本の前身となつたものを云ふ。かゝる田舎物では天明七年板の田舎芝居は有名であるが尾崎久彌氏の紹介された呼子鳥（安永八年）、當世眞似山氣登里（安永九年）などは田舎者を扱つた早期のもので兩者共に田舎者の江戸見物と云ふ趣向である。

呼子鳥には馬方と老婆との會話が寫される。

馬「もうなんどきだんべいかしらんまで
馬「あんでもよくしたもんだハイ
馬「ぢよせいなことはござりましねェ
婆「そんならつれてあよんでくれなさろ
婆「そうだんべい、にしやア　びやうど江戸へいぐから、あんでもちつてゐるだらア

眞似山氣登里には近在の田舍者で與茂作と八五良と云ふ二人が現れる。

與「けふもハア四つ半で有べいか
八「コリアハア　上野だ申シ　でつかちねへ仁王門があり申タ
與「一年ニヤア四五度江戸さ出申ス
與「ヱ、かげんに人もなぶんなさろ
與「其橋の名はあんといひ申スヨ

かゝる近在の田舍者の江戸見物を寫した洒落本から、やがて馬喰町の旅人宿に集る遠國者を扱つた滑稽本の舊觀帖（キウクワンテフ）（文化二年）や下愚方言鄙通辭（イナカツウジ）（文化七年）などの方言描寫に發展するのである。

萬象亭の田舍芝居は舞臺を越後國大沼郡妻有郷南鐙坂村――この地名は實在のものかどうか分らぬが妻有郷は中魚沼郡の舊名である――にとり、ここで興行される田舍芝居の可笑味に村郎野嬢の鄙びた戀などを織込んだものである、作者萬象亭は眞女意題と同じ作者であるが、この越後方言は果して正しい越後言葉かどうか、次に之を檢討しよう。

これには眞女意題のやうに卷頭に方言を集めて豫めその解釋を示すやうな手段はとらなかつたが、本文中に割註を

した若干の言葉がある。

醬油樽(せうよたる)	すぐれてよき女方をいふ	三ン年垂(だれ)	醬油の事
おかた	女房の事	ふちぬき	大仕懸の事
土(つち)しやじき	切落の事	いつせへ	いんにやといふきみの事
こびり	中入の事	ゑいわさ	わざ〳〵といふ事
ほたく	あばれる事	ふつたおれ餅	あべかわもちの事
あくと	かかとの事	よつぱら	したゝかといふ事
母衣着(ほろぎ)	うちかけの事	むくれる	やつす事
ねまつた	居る事	甘鹽(あまじほ)	前髮(若者)の事

此等の語彙の中で芝居關係のものはその正否は分らないが、「よつぱら」「ねまる」の如きは有名な越後方言で、「おかた」「こびり」「ゑいわさ」「あくと」は更に分布が廣く諸所にある方言である。「いつせへ」については越佐方言集に「魚沼郡山間ニテハいつつやゑトイフ冠辭ヲ用ヰル所アリ」とあるのと關係があるかも知れない。但し作者が此等の言葉をどこから得たのかわからない、例の物類稱呼とは關係がないやうである。

なほ、「ゆ」を「よ」に訛るもの、しうよたろ（醬油樽）わかいしよ（若衆）よろす（許す）よりのはな（百合の花）などは信越の特殊な訛として注意すべきものである。

然るにその語法形式になると關東式の類型的方言によつたもので越後方言の俤はない。例へば

「刻昆布のうこしらへて

「あにはア　さうでもねへ
「土しやじきが　百づつもし
「顋さに頬さに生へた髭
「三百に負けなさろ

大體、田舍芝居の方言は關東方言の云ひ方に若干の越後の單語を交へて書いたものと見て大過がなく、或人々の云ふやうな正しい越後言葉ではない。

田舍芝居の亞流には三馬の書いた狂言田舍操（文化八年）があるが之は洒落本でないから、ここに省く事とするが下總と思はれる或田舍の人形芝居を書いたもので方言描寫はかなりに出來てゐる。一九の風流田舍草紙（文化元年）も同樣のものである。萬象亭の田舍芝居の影響で作られたと思はれる洒落本には竹塚東子の田舍談義（寛政二年）がある。武州千住在の金田村を舞臺とし、その法福寺で行はれる談義と村の男女の戀の可笑味とを取合せた趣向は、芝居と法談の相違があるだけで田舍芝居によく似たものである。

この田舍談義の方言を例によつて抄出して見よう。

「げへにはやく出かけたアな、待ちさへ、一所にいくばへはナ
「ばんげ　いぎますべへ
「あんで　ふけましたア、
「何サ、ものよ　おん女郎でふけたア
「此頃はあへましねへ

「あぜハアそんなに遲くござる
「用水堀へとびこんで、あにかア、洗濯のうしもうして
「そんだらい丶
「ありたへに白狀しめさろ
「終にあの世へうつばしる事むげちねへ事どもなり
「ずいぶん念佛を申なさろ
「いしやア　あんと思ふ
「でかふ高慢サアいふともし

以上の抄出の中で最後の例にある助詞の「もし」は醫者の逃留賀德庵の言葉にだけ現れるもので、この德庵は「したちものと見へてものいひ鼻へかゝり」と割書してあるので、常陸方言と見るべきである。

「一所にいくばへ」は勿論「一緒にいくべえ」であるが、この地方にはこんな訛があつた、「ありてい」を「ありたへ」と云ふのも同樣である。之は「アイ」を「エー」に訛る多くの例の中に混じて行はれてゐる。

また、この田舍談義には方向を示す助詞の「さ」の用例が無い、「背戸さあの灰小屋で」と云ふ例があるが、之は方向を示すものではないと思ふ、「文さあくださつたが」と云ふ例の「さあ」と同じものであらう。

此等のものを除けば、既に述べて來た他書の方言例とあまり相違のない事が分る、然らば本書の方言も所謂、類型的方言常識を基礎として書いたものであらうか。ここで問題となるのは作者の鄉里である。田舍談義の作者、竹塚翁東子は名の示す如く千住在の竹塚の農夫で俳諧を物類稱呼の著者なる越谷吾山に學んだ人である。從つて篇中の千住

在の方言は平生使用する土語であつたと思はれる。洒落本の方言の常識とも云ふべき「もし」の用例がなく、一方「べい」の特殊な訛などを採り入れたのは全くその方言の實際によつたものと思はれる。然らば田舍談義全篇にあらはれた方言は悉くが忠實なる土語の描寫かと云ふとこれはなほ精密な調査をしなければ斷言の出來ない事である。篇中に現れた單語についてはまづ正確と云つてよい、「げへに」(大層)「ふける」(逃げる)「あぜ」(何故)「むげちねへ」(可愛相な)「いし」(汝)等抄出した句中に偶然現れてゐる單語の如きも今日なほ行はれてゐるものである。「ものよ」と云ふ言葉は今日殘つてゐるかどうか判然しないが、當時かゝる言葉のあつたらう事は馬琴の燕石雜志卷四に「武藏下總の田舍兒、事を明白にいひがたきとき物といふ」とあるのを傍證とする事が出來よう。助動詞の類で「べへ」「ましねへ」「さへ」などは現在も行はれて居るが「白狀しめさろ」の如きものはどうであらうか。この「めさろ」の形に似た「申しなさろ」の如き命令形にも疑がある。助詞についてみると間投助詞には「あぜハア」の「ハア」や、「文さあ」の「サア」などがある、「ハア」は現在にも行はれてゐるが、「サア」はあまり多く使はれてはゐない、然るに江戸時代には「サア」は夥しく使はれてゐる、安永九年初演の焉馬等の作つた碁太平記白石噺などの奧州訛について見ても

「ヲヽわしら國サア奧州、だゞアやガァまに別れて一人江戸サア はあらく盛る所だアと聞き其上姉サア吉原で名の高い女郎サアに成つてゐさるとの咄 …… ……」

のやうに多く使つてゐる。當時果してこんなに多く「サア」を使つたものか、今日の用法から見ると一概に信じ難い。尤も方向を示す「サ」は現在でも東北から關東の東北部にかけて行はれ、千葉縣と東京府との境が略、その西境であるが、この「サ」は前にも述べた通り本書には現れてゐない。

更に疑はしい助詞は「洗濯のうしもうして」などの「のう」で之も極めて多く現れるものであるが、現在では「新

聞を」を「新聞ノウ」と云ふやうに撥音の下では用ひる地方はあるが、此等の洒落本や滑稽本に使はれてゐるやうな自由な使用法があつたかどうか十分精査を要することである、姑く疑を存したい。從つて田舍談義の方言も悉く土語のままであつたとは思はれないやうだ。

四

これを要するに洒落本に現れた方言は、既に述べ來つた通り江戸近在か、又は關東、東北の地方の言葉であるが、描寫されたものから見れば近在も奥州も使用された方言の上に大なる區別はなく、僅かに單語に幾分の特色を見せる程度で極めて類型的なものである。從つて二三本を除いては正確な方言資料とは認められない。ところで、この洒落本の方言の基礎となつたものは、關東地方の方言であるらしいが、今日の方言から見ると不審な形式も若干あつて今後の精査が必要である。

洒落本の方言を考へるためには更に前代の方言に關係ある六方詞や雜兵物語の如き先蹤文學を比較する必要がある。六方詞はモサ詞と云はれるほどに「もさ」を多く使用してあるがこの「もさ」は古く仙臺邊には行はれた證據もあり、常陸下總邊までも分布して居たかとも思はれるのに安永天明期には殆ど消滅してゐたらしい、この一例を見るも、この兩者の異同の比較は興味がある。

他方、洒落本の方言の發展を見るためには滑稽本に於ける方言描寫をも點檢すべきであらう。洒落本に於ける類型的敍述は後の滑稽本に於て漸く分化を見せ、そこに寫された方言も全國各地方に及び最も極端な例としては鄙通辭の如きものを擧げることが出來る。洒落本の方言は江戸方言文學に於て六方詞を承けて滑稽本の方言を開き別に笑話などの方言とも關係の密接なるものがある。

秋山紀行と一九

山岸德平

一、秋山と秋山紀行の種類

秋山とは、信濃の下高井郡と、越後の中魚沼郡とに亙つて點在する部落の名稱である。今日では、交通も多少開けて居るが、江戸時代若しくは、其の以前に於ては、全く人跡未到の山奧であつた。されば、越後人の間に「秋山の兒き」と言へば、常識の無い魯鈍無識を示す代名詞に使用せられて居た。紀行にある秋山は、その越後と信濃との兩秋山を含んで取扱はれて居る。

この秋山紀行には、異なる三種類の本文が傳承せられて居る。其の一は、十返舍一九の筆になつたものである。一九が、文政三年（二四八〇）初秋七月、卽ち五十六歳の秋、上州は草津の溫泉に來たのを利用し、秋山を通り、越後中魚沼郡の見玉不動尊に參詣した時の紀行である。

其の二と三とは、鈴木牧之の筆に成るもので、純粹の紀行と、その紀行を素材として戲作したものとである。純粹の紀行は、牧之が五十八歳の文政十年（二四八七）九月、秋山を實地に見聞し、越えて天保二年（二四九一）六十二歳の秋七月に完成したものである。戲作なる秋山紀行も、その稿本は、今日、越後の南魚沼郡、鹽澤町なる鈴木家に存在する由であるが、未だ一覽の機を得なかつた。故に今詳しく述べられない。但し、一九及び、牧之の純粹の紀行――秋

山紀行を見れば、戯作の方の内容をも略ゞ推測する事が出來ると思ふ。

以上三種の秋山紀行中、今回述べようとするのは、一九の作品に就いてゞあるが、序を以て牧之の作品、卽ち牧之の純粹の秋山紀行の外觀をも略述して置かう。

牧之は、文政十年（二四八七）九月、同じ町の桶屋なる圓藏と言ふ者が、秋山方面へ出向く事を聞いて同道したのである。この同道は、かねて、秋山鄕の邊鄙な趣を記述し、出版して見ようと一九に約束した事もあつたのが、機因をなして居た。桶屋と同道し、且つ桶屋の案内で、見玉不動に參詣し、秋山鄕に入つて、平家の落人の事や、方言や生活や風俗・習慣等を具さに調査して歸鄕し、翌年、大體を記錄し終つて稿本が出來上つた。更に同年九月から十一月に亘つて、狂詩や川柳や狂歌や繪を挿入して推敲し、天保二年（二四九一）に完成して、全く刊行の準備が出來上つた。然るに、一九は、其の翌八月七日に歿した爲、遂に刊行を見ず、空しく牧之の篋底に埋つたまゝ、久しく知る人が無かつた。幸、越後、長岡市に越佐叢書刊行會が組織せられ、昭和七年十月、その越佐叢書第五卷に收錄せられ、始めて一部の人々の眼に觸れる機を得るに至つた。其の跋文にも見えるが如く、この紀行は一九の慫慂に負ふ由を記して居る。一九の秋山紀行は、八年前の文政三年であるから、牧之は一九の紀行をも參照して創作したらしい處が多い。方言などに對して向けた注意や、獵師が獸を狩り取る方法なども、實は一九の紀行から暗示せられ、特に聞き出して記したものであらうかと思ふ。されば、狂詩・川柳・狂歌等を加へて修飾し、又讀者の興味を增大しようと意圖して居るが、何となくわざとらしく、却つて一九の直接艱苦を甞した記述——たとひ素朴であり筋書の如きものであつても、それの讀者に迫る實感は、餘程强大の樣に思はれる。

次ぎに、一九の秋山紀行に就いて、先づ其の創作動機を伺つて見よう。

一九の秋山紀行二卷の創作は、一九が草津溫泉に約三週間滯在中、眼病を煩つて困じ、越後の見玉不動尊に願掛けをし參詣して、其の平癒を祈らうとした事に動機を發した。文政三年（二四八〇）七月上旬、一九は草津へ行き、黑岩鷺白の宿に逗留した。偶々、親友鈴木牧之の同姓なる鈴木牧山と同宿し、徒然の餘り浴客に書讃などを書いてやつて居た。一九は、彼自身もこの紀行中に述べて居る樣に

性質、上せ性にて忽ち目に障る。江戶にても晝夜、机上の著述に魂を傾くる時は、一とせの中に兩三度づゝ必ず目を損じ惱む。

と言ふ狀態であつた。此度も、「雙眼頻りに痛み、人々の賴みの書讃も心にまかせず、漸く短冊などは手覺えに盲書きに、それさへ、人の求めを破らじと、數枚の內一二葉にて詫びいたし云云」と言ふ程度になつた。牧山がそれに同情して、見玉不動の靈驗を語り、信濃の善光寺街道、若しくは三國峠を越え、一旦は牧山の鄕里鹽澤町に歸つて、改めて見玉詣をしようと進めた。一九は承諾して、卽日、向う三ケ年間、鳥類を斷ち、且つ速かに參詣する事に決心した。氣のせいか、翌日は眼痛も減じた故、一層信心を發して信濃路から、成るべく近道を通過しようと研究した。秋山紀行は、此の如くして記述せられる事となつた。

さて、見玉參詣の行路も、一九と牧山だけの近道研究では、結局、三國峠を越す事になるのであつたかと考へられる。然るに、秋山へ、山道から拔け出る事に決したのは、次ぎの理由からであつた。

卽ち、岩魚や、猪・兎等の肉の一鹽漬を商ふ不敵の大男が、一九の宿へ偶然商賣に來た。この男は、嘗つて一九が、鹽澤の鈴木牧之の所へ行つた時にも見た者であつた。鄕左衞門と呼ぶ。其の話によると、獵師だけが通ふ道――道と稱すべきものでは無いが、木の根や岩の上を越えて行くと、僅に十三里で秋山の入口に出る。途中は、自分達獵師の小屋に一宿すればよい。三國峠や善光寺街道へ出て、四十里も步く必要は無いと敎へた。のみならず、この山男の鄕

左衞門は、剛毅朴訥の親切者で、かう云つて一九を促した。即ち

我等が間道は、わなに蔓よりも猶近し。思召しあらば、拙者も兩三日商ひ仕り、逗留の上御案内申さん。先生樣眼病全からずば、先途の難所は、魚箱の上に道中蒲團敷き、負ひ申すべし。……秋山を出る迄の山川の勝景、奇石、怪岩、恰も屛風を開くが如し。

と細やかに語つた。一九は獵師の朴訥な言に動かされ、牧山と各々從僕一人宛を伴ひ、郷左衞門の案内で、七月廿七日、草津を出發して見玉へ向つた。これが即ち、秋山紀行となつたのである。

秋山紀行の名稱も、一九が最初からの考であつた。されば、越後秋山を通る時の記事にも「わづか柴橋の恐ろしきを渡るも、秋山紀行の種なりと、日本大小の神祇を祈り奉り、此處牧山先陣と言ひながら……藤繩に縋りつき……」など記して居る。

以上によつて、一九の秋山紀行の創作動機等は、略〻明瞭であらう。尙ほ、一九の癖として、草津を出はづれて後、山間の樵夫の家で奇談などを採取した。上州と信州の境なる入山村邊でも「今兩三軒も立寄らば、猶、靈語・奇談もあらんなれども、狩人が小屋に泊りの遲からんと、山路辿り〳〵行きながら」郷左衞門の話に注意して步いた。牧山は、それを一々筆記した樣である。この入山村の風習に對して、

……世に珍しき邊境と、郷左衞門が話を、道すがら牧山は書留め侍りぬ。

と記して居る。恐らく、一九は眼を病んで居たから、極めて大體を記し、更に詳しい事をば、牧山が一々書いたらしい。又、秋山に傳はる平家の系圖を見る決心をした時にも

「……狩人郷左衞門が假りそめの話や、牧山にそゝのかされ、人も通はぬ草津よりの間道、千辛萬苦して今此處迄來り、故郷

に歸りて一著述せんも本意なし。いざさらば、福原平内が家に傳はる系圖でも見ねば、作者の花實にならず」と牧山に申すにぞ、「先生が申す所、予も見たし……」

と記して居る。

けれども、一九のものは、一九牧山と角書した秋山紀行のみで、特に故郷江戸に歸つてから著述したと思はれるものはない。牧山に就いても同樣、牧山自身の著述した秋山紀行も亦傳來しないのである。

越後に、一九の秋山紀行は、他に傳本を餘り聞かないが、鹽澤町なる鈴木家に傳來して居り、好事家には轉寫せられて居た。それらの理由で、吾々、越後人の間には多少知られて居ぬ事も無かつた。聞く所によれば、先年大阪方面の書肆が、鹽澤の鈴木家の藏書を買つた由であり、その中に秋山紀行は二三部存在したらしい。勿論一九のものも牧之のものも存在したであらうと思ふ。

今、一九の秋山紀行を通して、一九の遭遇した危難、信越國境地方の深山に存する方言、口碑傳說・生活・風俗・習慣等の片鱗を揭げて、方言研究や、民俗學や、交通史や山間部落の生活等を述べて見よう。

二、秋山の方言と食と住

一九が鄕左衞門から聞いた方言に、次ぎの樣なものもある。

一、圍爐裏を地爐と申す。

是は文字に叶ひ候哉。地爐と書候間、甚尤に候へども、ちろと申ては何となく可笑聞え候間書出候。

（今昔物語などに地火爐（チヒロ）とあると同じものであらうか。

一、用心の事。

我が目上の人に申すには、「御かうじやう」と申し、目下へは「ようじやうめされ」と申す。

一、わらはべを叱るには、「此うづめ」と申す。

〇「このう、づめ」は「此の、づめ」の延びたもので「づめ」は「野郎」と言ふ樣な意味を持ち、男に限られて居る樣である。女には「このあま」といふ。越後の大部分は「づべ」と、現在でも使用して居る。「ずはへ」などから來たものであらうか。

一、居る事を、ねまると申す。

此のねまる言葉は、鹽澤邊にても長岡邊などでも申す由、荊妻申候也。

〇これは越後には現在も一般に用ひられて居る。立つて居る事に對して「ねまる」と言ふ。卽ち、座しても、あぐら掻いても、兎に角、尻を座に下して居る事である。奧の細道にも、見えるのは周知の事であらう。

一、山の峯をてつきと申す。

あの山の「てつき」、「この山のてつき」などゝ。

〇頂上を、「てつぺん」又は「てへん」と言ひ、根もとを「ねき」又は「ねつき」など言ふのは他の地方にも用ひられる、「ねつき」に對して「てつき」は類推でもあらうか。蒲原郡などには「てつこ」と言つてゐる。「あの山のてつこう」など言ふ。飯を山盛りにする事を「てつこう盛」ともいふ。

一、こわい事を、「おつかねい」と申し又「いぶせい」とも申す。

次ぎに、談話をあげて見よう。草津を出て、入山村の或る谷あひの家に立ち寄つた時、其の家の主人が、鄕左衞門にこなしやう（衆）は、草津歸りか。でい、（座敷の次ぎの間、茶の間に相當する出居である。）で休まりや。腹がすいたりや。ごこう（御飯）は無い。ぼち（餅）でも食はぬか。

と言ひ

こゝより秋山迄は、やかましい（怪しい）、道も無い處が、でいぶ（大分）ある。又は谷川のあたりは、いぶせい（大變な）川や淵が、でいたく（澤山）あるから、御ようじやう（御用心）召され。

と注意した。その後秋山に辿り着いて黄昏近く、或る家へ寄つて宿を乞うた。其の時、主人と見える五十餘の男が

「能うち（來）んなつた。休んといかず」と言ひ、又

うらが家なんず始め、この村五六軒ながら、みんな栃や稗ばかり食うて、おみ樣方にしつせる（進ぜる）物が無い。夜に入ると、ち（着）せるものも持たない。よしにしてくんなされ。

と斷つた。其の他、茶碗に蕎麥を盛つて出しながら「いしごき（石御器。茶碗のこと）が、きつたなく、膳の緣も缺けて恥づかしう御座る」と言つた。又或る所に休息して俳諧だとて短冊を謝禮に置いた時、三十歳位の男が「こらア、なんだ」と言ひ、逆さまに見ながら

ねつから、うら（己）、こんなものは、かいもく（颯ぱり）讀めねい。讀んでくりやれ……。これは公家殿の歌だか、灰買は里からち（來）て、あち山（秋山）の灰は木勝ちに、米の糠など交ぜて焚かねから、上ものだと買ひにくれども、こつがい（此樣）の、ぴつぱ（立派）な紙は持たないから、灰買は一度も書いてくれない。

と言ふ。又、疱瘡を病んで山中の小屋に送られた女に逢つた時、女が次ぎの如く語つて居る。

うら（己）あとの月、ぶうとう（古着の類）買ひに、いも（疱瘡）ある里とも知らないで行つたら、其の村に子供が幾等かあすん（遊）で居たを、おつたまげてぶうとうも買はず、逃げてち（來）た所、三日目の晩から體が熱になつたりや。又、二三日目には、所々まつかの星が出たと、やうち（家內）が俄にさわち（ぎ）立て、いやおう言はせず、家の外の粟畑の中へおつ（追）こく

られ、あとは鹽垢離して、家のめぐらに注連張るが大昔からの村の法だから、よん所無く、うらが身の因果とあち(き)らめ申した所、又村の法で、里から法印樣どのを頼んでち(來)て、この小屋も掛させ、食ひもんも、ひたり(二人)前、この叺に入れ置き、きんな(昨日)から……　このみ山おろしの障りだやら、何處もかも難儀になつたりや。法印樣どんも、切なく思うて吳れたやら、此谷底の川へ、うらをびちやつて(捨てゝ)干垢離とやらを、今取りにいかずた。其の上、里から、うら(己)藥も持つてち(來)た。藥罐の藥が今喉が、ひた(乾)ども飮む力がない。又、この病に取つつかれると、十人が九人は死ぬよい(故)、覺悟はちめて、黑駒太子を信心いたし申す。………たつたふとつ(一つ)の心がゝりは、川向へ(向ひ)のあち(秋)山に、申しかはしためごい(可愛)男あり。うらが死んだら、又外の女に添はん事の、切なうて〳〵。其の男さへ此の病が移るかと恐れて、一度もち(來)て吳れない。もう、さても、十九の厄年は、のつぴきがないと法印樣どんも申された。………どうやらさべつて(話して)も、胸元が樂になつてち(來)た。

と語つて居る。「き」を「ち」と多くの場合に發音する事は、上田萬年博士の說の如く、形容詞活用の語尾の「き」の發生に暗示を與へる事は無からうか。其の他は、越後方面の田舍の言葉と大差が無い。「川向へ」の如きも、い・えの音の區別のない越後の田舍言葉としては當然である。

次ぎに、食物を瞥見すると、次ぎの如くである。

獸の類には、鹿(カノフと言ふ)・羚羊(クラシシと言ふ)猪・兎・猿の生肉、又は鹽漬があり、魚類には、岩魚と鱒などがある。其の外の食物としては、粟・稗・蕎麥・山の芋・里芋・茄子・蕪・大根・栃の實、茬・舞茸などあるが、麥は全く作らない。最初宿つた秋山の或家では、夕飯に粟飯を出し、話の序に「あち山(秋山)十二ケ村に、麥は一本も作り申さぬ」と言つた。全くこの邊の農業は、原始的なもので、「畑」の字が暗示する樣に火田民そのまゝである。大樹の森々

たる廣い所を見立て、樹木の皮の所々を剝ぎ、又は根に斧を入れて傷を附け、立ち枯れにし、その翌年の四五月頃、雜木は伐り倒し、一二ヶ月後枯れ乾いた頃、炎天を利用して風上から火をつけると、去年伐り倒した大樹の枝まで炎が燃え上り、枯木は全部燃えつくして灰となる。それを肥料として、第一年は蕎麥か稗を蒔き、第二年は荏草を、第三年は粟と、交互に耕作して十年位繼續する。かくて土地が瘦せて稔らなくなると、其の儘に放置する。其處へ茅が芒々と生える。それを十年又は十五年後に再び火をかけ、灰を肥料として耕作する。全く原始的な農業である。一九はそれに對して「近國廣しと言ふとも、此の秋山のみと思ひ侍りぬ」と珍しがつて居る。栃の實や、楢がまの實は、粉にして飯代りに用ひる。これは白い飯になる。栃餅は又別に良い栃の實を搗いて餅にするが、これは多く産しない故に、それを食べるのは、正月の三ヶ日、又は春秋の節句に用ひる。稗飯や、稗に粟も交ぜたり、粟飯も稀には食べるが、朝は主として稗飯を燒いて食べ、晝は蕪を根葉もろ共に大きざみにして煮る。四五人の家族ならば、稗の粉一二合を、その煮えた時に入れて雜炊にする。夕飯は、栃の飯に稗や粟をも少し交ぜて食べる。尙ほ、秋山の或家の人の話によると、

近年奢りになつたから、難澁の者は稗ばかり食ひ申す。味噌も近年は拵へる。大豆も作るから、里の樣に麴は入れず、鹽ばかりにてもうまい。

など語つて居る。又、極めて贅澤なものとして、粉豆腐がある。これは、生大豆を石臼に挽いて、こねかためたものである。一九は始めてこれを見て「……小判なりの鼠色の堅きものあり。味はふに甚だ堅く、……汁椀に、若しや稗餅でもあるやらんと問ふに、秋山にて製したる粉豆腐と言ふ。……是は食ひかねて椀の内に殘す……」と記して居る。

これらの村々には、壁のある家が一軒も無い。土臺の石も無い。皆茅葺きで、壁の代りに茅を搔き附けて置く。戸

は木の皮に細い横孔をあけて、綴つたものを結びつけてある。家の中央には大きな圍爐裏があつて、大木を燃やして居る。据風呂も、釜のない小さな桶に湯を入れるに過ぎない。据風呂を「トツフリ」と呼ぶ。寢る時には、爐邊に横たはり、又は大きな叺の中にはいる。寒くても、炬燵は用ひない。皆焚火ばかりである。

以上は、秋山鄕の住民の方言と生活の大體である。

三、秋山の風習と口碑

秋山の家々には、注連繩が張つてある。これは、疱瘡の神を寄せつけない爲である。若し疱瘡にかゝつた者が出來ると、山奥へ小屋を作つて送り、里から山伏を賴んで來て看病させる。一九は、その實例に遭遇したのである。

又、緣組は昔から、此の秋山十二ケ村中に於てこれをなし、決して里の者に吳れも貰ひもしない。偶々、里の者に嫁す樣な者があれば、親子の緣は切る事になつて居る。或は人が死ぬと、黑駒太子の掛物を、身上相應に、二十文なり五十文なり出して山田家から借り、死人の上を三回廻す。それが引導である。黑駒太子とは、聖德太子が黑駒に乘つて上天する圖だ。一九は

畫像は、竪表具にて六七百年も星霜經る事故して、甚だ黑く、漸くわかるは、太子、黑の駒に乘り傘さして天上する繪にて、下には公家の、冠かぶりて笏を持ちて、三人ながら太子の天上するを見る體なり。………表具は、金襴と見え所々に金の光に、………。

と記して居る。現存するならば重要美術にでもなりさうな物らしい。

次ぎに、秋山十二ケ村の根本たる家は、大秋山村に代々、條左衞門と名乘り、條左衞門の武勇談が傳へられて居る。年代の觀念も無い村人には、何時であつたかは、明かでないけれども、その武勇傳ははからである。

條左衞門は、百人力の豪の者で、山澤の大樹や畑中の大石を獨力を以て片づける。その家に、代々狐麿とも、蝘蜓麿（トカチマル。即ちトカギでトカゲをいふ。）とも言ふ。この家は舊家で、家の前には、石垣が高く積んである。蝘蜓(トカチ)が、其處に住んで子を生み、後には勝手口から家の中に迄入り込み、この刀の鞘に障ると見る間に死んだ。これは刀の靈驗だと、刀を試に門口へ持ち出し、蝘蜓の遊んで居る石垣の上を拔身で振り廻した。すると見る間に皆死んだ。故に蝘蜓丸（トカチマル――秋山人の言葉）と呼ぶ。條左衞門の武勇傳としては、次ぎの様な話をしてくれた。

中津川の東べたは、見なさつた通りの大岩ばかり大分あつて、洞あななずあり。其の穴から一丈餘りの山女、ぶらとう髮(亂した髮)は、膝のあたり迄さがり、耳の處まで口をわんとあち(き)、まなく玉(眼球)はいしごき(茶碗)のやうな化物、一度見ると遲いの早いの、ふとが(人が)死んだと言ふ。其のとち(時)、條左衞門は、うら(己)家に先祖より相傳の刀あり。うら力、百人にすち(過)たり。此の化物を、おつこくり(退治して)、刀の德を現し、又うらいひそい(大勇)を子まごに遺さんと、彼の一腰、つつさいて、其の處にいかずに……大ぢ(木)原を過ぎ、西べたの大石にみ座(平座)して洞あなを窺ふに、鬼神のゐたと見え、其のぐるり、大ち(木)大石だらけだとも。洞の前は、ちいとの大石の、下は水、藍色にして渡りかねたが、ちいと川上は淺瀨にて西べたより……大ち(木)東べたへ渡り、洞の口もとへいかず。窺ふに、穴より生臭き風が出通し吹き出し、中は眞暗闇故、松明なルりや(なけりや)這入りもならず。並々のふと(人)ならば、山女がぢち(き)に出べいに、條左衞門は、さつざ(暫く)待つても出ないから、石をほうり込んだりや、山女は大に腹立つて、只一摑みにと飛んで出るより早く、とかち丸を以て眞二つに斬るをめ(見)れば、ふと(人)には山女とめ(見)え、退治する所、何百年も經たる年よりの大狢にて、其の毛、みんな鐵の針のやうに、したつぱら薄白く、鎗・鐵砲も受けぬ程の厚皮なれども、むち(き)取り、此の刀

の驗にていくさもせず、二つに斬る事、此の村はじめ、九十代に長生ち(き)の者澤山だから、語り傳へに昔から申す。此の條左衛門も、身上がいがないで(衰へて)、子孫落ちぶれ、ちいと有る寶もんは、其の刀も皮もあち(き)んどが手へ安く買ひうけたと言ふ。卯の凶年、家もち(分家)、共に八軒ながら、みんな絶え果て涙が出申す。

これに關して、一九は、條は城であり、越後の鳥坂山の城主城ノ越後守資永の餘類で、結局、平資盛の後と見た。更に翌日、系圖を持つて居る福原平内の家を尋ねて、留守の女に頼んで竊に見せて貰つた。それによれば、平維茂即ち余吾將軍の嫡男、出羽介繁茂から七代の孫に、越後守城ノ資永が、治承五年(一八四一)木曾義仲の打手に下り、俄に卒中風にて死んだ事から、奥州の藤原泰衡との緣組の事など迄、細かく記してあつた。卷首の大體を一九が寫し、資盛の鳥坂山落城の邊は卷尾で、それは牧山が寫した。如何にも古いものであるが、鳥坂落城以後は白紙であつたと言ふ。この系圖一見の際に、一九は牧山と共に殺される目に逢つて居る。其處に又、一九の面目躍如たるものがある。元來この系圖は、何人にも見せない事になつて居た。況んや他國の者に於てをやである。然るに、留守居の女を手に入れて、見たり寫したりして居る際中に、その女の兄らしい男が山から突然歸宅し、秋山の大騷動を起した。一九等は、大盜人となつて叺に詰められ、正に中津川の急流に沈められる事になつてしまつた。其の時、色々申譯をしたがどうしても無駄である。結局、「我々も平家の一族だ」と云つた時、三左衛門と言ふ者が、「何ぞ身につけたる證據は無いか」と言ふ。一九が「身につけたる證據は只一つきり」と言へば「それは何だ〳〵。たんだ今出しやがれ」と騷ぐ。一九は「身につけた證據とては、我等が睾丸は二粒あり」とだけ言つた。大勢は又「平家でない外の苗氏の子孫のは幾粒だ」と呶鳴つた時、一九は特に大聲で

嗚呼、この秋山人は馬鹿だ、たわけだ、こんな事を知らぬ邊地とは思はぬに。知れた事、他姓の者は皆一粒だ。さア殺さば

殺せ。覺悟はきめた。

と、威だけ高に言ひ放つた。それから暫くして大勢の中に誰言ふとなく

これは平家の落人の子孫にまがひない。道理で、うらがのは二粒だ。みんなのがは三粒か五粒だか。

と目を見合せて居た。一九も牧山も、繩を解かれ、叺から出されて大いに優待せられ、系圖の話をしてやつた。然し維茂や、繁茂や、名刀狐丸の故事などを聞いても、秋山の住人には十分理會出來ないから

大分、先祖にこれもちの、しげもちのと、餅の名がある。道理でこのあち(秋)山、今に栃餅、稗餅、粟餅なんずと言ひ傳はり命をつなぐ……

と言ふ程度である。かう言ふ經驗を經た後で、一九は苗場山にも案内せられた。その他方々見物して無事に見玉不動尊へ參詣する事が出來、意外に得る所が多かつた。前記の「卯年の凶年」といふのは、天明三年の淺間の噴火である。

此の旅行に關して一九は「……幾かゝへと言ふ大樹は、廡の如きあり、又蟠龍の如きもあり。或は……大磐石に倒れかゝりし其の下をくゞり、生涯の旅の始め、終りなるべし」と述べ、一生一度の冒險旅行であつたと言つて居る。草津から出て、秋山に着く迄には、山中に狼の群行するのも見た。狼に導かれた事もある。全く命がけの旅行であつた。

又、この紀行中に、方言の存在する事や奇談、靈話を採取しようとした事の見えるのは、膝栗毛とも同じ趣である。平家の子孫は二粒云々の如きも、興味ある思ひ附きであつた。但し、一九は極めて生眞面目の人であつたと傳へられて居る。藤村先生の講義中にも嘗つて學んだが、尙ほ、漫畫家北澤樂天氏の祖父も、江戸から甲府まで、一九の供をして、旅行せられたと言ふ。無論、奕梯滑稽、人の頤をはづさせる程、始終、面白い話が聞かれ、さぞ愉快な旅が續けられ

るであらうと豫期しての同行であつたらしい。然るに、一九は全く無口で、無駄口一つきかない。常に默々として、事ある時は見聞を一一綿密に記述する。只それだけである。一九程、面白くない人は無いと言ふ事であつた由、樂天氏が話した事もある。かう言ふ事實、即ち作品と作家の間に存するこんな事狀は今日の社會にも思ひあたる例が少くないであらう。

尙ほ、牧之の秋山紀行と異なる、この一九の秋山紀行が、若し一般に流布したら、種々の點に有益であらうと思ふ故、此處に其の片鱗を揭げたのである。

山本角太夫の曲節

高野正巳

山本角太夫の傳記は明かでない。「聲曲類纂」に「虎屋源太夫が門人といふ（本出羽掾が弟子又はいせ島宮内が弟子ともいふ）始大坂に居し後に京都に移る」とあるが、據りどころが不明であつて信を置くに足らない。その語物については「外題年鑑」に列擧してあるだけでも四十篇を數へるが、自分が搜査したところとは大分異つてゐる。

酒呑童子	山本角太夫直之正本	延寶四年八月板
瀧口横笛紅葉之遊覽	角太夫正本	同　年霜月板
七小町	山本角太夫正本	同　五年八月板
牛若辨慶島渡	山本角太夫正本	
賴朝三島詣	天下一相模掾藤原吉勝正本	同　六年正月板
信田妻	天下一相模掾藤原吉勝正本	同　年二月板
善光寺	天下一相模掾藤原吉勝正本	同　年三月板
百丈山大知禪師傳曆	署名は無いが節付により角太夫の正本と推定される	同　七年八月板
大しよくはん	天下一相模掾直正本	同　八年八月板

清水寺開帳	山本相模掾正本	天和元年×月板
鵜飼寺物語（うかひじものがたり）	署名は無いが節付により角太夫の正本と推定される。	天和元年十月日蓮上人四百年忌當込の興行であらう。
辨才天りしやうものがたり	天下一相模掾正本	天和二年正月板
弘法大師誕生記	相模掾正本	貞享元年三月弘法大師八百五十年忌當込の興行であらう。
石山後日れんげ上人	相模掾正本	
天王寺彼岸中日	署名は無いが土佐掾の奥付ある同外題の十行三十七丁本と詞章も節付も同一である。	元祿二年二月天王寺太子開帳當込の興行であらう。
阿漕平次	土佐掾正本	
日本蓬萊山	土佐掾藤原孝勝正本、作者　津打治兵衛	

以上は總て繪入細字本であるが、この外大字十行の稽古本に「淡島御祭禮」「融通大念佛」「大念佛七萬日詣」「あみだの御本地」「小袖賣」「げんじゑぼしをり」「門出八島」「熊井太郎孝行之卷」「石山開帳」「隅田川」(八行本)等があり、又「天智天皇」「辨慶出生記」「辨慶京土產」「出世景淸」「天神御出生記」「新たかだち」「因幡藥師利生物語」等もその節付によつて角太夫の正本と推定される。

角太夫の正本を見るとうれひふし・なきふし・いろふし等の節付が著しく目に立つが、これはつまり哀愁を帶びてゐるといふ事が角太夫節の特色である事を示してゐるものである。而してその景事・節事・道行等を仔細に檢覈するに各方面の歌謠が取入れられてあつて、恰も百花繚亂たる春の野を望むが如き觀がある。

先づ最も多く取入れられてあるのは謠曲である。然しそれは單に曲節に止まる場合が多く、左に引用せる如く詞章曲節共に取入れられてあるのは寧ろ稀である。

うたひ つわもの丶まじわり。頼みある中のしゆゑんかな。　（酒呑童子第一）

下うたひ 心の水のそこゐなく。うつる月日　（瀧口横笛紅葉之遊覽第一）

うたひ すぎ立るかどをしるべにて。尋（かゝり）きませと　（天智天皇第三）

うたひ せんしうらくはたみをなでまんざいらくには命をのぶ相おひの松風さつ〱のこゑぞたのしむ〱（辨才天りしやうものがたり第五）

うたひ おもしろの有様や。そこにもみゆるか丶りびに。おどろくうを丶おひまはし。かづきあげすくひあげひまなくうを丶くふ時

引かん はつみもむくひも後（少持）のよも。わすれはてたるおもしろさ　（鵜飼寺物語第三）

右はそれぞれ「羅生門」「井筒」「三輪」「高砂」「鵜飼」の中の一節である。

幸若舞曲は謠曲に比べるとずつと尠い。これも多くは幸若舞曲らしい詞章に曲節を施したもので、詞章曲節共に取入れられてあるのは左の一例があるのみである。

まいふし ひをどしのよろひ二りやうがさねてさつくとき。をどりあがつてたかひぼかけ。ゆつて上おびしつかとしめ。九寸五ぶのよろひどをし。めてのわきにさいたりけり。云々（新たかだち第三）

これは言ふまでもなく「高館」の一節である。又次のやうに幸若舞曲らしくないものもあるが、これは恐らく女舞の詞章であらうと思はれる。

まひふし みすのひまよりからねこのつなを引ぬる女三のみや。すがたをみそめ。れんぼのやみにまよふかしはぎ（小袖賣第四小袖うり）

平家の影響は殆ど無いと言つてよい。その節付は纔かに一箇所「れんげ上人」第三に發見されるのみである。

當世の歌謠の中で最も多く取入れられてあるのは踊歌である。

京踊　あいはせにすむとり木にとまる人はなさけのこんぎやら〳〵あつきやらこんぎやら。こんぎやら〳〵あつきやらこ。下にすむ（頼朝三島詣第三）

この歌は「落葉集」第四卷にこんぎやら踊として收められてゐる。

題目踊　だいもく哥の面白や。一つとや。人は何にてたすかるぞ。めう法れんげの。五字のだいもくなむ妙。法蓮華經〳〵。二つとや。ふたりの親の御をんどく。今ぞ送るは。是ぞうれしきなむ妙。法れんげ經。（融通大念佛第四上藤姫道行）

ついの帽子をしやんと着ておどりぶりが面白や。南無妙法蓮華〳〵。（辨慶京土産第二）

題目踊については「出來齋京土産」卷二松か崎の條に、「七月十五日の夜より、郷中の男女老若のこらず、寺の前に出て、題目おとりをする、其曲節をかしく其踊振えもこらへず、都の人はみに行也、」とある。

大和踊　よしの〳〵山を雪かとみればみねのしらくも（阿漕平次第四たけひめともわか道行）

この歌詞は「糸竹初心集」上卷にやまとおどりとして載つてゐる「よしの〳〵をやまを〳〵、ゆきかと見いれば、ゆきてはああらてん〳〵、やこれのはあなのふ〳〵きよのん〳〵、やあこれの」の前半を取つたものである。

馬士踊　せきのお地ざうは。おやよりましじや。おやのさだめぬつまをもつ。（大念佛七萬日詣第四道行）

さかはてる〳〵（天智天皇第五）

是等の文句は「落葉集」第四卷に馬士踊として收められてある「關のお地藏は親より增じや、親も定めぬ妻を持つよの、かへではないかこれ與作、さつたもない事、ほてつぱら奴がへ、坂は照る照る鈴鹿は曇る、さきはいと云ふてははいどふし、間の土山雨が降る」の一節である。

獅子踊　花の。うへ成つゆよりも〳〵。うすきちぎりはうらめしや。（瀧口横笛紅葉之遊覧第三よこふえ道行）

この文句は、「吟曲古今大全」所收の獅子踊舞歌の一節である。

踊口說　くめの山べのせんにんだにも袖のぬれぎぬあらひし女。雪のはたへのかのしろたへを。すそのひまゞ〳〵ほの見そめつゝ。
　雲のかよひぢつうりきうせて。（天智天皇第四大君花てる姫道行）

これは口調から見て踊口說なる事明かである。

ゆきの內よりさく花のにほひざくらかやへざくら。しほがまふけんざうきりかやつ。夕ぐれなゐのひざくらや。花もとしふるうばざくら。みだれ心やいとざくら。花はさま〳〵おほけれど。ひがんざくらのさきみだれたをやかなりし其ふぜいげにやごとなき人を見て花といひしもことはりや。（天王寺彼岸中日第一）

これに類似の歌詞は「松の葉」第二巻にも「吟曲古今大全」にも共に櫻盡しとして載つてゐるが、何節の地に用ゐたものかは不明である。この他單に「おどりふし」としてあるのが數箇所あるのが全部省略する事にする。

當時の流行歌は大抵踊が作なつたらしく、文句だけ歌はれたのは尠かつたらしい。

のんやほ節　こよひござらばひごなたさいてござれの。晩にや小櫻の枝おろそのんやほのんやほ（辨慶京土產第四うし若姬君道行）

この歌詞は「松の葉」第三卷に收められてある。

五でうあたりを車がとをるのほんや。たそと夕がほのさんさ花車のほんや。花ぐるま〳〵はな車。（瀧口横笛紅葉之遊覧第三よこふえ道行）

これは「松の落葉」卷第五に五條車として載せられてある當世流行の端歌である。

鹿兒島節　爰にはやらぬかごしまにはやる。三十振袖四十しまだほいさ〳〵。（隅田川第二きやう女道行）

馬士節　千兩取共。しゝ。馬かたいやよほゝ〳〵馬かたいやよ（牛若辨慶島渡第二）

この二つは共に「松の葉」第三卷に收められてあるが、「千兩取共」の馬士節は「辨財天りしやうものがたり」第五の挿繪の中にも當世踊の地として用ゐられた事が示されてゐる。一體角太夫は馬士節が得意であつたらしく、この他にも亦、

のぼりくだりの馬子のうたかんのしはすも。ひの六月も。こまのたつなで日をくらす。（熊井太郎孝行之卷第五うし若ごわうの姫道行）

葦毛馬追ふて。浮世がなろ〳〵か。かへて。たもれの鹿毛〳〵の駒はいしいどうしても。（辨慶京土産第二）

等がある。

投節　よしやこよひも。くもらばくもれ。とても涙で（因幡藥師利生物語第一）

この歌の全文は「當世なげ節」によれば「よしやこよひは。曇らばくもれ。とても涙。で見る。月を。」である。

船歌　ふねは出てゆく。〳〵いそのこはぎが出てまねく（鵜飼寺物語第四八景）

晒歌　かはしまにぬのつくあしたきて見れば、かんずるよはのしものたつもの。よの中につくらでしほをもつものは。ふたばがむすめはまぐりのしほ　此間合手（天王寺彼岸中日第二）

子守歌　ねん〳〵ねこね。おとせでをよれ。のゝへまいろ。（門出八島第四みちゆき）

馬士歌・船歌・晒歌・子守歌等は流行歌とはいへないかも知れぬが、何れも當時の人達の耳に熟してゐたものであらう。

山み。ちャアゆ。ウけば。かほにも。みィぢがャアちィりかゝ。アるやん。（七小町第五）

（小哥）こよひあをとのかへしはうれし。（上引）おれがなじみのとのごはいとし。（上引）ほんにいとし。（因幡藥師利生物語第三道行）

是等は當時行はれた踊歌或ひは流行歌に相違無いが名稱は不明である。

次に門附物乞の歌であるが、是等の取入れられてあるのも相當の數に上つてゐる。

萬歳　（上まんざいふし）あり。けう有けるあら玉の。としもわかやぐあしたより。みづはやはらぐ。やなぎ（きん）はめぐむ。さともさかへましま す。（げんじゐぼしをり第二ときはごぜん道行）

「吟曲古今大全」を見ると、「徳若に御萬歳と、御代も榮へまします、愛敬ありける新玉の、年立ち返る朝より、水も若やぎ、木の芽も咲き榮へけるは、誠に目出たふさむらひける（合）京の司は關白殿、退位の帝はひのもく內裏、云々」とある。

鉢敲　（市はちたゝき）かゝみの山に立むかひ。（太夫）いざみかみ山うちつけに。（庄引）なれしたもとやこふるらん。（辨才天りしやうものがたり第五）

こゝに市とあるのは市郎太夫、太夫とあるのは角太夫、庄とあるのは庄太夫で三人掛合で語つてゐるのである。市郎太夫・庄太夫については後に述べる。

猿廻し　（さるまはしふし）さるはさんわうまさるめでたき。（門出八島第四みちゆき）

間の山（あひの山ふし）くひて。かへらぬあだなみのきへてし。人はぜひもなし（阿漕平次第四たけひめともわか道行）

（あひの山ぶし）花はちりても。春さきてとりはな。ふるすにかへれ共ゆきて。かへらぬしでのたび。（引）（日本蓬萊山第四）

「花はちりても」の歌は名妓夕霧を弔つた間の山で、「新投節」の中に收められてある。

歌念佛　（念佛中）むあみだぶつな。なむあみだ。（中）いもせの川のな。はしともなりはせて今はみつせをな。しでのたび。むあみだぶつな。
なむあみだ。なむあみだぶつ。〳〵。（天王寺彼岸中日第四）

右は歌念佛と思はれるが、次の如きは何と見るべきであらうか。

なむあみだ佛。みだぶつ　（阿漕平次第四）

歌祭文　時めくきさゞの花かの子。八重櫻より咲そめて。花見るそでにかほりくる。（源氏蓬萊三ッ物第三）

敬つて申奉る天清淨地清淨　（辨慶京土產第四）

順禮歌　いくたひもまいる心ははつせ寺。山もちかひもふかきたに川　（弘法大師誕生記第四姫君めのとしゆんれい道行）

これは西國順禮歌の八番和州初瀨寺の文句であつて、「淋敷座之慰」の中に見えてゐる。

行人節　さんぎさんげざいしやう。おしめに八大こんがうどうし。ふじは千げん大日によらい。一にらいはいなむせんげん大菩薩。〳〵　（日本蓬萊山第二）

巫女節　なむ日ほん大小のじんぎ。たゞ今くはんじやう申奉る。まづかみはぼんでんたいしやく。しもはしだい天わう。げかいのちには。いせはしんめいてんせうだいじんぐう。げくうないくう百。廿まつしや。かはしもにさがつて。くまのにみつの御山。たきもとにせんじゆくはんをん。かんのくらにはりうざうごんげん。なふじゆあつて給はれやと。れいをとつては。ふりならし〳〵。かづらき七たいこんがうどうじ。こもりかつての大みやうじん。みわたつたかすかのみやうじんやはたはしやう八まん。いなりぎをんかものやしろたかきお山にあたごさん大ごんげんと。又しやくぢやうをおつとつてふり立。〳〵。〳〵〳〵。さかもとさんわう廿一しや。うちおろしにしらひげの大みやうじん。するがのくにゝふじせんげん。ことに津のくにすみよし天わうじしやうとくたいし。かはちのくにゝをんぢひらをかこんだの八まん。べつしてあがめ奉る。せんしうしのだのみやうじん。そうじて日ほんのしよじんしよぶつ。くはんじやう申奉る。（信田妻第五）

この文句は寛文三年六月板の井上播磨掾の正本「公平甲論」第四かみおろし（古播磨風筑後丸所收）に據つたもので

ある。但し曲節の上に播磨掾の影響があつたとは思はれない。

上は梵天帝釋下は四大天王。ゑんまほう王五道のみやうくはん。皆ぼんなふのねになける。いぬいの隅から來たはいの。あゝ腹立や〱。云々（辨慶京土産第四）

これは勿論替文句で滑稽化したものである。

最後に角太夫節と他流の淨瑠璃との曲節上の交渉について述べてみたい。當時上方の淨瑠璃界は京都には山本角太夫の他に宇治加賀掾があり、大坂には井上播磨掾、岡本文彌が蟠居してゐた。加賀掾は同じ京都に居つて競爭者の立場にあつたためか、角太夫が其の語物の中に加賀掾の曲節を取入れたと見られる點は見當らない。然し播磨掾の曲節を用ゐてゐる箇所は唯一つ左の如き例がある。

神にねがひをかけまくも。忝くもみやしろは。佛もはやくとくのりの。ちからをうけてしやうむてい。きやうぎ菩薩にちよくをなしかいきなされし辨才天。めうおん其名はかはれ共。ほん地はによいりんくはんぜおん。しまはそのかみ夜のうちに。こんりんざいよりわき出しと。聞しにまさる地けいかな。まん〱たる水うみ。なみのけふりか。あくくもかまたわけてかへれるかりがねの。あらちの山の。かすみよりしら〱みゆるさくらばな。くもにあざむくふぢなみのかゝるけしきやいぶき山。そのはらふかきさしもぐさ。くゆる思ひのよごのうみ。（辨才天りしやうものがたり第五）

角太夫が播磨節を語つたのは播磨掾の門弟であつた井上市郎太夫が新に角太夫座に加つた記念興行であるためと思ふ。一郎太夫は勿論市郎太夫の事である。然らば何故市郎太夫が角太夫座に加つたかといふと、師の播磨掾が歿したからであらうと想像される。一體播磨掾の歿年といふのが明かでないのであつて、「今昔操年代記」には或時播磨掾一座が初めて京都に上つて「頼光跡目論」を語つた際に病に冒されて歿した、年五十四といふ事が記してあるのみでそ

の年月については觸れてゐない。然るに「竹豐故事」には貞享二年五月十九日と明記してあるが、頗る信を置き難いやうに思はれる。その第一の理由は播磨掾の正本は延寶五年正月板行の「賴光跡目論」以後のものを見ない事である。延寶五年正月から貞享二年五月迄は八年餘の年月がある、この間に一度も正本を板行しなかつたとは如何にしても不思議である。その第二の理由は水谷弓彦氏が「綸入淨瑠璃史」に於て、「若し此時（歿時）五十四歳とすれば、彼は寬永九年の生れにして、明暦四年「もみぢがり」發行の年には、未だ二十七歳の青年なれば、其前に大和掾を受領するは稍〻早きに似たり。依りて按ふに播磨の歿年若くは其年齢に誤りなきか。爰に聊か疑を存し措く。」と指摘してをられる通りである。その第三の理由は天和二年正月に山本角太夫が「辨才天りしやうものがたり」を語つた際に井上市郎太夫が一座に加つてゐる事である。「今昔操年代記」によると、市郎太夫は播磨掾の死後獨立して櫓をあげ、新淨瑠璃「源氏十五段」「五大力菩薩」等を語つたが捗々しからず、終に立消えにしてをはる所を知らずとある。そこで市郎太夫が角太夫座に加つたのは獨立の旗揚に失敗してから後と見れば、播磨掾の歿時は天和二年正月を數年溯る事となる。故に自分は次のやうに考へたい。卽ち井上播磨掾は延寶五年正月京都で「賴光跡目論」を興行の際に客死した、その後門人井上市郎太夫は獨立して櫓をあげ新淨瑠璃「源氏十五段」、「五大力菩薩」等を語つたが捗々しくなく、天和二年正月に至つて山本角太夫座に加つて「辨才天りしやうものがたり」にワキを勤めたと、かやうに見れば總ての疑問が氷解するわけである。

庄太夫についての詳しい事はわからない。唯「聲曲類纂」卷之四に收められてある貞享・元祿頃の操芝居圖の摹刻に上瑠璃惣太夫として、式部太夫・源太夫・長太夫・近江太夫・永閑太夫・肥前太夫・土佐太夫・和泉太夫・半太夫等に混つて庄太夫なるものの肖像が描かれてある、これと恐らく同一人と見做してよからうと思ふ。つまり彼は天和元年あたり

に京に上つて角太夫の一座に加つたものと推測される。

山本角太夫と岡本文彌との曲節上の交渉は相當に深いやうに思はれる。事實角太夫の正本「あみだの御本地」の如きは貞享元年八月板行の文彌の正本「四十八願記あみだの本地」と同一詞章である。又何れも正本に「うれひふし」「なきふし」等の節付の多い點から言つて、假令文彌を角太夫の門人とする「外題年鑑」の記事が疑はしいにしても、同じ流を汲む太夫であつたとする事は許されさうである。それにも拘らず、角太夫の正本にはどこにも「文彌ふし」といふやうな節付が見出されない。然しこれは寧ろ雙方の太夫の曲節の本質が同じであつた事の證左とすべきであらうと思ふ。さて「大念佛七萬日詣」第四に文彌の門人小林平太夫が角太夫と掛合で語つた事が示されてゐる。左に引用してみよう。

かくてしんれい上人は。（かゝり）七萬日の高札を。ざい／＼しよ／＼にたてさせられ。（ことは）やう／＼今はいせの國。かめ山をうち過て。（地）まつのつゝみに成しかば。（はる）日もはやにしに入あひの。（はる）かねをならしてとり／＼と。つとめをなしてとをらせ給ふ。（ことは）所にとあるすゝきがもとよりも。しはがれこゑにてたれともなく。（平太夫）申。／＼。（太夫）上人ふしんにおぼしめし。ふりかへり見給へば。されたるどくろばかり也。上人御らんじ。たゞ今我をよびしはなんぢなるかとの給へば。（平太夫）さん候いかにもそれがしにて候。（色ことは）あゝおひさしや上人さま。（色はることは）これはひやうごのすけみつさだが此よをさりしどくろ也。云々

平太夫は元祿七年正月文彌が歿して後角太夫一座に加つたものであらう。

角太夫節と說經節との交渉は他の何れの流派よりも深いやうである。元來「信田妻」や「隅田川」は左說經の一であり、又「石山寺開帳」も天下一石見掾藤原重信正本の「石山記」と殆ど同一の詞章である。かゝる關係から考へれば角太夫の正本の中に說經の曲節が取入れられてあるのは別に異しむに足らない。

戀に。うきみをつくしぶねこかれ。〳〵てきたしぐれ。しづか。なみだにしつかなみだによもこさじ。(弘法大師誕生記第二)

行かた。いづこ水ぐきの。おかのくずはらかぜさはぎ。うらみつわびつよの中の。くはいろかへてあをば山。ひくまののべにたつしかも。つまこひかねてかへろとなくはしほらしき。(門出八島第四みちゆき)

御よのみつぎのうしぐるま。京のなごりにとゞろかば。われがおもひもうちのせておくれ見おくれよびかへせ(げんじゐぼしをり第二ときはごぜん道行)

いたはしや姫君は。かりにもしゆの身にかはり。むしつのつみを身にうけて。さと〴〵を引わたされ。ひつじのあゆみ程もなく。まつおでらのふもと成。ちまたにひかれ給ひける(融通大念佛第三)

以上三十四篇の正本に基づいて考察した結果、山本角太夫の曲節は各方面の歌謠音曲を融合統一してゐる點に於て、宇治加賀掾や竹本義太夫の曲節と少しも異つてゐるところが無いと言つてよからうと思ふ。つまり各種の歌謠音曲の集大成といふ事は當時の淨瑠璃界の一般的な趨勢であつたわけである。然るにこの歌謠音曲上の集大成といふ事を以て、特殊の天才的作者の功績と見做す事は聊か贔屓の引倒しの憾が無いわけではない。

〔附記〕酒呑童子、信田妻、大しよくはん、辨才天りしやうものがたり、弘法大師誕生記、れんげ上人、日本蓬萊山、大念佛七萬日詣、天王寺彼岸中日は東大圖書館藏、鵜飼寺物語、阿漕平次、因幡藥師利生物語は帝國圖書館藏、隅田川は東洋文庫藏、淡島御祭禮、七小町は前島春三氏藏、融通大念佛、小袖貰、石山開帳、新たかだち、辨慶京土產、天智天皇、出世景清、天神御出生記、清水寺開帳は笹野堅氏藏、百丈山大知禪師傳暦は石田元季氏藏、げんじゐぼしをりは高橋宏氏藏、牛若辨慶島渡、あみだの御本地、門出八島、熊井太郎孝行之卷、善光寺は斑山文庫藏である。尙東洋文庫藏の山本角太夫正本「凱陣八島」は疑はしい點があるので考察の埒外に置いた。

近松門左衛門論

——淨瑠璃の完成者として——

志田延義

一　集成者としての近松

改作利用、加筆修補等の關係によつて、近松門左衛門作の淨瑠璃と詞章の一致若しくは交渉を有する作品は、古淨瑠中に屢指摘し得る所である。例へば正德四年興行の「娥哥かるた」から延寶四年刊の「瀧口横笛紅葉之遊覽付り戀之道心」(「よこぶえ」)などへ溯り得ることは既に云はれてゐる所であり、後者は更に先行の說經淨瑠璃「横笛瀧口」(『尾陽戲場事始』寛文八年の條に、太夫天滿十太夫、ワキ都右京で語つたことが見える。)との關係を推測せしめると思ふ。又例へば「大原問答(筑後掾正本)」・「須磨寺青葉笛」等の相互關係は云ふまでもないが、これは種々の書の合成であつて、詞章に於いても夫夫負ふ所が見出され、「念佛往生記」によれば、第一段に於いては『平家物語』敦盛最後の事によつて

今朝一の谷にて小次郎が、薄手を負(おふ)たるだに其かなしみのせつなりしに、

と云ひながら、第二段を

熊谷の次郎直實は今度西國の合戰に、嫡子小次郎討死せしよりおんあいのかなしみに、やゝ發心におもむきしが、又敦盛を手にかけ申、

と始めてゐる不一致の如きも、此の合成によつて生じたものに外ならない。同じく第五段中の「九品の淨土」の次第は「鳥羽戀塚物語」を結ぶのに用ゐられてゐる。しかも題材に於いて相通ずる所のある「念佛往生記」よりも「鳥羽戀塚物語」の方が、古淨瑠璃「子敦盛」(正保二年刊)等の影響を受けたと推測せられる點があるかに思ふ。なほ改作關係は「鳥羽戀塚物語」と「一心五戒魂」の間にも見られることは既に云はれてゐる。

右の如き現象は、近松の初作若しくは初期の作品を推定するとは如何なる意味であるかを先づ考へさせるわけである。

併しながら說經と淨瑠璃との交流の著しい時期から、近松の作として確實と考へられるものが次々に數へられる時期までには、淨瑠璃に於ける種々の傾向、特徵が現れてゐる。第一に、井上播磨掾に於ける節廻しの基礎的整理、景事の趣向が擧げられるが、江戶を中心とした金平淨瑠璃には幸若舞曲の判官物等よりの因緣が考へられるかに思はれ、上方に於ける山本土佐掾等の機巧人形には、說經・お伽草子等に見る緣起風の本地物・靈驗物の再起を促したことは云ふまでもない。此の金平物の武勇譚、機巧仕掛けの靈驗譚には初期ロマンの俤を見ることが出來る。(水谷不倒氏の『繪入淨瑠璃史』には、後の曾我物を此の金平物の武勇譚の上昇として見るべき事を論じてある。)近松作の淨瑠璃は實にかやうな所から展開したのである。卽ち淨瑠璃詞章の完成に至る文學的傳統を拙稿「大文學と地盤的文學」(「文學」昭和十年一月號及び拙著『日本文學論素描』)で考へたやうに地盤的文學と先行文學形態とに分つならば、舞の本(お伽草子を含む)と本地物の說經淨瑠璃とからの系列に地盤的文學を考へ、先行文學形態の中心に謠曲を見ることが出來ると思ふ。かゝる點から觀れば、軍記物の類に出づる題材、曾我物・判官物は地盤的文學を、古典文學作品に出づる題材は先行文學としての謠曲を、夫々媒介として手を伸べられたとして推測してもいゝであらう。それにも拘らず夫等の攝取が作用した效

果から云へば、前者は後に義理の理念として明確にされる武家的生活に於ける傳統的なるものの尊重として形成せられた場合が多く、後者は町人的生活に於ける人間的自由の表現として解釋し得る場合も見受けられる。所謂あてこみに於いても初めは緣起風の靈驗を物語る作の存在を見得ることも、一面より云へば機巧の進歩に基く要求であつたと共に、淨瑠璃そも〳〵の地盤的文學性の繼承としてであり、それを迎へた觀衆の支持によるものであつたと云はねばならない。

曲節に於いても宇治加賀掾に於ける集成洗煉が行はれ、これが近松の音曲の上に於ける一大集成となり義太夫節をして大成を遂げしめた足がゝりとなつたであらう。詞章中に見られる曲節によつても、殆どあらゆる音曲が驅使せられて居り、しかも觀衆本位に立つて踊歌等の流行歌を最も多く採り入れてゐるのである。大序のいかめしい成立に代へて、冒頭に歌謠を用ゐ、「雪女五枚羽子板」の丹前出端、「重井筒」・「高野山女人堂心中萬年草」・「大經師昔暦」・「博多小女郎波枕」・「紙屋治兵衛きいの國や小はる心中天の網嶋」・「女殺油地獄」・「唐船噺今國性爺」の歌、「二郎兵衛おきさ今宮心中」の冒頭の出とした如きは、世話物に適はしい手段となつたと思はれる。是等の小歌的なるものは地盤的文學として考ふべく、單に之を要素として攝取したと云ふに止まらず、その攝取と相伴ふ淨瑠璃形態完成の道行をかゝる所にも物語つてゐると云ふべきであらう。一曲構成の型も略出來上つてゐたやうではあるが、內容的には未だ形態として完成せられてはゐなかつたと考へられるのであつて、此の事は後の世話物の確立によつても明かである。歌舞伎作者としての近松は、當時未だ文學的に脚本の內容化を遂げてゐなかつた歌舞伎に文學的要素を持ち込むと共に、淨瑠璃作者としては歌舞伎に於ける寫實的要素を淨瑠璃に取り込まうとしたのである。もつとも後の點に就いては後に述べるやうに多少の注を必要とするのであるが、曾我物等に於ける傾城事の存在の如きは、歌舞伎に出發してその要素を淨瑠璃の世界に移して世話

を確立するに至る一の前提を示すものでなければならない。

以上の如く瞥見することによつても、集成者としての近松が、從來のあらゆる表現の手法を獲得して淨瑠璃の完成に向つたことが知られると思ふ。

二　形態の綜合性

人形芝居の初期には能をも木偶で遣つたことが見える。其處に當時の說經・淨瑠璃の詞章の敍事的性質と通ずる事が見られると同時に、人形芝居と能と結合する時、その詞章としてのうたひは、既に演技者の諷吟たる事を蟬脫してゐる點を注意すべきである。人形であれば、演技者が時に地に相當する部分をも諷吟すると云ふ必要がなくなると共に、例へば觀衆の側に在つて觀衆を夢幻的の世界に導入する意味を有する場合のワキも必然的にその關係から遊離するであらうやうに、謠曲がちがつた構成原理の上に立つ事を强制せられる。かやうにして人形芝居が地盤的文學としての說經・淨瑠璃の詞章を視覺に飜譯する從者となつて出發したことが、やがて近松の努力によつて完全な綜合性を賦與せられる可能性を宿すものであつたと云へる。

淨瑠璃操は、完成せる樂劇形態として、淨瑠璃操に比べらるべき能樂・オペラとは著しい相違點を多く見出し得るのであつて、先づ能樂もその傾向を有することであるが、特にオペラは演技者と關聯して純粹の科白を有しないのである。若し純粹なる科白を加へるならば、現代の少女歌劇に見る如くその間、樂劇たることを一時休止すると云ふ方法をとらねばならない。之に對して淨瑠璃の科白はもと〳〵語り物に挿まれた詞からの發展であり、太夫によつて或感激若しくは心情を吐露する科白として表される儘に木偶の演技があり得るのであつて、其處に完全なる並行による綜合が果される。卽ち淨瑠璃操は、動作を演ずる木偶と科白の語り手とをはつきり分離する事によつて完全に集注し

統一することが出來る。オペラの場合は詠唱に重點があると云ふべく、演技者の上に演技若しくは詠唱の何れかが休止せられないまでも少くとも主となつて、其の演技は跛行的なものとなる。更に淨瑠璃に於いてはかやうな所から直ちに地の文に戻つてゐるのであつて、音樂を隨伴する詞章は大概此の地に相當するのである。か丶る意味に於いてはオペラと淨瑠璃とは全く反對する性質を有し、能樂はこれが中間に位する。しかも淨瑠璃の地は後にも述べるやうに純粹の地でさへもなくなつた點がある。か丶る事は音樂に於ける作奏に就いても考へられる所であつて、從つて科白・音樂・演技の三要素のみの綜合性に就いても淨瑠璃の方が完全の域に達したことが見られる。淨瑠璃に此の綜合性を賦與して綜合劇藝術としての形態を成就せしめた所に、淨瑠璃作者としての近松の功績が考へられると思ふ。

此の意味を考へるには更に觀衆との關係を問題としなければならないであらう。淨瑠璃は本來語り物である。物語或は語ると云ふことには、物語る者と聽く者とを共通の世界に置かうと意圖し、進んではその物語られる物語中の者と共に息づかせようとする性格がある。近松が確立した心中世話物の道行に於いて典型的に見出される人物と自然との融合、例へば彼の世話淨瑠璃の初作として、且つ道行文に於いて有名な「曾根崎心中」の、

此よのなごり、夜もなごり、しにゝゆく身をたとふればあだしがはらの道のしも、一あしづゝにきえてゆく、ゆめのゆめこそあはれなれ、あれかぞふればあかつきの、七つの時が六つなりてのこる一つがこんじやうの、かねのひゞきのきゝをさめ、じやくめつゐらくとひゞく也、かね斗かは、草も木も、そらもなごりと見あぐれば、

の敍述の如きも、此の物語られる世界がかやうな性格を有するが故に可能であつたのであつて、道行の先蹤が多く『太平記』に在つたと見えるに拘らず、性格的には寧ろ『源氏物語』に於ける人事と融合せる自然描寫の如き傳統を想はせる所に見ても、此の關係によつて理解することが許されると思ふ。

語り物の表現に與へられた意味はかくの如くであつて、從つて語り物は性格として理想化が考へられる。「俳句的性格と日本文學の表現」（「文學」昭和十年十月號及び拙著「日本文學論素描」）でも觸れたやうに、語る太夫を通じて考へられる詞章の作者と觀衆との關係は極めて密接なものがある。作者、從つて太夫の聲は、劇中の人物でもあるが、觀衆に呼びかけ觀衆と共に咏嘆するものともなる。近松が「それぞ辭世去ほどに扨もそのゝちに」とした「扨も其後」の如き發語が確實な近松の作に接する時まで永く繼承せられた事、「……其中々申斗はなかりけり」と交互する「……とかんぜぬものこそなかりけれ」の如き結語が劇中の大衆の心を表すのではなくて觀衆の立場に於いてでしかない場合が古淨瑠璃に多い事は、これが爲でもあつた。かく理想化と云ふ點から見て、劇的なるものに於いて觀衆に物語つてゐると云ふ不思議な文學性を確立してゐるのであつて、語り物から來た古淨瑠璃を承けた近松が、其の架空的概念的な敍述を拔け出でながら其の有する理想化の性格を眞に文學的なものに磨き上げたのである。此の點に於いても謠曲に近くオペラに遠い。『難波土産』に云ふ彼の直話に、

節會の折柄雪いたう降り積りけるに、衞士に命じて橘の雪拂はせければ、傍へなる松の枝もたわゝなるが、恨めしげにはね返りて云々

と大内の草紙にあるを見て、此の「心なき草木を活物開眼したる筆勢」によつて「我が淨瑠璃の丹念を入れることを悟」つたと云ふ事も、先に述べた道行の敍述とそれに就いて同じく

地・文句・せりふは云ふに及ばず、道行なんどの風景を述べる文句も、情を込めること肝要とせざれば、

と云ふ事の如きも、此の物語ることの立場に居る結果である。表現の手法として徹底的な寫實に反對しながら、「虚にして虚にあらず、實にして實にあら」ざる間に、慰みの存在を說いてゐるのも、此の手段としての表現に於ける理

想化を云ふのであつて、かゝる慰みは觀衆層の間に下りて行く態度を示すものである。此處にシェクスピーアの作に於ける諧謔の如きと一脈通ずる心構へを見ると云へる。なほ此の慰みは後に述べる理想主義と關聯して考ふべきである。近松の直話は、結局

木の事に似る內に、又大まかなる所あるが、結局藝に成りて人の心の慰みとなるなり。

と云ふに至つてゐるやうに、歌舞伎の方が近づきつゝあつたやうな寫實主義への徹底は、少くとも右の如き性格を有する淨瑠璃として採るべきでないと主張してゐるのである。

此の事は木偶の型乃至人形振にも明瞭に現れてゐるのであつて、その眞は現實的なものではなくて構成するものである。近松が戀男の木像を刻ませた話で說いたのも其處まで引きつけて解し得ると思ふが、心持に於いて、人形遣の創造に於いて、構成せられ行く眞實である。人間の俳優に於いては省略することの出來ない動作をも必要に應じて捨て去り得るのみならず、人間の動作とは異なつた運動の型を設けさへして、眞實を構成する。此の虛實の間に在る藝は、現實の世界とは別に眞實の世界を構成するものであつた。從つて此處では現實の世界にあつては不調和な誇張も、右の眞實に繫がる型を形成する時、最も特徴的にその眞實を表現するものに姿を變へてしまふやうに思はれる。此處に誇張と理想化との關係が考へられるのであつて、これは詞章の表現に於いても同樣である。もとより近松が木偶にも及んで此の表現法を成就したと云ふべきではないが、文句に「情を込め」、「憂は義理を專らとす」る態度はこれと照應するものであつて、木偶の演技を活かし得る形態を確立した手腕は、先づ第一に近松に屬せしむべきであると云へよう。

三　理想主義的態度

右に一言シェクスピーアを引合ひに出したが、その戲曲が普通の散文の形式ではないと云ふ點で、近松の淨瑠璃と何か比較し得るものを有つてゐるかに見られるかも知れないが、凡て科白を以て組立てゝゐる點はオペラに隣接して、謠曲の淨瑠璃との隣接に對向する。且つ兩者の取り扱つた世界は著しく懸け離れたものであつて對照さすべき性質のものとは思はれない。（古典劇との關係も此處に問はない事とする。）たゞシェクスピーアに就いてハムレット的な懷疑をのみ見ようとするならば大きい誤と云ふべきで、もし何等か比較すべきものを求めるとならば、理想主義的態度を以て民衆の間へ下りて行つたと云ふこと、換言すれば市井的な人間性を理想化して受け取ることによつて觀衆を引き上げようとした點なのではなからうか。

近松の淨瑠璃に於ける理想化は先づその方法としての表現に現れてゐることを云つた。而して此の理想化は彼の理想主義的な物の觀方、世界の構成に應ずるものであつたと考へられる。近松は世話物を開拓し確立したけれども、古淨瑠璃よりの正系は寧ろ其の所謂時代物に在ると云ふべきであり、數から云つても時代物は世話のかれこれ三倍に上るであらう。世話に屬せしむべきものは歌舞伎の方に先行して見出され、制作の上に條件の多い淨瑠璃に於いては古淨瑠璃より傳へられた素材・構成を容易に離れようとはしなかつたのである。其の「時代」は併しながら史實に據つて歷史を描くと云ふ意味に於いて成立してゐるものではなく、表出せられた生活は既に云はれてゐる如く時代を藉りた現代であるか時代を現代に强引したものかであつて、唯注意すべき點は一般的に武家的生活の脚色とその世界に於ける武家的觀念を描かうとするに在つたことである。從つて構想に於ける「傾城反魂香」等の如き所謂時代世話物なる中間的な存在及び世話物との交渉は容易に生じ得たのである。たゞ範疇的には「傾城反魂香」の世界の如きは時代に在ると云ふべきである。義理と人情との對立葛藤を定立することが近松の作の概念的基礎をなすものであつたが、時

代物に於いては之を義理の理念の主張として表現したと考へられる。もと〳〵義理の理念は、武家生活の制度化、所與の社會的制度に由來するものであつて、人情が von unten（「下から」）のものであるに對して von oben（「上から」）の性質を有するものであつた。從つて其の表現も亦觀念的のものとなるのが當然であつて、近松が愛用の硯の蓋に「義發勸懲」と書いてゐたと傳へられるやうに、脚色の上にお家物等の善人型と惡人型との設定ともなつて現れたのである。構想の複雜化、技巧の發達等によつて時に時代物の完成を次の時代に求められたりするやうであるが、それは完成と呼ぶべき本質的なものであるとは考へられない。構想の複雜化は一層類型的・概念的にならしめてさへゐるやうに思ふ。

かやうにして義理の理念の主張は夫自身に於いて既に理想主義的である。人情をも義理に止揚することによつて、一つの調和せる世界が生まれる。一般的に云へば理想と現實との調和とも考へられる。先に述べた表現手法としての理想化、從つて慰みは此の場所に懸かつてゐると云へる。しかもかゝる理想主義的態度も、脚色の上に於いて善惡の型ともなつて現れたが故に、やがて社會の硬化しゆくにつれて、勸善懲惡の卑近なる道德的功利主義と結びついてしまつたのであり、その慰みに於いて觀衆を引き上げようとした態度も、後の安易低級な迎合を事とするものと成り了せたわけである。

なほ此處に附け加へたいことは、時代物と云ふ樣式に就いてである。赤穗義士を取り扱つた「碁盤太平記」の如きは、禁忌の故に現代物として扱ひ得ない爲に時代を引き上げて『太平記』の世界が藉りられたのであつて、近松の最長篇なる「關八州繫馬」の如き自由なる時代との間には差異が考へられる。後者の如きは再び古淨瑠璃に還つて其の趣向と系統とを、此の日まで努力せられ完成せられた淨瑠璃の形態の上に高度化したものと云ひたいのであつて、其

の意味に於いても近松の絶筆たるに適はしい作であつたと思ふ。最近にも扱つたやうに（「國語と國文學」十一月號「歷史・文學・哲學と神話」）、歷史的なる文學と呼ぶべき作品には、歷史に於いて若しくは時代的な樣相の上に具體的なる人生を發見しようとする意味が考へられる。やはり理想化を考へ得る『源氏物語』に一種の時代物的な樣式が發見せられることと、奔放なる時代の樣式との間には、本質的に共通するものが存在すると思ふ。時代物の觀念的なる表現は、自ら類型的なものを描くことを招致するわけであるが、その理想主義的態度はもとより能樂に於ける象徵主義の型による集注化とも著しく異なるのである。彼以前の作に比して科白も著しく寫實的であり現實にしつかり根を下してゐるのであるが、しかも時代物が類型的な表現から概念的なものに墮しようとする傾向があつたのに對して、彼の眞の理想主義的態度を活かしたものは實に彼の世話物の確立にあつたと見られる。

四　一般的なるものの表現

近松の世話物二十四篇をなす據所は既に云はれてゐる如く義理と人情との對立葛藤に在るが、von unten の人情を von oben の理念たる義理に如何に調和するかと云ふに在つた。「丹波與作關の小萬待夜の小室節」等の如く其の世界の複雜なものもあるが、過半數を占める心中物によつて代表せられるやうに、世話物は義理と愛情との葛藤として運びながら之を更に大きい人情に包まうとする態度として見るべきである。從つて其の世界は先に述べた武家的な時代物に對立して町人的な世界觀に負ふものと考へられる。其處では醜惡なる現實も理想化せられ、彼の喫い愛の息吹の前には死を急ぐ心中の男女の弱さも美化せられて、その死も義理を止揚して愛に生きるかりそめの死として考へられる。心中の道行が中心となつたことも、此の道行が解決を示すものであつたが故である。未來に生きようとする男女が念佛もろとも心中するやうに念佛宗を以て扱はれてゐるのも、これが爲

であつて、單に念佛宗の普及・唱導文學の傳統や竹本筑後掾の一向宗の信者たることによつてのみ解することは許されない。戀愛が死に克つて「のちのよもなをしも一つはちすぞや」と云ふ所には、文藝上の在家的信仰が逆に佛教を動かしてゐる傳統が見られる。

かやうに、虛實論の立場に於ける詞章の情的眞實化理想化に出發して、暖い愛の懷に現實から美化し理想化して受け取られたものが、文學的眞實として考へられたのであつて、例へばシェクスピーアほど峻烈ではなく、醜惡な若しくは境遇の儘に心のあこがれの儘に動いてゆく男女の弱さに涙を灑いで、時に妥協的にさへ感ぜられる暖さに充されてゐるのである。しかも祭文の如きに見られるやうな大衆的な興味に適應しつゝ、之を自らの高さに引き上げるものである。それは常に觀衆と共にする咏嘆を豫想するものであつて、彼の云ふ慰みは此處まで關係づけられて然るべきである。

かゝる慰みを意識して對象を美化し理想化することは、直ちに生命の形式化とは云へないのであつて、かへつて現實的なるものを文學的眞實たらしめる一の態度である。個性的なるものに就いて、それが個性的であると云はれ、具體性を把握してゐると云はれる所以は、それが夫自身の內に一般的なるものを祕め、一般的なるものに繫がつてゐることが見出されるが故である。單に個別的なる所に意味があるのではない。近松と共に當時代を代表して浮世草子をなした井原西鶴も此の立場に徹底したものとは云ひたくないが、なほ個性的なるものを描かうとしたものである。かかる個性的なるものを描かうとする創作態度に對しては、我々は近松の理想化の態度を、一般化せられたものに於いて具體的なる人生社會を表現しようとするものであると解してい丶であらう。卽ち現實的には個々の醜き生、弱き營みが見られるに過ぎないであらう。しかもそれは眞の具體的な生きた人生ではない。これが一般化せられたものに於

いて受け取られた時、それは眞に具體的に把へられた人生の姿であつて、初めて文學的眞實となることが出來る。而してかゝる態度は、彼に於いて既に指摘したやうに、類型的なものを描くことによつて屡概念化せられる傾向を孕んでゐる。彼にあつては、晩年の作に親子の愛を描いてゐるものの多いことが云はれてゐるやうに、此の點に關しても進展が見られるのであるが、彼の亞流に於ける合作又は勸善懲惡を標榜した讀本の如きに於いて概念化した筋道が明瞭にせられてゐると思ふ。

以上の如く觀ることが出來るならば、語り物としての淨瑠璃の有する性格を磨き上げて、諸種の文學的藝術的要素を此處に集成統一しながら、人形芝居の演技の說明者敍述者から出發した淨瑠璃を高めて眞の意味の綜合劇藝術としての詞章を完成したと考へられるのであつて、其處に彼が淨瑠璃作者として擔ふべき最大の榮譽が懸かつてゐなければならない。しかもそれから來た彼の表現態度は、ものの理想化乃至理想主義的態度に在つて、其處にわが國の文學觀の主流を承けながら、日本文學を代表する高峯として、一般的なるものに於いて文學的眞實を表現しようとしたのであつた。心中世話物の道行に於いて彼の與へた解決の如きは、最もよく之を代表するものであらうと思ふ。

並木宗輔の淨瑠璃

——最初期の七篇について——

增田七郎

竹本義太夫が初めて大阪に櫓を揚げて以來慶應まで約百八十年、之に明治大正昭和の七十年を加へた二百五十年間に創作上演された義太夫淨瑠璃は、總數およそ七百篇にも達するであらう。その內で、文樂座其他の人形淨瑠璃及び歌舞伎劇として今日の舞臺に殘されてゐるものは全體の何割位に當るであらうか。今はその詳しい數字を擧げ得ないが、それらの殘つたのは決して單なる偶然であるとは考へられない。その個々の作品についての種々の方面からの檢討、及び綜合的研究は、單に過去現在の演劇を論ずる爲ばかりでなく、將來の國劇、國民の精神生活を考へる上に甚だ意義あることと思はれる。

その個々の作品を考察しようとするのに、種々の方法があるであらうが、「作者」を中心とした立場も有效なものの一つであらう。この方法を用ひて近松、海音等が既に先輩諸家によつて考察されてゐるが、此の他になほ未だ充分に研究されて居らず、しかも甚だ重要な作者と考へられるものに並木宗輔（又は宗助、千柳）がある。

即ち、宗輔が單獨或は合作者として名を署してゐる作品の內、一寸數へただけでも、「那須與市西海硯」「南蠻鐵後藤目貫」「苅萱桑門筑紫𨏍」「和田合戰女舞鶴」「釜淵雙級巴」「鶊山姫捨松」「夏祭浪花鑑」「楠昔噺」「菅原傳授手習鑑」「義經

千本櫻」「假名手本忠臣藏」「双蝶々曲輪日記」「源平布引瀧」「一谷嫩軍記」などが、過去現在の劇場の上演種目中極めて重要な地位を占め、殊に「忠臣藏」「菅原」「千本櫻」の三作の如きは、單に演劇方面のみならず、多數國民の「常識」にまで達してゐるのである。又、この三作は竹田出雲を立作者としてゐるが、實際の執筆に於ては宗輔が主要な位置に在つたといふ事が今迄にも言はれて來た。この點を明らかにする爲にも宗輔の全作品を考察することは必要であらう。

宗輔の傳記としては從來知られる處があまり多くなく、又、新しい材料とても得られなかつたから、今は「日本文學大辭典」その他に讓ることにする。たゞ、彼を田中千柳と同一人とする事は、西澤一鳳なども行つてゐた事であるが、錯誤と認めることゝしたい。

彼の作風の展開は、右大辭典に守隨氏が述べてゐられるやうに、合作者によつて三期に分つのが便利のやうである。卽ち第一期は殆ど皆安田蛙文との合作時代であつて、享保十一年から同十七年まで。第二期は單獨作又は並木丈助との合作を主とする享保十八年から寬保二年まで。(此の次に寬保三年から延享元年迄の歌舞伎作者時代が入つて)第三期は竹田出雲、三好松洛その他を主な合作者とする延享二年から寶暦元年(歿年)まで。と、かやうに分つのである。ここには第一期の作品十五篇を採り上げて見たのであるが、紙數その他の都合上、その約半數しか述べる事が出來なかつた。

なほ、此の期の主要な合作者安田蛙文についても述べなければならないが、其の單獨作數篇について知られるところでは、脚色は散漫に走り易く、且つ理窟めいた所が多く、のちに歌舞伎の作者に轉向しただけに、院本にも其の方のにほひがかなり感ぜられ、淨瑠璃作者としてはあまり優れた才幹の所有者では無かつたと思はれる事のみを記して

置き、餘は他日を期することとする。

一 北條時賴記

享保十一年四月八日から豐竹座に上演された。作者としては西澤一風、並木宗助、安田蛙文の三人が名を列ねてゐるが、既に指摘されてゐるやうに、「今昔操年代記」の記載によつて、實際の執筆者は宗助と蛙文であつたと思はれる。一風の采配の程度が問題になるけれども、一風の他の作との比較などを試みても之は中々困難である。

この作の本文は活字にも移されて居り（續帝國文庫並木宗輔淨瑠璃集）、梗概も解說と共に「日本文學大辭典」（近藤忠義氏執筆）に揭げてある。全曲の趣向脚色は特に傑れたものとは言ひ難く、三段目の首無し死體の件にいささか探偵趣味風な點があり、又、義子と實子に對する母の愛情の卒直な告白、肉附面の傳說の攝入などは注意すべき點であるが、本作が豐竹座としても又人形淨瑠璃の興行上に稀な大成功をおさめた所以の第一は、五段目「女鉢の木」を上野少掾が語つた點に在るのであらう。

なほ、安田蛙文の單獨作「鎌倉比事靑砥錢」（享保十八年四月豐竹座）は本作の後日譚ともいふべきもので、共通の人物も少くなく、玉豐姬が貞孝禪尼となつて相當活躍するなど、本作の豫備知識なくては充分理解されないものである。又、西澤一風の「傳奇作書」に、書替へ（?）ともいふべき脚本「會稽雪後日鉢木」の事が見える。默阿彌その他の「女鉢の木」の諸作のあることもここに附記しておく。

二 淸和源氏十五段

享保十二年二月十五日より豐竹座にて上演。蛙文との合作。

大序は鎌倉營中で、義經反逆の有無について梶原景時土佐房昌俊と畠山重忠本田三郎の爭ひ。次は京都祇園林で、江田源藏

を伴にした義經が、名を知らぬ北國の姫と「持病の女狂ひ」で戯れる。源藏は諫めたがきかれず勘當される。梶原の臣で源藏の勇なる番場忠太が茶店の女（驚く勿れ祇園の梶といふのである——なほ三段目に出る）としめし合せて義經を襲ふが、來合せた伊勢片岡等に追拂はれる。

二段目の口は賀茂河原、義經の御臺卿の君（大納言時忠の娘）の鞍馬詣の道を、上京した土佐坊が暴行したが、辨慶が之を救ひ、土佐坊を堀河へ伴ふ。次は堀河御所で、重忠が詮議の爲滯留してゐて、本田を使つて靜（九條町の傾城）に關する訴へをさせ義經を諫めるが、其の兄に對する衷情、朝廷への忠誠を聞き、奥州秀衡を賴つて都を落ちよとすすめる。義經は土佐坊を血祭にあげ、靜に初音鼓を與へて別れ去る。

三段目の口は「道行よぶ子鳥」で、卿の君は一人、靜御前は本田と共に、別々の東下り。次は鳥本の宿で江田源藏夫婦が藥賣りとなつて、番場忠太に追はれた靜を救ふ。本田は討死し、江田は妻に繩をかけ、父子の情をかせとして忠太に渡す。切は近江美濃の國境なる「寢物語の里」で、近江領は藥屋源五郎（江田）の家、隣の美濃領は後家と一人息子の家である。後家うばらは「靜をうつて出せば手柄になる」と知り、奥に宿を貸した女をそれと思つて鎗で突く。靜を伴ひ戻つた江田が「それは卿の君だ」といふに驚き、一人子を殺し、「自分の亡夫は時忠の臣で、浪人してから熊坂長範と改めたが牛若丸に殺された。その仇討のため祇園林に梶と名乘つて義經を討たせようとしたが失敗し、今せめて敵の片割れ靜をと思つて、かへつて古主の姫を討つた」と懺悔し、江田の妻に功を立てさせるためにゑぐり殺されて絕命する。

四段目。安宅關には富樫左衞門光長と梶原景季が詰めてゐる。義經は龜井、辨慶、伊勢、片岡の四人と共にさしかゝり、大佛建立勸進の山伏と名乘つたが、危い所を富樫のはからひで留置される。切は富樫の館で、その一人娘かるよは都で契つた優男を戀病みに惱んでゐる。富樫は其の相手が義經と知り、娘に刀を持添へさせて自害し、往來の切手を與へ、梶原の不在を幸ひに主從を落す。娘は出家する。

五段目は謠曲「攝待」の飜案で、なほ「はたぞろへ」があり、番場忠太の最後がある。義經物として、多くの傳說を採り入れ、各段の聯絡も相當ついて居る。義經物淨瑠璃としての史的地位、近松等の前作の影響や、後の「御所櫻堀川夜討」「兒源氏道中軍記」等、特に「義經千本櫻」との關係など相當注目すべきものがあるやうである。右梗概に述べなかつた內にも、會話等の中に、逆櫓、土肥の杉山、腰越傳說、梶原の異名ゲヂ〳〵、「源九郎狐」の語などが散見する。二段目の義經の述懷も注意すべきであるが、三段目のうばらに「女熊坂」の姿があり、四段目の富樫に至つては娘への愛情を表にしてはあるが純然たる立役であつて、その判官贔負は注意すべきである。五段目の「攝待」は前作の「鉢の木」同樣、上野少掾の爲のものであることはいふ迄もない。かくの如く本作は判官物の系統上注意すべきものであるが、全體としてのまとまりに於ても「北條時賴記」に劣るものではない。

人形淨瑠璃として後にも再三上演されてゐるが、西澤一鳳が天保十年に三段目を脚色した脚本が「脚色餘錄」に載つてゐる。

三　攝津國長柄人柱

享保十二年八月十五日初日、豐竹座。やはり蛙文との合作である。本文は飜刻あり（續帝國文庫並木宗輔淨瑠璃集及び昭和版帝國文庫紀海音並木宗輔淨瑠璃集）、梗概解說等は「日本文學大辭典」（高野正巳氏執筆）にある。二段目の車引が「淨瑠璃譜」に見えるやうに人形細工上、一の劃期である事や、「菅原傳授手習鑑」に影響した事、五段目に謠曲「蘆刈」「放下僧」を採り入れたことなどが有名であるが、四段目には「假名手本忠臣藏」六段目の趣向がいくらか孕まれてゐるらしい。全體として特に傑作といふ程でもないが、駄作とは言ひ難いであらう。人柱傳說の文學としては注意すべきものの一つである。

四　尊氏將軍二代鑑

享保十三年二月一日より豐竹座。合作者蛙文。

足利尊氏の歿後、嫡男義教が將軍職を賜はるが、叔父直義は反心を抱いてゐる。鹽谷判官は新田討伐の功によつて、光明院から澤田の大納言道兼の娘しののめを、かほよ姫と改め婦妻として賜はる。右大臣具親はかねてかほよを戀してゐて、直義の執權淵部伊賀守と謀り、顏世を奪つて貰ふ代りに直義へ將軍職の綸旨を申受けようと約す。鹽谷の館に顏世輿入の夜、判官の異母弟高德が湯治から戻る。輿入して閨に入つた顏世は夫に向ひ「五節の夜に契つた戀人があるから結婚を解消してくれ」と賴み、鹽谷は表面のみの夫婦たる事を許す。之を立聞きした高德は、家老八幡六郎の妻に濡れかかり、兄に勘當されて去る。淵部等は石を打ちかけたが八幡六郎に追拂はれる。

二段目の口は粟田口で、曾て鹽谷と契つた三河岡崎の傾城重の井が、二人の中の子千代松と母親を伴うて上京したが、鹽谷は顏世を迎へたと聞き、來かかつた八幡六郎をなじつたが、さとされて國へ歸る。次は直義の館で、直義は病に臥してゐる。淵部と相役の執權高師直は「心底知れぬ者」として遠ざけられてゐたが、しひて病を問ひ、大塔宮の怨みからの人面瘡なるを知つて、和氣の佐中といふ醫者を招く。佐中は妙術を以てこれを治療したが、他言しようかとの疑ひで、首討つため師直に縛られる。佐中の妻侍從がかけつけて嘆くがきき入れられない。

三段目は淸水の花見に來た顏世が、女占者となつてゐる侍從にあひ、「二人は姉妹で、汝は大納言の姬と幼い時に取替へられたのだ」と聞かされ、更に「自分の夫(入婿)佐中の命を助けるために、汝に心を寄せてゐる師直になびいてくれ」と賴まれ、やむなく承知する。立聞した鹽谷は情ある詞をかける。切は師直の上屋敷。顏世は姉侍從に伴はれて來て佐中を見、曾て五節の夜に契つた戀人であるのに驚く。師直が「鹽谷を謀叛人と讒奏しよう」とするのを聞いた佐中は之を訴に行かうとして師直に斬りつけられる。佐中は「自分は鹽谷の異母弟高德である」と語ると、師直は「それでは自分と從兄弟だ」と語

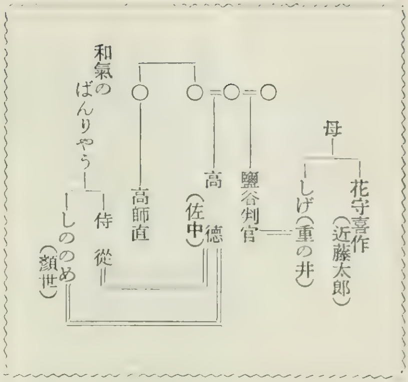
る。佐中は絶命し、侍從顔世姉妹は師直の情ある詞と共に出家する。

四段目の口は「道行きぬかつら」で、二人の尼が亡父を討つた仇を探しに東へ下る。三河の國に來て八ッ橋の里、かきつばたの咲くほとりで、重の井(本名しげ)に伴はれて其家に行く。その夜、重の井は二人の身の上を知らず、鹽谷を奪つた顔世を嫉むのあまり、橋を神木になぞらへて釘を打つと、一間の内なる顔世は苦しむ。母が侍從の物語を聞いて「自分の悴で重の井の兄は近藤太郎」といふのを聞き、姉妹は「それこそ父の敵」と身構へする。母は泣く〳〵討たせる約束をしたが、侍從が障子越しに突いたのは重の井であつた。重の井は身の上を懺悔して絶命する。近藤は甥千代松を守り立て、迎ひに來た八幡六郎と共に出陣する。

五段目は直義、淵部の軍が義教鹽谷等に敗れる。師直は切腹して直義の命乞ひをする。終りに「名筆かけ物ぞろへ」がある。

以上拙い梗概であるが、此の他になほ混み入つた仕組もあつて、全曲の脚色は甚だ複雑である。同胞の愛情、夫婦の義理、姉妹の嫉妬、從兄弟の情愛、或は敵討や、行衛の知れぬ戀人を探す事、主從の情義等々が、目先本位にめまぐるしく展開される結果は、全曲のまとまりを散漫にしてゐる。初段の結婚解消はやや近代的であり、直義の人面瘡はグロテスクな味がある。四段目は伊勢物語を背景に八ッ橋の杜若を用ひたのが思ひ付きであるが、全曲としてのまとまりが緊密を缺くのは單に題材の爲ばかりではない。

此の作で注意すべきは、鹽谷判官の妻に「かほよ」の名が與へられた事、八幡六郎の活躍、高師直を情理備はつた武士として(特に淵部と對照して)描いた事などで、之等は後の宗輔の單獨作「狹夜衣鴛鴦劍翅」(元文四年八月豐竹座)に移され、最初のものは更に「假名手本忠臣藏」に採られて有名になり、第二も(近松の作からの關係もあるが)「忠臣藏」の由良助の前名である。師直の立役化も、曾我物に於ける工藤などと併せて戲曲史上一つの問題の材料となるであら



う。（なほ雜誌「近世文學」第一年第二、第四兩號の拙稿參照）

五　南都十三鐘

同じく享保十三年五月十五日より豐竹座に上演され、やはり蛙文との合作である。

聖武法皇は佛道に歸依したまひ、興福寺に行幸せられる。從弟長屋の皇子は位を望む野心を有つてゐる。法皇は、皇子と左大臣橘諸兄とに、各各五千首の歌を撰ましめ、併せて一萬首を萬葉集と題號せんとの院宣を下される。場面變つて室の津の遊里。傾城三笠は實兄秦民部太郎國answer資に遇ひ「夫の歿後此の勤めは何事」と詰られ、だまされて賣られた由を語る。諸兄の臣佐久間隼人善澄は、人丸社再建の命をうけて出張中三笠に迷つて金を費消したが、長屋皇子の臣藤原廣嗣がとりなし顔に三笠を請出させてつくろひ、佐久間が舅から預り所持してゐる「件の旗」を代りに受取る。

二段目の口は長屋皇子の館で、皇子と廣嗣及其の弟綱手の藤太は謀反の計をこらし、來訪した衆徒按察の兵部（佐久間の亡妻の父）に件の旗を示して「汝の娘は諸兄に横戀慕されて自害した」とだまし、續いて來た諸兄を皆でだまし討にしようとしたが、諸兄の臣屯之助にさへぎられる。次は諸兄の息萬千代の館。怪しい忍びの者を佐久間が捕へると之は廣嗣で、「皇子方は歌が集らぬので萬千代の清書した歌を盜みに來た。以前の恩を思はゞ盜んでくれ。」といふので止むなく伴ふ。萬千代は怪しい影を見て卦算を打付けたが、近寄つて見ると以外にも鹿の死骸があり、法皇御製の短册を盜まれてゐた。綱手藤太等が萬千代の鹿殺しの科を騷ぎ立てるのを屯之助が追拂ふ。

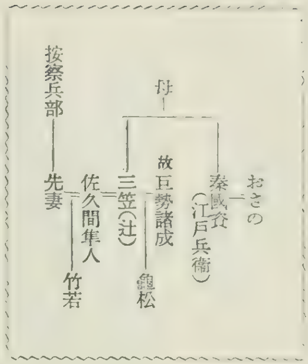
三段目の口は水間村。三笠（木名辻）の兄秦國資は浪人して、妹の子龜松を養ひ奴となつて江戸兵衞と名乘つてゐる中廣嗣の臣に腕前を認められ、召抱へられる事となつたが、町人の間違へたはさみ箱を種に、その中の衣類をゆすり取る。呉服屋は巡見中の諸兄の臣物部勘解由左衞門（屯之助の兄）に此由を訴へる。江戸兵衞は召出され、物部の問に巧みに應答したがつひに言ひ負かされ、龜松の傷けた呉服屋の手代が絶命した故、龜松は命を取られると言渡される。江戸兵衞の妻おさのは義理ある中故、代りに立たうといひ、姑と爭つたが、物部の捌きで、龜松を双方から引き、おさのが勝つたが、「血筋ならぬ故力任せに引いた」といはれ、申譯に自害して解死人に立つ。

四段目。「道行兒手柏」江戸兵衞（國資）は龜松を伴ひ、その實母辻（三笠）の嫁いでゐる都の佐久間方へ急ぐ。次は春日社頭で、辻は諸兄の奥方から「鹿殺しの科で死罪にあふ萬千代の代りに一子竹若の命を呉れ」といはれ、「竹若は夫の先妻の産んだ子であるから」と斷るが、きき入れられぬ。切は佐久間の家で、辻は兄と龜松の來訪を迎へ、夫と先妻への義理から、龜松を竹若の身替りにしようとする。國資は之をきかぬふりをしながら龜松を討つ。

五段目。諸兄の館に佐久間夫婦が龜松の首を持參したが、諸兄は竹若を縛りつけたのを見せ、佐久間に白狀を迫るので、佐久間も腹を切つて、萬千代館で廣嗣に歌を盜ませた事を語り、且つ辻の先夫の敵は自分であると懺悔し、竹若を手にかけて、六歳の龜松と七歳の竹若を合せて十三歳の萬千代の身替りにさせる。次に「ふた子物ぐるひ」があつて、辻は狂ひつゝ菩提院に行く。ここで惡人全滅、諸兄方萬々歳となる。

題名の示すやうに南都十三鐘の由來を說くもので、（之は「妹背山婦女庭訓」にも暗示を與へてゐよう）筋の相當に複雜である割合にはまとまつてゐると思ふ。作中の一主人公佐久間隼人が、紋切型の立役でも敵役でもないのは今日から見て面白い點の一つである。二段目の切では其の罪を舞臺に出さず陰の事とし、しかも觀客には大抵察し得らるやうにし、五段目で之を解決してゐる。辻の先夫の敵などといふ事は寧ろあらずもがなの感を與へる。三段目の江

戸兵衛（秦國資）もやや變つたタイプである。捌きの場は大岡捌き（或はソロモン傳說）の話を採つてゐる。此場のおさのと四段目の辻との義理立ての對照が一つのヤマであらう。萬葉集の件はやや龍頭蛇尾であるが當時の作者及觀客の萬葉集觀を察すべき一資料と言へない事もあるまい。



六　後三年奥州軍記

享保十四年正月二日初日豐竹座上演。之も蛙文との合作。本文は活字にも移され（續帝國文庫並木宗輔淨瑠璃集）てゐるが、便宜上荒筋を辿らう。

源義家と淸原武衡は共に將軍職を望んでゐる。武衡兄弟は源家の重寶鬼切の太刀を渡さぬ石淸水の宮司安倍仲成を殺す。武衡の臣鳥海彌三郎は、義家の臣大宅光任の娘なる妻藤枝を離緣する。武衡と義家は勅命によつて、將軍職を賭けて弓勢の勝負を爭つたが義家の勝となる。

二段目。大宅光任の息維弘は生來の臆病で、父の不興を受けてゐたが、武衡征伐に出陣したく、妻の曙もろ共、和田爲宗にとりなしを賴む。義家の御所で、藤枝は父光任にあひ「弟維弘の功に」と自害した首によつて、維弘も出陣を許される。

三段目の口は義家出征の留守中、御臺は剛臆の兩座を定め、戰の便りのある毎に家臣の功の有無によつてその妻達を分け座らせてゐる。「維弘の臆病のため義家の弟加茂次郎が敵に捕へられた」との報に、曙は面目を失ひ、父國妙と共に自害しようとしたが、御臺の情でゆるされる。切は大宅光任の宅、維弘が逃げ歸つて、親や妻に「切腹せよ」と迫られ、刀を見て絕命するが、母の懺悔によつて身につけた「くじか」の生肝を取去ると臆病は退散し、勇氣に滿ちて出陣する。母は申譯に自害する。

四段目の口は「道行小鳥さし」で爲宗夫婦が鎌倉權五郎の妻東屋と共に鳥さし姿で加茂次郎をとりかへさうと東へ下る。陸奥の住吉社で、鳥海の娘しのぶは右三人にあひ、二人の女を館へ伴ふ。權五郎は武衡の娘みさほを奪はうとして爲宗にあふ。切は鳥海の館で、加茂次郎が捕へられてゐるが、娘しのぶは之を慕うてゐる。武衡の娘みさほも加茂を戀し、こゝに來たがしのぶは加茂に扮して之を耻ぢしめる。彌三郎はしのぶを加茂と思ひ、誤って忠誠の爲にと刺殺す。
五段目は維弘の奮戰、鳥海の戰死。つゞいて義家の「松島詣」、武衡の降服。

鳥海彌三郎
　├─しのぶ
藤枝
大宅太夫光任
　├─藤枝
　├─維弘
妻　　　＝
平太夫國妙──曙

骨組は俗史によつたのであり、全曲としてさまで散漫な脚色ではないが、あまり小技巧に走つてわづらはしい感がある。「宗輔の作は梗概がとりにくい」と黒木勘藏氏も言はれたが、本作の如きはその適例であつて、右に述べた以外の小技巧、小趣向が甚だ目先本位に織り込まれてゐる。三段目の光任の妻の死の如きは院本の中でもあまりにわざとらしい不自然さであり、四段目の戀の場面もやや趣向倒れといつた趣がある。

七　藤原秀郷俵系圖

享保十四年九月十日初日にて豐竹座に上演。やはり蛙文との合作である。

藤原秀郷は將門討滅の功により近江國を賜はる。内大臣時親は伊豫守純友と氣脈を通じて謀叛を企てる。近江の三上の里から掘り出された玉は、六孫王經基の判定で「驪龍の玉」と決まり、秀郷に「よく磨かせよ」との勅諚が下り、且つ瀬田の橋の龍神の怪をきはむべく命ぜられる。瀬田の橋で秀郷は龍宮の乙姫と名乘る化生の女にあひ、一つの俵を讓られる。それより一年後、京七條の純友の館に同輩と共に移された鏡の宿の遊女小ゆるぎは、情夫の盜賊海道三郎を引き入れたが、海道は

純友に捕へられる。

二段目。伏見の里玉磨き由閑の家、由閑は海道三郎の父で、純友に悴の縛首を許されるのと交換條件として、弟子に扮した純友の臣焼山喜内と共に、秀郷の臣を殺して玉を奪ふ。秀郷の執權伊達の左衞門の妻闕屋が折から來かかつて疑ふが、由閑は之を胡麻化す。秀郷は玉を奪はれた罪を負ひ記錄所に籠つてゐたが、闕屋の報告を聞き、巧みに由閑の妻をだまして玉奪ひの一件を白狀させる。由閑の娘お傳は秀郷に父の命乞をなし、母と共に伊豫へ玉を取戻しに出立する。

由閑
＝
妻
├海道三郎（伊賀壽太郎）
│＝
│小ゆるぎ（おてる）
└お傳

平將門
├秀丸（秀郷ノ養子）
神原平馬（武藏權ノ守興世）─闕屋（鳴見）
＝
伊達左衞門
＝
亡先妻
└千五郎

三段目。吉田社頭で六孫王經基は秀郷調伏の願書を掘り出す。秀郷の御臺は執權伊達と共に玉詮議の日延べを乞ふが、內大臣時親が之を罵つて許さない。次は秀郷の館で、「日延べは許されず、秀郷が切腹するか、さなくば代りに一子秀丸を害せよ」との件に一同は驚く。伊達の妻闕屋（秀丸の乳母）は、繼子千五郎を秀丸の身代りにしようとしたが、夫は之を悟り、時親の使者神原平馬の首を落す。折から弓矢を携へて來た經基は、秀丸を射殺して闕屋に迫るので、闕屋も叶はず、「自分は將門の妾鳴見といふ者で、夫の滅亡後瀬田の橋で乙姫をよそほひ、秀郷とは知らず一子を俵に入れて渡し、のち乳母となつて奉公して實子を育て、伊達の後妻となつた。又、神原平馬は自分の實父武藏權ノ守興世である」旨を語り、秀郷に一子養育の恩を謝し、夫の敵を討つ心も消えた旨を語り、經基に髪を切られる。

四段目。「道行旅の海づら」由閑の娘お傳と母の道行。二人は伊豫に着き、高根の地獄谷で卒塔婆の文字から海道三郎は殺されたと思ふが、來合せた純友の臣伊賀壽太郎の妻おてるに繩かけられ伴はれる。切は伊賀壽の館、壽太郎は實は海道三郎で、純友から例の玉を預けられてゐる。お傳母娘は捕はれて來り、伊賀が兄悴であると知つて驚き、仔細を語つて玉を貰ひ

受けたいといふが、伊賀は純友への義理で肯かぬ。おてる（元の小ゆるぎ）は姑小姑のため、乳の下を切り玉を隠し、わざと醉態を見せて「海士」を舞ひ、純友をだまして歸した後に絶命する。

五段目は三上山のむかで退治の勅を受けた秀郷を、時親純友が夜討で攻めたが叶はず、純友は時親を殺し自滅する。秀郷は山麓で神明の弓矢を受け（「弓矢龍神」——上野少掾）見事にむかでを退治する。

筋は相當に複雜であるが、人物の聯絡などさして不自然ならず、全曲の脚色もまづ整つてゐる。山開内の場など觀客をかなり惹付けるやうに描かれてゐる。三の切秀郷舘の閨屋を中心とした作はかなり技巧澤山で、神原平馬の件などはあらずもがなであるが、初段瀨田橋の場の種明しをする他、觀客を驚かせる處が少くない。そして、勿論さうはつきりと出てはゐないが、「敗者の悲哀」といつたやうなものを感ぜしめる。四の切もやはり女性をシテとした場であるが、おてるの姑小姑への義理よりも、「海士」をもぢつた趣向を採るべきであらう。此の段の最後の辭句が「菅原傳授手習鑑」の「寺子屋」のいろは送りの粉本となつた事は有名である。五段目の「弓矢龍神」が上野少掾の爲のものなるは言ふ迄もない。かうしてこの作は宗輔初期の作中では一佳作と言へると思ふ。

以上、七篇の梗概の羅列に終つてしまつた事は藤村先生に對しても誠に申譯ない。宗輔初期の作としてはなほ八篇があるので、それらについては別の機會に述べ、右の七篇と合せて多少考へをまとめたいと考へてゐる。

元祿の俳優追善劇

瀧田英二

元祿期の世話狂言の中に、時の花形役者に關するニュースを捉へて、題材とした狂言があつたからと云つて、別に不思議がるにも當らない事であるが、さて現存する資料の中から、それらの模樣の多少とも知り得るものを拾つて見ると、案外に尠いものである。たとへば、俳優追善劇——俳優の死を主題とした世話狂言——の如きにしても、私が今日迄に知り得たものは、僅かに三種を出でない。

元祿十四年霜月、二世嵐三右衞門が病歿した。此の人、幼名を門三郎と云ひ、親の大嵐に取つては些か不肖の子であつたやうであるが、親讓りの人氣もあり、又晩年には、坂田藤十郎などとは違つた寫實劇の方面に活躍し、難波の劇壇にあつて相當重きを成してゐた人である。「嵐三右衞門雪折竹」と云ふ歌祭文に、當時、彼が夭折の事情を敍して

敬つて白し奉る、是は浪速に、咲くや此の花立役の少將と、名にこそ立てれ立髮は、蘂も器量もよしや世は、定めなき世は朝顏の花の盛りの散りて行く、無常の嵐三右衞門、昔語りぞ哀れなり、角に小の字の櫓幕形見となつて有馬の、月の都の萬太夫、七百兩で抱へられ、上ると否や病氣にて、藥師は術をつくせども(中略)たまに都へ上されて、芝居も勤めず朝顏の、日影に消ゆるぞ本意なけれ、かへすぐも死して後、跡を賴むと云ふ聲も、微かにもつれ哀れなり、惜しや男の年盛り卅三の雪霜と、消えにけれども名は殘る、只世の哀れは是なりと、敬つて白しける。

とある如く、其の年十月迄は、大坂の松本名左衞門座に座本をしてゐたのであつたが、霜月から、京都の都萬太夫座へ出勤する筈になつてゐて、不本意な死を遂げたのであつた。

此の三右衞門の夭折を當て込んだ世話狂言が、「嵐三右衞門雪折竹」といふ狂言で、翌十五年正月、大坂鹽屋九左衞門座で切狂言として演ぜられ、好評を博してゐる。主なる配役は、澤村長十郎が嵐三右衞門、片岡仁左衞門が上町の牢人、瀧岡彥右衞門が藪醫者雲澤、小佐川十右衞門が銀子丸加兵衞、袖島源氏が三右衞門女房、富澤政之助が嵐喜世三郎、高岡村右衞門が喜世三郎の金剛であつた。筋は殆んど不明であるが、登場人物の顏振から見て、三右衞門の日常生活を芝居にして見せたものに相違なく、澤村長十郎が、三右衞門の十八番「さゞいがら五郎助の衣裝を着て、小倉文右衞門と酒のまるゝ所、さりとは物腰、死なれた三右に生きうつし」などとの評もあり(役者二挺三味線)、此の狂言より以前に、果してかうした趣向の作があつたか無かつたかはよく知れないが、兎も角當時としても珍しい趣向で受けたものの如くである。

此の大坂の「雪折竹」と、實によい對稱をなすものに、江戶の中村七三郎追善狂言、「追善彼岸櫻」がある。中村七三郎に就いては、今更贅言を要すまじく、例の傾城淺間嶽で普く天下に知られた名優であるが、寶永五年二月、江戶中村座出勤中、病を獲て夭折した。時に歲四十七、或は四十四であつたとも云ふ。それを狂言に仕組んだものが卽ち「彼岸櫻」である。

此の狂言の方は、幸と所謂狂言本が殘つてゐるので、その大概を窺ふに足りる。それで見ると、此の狂言は、寶永五年三月、中村座の「中將姬京雛」といふ四番續の狂言の、切狂言として演ぜられたものであるが、續狂言の「第四番目」に、

歌舞伎役者一人出で、封じ文を捧げたり。中將姬開き讀給ふに、心鏡院經實日榮俗名中村七三郎とあり。彼の役者申すは、私は坂東又太郎と申し、七三郎とは懇親の中、御廻向をと申しけり。姬は聞き、近比殊勝なり、如何にも聽衆へ披露せん、と高座に立ち、扨て是迄は中將姬の四番續、是より七三郎追善、則ち私、七三郎女房となりまする、と斷り述べ入りけり

とあるから、當時の上方に於て一般的な約束であつた、切狂言の口上を、四番續の中へ織り込んだやうな形式の下に、演ぜられたものである。

狂言本には配役が全然掲げてないが、宮崎十四郎が中村七三郎、嵐喜世三郎が七三郎女房おくま、仙石彦助が醫者角右衛門で、外に京の八百屋おたつおつやに、藤村半太夫と何某とが扮し、また、傳九郎、又太郎、清五郎、新三郎林彌などは、其の儘の役者として出演するといふ、面白いものであつた。

扨て、筋は次の通りである。

▲曾我の十郎世に落ち、幾代餅の店を出して居る所へ、團三郎小姓の姿に成り、十郎に逢ひ、先づ御慶といふ所に、女二人手樽を持ち、是はどなたかと云ふを、言譯はあの女中に聞けとあれば、女聞き、私は、不思議の緣にて朝比奈の妻となり、源家平氏と分りし中に、緣を組みし科にて、御勘氣得て、今は義秀にも慣れぬ業をして、兩人共に十郎樣にかくまはれます、と段々語りけり、團三郎きゝ、扨てはと喜ぶに、十郎は、清五郎〳〵と呼び、日まひがしてならぬと云うて內へ入る。座中出合ひ、御見物へ斷りを云はう、七三郎病氣にて芝居ならず、醫者針立と騷ぐ所へ、棧敷より女中二人出で、それへちよと參り申したき事ありと云うて、舞臺へ上る、清五郎新三郎左衛門、樣子をきゝ、二人の女中すは、私共は京の者なり、一年七三郎樣へお上りの時逢ひましたる、八百屋のたつ、同じくつやと申す者、少し願あつて兩人江戸へ參り候ゆゑ、江戸見物に事よせ、七三郎樣に逢ひたう存じ見物致すに、七三郎樣御機嫌あしきとあれば、案じまして此の仕合せ、一目あはせて下され、と云ふを、三人の者、あはせます事は見合せ、と云うて連立ち樂屋へ入りけり。

此處迄が序で、つまり、曾我狂言の最中に、七三郎が病を發する所の場面である。附して曰ふ、七三郎が曾我十郎の役を得意とした事は、「柳原靑蛙が誹諧の冠、いつ迄も、といへるに、はて十郎は七三郎、と付句」のあつた事にも、推して知れるであらう。

かくて七三郎妻、雜司ヶ谷鬼子母神へ跣足參りにて、先へ、彼のたつも堂に籠りける。鳥居に鴉とまり啼くを、たつも七三郎女房お熊、互に氣にかけたり。飴賣茶碗を割り、南無三寶、此の茶碗此の間煩うたが、遂に往生だ、と云ふ。二人の女氣にかけ、お熊提灯立ち歸らんとするを、たつは見て、嬉しや、といふ。お熊きゝ、何者ぢや、通夜を致し、其の人と同じ提灯、お前は鬼子母神樣ぢや、と互に語り、わしは七三郎女房熊とはわし、京のたつはわし、主の話によく聞き、嬉しがり、いざ門らも、ともぐ\看病して下され、と云ふ所へ、新三郎、七三郎樣氣色散々と迎ひにくる。驚き歸りけり。

以上が中、

最早、役者子供夜伽する所へ、二人の女歸りける。七三郎は、お熊は何處へといふ。雜司ヶ谷へ參り、道に京のおたつに逢ひました、と七三郎に逢はせける。珍しやおたつ、お熊が話で聞いた、上つた時はいかい厄介、はあ又目がまふ、と云ふ。扨ておたつ京の狂言話になり、七三郎きゝ、二人して淺間を歌へ、林彌、振りをせよ、相手におたつ、と既に淺間を歌ひけり。七三郎又目まはしければ、やれ隱居を呼べ、と呼びに行けば、傳九郎うろたへ來り、樣子が惡い、それ木挽町廣右衞門、念比の荒岩角右衞門殿を呼べ、と彥介醫者となり來り、酒故と脈を見、藥はあとより、と逃げんとする、一服と望む、藥師でも叶はぬ、傳九郎側へ寄り、云ひおく事はないか といふ、いや心にかゝるは女房、二歲の時よりも養子間、四十年のなじみ、六歲なる七十郎人々存知の通り、傳九郎、其方の子と思ひ、せめて十五で臨終せば、思ひ置く事はない、此の上、勘三郎ためには、其方は伯父なり、いよ／＼賴む、五年迄は人にも勘三郎と云はせた、おれになり代り賴む、と四十七を一期として、妙法蓮華經と、はかなくなりにけり。▲さて十四郎傳九郎喜世三郎半太夫新三郎、見物に向ひ、追善のため狂言

に取込み御目にかけまする、御回向を受けん爲、お目にかけまする

といふのが切であつた。作者は劇中にも顏を出す、狂言作り中村淸五郎で、これが後にも先にも、江戸に於ける當期唯一の純粹な世話狂言でもあつた。劇評は評判記には餘り所見がないが、「古今役者大全」の中村傳九郎の條に

寶永五年、故中村七三郎、ぶたいにてわづらひ付、相はてられしに付、追善の狂言、宮崎前の十四郞、名物男七三役をつとめ、病氣おもく、傳九〳〵とよぶ時、すりたてのいとびん、羽織小わきざしにて、枕もとへかけ付ての仕内に、あはれを殘し、今に申出さぬ人なし

とあるのが注目に値する。

元祿の末から寶永にかけては、歌舞伎役者の世界にも、漸く時の推移が目立つて、ひと頃の名優が次々に影を消して行く。そして次の享保期を背負つて立つ人々の擡頭が、次第に顯著となつてくるのであるが、其の間、此の種の追善劇は一體、幾回程仕組まれたことであらうか。「雪折竹」や「彼岸櫻」の場合から考へると、名優の死と云つても、それが不過な、乃至は意外な死である場合にのみ、興行政策上から、追善劇となつて現れたやうであるから、或はどれ程も演ぜられなかつたものかも知れない。元祿の京都劇壇の代表者は、何と云つても坂田藤十郎に止めをさすが、藤十郎に關して、此の種の企てのあつた事は終に聞かない所である。

では、元祿の俳優追善劇は、江戸大坂にのみ上演の記錄が存して、京都には全く存しないのか。又追善劇が、俳優の不過な死を捉へて取組まれたものであるならば、あれ程に劇的な市川團十郎の最期に就いて、何故に追善劇が催されなかつたか、と云ふ人があらう。

此の疑問に答へて、私は「役者若咲酒」の次の一文を擧げたい。

男色十七年忌に東辻衞門の役、左京かたへ本卦ぶるまひに來て、藏の内の三右衞門殿と我が女房のかもん殿としみ〴〵と挨拶し起請文を渡すを不義と心得、くらがりにて、誰ぢや〳〵と三右衞門殿の羽織を捕へらるれば、三右殿羽織を脱ぎ逃げ入らるゝ、羽織に在京四郎五郎殿の紋付き有を見て、こりや其方の羽織ぢやと問はるゝ所、大きによし、此の仕組は、先年京にて金子殿の作にて、市川團十郎百ヶ日と云ふ狂言の形也

此の文は、享保五年十一月、大坂嵐三右衞門座で、「男色加茂侍十七年忌」と云ふ狂言をした時の、東辻衞門に扮した坂東彥三郎の批評であるが、是によつて、市川團十郎が悲慘な死を遂げた、寶永元年二月十九日を去る、百ヶ日の頃、京の金子吉左衞門の手に依つて、追善劇が仕組まれた事を信ずる事が出事る。年代記を繰つて見ると、場所は都萬太夫座の筈であり、坂田藤十郎、三笠城右衞門、小野川宇源次等が一座してゐて、やはり「加茂侍」の狂言を演じてゐた時であつたから、意外な人が團十郎に扮した事であらう。又此の「百ケ日」の狂言の存在によつて、私は團十郎が、市村座の舞臺の上で、生島半六の狂刃に倒れた原因に就き、當時既に、半六を廻つて不倫な取沙汰があつた事實をも、信じ得られるやうに思ふ事である。

寶曆期に於ける上方歌舞伎劇の擡頭

鶴見誠

大阪の地を中心として、享保年間を引き續き榮えて來た操り劇は、享保末から寛延にかけて續々と代表的名作を出し、將にその隆盛の頂點に達した。從つて相ひ似た演劇形態を有する歌舞伎劇は、自然その繁榮に壓倒せられて、甚しく振はなかつたのが當時の上方劇壇の實情である。併し歌舞伎劇は不入不評判に喘いではゐたが、滅亡に瀕する樣な事はなかつた。ぢつと忍從の形で、堅實にその藝と家名とを傳へてゐたのである。當時の歌舞伎劇は操り劇の如く民衆の支持を享け得なかつたから、見る可き進歩は成されなかつたけれども、將來への發展性は充分に保持してゐたのであつて、唯その演劇の本領が時潮に合はなかつたものと考へられるのである。此の享保の重壓期に於て歌舞伎劇は、操り劇の直寫的摸倣上演の如きを事としてゐたとはいへ、終に退轉する事なく引き續き興行されてゐた事に先づ注目したい。而して此の衰退期の歌舞伎劇から全盛の操り劇へと、浸入して行つた藝風すら見出す事が出來るのである。元文元年五月、竹本座上演の「敵討襤褸錦」の大晏寺堤の場に於ける、春藤治郎左衛門の型に、享保期の名優姉川新四郎の非人敵討の型が移入せられた事、又寛延元年八月、竹本座上演の「假名手本忠臣藏」の七段目の由良之助の型として、澤村宗十郎の演技がその儘に取り入れられた事等は有名な事實である。

而して此の衰微の時代に於て、それは朧ではあつたが、猶、操り劇に對比して歌舞伎劇の優秀性が認められてゐた

事が知られるのである。よし當時の歌舞伎劇が操り劇の摸倣を事としてゐたにもせよ、其處に古來「かぶくもの」「華やかなもの」「なぐさみのもの」として發展して來た歌舞伎劇の、官能的な華美艶麗の魅力は必然に發揮せられてゐたに違ひないのである。

歌舞伎劇の魅力として第一に認識せられてゐたのは俳優の魅力である。此の頃の歌舞伎劇の強味は一つに此の魅力のみであつたと云つて過言ではない。戯曲性に於ても、音樂的快調に於ても、舞臺上の自由さに於ても、殆ど見る可きものがなく、此の俳優の魅力を除いては總ての點で操り劇に及ばなかつたのである。而して此の一つの強味のみを以てして正徳・享保から寛延に至るまで、約四十年間に渉る上方歌舞伎劇の命脈を支へてゐたのであると考へる時、此の魅力は誠に大なるものがあると云はなければならない。若し操り劇の中から類似の役割を演ずる人形のみを取り出して是を俳優に比較するならば、多少は人形の方に優れた點を算へる事が出來ようとも、それは多く淺薄幼稚な大衆的興味の方面であつて、本格の地藝の效果に於ては遠く俳優に及ばない所であらう。寧ろ現代の我々の常識を以てすれば、人形劇が俳優劇を壓倒してゐたといふ事は、輙くは信ぜられない事實である。此の珍現象に對するかうした疑問は、早く當時に於ても存在したのであつた。明和二年正月刊行の役者評判記「役者久意物」京之卷、江戸坂京右衞門の條に

> 既に竹本義太夫芝居にて近年名人と呼ばれし人形遣ひ古人吉田文三郎（寳暦十年歿）曰く「私は人形遣ひ故、隨分老若男女共人間の所作を見覺え、いさゝかの事も人のする通りを見習ひ人形を遣ふに、近來の歌舞伎芝居を見物致すに、役者衆の内多く人形の眞似をして藝をせらるゝは不審也」といへり。

と傳へてゐる。その不審とする所以のものは、心の裏に、演技の上に於て人形の不利と、俳優の優越とを是認する故

であると解してよいであらう。又延享三年正月刊行の評書「役者三叶和」の大阪之卷、榊山小四郎の條に

　則釣舟三婦の役、生（うぶ）の親仁に地に力量の顯れしお人故尤の仕內、中人已上は悅びます。然れ共操狂言（操り種の狂言の意）は、人形の仕形をまねぶを、當地には專一とする故、殘念に存じます。去りながら思入れはほんの釣舟〳〵

とあつて、優れた俳優でありながら時の風潮に拒まれて、充分に伎倆を發揮し得ない事が惜しまれてゐる。一般より秀た觀劇眼を有する中人以上の人々には、その俳優の切實精細なる演技が認められてゐたのであつたが、それは猶一般大衆の認め得る所ではなかつた。民衆の多くは操り劇に對する傾倒から、俳優に對してまで、人形の仕內をまねぶ事を要求した。此の時代にあつては演技者の場合に於ても、人形の如き、動きの自由な誇張と變化とに豐む技藝が喜ばれ、俳優の比較的纎細地道な藝風は迎へられなかつたのである。從つて歌舞伎劇は己の本領たる地藝の強味を充分に發揮する事を得ずして、人形の仕內などを眞似つゝ、借物の脚本を上演してゐなければならなかつたのであつた。情緒纒綿たる世話場の如きが演ぜられるに至るのは、遙か後年の事に屬する。併し乍ら兎に角にも此の衰退期にあつて歌舞伎俳優の魅力は、先づ上層觀客から着々とその認識を廣めて行つたものと考へられるのである。

扨操り劇の蹂躙期にあつて、多少なりとも歌舞伎俳優の優越性が認められてゐたとすれば、それは如何なる傾向に於てであつたらうか。それには先づその傾向を支配する所の當時の大阪人の嗜好の特色を一應知つて置く事が必要である。その大衆の傾向を最もよく傳へてゐるものは、享保期に於ける名優姉川新四郎の名言として記されてゐる一文であらう。卽ち「脚色餘錄」三篇、中の卷「姉川新四郎名言の話」の條に

　故姉川新四郎の曰く、江戸の氣持は二十ばかりなり。大阪は三十ばかりなり。京は四十以上の氣持なりと語りけるとなり。是いかなる義と尋ねければ、江戸は二十ばかりの氣持なればこそ物頼しく受合ひ、活氣にして締まらぬやうに見ゆる。さる

によつて、くはつと白眼で見えでとる。大阪は三十ばかりの氣持にして、少し分別して、理非を正し、男を立つる氣持なり。京は四十を越えたる氣にして、能く物にたづさはり、始終を考へて物をなす氣持なり。此の心なくては三箇の津の藝は仕分け難し。

とある。卽ち江戸は血氣のみ盛んにして條理なく、大阪は分別して理非を正すを好むと共に覇氣侠氣をも喜ぶとなし、京はかゝる勇しき事なく熟慮反省の體であるといふのである。元祿期に於て京都が演劇の中心地であつた時には、其處に榮えたものは坂田藤十郎の和事、傾城事であつた。享保に入つて商業都市大阪の繁榮は自ら文化の中心を此處に招き、演劇も又その中心を京都から大阪に移すに及んでは、此の地に喝采せらる可き藝風は必然に變化して來る筈である。

新四郎の云ふ所の「分別して理非を正す」事を好む人々に適合する藝風は、先づ裃を附けた武士、家老職等の明智・氣品・威嚴に滿ちた藝格であらう。是は惡人・侫人をきめつける場合、最もよく發揮せられる技藝であつて、かゝる場面には又當然りりしい武術の冴えをも伴ふ故に、是を世に武道實事と呼んでゐる。享保期に於て此の武道實事に名を得た俳優には小佐川十右衛門・桐谷權十郎等を擧げる事が出來る。此の武道實事に對する傾倒は實に著しいものがあつた。その顯著な例として女武道事がある。卽ち女形に於ても荒々しい此の藝風が要求され、かうした珍現象を生ずるに至つたのである。佐野川萬菊・二世芳澤あやめ・瀨川菊次郎・嵐小六・中村喜代三郎等殆ど總ての此の時代の名女形が、何れも此の勇壯な武道事を得意な藝として演じてゐる。寛保三年正月刊行の「役者和歌水」京之卷、嵐小六の評に

濡事なり、武道事なり、所作事はお家なり、三つ拍子揃うた御上手。外はあらしの小六さん〳〵

と記してゐる。濡事と所作事は聞えるが、武道事を女形の三拍子の中に算へるとは、誠に不可思議な現象と云はなければならない。それは明かに此の時代の武張つた藝風に對する謳歌を物語るものであり、未だ窈窕たる女形の地藝の如きはあまり注目されてゐなかつた事を示すものである。かくて美しく着飾つた女形が、女家老又は女使者として舞臺に現れ、雄々しくも大の男を取つて投げ、大悪人をきめつけて喝采を博すのであつた。

更に新四郎の云ふ所の「男を立つる氣持」とは卽ち義氣・任俠を貫き通す俠客の心である。此處に俠客物・喧嘩物・力士物等の狂言の隆盛が考へられる。此の道の享保期に於ける名優としては姉川新四郎が一世を風靡してゐた。そしてその藝が操り劇にまで輸入された事は既に記した所である。此の種の達引事は操り劇に於ても屢取り扱つてゐるのであるが、是は特に生きた俳優の演ずる歌舞伎劇に於て初めて充分に效果を收め得可きものであると思ふ。此の頃の歌舞伎の舞臺では未だ、豐滿な肉體・威大なる體格から來る官能美を有效に發散するまでには至つてゐなかつたけれども、それにしてもその勢その勇しさは到底痩せ細つた怪異な風貌をした、圓滑な動きの取れ得ない木偶の及ぶ所ではなかつたであらう。さうした魅力のあればこそ黒船狂言が新四郎に依つて數回の上演に堪へ得たのであり、又操り劇では「夏祭」に似てゐた故を以て不評であつた「双蝶々曲輪日記」が、一度歌舞伎劇に入るや好評を博し得るのである。

先に俳優の演技の特色は人形に比して圓滑・切實・精細なる點にあると述べたのであるが、さうした俳優の演技としてはさ程適合した技藝とは云ひ難い、以上二つの傾向の如き、武張つた勇壯單純なる藝風が歡迎せられてゐたのは、やはり上方に於ける演劇の中心を成してゐた大阪の地の時の風潮が然らしむる所であると考へられるのである。寛保三年三月刊行の「役者桃野酒」大阪之卷には姉川新四郎を評して

成程當津(大阪)の風を呑み込み、男一疋賴しき上手藝と記してゐる。而して生きた俳優に最も適切な、纎細にして情緖に富む純世話的な演技の如きは、未だ迎へられなかつたにしても、人形の外形的誇張空粗の藝風から、地味堅實にして迫力切實味に富む俳優の藝風の認識へと移つて行かうとする所に、民衆の觀劇眼の自然な進歩に氣附かれるのである。

扨寶曆期に入るに及んで歌舞伎劇は俄に隆盛となつて來る。如上の藝風に對する喝采は益〻高められ廣められて、此處に歌舞伎劇は數段の發展をなす事となつたのである。それは單に上述した所の民衆の觀劇眼が次第に進歩して來た事に依るばかりでなく、此の時期に當つて商賣敵である操り劇が、衰運に向ひ初めた事も又大きな原因であつたに違ひない。操り劇はあの種の演劇としては、もはやあらゆる進歩を成し盡してしまつて、漸く人心に倦まれて來た。故黑木勘藏氏は興味ある一節として「鶊山姬捨松」(元文五年二月、豐竹座)の次の一文を掲示されてゐる。

是迄に手をかへ品をかへ樣々の身代り。仕盡して仕樣がない。どう思ひ廻しても身代りは古い〳〵。

身代りばかりではなく、此の頃になると操り劇はあらゆる趣向手段に於て行き詰りを來し、總てが繰返し蒸返しになつてしまつてゐた。此の時に當つて大阪の人々の人氣が、俄に歌舞伎劇の方に向つて來たのも又自然の勢であらう。よしその脚本その演出は極めて間のぬけたものであつたにしても、兎に角にも歌舞伎劇は强く直接に觀客に訴へる所の、官能的魅力を持つてゐたのであるから。かくて日々に繁榮して行く歌舞伎劇を見て、淨瑠璃作者の多くが、盛んに脚本を書き初めた。寶曆初頭に於て淨瑠璃作者の多くが歌舞伎作者を兼ねてゐるのはその故である。此の趨勢に押されて歌舞伎劇はその演出に於ても、脚本に於ても當然革新の氣運を孕んで來た。かくして、如何にせば此の大きな

體格の生命を有する俳優を乘せた舞臺を、操り劇に於けるが如く、自由に手輕く動かし得るか、といふ長年の極めて重大な問題が解決される時が來た。此處に歌舞伎劇史上特に一時期を劃する所の、舞臺建築の大改造がなされる事となつたのである。脚本に就いて云へば、淨瑠璃に依つて教へられた所の複雜尨大なる筋を、如何に整理して條理の一貫と形式の均一とを與へようかが問題であつた。而して此の問題も又此の寶暦期に於て立派に解決されたのである。脚本構成の四季四情說などが生れ出でた程、此の時代の脚本は甚しく整つた形式を持つてゐたのであつた。國太夫節繁太夫節を中心とした歌淨瑠璃の發達につれて所作事も又大いに興つた。彼の有名な「娘道成寺」が中村富十郎に依つて初めて演ぜられ、大入を取つたのは寶暦二年京都での事である。又下座音樂が單なる能の囃子の域を脫し、盛んに淨瑠璃・俗謠・流行歌の如きを取り入れて、巧に有效に使用され初めたのも又此の期間である。

而して此の擡頭の時期に於て歌舞伎劇は如何なる藝の傾向に於て、時の民衆の心を捕へたであらうか。それはあの享保の衰退期にあつてよくその滅亡を支へた所の、武道實事・仁俠事が更に強く充分に發揚せられた所の藝風に依つて成されたのであつた。武道實事を以て寶暦期を風靡した人に中村十藏が居り、女武道に名を得た人に中村富十郎がゐる。此の武道實事に對する傾倒は脚本の結構をも規定するのであつた。寶暦期に入つて整理劃一化された脚本を見ると、劇の結末に近い頃に必ず、雲行の奇瑞とか不自然な動物の爭鬪に依つて、實事師が、故事を引いて吉凶を占ひ奸計を覺る一場が設けられてゐる。そしてその技藝を位事と呼んで、威嚴・品位・明智・學識に滿ちた風貌が喝采されてゐるのである。

扨寶暦期に入つて注目す可き一つの藝風が興つた。それは實惡事である。是は敵役より發展したものであつて、敵役の道化的要素を去り、實事の迫力を加味した惡役である。その發生は早く元祿期に見られ、享保期に此の種の藝風

に名を得た人々には、藤川平九郎・嵐七五郎・藤岡大吉がゐた。元來は武道實事を演ずる立役にきめつけらる可き從位の役柄であつて、正しくはその藝力が武道實事師と對立する時、最も效果を收む可きものである。それが寶暦期に入るや勇壯な藝風を好む風が益〻甚しくなり、天下を覆し國家を呑まんとする如き逆賊の勇猛殺伐粗剛さが大いに受けて、此の實惡事は却つて主役の位置を占めるに至つた。そして此の藝風は著しく隆盛となつて、寶暦期を代表する所の顯著な一大技藝となつたのである。その名優としては中山新九郎・中村歌右衞門・淺尾爲十郎の如きが數多く輩出してゐる。

かうした藝風が榮える所以のものは先に記した如く、時の演劇の中心地である大阪の地風の然らしむる所である。蓋し而してその隆盛を招來し得たのは、生命ある俳優にのみ許された巧緻微妙なる演技が認められて來た爲である。蓋し腹藝の如きより生ずる殺氣迫力は、到底人形の世界では現し得ない所であつたであらう。寶暦初頭の名作者並木正三の出世作「けいせい天羽衣」(寶暦三年十二月二十四日より、大阪、大西芝居、三條定助座、二の替り狂言)の成功も、武道實事の名人中村十藏に配するに、實惡の大家中山新九郎・中村歌右衞門の兩人を對立せしめた故の賜物であつたと解せられるのである。

扨此の實惡の役を極めて强惡なものとして活躍せしめる爲には、さうした脚本が必要である。作者の脚色の才智に依つて、その藝は更に益〻冴えて來るに違ひない。彼の享保期に於ける實惡の名優藤川平九郎の技藝を見るに、手强いといふ點では實に目を背けしむる樣な寫實的演技を示してゐたのであつたが、その役の人物は甚だ稚氣に滿ちたものであつた。それは一つに當時に於てはかゝる藝風に對する大衆の要望は旣に存在してゐたのであるが、未だ是を脚色する所の然る可き作者を得なかつたといふ、過渡的現象に原因するものと考へられる。かくして此處に享保以來そ

の必要を叫ばれてゐた脚本の要求が、更に一段と强く感ぜられるに至つたのである。而してその脚本は此の實悪師と武道實事師との二つの對立した役柄を充分に活躍せしめ得るものでなくてはならない。されば寶暦の初め先づ現れて來た作者達は、第一にその脚本に筆を染めるに當つて、かゝる要求を滿す事が必要條件とされたのであつた。從つてそれ等作者の中心の作品はどうしても時代物でなければならず、その時代物は大懸りな叛逆物・お家物でなければならなかつたのである。かうして叛逆物・お家物が益〻大懸りに益〻複雜に脚色されようとする時、最も困却を感じたのはその實際の舞臺の運用が意の如くでなかつたといふ事である。此處に於て舞臺裝置家・劇場建築家が、歌舞伎劇の自然な生長に伴ふ是等の要求に加へて、更に緊要とされる事となつた。寶暦期の作者並木正三・竹田治藏等が何れも單に作者であるばかりでなく、同時に舞臺建築に通じて居り、その大改造を成し得る人であつたのは、かゝる時の要求に應じて現れた人々であつたからである。かくて大規模な舞臺建築の革新が行はれ、廻り舞臺三段返し、大掛りな、迫上げ迫下げ・押出し・引割り等の實に優秀な裝置が考案される事となつたのである。是等の裝置の總てが必ずしも此の時の新發明であつたのではないけれども、然し、次第に考案されて來た是等の諸裝置が、大改造を見、集大成されて、實際の舞臺の上に極めて大掛りに效果的に運用されるに至つたのは誠に此の寶暦期の事である。此處に初めて脚色の自由が獲得せられ、實悪方は思ふ儘に活躍する事を得る事となつた。長く衰運を歎かれてゐた歌舞伎劇が寶暦期に入るや毅然として頭をもたげて來たのは、是等の事情が重要な原因であつたのである。寶暦期に現れた隨一の作者並木正三の如きが、文筆の作者であるといふよりも、かうした建築の才・奇想の思ひ附きに優れてゐる人であつたといふ事は、時の歌舞伎劇に取つて誠に幸であつたといはなければならない。彼並木正三はその實悪の藝に增々剛悪性を加へる爲に、魔術・幻術の如き、神佛鬼畜の通力の如きを取り入れ、日本はおろか唐天竺までも一呑みにしようとい

ふ大奸物を盛んに描いて、大衆のやんやの喝采を博してゐる。最後の捕物の場面の如きに於ては、必ず廻り舞臺や三段返し等を併用して、七・八回に及ぶまで急速に奥座敷の場・花園の場・隱家の場などを繰り返し轉出して、その遑しさを示してゐる。そして正三は歿年に至るまで、此の傾向を發展せしめて止まなかつたのであつた。而して寳暦期の脚本をかゝる叛逆物・お家物となさしむる所以のものは、實に享保以來の俳優の持つ誇る可き魅力である所の、武道實事・實惡事を充分に躍動せしめんとした故に他ならないのである。

扨次に仁俠事の藝風に就いて考案して見よう。此の藝風も又前代より受け繼がれて、寳暦期に入るに及んで益々時の大阪人に歡迎せられ隆盛に赴いた。此の種の技藝に名を得た俳優には三桝大五郎・中山文七等がゐる。是等の俳優は何れも白皙豐滿なる肉體の持主であつて、舞臺に裸體を晒したりなどして、更にその官能美を發散して、充分なる效果を收めたのであつた。事此處に至れば如何に優れた戲曲を持ち音樂を持つてゐたにしても、操り劇の如きが容易に追隨し得る所ではないであらう。

云ふまでもなくかゝる俠客物・力士物・喧嘩物は世話物に屬する。寳暦期に入つて歌舞伎劇が擡頭して來た時、其處に要求された所の世話物は、かゝる種類の世話物であつたのである。所謂世話物と呼ばれる內容には甚しく異色のある、かうした單純・明朗・勇壯・痛快味を生命とする此の種の世話物が作られねばならなかつた理由は、既に先に記した如く、男を立つる事を好んだ時の大阪の人々の特性の然らしむる所である。寳暦に入つても民衆の觀劇眼は精細なる地藝の纏綿たる情趣を感じ得るまでには未だ進歩して來なかつたのである。純世話的な題材である所の坊間に流はれた心中事件の如きを脚色する事は、寳暦期に入つて益々多くなつた。併しそれは單に一時の場當りを狙ふだけであつて、僅かに切狂言として一日の興行の最後に於て附加上演されるに過ぎなかつた。既に操り劇に於ては愛慾の悲劇・

人情の葛藤の如きを盛んに扱つてゐたのであるが、それが機微を穿ち委曲を盡して描かれたのは、淨瑠璃の詞章に於てのみ成されたのであつて、實際の舞臺の上の人形の動きは極めて大まかなものであつたのである。思ふに此の操り劇の人情事もあゝした調子づいた音樂の諧調と人形の躍動とを作はなかつたならば、恐らく時の人々の觀賞に堪へ得なかつたであらう。而して此の寶曆に於て擡頭して來た歌舞伎劇は、さうした純世話的な演技を本領としてゐたにも拘らず、操り劇の人情事が此の歌舞伎劇に受け繼がれ、發展して、精細な演出を見る樣な事はなかつた。正三の色模樣の場の如きは、單に露骨であるばかりであつて、何等の情趣をも感じ得ないのは、作者にその筆才がないといふよりも、やはり時代の然らしむる結果であると考へられる。而して此の大阪を中心とした上方の、此の時期に於て歡迎せらるる所の世話物は、どうしても俠客物・力士物・喧嘩物の如きでなければならなかつたのである。

かくの如き姿に於て長く沈滯に苦んでゐた歌舞伎劇は、寶曆期に入るに及んで俄然擡頭して來たのである。明和に入るとその隆盛に押されて操り劇は幾度か退轉の憂目を見るに至つた。淨瑠璃作者の殿將近松半二の如きは、かゝる寶曆期の歌舞伎劇の演出を取り入れる事に依つて、僅かに成功を收め得たのである。かくてその繁榮の地歩を固め得た上方歌舞伎劇は、安永天明寬政へと引き續き、奈河龜輔に依る時代物、並木五瓶に依る世話物の完成へと、發展して行くのであつた。

こちやえぶし

——近世流行唄考——

藤田德太郎

幕末から行はれて、いまだに口ずさまれてゐる「こちやえぶし」——「お江戸日本橋」ともいふ——は、なつかしい旋律を持つ美しい歌曲である。今日では、日本の代表的民謡として、外國にまで知られてゐる。

此の歌が流行しはじめたのは、天保二三年頃からであらう。『山家鳥蟲歌』の志摩及び下總の部に、

曇らば曇れ箱根山晴れたとてお江戸が見ゆるでもなし

といふ、全く同じ歌詞を二箇所に出してゐるが、此の『山家鳥蟲歌』を書寫して傳へたと思はれる、『諸國盆踊唱歌』の柳亭種彥の註には、此の歌に對して、「天保二年の頃江戸にて行はれぬ。見ゆるぢやあるまいしと歌へり」と記してゐる。これは、こちやえぶしの事を云うてゐるのである。然るに『守貞漫稿』音曲の部には、

〽お前を待ち〳〵蚊屋のそと蚊にくはれ七つの鐘の鳴るまでもこちやかまやせぬこちやかまやせぬ

右江戸は天保三年、京阪は同五年に行る。

とある。種彥は天保二年と記してゐるが、これは多分天保三年の記憶違ひではないかと思ふ。『巷街贅說』卷三に、

〽お前を待々蚊屋の外蚊にくはれ七つの鐘のなるまでもコチヤかまやせぬコチヤかまやせぬ

〽お江戸で名高き團十郎あらためて海老藏になります親の株コチヤ下手でも上手でもかまやせぬ

七代目市川團十郎、今年市村座にて海老藏に改名あり、忰新之助八代目團十郎と改名せり。

〽かん座のことぶき寶物金のさい猿若衣裝にあたけ丸コチヤかまやせぬ

五代目中村傳九郎、十二代目中村勘三郎に改名、禮相續に付、壽狂言ありて、拜領の金の麾、猿若衣裝、安宅丸船の繪圖を見せしは、今辰年四月也。

右の外文句は猶さまざま多しといへども、下がゝりのみなれば、只其一つ二つを爰に記しぬ。

と見えてゐるのも、天保三年の事である。『天言筆記』卷一にも、

同年(天保三年)九月晦日、西丸下水野越前守屋敷より出火、森川內膳正、松平周防守屋敷燒候、此節かまやせぬといふ唄流行す。

〽お前は濱田の殿さんかえ、濱松に燒かれて御殿が眞つ黑だ、やけたとて、御國が替るぢやあるまいし、こちやかまやせん、かまァやァせん引

と見え、『甲子夜話』續篇卷八十九に、

是は俗話なれど、琉來の頃は都下に洋々たる謠の鬧に、こちや構やせぬと云ふことありて、

曇らば曇れ箱根山晴る迚大江都が看えるぢや有るまいしこちや構やせぬ

又、

深川遊びは舟で行く急がして八幡鐘の鳴らぬ中ちよいと往つてちよいと還りや難の事は無いこちや構やせぬ

抔云ふ數種の謠ありし。

とて、以下、此の流行唄の、「こちや構せぬ」といふ語をもじつて、洒落を云ふ話が書いてあるのも、天保三年の事が

らである。『天保佳話』に、

天保初年のはやり歌に、

お前を待ち／＼蚊蝠(カヤ)のそと蚊に咬(クハ)れ七つの鐘の鳴るまでは

と云へるも亦これである。

同じ天保三年の春には、此の流行唄は、早くも名古屋に輸入せられてゐた。小寺玉晁の『小唄のちまた』に、「天保三壬辰年春江戸より流行はねだ節」と題して、

〽お前と知らずに戸をたてたおいとしや軒端の露にうたせたこちや軒端の露にうたせたコチヤカマヤセヌコチヤヱイコチヤヱイ

〽軒端の露はまだ愚かまだ愚かしら立つ浪にうたせたこちやしら立つ浪にうたせたコチヤカマヤセヌコチヤヱイコチヤヱイ

〽お前とならば何處迄も山奥のさいかちばらの中までもこちやさいかちばらの中までもコチヤカマヤセヌコチヤヱイコチヤヱイ

〽お江戸で名高き團十郎改て蝦藏となつた親の顔こちや上手でも平手でもかまやせぬコチヤカマヤセヌコチヤヱイコチヤヱイ

〽日本橋をば七つ立初登り行列揃へてこれわいさこちや行列揃へてこれわいさコチヤカマヤセヌコチヤヱイコチヤヱイ

〽お前待ちます蚊屋の外蚊にくわれ七つの鐘の鳴るまでもこちや七つの鐘の鳴る迄もコチヤカマヤセヌコチヤヱイコチヤヱイ

〽七つの鐘はまだ愚か寺々の夜明の鐘のなるまでもこちや夜明の鐘のなる迄もコチヤカマヤセヌコチヤヱイコチヤヱイ

〽坊さん忍ぶにや闇がよい月夜には衣の袖がびらびらこちや衣の袖がびら／＼コチヤカマヤセヌコチヤヱイコチヤヱイ

〽曇らば曇れ箱根山晴れたとてお江戸が見えるであるまいしこちやお江戸が見えるであるまいしコチヤカマヤセヌコチヤヱイ
コチヤヱイ

〽お前となればどこ迄も親を捨て此世が闇にならうともこちや此世が闇にならうともコチヤカマヤセヌコチヤヱイコチヤヱイ

の如き歌二十八首を掲げ（『近世文藝叢書』第十一所收の分には、卑猥な歌を省いてゐるので、掲載の歌數は少くなつてゐる）、又、「同じ節十二月」とて、十二首を載せてゐる。以上の歌の中、「日本橋をば七つ立」の歌は、明治以後に、「お江戸日本橋七つ立」として、東海道五十三次を歌ひ、最も廣く喧傳せられた歌詞となつてゐる。「お前待ちます」も、普通は「お前待ち待ち」と云ひ、前に引いた諸書にも見えてゐる、此の流行唄の代表的な歌である。（但し、「待ちます」の「す」は、「ち」の誤寫で、「待ちまち」の誤かも知れぬ。）「曇らば曇れ」も名高い歌詞で、既に『山家鳥蟲歌』にも見えてをり、前に記した如く、種彥が註してゐる所である。此の歌の源と思はれる歌は、早く、「隆達小歌」に見える、

曇らば曇れ照るとても君を思ひの晴るるでもなし

これより系統を引いてゐる歌詞であらう。更に、『小歌事文類聚』を見ると、

▲箱根山晴れたとて、お江戸が見えるではなし、こちやお江戸が見えるではなし
○これは明和年中にはやりし小歌なり（下略）

とあつて、これは初句の「曇らば曇れ」を逸してゐるが、此の初句を補ふと、此の歌は、殆ど全く、「こちやえぶし」の歌詞と同じで、終の「こちやお江戸が見えるではなし」といふ特色ある繰り返しまでが同一である。從つて、此の歌こそは、「こちやえぶし」の直接の祖とする事が出來るかも知れない。天保の「こちやえぶし」は、明和の流行唄の

系統を引くもので、それが再度流行したものと解釋してもよからう。この明和の流行唄と同じ流行唄と思はれるものは『親子草』卷一に、明和五年の吉原火災の事を記し、その頃の流行唄として、

〽十六七はねごいもの梅の木の下りし小枝を枕にコチヤさがりし小枝を枕に

〽君が姿を戀にして三味線の糸より細くやつれたコチヤ糸より細くやつれた

といふ歌を掲げてゐる。此の第一首目の歌は、民謠として古來名高い歌で、『落葉集』(元祿十七年刊)卷二の「柴刈風流」の中にも、田植歌として、

十七八はねごいもの梅の木の下(さが)りの枝を枕におよりたか

と見え、『歌謠字數考』の「臼つき歌」の項に、「雲萍雜誌に、信州中野の麥舂き歌とて記したるが、五首あり、且是は盤珪禪師の作りたるものなりといへる、如何がにや」とて掲げてゐる五首の歌の中に(但し『雲萍雜誌』には、此の事見えず、著者の思ひ違へであらう、又、盤珪禪師作の麥舂歌といふのは、此の歌ではない、これとは別の歌である)

十七八は眠いもの梅の木のさがりし枝を枕に

ともある歌で、なほこれは、『俚謠集』の神奈川縣麥打歌、『甲斐民謠採集』(椎橋好氏編)の地搗唄等にも見えてゐる。それを取り用ゐたものであるが、とにかく、此の歌の形式や、「コチヤ云々」といふ囃子詞を用ゐてゐる所から考へても、これが『小歌事文類聚』に記した歌と一類の歌である事は明かで、かつ、これを「こちやえぶし」の祖としても、不都合はないやうである。然らば、此流行唄は、明和五年の頃に流行しはじめたもので、かつ、民謠より系統を引いてゐるものといふ事も想像出來る。更に又、明和の此の流行唄と、天保の「こちやえぶし」との關係を示す歌詞が他にもある。卽ち、『小唄のちまた』所載の「坊さん忍ぶにや闇がよい」の歌については、明和七年刊の『賣飴土平傳』

から、此の文句も、流行唄の言葉を引いたものである事は明かである。その全歌は、安永五年刊の『艶歌選』に、に「和尚婦遊之時、宜以暗夜」といふ句があるが、これは、その前後の文章に流行唄の詞を一句づつ引いた所がある

ぼん様しのばゞやみがよい月夜にはあたまがぶらりしやらりと

と出てゐる。ただ、これが、明和頃の「こちやお江戸が見えるではなし」の流行唄と一類のものであるかどうかは明かでない。併し、天保三年七月上演の清元節「おどけ俄煮珠取」の中には、次のやうな歌が見える。

坊さん忍ぶは闇がよい月夜には頭がぶらりしやらりとノバサ頭がぶらりしやらりとこちや構やせぬ衣の袖のふくろびも構やせぬ

これは、明和頃の流行唄と歌詞が殆ど全く同一で、ただその下に、「ノバサ云々」といふ囃子詞や繰り返しが付いてゐるだけであるから、これも明和頃の流行唄の歌詞が再流行したものといふてもよろしからう。（此の歌詞の事は、忍頂寺務氏の『清元研究』にも調べてある。）なほ、此の歌は『甲斐民謡採集』によると身延の盆踊歌に用ゐられてゐる。

前にあげた『小唄のちまた』所載の歌詞の中で、「お前とならば何處迄も」とか、「軒端の露はまだ愚か」とかいふ歌詞が見えるのは、大正五年の頃に流行した

お前とならばどこまでも箱根山白糸瀧の中までもドコいとやせぬかまやせぬ
白糸瀧はまだおろか山奥のその山奥の奥までもドコいとやせぬかまやせぬ

といふ流行唄を思ひ出させる。歌詞も酷似してゐるし、七五五七五形の詞句に「かまやせぬ」といふ囃子詞を加へた詞形も兩者同一である。曲節には何の關係もないやうであるが、歌詞は、此の「こちやえぶし」（「はねだ節」に同じ）から暗示を得て、作られたものであるかも知れぬ。又『小唄のちまた』所載の「お江戸で名高き團十郎」の歌については、

前に記した『巷街贅説』にも記してゐる所である。

此の流行唄を、「はねだ節」と稱してゐるのは、前記の『小唄のちまた』だけで、その他には、かゝる名稱は所見がない。又、「はねだ節」と稱する理由も明かでない。强ひて臆測を加へれば、江戸の近郊の地名なる羽田の名を取つたものであるかも知れないが、何故、「羽田節」と稱したかといふ事になると、やはり不明である。羽田の民謠から出た爲めか、或は、名古屋に輸入せられた時に、羽田の人が傳へた爲めか、その邊の事は、明かにしがたい。とにかく一般には、「はねだ節」といふ名稱は使用せられてゐない。大阪で出した瓦版には、これを、「はこねぶし」と記したものがある。これは「曇らば曇れ箱根山」の文句から出た名稱であらう。『小唄のちまた』の「はねだぶし」は恐らく「はこねぶし」を誤り記したものではなからうか。瓦版の歌詞を寫す時に、「はこね」の「こ」と「ね」とを顚倒し、かつ、その「こ」を「る」に見誤つて、「はねだぶし」などと記したのは、此の書の編者、小寺玉晁の粗忽であるかも知れない。（玉晁の筆錄には、時々さういふ間違ひが散見する。）明治以後では、「こちやえ節」と呼ぶのが普通の名稱のやうであるが、幕末の瓦版では、「こちやぶし」とか、「こちやれぶし」とか、「こちやのばさぶし」とか記してゐる。「こちやのばさぶし」といふのは、前に掲げた「おどけ俄煮珠取」の中に出てゐる歌詞にも、此の囃子詞が見えるが、なほ、瓦版の歌を引いて見ると、

　　鳴くなら鳴きやれきり〴〵す鳴いたとて籠から出さうぢやあるまいしノウバアサ籠から出さうぢやあるまいしコチヤカマヤセヌ

といふ風に、ノバサといふ囃子詞が入つてゐるので、此の名稱が出たのである。尤もノバサといふ囃子詞を入れるのは、流行の當初だけであつて、直ぐに、此の囃子詞を入れる事は捨たれたやうである。從つて、「のばさ節」といふや

うな名は、殆ど使用せられなかつたらしい。又、大阪の瓦版では、「かまやせぬぶし」と記したものもある。

此の流行唄が、當時行はれた事は、『浮世新形戀の花染』二編（天保三年刊）上卷に「こちや構はぬを踊つたり〳〵、

〽お前を待ち〳〵蚊屋のそと蚊に喰はれ七つの鐘の鳴るまでもコチヤ構やせぬ〳〵

『春色梅暦』三編（天保四年刊）卷八に「こちやかまやせぬ、かまアやせぬ」『春色辰巳園』二編（天保四年刊）卷四に「おまへをまち〳〵蚊屋のそとを唄つた口で」などと見え、『役者必讀妙々痴談』（天保四年刊）上卷にも「辻々にて唄ふを聞けば、お江戸の市川團十郎海老藏になるのも家の株摺物したとてこちやかまやせぬ」と記してゐる。地口集『鸚鵡似言語』（天保五年成）の「流行歌之部」に、「お前と知らずに戸をたてた」とか「お前まち〳〵かやのそと」とかいふ句が出てゐるのも、此の流行唄の文句を取つたものである。下つて、『箱根草』二編（弘化元年刊）中卷にも「鹽がれいサ、とられた男犬(をいぬ)が眞黑だ、こちやかまやせぬ」といふ地口が出てゐる。なほ、著作の年時は不明であるが、大隈言道の『ひとりごと』に「世俗のうたふ歌中々にあはれにて、作りものよりよろしき歌、いくつともなし。拙なげに人思ふらめど、

曇らば曇れ箱根山晴れたとてお江戸が見ゆるではなし

など謠ふは、調も自らなりて、はた秀句ならずや」と記してゐるのも、此の流行唄の事であらう。但し、この歌詞は『山家鳥蟲歌』や『小歌事文類聚』所載のものと酷似してゐる。

この唄の三味線は本調子である。併し、當時の瓦版を見ると、三味線の調子付を、本調子と記したものと、二上りと記したものと二種ある。三味線で彈くには、二上りで彈いた方が彈き易く、かつ自然であるが、當時も、現在でも、皆本調子である。元來は本調子の曲かも知れぬが、流行唄としては、二上りの曲にも變化したものであらう。（民謠

には本調子が多く、流行唄には二上りが多い)。現在の曲は、音樂としては二上りの曲らしいが、もとのままの本調子で彈く彈き方が、傳統的に、現在までも行はれてゐるのである。

此の唄の瓦版は、相當澤山出てゐる。三田村鳶魚氏編の『瓦版のはやり唄』には、「東海道こちやゑぶし」として、

▲ちらとみそめし日本橋〽ふみをつけ、わたりそめたる戀の道、コチヤヱー、いろよき返事を品川や、アリヤヱーコリヤヱー

(此の「ちらと見そめし日本橋」の歌詞は、上方の代表的流行歌曲である「十日惠比壽」の替歌で、騒ぎ歌に用ゐられる「ちらと見そめし幕の內」の文句を思ひ出させる)

の如き歌詞十八首を掲げたものを收載して、「お江戸日本橋七つ立ちといふのが、コチヤエー の原唄(もとうた)であらう、其の全編は俚謠集拾遺に載つて居る、だがコチヤエーは幾種にも唄はれた、我等が幼時の記憶にも二三種あつたやうに殘つて居る、今日としては此の替へ唄の瓦版四枚だけ、手に入つたのみで、是だけでも完全に傳へたいのに、殘闕であることは如何にも惜しい、何時でも補足し得られる機會があり次第に、追加したい心掛けは怠らない」といふ解說がある。此の書の編者は、當時、右の瓦版一種しか得られなかつた事を、殘念がつて居られるやうであるから、聊か、他の瓦版について記しておかう。

○東海道五十三次　新ぱんこちやぶし(滿類吉)

▲はなのお江戸の日本橋、見わたせば、江戸ばし京ばしふじのやま、ノバサ、三ごく一じやと思はんせ、コチヤかまやせぬ(四枚、十九首)

○こちやのばさぶし(八丁堀地藏橋北島丁　角屋傳兵衛・東屋傳藏)

▲おまへはどこだいまどかへあねさんは〽かはらけか火鉢に火けしつぼノ あねさん かわらけか火ばちに火けしつぼ コチヤカマヤ

セヌ（四枚、十二首。後に掲げる大阪版の瓦版にも此の歌が出てゐる）

○新板役者もん句こちやぶし（滿類吉）

▲お江戸市川御ひいきの、ゑび蔵が、きゝ升はやり升あたり升、ノバサ、三升でしばやが大はんじやう、コチヤかまやせぬ（四枚、十二首）

○新版はやり唄こちややれぶし（角傳板）

▲のきばの露はまだおろか、此間(こないだ)もゆうだちあめにうたせたコチヤゆうだちあめにうたせたコチヤヱ〳〵（四枚、十三首）

○新版はやりうたこちややれぶし　本調子（角傳版）

▲一ばんさよりかきすあんこうますのほねくへるかほうぼがかぢれるかこちやおこぜがしやけでもかまやせぬこちや〳〵ヤレこちやへ（四枚、十三首）

○新板今のはやり唄こちやぶし（馬喰三　吉田屋小吉板）

▲お江戸のよしわら、なかのてふ、おいらんどふちう、てもはなやかじや　〽コチヤどふちうてもはなやアかじや（四枚、十二首）

○二上りこちやのばさぶし（八丁堀北じま　東傳板）

▲お前をまち〳〵かやのそとかにくわれ　〽七ッのかねのなるまでも、七ッのかねのなるまでも、コチヤかまやせぬ（四枚、十二首）

○新板こちやぶし（神田はたご町一丁目　笛屋大次郎板）

▲あづまになだかき日本ばし、ソレさかな市、そのはつがつほはつなすびソレはつねのたかさわほとゝぎすコリヤまけはせぬ（四枚、十二首）

○しんぱんはやりうたこちやヱぶし（神田はたご丁一丁目　笛屋大次郎板）

▲おまいとならばどこまでも、ておひかれ、さんづの川をわたるともコチヤぐぜゐのふねでわたるともコチヤカマヤセヌ（四枚、十二首）

○しんぱん此地栄ぶし（芝宇田川町　大黒屋嘉吉）

（二種の版、各四枚、十二首づつであるが、いづれも卑猥なる歌ゆゑ略す）

○大しん板いろ里まち中大はやり　はこねぶし（ひらの町通よどやばし西へ入北側　石和板）

▲くもらばくもれはこねやま、はかれけたかとこて、お江戸さがみへるさじや、あからかしよこまかい（此の歌は、挿み言葉となつてゐる。四枚、十一首のもの、二種を存す）

○大新板江戸よしわらはやりうた　かまやせぬぶし（大阪版）

あねさんどこだ今戸かへ、あねさんは、かわらけひばちかふじの山　〽こちやかわらけひばちかふじの山引

（此の歌は願人坊主の歌の「姉さん本所かえ」といふ夜鷹を歌つた歌の詞をもじり、今戸焼の品目をあげたもの。）

『守貞漫稿』によると、關西では天保五年頃に至つて、「こちやえぶし」が流行するやうになつたさうであるから、大阪版の瓦版は、その頃に出たものであらう。「吉原はやりうた」とある所を見ると、此の流行唄は、天保三年の春に、吉原で歌ひ出されたものであるかも知れない。

『瓦版のはやり唄』に、此の流行唄の原歌を、「お江戸日本橋七つ立」の歌としてゐるのは、誤であらう。明治以後では、此の歌が甚だ行はれて、此の流行唄の名を「お江戸日本橋」とも稱するくらゐであるから、常識的には、ふとかくも誤解せられやすいのである。此の東海道道中唄の全歌詞は、『古今音曲神鏡』（明治四十一年刊）にも、「五十三驛

京上りの歌」と題して掲げてをり、(後藤捷一氏等編『お江戸日本橋』にも種々なる資料が集められてゐる)、

〽お江戸日本橋七ツ立ち、初登り、行列そろへてはれはいさのさ、コチヤ高輪夜明の提灯消すコチヤエノ〵

に始まる歌、十八首で京に到着するまである。又、逆に、京から江戸に下る五十三次の歌も出來てゐるが、諸書によつて歌詞に小違がある。此の第一首の原形と見られる歌詞は、前にも記した『小唄のちまた』にも出てゐる所であるが、他の書には、此の「お江戸日本橋」の歌について、何ら記す所がないのであるから、天保當時には、原歌とは認められてはゐなかつたのである。當時の諸書に引用せられてゐる歌詞では、「曇らば曇れ箱根山」と「お前待ち待ちかやのそと」が最も多いから、これが最も多くうたはれるとともに、又、原歌ではないかとも考へられるが、此の二首の中、由來の古い事は「曇らば曇れ箱根山」の歌の方で、遠く、「隆達小歌」以來の傳統を引くものであるから、此の歌をもつて、原歌とすべきであらう。「お前待ち待ちかやのそと」は、名高い歌詞で、かつ、此の流行唄に特有の歌として、作られ、世に行はれるに至つたのであるから、これも原歌として認められてもよいかも知れぬ。又、由來の古い事では、「ぼんさん忍ばば暗がよい」の歌も、あげられるであらう。もし、此の流行唄が、明和の流行唄の復活したものであるなら、明和頃の書に見える、「ぼんさん忍ばば」の歌をもつて、原歌としてもよいのであらう。併し、天保の「こちやえぶし」では、此の歌は餘り用ゐられなかつたやうである。つまり、此の歌詞のもつ、洒落氣のある滑稽味が、明和頃の人には迎へられても、天保頃の人には、あはなかつたと思はれる。さうして、その代り、「お前待ち待ち」の如き濃艶な情緒と一抹の廢頽味を持つ歌が、時人に歡迎せられたのであらう。歌詞に對する、すき好みも、時代時代によつて變遷がある。天明時代と天保時代との、思潮の相違は、自然に、行はれた歌詞にも、相違を來してゐる。洒脫な黄表紙、川柳趣味の「ぼんさん忍ばば」の代りに人情本趣味の「お前を待ち待ち」が行はれたのも理由のある

事である。さうして、「曇らば曇れ箱根山」の如き、くせのない歌詞は、いつの時代でも捨たれずに、行はれて來たのであらう。さすれば、むしろ、此の「曇らば曇れ箱根山」の歌をもつて、原歌と認定した方が妥當であるかも知れぬ。上方で（或は名古屋方面でも）此の歌詞によつて、此の流行唄の事を、「箱根節」と稱してゐるのも、故なき事ではないと考へられる。『俚謠集』の長崎縣の「黑丸踊」といふ盆踊唄などにも、この「曇らば曇れ」の歌を取り用ゐてゐる。

此の歌は、明治以後にも行はれ、今現に、種々の場合に歌はれつつある。明治以後の流行については、此所に記す必要はない。ただ、明治の二十年代には、これが物賣歌として用ゐられ、或地方では、行商人によつて、傳播せられたらしい事は、付け加へておきたい。明治二十三四年頃三河の岡崎から出た豐年豆の賣子が此の歌を用ゐた。「忠臣藏」や「鬮取千兩幟」や「花づくし」の歌などを歌つて、豐年豆を賣ると共に、歌本をも頒布したのである。「忠臣藏」（天保頃の瓦版にも「忠臣藏こちやぶし」が出てゐるのを寓目した事がある）の歌をあげると

ヱ、ーだいじよはかまくらつるがおか、とりいさき、八まんさまのしんぜんで　〽コチヤヱ、かぶとのめきゝはかほよさん
アリヤヱ、コリヤヱ、ヨイトサ

といふやうな歌が、義士本懷まで十五首ある。「鬮取千兩幟」も十五首をもつて事件の顚末が歌はれてゐる。

福岡の黑田藩では、種々の流行唄を漢語口調で、いかめしく作り替へた替歌が、幕末に藩士の間で行はれたらしい。『俚謠集』の說明によると、「筑前の儒者龜井家の塾生が戲作に係るものにして、現今之を唱ふるもの殆んど稀なり。蓋し七八十年前のものならんか」と云ふものの一つ、「姉さんまちまち替歌」とあるのは、「こちやえぶし」の歌を、儒者風に、むつかしく云ひ替へたものである。

（一）足下に待す待す蚊帳外、蚊に食せられ、五更の鐘の報ずるまで、僕不レ關焉

足下と知らずに閉戸した。憐すべし屋露點々身を汚す、余不レ知矣

此の二首の原歌は、前に『小唄のちまた』から引いて記した所である。これも、旣に早く、此の流行唄が、關西を經て、九州邊においても行はれてゐた事を示すものであらう。「こちやえぶし」は全國的に流傳してゐたのである。

以上の材料から考へると、此の流行唄は、もと民謠から出たもので、「十六七が」や「曇らば曇れ」の歌が、その最も古いものと思はれ、民謠より出て明和五年頃に流行した時には、「坊樣忍ばば」の歌の如きが、代表的な歌であつたが、これが天保三年に至り再流行して、此の時には「お前待ち待ち」の歌が、代表歌となり、更に明治以後にも復活して、大いに行はれ、此の時には、「お江戸日本橋」の歌が、代表歌となつたのであると、結論する事が出來るであらう。

〔追記〕 前にはね田節の事を不明と記したが、『通俗佐原風土記稿』を見ると、「藝文誌」の項の俳句の中に、

此郷に久しく傳はれる一節を聞て　老鼠堂永機よしきりも囀りならへはね田節

と見える。然らば、明治時代までは、羽田の土地に、羽田節なるものが殘つてゐたやうであるが、それが果して、こちやえ節と類似したものかどうか、未だ調査してはゐない。とにかく、此の點は、後日に解決を期する事としたい。なほ、此の流行唄は、民謠となつて諸國に存在してゐるやうである。『水まき草』（大庭良美氏編、島根縣鹿足郡日原村の民謠を集めたもの）その他に、節の名は違つてゐても、確かに、此のこちやえ節であると思はれるものが散見する。次に、此のこちやえ節に類似した流行唄に、文化文政時代に京都で流行した「色里まち中はやりうた　かさねおふぎ　こちや／＼ぶし」（京寺町にしき上ル丁、阿波屋定次郎板）といふのがある。右の瓦版には、

▲かわいおかを丶、三つ吉のじと、それでうき名が立花や、こちや、いとやせんかまやせぬ

の如き歌詞九首を掲げてゐるが、此の歌の詞形は、こちやえ節と違つてゐるから、恐らく、こちやえ節と異なる曲節の流行唄であらう。併し歌詞には影響關係があるかも知れぬ。

明治小說形象發達史論序說

湯地孝

一

思潮を文學の色彩とするならば、形象はそれに與へられた輪廓である。換言すれば、思潮は文學を着色する色素であり、形象はその顯現を規定する紋樣であつて、一つは精神として內在し他は相貌として外發するが、この兩者はもとより別個の對立ではない。否、むしろ楯の兩面として形影相伴ふ。唯これを造型された形態としてみる時、そこに形象が髣髴されるのである。

芥川龍之介はその「侏儒の言葉」の中で、藝術は表現に終始するものだと斷じてゐるが、これを以て直ちに技巧主義と解することは早計である。蓋し表現とは活動の姿勢に於いて文學を解釋した謂であり、これを存在としての位置に捉へれば形象である。と共に、表現が謂ふ所の技巧に終るものでない如く、形象も亦單なる外形に止まらず、更に內質的な機構にも亙つてゐることは言ふまでもない。例へば近代的な短篇小說は單に算術的な長短によつて長篇と區別されるのみでなく、その形象は幾何學的な內部構成に特色を成してゐるし、私小說の如きは專ら質的な要素の中に獨自の形態が規律されてゐる。

由來內容と形式の關係はその間に微妙の消息を孕む。これを言ふならば思潮は自ら形象を決定し、決定された形象

は又自ら思潮を具象する。自然主義の場合などはその著しいものであらうが、こゝに簡明なのは漱石の「草枕」である。彼はその作を自ら解說して、普通の小說は作者が一處に立つてゐる前を作中人物が通過するが、「草枕」ではこれと反對に、動かざる作中人物の周圍を作者が周つて四方八方から觀察する趣向だといふ意味のことを述べてゐる。これは明かに低徊趣味が作品の構成を決定してゐるものであると同時に、その低徊趣味が最も直接的に構成の上に自現してゐるものではないか。しかもこれは一例に過ぎない。形象の展開は文章、脚色、描寫等凡そ言葉による造型のあらゆる部面に及んでゐる。そこに形象の重要性が認められるが、この意味に於ける研究は從來餘り着眼されてゐない。またこれを變遷の過程に就いて見るべく多くを費してゐる文學史も少ない樣である。

歷史は事實である。しかしそれは資料の穿鑿にのみ終始するの意味ではない。更に進んで、一方に思潮起伏の流を辿ると倶に、少なくとも文學にあつては、存在としての事實性に於いて形象變遷の跡を探ることも必要ではなからうか。暫く上述の如き立場から明治文學の展觀を考察してみよう。

二

明治文學は、これを思潮の中樞に卽いて言ふならば自意識の發展に貫かれてゐるが、これを形象の上から見るならば、その具現は散文精神の發露の中に遂行されてゐる。而してその遂行を代表するものは寫實主義である。が、これと平行して自我の覺醒はその表白を第一に散文形式としての小說に求めた。のみならず、この傾向は自意識の强化に伴はれて益〻高まり、やがてこの形式への文學活動の集中となり、遂に小說の興隆を來した。それは小說の極めて自由な形式が自意識の存分な活步を許すに足る唯一のものであつたからであるが、斯くして寫實主義との契合の下に近代寫實の小說が成果されたのである。しかしこれは明治文學の結實たる自然主義を基準としての展望であつて、過程

としての明治文學には更に幾何かの屈折が認められる。

寫實小說が明治文學の主體を成してゐることは既に論を俟たないところである。又その發生が「小說神髓」を機緣とする泰西文學の影響によつてゐることも衆知のことである。しかしこの泰西文學の影響といふことは從來少しく强調され過ぎてはゐないだらうか。成程理論としては正に泰西的である。しかしその實際にあつては案外に近世の世相小說を承けてゐるところが多い。明治二十年代に於ける元祿文學復活の場合もさうであるが、それ以前に於ける政治小說群も「雪中梅」に代表される限りに於いて、その筆致や手法に於いて舊代戲作の風に染色されてゐるし、硯友社初期時代の小說などは殊に化政期文學の跡を追うてゐる趣きが著しい。しかもこの政治小說時代と硯友社擡頭時代との中間に當る明治二十年前後には、南翠、文海、篁村等の舊派出身が新風出現の直前に於ける折衷派として各々一家を成し、舊を承けて新に繼ぐの意味で前後の兩時代に介在してゐたので、一般的には逍遙、四迷の二人がその文學革新の華々しさの爲に著名であるが、當代に於ける作家の實體はむしろ前の南翠、篁村、文海等の一群にあつた。又當代にあつて最も泰西的であつた「浮雲」にしても、新風の先驅をなした「當世書生氣質」にしても、尙且つ等しく近世戲作の相を反映してゐるではないか。

二十年代に捲起つた新風は正に右の如き前代小說群の寫實的傾向を一段と高めたものに外ならない。而してその傳流は化政期以降の世相小說から明治初葉の魯文、藍泉、延房等の作に續き、次いで十年代の才子佳人式政治小說に移り、更に二十年代の新寫實小說に至つたので、その主流は人情本にあつた。この限りにあつて明治の寫實小說は人情本に系を引く。又この意味に於いて硯友社の戀愛小說を前代才子佳人小說の燒き直しと喝破した綠雨の言は當つてゐる。誠に斯く見るならば紅葉や風葉の小說も、一箇の新人情本であつたし、自然主義の性慾小說も亦その變種と見ら

れよう。自然主義は硯友社に反對し、また硯友社を通して近世の戲作にも反對したわけであるが、その戲作の中から出た人情本は明治の新寫實小說の一母胎となつたと同時に、自己に反した自然主義の中にまで皮肉にもその後裔を見出してゐる。

「色懺悔」を、「三人妻」を、又「多情多恨」、「戀慕流」、「湯島詣」、「魔風戀風」、「青春」、「蒲團」、「黴」、「戀ざめ」、「煤烟」、「耽溺」等を想見する時、そこに一つの系列が髣髴する。斯く見れば花袋が西鶴に傾倒したのもその一面に於いての關聯が生じて來る。もとより西鶴と人情本には何等直接の關係はない。しかし、西鶴は浮世草子といふ限りに於いて世相と人情の寫實である。この意味で「浮雲」も亦人情本であらう。更には「小說神髓」にも人情が重視されてゐる。又そこに指摘されてゐるもののあはれは王朝文學の傳統であつた。そこに古典との交流がある。しかも逍遙が寫實を强調したのは讀本の傳奇に對する反動ではあつたが、その反動には古來の傳統からの吸引が感じられる。

言ふべくんば明治文學の形象は傳奇の文學でも思想の文學でもない。又社會の文學でも理想の文學でもない。勿論その間には若干の例外が生滅してゐる。が、これを大觀するならば、その形象は人情寫實の文學としての形態に收斂されてゐる。而してそれは單に明治文學に止まらず、日本文學の古今に通じての傳統であつて、情話文學に始まり心境小說に至る大正期の相貌も、やはり斯かる傳統から醱酵した夫々の變貌と見るべく、藝術的主情派たる里見弴、久保田萬太郎、佐藤春夫、宇野浩二、葛西善藏等の諸氏はその傳統に最も忠なる人々であつたし、德田秋聲、近松秋江等の自然主義諸家もこれに準ずるものであるし、さては永井荷風、谷崎潤一郎兩氏に代表されてゐる風俗小說なども亦その一面である。

三

その淵源を尋ねる時、明治文學が藝術主義から成生したか人生主義から成生したかに就いては議論があらう。四迷、嵯峨の屋、湖處子等の人生的關心や、透谷等の內部生命主義に發する浪漫主義運動、人生觀上の革命を敢行した自然主義と辿つて來ると明治文學には人生主義の脈動が强く波打つてゐる。第一、明治文學の曉鐘と呼ばれる「小說神髓」にも旣に人生的示唆を探ることが出來よう。しかし、その他面には藝術主義の傾向も決して少なくはない。美妙、紅葉、露伴、鷗外、鏡花等の活動は最も多くその消息を語つてゐる。

然らば明治文學は果して兩者の何れより生れたものであらうか。故宮島新三郞氏の如きも明治文學は藝術主義的人生主義であると言つてゐる位で、その何れか一方に規定し去ることは恐らく出來まい。

鏡花に人生主義が缺けてゐると見るの偏見は、恰も透谷の藝術主義を無視するの愚に等しい。勿論前者に直接鮒載の思想を求めることは困難かもしれない。またその進步的な動きに於いて破壞的な相は認められないかもしれないが、その渾身の純情も遂に人生と交流し得なかつたであらうか。否、傳ふる如く彼が若し卽興詩人の高韻を通して人生の母國と共感しなかつたらば、「照葉狂言」のあの脈搏の生々は恐らく殘らなかつたらう。それは彼にあつて始めて爲し得た前進であつた。この意味に於いて「照葉狂言」に續く三十年代の彼の活動も亦一つの革新であつた。破壞的でなければ人生主義でないとどうして言へようか。と同時に、藝術主義と雖も進步的な意義に缺くるものでは決してない。透谷の苦悶は確に人生の苦悶であつた。しかも彼に技巧の瑣末はない。が、一度表現に關與する時、その苦悶は忽ちに藝術の苦悶として操作された。未完成なるが爲に發表されなかつた夥しい草稿が彼の死後に殘されてゐることは右の間の消息を默示してゐるものではなからうか。

藝術主義に成るか人生主義に成るか、これを一方的に斷定することはむしろ無意味に近い。しかし乍ら、これを兩

者の結合の關係に於いて考察するならば、明治文學は先づ藝術主義から出發した。

前にも述べた如く「小說神髓」には人生的示唆が求められないではないが、しかしその論旨の根柢は藝術的意義の鮮明にあるので、人生的態度としての主張にあるのではなかつた。更に一歩を進めて言へば、その本意は、著者自身の告白にも見られる如く、馬琴流の勸懲主義的傳奇文學への誇張された反感に發してゐる。しかもその反動的變革は手法上の革新に止まるものであつた。又「浮雲」の場合にしても、それは露西亞文學の藝術味に誘發されて成つたもので、その思想に覺醒されての、例へば人道主義といふ如きものに刺戟されての發動ではなかつた。言へば、あの作の心理や構想の扱方にその痕跡を止めてゐる如き近代的な文學形象への興味からである。四迷の後年の懷疑は彼が人生主義に立つてゐたからだといふのが常識であるが、私は却而彼が藝術的興味から出發したからこそ、後になつて文學懷疑の煩悶に陷つたのではなかつたかと思ふ。

遡つては十年代の政治小說にあつても、思想に興味がなかつたのではないが、着手の動機は外來文學の新しき形象への魅力であつた。從つて思想としては雜駁であつたが、形象としてはともかくも「花柳春話」から「谷間の姬百合」への、また「佳人の奇遇」から「雪中梅」への進展を示してゐる。また當代に於ける舊派が形式主義の範圍內で微溫的な工風に拘つてゐたことは言ふまでもないが、更に彼等の後を承けて新派の先頭を切つた美妙や、彼に次ぐ紅・露の二家の出發も、倶に藝術主義であつた。

斯くしてやがて明治中期の文學が出現したとするならば、これを藝術主義からの出發とすることが出來るだらう。加之、中期の文學それ自身も亦、硯友社文學を主力とする藝術派の手によつて、彼等の形象的關心を依據として築造されてゐる。これを概括すれば、硯友社文學と自然主義文學と、その何れが先であつたかといふことは、同時に、藝

術主義と人生主義とその何れから明治文學が出發してゐるかを裏書してゐるものである。

以上、明治文學の體勢とその出發に關しての着眼は大體述べ了つた。而して次に來る問題は、形象的變革としての抒情文學の先行、環境の意識的攝取による形象の複雜化、描寫形式の移入による近代的文學形態の成生、思想解釋の示現的形式としての主題主義的傾向、及び古典の活用による文學の整形等であるが、之等に就いての詳述は尚熟考したいと思ふので他日の機會に讓つておく。

ユーゴーと日本文學

神崎清

一

フランスの偉大な政治文學者ビクトル・ユーゴーの死後五十年祭を迎へた昨年、日本でも二つの記念的な集會（國際文化振興會、明治文學談話會）が開かれた。ユーゴーの生涯と藝術とが、日本文學の近代史に及した影響は、歴史的にその足跡を辿つてみて、廣汎、且深刻正に驚嘆に値ひすべきものがある。

すでに半世紀前、明治十八年ユーゴーの訃音が日本に傳へられたとき、當時の「自由新聞」は、木版の肖像畫と傳記を掲げて哀悼の意を表してゐる。またこの一世の文豪をパンテオンに葬る日の、盛大な葬儀の模様を描いた山本芳翠の繪が、ユーゴー記念館に納められてゐるのも見落すことができない。

だが、ユーゴーに關する最初の日本人の記録は、渡六之助の「法普戰爭志略」（明治四年）に求めねばならぬ。この見聞録は、後ちに「巴里籠城日誌」として再刊されたが、西園寺公望の「滯佛當時の日記」（未刊）と並んで、パリ・コンミユン前後の騷擾を寫した貴重な日本語文献である。ルイ・ボナパルト政權の倒れるや、廿年の幽閉生活より脱して、敵軍包圍のパリに入城、三色旗革命の眞實の勝利のために、詩集を賣つて大砲二門を國民軍に與へた熱烈な共和主義者ユーゴーの活躍が、たとへ斷片的にもせよ、一日本人の頭腦に映じたことは、偶然以上の興味がある。明治

十二年の「今世西洋英傑傳」もまた、愛國的政治家としてのユーゴーの名を日本に傳へたものであつた。

ユーゴーの作品に接した最初の日本人の一人は、疑ひもなく在佛時代の西園寺公である。しかし、公はエミール・ゾラの小説を愛讀したほどはユーゴーに親しまなかつた。その回顧談によれば、寧ろ大嫌ひだとさへいつてゐる。蓋し、ユーゴーの激情も公の冷靜を動かせなかつたものらしい。そのために、明治十七年、中江兆民の譯した「維氏美學」が、文學者としてのユーゴーを日本へ紹介する役割を引受けることになつた。

けれども、ユーゴー傳來史に於ける最も重要な役割は、自由黨總理板垣退助の占めるところである。明治十六年、外遊中の板垣はフランスでユーゴーと會見した。八十幾歳のユーゴーは、この東洋の有名な自由政治家に啓蒙的な政治文學の普及が、日本に於ける民主主義運動の勝利を著しく促進するであらう、と語つた。板垣はよろこんで勸告に從ひ、多くの西洋小説を携へて歸國した。その結果、自由黨の文學的プロパガンダが、間もなく組織されるに至つた。ユーゴーを實例に擧げた「政事に關する稗史小説の必要なるを論ず」といふ論文が、早くもその年の「繪入自由」に發表されてゐる。

板垣が携へて歸つたユーゴーの小説は、次ぎ次ぎに飜譯されて行つた。明治十七年には、坂崎紫瀾の佛國革命「修羅の衢」（九十三年）が「自由新聞」に登場し、十八年には、佛亂餘聞「霜夜の月」が「自由燈」に連載され、二十年には、野田榮城の五日紀變「英雄之肝膽」（イスワール・ド・クリーム）が出現し、かくてユーゴーは、自由黨の通譯つきで、日本の公衆に自己の民主主義思想を傳達し得るに至つたのである。自由黨員高橋基一の「愛國偉勳」が、ユーゴーの傳記に假托して、藩閥政府を攻擊してゐるのもこの時代の激越な感情の產物である。

すべてこれらの事情は、ルッソーの民約論に導かれた自由黨のフランス的方向、政府の壓迫に對する有效なる抗爭

手段、人民大衆の啓蒙的政治教育の觀點から說明されねばならない。「佛のヒューゴ其人の如く政治上の運動を織々たる筆の力を以て支配せん」とは、若き北村透谷の野心であつたが、同時にこの時代の青年の理想主義を支配したユーゴーを最も雄辯に物語つてゐる。

二

自由黨の急進主義が破産したとき、歷史は新しいユーゴーの旗手をさしまねいた。明治二十年代の初頭、「國民之友」に據つて日本の思想界に君臨した德富蘇峯の諸論文に、ユーゴーと「レ・ミゼラブル」の名が散見するのも決して偶然ではない。明治十九年、蘇峯が土佐に板垣を訪問した際、ユーゴーについて種々授かるところがあつた。「愛の特質を說いて我邦の小說家に望む」といふ蘇峯の文學論は、ユーゴーの精神を高唱して、當時の青年に多大の感動を與へたものとして特に有名である。蘇峯は、しかし、ユーゴーの名に於て日本の新文學の光榮の道を說いたばかりでなく、また實際に極めて適當な紹介者森田思軒を見出すに至つた。

改進黨系のすぐれた新聞記者であつた思軒は、明治二十一年、蘇峯の委囑を受けて以來、「隨見錄」「探偵ユーベル」「クラウド」「懷舊」「死刑前の六時間」等を陸續發表しつつ、日本に於けるユーゴーの最大の移植者となつて、讀書子の間に飜譯王の名を擅まにした。思軒の譯は、シーサイド・ライブラリイからの重譯であつたが、彼の獨創した自由にして緻密な所謂周密文體は、ユーゴーの作品の藝術性を殆ど傷けることなくして、日本語へ移すことに成功したのである。思軒によつてはじめてユーゴーが文學になつた、といふも過言ではない。

この思軒の正に果すべくして果さなかつた「レ・ミゼラブル」の飜譯は、後ちに黑岩涙香の手で、「噫無情」となつて完成されるが、すでに明治二十四五年の頃、思軒の弟子の原抱一庵が着手して「哀史」の斷片を留めてゐる。更に溯

れば、二十年に井上勤の寸斷分裂「美人之腸」があり、二十二年に渺茫居士の「小說落魄」があり、いづれも「レ・ミゼラブル」譯出の最初の努力を記錄に留めてゐる。狂熱的な抱一庵はまた、その市街戰の場面を中心とする「ＡＢＣ組合」を抄譯して、日本の勇氣ある青年層に訴へようとさへした。

これらの蘇峯を中心とする民友社グループのユーゴー熱は、明治二十八年、人民一太郎の評傳「ユーゴー」に最も熱情的な鼓吹者を見出してゐる。彼はユーゴーの傳記を詳細に研究したばかりでなく、また烈烈たるユーゴーの精神に於て、日本の藩閥政府を痛烈に攻擊した。德富蘆花が、同志社の學生時代に、兄蘇峯の手澤本「レ・ミゼラブル」から受けた感銘は、後年の人道主義の成長に大きな刺戟となつてゐる。山路愛山の「懺悔」の一節が、ミリエル僧正の件の飜案であることも、ミゼラブル文獻史上の一挿話たるを失はない。

一般的に、蘇峯の「國民之友」と對立して考へられてゐる三宅雪嶺の「日本人」も、このユーゴーに於て、愛國者の典型を見出したといふ點で共通の時代的背景の前に立つものである。ユーゴーの道義感や理想主義が、「日本人」の人々に訴へた感情は、雪嶺によつて、ワーテルロー戰爭の描寫となつた。「小說落魄」の渺茫生が、この派の同人長澤別天であることも書き添へておく必要がある。朝比奈知泉も譯筆をとつて「渡海難」(海の勞働者)を紹介した。しかし、ユーゴーに最も傾倒した人物としては、磯野依緑軒の右に出る者はあるまい。彼は「依緑軒漫錄」のなかで、「ノートルダム」「九十三年」「海の勞力者」「笑ふ男」等の梗概を詳說してゐるが、同時にユーゴーの精神を傳へて、日本の傾向的文學の成長を導かうとしたのであつた。曰く「小說は人間の愛を本とするものなり、小說家は宜しくその義務として、愛の正當なる標本を示し、以て世道人心を救正するの一助となさんことを務むべきなり」と。

けれども、明治二十年代の歴史的な諸經過は、之れまで愛國主義の銅像として扱はれてゐたユーゴーの位置を少しづつ變へて行つた。資本制の發達に伴つて、壓迫的な空氣が支配しはじめるとともに、人々は新しくユーゴーのなかに、社會改良主義者の思想を發見するに至つたのである。かくて、「レ・ミゼラブル」の傳播した「社會の罪」といふ認識が日本にも發生して、從來すべて個人の責に歸して顧られなかつた貧困と犯罪の問題が、新しい觀察と對策を要求するに至り、法律上道徳上の諸觀念に著しい進歩をもたらしたのであつた。

三

勿論、日本の市民的意識に於けるヒューマニズムの發展は、ひとりユーゴーの力によつて生じたものではない。だが、社會的不正の些かなる現れに對しても苛責なく鬪爭したユーゴーの英雄主義ほどそれを鼓舞したものはない。眞理と正義を愛する日本の青年にとつて、「レ・ミゼラブル」は、もはや手放し難い書物となり、教義となつたのである。

日本の輿論の關心が、政治問題から社會問題へ移るとともに、ユーゴーは暫くの間勞働階級の利害の代辯者として活動した。明治三十四年、片山潜・西川光二郎の「日本の勞働運動」の卷頭を飾つたのは、他ならぬユーゴーの言葉であつた。曰く「余は弱者の爲めに强者に向つて語らん」と。

この三十四年、數個の社會主義者と共同して社會改良を標榜する理想團を組織してゐた黑岩涙香が、三十五年から「噫無情」を「萬朝報」に連載しはじめたことも、かかる社會ヒューマニズムの發展に沿うて理解されねばならない。もとより、「レ・ミゼラブル」の譯出は、思軒の遺業の繼承ではあつたけれども、「若し我が日本にレ・ミゼラブルの一書を飜譯する必要ありとせば、人工を以て社會の地獄を作り、男子は勞働の爲に健康を損じ、女子は飢渇の爲めに德

操を失し、到る處無智と貧困の存する今の時にこそあるなれ」と、涙香自身が強い動機に支配されて着手したことを告白してゐる。

だが、實際のところ、涙香の「噫無情」は、極端な斧鉞を全篇に加へて、原作の政論性を飜譯の傳奇性に置き換へてしまつてゐる。にも拘らず、ユーゴーはこの「噫無情」の通俗化によつて、廣汎な大衆的讀者を周圍に見出したのであつた。ジャン・バルジャンは一躍して民衆の英雄となつた。このジャン・バルジャンの出現は、當時の社會的暗流の底に流れてゐた義人の思想、個人的救濟者の待望に迎へられたものであつた。

日露の開戰を前にして、涙香の主戰論の唱道に反對した「萬朝報」の一部の記者が、涙香と袂別して新しく平民社を結成した。平民社の科學的且階級的な社會思想は、トルストイの人道主義を鋭く批判したと同じやうに、ユーゴーの個人的英雄主義の讃美歌をもはや歌はなかつた。しかし、木下尚江の「良人の自白」のある部分には、明かに「レ・ミゼラブル」の投影が看取される。なほ尾崎紅葉の飜譯に「鐘樓守」(ノートルダム)のあることを知つて驚く人には、それが明治三十六年、死期の迫れる紅葉へフランス文學者長田秋濤の送つた餞別であつたことを告げておきたい。

四

詩の領域では、ユーゴーはバイロン卿よりも後れてゐる。明治三十二年、土井晩翠の「天地有情」が、はじめてユーゴーの詩論を日本に紹介した。有名な晩翠調は、尠くともそのスタイルに於て、ユーゴーの敍事詩の影響を受けてゐる。明治三十八年、小原無絃が「西吟新吟」「ユーゴーの詩」を世に捧げ、また明治三十九年、上田敏の「海潮音」によつて、ユーゴーの幾つかの作品が日本の詩壇のものとなつた。

戯曲の領域では、明治三十年、福地櫻痴の「あはれ浮世」が、「レ・ミゼラブル」の飜案・脚色としてすでに出現して

ゐる。小川煙村の「王黨民黨」(九十三年)が、明治三十七年、本郷座に川上音二郎ら新派俳優の上演するところになつたとすれば、松居松葉の「エルナニ」は、三十八年、市川左團次らによつて明治座の脚光を浴びた。フランスに於ける「エルナニ」の上演が、浪漫主義戲曲の勝利の宣言であつたに對し、日本に於ける「エルナニ」の上演が、來るべき革新的な自由劇場運動、自然主義演劇の誕生の前兆であつたことも、日本の近代演劇史の特殊性として見逃すわけに行かない。

明治四十年以後、心理的な自然主義と享樂的なデカタニズムの支配した諸年は、ユーゴーにとつてあまり好ましい活動の舞臺ではなかつた。エミール・ゾラやモツパサンのために、ユーゴーは片隅に追ひやられてしまつた。しかもなほユーゴーが大衆の間に潜在して生きてゐたことは、世界大戰後に發生した大衆のための文學の聲高き要求と、白柳秀湖らの「社會講談」がこれを立證してゐる。それに續く「ユーゴー全集」の刊行は、小ざかしい藝術至上主義者の意見に反して、「レ・ミゼラブル」を世界一流の小說に數へ上げたトルストイの評價が、廣く人々の間に承認された結果であつた。豐島與志雄の完譯によつて、この人類の文學的聖書は、日本人の手に渡された。外國の飜譯ものとして、バイブルを除けば、「レ・ミゼラブル」ほどの壓倒的な賣行きを示してゐる書物は他にない。

かく敍し來れば、日本文學史の近代史に於けるビクトル・ユーゴーの偉大な貢獻は自ら明かである。つねに傾向文學の激發者であり、人道と正義の鼓舞者であつたユーゴーは、今や日本の文學の血肉のなかに流れてゐるのである。

湖處子の歸省に就いて

鹽田良平

一

「歸省」は明治二十三年六月、單行本として民友社から發行された。作者湖處子の文學的出發點は本書から始まつたといつてよい。彼は九州筑前の人、明治十七年上京、東京專門學校政治科に入り二十年卒業して、東京大學專科に暫くゐた。其後經濟雜誌社に入つたが(二)、後民友社に入つた。元來政治畑の肌合ではない爲に、民友社でも最初は經濟記者であつたが、後には文藝方面を擔當し、二十年代の終りには、八面樓の名を以て文藝時評を書いてゐた。

「歸省」は、かゝる經歷から見て彼の文學への轉回の端緒を作つたものであるが、と同時に、この「歸省」によつて、明治に新しい自然文學を發生せしめる端緒にもなつたのである。

內容は、彼の自傳の一部で、鄕を出でて六年後母を訪ねて故鄕に歸る青年の紀行文で、その故鄕の描寫が中心になつてゐる。

此作の前編に當る所には、「自白」(四十一年八月)「半生の懺悔」(同十月)があるが、是等は所謂自然主義の影響を受けて、悪く達者で淸純な處が失はれてゐる。製作年代も「歸省」に遲れること二十年である。

「歸省」は全篇第九章の短章から成立してゐる一種の抒情小品文乃至散文詩の形式を帶びてゐる。各章に「歸思」「歸

鄕」「吾鄕」「吾家」「鄕黨」「戀人」「山中」「追懷」「離別」等の主題を付し、副題として淵明の詩句數行（李白のも稀にある）をとり、漢詩趣味が先行してゐる。

もつとも此當時に於ける漢詩漢文の一般的教養から推察すれば、此程度の漢詩趣味は一つの嗜みであり、氣分であり、勿論特に陶淵明思想を押し出すことを意識して行つたものではないことは察せられる。

作者が意圖した新味は、寧ろ其基督教趣味ではないかと思はれる。例へば左の文に於ける如く、

ア、嬉し、今よ故鄕は吾目に見へぬ。車輪村の端に上ぼりし時は、我思はずも車を飛び下りて其土に接吻したり。實や此處に我は故鄕の我たりき。其一抔の土も我爲に尼丘、錫倫、ベツレヘムとも思はれて、是より相遇ふべき顏は皆な我と言語同じかりし故人なり。懷かしき地よ。床しき友よ。（二十八頁）

の最後の描寫は、東京新報記者をして「太く誇張の語を成せり」とし「蓋し處子が年尙ほ壯にして文未だ老ひず名譽を求むるに急なるより或は流行の法螺を吹き或は奇怪の語を吐き世人を瞞着せんとするなり」とまで極言せしめる程、在來の描寫法から見れば型はづれであつた。土に接吻するなどといふ表現は、著しく聖書趣味で、多少のあくどさが感じられないでもないが、その感激に一種の淸新さが出てゐる。

彼の此潑剌たる感激は、かなり宗教的の分子を含んでゐる。彼が基督教を始めて知つたのは其中學時代であつた。元來當時の小學教科書は、例のウイルソン・リイダアの飜譯であつた爲、基督教的な自然觀乃至世界觀が最初から少年等の精神を支配した。

「神は天地の主宰にして人は萬物の靈なり」（小學入門・明治八年）の神は、甚しく基督教的な神である。湖處子がこの神について如何なる智識を得たか、審かではないが、とにかく中學の教師を通じてその輪廓だけを聞いたらしい

ことは、「半生の懺悔」(三十三章)にも出てゐる。しかし、この彼の耶蘇教に對する關心は父の激怒を買つた爲に中學を出るまでは全く忘れられてゐた。それが上京して學校を卒へてから、再び燃え上つて彼をして一時傳道師たらしめたのである。明治のロマンテイシズムにはその一特徴にこの基督教的精神の內在が認められる事は今では常識化した言方であるが、殊にその自然文學に於ける自然觀には、自然の生育に神の意志を認めてそれを讃美する抒情味と、自然の現象に神の顯現を認める汎神論的神祕感とが搖曳するのである。是等は、(殊に前者は)決して外來的のものではなく、在來の和歌、俳諧等の自然觀にも見受けられるものであるが、特に明確に思索的傾向となつて現はれて來たのは、明治以降で、それを促進せしめた有力な原因は、前述の基督教精神である。(基督教といつても勿論當時各派に分れてゐたが、明治の文學思潮に特に或影響を感じられるものは、ユニテリアンである。)

筆者は嘗て明治の自然文學とワアヅワアスに就いて論(二)じたことがあるが、このワアヅワアスの詩の青年層への浸潤なども、單にワアヅワアスの英詩が平明であり、教科書用に適するとか、その詩想が東洋的樂天主義に近いとか、いふばかりが原因ではなく、彼の汎神論的態度が當時の基督教青年には理解し易かつたのではないか、と考へられるのである。

元來、文學に於ける自然趣味は、明治初年から二十年位に至るまでは全く埋沒されてゐた。所謂堂上和歌や月並俳諧に於ける自然は全く裝飾的自然乃至都市的自然、それも偏よつた小規模の箱庭的自然であつて、時に新體詩抄の譯詩グレイのエレジイの如き、稍〻清新の感を漂はすものがないではないが、一般に自然に對する感覺は凡庸化してゐた。

この自然に、新しい表情と活動とを與へ、自然の中に新しい人生の相を讀みとらうとしたのが、明治十年代の末か

ら起つた自然文學である。文學の對象としての自然の範圍が著しく擴大され、深化された。李杜淵明を始め萬葉歌人や芭蕉の自然觀が再興され、殊に西歐自然文學の影響から、自然が著しく感覺的になり、時には全く人格化され、時には思索體系の形をとるやうにさへなつた。

自然觀として、多少中世紀實在論的傾向はあるが、とにかく自然の背後にある神の存在を明示し、かゝる自然を描寫するものが、正しい自然文學であることを唱へた論者は、民友社の德富蘇峰氏と女學社の嚴本善治氏であり、共に基督教精神によつて培はれた人々である。是等の人々は後には文學から離れた人ではあつたが、二十年代の初期に於いては、理解深き聰明なる文學愛好者として、その主張は明治初期文學論に重要な暗示を與へてゐる。例へば蘇峰氏はその詩人論に於いて

詩人は宇宙の美妙を吸收して、之れを同胞の人類に分配するものなり、宇宙の秘密を穿鑿して、之れを同胞の人類に說明するものなり、自から美妙の觀念を以て、天地萬有より動かされて、更に美妙の觀念を以て、人間社會を動かす者なり、而して其動かすや、皮相に非ずして、人間胸臆最後の琴線に觸るゝものなり、詩人の出る豈偶然ならんや、宇宙に美妙あり、故に美妙を觀念するの詩人出るなり。(新日本の詩人・國民之友二十一年)

と謂つてゐる。その美妙觀は茲ではかなり不明瞭ではあるが、宇宙の本體的なるものへの肉薄を意味し、それが自然文學に對するよき示唆となつてゐることは否まれない。その爲に、當時の蘇峰氏などは、李、杜、三蘇、淵明などの詩境に育てられながら單に漢詩の低徊趣味、悠々感に終始せずに、卽ち漠然とした宇宙の擴がりに精神を逍遙せしめるといふより、さうした宇宙の擴がりを狹めて、寧ろ宇宙・自然を一點に凝集せしめて、その核心を的確につかむといふ態度をとつてゐる。そこに明治の自然文學に哲學的、說明的分子が加はつて來た理由がある。その他生活環境の

變化から生ずる感覺の新陳代謝とそれに伴ふ自然の相貌の急變といふ外的變化も考へられるが、此傾向は特に短歌・俳句及び若干の散文文學に現はれて來た。

湖處子の「歸省」は、かゝる自然文學の中で特に哲學的自然乃至宗教的自然に近づかうとした自然文學の初期の作品である。

註一　德富蘇峰氏談に據る。「國語と國文學」(昭九・八) 明治文學餘韻參照。但し、此事は記錄的には未だ明確にしない。彼は「國民之友及び日本人」なる一篇を經濟雜誌に發表してゐるが、それは寄稿である。入社は其後の事であらうか。或は經濟雜誌所載の論文で有名になつたので、氏がさう考へられたかも知れぬ。

註二　拙著近代日本文學論及び季刊明治文學第三輯、浪漫主義私見（宮崎湖處子・一）

二

民友社の時文がその飜譯文調の根本に史記・八家文の文脈を藏せる如く、所謂國民派詩人の自然描寫には、漢詩文流の措辭が主要部を占めてゐる。「歸省」などにも左の如く、

我は衣を掲げて野路を遶り、小き流の側に出でたり。田より田に入る小川なれば、今頃は濁れり、去れど其涓々たる水聲の淀まざるこそ、嘗て淸かりし兆にして、其の春流、秋流、寒流たる時如何に明き夕陽を留めしよ。兩岸の白楊は猶ほ散り殘れる枯葉を留めて、風吹くごとに旅人を招けり。我は嘗つて此處に行吟して曰く。

晩渡無人月滿波、　前村家遠待母遲、
多情秋柳擬春柳、　野火殘烟捲翠絲。

我は猶ほ此流の或は廣く或は狹く、或は往き或は囘る堤上を歩しつゝ、漸く日光の熱きを覺ゆる頃、前代の一里塚、現時の休息樹陰の石上に憩へり。　（三十九頁）

行文中には、時には歐文調の混入するを見るが、主調は漢文崩しであり、描寫も特に際立つて新味はなく平凡なる田舍の風景である。これだけでは、別に「歸省」に期待する處はないが、次の個所に至つて、その描寫は抒情味を帶び來り、且甚だ明治的となつて來る。

吾前に横たはれる白壁處々、茅屋斜々、斷郭稜々、其を綴る緑竹青樹南北長く亙れるものは、愛らしき吾故郷なり。村を閣める竹樹の垣より洩れ出て、日影の裡に參差たる四壁の素屋は、一言に林外と呼ばれて、村中最貧者の世界なり。村の兩端青容最も深く且つ廣く、寥々烟火を隔てるものは士族の舊城郭なり。維新世界の變調は、何處の士族にも零落の波を打たしが、我郷の如きは其甚しきものなりき。尤も渠等の二三は、我郷の一殖産たる養蠶事業を起し北村地圖五分の一を桑田に行ち、交際場の好地位を維持したるも、其十中八九は看る／＼流潮に推し流されて、今は農戸に編まれぬ。去れば相傳の寶刀を賣りて、由來もなき鎌を買ひ、戰場敵を馘る勇氣を以て、徒らに秋の田の穗刈（いねかり）に施こすのみ。乘り馴したる駿馬は幸して田圃の役に堪へ彼等の學問は農暦に無用なりき、唯々渠等か轉業に於ける唯一の便利は、擊劍と柔術に由りて、體軀の健康なるにありしのみ。然れ共渠等が忍耐して稜角を殺ぎ、下等の小作人と伍し得たるは、世にある限りの幸福なりし。當時の詩人歌ふ（ママ）て曰く、「唯落ちしものとは見へ（ママ）ず鹿の角」と。渠等が武士より農民に化せし迄、無量の涕涙と無念とありき。（四十一頁）

茲には田園の變遷を敍しつゝ歷史の變遷が語られてゐる。無量の涕涙と無念とが平和なるべき田園にも存在するのである。かくして田園は封建制の沒落を語り、文明の浸潤を語るに至る。例へば次の如く

是等の連中に先づ來れる變化は、衣裝、風俗、飲食の上にありき。一月の後村中には手巾（てぬぐひ）の代りに鼻拭（はんけち）纏り、襤褸棄りて絹布輝き、笠は帽子に草鞋は皮靴に、田舍語は博多語に、泥痕は石鹼の香に代れり。幾くもなく美味に渇せし舌は、和酒と菜根を甘とせずして、ビール以上牛肉以上を貪り。世の中陽氣の歌は行（はや）り、絃鼓は彼等の坐に鳴り、田舍娘は競ふて手を渠

等に投げ良家の諸嬢も亦往々にして心を暴富の奴、塗抹の美に與へ、犬吠馬行の墟巷は看る看る浮華の都會とならんとせしなり。

原始的ではあるが、近代企業はこの純なる田園を汚し出した。そして、平和なる自然は徒らにその淳風美俗を毒されて、結局近代都市に壓倒されて荒廢の道へ辿るのである。かくして、美しき自然は次第に近代文明の爲に蠶食され、美德は沒落し、村は榮枯盛衰を急激に示し始める。明治の自然文學は、この「歸省」を通じて外見平和なる相貌の中に、變轉極りなき近代生活の萠芽を宿し始めるのである。

「歸省」の自然文學としての新意義は、作者が敬虔なる運命の信徒として、この田園にすら捲き起る近代の嵐を、純情を以て眺め渡る處にある。

と同時に、彼の田園への憧憬は痛切である。それは、やはり復歸すべき處は田園より他にはなかつたからである。

嗚呼浮雲よ流れよ、吾行方も亦常なし。前週の日曜日には十九世紀の花の都に在り、後週の日曜日には、島の果なる山中に客たる、是れ將た如何の變化ぞや。洛陽の巷を飛び去り、葛天氏の民に還へる、其間一旬を出でず、吾形迹の定めなき、浮萍と孰れ果なき。首府に於て別れを告げし友少なからねど、今ま我此の太古の村にあり、原始の時に遠からぬ、アダム、イブの遺風の觀るべき故老と共に、爐火、行燈の下に飲食せることを夢想するものは誰ぞ。聞く陶淵明が歸去來る時、滿天下之を知るものは唯淵明と其家族のみと。（一〇五頁）

作者はそこで其戀人に會ふ。彼女は脂粉に彩られてゐる代りに、自然の薔薇色を帶びてゐる。二人の交情は健康であり、乙女は些細なる言葉にすら頰を染める程、敏感で且純情である。「歸省」は玆に至つて、その目的を達するのである。

明治に於ける文化の急激な發展は、勢ひ都市生活が中心になり田園が顧みられなくなり、しかも、資本主義組織は都市に於いても、多くの敗殘者を作り出して、再び田園に追放した。明治のロマンティシズムの文學は、かゝる意味の田園追放者に對する詩的感慨を作つて、新自然を開拓したのである。その初期自然文學に於いては、殊に、その感慨が先立つて自然への眼は多少その抒情の爲に曇らされてゐる傾向がある位である。都會に對する反撥心と田園に對する憧憬心とが相紛糅して、著しく感情的になつてゐるのは右の理由による。湖處子には、勿論純粹の自然描寫、地方色を出した「一樹蔭」(二十八年)「自然兒」(同上)等があるが、それは後年の事で、「歸省」に於ける自然はかなり類型的であり、寧ろ自然觀の方が重視さるべきであらう。從つて、掬すべき小品文學とは謂はれても、偉大なる自然文學と謂はれなかつたのも、自然の模型が小規模で且平面的であつたからであらう。湖處子がワアヅワアスを愛し、その飜譯詩集まで發表しながら、獨歩からワアヅワアスの精神を知らざるものと罵られたのも[一]、實はその背後にある東洋的諦觀が遂にワアヅワアスにまで乘り越え切れなかつたからであらうと思ふ。

　しかしながら、「歸省」の自然文學史上の地位は甚だ重要である。明治の自然文學はこの「歸省」によつて始まり、これによつて地方色に對する關心と、自然と人生との相關的見方とが始まつたといつて過言ではない。獨歩や蘆花は勿論この湖處子を追うて彼よりも更に深い自然にまで高めたのである。

註一　信仰生命(獨歩遺文)

鷗外宛子規書簡について

土井重義

明治の文學が江戸文學の精神と形態から脱却して新しい生長を始めたのは、「小說神髓」を實踐した「一讀三嘆書生氣質」からであるとするのは、硯友社の文學を新時代の文學なりとすると同じく、文學史的觀點からの通說ではあるが、嚴密に言へば觀念的からの立場である事は免れず、事實、寫實主義の精神を盛つたものとされる「書生氣質」はその內容にも形式にもいまだ戲作的色彩が指摘されるし、最も進步的とされた「浮雲」に於てすらも、その手法に於ては三馬の匂がまつはり、硯友社文學に至つては、西鶴の名の下に、三馬、一九の態度が看取される事も亦明かである。たゞ、「浮雲」(明治二十一年)の手法に舊時代の匂のある事は認めても、尙當時にあつて秀れた寫實主義を後來の文學に植ゑ付けた事は否定出來ないのだが、「あひびき」(明治二十一年)の發表當時、文壇を激動させた事は「浮雲」のそれの時とは比較にならぬ程であつた。よく云はれる話であるが、藤村が文學に志を深めたのは實にこの作品の影響であるといふ。

明治維新以來西洋文明は駸々として日本を搖り動かしてゐたのであるが、その代表的な機關としての東京大學は明治十九年に近代的な組織を强化して、名稱も帝國大學と改め、泰西の知識を日本の萬般の制度內容に吸收するに汲々たる有樣であつた。この時浪漫的色彩に豐かな西洋文學が前代の粗笨な勸善懲惡小說、又は政治小說の類とは變つた

姿で紹介されたため、在來の小說なるものが如何に貧しいものであるかを知つたのである。之には勿論謂ふ所の西洋崇拜の心理が冥々の裡に働いてゐた事も認めねばなるまい。かゝる情勢の下に「あひびき」に驚倒した文壇に、新聲社を結んで「しがらみ草紙」を刊行、新時代の文學を天下に呼號してゐた新歸朝の森鷗外が、二十三年、「舞姬」を發表するに及んで一躍一代の文學指導者たる地位を確立、浪漫主義文學を周圍に與へたのである。「あひびき」に驚き「舞姬」に示唆されて、明治の文學は茲に漸く新しき生長を始めた。

併し、この「舞姬」は一つの口火であつた。明治十八九年の頃から自由民權の思想は滔々として行はれ、國會要望の民衆の聲は二十三年に至つて憲法の發布となり、帝國議會の開會となつた。西南の役以後、漸く建設事業の整備の緒についた國家は、社會のすべての分野に於て、新しきものへの一方向を目指してゐたのであつたが、この情勢に適應するやうに泰西の文化が急速に吸收され、その一つの部分にすぎないのが「あひびき」であり、「舞姬」であつたのであらう。更に古典文學の再檢討は、東京大學に於ける古典講習科の開設以來、反動的にせよ、新しき國粹主義の待望となつて現れた。芳賀矢一、立花銑三郎共著の「國文學讀本」、三上參次、高津鍬三郎共著の「日本文學史」、又、國文叢書類の魁となつた萩野由之、落合直文、小中村義象共編の「日本文學全書」等は何れも二十三年の刊行でいろ〳〵の意味で各々先驅的の業績であつたが、その何れもが、東京大學古典講習科出身者の手によつて編著された事は注目すべきである。かゝる底流を持つた社會情勢の上に泰西文學の華麗さを傳へた鷗外は極言を許されるならばわが近代文學の祖と稱してもよいのではないか。少くとも紅葉露伴の文學が後來の文學に影響を與へたといふよりも、鷗外がその役目を充分に果したとする方が更に適切なものがある。文學に於ける「文學界」、俳句に於ける「ほととぎす」和歌に於ける「淺香社」「心の華」の運動、短歌・新抒情詩に於ける「明星」。文壇に於ける之等革新運動者達は何れも深

淺の差こそあれ鷗外の影響下にあるか、又はその所緣に據つて結ばれてゐる事實は見逃がす事は出來ない。中に於て、「ほとゝぎす」と鷗外の關係は從來あまり注意されず、「めざまし草」に現れた子規、虛子、碧梧桐等の作品が僅かに之を示してゐるにすぎない。

子規全集の書簡集に鷗外宛のものが一通もないのは、この兩者の關係があまり注目されない原因の一つであらう。併し、「ほとゝぎす」の文藝活動が文學革新運動の一支脈である事は疑ひないとするならば、その關係を辿る事も意義のない事ではないと思ふ。その資料として、子規が明治二十九年から三十年の間に於て、「めざまし草」の俳句について鷗外に宛てた書簡を紹介したい。之等の書簡は何れも山田珠樹氏の祕藏せらるゝ所で公開されなかつたものである。

「ほとゝぎす」が子規の支持を得て、松山で俳句雜誌として柳原極堂によつて刊行されたのは、明治三十年一月の事であるが、爾來號數を加へて二十號、卽ち三十一年八月に至つて、遠距離のために子規と松山の編輯者の蒙る不便と、之に加へて經營難（「子規全集」補遺十八卷明治三十年七月一日年譜、「柿二つ」參照）のために、夙に文藝雜誌經營の意のあつた虛子氏の手に委ねられるやうになつた。この號の卷頭に子規は「ほとゝぎす發行處を東京へ遷す事」と題して次の如く述べてゐる。

是に於て第二十號の發兌と共に松山の發行所を閉ぢて新に之を東京に移し、此際を以て大いに紙數を增し體裁を改め、今迄の如く俳論、俳評、俳句等を載するは勿論、其が廣く俳文、和歌、新體詩、及び美術文學の批評をも加へて東都の文壇に一生面を開かんとす

と言つてゐる。この宣言の如くに同年十月に第二卷第一號として發行された「ほとゝぎす」の內容について見ると、

「古池の句の辯」「小園の記」「土達摩を毀つ辭」「俳諧無門關」等の俳論、俳文、寫生文等の外に、新體詩「花賣る歌」「豐年の歌」、和歌「蕈狩」等があり、又、「文學美術漫評」欄が設けられて同人各自が擔當して執筆してゐるのであるが、その大部分は子規の筆に成るものであつた。この内容によつて見れば俳句雜誌としてよりも一段と文學雜誌に近いものを感ずるのである。虛子氏が經營を引受けて文學雜誌として出發した事は、鷗外との關係を見る事に依つて、この雜誌を當時澎湃たる新文學運動の一支隊として意義付ける事が出來ると思ふ。

虛子氏は俳人としてよりもむしろ文學志望者としてスタートを切つたらしく想像されるのは、子規との往復書簡に於てもその片鱗を見られるのであるが、筆者の問に對して、鷗外との交渉の最初を次の如く述べられた。

（前略）鷗外は小生國許にゐる時より柵草紙を愛讀致居り、尊敬致し居たるにつき、一日刺を通じて訪問、其時引見快談。丁度めざまし草を出す時なりし故、俳句をのせぬかとの交渉を受けのせたもののやうに記憶致居候（後略）

右の年月について虛子氏は不詳とされてゐるので、筆者が推察を加へるならば、虛子氏が碧梧桐氏と共に京都の第三高等中學校から仙臺の第二高等學校に轉じたのは明治二十八年九月の交で、その十一月には擧つて退校、上京して、子規の許に馳せ參じたのであるが、「めざまし草」は明治二十九年一月に創刊されたのであるから、右文面によつて、虛子氏が上京した十一月、おそくも十二月の中でなければならない。小說家志願者としての虛子氏は、子規からは攻擊されてゐたけれども、爾來鷗外の知遇を得たのである。この知遇の結果、鷗外の感化が虛子氏を通じて「ほととぎす」の色彩を汎く文學的ならしめたとしても甚だしき誤謬ではないと考へる。

之より先、虛子氏は松山の尋常中學校生徒の時、在京の同鄕の先輩子規の許に碧梧桐氏の紹介を添へて始めて書信を送つた。虛子氏は十八歲、子規は二十五歲、二十四年の頃でこの間の消息は虛子氏が「明治二十四五年頃」（「ほとと

ぎす」第十九號）に記してゐる。

碧梧桐中學を終ふるに及ばずして京に上るや、子規子と寄宿舎を同うして彼は日夕其の薫陶を受く、而して縋るが如くなりし余と往復の書の中に彼は常に誇り氣に之を余に報じ來りたり。余羨望に堪へず、碧梧桐を介して始めて子規子に教を乞ふ、而して當時子規子より余に返したる書（略）日附は明治二十四年五月二十八日とあり。

かくて翌年の夏には折柄歸京した大學生子規と虚子氏は相見え、爾來子規は肉身の弟に對する如き愛情を以て虚子氏を誘掖して行つた（「柿二つ」）。二十五年の二月に子規は「月の都」なる小說を携へて傚服してゐた幸田露伴氏を訪ねて批評を聞いてゐる事實は、たとへその作品が小遣ひ稼ぎの名目でなされたとは云へ注意しなければならない。虚子氏が上京して鷗外を訪ねた事は前述の如くであるが、子規は虚子氏の紹介を受けて鷗外を訪問した。その時日について森潤三郎氏も明確を缺いてゐられるが、虚子氏の前揭の書簡の中に年月は不明であるが、子規が虚子氏の後で訪問した事を認めてゐられる。恐らく之は二十九年の初頭、「めざまし草」が刊行され、子規一派の俳句が虚子氏が同誌の俳句欄を擔當した關係上載せられた事などが兩者を接觸させる機緣となつたものであらう。その外に嘗て露伴氏を訪ねたと同樣な氣持が心の底に動いてゐたのではなからうか。併し、鷗外は子規に對して如何なる文學的示唆を與へたかは不明としても、俳句などについても語つたやうで、二十九年五月二十日附の虚子氏宛書簡に子規は鷗外の俳句觀賞眼について感嘆してゐる。二十九年には子規はすでに病床に親しみがちであつたが鷗外を屢々訪問してゐるらしく上述のものもその一例であるが、以下に揭げる書簡中にも見られる。

啓　先日は例の長坐失禮はかり致候

虚子歸國に際申殘し候には秋水に不折の畫をはさみ度云々との事に有之候右は如何の御都合にや畫を入れぬとならばよふし

けれども若し入れるとの御考ならばどれだけの大きさにしていつ頃迄にさし上可申や右御指示被下度書師へは小生より申傳へく候めざまし草の議論がやみたりとて鳴雪氏は失望の由に候秋水の句如何に御座候や先日御話の趣も有之候故秋風の古句拔萃致置候御ひまに別紙御一覽被下度候

虚子歸郷後來書あり病人存外よろしとの事に候已上

明治二十九年八月

子　規

鷗　外　雅　伯

今日は立秋との事なれば

見てあれど何から秋のたつぞとも

秋立つや隣にはまだ赤い花

明後日は日蝕と申事につきふと秋水に考へ及び候大方日蝕秋水の取合せの句はどこぞから來るべゝと存候若し多ゝ來らば最も善きものを一句拔き可申と樂居候

小生もこころみに

日蝕のうつりてすごし秋の水

といたし候呵々

この書信の書かれた頃は漸く病勢が明かになりつゝ歩行の自由を失ひ、多くは床の上にゐた。鷗外はこの時軍醫學校長を勤め三十五歲、子規は三十歲であり、日本派の俳句運動が世人の目を奪ふ頃であつた。右書簡は虚子氏が歸郷中、その留守を預る子規が「めざまし草」の俳句欄についての問合せの文である。この秋水の句の載つたのは「めざ

まし草」八月號で延刊のため九月二日に發行されてゐるが、出句者の顏觸れは鳴雪、漱石、子規、霽月、碧梧桐、紅綠、肋骨、鷗外、虛子等である。不折の挿繪は河童の圖で、更に子規の「靜かさに礫打ちけり秋の水」「人もなし日蝕うつる秋の水」の二句が添へられてゐる。鷗外の句は二つで「菱取りて里の子去りぬ秋の水」「憶亡父 俤やつくばひ覗く秋の水」が之である。この二句について子規は次の書信を鷗外に宛ててゐる。

拜復 玉什拜誦つくはひの御句わたくし氣に入り申候右の句菱取ての句の次へ御はさみ被下度候（尤も前書とも）把月子の句流れてといひ落ちぬといふ重復かと存候故取らず

新小說第二號の末に拔萃したる俳話百韻の句愚見異なり候ニつき此次の日本人に卑見相述候つもりに御座候 匆々

明治二十九年 子規

鐘禮舍主人

虎皮下

之は前揭書簡に現れたものと同じく「めざまし草」の出句を鷗外は先づ子規に報じてその可否を乞うたものらしく、子規は二句とも採つて、殊に第一句は賞めてゐるのであるが、鷗外は俳句の作品をあまり殘して居らず和歌程得意ではなかつたやうで、「めざまし草」の俳句欄に三四回出句してゐるが、その後は全然投句してゐない。之は案外子規の採點が辛かつたために印刷に附せられなかつたためであるかも知れぬ。この手紙から見るとそんな事も推せられるのである。それはさておき、「新小說第二號の末」云々の項は子規の云ふ通りでなくこの號には俳話百韵の句と云ふのが見當らない。筆者の見方が足りないのかも知れぬが、新小說第二號にはない。

右二通の書簡と前後したものに次の書信がある。

面啓

秋水の句あつまり候まゝ差上申候
別に歌仙一卷差上候へどもこれは紙面の御都合にて御取捨被下度候

八月十八日　　已上

子　規

鐘禮舍大人

玉几下

四方から稻妻光る小家かな
稻妻のあと風になる夕かな
稻妻に屛風をかこふ遊女かな
葬禮に稻つまちるや原の中
竹伐ていなつま近くなる夜哉
いなつまや盥の底のわすれ水
ひかく／＼と稻妻すなり星なから
壁のすきにいなつます也魂まつり
いなつまに心なくさむひとや哉
空城やいなつま落ちて風起る

即吟十句御一笑にそなへ申候

此書簡は前掲第一のものに關聯してゐる事は明かで、恐らく第一のものの次に出されたものであらう。「歌仙一卷」は同じく「めざまし草」の八月號に掲載されて居り、碧梧桐氏、子規の兩吟で、「芭蕉破れていまだ聞くべき雨もなし」の碧梧桐氏の發句を「宵の嵐にかたわれる月」と子規が受けてゐる。一體子規は連句の作品は少く、「めざまし草」七月號に「草庵」といふ題名を持つ歌仙を、子規、紅綠、虛子、碧梧桐、肋骨の五名で作つてゐるが、この二つの作品以外に見當らないやうである。俳諧の境地は連句に至つて高潮するのではないかと觀ずる卑見にとつて、之は少し淋しい氣がするのである。

稻妻の別吟十句は後に全く病床について了つた三十二年の八月、圖らずも萬葉調のすぐれた作品を田安宗武に發見し喜びに堪へず、病體を打忘れこの喜びを虛子氏に傳へようとわざ〳〵神田の「ほととぎす」發行所を訪ねての歸途、神田から根岸に行く車上で、夕立の後の夜空に美しく光つてゐる稻妻を見て卽吟十句を作つて、「ゐざり車」と題した一文の中に發表してゐる。この方は寫生句であるから、この書面中に見える稻妻と違つて甚だ生彩を帶びてゐる。子規が鷗外に對して親炙の態度を持してゐた事はこんな點にも見られるが、俳句分類をやつてゐた餘暇に秋風の古句を拔萃して鷗外に敎へてゐた事は、論ずるまでもない事乍ら、親しい交涉の間にも、俳句の先輩としての子規を見出す事が出來る。

以上の三通は虛子氏が歸鄕中に發刊された「めざまし草」八月號についての書面であるが、鷗外はその延刊を取返すために同じ九月の中に續いて九月號を發行した。この時も虛子氏は上京してゐないので子規が前號同樣に俳句欄を擔當したらしい。次の書簡は之を示すものである。

拜啓　蟷螂の句は虛子の分未着に付一兩日中に差上可申候御句如何候や只今集まり居るもの丶中にて二三句申上候へば

蟷螂落ち蜈蚣這出る椽の上
蟷螂よ枳殻の中に逢着す
蟷螂のほむらさめたる芙蓉哉
蟷螂に石うつて去る野道かな
蟷螂の這登りたる城の壁
城跡やばつた蟷螂なんど飛
蟷螂の取逃したるいなご哉
桐落て蟷螂多き小庭哉
蟷螂や油とらるる身の終
蟷螂の直に鎌ふる卑怯哉
日蝕して蟷螂蟬を捕へんとす

別紙蟷螂の畫は前號不折にかゝせたるよりふと思ひつきてこゝろみに牛伴（爲山）にかゝせ候ものに御座候御差支なくば御はさみ被下度尤も時日切迫其他御迷惑等の事あらば勿論其まゝに御さし置被下候て不苦候

蟷螂といふ題はむつかしき故いかゞと畫師と申居候兎に角御一笑に供へ申候

九月十五日夜　匆々不一

規

鷗外先生
研北

臥褥のまゝにて認む
亂筆御容赦被下度候

右文面の俳句の作者は「めざまし草」九月號に現れた所を見ると次の如くである。「蟷螂落ち」「蟷螂のほむら」の二句は碧梧桐氏、「城跡や」は牛伴氏、「蟷螂の取逃したる」は東雲氏、「日蝕して」は把栗である。その他の句は選に入らなかつたものと想像される。未着を報ぜられた虚子氏の句は「草むらに蟷螂をるや黄なる花」「蟷螂のはりがね虫をひいて居る」の二つが載せられてゐる。俳句欄に挿繪を入れる事は前月號から始まつたのであるが、それが思はぬ好評でもあつたのか引續いて入れる事になり、下村爲山氏が描いてゐる。之はずつと慣例となつて「めざまし草」の紙面を飾つてゐる。この號に鷗外は「蟷螂の夫は妻に喰はれけり」「蟷螂の斧を引きゆく小蟻哉」の二句をものしてゐるが、子規は「蟷螂の不覺を取りし最期かな」「蟷螂や蟹の味方に參り合はず」の二句を出してゐる。兩者の俳諧が稍々共通の傾向を見せてゐるのは、子規が鷗外にある程度の影響を與へてゐる結果ではないだらうか。

明治三十年に至ると子規の病狀は次第に惡化して單にリウマチスなどゝ云つてゐられないやうに腰部の腫物が痛みを增して來たのである。脊髓から漏れる膿汁が腫物を破つて流れ出るやうになつて、發熱が續く有樣となつたが、屈せずして俳句に精進してゐたのであるが、姑息な療法では少しも病勢の減退は望めないので、遂に外科醫佐藤三吉博士の診斷を仰ぐ事になつた。この事を鷗外に報じたのが次の書簡である。

拜啓
御無音ニ打過候處筆硯益御清適奉賀候小生不相變臥褥まことに生甲斐もなきことに思ひ候へども致方も無之腰の處少し腫れ上り候ニ付近々佐藤三吉氏の療治（プンクチオン）を受くる筈ニ候萬一それが功を奏して外出が出來候ハヽ何よりの喜ひに

有之候小生只今の望ハ春暖に乘して郊外を少し散歩致度ばかりに候人間の望もこゝ迄小くなれば最早希望が命つなぐばかりに(候カ)ある時卽ち今はの際を去る事遠からずと存候呵々虚子の頼みこし候まゝ蛙の俳句差上申候今度はよりが少く僅々二十句許を得申候先は如此匆々頓首

明治三十年三月十六日　子規

鷗外詞伯

玉几下

この書簡の發せられた當時の病狀を母堂の病氣のために歸鄕中であつた虚子氏に報じた三月八日附の書信の中で、「小生不相變熱引かず九度一分まで達し候低き日も八度六七分の間にあり每日の事故何だか弱り候樣覺え候」と云つてゐるが、到底常人のよく忍び得ざる狀態の中にも一縷の望みを佐藤國手の手術に恃つてゐたのであるが、三月二十七日手術を受け腫物を切開、愈〻明日から外出も出來ると樂しみにしてゐた甲斐もなく、卽夜「再び腫れ上り手術も何の役にたゝぬやうな感じ」がして失望落膽した。右の書簡に見られる子規の悲嘆は、珍しく弱い彼の姿を見せてをり何にも增して惻隱の情に打たれるのである。「蛙の俳句」といふのは恐らく「めざまし草」の俳句欄のためのものと思はれるが、卅一日發行の同誌三月號は何の故か俳句を休載してゐる。四月號に延期されてゐない事は次の書簡に明かである。

拜啓　めさまし草本月分俳句御送附申上候日永の畫二枚不折より送り來り候大佛の方よろしきかと存候へども如何や御取捨被下度候印は黑にてよろしかるべく候匆々不宣

明治三十年四月

この四月號は廿八日に發行されて、挿繪は子規の申出の通り大佛の顏が採用されてゐる。出句について鄕里にある虛子氏には「めざまし草日永の句は皆よろしからず且つ句の少かりしためついでに駄句をまぜて二十五句を得申候」云々と報じてゐる。この書簡の書かれた頃から衰弱甚だしく、面會謝絕を醫師から言渡されたのであつたが、人が來れば談論忽ちに發するので、談話を斷る旨の貼紙をするやうになつた。

以上五通の書簡は「めざまし草」の俳句欄についての往復書簡であつて、たまく擔當者の虛子氏が歸鄕中であつたために交された感があるが、虛子氏の鷗外の知己を頭に入れて書かれてあるのが看取される。この心やりは例へば「めざまし草」の俳句の配置順序にも現れて、虛子氏に代つて編輯した時にも常に虛子氏を最後に置いてゐるのである。子規はかゝる機會を通じてのみ鷗外と接觸したのではなく、同じく山田氏所藏の子規書簡は更に四通あり、一斑は「べく」の題名の下に「ほとゝぎす」第十九號に載せられた。三十一年に至つて俳句にまさる熱心さを以て始められた和歌の研究の中、「べく」で止めた和歌、及び和歌に於ける「の」の係に關する覺え書を、その成るに從つて次々に鷗外に報告したものがあり、原稿紙にして約十數枚に達するものであるが、之を以てしても、鷗外と子規の交遊關係は、單に「めざまし草」の俳句欄を通じてのみのものでなかつた事が分るのである。子規が鷗外の作品を通じて批判をした事は數へる程しかなく、子規の書簡集の一部、「病牀六尺」の一部に見られ、又「めざまし草卷一批評」なる一文などがある程度にすぎないが、俳句については先輩の地位にあつた事は既述の如くである。併し鷗外の俳句の觀

賞眼の高い事について嘆じてゐる事も亦前に述べた如くである。

明治三十年十月に至つて「ほとゝぎす」は文學雜誌の體裁を以て虛子氏の手に依つて復活された事は前述の如くであつて、「めざまし草」の三月號に鷗外が

鷗外の編輯に任ずる事は洵に然り。世人の鷗外が綠雨、虛子、眉山、紅葉、露伴に囑せりとなすを妨げず、又世人の綠雨、虛子、眉山、紅葉、露伴が鷗外を役せりとなすを妨げず

と「めざまし草」について述べてゐるのでも明かな如く、虛子氏が鷗外に得た知遇の結果、「ほとゝぎす」派の俳人達が「めざまし草」に占據した事實、延いて「ほとゝぎす」が鷗外の影響を受けた事實は否定する事は出來ない。「めざまし草」が「柵草紙」の衣鉢を繼いで文學革新運動のリーダーであつたと同樣に、「ほとゝぎす」が俳句界に於ては華々しき指揮者であつたのである。その指導者子規が虛子氏を通じて鷗外と接觸を保つてゐた事は、鷗外の存在が文學に於ていろ〳〵の分野に高い地位を占めてゐた事實を物語るものであり、彼の影響を考へる事なしには明治文學史を解き得ないとしても過言ではないと云へよう。

露伴文學に於ける名匠氣質

形田藤太

私共が露伴の面貌を思ひ浮べる時、紅葉、露伴と對照された華々しかつた作家としての一面と明哲の域に達した後來の史傳、考證、學究の最高峰に輝く一面とが盾の兩面の關係に於いて浮んで來るであらう。今その後者は暫く置くとして前者の作家としての一面を見ることにする。

紅葉と對照された時に私共は、紅葉に於いては極めて感受性の强い自由な市民的な快脫さと親分肌の才人を思ひ、露伴に於いては重剛な云はば古武士風な環境に養はれた東洋的な好尙、それでゐて何處となく捌けた江戸兒氣質の風貌を望むのである。春淺い明治維新前後に生を得たこの二作家に以上の相違點を見出すのである。

さて露伴は自己に就いて語ることの極めて少い作家でこれは又一面當時の文學界の風潮でもあつたのであるが、改造社の現代日本文學全集の露伴集の卷末に附いてゐる年譜と博文館の露伴叢書の卷頭に揭げられてゐる極めて簡單な自傳的なものより以外には見ることが出來ない。もつとも「少年のころ」といふ文章があるとのことだが未だ目に觸れる機會がないのでそれに就いては止むを得ず省略する。自傳及び年譜によれば

……慶應三年七月江戸に生る。その乳兒たるに當つてや孱弱多病、……伊呂波を關女史に受け九歲甫めて小學に入り、十二歲業を卒ふ。次で或は東京府中學に或は菊池氏私塾に學びしが故有りて皆業を卒へずして止む。十七歲より後世路に趑趄と

す……

明治十五、六年

夜々菊池松軒先生に就きて聽講、年少無知と雖も、程朱の學の藩籬を窺ふを得たり

明治十六年

電信修技校に入る、給費生となりて自ら支へたる也

明治十七年

同校卒業、實務を執る

明治十八年

判任に補せられ、次で北海道後志に赴任す

明治二十年

官を棄て出京す　乃ち免官せらる

明治二十一年

「露團々」を草す

明治二十二年

讀賣新聞社客員となる　五月「風流佛」刊行

明治二十三年

國會新聞社に入る　六月「葉末集」刊行

とあり、更に文藝春秋座談會「昭和八年二月」の席上の談話筆記によれば貧しい武家の家に江戸兒として生れ、貧し

い中にも讀書に飽くことを知らなかつた讀書癖に近いものを持つてゐた白面の青年であつたことが知られる。その學識は一般の稗史、傳記、戲作書類から狂歌、俳諧、支那小說、老莊、程朱の學に參じ、佛書に精通し、禪學に達し、加ふるに博覽强記、又一面世路の艱難を踏んだ結果より得た耿々たるものがあつたことも爭はれまい。してみれば、自らそこに露伴の人間性が對社會との關係に於いて決定され發展されたことも考へられなければならぬ。純粹の江戶兒としての洒脫と才氣と俠氣、それを培ふ一般の稗史、狂歌、俳諧、支那小說、次いで漢籍佛典による佛教的修養、判斷力卽ち知的觀念の養成、更に悟道の境涯への沒入、以上擧げた性格の決定は必ずしもその順序に從つたものでないにしても大體に於いて人間露伴の發展の跡付けの線に沿つたものとして肯定されるものであらうと思はれる。この場合注意すべきことは彼の知的觀念の把握は讀書より得た書齋裡のそれであつたといふことである。このことは最後迄露伴の性格の決定的なものとして作用してゐるのである。

以上の露伴の人間性を他に托して語つてゐるものと思はれる唯一のものとして次のものが擧げられると思ふ。それは文藝春秋の座談會の席上、千葉龜雄氏と露伴との對談の中に

千葉　先生は一番饗庭さんが氣に合はれたぢやないですか

幸田　饗庭君といふ方は、江戶兒でしてそれに茶氣のある、無邪氣で、輕味の、それでゐて內氣で、少し隱者氣質のやはらかい、それはもう極く良い人でした。極々奧には氣むづかしい一風流の矜持と意見とが有つてそれでゐながら機嫌の好い時は洒落を云つて人をも笑はせ自分も笑つて……

と露伴の言つてゐる篁村の人間性を漢籍、佛典より得た東洋的悟道とも云ふべき意識內容、行動內容を太い線で包んだものが作家露伴の性格の稍々具體的なものに近いものであることは想像するに難くないやうに思はれる。かやうな

人間性と相互關係にある社會と、その上部構造に位置する文化形態の一つである文藝現象はどうであつたらう。

露伴が作家としてデヴィウした二十年代の初頭は既に常識化してゐる如く、社會の萬般が近代資本主義社會機構と殘存せる封建的なものとの完全な整調さの上にあるといふよりむしろ近代資本主義社會機構の一時の落着の安息さの中に封建主義がそのまゝの形に於いて定着を見ようとする暫定的なゆとりを見得る狀態であつた。してみれば上部構造に位する文學の道に於いても歐洲近代の資本主義の御先走りの飜譯小說、政治小說の狂奔の中に傳統的な戲作者流のもがきの聞き取れる文學の貧困さの中に、所謂胎生期の陣痛の中に、硯友社文學の花のほころびが見出されようとする頃であつたのだ。この時にあたつて元祿文學の巨匠西鶴が復活したのは文壇的に見て最も注目すべき現象であつた。それはかゝる政治小說、飜譯小說乃至科學小說の無味乾燥さと一方に於いては戲作者流の低陋さの中に在つてその表現の絢爛さに於いて新興文學は先づ眼を奪はれざるを得なかつたのだ。西鶴の元祿期を背景としての寫實の鋭い暴露のメスと近代資本主義社會の變移への過程の動搖期を經ての暫定的な落着を見せた當時の社會の現狀等との對比に於いて目に寫つた西鶴の姿ではなくして先づその外面的な表現の大膽さと洒脫さと流麗さとにあつたのだ。何となれば何れの文學の時代に於いても新興文學の必要とするものは實にその絢爛たる表現形式であるからだ。內容の如何はその次に來る問題である。その西鶴が如何にして迎へられたかは露伴、紅葉を透して流れてゐる江戶兒氣質を通じての、殊にその流麗と洒脫さに於いての流通であつたことを見逃してはならぬ。彼等の都會人的な洒脫さと才氣とが先づ時處を越えて西鶴がその流通を經て彼等の間にあたかも貪食の如き面貌を以て吸收されたのであつた。露伴がその「井原西鶴」(國民の友、八十三號二十三年五月)に

西鶴の文は自然一家をなす、輕快靈妙毫も冗漫重複の所なく、恰も片舟に乘て急流を下るに山飛び岩走り花も草も樹も精し

く觀るに邉なき所を過て後汪洋たる大海に出で、初めて西顧するに白雲既に來路を埋めて前途は水烟茫々たるを望むが如し……西鶴の文は讀者を載て飛ぶ舟のみ舟中見る所の山水は相變らずの世界なり唯此舟に乘つて世界を見るに此世界仙境の如く面白し、是れ此舟の走ること箭の如く飛ぶこと星の如く一刹那も遲滯緩漫徒らに時を過すことなきに囚る、文は是の如くにして妙ともいふべく奇ともいふべし、相變らずの世界を取つて仙境の如く思はしむるればこそ妙なり奇なり、仙境の如き箱庭を作つて人に示すが如きは兒童の文學のみ。畢竟するに西鶴が文は材を普通に取つて笑を靈妙に運ばす……

と言つてゐるのも此の間の消息を語つてゐるものとして理解されねばならぬ。しかして西鶴が如何にして彼露伴の中に攝取され肉體化されたかが西鶴を介しての此の期の露伴文學の面貌であり移行でもあらねばならぬ。

さて社會一般の諸關係によつて養はれた人間露伴の性格が自らの表現として筆を取つたものが未公刊の「風流禪天魔」の處女作に續いての「露團々」である。前者に就いては文藝春秋の座談會の「處女作前後」の條に「露團々」以前に人に見せるつもりではなくて洒落本みたやうなものを書いたことがある。ところが同じ書くなら人の讀みさうなものを書かないかとの話で「露團々」を書いたのだと云つてゐるところを見ると「風流禪天魔」は純然たる洒落本系統の作品らしく思はれ、紅葉の極めて初期の未公刊時代のそれと全く同一の範疇に入れらるべきものであつた。江戸兒氣質の極めて單純な輕妙さのみの作品であつたのだ。彼が洒落本に創作の筆を發したことは重大な意義を持つものでなければならぬ。

先づ露伴の公刊處女作である「露團々」を見るに、この作品に次いで書かれた「雪紛々」(中途で筆を斷ち、後年になつて筆を繼いだ作品)の「雪紛々引」の中に

此物語は想像の區域の廣濶と、想像の核心の强大なることを悅びたりし當時の予は……

としてゐるところに前者が世界をアメリカにとり、人物の一人を文世武（ブンゼイム）は紀國屋文左衛門を洋人に仕立てたもの）としてゐるが如く、更にそれに支那小説「今古奇觀」等に取材し、飜譯調であるに對し「雪紛々」が舞臺を北海道アイヌの墳墓の地にとり、歴史上のアイヌの武勇傳説を描いてゐる點に既に博覽、見識と學才の萌芽を認め得るのである。「一刹那」に至つて始めて西鶴との交渉が見出される。その妙想と輕妙さ、此處に西鶴によつて刺衝されて呼び醒された露伴の肉體より遊離した才氣のみの跳梁を見るのである。これはその才氣を單に西鶴調に借りたに過ぎないもので、以上の作品に在つては露伴性格の內在的なもの、個々の純粹性の發露に過ぎないもので露伴性格の稍々個性的な色彩を持つたものは二十三年九月の「風流佛」である。この作品に於いては主人公珠運の性格の中に生來的な江戸兒氣質の俠と佛敎的な知的敎養の諦念とが或る過程を經て愛する少女お辰の像を彫るといふ藝術三昧境への諦念への移行、そこに主人公珠運の悟道の扉の開け行く有様、これを妨げようとする冷酷な現實の重壓を脱しようとする修道心、それは無念無想の法悅境への馴致、そこにはまだ強く身をさいなんでゐるお辰に對する情念が最後迄のたうつて纒み付いてゐるのである。全一なものへ歸一せんとする悟道心、それは露伴性格のあらゆるもの丶統合の終局極點であらねばならぬ筈である。この珠運のこの藝術精進はその境地に迄到達しようとする一つの道程標であつたのだ。露伴の人間的修養と藝術的精進とは此處に於いて統合的なものとして同一軌道の上にのつかり得てゐるものと見得る程度に至つてゐる。本篇並に以後の所謂名匠氣質を取扱つてゐる作品は云はばこの兩者の同一軌道での歸一的なものへの統合であるのだ。露伴が本篇に設けた伏線、卽ち構想美として見られるものは嘗ての彼の作品に見られないものであり、彼のあらゆる最頂點を示す作品「五重塔」に至る準備作品として注目さるべきものである。少くとも露伴の目にもかゝる現實の慘酷さは看過され得なかつたのであらう。嘗て「國民ノ友」の雜體子（實は石橋忍月）は「昨

年の名作」（七十三號二十三年二月）と題して

予が見て以つて昨年の小説界に超出する傑作と思ふものは實に露伴氏の「風流佛」に外ならず鷗外漁史曾て云へるあり「材」を撰ぶことの精なると「想」を構ふることの美なると兩者相俟つて初めて詩の美術品を製造するを得べし云々と是れ蓋し至言なり數多の小説家「材」を構ふるに長ずるは鮮矣、縱令之れあるも全篇の局勢を輕ずるが故に常に金玉をして瓦礫となす「材」を撰ぶこと精にして又た想を構ふること美に、兼て全篇の意志に注意する人は獨り露伴氏あるのみ「風流佛」あるのみ

と言つて昨年中第一の作品としてゐるのも故ある哉である。この人間的修養と藝術的精進との統合された解脱境への完全な性急な極端な遂行は「奇男子」の喜劍の狂熱そのもの丶奇行として現はれざるを得ない。何となれば一面に於いて現實の冷酷さを見逃し得ない作家に於いて强ひてこの兩者の完全な發展を强行しようとするならば奇矯に過ぐる喜劍の武士道への偏執性と男性的な强調となり、これに類する「血紅星」の皆非居士のあまりにも潔癖に見られる熱狂的詩情ともならざるを得ない。次の作品の「對髑髏」の江戸兒氣質の粹と艷麗とに表現される夢幻境は前の二作品のそれと共に西鶴的なものとは遙に遠い無緣の衆として別れ去るより外はなくなつたのである。してみれば西鶴を捕へたのも露伴の江戸兒氣質であり西鶴から離れざるを得なくなつたのも江戸兒氣質のしからしめたものであつたのだ。偏執と迄思はれる道念遂行への意趣に於いては江戸兒氣質は露伴性格の發展の上では江戸兒氣質の中よりそれに必要な構成內容を云はば抽出したる形骸に化せざるを得なくなつてしまつたのである。此處に露伴文學に於ける名匠氣質の屬性の出現が西鶴を通過して露伴性格の發展の自らの現はれとしての意義が認められなければならないし、それは又露伴性格の發展の一エポックでもあつたのである。かくて西鶴流の文章と西鶴的內容とは露伴に於いては個性的な雄渾な肉體的表現とならなければならなかつた。卽ち彼の漢詩文の愛好の結果は文章に於いては顯著な風韻を創

出し、詞典、稗史風の雅俗の交錯せる表現はその詩的内容の振幅と度を合せ或は流麗に雄渾に流出するものとなつたのである。

次の「一口劍」の正藏は以上に述べた悟道と藝術的精進とを體現してゐる達人として描かれてゐる。愚直で貧乏人の彼が主君によつて見出され、その君命によつて名刀を作るべきことを授かつたが自らを省みて一應は斷つたが君命に感激飜然一轉、不退轉の勇猛心を起し天下の名刀を鍛上げるのである。正藏に在つては藝術精進即ち名刀を鍛へることは悟道への參殿であり悟道に入ることは即ち名刀を鍛へることになるのだ。從つて悟道に參ずることは彼に在つては既に名刀が成就したと同様であるのだ。彼が奮然として名刀を作らんと決心した刹那すべての迷夢と繫累とは煙の如く消去つてしまふべきである。かくして名刀は易々として成就したのである。この場合に於いても作者は「風流佛」と同様、不退轉の勇猛心を奮起させるべき伏線を忘れなかつたのである。

以上擧げて來た作品を見て次の「辻浄瑠璃」「寢耳鐵砲」に至る場合、私共は又何といふ違つた風景に接することであらう。上掲の作品に在つては常に前方に立塞つてゐる妨害、常に彼等の行動意慾を挫折せしめようとする現實の冷酷さを認めなければならなかつた。この故に江戸兒氣質の輕妙洒脱の才氣を以てしては乘越えることの出來ないものがある。この現實の重壓を完全に乘切るためには稍々もすれば奇矯・偏執の性格となり勝であつた。此處に讀者は男性的な强調を餘儀なくせしめられたゝめに生ずる才氣と道念との矛盾の壓迫から逃れることの出來ないことを意識するであらう。然るに「辻浄瑠璃」「寢耳鐵砲」(二つとも同一主人公で上卷下卷の關係に於いて見らるべき作品)に在つては偏執性と奇矯性を少しも持つてゐない釜師西村道也が生涯の變轉の中に在つて殆んど多才多藝の全能を具備してゐる人間として行くとして可ならざるなき榮達の一生が描かれてゐる。主人公が露伴の如上の求道心と藝術精進とを

體得してゐる點に於いて「一口劍」の正藏の如き不退轉の勇猛心を必要としないし、名匠釜師の身に覺えの才覺と多藝の見事さによつて殆んど秋風の野を渡るがやうな勢で藝にさしてくる榮光が自らの光を發するに至つてゐるのである。從つてこの作品に在つては、才覺と悟道の反駁の如きは全く見られず、道也の生涯——零落より榮達——は稍々もすれば彼の傳奇的な生涯にのみ安易な藝道の完成がかゝつてゐるといふ事實に思ひ至らなければならぬ。このことは悟道と才覺の反駁の見られない名匠氣質の道也であつてみればその生涯そのものが彼の藝道完成に最も緊密な關係に於いて結付けられて考へられなければならない。然るに彼道也の生涯は極めて現實性に乏しいもので傳奇的な生涯の一語によつて盡されるものであつたのだ。してみれば此處に露伴の知的觀念の現實性といふ問題が考へられなければならなくなる。彼の知性はその初期に於いてこそ人生行路難の所產として耿々たる一面を有してゐたとはいふものゝ佛教的教養と漢籍等によつて養はれた一種の規矩は要するに書齋裡のものであつたことは前にも述べた所である。新しい現實の正しい把握より體得された知性に根差してゐるものでなかつたゝめ道也の生涯と緊密な關係に於いて計量さるべき藝道完成の眞迫性が極めて現實性の乏しいものにならざるを得ない結果として殘らざるを得なくなつてゐることを見逃すことが出來ない。されば作者は道也が生涯の最後の榮達、それは釜師としての腕前を捨てゝ見出された主君の命により鐵砲製造に手腕を現はしそれによつての榮達を彼の鄕里に飾るべく歸省して土地の昔の同業の釜師を招宴しようとした際、一人の釜師淨珠によつてその道の意地を立てゝこそ名匠と言はるべきで何も釜師の道に於いて意地を通さなかつた道也の招宴の席には行かないとして

呼情無い彼程の氣象なり才智なり有つて居られながら道也殿は此我に茶一杯馳走させらるゝだけの事がまだ今までには出來て居らぬやうな

と云はせ、この言葉がいつとなく道也の耳に入つて

　道也一生これを思ひ出づるごとに齒を嚙み恨み惱みける

といふ伏線を設けることを忘れなかつたのである。この言葉はその道々に尊ぶ意地の名匠氣質の構成要素の一つであることを語つてゐるものであり、その限りに於いて露伴の云ふ當世外道の一面を護つてゐるものであり、道也の恨み惱むところ藝道精進のともすれば安易さに定住し勝ちなのを指摘してゐるものである。此處にも藝道精進の正しい誠心に於いてなさるべきものであるとする基調を見出すのである。

以上述べたそれ〲の傾向の最頂點を示すものが「五重塔」である。のつそり十兵衛と稱せられてゐたこれは又全く江戸兒氣質とは反對な才氣のきかぬそれでゐて彼の藝道に於いて強い信念を持ち或る時は殆んど狂熱に近い偏執性の化身の如く、性格的に「血紅星」の皆非居士の詩的情熱を多分に持ち合せてゐる十兵衛である。この十兵衛がその性格の示すが如く恩義ある川越の源太の江戸兒氣質の任俠と大度から自分を主にして十兵衛を從にして承諾してくれ、では半分づゝ對等にしようではないか、それではお前が主に自分が添へになつてやらうと粋と俠とを辨へた噛んで含めるやうな師匠の言に一顧もくれず殆んど頑迷に近い固執と偏狹な態度には不義理を越えて忘恩の譏をも加ふべき獨我主義がある。他人に一指をも染めさせまいとする唯我獨尊的な執拗さがある。云はばこの藝術的完成の强烈さは源太の捌けた取りなしに接すれば接する程彼の精進の障害であり彼の悟道を妨げるものとなるのである。餘りの忘恩さの結果或る時は源太の弟子の或者は十兵衛に危害を加へた。かやうにして谷中感應寺の天を摩する壯嚴な五重塔を建立することが出來たのである。この源太と十兵衛との上に立つて殆んど解脱境に近い、十兵衛の藝術精進を不憫なものとしそれかと云つて源太の任俠的態度の立派さも捨てかねながらも十兵衛に建立の命を下す、聖僧朗圓上人の

明哲さも亦本篇に於いて見逃すことの出來ないふさはしいすぐれた理想的な偉大な性格の典型でもある。圓滿具足の朗圓上人、江戸兒的任俠の化身川越の源太、悟道の選士十兵衛の藝術完成への熱意、これを形成する一篇の結構美、そこにクラシカルな美しさを盛り出してゐる露伴文學美の典型である。これと共に讀者の頭を去ることの出來ないものは源太と十兵衛との性格の融合することの出來ない對立、云はば才智と人間修道の悟道との間に生じた間隙、あまりに偏執に過ぎ忘恩の譏をまぬがれない程の藝術的精進を作者が許してゐることの理性に於いて許され難い難點である。思ふに此の程度に迄强調された藝術完成の意慾と知性との破綻は人間露伴の一面の完成を物語つてゐるものであると共に、知性によつて新しい出發を明日に約束されなければならない運命を有するものでなければならなかつた。そこにはこれ以後の作品の示すが如き新しい現實の世界の中に統合されてゐるありのまゝの兩者の姿に目を開くことにのみかゝつてをり、かゝる意味に於いて露伴文學の名匠氣質は彼に在つては彼の人間的發展の或る時代に於ける完成を語つてゐる道標と見られなければならぬ。されば作家としてこの悟道と知性の滿足とを共に得しめるためには新しく現實に眼を轉じた「風流微塵藏」の行方がそれであり、さもなければ客觀的な眞實性を多分に持つ歴史的事實に取材せる「髯男」か、「新浦島」に見られる超現實世界に於けるこの兩者の觀念的世界に於ける精神的な抱擁に見出されるより外はなかつた。

飜つて想ふに文學史家、稍々もすれば露伴文學殊に以上あげられた作品に浪漫主義乃至理想主義の名を冠しようとするのである。これはしかしながら次の意義に解せられて始めて正しく理解される程個性的なものである。文學表現がそれぐ\の作家の肉體的表現であることは言ふを待たないことである。してみれば露伴に在つては如上に述べて來た如くにその文學が彼の人間的發展とその振幅と强度とが彼の悟道と同一軌道に進められたものであり、その發展の

一時期の完成を示した名匠氣質の作品は彼の人間性の發展の跡付けであることは言を要しない。殊に名匠氣質文學はその人間性の何れの部面を現はしてゐるにせよその一方的な純粹性の具體的表現であつたし、それが彼にあつては常にこの期の文學の最頂點「五重塔」に至るすべての性格の完全な遂行であつたからにはそこに理想主義の光芒の望まれることは否定することが出來ないであらう。この意味に於いて露伴の作品は

小説は事を叙するものにあらず情を傳ふるものなり……小説は告ぐるものにあらず、感ぜしむるものなり……

（露伴集第二卷一七二頁）

としてゐる所に、情に基いて事を構ふることになり感情そのもの丶理想的表現を待つことにもなる。かやうな人間の性格がその年齢的なもの丶持つ絶叫的な表現を取ることになればそれを圍む現實の冷嚴さとの衝突を脱すべき世界が彼等の最も自由に完全に振舞ひ得る世界であることは言ふ迄もあるまい。さすればその活動の舞臺は自ら時處を超越した夢幻界乃至超現實世界でなければならぬ。此處にこの意味に於ける露伴文學の浪漫主義の解釋が成立することになるのだ。從つて露伴文學に於ける理想主義は彼の人間的性格に基因してゐるものであり、それが表現を取つた世界は卽ち浪漫主義の世界であつたのである。從つて露伴に於ける理想主義と浪漫主義とは實は別個のものに冠せられる名稱ではなく同一のもの丶内容的なものと形式的なものとの名稱に過ぎないものであつたのだ。

島崎藤村氏の傾向

――浪漫主義時代の作品より觀たる――

片岡良一

藤村氏の浪漫主義の基調を窺ふのに、最も便宜の多い初期時代の作品として擧げられるものは、「哀緣」（明治二十六年十一月・文學界）などではあるまいか。

宗教(をしへ)を棄て家を出た漂泊の童兒が、川邊に糸を垂れてゐる。美しい花が流れて來た。童兒は花とゝもに歩を移した。花は童兒に、自分に隨つて岸邊を歩んだ人が今迄にも多かつたけれども、何れも中途より踵を返へしたこと、畫家も詩人も未だ嘗て自分のまことの姿を寫し得なかつたことなどを語つた。たま〳〵麗しい姿裝の青年が現れて、童兒の宗教――教會を棄てたのを責める。童兒は彼に答へて、「神は盲目なり。もし盲目にておはさゞりせば、かく迄うらみ多き人の世にあらざりしものを。（中略）あたゝかきストーブの影、高らかに鳴りひゞくオーガンのほとりのみ、會堂といふものにてもあらぬべし。われは岩に眠り、草に臥し、水鳥を友として釣をたるゝのみ。一つの草にも說教あり、一つの岩にも讚美歌あるべし。」と云ひ遺して、流れ去つた花を追ふ。が、軈て花は「うろくづのうちにからまり、あはれげに廻り」はじめたので、これをふたたび水面に救け浮べようとして汀近く降りた童兒は、足下の苔に滑つて却つて花とゝもに水に沈んで了つた。――

これが大體「哀緣」に語られてゐるところだが、其處に、キリスト教を棄てゝ漂泊の旅に上つた藤村氏が、飽く迄も自然——單に山川風土を云ふだけの意味でなく、自然性とか自然法とかいふ意味をこめての——に人生の軌範と根本とを見出しながら、まだその點への十分明確な理論的把握を持つには到らず、それ故に「まことの姿」の捕捉し難い理想に憧がれ、又それ故にさうした理想を追求するものゝ上に悲觀的な運命を考へずにはゐられない人であつたことの、極めて端的な反映が見出されるのではないか。それが朧ろ氣な感情的理解以上に多くは出てゐないものであつたにしても、その中樞にあるものこそ、例の「自然に還れ」の叫びを擧げたルツソオ以來の、浪漫主義の根柢にあつた思想であつた。藤村氏が後年ルツソオの「懺悔錄」を讀んで、異常な感激を味つたといふのも、蓋し當然のことであつたらう。氏はその出發の抑々から、その感動を經て「破戒」(明治三十八・九年)や「春」(同四十一年)に行くべき思想傾向に立つてゐた人であつたことを、兎に角かうして示してゐたのだから。當時の藤村氏は、さうした思想傾向の故に、神を盲目と罵しり、自然の裡に掟を求めて、漂泊を續ける人であつたのだ。

さういふ傾向は、氏の最初の詩集『若菜集』(明治三十年八月)にあつても、無論その思想的根柢となつてゐたものだつた。「六人の處女」の第五「おつた」を見給へ。

若き聖ののたまはく
道行き急ぐ君ならば
迷ひの歌をきくなかれ
かくいひたまふうれしさに
歌も心の姿なり

まづその聲をきけやとて
一ふしうたひいでければ
聖は魂も醉ひたまひ
かくも樂しき歌ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく
まことをさぐる吾身なり
道の迷となるなかれ
かくいひたまふうれしさに
情も道の一つなり
かゝる思を見よやとて
わがこの胸に指ざせば
聖は早く戀ひわたり
かくも樂しき戀ならば
などかは早くわれに告げこぬ

舊き教義や道德的制約の象徵である「聖」に反抗して、「心の姿」や「情(おもひ)」(感情)に「道」を見出さうとする態度は、云ふ迄もなく人性の自然と本然的なるものとを尊重せんとする思想に立つものであらう。其處に「哀緣」の主張と通

ひ合ふものが認められ、「若菜集」に於ける藤村氏の思想的根柢が矢張り其處にあつたことが知られるのである。

ところで、「おつた」が既にその好例になつてゐる通り、自然を尙び人性の本然を尊重する思想は、必然的に戀愛の讃美に連り、ひいては女性崇拜の感情に連つて行く。だからそれらの傾向がまた浪漫主義の顯著な一側面となつてゐるのだが、藤村氏には、不思議なことに、その後者、女性崇拜の氣持は餘り顯著ではなかつた。少し後の「西花餘香」(「一葉舟」)(三十一年六月)のルナンを紹介した邊りなどに、多少さうしたものゝ匂ひは感じられるけれども、氏自身の創作にかゝる範圍には、さうしたものが多くは感じられなかつたのだ。「六人の處女」の最後「おきく」の如き、それに近い氣持を詠つたものはあるけれども、それさへたゞ戀に生き戀に死ぬる女性の純情を讃美するだけで、女性崇拜といふ程にまで高揚されたものではなかつた。にも拘らず、氏の戀愛讃美は隨分目立つて著しいものだつた。少し長いが、當時の氏を知る上に、相當面白いものだと思ふから、氏の所謂「悲曲」の一つ、「茶のけむり」(明治二十六年六月以降文學界)の一節を引用してみよう。

新之助　やア〳〵

豪傑なんぞ言ふに足らんや。

世の中にあはれなるもの多けれど、

かの豪傑に過ぎたるはなし。

山から鑿りし礦塊(かたまり)を誇り、

海から湧きし貝殼をつけ、

いやしくも身六尺の男子にて、

笑ふべき虚名に眩み、馳け廻る。
人間はみな化物とするならば、
　豪傑ほどの化物ありや。
よくも見よ
英雄は天地に消ゆる稲妻の、
形なき水の泡よりあはれなり。
一けふり、織田信長は灰となり、
太閤の偉圖まぼろしとなる。
管仲腐れ、始皇仆れて、
鴻門の一夢いづくにかある、
風霜蕭條、世事日に亂れ、
日月浩蕩はらわたを斷つ。

やア〳〵、
やア見よや、天地年々腐れ行き、
人間は碎けて土となり行くに、
たゞこゝに碎けぬものゝ一ありと、
　巴川等は、よもや知るまい。
彦九郎　やアなんだ。

新之助　天地の間、一物ありて、
　われはこれ、之を名けて戀といふ。
　（中略）
新之助　戀よ戀。
　　豪傑は日々腐れ行くものなれど、
　　戀はいづれの世にか腐らむ。
　天地みな日々碎け行くものなれど、
　かの戀のみは、いつか碎けむ。」（九月號、文學界）

浪漫主義が、人世の可能を信じ得る明るい理想主義と直接連り得なかつた時勢的必然から、却つて否定的な方向に傾き、只管世俗的なものへの反逆の姿勢をとつてゐた事實を觀るためにも、愼重さと重々しさとを特徴とする藤村氏にも、かうした若々しく勇敢な表現を見せた時代のあつたことを知るためにも、面白い材料になるのではないかと思ふが、此處では無論それらが主として云ひたいのではなかつた。たゞ其處に示された戀愛讃美の、寧ろ勇ましい迄果敢であつたことを、言ひたかつたに過ぎなかつた。それはあらゆる世俗的なものを否定して、さうしてたゞ此の一筋にのみ生きようとするやうな、そんな激しさだつた。それだけ當時の藤村氏の新しく自然を生きようとする情熱が、激しいものであつたことも知られる譯だが、然もそれ程の戀愛讃美を示しながら、氏が女性崇拜への傾向を多く持たなかつた矛盾が、既に屢々云はれてゐるやうに、氏の描き詠つた戀愛を、すべて甚だしく官能の匂ひのみ高いものにして了つたのだ。自然を尙び、人性の本然を尊重し、從つて其處には個人的なるものへの尊重が既に兆してゐながら、な

ほ女性の解放には未だしいものゝ多くが殘されて居り、從つて女性觀の更改も未しかつた時代の相が、さうした矛盾の中にも含まれてゐたのであり、自らそれは藤村氏一個にのみ限られた現れではなく、より後の時代の作家達にさへ屢々見受けられる現象になつてゐたのではあつたに相違ないけれども、同時に其處に、藤村といふ人が、さうした矛盾を自ら意識し、それを突き詰めて、徹到的な、統一された思想的境地を見出して來るといふやうな、さうした反省型思索型の作家でなかつたことも、明瞭にされて來るのではないかと思ふ。氏は反省し思索し——若しくは思索を突き詰めて統一的な思想的境地を建設して行く代りに、たゞ解放された氏自身の感情の動くにまかせて、自然を憬れ、戀愛を讃美してゐた人であつたのだ。さういふ型の人であつたのだ。

が、その點に就ては、詳しくはも少し後に觸れよう。藤村氏が然く激越な戀愛讃美を口にする人であつたゞけに、氏の初期の作品には、當然戀愛を扱つたものが多かつた。シェークスピーアの「ヴイナス・アンド・アドニス」を淨瑠璃風に飜譯(?)したものであつた「夏草」(明治二十九年一月文學界)などを、飜譯ながら代表的なものとして。『若菜集』を取つて觀ても、その點は無論直ちに肯かれよう。けれども、それにも拘らず、其處に圓滿な戀の歡喜や朗かな陶醉を詠つたものは、比較的少なかつた。却つて沮まれた戀や遂げられぬ戀の悲痛や哀感のみが、多く詠はれてゐた。其處に例へば「四つの袖」などのやうな、戀愛其物の悲痛な哲理(?)に肉迫するかと思はれるやうなものも、稀には見出されたけれども、より多くは何等かの外部的な條件によつて、戀愛が圓滿ならざる境地にまで睡し歪められて行くものが、詠はれてゐたのであつたのだ。其處には藤村氏が、素質に於ては直下に對象の根柢に迫り得る鋭く豐かな感受性を有ちながら、さうした素質的な感受を思索的に整理し究明して來ようとする側の人でなく、思索的にはより安易な境地に止まらうとする側の人であつたことが、判然と示されてゐる譯だが、兎に角さうして、一個に戀愛を

追求しながら、其處に上記の如く悲觀的なものゝ影をのみ多く捉へて來てゐるところに、矢張り「哀緣」に現れてゐたのと同じやうな、氏の悲觀的な人生觀があつたのだ。それも亦、當時の浪漫主義一般が否定的な方向に傾かずにはゐられなかつたのと、同じ時勢の反映であつたと同時に、よく知られてゐる藤村氏の不幸な戀愛から來た、結論でもあつたらう。「哀緣」の場合に云つたやうに、氏が氏自身の思想的立ち場への明確な把握を持たず、それ故に理想主義的傾向に進む代りに、かうした感傷に墮ちたのだとも云へよう。何れにしても、氏がさうした悲觀的人生觀に傾く人であつたが故に、『若菜集』中の諸詩篇などに、それが屢々反映してゐたことも、亦云ふ迄もない。卷頭の「おえふ」をはじめとして、有名な「天馬」など、何れもさういふ傾向を見るべき作品であつた。

けれども、藤村氏は、漂泊うて行き詰つて海邊に死に場所を求めても、又其處から引返して來る人だつた。さういふ逞しい――と云つて不可なければ執拗な生への意慾を持つと同時に、さうした悲觀的な人生觀を突き詰めて、其處から虛無の底に徹到し、虛無の哲學を築き上げて來る人ではなかつた。戀愛讚美と女性崇拜――崇拜といふ言葉が強過ぎれば、尊重と云つてもいゝ、兎に角戀愛讚美と呼應するだけの女性觀を持たないことの矛盾を、自ら整理しようとする思索的傾向を缺いてゐた氏は、その讚美する戀愛其物を詠つても、戀愛其物の痛苦や悲劇性（或は喜劇性）を突き詰めて、其處に徹底した戀愛哲學を築き上げて來る人でもなかつた。たゞその着する戀愛を沮む外部的條件をのみ銳く意識して、その兩者の摩擦に悲痛な味ひを摑み取つて來るだけの人だつた。さういふ氏の不徹底さ、乃至無思索性が、此の悲觀的な人生觀の場合にも、矢張りそれを突き詰めて徹底的な虛無の哲學などに到達することを沮んだのだ。氏はさうした境地に行く前に、矢張り頭を廻らして、他に生きるべき道を求める人になつてゐたのだ。だから氏の世界には、それが然く悲觀的な人生觀に彩られたものでありながら、悲劇がなかつた。悲觀的な人生觀が、感傷的

な悲愁を漲らせてはゐても、其處に突き詰められた否定的精神(思想)は、認められなかつたのだ。恐らく氏の執拗な生への意慾は、さうした否定的精神とは、極めて緣遠いものであつたらう。從つて氏の思索が如何に突き詰められたとしても、其處に否定的な哲學の誕生は、恐らく見られなかつたらうと思ふ。にも拘らず、氏が然く悲觀的な人生觀に役せられた形を示したのも、要するに氏の、思索的徹到に缺けてゐた結果に他ならなかつたのだ。だから氏の悲觀的人生觀は、結局感傷以上の深みと重さとを持つものにはならず、氏自身もさうした悲觀的人生觀に崩折れる代りに、容易に頭を廻らして、他に生きるべき道を思ふ人ともなり得たのであつたのだ。

兎に角、さうしてその悲觀的な人生觀に崩折れる代りに、異つた生への肯定的な道を求めた氏は、まづ藝術に執着した。

それから官能に生きようとした。

さうして最後に自然の美に醉はうとした。其處に氏の藝術主義や官能的享樂主義、乃至一種の自然詩人らしい傾向などが、生れて來たのであつた。

藤村氏の藝術主義が、夙くから氏に於ける顯著な傾向の一つであつたことは、恐らく誰でも知つてゐよう。その作「朱門のうれひ」(二十六年八月文學界)に序して

「これはあくたの捨てどころを尋ねて、露と置く花の影にほそきうれひを包めるものなり。今の人はむかしの人の肩を叩いて、讀むならば利得のものになさいと言ふ。さらば、ちりこぼれたる藤の花の名殘を、讀んで花漬にしてはいかに〳〵。」

と、一種昂然たる藝術派宣言を發表してゐる藤村氏は、時には此の藝術尊重の氣持に、上記の如き激越な戀愛讃美に於けるよりも、より强く執着してゐるかの形をさへ示してゐたのだつた。これも淨瑠璃風の作品の一つだつた「なり

ひさご」(二十六年九・十月文學界）などを見るといゝ。淨瑠璃風な義理と人情（戀愛）の何れにも耳を貸すまいとする娘が、問ひ詰められたわが情人は、「美術ぢやわいな」と答へるといふ、面白い一節が見出されるから。その頃の藤村氏が、上記のやうな思想傾向とは凡そ齟齬した、表現上の苦心にうき身をやつして、俳文淨瑠璃謠曲其他の詞章摸倣に沒頭してゐたのも、無論此の點と關連して、理解さるべきものであつたらう。それは、藝術主義的完成を望むが故に、まだ洗煉されない口語的表現と端的に自己を打ち出した技法とに滿足出來ず、完成された古典の表現形式を摸倣踏襲した、といふやうに解釋される筈だから。と云つても、無論それだけが理由だつたとは思はない。世俗的なものへの蔑視と反抗とが、さうした古典的なるものへの傾情となつたことも、藤村氏に、その根本的な傾向に拘らず、後に云ふ豫定の、傳統的なるものへの尊重の氣持が、案外根深くあつたゝめに、さうした現象が現れたのであつたことも、更に氏の苟もしない用心深さが、卒直な自己表現以上に、さうした古典摸倣の廻りくどい手段を選ませることになつた必然も、無論考へ併されなければならないとは思ふけれども、少くとも其處に、それらの理由に伍して、氏の藝術主義的態度が、考へられていゝと思ふのだ。相當知られてゐる筈の、「葡萄栗鼠の木彫を観て」其他、直接藝術への尊重を示した詩、「おさよ」の如く、藝術によつて救はれてゐる人間を詠つた詩などが、『若菜集』中にも少からず見出されることは、既に屢々云はれてもゐる。氏の藝術主義の密度が、さうした多くの作例のあることによつて、判然と示されてゐる譯だらう。

第二の、官能的享樂主義に沈湎しようとした藤村氏の相を觀るべき作品としては、矢張り『若菜集』の、「醉歌」とか「うてや鼓」とかいふものを擧げたら、それだけで十分だらう。殊に「醉歌」の如き、少し後の享樂派の代表的な歌人、與謝野晶子女史の或る作などゝ、完全に相似た軌道にあるものだつた。

若き命も過ぎぬ間に
樂しき春は老いやすし
誰が身にもてる寶ぞや
君くれないのかほばせは
(中略)
名もなき道を說くなかれ
名もなき旅を行くなかれ
甲斐なきことをなげくより
來りて美き酒に泣け

それに較べると生ま溫いが、後に多少の必要がありさうなので、「うてや皷」の一節をも引いて置かう。

霞のまくをひきあけて
春をうかゞふことなかれ
はなさきにほふ蔭をこそ
春の臺といふべけれ

小蝶よ花にたはふれて
優しき夢を見ては舞ひ
醉うて羽袖もひら〳〵と

はるの姿をまひねかし

悲觀的な人生に反撥して、享樂にのめり込まうとした藤村氏の姿勢が、兎に角窺ひ得ぬことはあるまい。氏の詠ひ描いた戀愛が、兎角官能の匂ひ高いものであつたといふことも、上記の理由から來たと丶もに、或は此の姿勢など丶も若干關連のあつた現象であつたのかも知れないと思ふ。

それから第三の、自然の美に人生の喜びを見出さうとした藤村氏が、西行や芭蕉を慕つて自然の懷に漂泊を續けた人であつたことは、餘りにも知れ渡つた事實であらう。『若菜集』の著者としても、春をうたひ秋を詠ひ、「深林の逍遙」を喜び「秋風の歌」を作つたことも、誰でも知つてゐるに相違ない。「秋風の歌」の如き、嘗て湯地孝氏が「若菜集」中での絶唱といふのに似た讃辭を送つた程の作品であるから、此處に引用するの繰り返しは避けるけれども。

要之藤村氏は、その悲觀的な人生觀を突き詰めて徹底したり思索的な迷路に迷ひ込んだりする代りに、藝術主義や享樂主義や自然の美しさにその活路を見出して行つて、さうしてその何れの方向に於ても、卓れた業績の多くを示した人であつたのだ。それらの傾向が、何れも明治浪漫主義文學の特徴的な面を形造つてゐたものであつたのだから、云はば藤村氏は、それらの方面の業績に於て、浪漫主義文學の諸領域の、相當廣い範圍に涉つて、何處にも相當大きな影を落して來たといふことになるのだ。其處に藤村氏の豐富な稟質と、卓れた才能とが認められた譯だ。「藤村詩集は面白い、其處には何でもある」といふやうなことを云つて、讃嘆してゐた人があつたが、確かにさういふことが云へるのだと思ふ。たゞそれが、同時に藤村氏の、何の方向にも結局徹しては行かない人であつたことの、反證ともなるのだといふ、暗側面をも孕んでゐた事實になるのは、悲しむべきことであつたけれども。悲觀的な人生觀にも、新しき自然性尊重の世界觀にも、何方にも徹底して行かうとしなかつた藤村氏は、それ故の漂泊と彷徨とを續けて、矢張

り何處にも落着けず、結果として樣々な領域に、同じやうな密度の影を落して來たといふことになるのだから。

だから見給へ、當時の藤村氏は、例へば自然詩人としても、その方向に徹底した人ではなかつた。

妹　たのしからずや　はなやかに　あきはいりひのてらすとき
　　たのしからずや　ぶだうばの　はごしにくものかよふとき
姉　やさしからずや　むらさきの　ぶだうのふさのかゝるとき
　　やさしからずや　にいぼしの　ぶだうのたまにうつるとき
妹　かぜはしづかに　そらすみて　あきはたのしきゆふまぐれ
（葡萄の樹かげ）

といふやうな作例を見る時、氏の自然美への愛は肯けても、それが一切を放下して只管自然の中に沒入しようとするものゝそれではなく、寧ろ反對に、飽く迄も主觀的に、吾が好みに隨つて自然を排列しようとしてゐる人のそれであることが、考へられよう。

力を刻む木匠（こだくみ）の
うちふる斧のあとを絶え
春の草花彫刻（ほりもの）の
鑿の韻（にほひ）もとゞめじな
いろさま〴〵の春の葉に
青一筆の痕もなく
千枝にわかるゝ赤樟も

おのづからなるすがたのみ
檜は荒し杉直し
五葉は黒し椎の木の
枝をまじゆる白樫や
樗は基をよこたへて
枝と枝とにもゆる火の
なかにやさしき若楓」（深林の逍遙」）

といふ一節などを取つて見ても、その點は同じことだらう。其處にあるものは矢張り自我を放下して眺め入られた自然の相ではなく、主觀的に組み立てられた自然の模樣であらう。つまり藤村氏の自我は、自然美の前などに投げ棄てられるべく、餘りに强烈なものであつたのだ。悲觀的な人生觀に醉つて、死を決した時にも、結局醉ひきれぬ自我を殺しかねたやうに、自然の美しさに醉はうとしても、矢張り我を忘れて醉ひきる境地には入れなかつたのだ。氏が、芭蕉や西行を尊敬し、彼等の後を追うて自然の懷を漂泊しながら、終に芭蕉でも西行でもあり得ず、何處までも執着的な藤村として漂泊の旅から歸つて來て了つてゐるのは、無論そのためだ。氏が、さういふ捨てきれない執拗な自我を持ちながら、餘りに屢々芭蕉の枯淡や西行の洒脫を覘はうとする心構へを示してゐるために、一種名狀し難い不自然な嫌味さへ生じてゐる位のものではないか。藤村氏は、洒脫や枯淡などゝは恐ろしく緣遠い、粘り氣の多い人間なのだ。それが兎もすれば洒脫や枯淡を思はうとするやうになつたところに、あの時代の浪漫主義の――と云ふよりその根柢にあつた思想の、社會的實現への困難さが示されて居り、同時に藤村氏の傳統的文學趣味への無批判な傾情が示され

てゐたのでもあつた譯だけれども、さうしたところにある矛盾を、矛盾と意識しようともしないところに、また上來述べた通りの、藤村氏の特徴があつたのだ。だから氏の世界には、いろいろなものが含まれてゐながら、その割に軋轢や相剋の著しさが目立たず、並列と矛盾を孕んだまゝの一種の調和とが、却つて多く目につくものになつてゐるのだ。矛盾を矛盾と意識せず、從つてその思索的究明に多く傾かず、却つてその矛盾した要素を、執拗な生への意慾によつて、本能的に統率してゐるのが、氏の相である以上、それがまた當然の結果であつたらうと思ふ。

議論が少し先き走りし過ぎたやうだが、自然の前に自己を放下し得なかつた藤村氏が、自然詩人として徹した人であり得なかつたと同樣に、耽美的傾向にも亦十分醉ひきれない人であつたことは、もう云ふ迄もあるまい。

霞のまくをひきあけて
春をうかゞふことなかれ

敢て醉はうとしながらにさへ、幕の奧にあるもう一つの世界への、捨て切れない關心を殘してゐた藤村氏であつたのだ。官能的な樂慾や美的陶醉位で、氏の强烈な自我は、矢張りごまかしきられるものではなかつたのだ。さういふごまかされ難い自我に、强く執着したればこそ、その自我と喰ひ違つた現實世相に觸れては、氏はあゝして漂泊の途にも上らざるを得なかつたのだ。だから氏の漂泊は、自我を棄てたものゝそれではなくて、却つて自我を生きようとするためのものであつたのだ。と考へれば、氏が如何に漂泊の旅を續けても、結局純粹の自然詩人となりきれなかつた必然なども、今更にはつきりと摑めよう。さうしてまた其處に、必ずしも惡い意味ではなく、氏の俗物性が觀取されるだらう。現實的で物質的で、藤村氏が意外に强い俗物性の所持者であることも、既に云はれてゐることだが――。

さういふ藤村氏が、その懷抱する藝術主義に、絕對の滿足を感じきれる人でないことも、諒解し易いところだらう

氏が漂泊の途中、江州の石山寺に、紫式部の藝術を慕つて、「至友」一卷を收めたことは、その「至友一卷」が「ハムレット」であつたゞけに、既に鹽田良平氏などによつて、其處に含まれた矛盾を、摘まみ出されてゐるが、要するに氏は、紫女の藝術と風流とに感激はしても、たゞ單純にものゝあはれの興趣にのみ醉ひ痴れてゐられる人でなく、矢張り人生の憂苦と懷疑とに悶え苦しむハムレットの世界に、多くの共感を見出さずにはゐられない人であつたのだ。さういふ自身と、その行動との矛盾を全然感じようともしてゐないところにも、前に述べたと完全に同じい、氏の傾向が觀出されるだらう。さういふ矛盾を孕んだまゝに、強く生き得る藤村氏であつたからこそ、その藝術主義にも深入りして行つたのであつたけれども、氏の人生への強い人生主義的執着は、矢張り氏をして一向な藝術主義者たらしめては置かなかつたのだ。だから氏はその果敢な藝術主義宣言などにも拘らず、必ずしもその藝術主義的傾向にのみ、徹到して行くことも出來なかつたのだ。

かう考へて來ると、少くとも此の時代の藤村氏は、享樂主義や藝術主義や自然美への傾情や、樣々な方向への傾きを示しながら、結局その何の面にも徹底しては行かなかつたことが、明瞭になるだらう。氏の執拗な意慾と豐富な力量とが、さうした面のそれぞれにも相當卓れたものゝ多くを示してゐたことは、前にも云つたし、又此處でももう一應注意して貰つていゝことだと思ふけれども、然しそれに拘らず、上記の諸傾向は、必ずしも藤村氏の氏としての本道でなかつたことが、言はれていゝことになるのでなければなるまい。況して當時の氏が、それらの傾向程にも顯著でなく示してゐた他の方向に於てをや。人生の悲傷に崩折れる代りに、藝術主義や官能的な享樂や自然の美しさに新しく積極的な生の意義を見出さうとして行つた當時の藤村氏は、それらの諸傾向に於ける程顯著にではなかつたけれども、なほ樣々な方向にその觸手を伸ばして行つたのだ。例へば現實人生の痛苦を痛嘆した「天馬」には、微ながら

にもせよ氏の彼岸的な世界への憧憬と崇重とが觀じられるであらうし、「回顧」などには多少とも過去への追憶に生きようとするものゝ態度が窺はれよう。が、それらの傾向が、上記諸傾向などより、もつと當時の藤村氏に想應しくないものであつたことは、上來の考察で旣に明瞭なところだらう。だからこそそれらの傾向は、藝術主義や享樂的傾向など程にも、顯著なものとなつては現れなかつたのだ。藤村氏の本道は、矢張りさうして微かに窺はれた方向など以外の、もつと異つた方面に見出されたのだ。

とすれば、それは何か。何が當時の氏としての本道であつたのか。

が、その答は實は簡單なのだ。それはたゞ上記のやうな悲觀的な人生觀にも崩折れず、享樂主義や藝術主義や自然美への傾倒などにも落着ききれずに、なほ此の人生其物に卽して、輝かしい「生のあけぼの」を望まずにはゐられなかつた心だ、といふだけのことになるのだから。氏の執拗な生への意慾が、一方絕望感に壓しつけられながら、なほさういふ憧れ氣味な氣持を强く殘してゐたことは、『若菜集』に於ける幾つかの詩篇に、合本の際にではあるけれども、さういふ總題を附してゐるところにも、判然と知られよう。

紅細くたなびける
雲とならばやあけぼのゝ
　雲とならばや
やみを出でゝは光ある
空とならばやあけぼのゝ
　空とならばや」（『新曉』）

それは何處までもさうした漠然たる憧れ以上に出てゐるものではなかつたし、それだけに特異性も別段の深みもなかつたのであるけれども、然も又考へ方によつては、それ故にこそ藤村氏を知るべき最も重要な鍵になるのではないかとも思はれるのだ。既に度々云つて來たやうに、藤村氏は「哀緣」などに示されてゐた氏自身の思想的立ち場を、まだ明確なものにしきつてはゐなかつた。それを明確なものにしようとする思索的態度をも缺いてゐた。同樣にしてその悲觀的な人生觀をも、突き詰めて虛無の哲學などを建設して來ようとする人でもなかつた。だからその悲觀的な人生觀と感傷的な淚とにも拘らず、その生きようとする意志を見失つては來なかつた。さうして、稍々循環的だが、生きようとする意志はあつてもその生の方向を決定すべき思索はない――といふのでは、氏の强い生への意慾は、さうした漠然たる憧れ以上のものに、出られないのが當然だらう。それが當時の氏の傾向として、煮詰められた最後のものと考へられる所以であり、それを最後のものと考へさせるところに、氏の常識的な健康さがあつたのだ。さうして、正しいにせよ歪められたにせよ、その何れの方向にも徹底して行かない此の健常さが、つまりは藤村氏の作家としての位置を決定したものであつたのではないかと思はれるのだ。氏の浪漫主義は、鷗外――透谷――と發展して來たものゝ、その延長線上にあつて、さうして其處まで來た時、俄然として大衆のものになつたのだと云はれるが、それは無論一つには時勢の進展であつたに相違ないとゝもに、鷗外透谷等の傾向と、藤村氏の上記のやうな傾向との相違が、さうした結果を齎らしたのではないかとも思はれるのだ。鷗外は、自然性の尊重や近代的な自我主義へのよき理解を有つてゐた。が、例へば「文づかひ」(明治二十四年)其他の作品が示してゐるやうに、さうした近代主義の圓滿な達成には希望を棄てゝゐた。と同時にさうした近代主義其物の究極にも或る疑ひを抱いてゐた。然も彼の强健な理性は、さうした疑惑や絶望に崩折れる代りに、藝術的調和の世界を創り出して、其處に高く遯出した。其處に彼の

所謂孤高の姿が、必至のものとならざるを得なかつた理由があつた。透谷の方は、これに反して、その新しき近代主義への自覺を、例の「内部生命論」(明治二十六年) などに到達するまで、思索し盡すと同時に、その思索的傾向によつて明確にし得た新しい人生觀の、稍々性急な社會的實現を望んで、それ故の焦慮に疲れ、結局十分世に容れられぬ先驅者として半ば狂死しなければならなかつたのだ。それらに對して、藤村氏には鷗外程の厭世哲學への徹到もなく、それ故に藝術主義への深々とした安住にも陷らず、透谷程に近代精神への明確な思想的把握も持たず、それ故に彼程勇敢な先驅者としての風貌も示さず、たゞ漠然たる人生肯定の常識的健康さに生きてゐたのだ。氏が孤高の域に脱け先驅者として狂死する代りに、『藤村詩集』の作者として、大衆の感情の代辯者であり得たのも、蓋し當然の數であつたらう。さうしてそれが云はば藤村氏の、最も本質的な境地であつたのだと思ふ。無論氏の浪漫主義も、何時までもさうした漠然たる憬れをのみ中樞的な特質としてゐる域に、止まりきつてゐたのではなかつた。以上は大體、その習作時代から『若菜集』にかけての、氏の極く初期の相を、檢討しただけのものに過ぎないのだが、その時代の後、「うたゝね」(三十年十一月新小說) や『一葉舟』(三十一年六月) の頃には、氏の輪廓は、既にも少しはつきりしたものになつてゐる。漠然たる憬れがより積極的な生きねばならぬの意志となり、それに從つて氏の思想傾向も、幾らかより明瞭な近代主義への傾向を示すに到つてゐる。自由主義への傾向とか、「哀緣」の場合などより餘程判然した自然の尊重、從つて現實尊重の寫實主義的態度の誕生、個性主義とコスモポリタニズムへの傾きなどが、其處には兎に角指摘出來る。が、その一方には封建的な義理の觀念や無批判な貞節などへの讚美、草雙紙めいた舊臭い境地や作品構成法などからの繫縛をも多く示して、結局それらの矛盾したものを整理しようとする努力は示してゐない。示してゐるとすれば、例へば『一葉舟』に於ける「友に寄するの書」などに見られるやうな、それらの何れをも肯定して其處

に一つの調和的な世界を翹望しようとするといふやうなそんな傾向に進んでゐるのだ。「友に寄する書」は作家としての藤村氏が、煩い批評家に投げた手套のやうなものであつたのだが、其處には例へば、

「聞く、希臘は美術の淵源、敍事抒情の詩及び戯曲に到るまで、皆深奧なる域に進み、西歐近世の詩歌皆その原流をこゝに發したるものといへり。これ實に吾國純粹なる日本想を磨くべき靑砥の妙なるものか。ゲエテ、バイロン、ハイネ等の詩人は云ふも更なり、十九世紀の新思想に呼吸するものは皆一種不健全なる暗潮に浴せざるものなしといへり。これ又吾日本想を琢いて新しき美玉となすべき荒砥の妙なるものか。靜和なるシエレイをすら捕へたりといふこの暗潮の東するもの、淸流濁流こもぐ\吾思想界に流れ入りて、果して如何なる風濤を生ずべきものか。その新しく悲しむべき濁流の純粹なる日本の想花を洗ひ去るが如き傾向はあらざるか。」

「モオゼがシナイの高嶽の巖上に伏してエホバの神より無限を學びたまふ間に、赤人は富士の高根のかげにさまよふて吾國の自然を學びたまへり。悉太太子が菩提樹の蔭に靜座して無常寂滅を觀じたまふ間に、圓位上人はみよしのゝ霞を分けて散り易き櫻の花を惜みたまへり。嘗ては鳴神を聞いて見ればかしこし見ればかなしもと歌ひ出でたる萬葉詩人の生れたまひしところ、嘗ては花の色のうつりにけりなと讀み出でたる絕代佳人の落魄せしところ、この里を愛し、この花の影に宿りたまふて、今日の詩人に櫻の花を惜むことを教えたまふべき、うるはしきものはあらざるか、其聲は直ちに吾國人の聲にして、君が所謂日本想ともいふべきものを今日の詩人に教へたまふべき、あたゝかきものはあらざるか、限りなきものはあらざるか。」

「今日こゝにあり、われらは今日と共に步めり、われら不幸にして自ら誇るべきものなし、たゞ誇るべきものは今日のみ。これありて萬象味ひあり、これありて始めてわれらは過去の化石たるをまぬかるゝを得ん。」

といふやうな相互に矛盾したところのある意見が、巧みに綯ひ合されてゐるのだ。其處に藤村氏の、前にも一寸觸れ

た、傳統的なるものへの尊重と、「今日」の「われ」に生きんとする思想との、微妙な縫合が見出されるだらう。その二つの思想が並列的に擡頭すべき明治時代であつたことは云ふ迄もないけれども、其處にも藤村氏が氏自身の思想的立ち場を究明して、狹く深く徹底して行く代りに、對立する二つの思想をともに肯定して、その調和に明るい理想を見出して行かうとする常識的健康さを、持ち續けてゐたのであることが知られよう。それあるが故に、藤村氏の詩は、若く新しい當時の青年の血を湧き立たせるとゝもに、舊く傳統的な詩感と詩情とをも豐富に湛へて、それによつてより廣汎な讀者層に訴へることも可能になつたのだし、傍らその二元の調和故に、特に微妙な味ひと複雜な陰翳とを帶びることにもなつたのだが、其處にも亦嘗ての『若菜集』の著者として、更にそれ以前の習作期の數多い作品の作者として、樣々な思想傾向を示しながら、その何れの面にも徹到する形を示さず、すべてを並列的な形に連ねて、これを貫くに根强い人生への執着を以てし、從つて特殊な方向への理想主義者である代りに、健常であると同時に漠然とした憧れを示す作者であつた時代と、完全に共通した態度が見出されるのではないか。それがつまり藤村氏の、最も本質的な態度であつたといふ論斷は、其處まで來たら更に判然した裏打ちを與へられるのではないか。前期自然主義時代を經て「破戒」に行つた當時の藤村氏にこそ、幾らかそれと異つた趣きが見出されるかも知れないけれども、他の場合には、その生涯の何れの時期をとつて觀ても、大體相似た觀察が下せるのではなからうか。何ものにも徹しなかつた氏が、さうした態度にのみ徹して行つた揚句、あらゆるものを孕んだまゝに展開する自然の相に最後的な共感を觀出して、さうして最近の「世明け前」のやうな作品を示す作者となつて來たことは、云ふ迄もなくかうした論斷に、强力な支持を與へて吳れるだらう。それは或は單なる氏の素質の齎らした結果である以上に、明治といふ時代の社會組織の複雜さが必然的に齎らしたものであつたかも知れない。少くとも、思想の一元的な醇化と徹底とを沮む

社會事情の複雜さと、その複雜さに壓倒されずに生き拔かうとする氏の強い生への意慾と、その複雜さの內包する矛盾を突き詰めてみようとはしない態度との結びつきが、作り上げた傾向であつたのだと思ふが、何れにしても、それが藤村氏の傾向として、最も本質的なものであつたことは、もう多分肯定して貰へるだらうと思ふ。とすれば、其の出發當時の氏が、新しき外國文學よりの攝取を怠らぬと同時に、俳文や淨瑠璃や謠曲などにも異常な關心を示して、換骨奪胎到らざるなく、果は沙翁を淨瑠璃風に飜譯するといふやうな試みまでを示してゐたところに、夙くも氏の生涯の傾向が打ち出されてゐたのであつたことも、又氏がさうした傾向に立つ人であつたところに、所謂近代文學の作家としては稍々類少いまでに、廣い範圍の支持者を有つ所以も、容易に理解される譯だらうと思ふ。殊に、上來度々云つたやうに、氏はさうして調和的に包攝しようとするあらゆる面に於て、相當深い味解と消化とを有ち得る――寧ろ味解し消化せずには置かない、異常な粘り強さと深い研究心と、それから豐かな才能と銳い感受性とを有つてゐた。だから氏の世界は、さうした調和的な健常さの裡に、屢々何事も無げに包まれた異常さなどをも含むことになつて、さういふ點では近代主義の作家としても、第一流の域に達する結果を生んでゐるのだ。『藤村詩集』がそのよき例證であつたやうに。氏の作家としての影は、愈々大きくならざるを得なかつた譯だと思ふ。が、その代りに、さうしたものを孕みながら、澄まして常識的な健康さに止まつてゐるところに、一面慊らなさを感ずる人が少くないのも、亦止むを得ないことだらうと思ふ。

伊藤左千夫の萬葉主義

藤川忠治

○

正岡子規は短歌革新の出發にあたつて、「仰の如く近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば萬葉以來實朝以來一向に振ひ不申候。……(中略)……眞淵は歌に就きては近世の達見家にて萬葉崇拜のところ抔當時に在りて實にえらいものに有之候へども生等の眼より見れば猶萬葉をも褒め足らぬ心地致候。」(歌よみに與ふる書――明治三十一年二月)といひ、又「世の歌よみに萬葉集を崇拜する人あり、古今集を崇拜する人あり、いづれも一得一失はあるべけれど大體の上よりは吾等は萬葉集崇拜の方に贊成するなり。併し萬葉崇拜家たる者は多く萬葉の區域(否、寧ろ萬葉集の或る部分)を固守して一歩も其外に越えざるを以て歌に入るべき事物材料極めて少く、ために吾人が感得する諸種の美を現すこと能はず。是れ吾等が萬葉崇拜家に不滿を抱く所なり。」(人々に答ふ(七)――明治三十一年四月)とも書いてゐる。

明治の新教育を受けた人としては云ひさうな議論であり、誇大・激越の筆致は免れないが、やはり卓見とすべく、眞淵等の尙古的復古主義と異つた萬葉主義の展開されてきた點は注目に値する。而して、萬葉を尊重しながら之に盲從しない、といふ子規の此の藝術主義的な萬葉主義の態度は、變改されずに益々牢固な信念となつて行つたやうであ

る。

一例をあげると、「墨汁一滴」中の有名な、平賀元義論（明治三十四年二月）には、「萬葉集以後一千年の久しき間に萬葉の眞價を認めて萬葉を模倣し萬葉調の歌を世に殘したる者實に備前の歌人平賀元義一人のみ。」と、元義の諄乎たる萬葉調の歌を作つたことを激賞してゐる一方で、「元義は終始萬葉調を學ばんとしたるがために其格調の高古にして些の俗氣なきと共に其趣向は平淡にして變化に乏しきの感あり。」とか、「元義の歌は其取る所の趣向材料の範圍餘りに狹きに過ぎて從つて變化に乏しきは彼の大歌人たる能はざる所なり。」等と貶してゐる。實朝・宗武・曙覽等の諸歌人を推讃した議論に於ても、必ず、如何に其の作品が萬葉に近似してゐるか、またそれと同時に、如何に萬葉以外の歌境を開拓してゐるかを指摘檢討することを忘れて居ない。それは實に、萬葉集を尊重しながら、萬葉模倣に終らずして、新しい開拓を志してゐた彼の革新的精神の旺盛を物語るものに外ならない。

萬葉集を模するのが、善いとか惡いとかいふ議論が盛んであるやうだが、それはどうでもよいと思ふ。萬葉集を模するのが、善いといふ人は模するが善し、模するのが惡いと思ふ人は別に自分の面白いと思ふ歌を作るが善し、予はいづれでも善い歌を作るばかりのことである。萬葉調を模してあつても、その歌が面白ければ無論それを取る。新調の歌でもそれが面白ければそれを取る。たゞ古今集のやうな歌は見るに足らぬから、古今集を模することは善くあるまいと思ふ。（病牀歌話――明治三十五年七月）

といふ子規の言葉は、門下達が萬葉集を愛重し、盛に萬葉調の歌を作り、盲從と擬古の弊の見えそめたのを警戒すると共に、一般歌壇に對して、從來の自己の立脚地を闡明してゐる觀がある。この言葉は、子規が萬葉集への理解を深め、作歌圓熟期に入つた晩年の心持を、何らの修飾なしに吐露したものと見ることが出來る。表現の仕方は違つても、

萬葉を尊重して而も之に捉はれず、自己の藝術を樹立すべきであるといふ、年來の主張は微動だにしてゐない。

いくつか發表した、萬葉集についての斷片的研究に依つて、子規の萬葉觀は具體的にあとづけられるが、(ここには略しておく) 彼の萬葉主義の核心は、萬葉以外に出づる、詳言すれば、萬葉の詞や形體をのみ模せず、その力強い創造的精神を尊重し、現代の自己の藝術を創り出さうといふ點に主眼が置かれてゐたのである。

この萬葉尊重の子規の歌論は、明治歌論史上重要なものであり、直接門下に襲踏されたばかりでなく、廣く歌壇、學界、文壇にも影響を及ぼしたことは詳說する迄もない。新興歌壇に一の堅實な指標を提示し、軈て學界に於ける萬葉研究に拍車を加へることにもなつた。彼の歌論の重要な面を占める萬葉主義の思想は、今や廣く深く一般大衆に滲徹してゐると言つても過言ではない。しかし、彼生前、直ちに一般大衆に咀嚼されたといふのではなくて、最もその強い影響力が少數の彼を繞る門下歌人に先づ及び、その門下歌人の萬葉主義の祖述、展開に伴つて、徐々に彼の思想の影響圈が擴大されて行つたとみなければならない。

伊藤左千夫は、子規の歌系にあつて中樞的な指導的地位に立つてゐた人である。明治の萬葉主義歌人中、特異な見解に準據した、一の鼻祖的存在として子規を見得るとするならば、左千夫は、その陣容を整備し强靱ならしめた、よき第二世であつた。子規の萬葉主義を、擴布するに與つて力があつた一人と云はねばならない。

私は本稿に於て、左千夫は子規說を如何に繼承し發展せしめたであらうか、といふやうな點に注意しながら、左千夫の萬葉主義の變遷と、その特色について簡單に述べてみたいと思ふのである。

○

子規が「歌よみに與ふる書」の和歌革新意見を發表した二日前の、同じ日本新聞紙上に、左千夫の「非新自讃歌論」

(三十一年二月十日)が載つてゐる。七日の紙上に、「新自讃歌」の最初の發表として小出粲の歌が出たのに對して、單に有名歌人の歌を無批判に載せるやうなことをせず、廣く天下の實力ある歌人を探し求めて後世に恥をのこさないやうにしてほしい等と註文し、粲の歌を非難してゐるのである。その一節を抄すると、

今小出ぬしの歌をみるに調の上には少しも味ふべき趣なく、心また雅に高きてふ氣韻に乏し。……(中略)……醜きものいやしげなるものうちまじりなば、そは美術てふ物の界にいるべきにあらず。故にいやしげなる調とみやびならぬ心とはいづれか一つまじらひては卽ち歌にはあらじかし。歌の俳句にことなる所は心の外に調をおもんずるにあなり、されば歌にして調なきはこれ直に俳句なり。……(中略)……歌は心と調と兩ながらまたきを要するぞかし。……(中略)……ぬしの歌は歌にはあらで三十一文字の俳句なり。

といふ如きもので、歌壇大家の作にあきたらぬ情を有し、和歌革新に何らかの意圖のあつたことは察せられるが、左千夫獨自の見解は未だあらはれず、月並な議論以外のものでは無い。同文の末尾に、歌の模範だといふ歌を四首例示してゐるが、古今一、萬葉一、賀茂翁歌集二で、それらに徵しても特にすぐれた鑑賞眼は認められ難い。左千夫の此の論旨に反對した小隱に答へた文(二月二十三日)には旣に、「歌にして調なきはこれ直に俳句なり」を、「歌にして歌の調なきは直に俳句なり、歌は高尙卽上品なる調を要し、俳句は必ずしも然らず。」と訂正してゐる。これは、子規の「三たび歌よみに與ふる書」(二月十八日)に「俳句には調が無くて和歌には調がある、故に和歌は俳句に勝れりとある人は申され候」等と、左千夫說を駁した意見を發表したが、その一部を採用したものに相違なく、この頃から左千夫は子規の歌論に注意し反省する所が少くなかつた事の實證となるのである。子規は「人々に答ふ」(十一)(十二)(三十一年四月、五月)に、左千夫の駁論に答へてゐるが、それらをみれば、當時子規の考は缺陷の多いものであつたとはいへ大

體に於て、左千夫說よりは高級且つ進步的革新的な優位に位置してゐた事が明瞭である。左千夫は、その頃から漸次子規を尊敬しはじめ、翌々年の正月、遂に子規庵を訪問して弟子の禮をとり、熱心な子規宗に歸依した。

○

左千夫が子規を訪問し之に師事するに至つたのは、子規の偉大なることを認め、自分はどうしても子規には敵はない、といふことを、しみじみ痛感したからであつた。であるから、出來るだけ忠實に子規說を傾聽し、之を吸收消化して自己作歌の養分としようと努めたことである。子規に接觸し子規の敎をうけることは、何物にも代へ難い彼の喜びであつたのである。しかし彼は子規より三歲の年長で、入門した時はすでに三十七歲の壯齡であつた。ならひ性となつて容易に矯め難い年輩で、而も負けずぎらひの一徹の、主我的な性格の彼が、盡く子規說に同意するやうなことは不可能なことであつた。少くとも、子規の說を承認するためには、一々反問論議を重ね、自己を空しうする大きな努力の後、始めて贊成するといふ風だつたと想像される。かういふ、子規と左千夫の心的交涉については一々實證することが出來るのであるが、ここには述べない。

ともかく、かういふ意味に於て、子規の歌論を意識的に發展せしめようとする大きな努力をしないでも、左千夫の歌論は子規のそれと自ら異なる點を生ずべきであつたのである。むしろ其の相違點を反省し、しきりにもがき、隱蔽するには腐心した形跡さへ見える。子規生前は、左千夫說の特殊性は著しくあらはれてはゐないが、少しく注意してみてゆくならば、すでに兩者の爭はれぬ相違は認められ、子規歿後に於て、左千夫の歌論が子規說とかなりの距離あるものとなつて行つたことは周知な事實なのである。それは子規說を發展充實せしめようとする意識的努力といふよりも、左千夫の本性に卽した自然的改變であり、環境と時代思想に隨伴した必然の過程とみる方が、より正しい觀察

だとおもふ。

それはとにかくとして、彼は子規に從ふこと僅か三年に滿たず、子規は短歌革新の中道にして夭折した。この短時日の間に、子規の作歌及び歌論を理解し攝收するに全力を傾注した左千夫は、なほその歿後も、子規說の再吟味を怠らず、萬葉主義の大旆をかゝげて、短歌革新に猪突邁進した。

○

子規存命中に左千夫の發表した歌論としては、三十四年發表の「新歌論」、三十四年から三十五年にかけて發表された「續新歌論」及び「再び歌の連作趣味を論ず」(三十五年)等で、何れも「心の花」に掲載されたものである。

意識的に連作の趣味を悟つて作つたのは子規が最初であるとなし、短歌連作の趣味を力說强調した彼の歌論は、議論に補正すべきものはありながら、獨自の注意すべき提言だつた。彼の歌論の重要な面として、この連作論はその後の彼の歌論にも屢々あらはれ、歌壇に影響を與へた點でも、忘れられてはならない。が、その他は主として子規の歌論を咀嚼し襲踏し、多少の整理をした程度で、餘り獨創味は認められないやうにも一見おもはれるのである。併し先づ左の如き點に、すでに子規說の發展を見得るのではあるまいか。

萬葉集に序、枕詞、造語等の使用が多く、それが自由に緊密に驅使されてゐることに萬葉集の一特色を子規は認めてゐたのであるが、左千夫がこの三點の特色をあげ、さて、

萬葉の歌は有の儘なり、思ひいでたるままを詠めるなり　修飾なきものなりとは何者の盲者が云ひしぞ。製作を主としたるものと事實を主としたるものとに論なく、あらゆる色彩を應用し、あらゆる模樣を發明しつつ滿裝盛飾光華の燦爛たるを見るは萬葉の歌にあらずや。(新歌論)

と、萬葉集の歌の技巧のすぐれたものであることを、明かに强調したのは、或は子規說にふくまれたものを抉出したものともいふべく、一步を進めた論と稱するも不可ではない。又、

所謂二十世紀とやらの今日の知識的進步、理窟的進步は卽ち有之、而かも文學の神髓たる美的感情なるものの上に於て劣却の徵跡、明として疑ふべからず。人情の厚薄、感情の優劣果して今を推すべきか古を推すべきか。如何なる昧者と雖も此の點に惑ふことあらざるべし。(新歌論)

と、尙古主義の立場をとつてゐることは、子規說と明かに異なる點であるとおもふ。かういふ觀點から、萬葉語の復活を叫び萬葉調の尊重すべき所以を論じてゐる。子規と左千夫の性格といふよりも、性格を規定する環境、階級から、この相違は最もよく說明されることであらうが、ここには略しておく。

予輩が國歌の革新を欲する、毫も時代などと關係を有するものにあらず。世界の交通、社會の文明、歌の革新と毫も關係する所あらざるなり。新と云はず舊と云はず、趣味的硏究は非を斥けて良を採るあるのみ。……(中略)……故に予輩の意見は古今集以下よりいへば、革新なり。萬葉集よりせば復古なり、復古と云ふと雖も、調子の上に於てのみ、句法の上に於てのみ、詞の上に於てのみ、其の思想材料に至つては、現下の事實を歌ふや勿論のみ。洋語漢語新事物、打こなして萬葉調たらしめんと欲するなり。(續新歌論)

といふ。言は多少、極端に走り、矛盾をふくんでゐると思ふが、當時左千夫の萬葉主義は、これによつても、よくうかがふことが出來る。

子規は過去の歌集中に於ける萬葉の優位性を認め、萬葉集から大いに學ばんとし、又學びとつたものが多かつた。けれども自己の藝術、新時代の藝術といふことを常に立論の基礎とし、萬葉の形式を模せず、精神をくみとらうとし

たものである。左千夫は之と異り、藝術の絶對性を信じ、萬葉の古代を憧憬し、萬葉調の復活に依つて始めて萬葉の精神は生かされると考へた。左千夫の萬葉集憧憬の念は子規を凌駕し、一面、その萬葉主義を徹底的ならしめたと共に、他面、擬古的作風に墮する缺陷をあらはしつつあつたのである。ともかく、左千夫が萬葉復活を口にし、萬葉調への歸一を說いてゐる事は、大いに注意すべき點である。

○

かくの如く、すでに子規生前に於て、左千夫はその萬葉主義の子規說より異つたものをあらはしてゐるのであるが、子規の歿後、「アシビ」に發表した「萬葉論」(三十六年)には獨自の見解を示してゐる。その、萬葉集を形式派と寫實派に二大別し、人麿を形式派の代表とし、憶良・赤人・家持等を寫實開發の代表者とした見解は、萬葉研究史上に注目すべきものとしなければならない。

> 人麿の歌を優れりとなし成功せりとなし、然も其の系統を逐はずして、比較上劣れりとなし未だしとなす所の憶良赤人の精神を繼いで、より進歩的寫實趣味の成功を遂げんと期するは、他なし、形式趣味主調子趣味の單純にして變化乏しく、到底時代思想に適應せざるを以てなり。憶良赤人に取る所は歌の成功にあらずして、革新精神に存す。故に思想の進歩は是を憶良赤人に歸せざるを得ず。吾輩が人麿に據らずして、憶良赤人に據らむとするは是が爲なり。

といふ主張は、人麿的な歌の作者である左千夫の提唱としてみる時、特に興味がある。自己作風の缺點を反省し、それを嫌惡する情がおのづから反射的に立論したといふやうなことも考へられるが、子規の寫生說に沿うて萬葉を吟味し、子規寫生說を利用し、生かさうとした結果の立論だつたことは忘れられないことである。この議論は、彼がそこに歸一を求めた萬葉調そのものの考察から得來つたものであり、アララギ第三卷第三號(四十三年四月)所載、「萬葉

集新釋」の稿に、人麿の過近江荒都時の長歌を釋するに當り、(一)文彩餘りあつて質是れに伴はざるもの多き事、(二)言語の働が往々內容に一致せざる事、(三)內容の自然的發現を重んぜずして形式に偏した格調を悅べる風ある事、(四)技巧的作爲に往々匠氣を認めること、の諸點をあげて、人麿の歌の缺點を指摘した議論へ接續するのである。

彼は子規の歿後、その寫生說を一度は自己の歌論としてとりあげたのである。「萬葉論」に於て、赤人・憶良等の寫實派に歸さうと云つてゐるのは之を證する。しかし「歌譚抄」(三十八年)に於て、同門長塚節の寫生歌說を駁して、寫生は感じを顯すことが目的で、形象の要點をとらへることが要義であり、寫生歌の名稱はあり得べからずと論じ、寫生趣味の點では歌は到底俳句に及ばない、歌は主觀を詠むに適し、調子を重んずべきであると說き、寫生說を否定してゐるのは、子規說の忠實な踏襲では無くて、むしろ子規寫生說を否定したともいふべく、彼自身の本性に卽して寫生說を揚棄したものに外ならないのである。

萬葉集の、單なる寫生ではなく、主情的主觀的のものにすぐれたものの多いことは、子規も勿論認めてゐた所である。が、子規は自然を愛好し、敍景的な作をものし、寫生の功德を常に力說してゐた。萬葉主義と寫生說は子規歌論の二大骨子であるが、さて此の兩者の關聯交涉は多少曖昧に離ればなれになつてゐて、渾然たる組織の下に體系づけられてゐない憾がなくもなかつた。寫生說は蕪村を宗とする俳論の延長線上に位置し、未だ萬葉主義の歌論と融合する迄に燃燒されなかつたやうである。左千夫が萬葉を主觀的な形式的のものと、客觀的な寫實的のものとに二大別して解釋しようとしたことは、子規の寫生說を萬葉にあてはめた解釋の結果であり、その萬葉主義と寫生說の一致點を求めようとした努力のあらはれとも見られ得るのである。而も、歌の調子を重んじ主觀的立場を重視した彼は、遂に空しく寫生說を揚棄するの外はなかつたのである。

子規子の研究的態度は只文學を目的とし、歌は只歌を目的と爲すと云へる見地に立ちたりと見るべく、從て其の作物の跡に就きて見るも、自然を親しみ人生を傍觀せるの趣あり。歌と他一切の文學美術との關係、若しくは宗教問題、社會問題、人生問題等の諸問題と文學との關係に就きては、殆ど意を注ぐ所なかりしなり……(中略)……文學美術上一切の問題が、人間の研究を根本とせる如く、歌に於ても勿論寧ろ人間其の物に最も直接なるべきを論じ、作歌理想は子規子時代と頗る其の中心を異にし、明確にその然るべき理由を自覺せり。故に其の態度は自ら人生を親しみ自然を傍觀するに在れり。

と、「アシビ終刊の消息」(四十一年)に、左千夫が揚言してゐるのは、大體に於て肯定せらるべきである。藝術の解決を單に藝術上の問題とせず、人生問題、人間の問題から解決しようとする左千夫の態度は、當時の自然主義の影響に因る所もあらう。が、

藝術と道德と相戾るが如きは、其の藝術も道德も理想的のもので無いとは予の自信である……(中略)……道德と藝術との最好調和者は宗教であると信ずる。道德も宗教に依て狹隘と偏固とを免れ、藝術も宗教に依て淫靡と低劣とを免れ得るであらう。……(中略)……人間生活の第一義は生命である。さうして其の生命の第一義は理想的興味に生くるにある。其の理想的興味は、宗教道德藝術の三者が、最も適當に交渉せられた場合に於て供給せられるのである。(獨語錄)

等と、宗教方面に異常な關心をもち、道德、宗教、藝術の三者を統合した理念の下に置かうとするやうな主張をしてゐるのは、單なる時代流行の文學思潮の影響とか子規說の發展とか云ふやうなことだけでは、解釋されまい。彼の性格や環境に深い根ざしのあることを考ふべきである。單なる藝術主義的の子規の見方と異る點は、彼が明治三十八年(四十二歲)頃から、「歎異抄」を愛讀し、佛教的信仰に歸依した一事にもよくあらはれてゐるのである。

○

彼は大正二年、五十歳で病歿したが、元年、二年頃の所謂晩年の歌論は、「叫びと話」「叫びと俳句」等に獨自の光輝を發してゐる。

對象に依つて得た感激の情緒、その情緒の動搖が胸から溢れ出る聲調が、讀者の同感を惹くまでに歌の上にあらはれてをれば、叫びの歌、叫びのふくまれた歌と云ひ、思想や詩材や作者の感じ方現し方の外に、聲調に傳はる情緒の搖れの乏しい歌を、話に近い歌だと說明し、萬葉以後、叫びの含まれた歌は實に少く、實朝の歌、宗武・良寛の歌に僅かに之をみる、萬葉でも憶良・家持等には拵へた歌が多く、家持時代に至つて萬葉の歌は漸く墮落し始めたと云ふ風に述べてゐるのが、「叫びと話」の要旨である。憶良・家持らの寫實派を宗としようと嘗て述べた彼が、ここでは明かにそれを否定してゐる。これは、子規の客觀主義寫生說を捨てて、自己の性に合致した主觀主義の旗幟を明確に自覺主張したものと云ふべきである。

「叫びと俳句」の稿に於ては、芭蕉俳句に於ける「や」の字の使用法は、單なる切字ではなく、深い嘆息の聲のあらはれてゐるのが多いと例をあげて說き、進んで、芭蕉の句集には感傷の深い、叫びのこもつた句が至る所に發見される、それは要するに、

> 芭蕉其の人の生が、作句に直接な交渉が存して居る處に、藝術的尊い生命があるのである。言ひ換へると句々が芭蕉の分靈であつて、芭蕉其の人の價値が直に俳句の價値であるのだ。

と結論してゐる。

子規は、晩年「仰臥漫錄」のなかで、芭蕉の

五月雨をあつめて早し最上川

の句を評し、「あつめて」といふ語は、たるみがあつて面白くない、蕪村の

五月雨や大河を前に家二軒

といふ句は、遙かに進歩してゐると云ひ、又

あら海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉

のやうな簡單な句は、明治のやうな複雑な世にはうけ入れられまい、併し、

霧ながら大きな町に出でにけり　移竹

の如き趣は却つて解せられてゐない、といふ意味を述べてゐる。これらによれば、子規が晩年なほ、蕪村を愛好し、客觀寫實を重視してゐた立場を窺知し得るのである。

子規の俳句革新は蕪村の寫實風の作品の示唆に依る所多く、彼の好尙も亦、芭蕉にあらずして蕪村調に終始したことは、この一例によつても略々察することが出來る。が、彼の歌論はこの俳論の延長線上にあつたもので、寫生説は卽ちそれである。而して子規は歌史上に於ける萬葉集の優位性を提唱しながら、彼本來の自然愛好の念は消すべくもなく、この一點一種の矛盾を藏してゐた如くである。左千夫は子規の議論を消化吸收しようとつとめたが、彼本來の性格をまげて、從順に子規説に追從するには餘りに主我的な性格であり、入門時すでに壯齢でありすぎた。つまりは子規を尊重する立場にあつて、之を批判して進むといふことにならざるを得なかつた。彼は子規の寫生説と萬葉主義の融合しきれない部分を揚棄し、平面的な寫生説をすてて、萬葉主義に更に徹底しきつたのである。左千夫が、晩年に芭蕉の俳句に於て詩歌の理想を見出したことは、直ちに子規との對立を、痛切におもはしめさへもする。同じく萬葉主義と一口に言つても、蕪村と芭蕉が對立する如くに、子規と左千夫は對立的のものだつたといふことは、この親

しい師弟の皮肉な運命だつたともいふべきであらうか。

子規の明晰な頭腦は、萬葉の藝術美を直覺的に認識し、古今集尊重の歌壇の弊風を一洗するために、萬葉尊重の歌論を强調せしめた。しかし、それは智識と理解からで、體驗に缺けた所があつた。全的統合にもちきたされず、彼の歌論は、藝術美の智識的解明に終つた觀がある。動くべき發展の中途にあつたといふべきである。左千夫の萬葉主義は、子規に其の源を發し、彼本來の性質と時代の進展に伴つて、更に深く根づよいものとなつた。萬葉集に對する分析と綜合との眞摯な究明を經、彼の全體驗と結びついて、强い信念にまで成長した。自由に動くべき餘地はなくなり、一つの完成された形に高揚されてゐたのである。

左千夫の歌論は子規說の從順な發展形體とは認められない。又その理論の可否に關しては一長・短のあることも、又やむを得ないことである。が、師說になづまず師說をのりこえて進むところに、意味と價値が認められるとするならば、左千夫の如きは、まさにそれを具現した人として銘記されなければなるまい。

岩野泡鳴の個人主義的國家主義論について

石山徹郎

個人主義と國家主義とは、普通相對立するものとして思念される。然るに、徹底的な個人主義者であつた岩野泡鳴は、同時に强度の國家主義者であつた。個人主義と國家主義とが、泡鳴に於て、一般の常識を超えて、一種異樣な結合を遂げてゐるのである。

明治後期の個人主義思想によつて自己中心の物の考へ方を培はれた私は、靑年期の終り頃に、さうした物の考へ方と、國家中心の物の考へ方との間に、矛盾又は不調和を經驗して、その解決に苦しんだ。一切の行動の倫理的基礎を自己內心の要求に置くことを至當とする考に從ひながら、自己を超越して存在する、又は自己の外に存在する國家の意志とか要求とかいふものを認めないわけにゆかず、兩者を對立的に意識した結果、その間の關係を如何に處置すべきかに迷つたのである。その時私に非常に大きな興味を感ぜしめたものは、泡鳴の如上の個人主義的國家主義の思想であつた。私は彼の「半獸主義」、「新自然主義」、「悲痛の哲理」、「近代生活の解剖」、「古神道大義」、などの著書・論集を貪り讀んだ。

しかし當時の私は、泡鳴の論說を興味を以て讀み、そこから或示唆や力を與へられたといふに止まり、それを十分に消化し得たとはいへなかつた。つまり、そこから或種の主觀的滿足を得ただけで、それを思想として明瞭な形に於

て把握しようとする努力を、意識的には殆ど拂はなかつたのである。

今の私は當時の私ではないから、泡鳴の論說を、當時のやうな生き生きした興味を以て讀むことは、出來なくなつてゐる。しかし、その當時に於て當然なすべくしてなさなかつた努力を、今この小稿に於て、或形の下に果さうと試みることは、私としてまんざら無意味ではないと思ふのである。

以上の私的事情から推察されるであらうやうに、私がこの小稿に主として取扱はうとするところは、個人主義と國家主義とが、岩野泡鳴によつて、如何なる理論的根據と如何なる推論の下に、如何なる形で結合歸一させられてゐるかといふ問題である。

泡鳴の思想は、一切の二元的なるものを否定し排斥するところに、その著しい特色がある。彼は靈と肉との對立を否定し、善と惡との對立を否定し、現實に對立する理想を排斥し、苦惱に對立する解脫・救濟を排斥し、流轉・盲動に對立する固定・目的を排斥した。彼は苦悶に滿されて刹那に起滅流轉する盲動が現實の生で、それ以外は皆空想であり、無であり、死であり、結局無價値なものであるとした。個人と國家の對立も、かゝる考から否定されなければならなかつた。

彼の考によれば、國家を離れては人生もなければ、個人もない。そのことは、「新自然主義」中の「國家人生論」(全集第十五卷、二八〇頁以下)や、「古神道大義」の第二節「國家人生論」(全集第十六卷、三四七頁以下)などに夙に論ぜられたところだが、後年彼の主宰した雜誌「日本主義」に揭げられた諸論文には、その問題が、多少通俗化されて、一層詳細に論議されてゐる。

彼はそれらの論文に於て、個人と國家とを對置する立場から主張される個人主義並びに國家主義を、空想的個人主

義及び固定的外存的國家主義と名づけて、共にこれを排撃した。

彼の說はかうである。——國家主義と對立する意味での個人主義は空想であつて、實際には成立しない。空想的個人主義者は、先づ人類の平等といふことを空想するが、それは實際の事實に反するものである。「人類が生れた當時のままで努力も進歩もないものとすれば、いつも皆同等の程度にゐるだらうが、どんな馬鹿なものでも相當の努力はする。努力をすれば進歩もある。從つて、そこに賢愚、强弱、健不健等の爲めに僕等の生活上に地位若しくは權力上の不平均を生ずるのは、避け難い事實である。これを無視してなほ平等を云ふのは、個人主義をその一端に固定させた上の高尙がつた空想である。」次に空想的個人主義者は、國家的拘束を否認し若しくは手段視するが、これも誤である。國家的拘束の否認は、政治上で云へば無政府主義、經濟上で云へばサンヂカリズムになる外はないが、これも實際に成立しない空想に過ぎない。「無政府主義者等の間にも道德的政府と云ふことを云ふものがないでもない」が、「たとへ道德的にでも、一たび政府なるものが出來たとすれば、そこに必らず或種の權威者が生じてゐよう。權威はどうしても智、德、腕力若しくは財力のいづれか若しくは二三を以て、若しくはそのいづれをも具備して、周圍を吸收征服する者、乃ち、その場の實力者に現ずる。これがいやなら、今の政府をばかりでなく、道德的政府なるものが實現された時は、それをも亦ぶち毀さなければならぬことにならう。」「サンヂカリズムの信徒は、また、誰れと一定させずにおのづから生活者どもの意志を取りまとめるやうになる團體の主張者等である」が、「その基礎とする小團體の集りでも、それが一たびでもまとまつたとすれば、そこにきつと一種の威力ある中心人物どもがあつて、他を征服してゐるに相違ない。」それだのに「なほ國家と權威者とを否認して積極的個人の成立が出來ると思ふのは、權威がその實自分どもから生じ、自分どもが生活の必要上さうなつたのであるといふ事實を知らぬのだ。權威は內存的なものだの

に、これを外存視するところからして、かかる空想を生じたのである。」――

かうして彼の謂はゆる空想的個人主義者等の支配權力否定の考を排撃した泡鳴は、更に彼等の懐く空想の一つとして世界主義的思想を擧げて、これを論破しようとする。世界主義は「國家を直接に否認しないとしても、國家を單に手段視してゐる爲めに、結局は超脱的に否認しようとする」のであるが、國家は手段ではなくて生活の本體である。「人類と云ふものが据ゑ置きになる固定物ならいざ知らず、刹那に活動する個人であつて見ると、その個人には弱劣者を吸收征服する意氣と信仰とがある。その意氣と信仰とには人種若しくは民族の歴史的流入が背景となり、舞臺となる。そしてまたその人種若しくは民族を統一確立させるものは國家である。國家は個人が幾多の弱劣者を吸收征服しつつある生活の最も確かな姿だ。」「國家の制限力があるのは人間の自由な働きを縮少するやうに見えるけれども、實は、却つて征服的個人（そして何人も征服者になりたくないものはない）の意志を成るべく無制限に伸張せしめる所以である。」

泡鳴はかくして、天賦人權論者は「變化と進歩との小やみも無い事實を忘れて人類の平等を空想する」ものであり、社會主義者やサンヂカリストは「權威は個人から出て個人の生活を伸張してゐるのであることが理解出來ぬ」ものであり、世界主義者は「個人間にも軍備があり、弱肉強食があり、征服の事實があつて、この征服が却つて人間の親愛を最もよく體現してゐるのであることを洞察出來ぬ」ものであるとし、「これ等の支持する個人主義では各個人を見ることがさながら濱の砂の如くで、索然として孤立無聯絡である。渠等の平等と云ひ、自由と云ひ、また愛と云ふのは、砂の一つぶ毎の惰性を認めてそれをもつと廣いところ、深いところに置かうとしてゐるやうなものだ。廣い若しくは深いところへ投げられても砂は散亂こそすれ、その重みには少しも變りはない。それを、然し、かかる個人主義者等

はこの重みと散亂との間に何か新しい關係が出來るかの如く思ひ做して、そこに『有機的』と云ふ科學的形容詞をこぢ付けたに過ぎぬ。」といつてゐる。

泡鳴の個人と國家との關係觀はこれだけではまだ十分明らかでないが、その點はまたあとで觸れるとして、次に彼の謂はゆる固定的外存的國家主義に對する意見を一通り見ておかう。

彼の考によれば、上述の如き「個人主義に正反對を表して立つのは現今一般の國家主義である」が、この主義では國家を各個人の總和だと見、そして國家は個人を超越すると考へる。しかしそれは誤だ。「超越とはその實無關係無聯絡になることである。」「國家が個人を超越してしまへば、個人その物の征服的生活（乃ち、個人の內部生活）と關係を結ぶことが出來なくなる。そんな國家によしんば統一力があつたとしても、國家と無關係なものを統一してゐるのであつて、」「眞の統一ではなく、外部からの——今一つ譬へて云へば、前後左右の四面からの——束縛に過ぎぬ。その中に圍まれた各個人をそのままに据ゑ置きにして、國家を少しも動かさないで置くなら、その國だけは兎も角無事だらうが、一たびどつかへ動かさうとすれば、底がないので、個人はわけもなく拔けてしまふ。ところが眞の國家は空の如き、無の如き、また理想家の所謂極致遍在の唯一靈の如き固定物ではない。刹那刹那にも個人に背負はれて動いてゐるのだ。」「この事實は個人超越論者等の豫想し若しくは定義するやうな國家の意義と相容れないのである。」超越的國家論者は個人を正當に解釋することが出來ないで、これを散亂的惰性ある分子と見てゐるから、炭だわらの炭が散亂しないためにこれを縛つてゐる繩が必要であるやうに、國家に各個人を支配する外的權威をくつ付けて考へるが、個人は決して彼等の考へるやうな互に無關係無聯絡な砂や炭の如きものではなく、またさういふものの總和以上に出ぬものではない。「今、炭を例に取るのが一番便利のやうに思へるが、炭の一つびとつは燃えるものであ

る。この一つに火がつくと、次ぎ〳〵をも燃やさないでは置かぬ。早く燃えたのは滅び、長く燃えるのは全體を生かしてゐる。これを條件として燃えるのが炭である。その全體を縛るたわらや繩も燒き盡されてしまふのだ。國家と個人との本質的關係はこれだ。個人は國家の分子では無く、本質である。國家は個人の總和ではなく、個性の擴張である。人類の生活とは心意の燃燒だ。この燃燒力が個人の權威で、この權威が征服的に燃えあがつたのが、國家である。」

かういふ考から泡鳴は、國家の「權威若しくは制限力も個人の生活以外にはない」といふ。「生活は征服だ。國家はこの狀態を本質として成立するのであるから、外存的または固定的な觀念ではない。服從と命令、征服と被征服とは、各個人の間で旣に行はれ、そのうちの優强個人の生活が燃え廣がりつつ國家として動く。從つて、國家は内的な成立であると同時に、いつも自然に過程的なものだ。」——これが彼の國家觀である。

以上は專ら「國家主義並に個人主義の獨斷的區別の撤廢」といふ論文（全集第十卷、一七七頁以下）によつたのであるが、泡鳴はかうして、個人と國家との對立を否定し、個人と國家とを對立させるところから生れた個人主義と國家主義とを排擊した。彼の個人主義的國家主義（國家主義的個人主義といつても同じ事になる）は、以上の所說から當然導かれ得るものであるが、要するにそれは、個人と國家との二元的認識を揚棄した、個人卽國家觀乃至國家卽個人觀を基礎としたものである。

泡鳴の個人國家一元觀は、夙く「半獸主義」（明治三十九年刊行）の中にも暗示されてゐた。曰く、「僕の主義から、自然に豫想せられるのは、熱誠と威嚴とである。」「熱誠と威嚴との變形を權力といふ。權力は刹那に確立する個人に存してゐる。國家とは宗教と等しく、偉大な人物の權力が拔け出た蟬殼である。」「國家の内部的生命は、暗流の如く個人の胸中に流れてゐるのである。」（全集第十五卷、七九頁以下）——しかしこゝでは、權力の主體たる偉大な個人が

表面に立てられて、國家は、偉大な個人の權力が拔け出た蟬殼だといふ風に見られ、まだ實體が與へられてゐない。然るに、「新自然主義」中の「國家人生論」（明治四十年十一月）になると、個人卽國家觀がもつとはつきりした形で說かれるに至つた。曰く、「强者がおのれを發展したところに文明も出來、國家も出來たのだ。」「わが國體は個人が乃ち國家、國家は乃ち絕對個人で、その間に殆ど相對個人の存立を許さない。上一人、卽ち、最强者でなければ、殆ど何物でもないのである。」（全集第十五卷、一八七頁以下）——彼は、優强者の生活が國家として現はれると見、從つて、國家は個人の中に內存すると考へた。そして特に、わが國體は最もよくその關係を具體化したものであると見、「新自然主義」中の「日本古代思想より近代の表象主義を論ず」（明治四十年二月）や、『古神道大義』（大正三年）に於て、その實際の例證を求めてゐる。

彼の考によれば、充實した人間の活動、卽ち生きた人生は、自我の刹那的燃燒に外ならない。そして、それは征服吸收の渦動であるから、個人と個人との關係は、征服し合ひ、吸收し合ふ關係であり、優强者は弱劣者を征服吸收し、弱劣者は優强者に征服吸收される。それが道德であり、また愛でもある。——泡鳴はこの考を、「悲痛の哲理」（明治四十二年）では次のやうな言ひ方で述べてゐる。——「威力ある優强者は、殘忍なる弱肉强食の道を踏破して、自己を食ふ悲痛な狀態に生き殘るのである。自我の自覺的生命は、一以外の萬物（卽ち影だ）を撲滅吸收することが出來る刹那に實現する。自我以外の人間もしくは萬物は初めから獨立の存在物ではなく、自我の分泌物に過ぎない。……自我獨存的利己主義並に個人主義には、强弱依立の道義などを要しない。弱劣者を撲滅若しくは吸收して、優强者の獨存を確立する威力さへあればいいのだ。てきたへば撲滅、なびけば吸收だ。」（全集第十五卷、四四四頁以下）

そして彼は、この關係を最も如實に具現したものが日本の國家であると見、「わが國家の存在は、乃ち、强烈なる現

實的人生で、威力ある優强者の全人的發現である。」（同上四四七頁）といひ、「近代生活の解剖」（大正三年）では、日本の國家は最優强者たる天皇の自我發展によつて生じたものであるから、天皇は即ち日本國家の製造者であらせられ、天皇を離れて日本はない。萬世一系の皇統はこの關係を形式化したものである。しかし天皇も人間であらせられるから、實際にはいつでも優强者であらせられるとは限らない。そのやうな場合には他の最優强者が實力に於て天皇の代りをするといふ風に說き、「たとへば、朝鮮征伐の時代に於ける豐太閤のごとく、帝座に坐らないでも、內容に於て、實力に於て、最優强者たる資格を發揮する」ことが出來るのであつて、そこに我が國體の特殊性があると見てゐる。（全集第十六卷、五五頁以下及び六八頁以下）――泡鳴の日本主義はこの自覺に立脚した。

　個人と國家との關係に對する泡鳴の見解並びに主張は、これで一通り明らかになつたと思ふが、彼は前に擧げた「國家主義並に個人主義の獨斷的區別の撤廢」といふ論文で、彼の謂はゆる空想的個人主義及び固定的外存的國家主義を排擊したあとを受けて、次のやうに、上述の說に註解を與へながら、その個人主義的國家主義を詳說してゐる。――「僕は個人に對する國家、國家に對する個人を一つながら肯定して」ゐるが、「この兩者を部分と全體との分量的關係に見たり、兩者を對立的に固定させたりしてはない。」「國家と個人とは分量的關係でなく、部分が全體に成る表象的理法に據つて、同一であるのである。個人が背負つてゐる國家、國家として動く個人だが、この個人は燃燒狀態に表象化された物であるから、惰性的に存在すると思はれてるやうな散漫な個人ではない。いつも實際の生存競爭に於いて弱劣者を吸收征服しつつある。僕はこれを『優强者』若しくは『優强個人』と命名した。これはその本質上、その時、その場所に唯だ一つ實現するものであるから、『獨存自我』とも稱する。勞働者若しくは資本家と云つたやうな團體もこれで動く。一般の社會もこれで動く。國家の如き大組織になれば、また、他のすべてを吸收して、それだ

け大きくこれで動く。」「人生の過程に於いて——そして過程以外に人生はないが、——この優强者の存在を何びとも拒むことは出來ぬ。その代り、渠は人生の過程が刹那的である如く刹那に起滅してゐる。寸時を各方面の德若しくは實力に於いて油斷すれば、それだけ緊張の度は減じて、直ちに他の優强者が現はれる。然しそのまた優强者も出て來ないではない。斯くして最大優强者が國家である。國家の主權者である。そして他の小優强者若しくは弱劣者どもは渠に全く被征服的に吸收されてゐるのが渠等の本質でもあり、存立でもあり、また幸福でもある。然しまた主權者にその實力が少しでもなくなると、それだけ部分的になるし、また全く衰退すると、いやでも應でも他の主權者と代らねばならぬ。國家若しくは國家の組織にこれ以上の鞏固を望むのは、空想であると同時に、國家を例の固定、乃ち、無活動物にしてしまふことだ。」「たとへ傳統的に主權者が確立する國家としても、鞏固なのはその傳統の形式だけであつて、——形式だけでも占有するのは一種の優强者として生れた所以だが、——その實力は本人の緊張如何に從つて增滅を免れない。十分緊張してゐる時はその形式までが充實し燃燒するので、外的威壓若しくは束縛を呈しないが、緊張が減ずると減じただけ、燃燒を離れた輪廓が見えて來る。乃ち、惡い固定化の現象で、これがひどくなるほど、國家の內容が貧弱を加へるのだが、それでもそんな國が若し隆盛進步の狀態にあるとすれば、この空虛を滿たしてゐる補佐若しくは代理の優强者が別にあつて、實力的に働いてるに相違ない。そしてこれが、傳統的主權者の國に於いても主權者と衝突しない所以は、主權者と同一になつて主權者の形式を生かす力になるからである。この微妙な眞理は僕の『古神道大義』に於いて詳述してあるから、ここにはこれ以上に云はぬことにする。が、他にこれほど帝王の學としてふさはしいものはなく、これほどわが國體とわが民族性とに適した哲理はないと、僕は思つてゐる。」（全集第十卷、一八九頁以下）——

これで泡鳴の個人主義的國家主義の如何なるものであるかは、一通り明らかになつたと思ふが、一體泡鳴の用語や發想並びに表現には甚だ獨自なものが多く、これを他の言葉に置換へることによつて、その思想が歪曲されたり、少くとも、その色合と響きとが失はれたりする處があるので、この解説・紹介には、多く彼自身の文章をそのまゝ借用して、これを適宜に按排することに努めた。しかしその議論の中から、多くの細部と當面の問題に關係の薄い部分とを捨て去つたのであるから、全體として、彼の個人主義的國家主義説の輪廓を傳へ得たに過ぎない。なほ、以上の記述によつて知られるやうに、この説は彼の日本主義と密接に結びついてゐるもの、否、むしろ日本主義の內容の一部をなすものに外ならないのであるから、これを一層完全に理解するためには、彼の日本主義全體と關聯させて見る必要があり、なほ遡つては、その基礎になつてゐる彼の自然主義的人生觀とか、表象の哲理とかを、もつと詳細に檢討してかゝる必要がありさうである。しかし、彼の日本主義は政治問題、社會問題、宗敎問題、敎育問題、國語問題などの諸方面に渉り、頗る廣汎な內容を持つてゐるから、それらに一々觸れることは、却つて當面の問題の中心を外れる結果になりさうであるし、また彼の自然主義的人生觀や、表象の哲理などに、これ以上深く立入つて觸れる餘裕も持合せないから、今はこの程度の記述にとゞめるより仕方ない。

私の初めに書いたやうな個人的要求は、これで一通り滿たされたわけであるが、終りに、彼のかうした思想に關する一二の私見を附記しておきたい。

まづいつておきたいのは、從來泡鳴の思想が正當に理解されてゐなかつたといふことである。「半獸主義」を初めとして、彼の議論は多くの場合或は甚だしく曲解され、或は無視され蔑視され、或は單に物見高い傍觀者の興味を以て視られるに過ぎなかつたやうに思はれる。なるほど彼の議論には甚だ論理の飛躍が多く、普通の見方からは筋道の通

らないことがあつたり、非凡な物の見方と恐ろしく常識的な物の見方とがごつちやになつてゐたり、同情を缺いた眼からは誇大妄想狂的に見えても仕方ないやうな獨りよがりがあつたりすることは慥かである。しかしそれは、彼の思想の獨創的であつたことと、彼の性格の正直で善良であつたこと、並びに謙遜とか控へ目とか效果に對する打算とかいつたやうなものを顧慮してゐられない程、むきになつて議論をしたこと、時としては意識的にさうした顧慮を踏み躙り、乘り越えようと努力したことなどを示すものであつて、彼の思想のつまらなさや、彼の人物の低劣さによるものでは決してなかつたと思ふ。明治大正を通じて、彼程獨創的であつた思想家は少く、彼程その所信を大膽に率直に發表し得た人間も珍しい。殊にその思想と實生活との間に表裏間隙がなかつた點、思想をそのまゝ生活化した點に於て、彼はあまり類のない人間であつたと思はれる。

勿論彼にも色々の人の思想の影響がある。エマーソン、スウェーデンボルグ、メーテルリンクなどに影響されたことは「半獸主義」に明らかであるし、文藝的にはフランスの象徴派の諸詩人の影響を受けた點も少くないやうである。しかし結局それらを自分の營養として取り入れて、そこから獨自な思想を生み出したところに彼のえらさがあつたのだ。

彼が、日本人としての自覺を得、日本的傳統に立脚することに獨創を認めるに至つた徑路は、また甚だ興味がある。彼は元來年少の頃はキリスト敎的な敎育を受け、キリスト敎を信じてゐたのであるが、青年時代に懷疑に陷つてそれから脫却した。そして、一時熱心に佛典を漁り讀んだが、佛教にも滿足することが出來ず、中江藤樹から王陽明の思想にも觸れたが、なほ心ゆかず、眞淵、宣長、篤胤、信淵等を通して、日本の古典に興味を覺え、「古事記」「萬葉」「祝詞」を味讀するに及んで、はじめて確乎たる信念を得るに至つたらしい。

泡鳴はそれらの古典に於て徹底したリアリズムを見た。彼はそこに善悪未分、靈肉合致の生々發展主義的生活を感得し、これこそ純粹の日本人の生活だと悟つた。そして、佛教的解脱思想、キリスト教的偏靈思想、儒教的道德思想をすべて反日本的なものとして排撃するに至つた。彼によれば、涅槃・解脱は死であり、偏靈的唯一神は空想であり、善惡二元說は分裂弛緩した生活に宿る思想であつて、いづれも、刹那に充實して强烈に自我を發展させる日本的生活を毒するものである。佛教思想、耶蘇教思想、儒教思想を奉ずる者は、皆外國思想の摸倣者であつて、獨創的な思想家は日本的生活の傳統を體得したものでなければならない。――

かういふ考から彼は、日本の過去の歷史に獨創的なものと摸倣的なものとが入り交つてゐることを指摘し、歷史上に大きな役割を演じた人々の間に、獨創家と摸倣家とを區別し、日本を、日本人の生活を、本來の姿に於て發展させてゆくには、飽くまでも摸倣を斥けて獨創に努めなければならないと主張してゐる。

私は今、彼の思想が如何なる社會的情勢のもとに生れたか、かゝる思想の生れるのに、如何なる客觀的條件と理由とがあつたかについて檢討する餘裕を持たない。從つて彼の思想を是非し、批判することを控へなければならない。たゞ、現下の日本の情勢から見て、彼の思想は一見ファッショの指導理論として最も恰好なものであるかのやうに見誤られる處が多分にあると思ふが、そして實際、ファッショに利用され得るものを可なり多く持つてゐるに相違ないとも思ふが、ほんとうは、これを實際政治に推し進めてゆけば當然ファッショになるといつたやうなものではなく、その應用し得る範圍はもつと廣いといふことを附言しておく。けだし彼の思想は――往々彼は實際政治の方面にまで論及しては居るけれども――結局のところ原理論的なものであつて、直接實際問題に解決を與へる種類のものではなかつたのである。

最後に繰返していふが、彼の思想、彼の論說は從來不當に冷遇を受けてゐる。その當時に於てもつと眞面目に取上げられてよかつたばかりでなく、今日に於てももつと注意を拂はれていいものだらうと思ふ。この小稿が彼の思想に對する世人の注意を喚起する上に多少でも役立つことが出來れば、私にとつて望外の幸である。

文學博士藤村作先生小傳

博士は、明治八年五月六日、藤村順吉氏の二男として福岡縣柳河に生れ、城内小學校、中學傳習館、第五高等學校を經て、明治三十一年九月、東京帝國大學國文學科に入り、主として物集高見、上田萬年、芳賀矢一、藤岡作太郎諸博士の指導を受け、同三十四年七月卒業せられた。

同年八月第七高等學校造士館教授に任ぜられ、同三十六年四月廣島高等師範學校教授に轉じ、同四十三年三月、東京帝國大學文科大學助教授に任ぜられて國文學を講ぜられ、大正八年九月、國語學國文學第三講座設置と共にその講座を擔任し、同年十二月、「近世小說の硏究」と題する論文を提出して文學博士の學位を授けられた。同十一年三月、芳賀博士退職の後を襲うて教授に陞進し、國語學國文學第二講座を擔任、昭和三年三月高等官一等に、同十年三月、勳二等に陞敍、瑞寶章を授けられ、同十一年三月、停年制により退官せられ、同四月特旨を以て從三位に敍せられた。かくて職を東京帝國大學に奉ぜらるゝこと二十六年、教授の任に在ること十四年に及んだ。在職中の功績により昭和十一年九月東京帝國大學名譽教授の名稱を授けられた。

博士は又、大正五年以來教員檢定委員會臨時委員として、昭和四年以來高等試驗臨時委員として、同九年以來國語審議會委員として、同十年以來文部省視學委員として、同十一年以來日本諸學振興委員として、國家文教の事に盡力せられてゐる。

又博士は、嘗て東京音樂學校、日本大學、立正大學に講師、廣島文理科大學に臨時講師となられたこともあるが、今は東洋大學、國學院大學、法政大學、日本女子大學校、東京家政學院に教授若しくは講師として、國文學を講ぜら

れ、又昭和九年、推されて東洋大學學長に就任せられて現在に及んでゐる。その他柳河學友會に會長として郷里の青年子弟の養成に力を致され、永く居住せられた千駄ヶ谷町の學務委員、第一尋常高等小學校保護者會長として盡力せられる等、諸種の教育事業に眞率な努力を惜まれなかつた。

博士は東京帝國大學在任中、主として近世國文學を研究せられ、近世小說史、淨瑠璃詞章の研究等には特に力を注がれ、大學の講壇に於てもそれぞれ數年連續して講ぜられたが、一々の作家につき一作毎に精密な考察を加へられ、考證と評論とを併せ行はれた。かくて從來興味本位の遊戲的雜文學として趣味的に扱はれることの多かつた近世國文學を學問的研究の對象として取扱はれ、殊に近世國文學と近世生活との交渉を中心として、武士生活と町人生活との相違や、町人生活に於ける粹、通、いき等に對して獨自の見を樹てられた。而も一面に文章史、文體史の方面にも精密なる考察を加へられ、これを講ぜられたのである。「上方文學と江戶文學」(大正十一年刊)、「德川文學と武士生活」(大正十二年刊)、「近世國文學序說」(昭和二年刊)等は博士の近世國文學研究の成果であるが、更に「馬琴研究」(新潮社日本文學講座)、「一九研究」(同上)、「近松世話淨瑠璃研究」(同上)、「町人文學」(岩波講座日本歷史)、「近世日本文學史」(國語國文學講座)、「浮世草子の研究」(改造社日本文學講座)、「紀海音世話淨瑠璃」(國語と國文學)、「最大の淨瑠璃作者竹田出雲」(大阪文化史)等の諸論文も多年の研究の間から得られた新見解になるものであつて、博士の學風がよく示されて居る。また年々西鶴近松の作品の講讀を行はれたが、該博精緻な中によく作品の眞髓をつかんで聽講者に深き感動を與へられた。雜誌「むらさき」「解釋と鑑賞」に連載の西鶴作品の解釋等はかくの如き西鶴近松の講讀の片鱗を示されたものである。

又近世以外の國文學に關しても島津助教授病氣缺勤中代つて「歷史物語の研究」を講ぜられ、大鏡の演習をなし、

雜誌國語と國文學に「大鏡に關する考察」を掲げてその研究の一端を示された。其他、明治文學に對しては近世文學に於けると同樣に學問的檢討と整理との必要を力說し、「明治時代の小說」を講ぜられ、「硯友社以前の小說」(日本文學聯講)、「齋藤綠雨」(國語と國文學)等の諸論文に於て研究の實績を示されたのみならず、明治文學會の創立に盡力し、その健全なる發達に助力せられた。

博士は、夙に國文學の研究による日本精神の闡明發揚に力を盡し、又學校に於ける國語敎育の基礎として、並に一般國民の敎養として、國文學研究が重要なる位置を占むべきものであることを主張し、「國文學と日本精神」(日本精神講座)、「日本精神と日本文學」(岩波講座日本文學)、「國語敎育論」(同上)等の諸論文に於て之を論じ、又木崎夏期大學その他の學術講演會並に講習會に於て之を說いて、以てその主張の徹底を圖られたのみならず、或は獨自の識見に基いて諸種の敎科用書を編纂し、或は「日本文學講座」(新潮社刊)、「日本文學聯講」(中興館刊)、「岩波講座日本文學」、「國文學研究叢書」、「物語日本文學」等の刊行及びラヂオ國文學講座等に參畫指導し、或は國語敎育學會、紫式部學會等を主唱創立して、その主張の實現に力を致して居られる。

又博士は、大正十三年以來、東京帝國大學國文學科を中心として、國語國文學專門の學術雜誌「國語と國文學」を編輯刊行して、斯學の進展に資する所甚大であり、更に昭和十一年五月以來、同志と共に「解釋と鑑賞」と題する雜誌を刊行して、斯學の普及を圖り、又數多の學者の協力を得て、近年頓に進步せる國文學及びその關係學科の研究の成果を要約した日本文學大辭典(全四冊)を編纂刊行されたが、かくの如き浩瀚なる文學專門辭書は外國にも甚だ稀であつて、我國學界の誇といつてよい。

博士は、名利に恬淡にして、寬大よく人を容れ、公正よく事を斷じ、眞に高潔圓滿なる人格者として知られてゐる。

その學生を導くや、個性を尊重し、あらゆる學風傾向を認容して、よくその學を成さしめ、その後進に對するや、信を腹中におき、寡言の中によく人を德化せられた。己を忘れて人の爲に謀り、鄕黨の爲に終始力を盡された如き、誠に情誼の濃やかなものがある。常に大局に眼を注ぎ、社會の動向に對して注意を怠らず、何事についても一家の識見を持し、經綸を藏する點に於て單なる學者ではない。嘗て中等學校英語科整理論を提唱し、社會の異常なる注意を喚起されたが、果して教育界の輿論は漸次その主張に近づきつゝあるが如き、又現に東洋大學長として學校經營に抱負を行はれてゐるが如き、その一例とすることが出來よう。又文筆の方面に於てもすぐれた才能を有し、かつて帝國文學の編輯にあたられた事もあり、又愛國の歌をはじめとして唱歌の作が少くない。その文章は平明の中によく情理を盡して居る。

これを要するに博士は終始一貫、指導者としての固き信念に生き、東京帝國大學國文學科を中心として國文學界の進步向上と、斯學に對する一般社會の注意の喚起、斯學による國民的精神の作興等を以て自己の使命となし、私心なき公明正大の態度と判斷とを以て、その實現に力を致されたのである。

博士は、國文學界の先覺たる上田、芳賀兩博士の後を承け、その專門の研究に於て、後進子弟の指導に於て、はた今日の國文學の隆盛を將來せしめた點に於てよくその任務を果し、今回東京帝國大學の講壇を退かれたけれども、近來益御壯健であつて、教育界學界の爲に多忙な朝夕を送つてゐられる。時あたかも國家多事の日にあたり、世の博士に俟つ所甚だ多きを覺える。今後愈自愛せられ益邦家の爲に盡されん事を希つて止まない次第である。

藤村作先生著書論文要目

一　主著書及編纂物

上方文學と江戸文學	大正十一年刊
德川文學と武士生活	大正十二年刊
近世國文學序說	昭和二年刊
國文學史總說	大正十五年刊
日本文學史概說	昭和七年刊
日本文學大辭典(四卷)	昭和七年ヨリ同十年マデニ刊行
新辭典	昭和四年刊
近松淨瑠璃選	大正十三年刊
抄本胸算用	大正十四年刊
抄本日本永代藏	大正十四年刊
新花摘(新選近代文學註解叢書)	昭和十年刊
おらが春(同)	同
曾根崎心中(同)	同
長町女腹切(同)	同
心中天網島(同)	同
女殺油地獄(同)	同

二　主なる論文目錄

西鶴の作に就いて	帝國文學	(大正二年六月)
山東京傳に就いて	東京朝日新聞	(大正五年)
西鶴雜感	早稻田文學	(大正十一年十月)
大鏡に關する考察	國語と國文學	(大正十三年五・六月)
近松世話物の展開	國語と國文學	(大正十三年十月)
紀海音の世話淨瑠璃	國語と國文學	(大正十三年十月)
おさい	國語と國文學	(大正十四年四月)
最大の淨瑠璃作者竹田出雲	大阪文化史	(大正十四年八月)
齋藤綠雨	國語と國文學	(大正十五年五月)
近松覺書	早稻田文學	(大正十五年十一月)
日本文學研究の新意義	新潮社日本文學講座	(大正十五年十一月)
日本民族の精神生活	日本風俗史講座	(昭和二年四月)
淨瑠璃の本質	國語と國文學	(昭和二年四月)
中等學校英語科を全廢せよ	現代	(昭和二年五月)
馬琴研究	新潮社日本文學講座	(昭和二年七・八月)
一九研究	新潮社日本文學講座	(昭和三年三月)
近世生活と文學	日本文學聯講	(昭和三年四月)
明治文學回顧	國語と國文學	(昭和三年八月)

井原西鶴は平山藤五か　國語と國文學　（昭和四年一月）
近世國文學思潮　大思想エンサイクロペヂヤ　（昭和四年十月）
西鶴の文章　國語と國文學　（昭和五年四月）
滑稽本と遊戯的生活　日本文學聯講　（昭和五年四月）
好色破邪顯正　國語と國文學　（昭和六年四月）
國語教育論　岩波講座日本文學　（昭和七年一月）
近松世話淨瑠璃研究　新潮社日本文學講座新版　（昭和七年二月）
古風談林の研究　俳句講座　（昭和七年六月）
日本精神と國文學　岩波講座日本文學　（昭和八年一月）
立圃・重頼・素堂　俳句講座　（昭和八年二月）
硯友社以前の小説　日本文學聯講　（昭和八年九月）
上代文學と日本精神　上代日本文學講座　（昭和九年六月）
浮世草子の研究　改造社日本文學講座　（昭和九年九月）
町人文學　岩波講座日本歴史　（昭和九年十一月）
國文學と日本精神　日本精神講座　（昭和九年十二月）
近世日本文學史　國語國文學講座　（昭和九・十年）
古典文學と國語教育　日本文學の本質と國語教育　（昭和十年三月）
國民生活と國語教育　岩波講座國語教育　（昭和十一年十月）

・・・・

藤村作先生講義題目

（東京帝國大學におけるもののみを掲ぐ）

明治四十三年四月――七月	滑稽本ノ研究
明治四十三年九月――明治四十四年六月	近世小説史
明治四十四年九月――明治四十五年六月	近世小説史 近世國文學雜論
大正元年九月――大正二年七月	近世小説史（讀本ノ歴史） 近世國文學雜論（江戸時代歌人評傳）
大正二年九月――大正三年七月	近世小説史（瀧澤馬琴以後 元祿時代ノ國文學
大正三年九月――大正四年七月	近世小説史（滑稽本ヨリ） 近世文章史
大正四年九月――大正五年七月	近世小説史（種彦春水以後） 近世文章史（寶暦以後）
大正五年九月――大正六年七月	近世小説史（元祿ヨリ） 淨瑠璃詞章ノ研究
大正六年九月――大正七年七月	近世小説史（讀本以後） 淨瑠璃詞章ノ研究（紀海音以後）
大正七年九月――大正八年七月	近世小説史（滑稽本ヨリ） 淨瑠璃詞章ノ研究（竹田出雲ヨリ）
大正八年九月――大正九年七月	元祿文學 淨瑠璃詞章ノ研究（近松半二ヲ中心トシテ）

大正九年九月——大正十年三月　江戸文學
　室町時代ノ文學
大正十一年四月——大正十二年三月　近松ノ研究
　江戸文學
大正十二年四月——大正十三年三月　近松ト海音
　明治時代ノ小說
大正十三年四月——大正十四年三月　歷史物語ノ研究
　近松時代ノ時代淨瑠璃
　明治時代ノ小說
大正十四年四月——大正十五年三月　近世文學ト生活
大正十五年四月——大正十六年三月　室町時代文學
昭和二年四月——昭和三年三月　淨瑠璃ノ史的研究（詞章ヲ中心トシタル）
昭和三年四月——昭和四年三月　淨瑠璃ノ史的研究（近松以後）
昭和四年四月——昭和五年三月　江戸文學
昭和五年四月——昭和六年三月　江戸文學
昭和六年四月——昭和七年三月　浮世草子研究
昭和七年四月——昭和八年三月　國文學ト教化
昭和八年四月——昭和九年三月　文體ノ史的研究（近世）
昭和九年四月——昭和十年三月　國文學ト國語教育
昭和十年四月——昭和十一年三月　近世國文學ニ於ケル寫實ノ發展

外に每學年近世國文學の講讀演習として主として西鶴・近松の作品の講讀あり

昭和十一年十一月十日印刷
昭和十一年十一月十四日發行

不許複製

近世文學の研究
定價金五圓

編者 藤村博士功績記念會

發行者 東京市牛込區拂方町二十七番地 佐藤正叟

印刷者 東京市牛込區神樂町一丁目二番地 小酒井吉藏

發行所 東京市牛込區拂方町二十七番地 振替口座東京二九五〇七番 至文堂 電話牛込(34)四四五五番 四四五六番

(研究社印刷所印刷)

東京帝國大學名譽教授
文學博士
藤村作編

頭註 古事記 定價二・〇〇 送料〇・一〇

校訂頭註 萬葉集 上下 定價各一・八〇 送料各〇・一四

頭註 古今和歌集 定價二・〇〇 送料〇・一四

頭註 新古今和歌集 定價二・〇〇 送料〇・一四

頭註 清少納言枕草子 定價二・〇〇 普及版一・六〇 送料〇・一四

頭註 平家物語 定價三・二〇 普及版二・七〇 送料〇・一八

頭註 徒然草 定價二・〇〇 送料〇・一四

頭註 俳文學集 定價二・五〇 送料〇・一四

至文堂刊